

NEW GAME! ~omnibus love stories~

黒ゴマアザラシ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは、あるゲーム会社で働く女性たちと、彼女達に出会った者たちの物語。

彼らは彼女たちと出会うことで、止めていた時計を動き始める。

これは青春ラブコメとは少し違った恋物語。

※この物語はヒロインと男性キャラのカップリングをオムニバス形式で語っていく物語です。

この作品は、前作、NEW GAME! ～omnibus 10
v e s t o r i e s のリメイクです

目次

プロローグ	1
面白い新人	6
くれぐれも	12
同期ってどんな人ですか？	15
始まりの音色 前編	28
始まりの音色 後編	34
そんなんだからいつまで経っても童貞なんだよ	43
お茶会休憩	56
モノを作ると言うこと	64
そんなのありえへん	79
これって、三角関係だよね	89
恐怖！ イーグルジャンプの負の連鎖	100
ピアノが弾けなくなる病気	115
イーグルジャンプの警備室	142
俺はお前の…… 前編	150
俺はお前の…… 後編	164
相合い傘	174
1秒間	189
彼の腕にあるモノ	197
なんか！ 女の子多くないですか!?	208
業界にあつた怖い話+	217
柚子のシャーベット	227
がらんのどう	242
とある夏の日	251

サイバールームスパイラル	前編	260
サイバールームスパイラル	後編	269
なんでもっていった		285
東京ゲーム展	表	302
東京ゲーム展	裏 前編	315
東京ゲーム展	裏 中編	325
東京ゲーム展	裏 後編	334
話したくない		343
マスターアップ前夜交響曲		348
頑張った証		368
手の温度		373
ねねとゆずき		380
佐藤弘樹の休日		387
夜の居酒屋にて		398
ヤマアラシのジレンマ		412
ファクションは大事		420
お姫様との密会		430
フェアリーズストーリー3 発売日		443
フェアリーズストーリー3 祝賀会		452
個人面談		467
決意ですが、何か？	前編	474
決意ですが、何か？	後編	489
恋の共同戦線		498
めっちゃいい匂いするー!!		512
私にできること		520

湯煙の中で	531
名前を呼ぶよ	544
史上最大の夜	559
月明かりに照らされて	585
夜を越えて 前編	590
夜を越えて 後編	599
でも幸せならOKです	610
ユーザーが求めるモノ	616
奪い合いの中で	632
独りぼっちじゃない	646
俺だって	665
抹茶パフェと黄色い革ジャン	672
再起の音	688
それぞれのクリスマス ー青葉とゆんとはじめの場合ー	694
それぞれのクリスマス ーひふみの場合ー	709
それぞれのクリスマス ーねねとうみこの場合ー	718
それぞれのクリスマス ーりんとコウの場合ー	728
メイド服に囲まれて	740
年の瀬の過ごし方	756
柚貴の正月	764
大晦日も正月も普通に働いていた人だ。面構えが違う	769
課された試練	775
かみ合わない音色	784
心のガン	795
好きだから	802

一杯の茶漬け	813
Small Smile	824
ミラクル☆マジカル☆ムーンレンジャー	834
ごめんなさいは？	842
鼎立会議	850
変化した日常	856
叱らないで	860
愛と追憶のナニカ 前編	873
愛と追憶のナニカ 後編	886
いらない	902
彼の本質を見た	909
彼女が望んだ形	920
バレンタインデー狂想曲 前編	933
バレンタインデー狂想曲 後編	954
変わりゆくモノ、変わらないモノ	973
私の答え 前編	983
私の答え 後編	996

プロローグ

ガキの頃、なんでこんな仕事をやりたかったんだろう。

と、俺はそんなことに十四年間も答えをだしあぐねてる。

思えば、この道を志した時間よりも長く、俺はここにいる。

答えなんて一生わからない。例えわかったとしても、それは求めるものではないのかもしれない。

「……働きたくねー」

色も落ち、着崩れた、どこで買ったのかも忘れたジーパンのポケットからタバコとライターを取り出し、そのうちの一本に火をつける。

肺に大量の煙が充満し、脳にニコチンが染み込んだくるのがわかる。最初こそ抵抗はあったが、今はこれが妙にくせになる。

「……」

煙が夜空に吸い込まれるのをポケットと、ビルの屋上で眺めてる。星は見えない。その代わり地上には文明が作り出した光がキラキラと俺を睨みつけてくる。

まともじゃないよな。ここにいる全員。なんでそこまで働かなくちやいけないんだよ。他にやることないの？ ほら、家には愛する家族とか待ってないの？ そんなに仕事ばつかしてると逃げられるぞ？

まあ、社畜で愛する家族なんていない俺がなに言ってるんだってほしだよな。そもそも家すらあるのかないのか怪しいし。このビルが俺の家？

やだなーそれ。

と、そんな俺の人生を悲観していると屋上のドアがガチャリと鳴る。

「随分と余裕なんだな。こんなところでサボれるなんて」

……このサディステイックな声。奴しかない。

振り返れば予想通り。灰色がかかったウェーブのかかったロングヘア、メガネとストールを身につけた奴が立っていた。

「なんだよ、葉月。あれ、使い魔のあまんちゅ怪獣アハゴンはお連れじゃないのかい？」

「お前そんなこと言ってるよ海子君に風穴あけられるぞ？」

「うるせえ、どーせアタもさぼりのくせに」

「プツ……しかし……あまんちゅ怪獣アハゴンってクフツ

………。確かにあの子は怪獣だな。ハハハ……」

と、葉月はウエーブのかかった髪を揺らしながらは腹を抱えて笑っている。

おいおい、俺から振った話題とはいえ笑いすぎだろ。メガネずれてるし。

「まあ、使い魔としては些か凶暴がすぎるね。もう少し従順な使い魔がほし——」

「みつともない隊長には、どんな一兵卒の兵士でも従いたくないものですよ」

「!?」

うおっ、噂をすれば……。

「それで？」

「ぐえっ……!」

日焼けサロンに行ってるのか？ と訊ねたくなるくらいに焼けた色黒の肌、まるで葉月とは対局の焦げ茶色の髪をした彼女、阿波根うみこが葉月しずくを締め上げてる。

コイツ、一応葉月の部下だよな？ 大丈夫かよ、上司にCQCかまして。

「お二方はこんなところで何油を売っているのですか？」

「ち……、違うんだようみこ君、私は敦君に話がアイタタタター」

「全く、宮本さんもタバコ休憩もほどほどにしてください。明日から新入社員が来るんですから」

「新入社員？」

初耳だ。大きなプロジェクトを同時に3つもやってるから耳にする暇がなかった。

言われてみればもう季節は春だ。新卒で入ってきたんだろう。

「はい。ですので、新人にみすぼらしい格好を見せないでください」

「ふーん、別にいいっしょ？ 長続きするかわかんないし」

ふかしてたタバコの火を消すため、備え付けられているスタンド灰皿に押しつける。

これは俺の経験則だが、新入社員にはあまり期待しない方が良いと言うことだ。事情かは大体想像がつく。

どーせ、子供このからうちの作品をやってファンになったとかそのクチだろう。

「いや、案外面白い娘だったぞ?」

「なに? 知ってんの?」

いつの間にかアハゴンのCCCから逃れた葉月のメガネがキラリと光る。

「私が採用した」

「……」

なんとなく察しがついた。どうせ可愛い女の子だったから採用取ったのだろう。

ていうか、子じゃなくて娘になってるし。

「で? どのの大学? 美大? それとも専門?」

「いや、高卒だ」

「はあ?」

おいおい。大丈夫かよそいつ。人雇うたって金かかるんだぞ?

普通の会社なら高卒でも仕事やっていけるだろうがうちが作ってるのは素人が触っていいもんじゃねえぞ。俺も高卒だけど。

面接官がコイツだったってだけ幸運か。

「芳文美術の受験結果の発表と、うちの採用の知らせが同時に届いたらしくてね。それでうちを取ってくれたんだ」

「へえ……」

芳文美術。俺でも知っている。少なくとも関東近辺で言えばかなり上のランクだ。それなら大学出てからでも良かっただろうに。

「本人の希望で、グラフィックチームのキャラ班に配属させる予定だ。あそこには遠山君と八神もいるし、良くしてくれるだろう」

ああ、あいつらか。八神はともかく、遠山がいるなら新人でも1ヶ月で逃げ出すことはないだろう。

うちの会社がここ数年大分でかなり楽になったのはあいつらの功績とっていい。

俺とて遠山には世話になってるくらいだ。今でも泊まり込みで働き積めてるが、俺が入社したころに比べればまだマシだ。

思えば、あいつらも高卒だったな。八神も遠山も、多分今回のがうまくいったら出世するだろ。

確か遠山はプロデューサー志望で、八神は……いや、よそう。あいつもかなり門が取れたし間違えはしないだろう。

「敦君には、二人のサポートとしてキヤラ班に配属することになったから明日から頼むぞ。勿論、今持つてる仕事もキチンとこなしてくれよ」

「おい、そんなの聞いてないぞ」

「ホントはもつとはやく伝えるつもりだったさ。君が忙しいから後でって言うから」

「っ……」

この女喰いめ。

あのチーム女しかいないの知ってるだろ。新人だって女だろうし。

コイツ、永遠の二十歳とかほざく癖に入社したのは俺と同――

「うみこ君！」

何か察知した、葉月の叫び声と同時にアハゴンは疾走し、俺の胸元に潜り込んだと思ったら視界が上に向いた。

おそらく、顎を思いつきりカチアゲられたのだろう。

さつきあまんちゅ怪獣アハゴンとか言ってたのを聞かれたのか、目が完全に殺す気だった。

速さ故か、不思議と痛みはなかった。その代わりに二日酔いのような耳なりと目眩が俺の脳を掻き回す。

俺の意識はそこで完全にシャットダウンした。

――こんなことが毎日ある会社。

複数の仕事の囲い込み、バグとマスターアップのクソツタレにまみれたこの会社が作るのは家庭用ゲームソフト。

その名も株式会社イーグルジャンプ。

ここに入社してはや十四年間――
俺はなんでこんな会社に入ったのだろう。

面白い新人

青葉視点

私の名前は涼風青葉。

ちよつと前まで普通の高校生だったけど、今日から1人の立派な社会人になる。

勤める会社の名前はゲーム製作会社イーグルジャンプ。

私が子供の頃に発売されたゲーム『フェアリーズストーリー』を作ったあこがれの会社だ。そして、私がキャラクターデザイナーになりたいと思えたきっかけである八神コウがいる場所。

最初は本当にこの会社があるビルに入っていないか迷って、子供と勘違いされて注意されたり、あこがれの八神さんのあんなところを見てしまった。

でも、無事イーグルジャンプの一員と認めてもらえることができた。そして――

「それで青葉ちゃん、八神さんからもらった本、どこまですすんでんの?」

「それが、まだ全然進んでなくて……」

「最初は皆そうだって、困ったことがあつたら何でも聞いていいからさ」

午前中の仕事を終えて……仕事って、言っているのかな? まだわからないところだらけだし。

そんな不安の中、私、涼風青葉はゆん先輩とはじめ先輩と一緒にお昼をしに一階のカフェテラスにきています。

ゆん先輩は面倒見があるお姉さんみたいな人で、はじめ先輩はボーイッシュでカッコいい人です。

最初は仲良くできるか心配だったけど、皆いい人で安心してます。ただ……

「あーそう。ほんとにわからないことがあつたら敦さんに聞けばいいよ。あの人頼りになるから」

はじめ先輩が切り出してきた人の名前に、私はつい反応してしま

う。

そう。私がグラフィックチームに配属された時と同じタイミングでやってきたという人。

宮本敦さん。

少し縮れた黒い髪で、目にはクマが出来てる男の人です。

最初はお化けかと勘違いして悲鳴を挙げてしまつて失礼なことをしてしまいましたけど、優しそうな人でよかつたです。

「えー。うちあの人あんまり好きじゃうわ」

彼の名前が出た途端、ゆん先輩は顔をしかめながらお弁当のおかずをほおぼつています。

「なんでさー。私、あの人と仕事したときに配布されたゲームの限定版のファイギア、私たちには貰えなかつたからくれたんだ」

「んー、人がええつてのはわかるんやけど、辛気くさいっっちゃうか、だらしないっちゃうか、もつとシャキツとしたらええのに」

「宮本さんつて、そんなに働いてるんですか？」

「えつとな、高卒で入つたらしいけど、今32歳やから、14年くらい?」

「そんなに働いてるんですか?!」

八神さんの二倍近くだと、つい感心してしまう。

「私たちの会社がまだ大きくなる前から働いてたらしくて、グラフィックやキャラデザ以外にも、プログラミングとかサウンドとか色々できるんだつて。今も3つくらい作品を掛け持ちしてるとか」

「すごい……」

「本人はあんまり仕事好きやないみたいやけどな。なのになんてあんなに働いとるんやろ」

ゆん先輩の話を聞いていると、一つ疑問が出来た。

「あの、宮本さんつて、そんなに働いてるし、人当たりもいいのに、なんで私のような新人と一緒に働いてるんでしょうか。八神さんよりも先輩なのに」

「そう言えばそうだね。なんでだろ」

「生きとるのか死んどるのかようわからんゾンビみたいな人やか

ら。出世したいとか思わんとちやう？」

「ゾンビって……」

流石にそれは言い過ぎな気持ちになるんですけど。思わず苦笑いしてしまふ。はじめ先輩もおなじで。

確かに、デスクとかもディスプレイが三台くらいあつただけで殆ど片づいてたし、趣味とかないのか気になります。

でも、嫌な人ではなかつたのでまたわからないところがあつたら聞いてみよう。

●

敦視点

昼休みが終わって、仕事を再開してからしばらくのこと、俺は違和感に気付いた。

新人の涼風がいない。確か十分くらい前にデスクを立ってたな。トイレか？女だからか長いのか。

「……」

あれ？　そういやアイツ社員証持ってたっけ？　うちはセキュリティとして社員証がないとオフィスに入れない仕組みになっていゝる。そしてトイレはオフィスの外だ。

新人だし、社員証はまだ出来ていない可能性もある。

八神の奴、ちゃんと社員証作つたのか？　遠山に頼まれてたはずだが。アイツ、まさか忘れて――

なんとなくあり得そうだったので、俺はデスクを立って八神のところに行つた。ここは本人に聞くことにしてみよう。

「おーい、八神」

「なんですか？　敦さん」

「お前、涼風の社員証用の写真、ちゃんと撮つたか？　ほら、遠山に頼ま――」

「あ……」

俺が言い終わる前に八神は青ざめた顔をしている。ビンゴかよ。呆れた。

俺が言えたものではないが、コイツもコイツで仕事一筋で他はズボ

ラだからな。基本泊まってるし、そんなときスカート脱いでるし。

「あれ？ コウちゃん、青葉ちゃんの社員証の写真、まだ撮ってなかったの!? 今朝ちゃんと頼んだのに」

「あー、ごめん」

「それより、先に涼風の方だ」

と、俺達は慌ててオフィスの扉を開けるといた。

「や、八神さくん」

ビルの廊下で縮こまって、今にも泣きそうな涼風がそこにはいた。

「お手洗いに行ったら社員証がなくて外から扉が開かなくて……」

「あー、ここトイレがオフィスの外にあるからな」

「ごめんね、青葉。すぐに撮るから」

「んじゃ、俺は戻るぞ」

俺は先に持ち場に戻って仕事にとりかかる。ここの仕事はもうすぐ片付く。今このキャラ班で作ってるのはうちの会社が有名になった作品、『フェアリーズストーリー』の3部作。

俺は元々、背景と武器のモデリングをやってたんだが葉月がいきなりキャラ班の仕事までもってきやがった。

アイツは人をなんだと思ってるのやら。

あとは『フェアリーズストーリー3』以外の作品のサウンドとモデリング。プログラミングはできるけど流石に一つに絞らないとキツいからやっていない。

あそこには葉月の使い魔のアハゴンがいるし問題ないだろう。

「あ……、あの、すみません」

作業を続けていると、聞き慣れていないアニメ声が後ろから聞こえてくる。俺は作業を中止して振り返ってみると、そこには先ほど弾き出されてた涼風が申しわけなさそうに立っていた。

「ん？ なんだ涼風か。どうした？」

「さっきはありがとうございます。あのままだれも来なかったらどうしようかと」

「ハハハ、心配しなくてもうちのトイレは外にあるからそのうち誰か来るよ。それで、写真はちゃんと撮れたか」

「はい。でも、八神さんに凄い子供っぽいって言われました……」
そりやそうだろうな。落ち着きのないところとか、しくじったときの慌てようとか、高校生のときはバイトとかしなかったのだろうか。それに身長に至っては150cmないんじゃないのか？

「そういや、八神からもらった教本の進み具合はどうだ？ 滝本あたりからよくしてもらったと聞いたが」

俺はパソコン画面に映る社内メッセの履歴を見せながら訪ねてみることにした。正直期待はしていない。二週間である程度形のあるモデリングが出来れば上出来といったところだ。

「えっと、この辺です」

涼風が開いたページは、かなり進んでいた。早い。少なくとも、今日3Dの勉強を始めたトーション口とはおもえないほど。

「君、確か3D経験ないんだよね？」

「はい。高校生までは絵の練習はしてましたけど」

「ふーん」

芳文美術に受かった上でこれか。少し驚いたな。

葉月の人を見る目は見るところは色々おかしいけど観るところはちゃんと観てるからな。

「これなら、あと一週間もすれば仕事ふってもらえるかな。細かいところはやりながら覚えればいいし」

「あ、ありがとうございますー！」

「おおう、声大きい、もうちよっと小さく……」

「あつ……すみません」

「とりあえず、残りの時間も頑張つてね」

「……はい」

そう言うと、涼風は持ち場に戻っていった。

この職場では色々とキャラの濃い奴を見てきたが、こういう……なんだ？ 向上心はあるし、社内でも敵を作りにくそうで、その上技術やポテンシャルもそこそこ。

向上心のある奴は孤立しやすいし、技術やポテンシャルのある奴は敵を作りやすい。

涼風はそのタイプのいいところだけ取ったように見える。

涼風青葉……ね。

なかなか面白そうな奴だ。

● 「八神、とりあえずここのは終わったからサウンドのどこ行ってくるわ。修正あれば帰るときにでも置いていってくれ」

「また泊まり込むつもりですか？ 体壊しても知りませんよ？」

「ま、そんなときや労基にでも駆け込むさ」

「体壊してどうやっていくんですか」

苦笑いする八神を尻目に、俺はサウンドチームのところへ向かう。まだ完成してない効果音が残っている。

サウンドにいる増田に午前中は押し付けてしまったから、少なくともアイツは終電までには帰さなくては。

「……ん？」

キャラ班のデスクに一旦戻ったときに、ふと涼風のデスクが目に入る。

デスクの上には涼風の顔がプリントされた社員証が置いてある。

そしてその涼風はどこにもいない。

おい、まさか……

社員証をもってオフィスの入り口を開けてみると――

「み、宮本さくくん」

さつきと同じように、廊下で捨て猫のように縮こまっている涼風がいた。

「……はあ」

訂正、やっぱりちよつと不安だ。

くれぐれも

八神視点

「さてと——」

私ははじめとゆんに追加の仕事の準備をする。

入社して一週間の青葉は、渡してた参考書が思っていた以上に進んでいた。さつき仕事を振ってあげたところだ。

初仕事の内容は町のモブキャラの作成。

初心者にしては妥当なところだろう。

だけど、この仕事はできれば青葉一人でやってもらいたい。

そのために、先輩の二人には追加で仕事を作っている。

あとは、敦さんだ。

あの人をなんとかしないと。

敦さんはただでさえ仕事で忙しいのに追加の仕事を出すわけにはいかない。

青葉はまじめな子だから、人に頼りつきりなんて情けないマネはしないと思うけど、とりあえず、青葉には余計に手を加えないで頼む必要がある。

なので私は、他の人にバレないように社内メッセで敦さんに連絡した。

コウ@定時で帰りたい 『敦さん、ちよつといいですか?』

しばらくすると、敦さんから返信が来る。

敦@働きたくない 『どうした?』

コウ@定時で帰りたい 『さつき青葉に仕事を振ってあげたんですよ。それですこしお願いがあつて』

敦@働きたくない 『お願い?』

コウ@定時で帰りたい 『青葉には、あんまり手を貸してあげないでほしいんです。そりゃ軽いアドバイスくらいならいいですけど』

敦@働きたくない 『ふーん。わかった』

敦さんは私の意図を察してくれたのか、すぐに了承してくれた。やっぱりこの人も人をちゃんと見てくれてるから助かる。

私よりも倍以上働いてるし、仕事の腕も私よりすごい。なのになんでこの人は出世してないんだろう。

敦@働きたくない 『まあ、今は俺が部下でお前がリーダーだ。お前の好きなように使えばいいさ』

「……」

敦さんのこの言葉にすこしだけ嫌な感じがした。

まるでそれは――

コウ@定時で帰りたい 『そんな言い方ないんじゃないですか？

まるでそれは、『青葉にはなにも期待してない』そう言ってるように聞こえますよ?』

青葉は才能はあると思う。それをまるでいてもいなくても困らないような言い方をする敦さんに対して私は、食ってかかってしまう。

敦@働きたくない 『お前は、入社して一週間のド素人に何を期待しろと?』

しかし、敦さんは冷静で、冷静すぎるほど淡々していた。

敦@働きたくない 『八神、お前は涼風に期待しすぎだ。誰しもお前みたいにこなせるわけないだろう。一週間でモデリングの仕事? そりやすげえよ。でも、仕事ができることと、仕事ができ続けられるかはまた別の話だ』

「……」

敦@働きたくない 『正直、今は仕事を覚えることよりも、他の社員と交友を深めて信頼関係を作る方がいい。仕事はそこから少しずつ覚えるもんだ。そりや実力があるから信頼させるつてのもあるのだろうが、実力があつても信頼されてなきや誰も付いてこない。それはお前が一番よくわかってるだろう?』

コウ@定時帰りたい 『でもそれは、実力を正当に評価されないつてことですよね?』

そんなの嫌だ。信頼とは、要するにコネだ。

実力があるのに正しい評価をされないのは間違ってる。

敦@働きたくない 『そうかも知れんがね。俺とてぶり返したくないが――』

画面に出てきた文字に私は奥歯を噛み締めた。

『くれぐれも間違えるなよ』

その文字を私は見つめる。

私は一度、後輩にムチャをさせて辞めさせてしまったことがある。

敦さんは次はそうなるなよ。

と言っている。

「……わかってるよ。それくらい」

確かに、敦さんの言っていることは正しいと思う。

少なくとも、それは私が一番よく理解してる。

だけど、それでも私は敦さんが考えてること、信じてるものは間違ってると思う。

だって敦さんには、ゲームを作る人間として——いや、モノを作る人間としての一番大切な物を持っていない。

そんな気がした。

同期ってどんな人ですか？

青葉視点

青葉です。私はなんと早速3Dモデルの仕事を任せてもらえることになりました。村人のモブのだけど、初めて託されたお仕事なので精一杯頑張りたいと思います！

……なのですが、やっぱり初めてなので色々上手くいきません。

やっぱり参考書とは勝手が違って悪戦苦闘中。とはいえ、少しずつ人の形になってきています。

何度も参考書を読み直して、またパソコンの画面を凝視して操作を進める。それを繰り返す。

「おい、お前が例の新人か？」

えっとここは確かあの章に書いてあったような……あ、あったこれだ。

「……おい」

それでここをこうして……こうすると、できたっ！

「先輩を無視するとは良い度胸だな」

「きゃあっ!？」

私は後ろから誰かに頭を捕まれた。そしてそのままギュツと握られると、クレーンゲームのように引き上げられる。

席を立たされた私は恐る恐る後ろを見た。

そこには男の人がいた。宮本さんとは違う。その人は敦さんよりも背が高く、長い前髪、金髪は片目が隠れていて、そこから覗く目は敦さんよりもキリッとした人だった。その目のせいでにらまれるように思えた。

「……っ！」

「あ、なんだお前、モデリングやってたのか。集中するのは良いことだが、無視はよくないだろ」

「ごっ、ごめんなさいっ！」

以前頭を捕まれたままの私は、身体を動かすことができないけどそれで表現できる限りの謝罪をする。まさか、先輩の人に声をかけられ

て無視してしまうなんてっ！

「ごらっ、佐藤君。あんまり青葉ちゃんと苛めたらダメよ」

別の方向から、また他の人の声が聞こえた。これには聞き覚えがある。ADのりんさんだ。この柔らかくて母性的な声は間違いない。

その声に釣られたのか、目の前の男の人も手を私の頭から離してくれた。

「ああ、悪いな」

「違うんですりんさんっ！ 私が作業に集中しすぎたせいで」

「あらそうだったのね。でもダメよ佐藤君。青葉ちゃんも悪いけど、もっとやり方があると思うわ」

「……そうだな。悪かったな、えっと、涼風」

ここで初めて、私は後ろから頭をつかんできた男の人を正面から見ることができる。

私よりずっと背が高いせいで、ちょうど胸元に視線が集まるけど、そこには社員証があった。

それには、『グラフィッカー』と言う文字と、『佐藤弘樹』と書かれていた。

入社したと時の挨拶で会ったことがある。同じフェアリーズメンバー3を作っている背景班の一人だ。

「はい、私もすみませんでした。佐藤さん、それで何か用があったんですか？」

声をかけてきたと言うことは何か用事があったのかなと思い、私は改めて本題に入るように促すことにした。

「いや、今日お前の歓迎会だろ。念のため声をかけといてくれて八神から言われたんだよ」

「あっ、すっかり忘れてました」

「……お前なあ、初仕事で気合いが入るのもわかるが、少しは肩の力抜けよ。ま、一応声はかけたから、歓迎会、遅れずに来いよ」

「頑張っつてね、青葉ちゃん」

「はいっ、ありがとうございます」

そう言うと、佐藤さんとりんさんはキャラ班のブースからでいっ

てしまった。

でも、キャラ班のブースを出かかる直前に、りんさんが佐藤さんに声をかけていた。

「それでね、聞いて佐藤君。コウちゃんったらまた——」

八神さんのことを話しているようだけど、結局、どんどん離れていったせいで話の内容を聞くことはできなかった。



「それではちよつと遅くなっちゃいましたが涼風青葉ちゃんの新人歓迎会を行いたいと思います……乾杯！」

「「「かんぱーいー」」」

「今日は会社のおごりだから、みんな好きなだけ飲んで食べてね！よつしやー！食うぜー！」

「あ！そんなに肉を持ってかないでくださいよ！」

佐藤さんが話してくれた通り、私の歓迎会になることになりました。メンバーは仲良くなったキャラ班の皆と八神さんとりんさん。

そして、佐藤さんと宮本さんまでも来てくれました。

「なんで俺まで来ることに……」

「まあ敦さん、いいじゃないですか。ほら呑んだ呑んだー」

「……」

でも宮本さんは少し、居心地が悪そう。そしてそれをどこか面白がっている八神さんが宮本さんのグラスにビールを注いでいる。

宮本さんはこの状況はあまり得意じゃ無いのだろうか？ 確かに、女の子がたくさんいるから当然なのかも。というか、隣にいるゆん先輩を少し腫れ物扱いしてるような気がする。

一方、佐藤さんはりんさんの隣に座っている。佐藤さんは敦さんとは対照的に落ち着いた雰囲気だ。

「あ、佐藤君、ついであげるね」

「ああ、悪いな」

佐藤さんとりんさんって、八神さんの次に仲がよさげだ。同期なのかな？

「そう言えばさ、青葉って彼氏いんの？」

「い、いるわけないじゃないですか!」

宮本さんを面白がるのに飽きた八神さんは、今度は私に話題を振ってきた。

か、彼氏っ!

いきなりなんてこと聞いてくるんですかこの人は!

さつきも辛子が入っているたこ焼きを食べさせてきたり、少しイジワルが過ぎる。

子供の頃から絵の勉強してたからそういう暇が無かったと言えばそれまでだ。

そりゃあ、私だってそういうのを夢見たことはありますけど、なんでもそういうこと聞いてくるかなあ。

八神さんにからかわれっぱなしの私は少しムキになって、つい喰い気味に返してしまう。

「でも、八神さんはいそうですね」

「へっ!? い、いるわけないじゃん!」

「なに初々しく照れてるんですか……」

カウンターを食らったのが予想外だったのか、それともそういう経験が無いのか、八神さんは途端に女々しい反応を見せてくれた。

そして、自分に矢面が経つのを嫌ったのか、なんとまた宮本さんに話を振る。

「あ、敦さんはどーなんっすか? 今までそんな話聞いたこと無いんですけど」

「あ?なんで俺なんだよ」

「い、い、か、らっ! 応えてくださいよっ!」

八神さん、どこまで話を逸らしたいんですか。

若干呆れていると、宮本さんはグラスに入ったビールを飲み干して言った。

「……いた。とだけ」

「えーなんですかそれ、余計気になりますよ」

「口止めされてるんだ。許せ」

「むー、つまんないですよ。あ、じゃあ、佐藤はどうなの?」

「……俺は、いない」

さつきまで落ち着いてお酒を楽しんでいた佐藤さんは、少し肩を揺らしながらも淡々と応えた。

「あら、そうなのね。佐藤君はそう言う人いそうだと思ってたのに」意外にも、その話題に食いついてきたのがりんさんだった。

「……なんでだよ？」

「ほら、佐藤君って背が高いし、目元もキリツとしてるからかっこいいなって」

「んふっ……!! んふっ……!!」

「だ、大丈夫佐藤君!」

「わ、悪い……」

りんさんの『かっこいい』というフレーズが出てきた途端、佐藤さんは急に咳き込んだ。

ん？

どういうことだろう。何か、何かすごいひっかかりを覚えた。

「もー佐藤も敦さんもつままないなー。つーか、仕事ばつかしてつとよー。そんな暇ねえつーの!」

そして八神さんはちよつと目を離れた隙に大分酔いが回っている。

宮本さんと佐藤さんの話をしている間に、結構呑んだみたい。

「ちよつとコウちゃん飲み過ぎじゃ無い?」

酔っている八神さんを見かねたりんさんは、彼女が持っているグラスを取り上げる。

「これは私が呑むわ」

「ちよ……その酒強いよ……」

そしてそのお酒をグイツと一気に飲み干してしまった。あまりにいい飲みっぷりに感心しているのもつかの間、りんさんの表情が変わった。

「……私も彼氏はいないわ」

うわぁ!

すごい酔ってるこの人!

明らかに目の焦点が合っていないのが素人目にもわかる。

「あおばちゃん！ しんじんはせんぱいにおさけをつぐものれす！」
今まで大人で頼りになるお姉さんみたいなりんさんの豹変に動揺している、そのままりんさんに目を付けられる。

「はあ……」

とりあえず言われるがままりんさんが持っている空のグラスにビールを注ぐ。注ぐけど……

「……」

口では言わないけど、りんさんはわかってないなあと首を横に振る。

「す、すみません!!」

「びーるのただしいつぎかたつてのわね！ こうするのよ！ こうちゃん！」

今度は八神さんがターゲットにされた。八神さんも私と同じようにりんさんのグラスにビールを注ぐ。グラスにビールが溢れるギリギリ。ちようどビールの黄色と白い泡が七三になるくらいのところまで止めた。

「これ。これがえてきにもあじにもべすとなの」

「おお……」

りんさんの堂々とした熱演と、八神さんのどや顔について感動してしまふ。

でもりんさんはそれを飲み干す前に気を失ってしまった。

「あー弱いのに飲むから〜」

そうか、これが大人の飲み会のマナーなのか。私の知らないことばかりだ。ちゃんと覚えないと。

「涼風、変なこと覚えるな。むしろこうなるな」

「そうだぞ。こうならないようにするのが大人だからな」

気を失ったりりんさんを尻目に呆れている宮本さんと佐藤さん。

佐藤さんに至っては、自分の上着を倒れたりんさんに被せている。なんだろう。佐藤さん、りんさんに対してちよつと優しいような気がする。違和感を覚えたのは私だけでは無く、八神さんも同じだっ

た。

「佐藤ってさ、りんに対してだけ妙に優しいよね。好きだったりして〜」

「!？」

そうなのっ!？」

だとしたらあの時、りんさんに恋人について聞かれたときに見せた動揺にも説明が付く。

もしかして佐藤さん、本当にりんさんのこと好きなんじゃ……。

「……そんなわけないだろ」

「あはは、だよ〜」

「ったく……ほら、遠山。しつかりしろ。風邪ひくぞ」

「う〜ん。こうちや〜ん」

「……」

所謂、べべれけになったりんさんは佐藤さんに声をかけられているのに八神さんの名前を呼ぶ。そして、その光景を見ている佐藤さんからどこか悲しげな、生気が抜けていくような、体温がどんどん下がっていくような、そんな雰囲気を感じる。

流石にここまで来ると私にもわかる。

佐藤さん、りんさんのこと好きなんだ。

ああ、嫌なこと知っちゃったなあ。

●

その後も、ひふみ先輩に代わって初めてお酒を頼もうとして、飲み方とか色々戸惑うことばかりで大変だった。

でも、それは今まで自分が子供だったから知らなかった新しい、大人の世界でもあつてすごく刺激的だった。

自分も早く飲めるようになりたいな。

「敦さ〜ん、なんか面白いこと話してくださいよ〜」

「面白いことって……んな適当な」

飲み会もかなり佳境になる、話すことも無くなり始めた頃に、また八神さんが宮本さんに話を振った。それもあまりにもおおざっぱすぎるほどの。

「えーいいじやないですか。年長者なんだし。昔の面白い話とかないんですか？」

「ねえよ。こんなところで仕事の話とかしたくない」

「ふーん。じゃあさ、青葉は敦さんに何か聞きたい事ってある？」

「私ですか？」

またいきなり変な無茶ぶりを振ってくるなあこの人は。

そんなの急に思いつくわけ無いのに……そうだ。

私は入社したときに感じたことを宮本さんに聞いてみることにした。

「あの、宮本さんの同期ってどんな人だったんですか？」

「え？ 青葉、そんなんでいいの？」

「私、この会社に入って、同期とかいなかったんで。少し興味があつて。だめですか？」

「いや、別にいいよ。話してやる」

宮本さんはグラスに入ったお酒を飲んでから、一呼吸置いて話し始めた。

「俺の同期は俺を含めて六……いや、五人だ」

「え？ 六人って言いかけませんでした？」

「五人だ」

宮本さんは喰い気味に訂正した。なにか引つかかるけど、流石にあまり深入りするのもし礼と思った私は、あくまでその体で話を聞くことにした。

「そのときはこの会社もそこまで大きくなかったけど、そのときは人手が足りなかったからか結構採用したんだ

「つまり、まだ『フェアリーズストーリー』ができていない。まったくの無名だったってわけではないが、少なくとも今ほどじゃない。

「それで、五人とも別の部署に回された。

「二人は大卒の奴でな。エリート気取りで高卒の俺らを見下してた。仕事はできてたらしいが、周囲にかなりの反感を買ってたな」

「その人は、どうなったんですか？」

「辞めたよ。二ヶ月もせずにな。何分胸糞の悪いやつだったから、

なんで辞めたのか、今どうしてるかはわからん。まあ、大卒で二ヶ月で仕事を辞めたらその後の再就職は絶望的だ。その後完全に音信不通だから、つまりそういうことだろ」

「そうですか」

宮本さんは興味なさげな顔でその話をする。ちよつと重たい話になってしまったと一瞬後悔してしまう。やっぱり、それくらい厳しい場所ってことなのかな？

「二人目は高卒の奴でな。ソイツは仕事ができなかった。いつもミスして謝ってばかりだった」

「その人も、すぐにやめちやったんですか？」

「いや、五年持った。徐々に仕事も出来るようになってきてな。そのあと結婚して会社を辞めて、田舎に帰って家業を継いだらしい。今では八歳の息子と五歳の娘がいるそうだ」

二人目の話を聞いて、少し安心する。そっか、そういう風に新しい人生をスタートできた人もいるんだ。でも、辞めちやったのか。

次の人の話をするとき、宮本さんは目に見えて機嫌が悪そうな雰囲気になる。

「三人目は大卒でな。ソイツは恐ろしく仕事ができた。もつと上に行くとか言って会社を辞めて、今は自分が会社を立ち上げてたらしい。性格は最悪だけど、頼りになるヤツだったよ」

それでもどこか懐かしそうな顔をしている。嫌っているけど、宮本さんにとっては思い入れのある人なのかな？

「四人目は高卒だけど仕事はできた。だけど悪い上司に捕まっただけ。かなりひどい目に合わされてたよ。それでも七年間続けた後、料理の勉強して今は近くの居酒屋やってるよ。そこそこ繁盛してる」

「そうですか……」

なんだか、申し訳ない気持ちになってしまった。だって、理由はどうあれ、宮本さんの同期はほとんど辞めている。

八神さんやりんさんみたいに仲が良かった人もいただろうに、離れはなれになるのは少し悲しいな。

「なあ、涼風。俺がさつき話した奴らは人それぞれだったけど、ソイ

ツらの違いは何だと思う?」

私が気を悪くしたのを気にしてくれたのか、宮本さんに問いかけてきた。

違い?

なんだろう。確かに色んな人がいた。でも違いはなんだと具体的に聞かれると困る。

少し考えた私は、なんとか納得のいく答えを絞り出した。

「忍耐力……ですか?」

「まあ、そういうだろうな。でも俺からすれば——」

宮本さんは言った。

「ないんだ。違いなんて」

「そうなんですか?」

まさかと思う答えに目を見開いてしまう。

「なぜなら、俺たち五人。全員が今言ったようになる可能性があったわけだ。最初の奴が続いた可能性もあったわけだし、続けてた奴がすぐ辞める可能性もあった」

「……」

「一言でいえば、わからないんだ。どうなるかなんて、俺だって色んな奴を見てたが、ソイツがどうなるかなんて神様でもない限りわからない。だから、忍耐力なんかで一括りにはできないんだよ」

「なるほど……」

「お前は今日仕事を任せられたらしいけど、お前はマジメすぎるから追い込みすぎて自爆する可能性がある。だから——」

コップの中にある焼酎を全部飲み干してから宮本さんは言う。

「自分のペースを守れ。多少乱しても、すぐに戻せるようにしろってことだ」

「自分のペースって敦さん乱しすぎやないですか」

「余計なことというな。まあ、なんだ、要は俺みたいになるなって話だ」

そう言うと、宮本さんは両手をパンつと叩く。それは、もうこの話は終りだと言っているように見えた。

「とにかく、今日の新歓はここでお開き！そんなじゃ、俺は帰るぞ」

そう言うと、宮本さんはスツと席を立つ。ふと周囲を見渡すと、もう皆引き上げる準備をしている。完全にできあがったゆん先輩はじめ先輩が介抱して、ひふみ先輩はいつの間にかいなくなっていた。

「私はまだ飲み足りないんだけどなー。二次会行く人いる〜」
でも八神さんはまだ帰るつもりでは無かったみたい。

「わたしはいけます……!」

りんさんもだ。いつの間にか目が覚めている。さっきまであんなにベロンベロンだったのに大丈夫なのかな。

「じゃあ、私とりんと青葉の三人だね」

「えっ!? 私もですか?」

「当たり前じゃん。今日の主役なんだから」

「わ、わかりました」

そうだよ。せつかく私のために用意してくれたのに、せつかくだし八神さんのこともこの機会に色々聞こう。

と、席を立とうとして気がついた。宮本さんが座っていた席に、何か落ちている。拾ってみるとそれはライターだった。しかも、それはコンビニとかでよく見る安いモノでは無く、映画で見るような高そうなもの。

「これは?」

「あ、それ敦さんのじゃ無い? 忘れたのかな」

「私、渡してきましたっ!」

「あ、ちよつと青葉!」

「すぐ戻りますっ!」

私はお店を出て、走り出した。まだ出て行ってそこまで時間が経っていないはずだ。運動とか

走るのは苦手だけど、今ならまだ間に合うかも知れない。

それに、実はまだ聞けてないことがある。というよりは、話を聞いていてできたこと。

それをどうしても、宮本さんに聞きたかった。

「!」

しばらく走ると宮本さんの後ろ姿があった。ポケットに手を入れて何かを探している。多分、このライターの事だ。早く渡さないよ。

「宮本さん!」

「ん?」

「あの……!　これ、忘れ物——へぶつ!!」

追いついたと思うと安心して、足がもつれた私はそのまま盛大に転んでしまった。

「お、おい。大丈夫か?」

「……うう。痛いです」

宮本さんは私の手をつかんで転んだ私を起こしてくれる。

男の人の前であんな派手に転んでしまうなんて恥ずかしい。走っていたせいも余計にドキドキしている。

「つかこれ、わざわざ持ってきてくれたのか?」

「はい、高そうなモノだったので」

「そうか。悪いな」

「あのっ、その、宮本さん!」

ライターを手渡して、改めて宮本さんの顔を見る。

「今度はなんだ?」

「あ、いえ、実はまだ一つだけ気になることがあります」

「俺の同期は五人だ。六人じゃない」

「いえ、そうではなくてですね」

宮本さんはさっきの話の続きだと思って、ため息をつきながら頭を掻く。だけど違う。確かに気になるけどそうじゃないのだ。

「で?　要件はなんだ?」

「……その、宮本さんって、仕事、楽しいですか?」

「……」

「あ、いえ、すみません!　まだ全然仕事してない私がこんなこと聞いて」

それが私の聞きたかったこと。知り合いや仲間がたくさん辞めて、一人になった宮本さんは寂しくないのかなと思った。

私だって同期がないのは寂しかったのに、それで、本当に仕事が

楽しいと思えるのかなと。

「涼風」

「はいっ！ごめんなさい！」

「いや、謝らなくていい。ただ——」

宮本さんは尋ねてきた。

「お前は、この会社の仕事、楽しいか？」

「え？」

同じ質問を返されて困惑してしまう。

「ただ答えなきやと、少し考え込んでから、ちやんと目を見ていった。」

「楽しいですよ。まだ、全然できませんけど、八神さんや、りんさんはじめ先輩にゆん先輩、ひふみ先輩と一緒にキャラ班で働くのは、とても楽しいです」

「そうか」

「宮本さんも、その中に入ってますよ？」

思わず笑みがこぼれてしまうと、宮本さんは私の元に歩み寄ってきた。

「え？あの宮本さん？」

「……」

宮本さんは私の頭に手をぽんと置いて、優しく撫でてきた。

「……って！こ、子供扱いしないでくださいーい」

「まあ、頑張りな」

「もー！宮本さんのバカーっ！」

始まりの音色 前編

「はあ……」

昼休み、僕は先輩と一緒にやってきた中華料理店のテーブルに置かれている料理を見ながらため息をつく。

「どうした？ 増田、食わないのか？ 食って体力つけるのも仕事のうちだぞ？」

向の席に座っている先輩、宮本敦さんはチャーハンをほおぼりながら訪ねてくる。

この人は仕事は出来るし、人当たりもいいのに、なぜか出世していない、どこか可哀想な人だ。

僕はサウンドチームで働いているが、彼は複数のチームに掛け持ちして所属している。

「いや、ちよつと作曲に行き詰まって」

「そうか、確か今回のサウンドは外注無しでお前一人だもんな。そりゃキツいだろうよ」

「すみません。また色々手伝ってもらうかも」

「気にすんな。こっちは1つ2つ仕事が増えてもそんな変わんねえよ。それよりお前、まだピアノは弾けねえの？」

お冷やを口にした後に、先輩尋ねてきた。その問いに少しだけ肩が少し震えてしまう。

「……はい。すみません」

「謝るなよ。別にピアノが全てじゃないだろう。それよかさつさと喰お……ヘクチツ！ あゝ、誰か俺の話してるな。飯島あたりか？ どうせだらしが無いとか言ってるんだろ」

「エスパーですかあなたは……」



昼休みの終わりが近づいて来たので、僕はサウンドチームの持ち場に戻るためにオフィスまで戻ってきた。

先輩は午前中、キヤラ班にいる。先輩がこっちに来るのは、多分三時くらいかな。それまでにはある程度は進めないといけない。

発売は半年後、そろそろ本格的に忙しくなるから気合いを入れないと。

社員証をかざしてオフィスの扉を開ける——しかし、その前にオフィスの扉は開いた。

「あ……」

内側から誰か開けたのだろうか。

開かれたドアから女性社員が出てきて、僕は少し焦る。

でも女性は僕とすぐにすれ違い、そのままオフィスを後にしていく。昼休みがもうすぐ終わりそうなのは気になるけど。

ていうかさつき、すごくいい匂いしたな。どんなシャンプー使ってるんだろ。

「ん？」

ふと足元を見ると、布切れのようなものが落ちていた。よく見るとただのハンカチだ。ディフォルメされたハリネズミのイラストがプリントされてる。

さつきの人のものだろうか？ 手にとって見るが、少なくとも男性が持つようなものではない。

「あ、あのっ……！」

「!？」

女性は肩をビクツと震える。

茶髪というか、黒い朱色のようなポニーテールと、それを留めている真っ赤なりボンを揺らしながら振り返ってくる。

「えつと……な、なんですか？」

「あ、いや……その……」

臆気な彼女の青い瞳と目が合い、思わず目を逸らして言葉を無くした。自分が何を言おうとしたのか忘れてしまうほどに。

ダメだ。元々女の子と話した機会なんて子供の頃から無かったから、どうしても女性の目を見ると緊張する。先輩なら割とすんなりやっつのけるんだろうけど、僕には無理だ。

「あ……それ、私のハンカチ……」

僕はハツとした。そうだ。これを落としたから声をかけたのだ。

それすら忘れてしまった自分が情けない。

「その……これ！ 落としましたよ」

「あ……」

「それじゃ、僕はこれで……！」

「あつ……！ ま——」

彼女にハンカチを渡して、僕は早足でオフィスに駆けていった。ダメだ。絶対変な人だと思われた。

オフィスに戻ると、僕は自分のデスクに頭を抱える。事情があつて僕は学生時代からずっと異性と関わったことがない。だから女性が多い子のこの会社では結構肩身が狭く、仕事初めてもう何年も経つのにまともな知り合いは片手で数えるほどしかない。

「はあ……」

ため息をつきながら、さっきの人のことを思い出す。

彼女はうちの会社でも少し有名だ。

滝本ひふみ。

物静かで喋らないけど、とても美人だからだ。

でも、物静かすぎて少し浮いている印象がある。

僕の場合、たまたま仕事でお世話になった先輩がよくしてくれたおかげで少しは周囲と打ち解けることができたけど、やっぱり女性だけはダメだった。

ああ、ダメだダメだ！ いつまでもブルーになつてたつて仕方ない。

さっさとノルマを終わらせよう。

● 「先輩、お先に失礼します」

「おー、おつかれー」

今日の分を終えて、仕事をしてる先輩を後目に帰宅の準備をする。時計は9時の針を刺していた。

今日は先輩が途中から来てくれたからそれなりに進んだ。この調子なら余程のことがないかぎり、マスターアップは問題ないだろう。

まあ、その余程のことが起き得る可能性が高いのがこの仕事ではあ

るのだけど。

僕の仕事はサウンドチームで行っている、『フェアリーズストーリー3』のBGMの作曲や効果音の作成が中心だ。先輩はこれから別の作品のモデリングと、昼頃に終えた『フェアリーズストーリー3』のモデリングの修正をやるはず。

ほんとすごいよあの人は。

駅の改札口をくぐり、帰宅の電車に乗り込んで一息つく。9時の電車だからか、思ったより人が少ない。

胸ポケットの中にあるスマホを取り出して、今流行りの匿名SNSのアプリを開く。

——今日のはあの子はいるかな。

MASUDA 『こんばんは。ひふみん☆さん、いますか?』

と、そのアカウントにメッセージを打ち込むと、すぐに返ってきた。

ひふみん☆ 『はい(・O・)／ さっき仕事がおわったところだよ』

MASUDA 『そうなんですか。こつちもさっき終わったばかりで』

ひふみん☆ 『そうなんだ。お疲れ様ー(●、▽、●)』

この人は、このSNSで知り合って、なんでもゲーム関係の仕事をしているというので仲良くなった。お互いどこの会社で何を作っているかは守秘義務があるので知らないし教えてないけど、この人の飼っているハリネズミの写真の投稿も可愛らしくていい。名前は宗次郎だったっけ?

たしか、昼休みの終わり頃のあの人も、ハリネズミのハンカチ持ってたな。

ひふみん☆ 『そういえばね、今日、うちの会社に新しい子が入ってきたの。最初は不安だったけど仲良くなれてよかった(つ、ω、c)』
MASUDA 『たしか、うちの会社にも一人来たんですね。部署が違うので会ったことはないんですけど』

ひふみん☆ 『えへへ(●、▽、●) なんだか今日は同じことが起きるね』

MASUDA 『確かに』

ひふみん☆ 『あとね、今日同じ会社の人にハンカチ拾ってもらったんだでも、その人、慌ててどこかに行っちゃって……ちやんとお礼したかったのに(´・`・´・´)』

なるほど。僕と同じ思いをした人は僕だけじゃなかったのか。世界は広いなあ。

MASUDA 『きっと、緊張してたんじゃないですか？ 僕もリアルで異性と話すのは苦手ですし』

ひふみん☆ 『そうかなあ(。>A<) 嫌われてないといいけど……』

MASUDA 『それで、話は変わるんですけど。ひふみん☆さん、この前話してたライブのこと、覚えてますか？』

それは、先日彼女？が話題に上げてくれたアーティストの話。アニソンを中心にメディア展開をしているその人はとても人気があつてチケットの抽選倍率もとても高いのだ。

ひふみん☆ 『うん。初日と二日目のチケットが当たったよ(´・`・´・´)』

MASUDA 『あ！ 奇遇ですね。僕も両方当たったんです』
それにしても、今日はよくひふみん☆さんとダブるな。

「……」

ひふみん☆って女性なのかな？ ネカマの可能性も否めないけど。でも、人や異性と話すのが苦手だって言ってたな。もしかしたら、何か相談したり協力しあつたり出来るかもしれない。

交友関係が会社の一部の人だけというのも精神衛生上よくない。ここは勇気を出して誘ってみよう。

MASUDA 『あの、ひふみん☆さん。もしよかったら、そのライブ、リアルで会ってみませんか？』

「……」

あれ？ 返信が来ない。いつもなら五秒以内には返信が来るのに。やっぱりダメだったか？ ブロックされたらどうしよう。

だけど、その心配は杞憂だった。返信は三十秒もしたら来た。

ひふみん☆ 『うーん(――) わかった。せつかく同じ日に同じ場所にいるのに勿体ないもんね。リアルだと人と話すのが苦手だから新人の子にもちゃんと話せるように練習したいから』

MASUDA 『そうなんですか。僕も人と話すのが苦手なんですよね。お互い頑張りましょう』

ひふみん☆ 『うん(≡▽≡) b』

MASUDA 『あ、そろそろ降りなきや、それじゃあまた明日、お休みなさい』

ひふみん☆ 『お休み(^ ^) / 』

僕はSNSをログアウトしてスマホを胸ポケットにしまう。

イベントは4月の下旬だ。その前に、色々準備しておこう。

僕は電車を降りて一人暮らしの自宅へと歩いていった。

始まりの音色 後編

ひふみ視点

「……ただいま、宗次郎」

お仕事を終えて、キャラ班の皆と別れてからすぐに自宅に戻った私は、1日ずつと巣穴に隠れてるハリネズミの宗次郎にエサの準備をする。

とても臆病だから手にとったエサはなかなか食べてくれない。これでも素手で触れるようには慣らしたけどやっぱり寂しい。

しばらくすると、宗次郎はゆっくりと巣穴から出てきてエサをかじり始める。

「……ねえ、宗次郎。私、もつと人と話せるようにならないとダメ……かな?」

お昼休みときにハンカチを拾ってくれた人のことを思い出す。

私がちやんと青葉ちやんと話せてたら、青葉は初日からコウちゃんに注意されることもなかったし。あの人にも、まだちやんとお礼、言えてない。

家に帰る途中、SNSで知り合った人からリアルで会おうというお誘いがあった。OKしちゃったけど少し怖い。

その人は男の人って言ってたし、でも、女の人と話すのが苦手って言うってた。

私も、画面を通してでないとちやんと話せない。

その人もゲーム関係の仕事をしてるらしくて仲良くなったけど、どうしよう。やっぱりちやんと断ろうかな。

根に持つような人じゃないし。

「……」

でも、それで自分に言い訳してるような気がする。

この仕事は長い間やってて、人と話す機会が少ないからよかった。だけど、新人の青葉ちやんがあんなにハキハキしてるのが、ちよつと羨ましい。

青葉ちやんなら、敦さんと話してたみたいになちやんとお礼言えそう

だな。

それなのに私は……。

「……ん」

よしつ。勇気を出して行ってみよう。

あの人にもちやんとお礼を言わないといけないし、不安なことはその人に会って相談してみよう。

——と、そのときはそんな風に思っていました。

●
「え……嘘」

「あ……あ……」

ライブの当日、待ち合わせ場所にやってきたその人は、ハンカチを拾ってくれたあの人だったのです。

待ち合わせ場所として選んだ会場の一番近くの駅。

そこにある大きくて丸い植木が待ち合わせ場所だった。

「えつと……いや、これは……その、決して何か企んでた訳じゃなくて……その……」

あの人とはとてもない慌てようだったけど、私も私でそれどころじゃない。

えつと……、あの時昼休みにハンカチを拾ってくれたあの人的那个人で、SNSで話してたその人があの人で——

ああもう頭が真っ白になって考えがちぐはぐになってる。

あの人にはなにか伝えようとしてるけど私はそれどころか言葉も出ない。

「と、とにかく違うんです——!」

「あ……」

彼は植木の周りを走って、影に隠れてしまう。

よかった——じゃない。

えつと、ちゃんと話さないと、でも何を話せばいいの？
ダメ……何も出てこない。

「そっだ」

閃いた私はすぐにスマホを取り出して、彼のアカウントにメッセージを送る。

多分今までで一番早く打てたと思う。

ひふみん☆ 『あの、こっちで大丈夫なのでちゃんと話しませんか？』

お願い、返信来て……。

しばらくすると、私のスマホが震えた。

MASUDA 『はい、落ち着きました。すみません』

これを見て一息つく。よかった。なんとか話せそう。

MASUDA 『えっと……確認しますが、滝本ひふみさんですよね？』

ひふみん☆ 『え？ なんで名前』

MASUDA 『あ、ほら。滝本さんってうちじゃ結構目立つので』

ひふみん☆ 『ええ?! ((;。D。))』

MASUDA 『あ、それは悪目立ちしてるってわけじゃなくて、綺麗で物静かな人だから目立つって意味で』

ひふみん☆ 『あ、ありがとう(´、:´)』

男の人にそういうこと初めて言われた。思わずして顔が暑くなるのを感じる。

でも、あの人にあの時のお礼、ちゃんと言えるチャンスがきたのに、それをこれで言うのはなんか失礼な気がする。

ひふみん☆ 『あの、今からそっち側に行きますので心の準備とかしておいてください。ちゃんと話したいことがあるので』

MASUDA 『あ、はい。わかりました』

「……ふう。大丈夫、大丈夫」

意を決して植木の反対側に回り込む。彼はちゃんと待っていてくれた。

「……!」

彼はまだ心の準備が出来てなかったのか、目があった途端すぐに目をそらしてしまう。

でも、彼だって怖かったはずだ。それなのにあの時声をかけてくれたんだ。今度は私から――

「あの……」

「はっ、はい?!」

「あの時は……その、ハンカチ拾ってくれてありがと……お気に……入りの、だった……から」

言えた。最後はしどろもどろしてたけどなんとか言えた。

「あっ……いえ、こちらこそ。あのときは逃げ出しちゃったりして……すみません」

初めてだった。初めて自分から話しかけて、ちゃんと会話ができただ。でも、せつかく人と話せるようにしたくて会いに来たのにこのままで終わりたくない。

「あの、名前……なんていうんですか？」

「え……名前？」

「だって、私の本名だけ知られてるのは……少し、不公平……」

「あ、あー。そういえば言ってますでしたね」

彼は大きく深呼吸をして呼吸を整えてから――

「僕は、増田純っていいいます」

「えっと……滝本ひふみ……です。今日は……その、よろしく。

えっと……純君」

「純く……?!」

増田という苗字が少し言いにくかったし、少しでも喋る文字を少なくしたかったこともあって、とつきによって名前の方が出てきてしまった。

彼は肩をビクツと震わせて反応してくる。

「あっ……！ ごめん、嫌だった？」

「あ……いえ、よ、呼びやすいほうで」

「う……うん」

どうしよう。やっぱり馴れ馴れしかったのかな。でも。青葉ちゃん達とは名前で呼んでも大丈夫だったし……。

「そ、それじゃあ、行きましようか」

「あ……はい」

「ふう……」

今は会場の休憩スペースに腰を降ろしている。ライブの開始まではまだちよつと時間が合るから、携帯音楽プレイヤーにイヤホンを差して、それで音楽を聞きながら、飲み物を買に行った純君を待っている。

どのお店もいっぱい人が並んでいたから時間がかかりそうだと、私だけ休ませてくれた。

それにしても、純君遅いな。

と、思い始めた時にスマホのハイブレーションが鳴った。画面には純君のアカウントからのメッセの通知だった。

MASUDA 『後ろ後ろ』

「っ……!?!」

振り返ると純君が二本のペットボトルが入った袋と、スマホを片手に持って座っている。

もしかして、結構前から声かけられてたのかな？

だとすると、申し訳ないことしちゃったな。

「……ごめん、気がつかなかった」

「いえ、大丈夫ですよ。はい、これ」

「ありがとう……」

純君は私の分を渡してくれる。

彼は少し慣れてきたのか、話すのが私よりすんなりしてる。

でも少し言葉を選び損ねてるみたい。

「えっと……なに聞いてたんですか?」

「……アニソン、かな。ムーンレンジャーの、声優さんが歌ってる」

「あ、知ってます。確か……今度の新作にも出てるんじゃないよね」

きつと、『フェアリーストーリー3』のことを言ってるのかな。一応社員同士だけど、あんまり外で話すのは良くないし。今度は私から話題を振ってみよう。

「……純君は、どこの部署で働いてるの?」

「え？ ああ、サウンドチームです。作ってるのは、滝本さんと同じです」

「……そうなんだ」

サウンドチームって、確か敦さんもいたような。

「滝本さんのキャラ班に、宮本って人いません？ 僕、あの人にお世話になってるんです」

「いるよ……、社員メッセでしか話したことないけど」

「やっぱり、あの人ホントすごいですね。頼りになります。尊敬はあまりできないですけど」

「うん、私が……人と話すの苦手……なの、知ってるから。」

あれ？ もしかして私、今ちゃんと話せてる？

まだ落ち着かないけど、なんだがいい感じ、な気がする。

少し安心して彼の顔を見てると――

「……と、とりあえず、喉渇きませんか？」

なぜか純君は目を逸らして急に話題を変えてきた。

あれれ？ 今度は失礼なことしちゃったのかな。

その後も、二人で会場を回った。ライブの席は別の席だったから途中で解散することになった。でも初めて、男の人と画面を通さずに話すことができた。

ライブが終わって、家に帰って来られてもまだドキドキしている。ライブの興奮もあるけれど、私にとっては彼と話せた方が印象的だった。

緊張したけど、ちゃんと話せたことが嬉しかった。

宗次郎のご飯も、少し豪勢なものにしよう。

そして迎えた二日目、ホントは純君とは初日だけ会うつもりだったのだけど、物販の買い物ブースでばったり遭ってしまった。

なにもせず別れるというのも嫌だったから、せめて何か話そうと思ってもう一度休憩スペースにやってきた。

彼を引き留めたのは私だ。

だから私が話題を振らないと。

「その……純君は、作曲とか、するの？」

「はい、今回の開発ではほとんど僕が作りました。今は……猫町のBGMを作ってるところです」

彼の言葉に少しドキツとする。だって――

「そうなんだ……。その……、猫町のモブ、モデリングしたの……。私なの」

「き……、奇遇ですね」

「うん……」

どうしよう。会話が詰まっちゃった。何か、何か他の話題は……。

「あの……」

「はいっ?!」

「聞いてみますか？ 僕の曲でよければ、未完成ですけど」

純君は鞆から真つ白な音楽プレーヤーを取り出す。

私のと色違いの機種だった。

「……いいの?」

「はい、同じ会社の人ですし、やっぱりグラフィック側の意見も聞いてみたいです」

「……そ、それじゃあ」

彼の音楽プレーヤーを受け取り、イヤホンを耳にあてがう。

ファイルには、見たことがない曲がたくさんあった。どれも彼が作曲した曲なのかな。

その中に、『猫町』というタイトルを見つけ再生ボタンを押す。

「……っー」

イヤホンを通して流れてくる曲は、平和な猫町に暮らす猫人たちの風景ととても合う、とても穏やかな気持ちになる曲だった。

すると、スマホに通知が鳴るのに気付く。

純君だ。

MASUDA 『どうですか?』

ひふみん☆ 『すごくいいよ(≧▽≦) b ありがとう、こんな曲作ってくれて』

MASUDA 『そう言われると照れますね』

ひふみん☆ 『他の曲も聞いてもいいかな?』

MASUDA 『はい、感想とか言ってくれると嬉しいです。あ、あと少し席をはずしますね。聞きながら待っていてください』

ひふみん☆ 『はーい(´^`^)/』

● その後、また二人で会場巡りをして全部廻りきる頃には二日目が終わろうとしていた。

純君とは、会社の近くの駅で別れた。

もう随分暗くなってる。早く家に帰ったら私は荷物を部屋に置いて体休めるためにお風呂にはいることにした。

「……今日も、ちゃんと話せたな」

自然と頬が緩むのを感じる。人前では固まってしまっているのに、でもなぜか今日はいつもと違うそんな気がした。

明日から一週間仕事が始まる。今日はちゃんと寝なきや。

湯船に浸かっているとふと、考えてしまう。

「……」

彼とは、もうこれで会えないのかな？ 同じ職場だけど部署は違し、違う部署に行く勇氣なんてないし。

でも、せっかく、初めて男の人と仲良くてはなれたのに、これじゃ、なんだかやるせない。

もつと純君の作った曲、聴きたいな。

お風呂から上がって、宗次郎に餌をあげてから、買ってきた荷物の整理を軽くしようとしたそのとき、鞆から音楽プレーヤーが落ちた。

「あ……これ」

手にとって見てみると私のじゃない。真っ白な機種は、純君のものだ。

……なんで？

なんでここにあるの？

「……えっ？」

背筋が凍るのを直で感じる。

も、もしかして……私——

「……あ……あ……あああ……っ！」

間違えて持って帰ってきてきちゃった!!

そんなんだからいつまで経っても童貞なんだよ

純視点

「先輩……僕、どうしたらいいんでしょう」

「おう」

今日の仕事を終えて、久しぶりに帰るといふ先輩と一緒に僕は居酒屋にいる。

僕は先輩の同期の人が経営してる居酒屋のテーブル席で頭を抱えている。

昨日の休日のライブの時に仕事の曲も入ってるウォークマンを無くしてしまった。

まだ未公開の曲ばかりだというのに、もしも一般人の人に聞かれたら――

「販売中止……下手すればクビ!?」

「あくかもなく」

会場は県外だから来週取りに行つて間に合うかどうかともわからない。

ライブで一緒にいた滝本さんに聞けば何かわかるかもしれないけど、僕は女性ばかりの班に行く勇気なんかない。滝本さんとは最近SNSでも話してない。やっぱりたまたま同じ会社にいたこともあるせいか、SNSでもなんて言えばいいかわからなくなってきている。

ていうか――

「なんで先輩そんなにどうでもよさそうなんですか!?!」

僕はテーブルを思いつ切り叩く。

今回の『フェアリーズストーリー3』は、かなり期待されている。なのに、こんなミスしたら取り返しなんてつかない。

それに、あの中には僕が7年前から作曲してきた全ての曲が入っている。

なのにこの人は、そんな大変な状況なのにも関わらず、どうでもよさそうな顔でウイスキーをチビチビ飲んでいる。

「あの、先輩……僕の話――」

「あのさ、増田」

突然口を開いた先輩は、ポケットから何かを取り出し、テーブルに置く。

それは白いウォークマン。

あれ？ これなんだか僕のに似てないか？

いや、僕のだ。間違いない。

試しに電源を入れてファイルを見てみると、僕のだと確信する。

この曲は間違いなく僕のだ。

「先輩、これ……どこで？」

「いやな。なんか今日、キャラ班の俺のデスクの上に置かれてた」

「えー!？」

本気で驚いた。

一体千葉県にあるはずの物が、なぜ東京の、しかも先輩のデスクの上に？

確かにあの時、持ってきていたはずだけど。

「な、なんでそれもつと早く言ってくれないんですか!？」

「なんか言い出しずらくてな」

「ああ。助かった。戻ってこなかったらどうしようかと」

僕は思わず安堵のため息が出てしまう。

良かった。本当に良かった。

「あ、でももしかしたら社外の人に聞かれてる可能性も——」

「それはないだろ」

先輩は、僕の懸念をすぐさま否定した。

僕は思わず先輩に質問してしまう。

「なんでですか?」

「うちの会社は、社員しか入れない仕組みになってるんだぜ？ なのにお前のソレが社内の俺のデスクの上にあるってことは、それは間違いなくうちの社員だ」

「それって、誰かが届けてくれたって訳ですか?」

「おまえに渡さず、俺のところに置くっていう回りくどい手口には理解しかねるがな」

「なんだい？ 探偵ごっこでもしてるの？ いい歳して」
横から声が聞こえて、音のしたほうを見ると、エプロンをした茶髪の男性が立っていた。

「探偵ごっこじゃねえよリョウ」

「あはは、そうか」

「あ、こんばんは、リョウさん」

「うん、こんばんは。久しぶりだね。純君」

先輩がリョウと呼んだ彼は、この店のオーナー坂倉亮太さん。僕も先輩の影響で、リョウさんと呼んでいる。

リョウさんと先輩は実はイーグルジャンプの同期だったらしい。僕たちはたまにこの店で飲む。しかも貸切で。

「てかりョウ。お前、店はもう閉めたのか？」

「うん。掛札はかけといたからもう客は来ないよ」

「ほんじゃ、ウイスキーお代わり。あといつもの麻婆豆腐くれ。とびきり辛いヤツ」

不敵な笑みを見せるリョウさんに、先輩はグラスを渡して注文した。

麻婆豆腐って……。どこの神父だよ。

「OK。純君は？」

「……そうですね。いつものワインとそれに合う料理って何かあります？」

「そうだね。今日は初鰹が来たからそれにしろるか。君の好きなのによく合うよ」

「じゃあそれで」

僕もいつも飲んでいる銘柄のワインを頼む。

初鰹か、タタキにしてみようかな。

「初鰹って、旬は5月から6月じゃなかったか？」

「土佐だとその辺りが一番美味しいんだけど、初鰹って3月からでも太平洋に戻ってくるんだ」

「ほ〜」

関心してる先輩を見てから、リョウさんは厨房に戻っていった。し

ばらくすると、調理している音が聞こえてくる。

それにしても、ここはいい雰囲気のお店だと思う。普通の居酒屋よりも種類が多し料理も美味しい。

その上、リョウさんの料理も評判だから、日が昇っているときは、普通にレストランとしても営業してららしい。

「で、さっきの続きなんだが。コイツを俺のデスクに置いたのは間違いないうちの社員だ」

先輩はポケットからタバコを出して、火をつけながらさっきの話に戻った。

タバコを吸い始めて、肺にたまった煙を口から出す。口を端のところから狭く出しているので煙が僕に当たることはない。

「そうなりますか」

「それで、お前がこれ無くした時に一番近くにいた奴が、犯人かもな」

「犯人って……」

この人地味に推理するの楽しんでないか？

だとしても、無くした時に近くにいた人と言われてもなあ。

——ん？

「滝本さん？」

「はあ？ ソレってうちのキャラ班の？」

思い出した。

確か滝本さんに一度渡したはずだ。なら、彼女が置いてくれたのか？

あの人、多分サウンドチームのところまで来れなさそうだし。

イベントの時も、先輩の名前は出したからもしかしたら。

と頭を働かせていると先輩は唐突に切り出してきた。

「え？ ちょっと待って、お前と滝本ってデキてんの？」

「そ、そんなわけないでしょ!!」

あまりに突然切り出されたものだったので、大袈裟に反応してしま
う。

不意に顔が熱くなるのを感じる。

「た、滝本さんとはこの間の休みの日にたまたま会って……それで」「ウォークマン渡したって訳？」

吸い殻を灰皿に落としていた先輩は余計な過程はすっ飛ばして、結果だけ尋ねてきた。

「……はい」

納得はできたけど、情けない。

僕が持たせたはずなのに、すっかり忘れてしまった。滝本さんにも迷惑かけただろうに。

「まあ、滝本の性格なら、わざわざ俺のデスクに置くのも納得だな」「先輩は滝本さんのこと知ってるんですか？」

「何回か仕事したことあるからな。なるほどなるほど、お前と滝本ね」

「何ができるほどなんですか？」

「いや、滝本って童貞に好かれそうだなって前から思ってたな」

「滝本さんに謝ってください!!」

本気で怒鳴ってしまった。

他人の店なのに。

正気に戻ったときには、リョウさんが複雑な顔をしながら料理と酒を運んできた。

「もーちよつと声小さくしてくれとうれしいな」

「あ、すみません……」

「敦も、あんまりからかうなよ。それにしても、純君にも気になる女の子ができたわけか」

「いやだからそういうのではなくて——」

「よしっ！ せっかくだからお祝いしよう。今日は奢りでいいよ」

「おお、気前がいいな」

「ちなみに敦持ちね」

「おいっ!!」

ずっこけている先輩を見て僕は――

ザマアと、心の底から僕は思った。

リョウさんは麻婆豆腐とウイスキーのお代わり、そしてワインと

……あれ？ タタキでも刺身でもないぞ？

何やらサラダのような物を僕の前に置いてくれた。

「リヨウさん、これは？」

「タタキや刺身はありきたりだったからね。カルパッチョ風にしてみた」

「へー。美味しそうですね。それじゃいただきます」

「……いただきます」

僕につられ気味に、先輩も手を合わせてから麻婆豆腐に手を付け始めた。

先輩、そーゆうのはちゃんとしたほうがいいですよ。

と、内心呆れながらサラダを口に入れる。

やっぱりリヨウさんが作った料理はおいしい。

さっぱりとした初鰹と、シャキシャキとした香味野菜がアクセントになっていい。

確かにお店やっていけるわけだ。

「はい。二人ともおまたせ」

リヨウさんはウイスキーとワインをグラスに入れて、それぞれのテーブルに置いてくれる。そして、リヨウさんも自分の酒とグラスを持って席につく。

僕は軽くグラスを揺らしてから香りを立たせてから一口つける。

「いずれにしても、純君はその滝本さんにお礼言った方がいいと思うよ。できれば直接ね」

「え？ でも、避けられないでしょうか？ 正直不安なんです」

SNSでも完全に音信不通。

基本的こちらから話しかけたとは言え、今回は声をかけづらい。

「そうかな？ きつとその子も同じ言考えてると思うよ」

「そうだといいのですが……」

俯いて考え込んでしまう。

不安しかない。

逆に会いに行つて引かれたりしないだろうか。

そんなことばかり考えてしまう。

「そんなんだからいつまで経っても童貞なんだよ」

「童貞言わないでくださいっ!」

● 「どうしよう……」

昼休み。

僕は会社の一階にあるカフェテリアに来ていた。

昨日の夜、先輩とリョウさんに背中を押されて来たのはいいけど、肝心の滝本さんはいないし、カフェテリアは女性しかない。

ヤバい。帰りたい。

「……っ!」

カフェテリアのアウェイ感に押されて、通路に戻ってしまう。

そして人気のないところで一息つく。そこには大きな窓があつて、自分の顔が映るほどクリアだ。

落ち着け。あそこには滝本さんはいない。僕があそこにいる理由はない。

となると、やっぱりキャラ班のところか?

でも、先輩の話からして、キャラ班は女性しかいないと聞く。

突然男の人が来たら驚かれるだろうし、滝本さんに迷惑をかけるわけには――

「あ、純君……」

「?!」

後ろから、あの時と同じ控えめな声がする。

反射的に振り返つてると、そこには暗紅色のポニーテールをした女性。

滝本ひふみさんが立っていた。

「っ……!」

あまりに急に動いたせいかわ、滝本さんも驚いている。しまった。

「あ……すみません、驚かせて」

つい目を逸らしながらの謝罪になってしまう。これじゃ誠意が伝わらないのはわかってるけど、なかなか彼女の目を見れない。

「だ……大丈夫、だよ。ごめんね。後ろから話しかけて」

「いえ……こちらこそ」

「……」

「……」

なにやってるんだ！

あの時はちゃんと話せただろう！

それなのに言葉が出てこない。

くそ——落ち着け、僕は滝本さんに会いに来たのはウォークマンのことを聞くため。

もし滝本さんが先輩に届けてくれたならそのお礼をするために来たんだ。

目的を忘れちゃダメだ。

「あの……滝も——」

「おんやあ〜？ 何やら面白い絵面だねえ」

「!?!」

僕と滝本さんの間には、メガネをかけた女性がレンズをキラリと光らせていた。

ウェーブがかった髪、両手で太った猫を抱いている彼女の名前は――

「は、葉月さん……」

この人は『フェアリーストーリー3』のディレクター。職場に飼った猫のもずくをつれてきてる変わった人。先輩もなにやら目の敵にしてる。

「ん〜？ もしかして二人でこんなところにいるってことは何やら特別なことでも」

「そ、そんなんじや……」

咄嗟に滝本さんの方を見ると、滝本さんもポニーテールをぶんぶんと揺らしている。

それを見て葉月さんは徐にスマホを取り出すと慌てる滝本さんの写真を撮った。

「!?!」

「あとついでに」

今度は大きめに撮ったのか、フラッシュが僕まで来た。まさか——
「ちよっ！」

この人！ 何で僕まで撮るんだ。

しかもさっきの、まさか僕と滝本さんの写真撮らなかったか!?
それって結構マズい誤解を招くことになるんじゃないか。

「安心したまえ、別に言いふらしたりしないさ。社内恋愛は禁止してないけど、ほどほどにね」

といって、葉月さんは光のように現れて影のように消えていった。
いや！ 何も解決してない！

写真撮られたままだ。

「え……あ……！」

どうすればいいんだ？

葉月さんは言いふらしたりしないといってたけど、先輩に相談しようか。

でも葉月さんのことを話したくはないし。

「あの……純君……！」

「あ……っ！ すみません」

先ほどの出来事があまりにも衝撃的だったので、滝本さんのことを忘れてしまった。

すぐに滝本さんと向かいあうけど、また言葉を失ってしまう。

「……」

「……」

ダメだ。このままじゃ昼休みが終わる。

イベントのときはちゃんと話せた。なら大丈夫、なはず……。

勇気を出せ。いつまでもこのままではいけないから僕はここにいるんだろう。

「……滝本さん」

「何……かな？」

大丈夫。目的は忘れてない。

あとは口に出すだけ。

「この前はお疲れ様です。その……もしかして僕の忘れ物、先輩……敦さんに届けてくれませんかでした？」
言えた。

とりあえず、最低限の質問はできた！
内心安堵する。

あとは滝本さんの返事を待つだけ……。

「……やっぱり、純君の……だったんだ。あれ」

「そうでしたか。ありがとうございます。大切なものだったので」
たどたどしい言葉ではあったが、彼女がそれを届けてくれたことや、ちゃんと話せたことにより安堵が深まる。

安堵故か、さつきよりもすんなり言葉が出た。

表情も、不思議と緩んでいるのを感じる。

「……その、ごめんね……勝手に持って帰っちゃって」

「あ、謝ることないですよ。僕はお礼が言いたかっただけです」

「でも……ちゃんと、渡すことできなくて……それで、敦さんのデスクに置くしかなくて……」

滝本さんは申しわけなさそうにしながら俯く。

それでもいい。ちゃんと僕のところに戻ってきたわけだし。

それに滝本さんが持ってたなら情報漏洩の可能性もないわけだし。

「そんなに気負わなくてもいいですよ。僕だって、同じようなものですし」

僕も、滝本さんと初めて会ったとき、彼女の落とした物をちゃんとした形で渡せなかった。

あんな風に振る舞ってしまったのに、滝本さんは僕を嫌ったりせずちゃんと話してくれる。

だから、そんな風に落ち込まれるのは、少し嫌だった。

「……なんだか似てるね、私たち……」

「……」

あの時のことと、今のことを重ねて、懐かしんだような笑みを、滝本さんは見せてくれた。

心臓の鼓動が急にギアを上げたのを感じた。

初めて見た。

イベントの時みたいに、『何か』を通してではなく、直接、僕の前で笑顔を見せてくれた。

あまりにも魅力的だったそれに、僕は直視することができずにまた目を逸らしてしまう。丁度目を逸らした向きに大きな窓ガラスがあった。

滝本さんは僕が目を逸らしたのが気になったのか笑顔のまま窓ガラスの方を向く。

「?……!?!」

滝本さんは自分が笑顔になったことに気づいてなかったのか、目を丸くして慌てて顔を隠してしまった。

「た、滝本さんっ!?!」

「わ……忘れて」

「お金!?!」

滝本さんはおずおずと千円札を取り出しながらお願いしてくる。

そこまでするの!?!

「そ、そこまですなくても……」

というか多分お金もらっても忘れられる自信ない。

少なくとも、それくらいには女性的で魅力があった。

「いや……だって、こんな顔……」

「そんなことないですよ。その……綺麗でしたし……」

女性を口説くような言葉を言うのは、少なくとも僕には難度が高すぎたので最後の最後でたどたどしくなってしまう。

「くっ!?!」

滝本さんは言葉にできないような悶絶を見せながら顔をより真っ赤にしている。

ちよっと待って。

これ僕には刺激強すぎるんだけど!

ていうか、変なこと言ったせいでこうなっちゃってるんだから謝らないと!

「あ、すみま——」

「おかしく……ない、かな？」

「へ？」

僕が謝る前に滝本さんは上目づかいで尋ねてきた。いつものただどしい声により一層不安定になっている。

慌ててたけど、何故か冷静になった。驚き故か、逆に僕の脳がショートしたのか、そのどちらかなのかはわからないけど、少なくともおかしくないわけがなかった。

「……はい。素敵です」

「……じゃあ」

滝本さんは顔を上げてもう一度笑顔を作ってくれる。だけどさっきのとは違いまるで油のさしていないロボットのようぎこちない。……ううう」

「いや、できつつありましたよっ！」

「無理い〜」

滝唸りながら千円札で顔を隠してしまった滝本さんに僕は必死でフオローした。

だけど滝本さんは首をぶんぶんと横に揺らす。一緒にポニーテールとりボンを揺れる。

「あ……」

腕時計を見るときもうすぐ昼休みが終わる。

そろそろ持ち場に戻らないといけない。でもその前に、僕は滝本さんに話しかけた。

「滝本さんっ」

「は、はいいい!」

滝本さんはビクツと肩を震わして僕の目を見る。まだ落ち着けてないみたいだ。だけど僕は言った。

「あの……改めて僕の忘れ物届けてくれてありがとうございます。そのよかつたら——」

僕はできる限り笑って見せた。ぎこちない笑顔かもしれない。下手すればドン引きされるかもしれない。

だけど、それでも笑って言った。

「またお話しませんか？」

また前みたいにSNSで気軽に話したい。リアルでも、イベントの時や、今みたいにちゃんと話したい。

そんな思いで僕は言った。

「……いいの？」

「はい。音楽の話しかできないと思いますけど」

「つまらなく……ないよ。私も……また純君とお話……したい」

滝本さんは笑ってくれた。

さつきみたいにぎこちない笑顔でも、最初に見せた懐かしむような笑顔でもない。本当に澄んだ笑顔で。

「ありがとうございます。それじゃ、今日はこれで」

「うん……バイバイ」

そうやって、僕は滝本さんと話し終えた。

色々やらかしたことはあったけど、目的のことは伝えられたし、何より滝本さんの笑顔を見れたことが、すごく嬉しかった。

僕はサウンドチームの部屋に入る。そこには、先輩が自分のデスクで作業をしていた。

「おー増田。どうした？ そんなにニヤケて。はつきり言ってキモいぞっ。」

「そおい!!」

僕は先輩にドロップキックをお見舞いした。

お茶会休憩

ひふみ視点

「はあ……」

もうすぐ昼休みが終わるなか、誰もいないキャラ班に戻ってきた私は思わず安堵のため息をついてしまう。

この前のお休みの日、純君の大事な音楽プレイヤーを間違えて持って帰ってきちやって、なんとか返そうとしても、違う部署に向かう勇氣もない。

あの日以来、純君とはSNSでも話してなかった。まさかあの人が純君だとは思わなかったし、それでいつも通りに話すのにも何故か抵抗がでてしまった。

純君もいつもは気軽に絡んできてくれたのに、やっぱり避けられるのかな？　と思っていた。

「……」

だけど違った。

少なくとも純君は私のことを嫌いにはなっていないなかった。それに、昼休みが終わる前、純君に言われた言葉を思い出す。

——またお話しませんか？

彼は笑顔で言ってくれた。

まだ会って間もないはずなのに、そんな風に笑ってくれたこと、またいつもみたいに話そうって言われたことがすごくうれしかった。

最初は、男の人と近くにいたり、話したりするのは気が休まらないうって想像だけで思ってたけど、純君と一緒にいることはそんなことを思わなかった。

だけど、私の胸は少しだけチクリと痛む。そんな感じがする。

純君があそこまでしてくれたのに、私は彼に対して何もできていない。あの音楽プレイヤーも、敦さんのデスクに置くことしかできなくて、実際に話すときもなんども失敗したと思う。

それに、私は彼に対して物凄く失礼なことをしてしまった。

私は席について、スリープモードにしてたパソコンを起動させる。

私は持ち込んでオーディオにイヤホンのプラグを差し込んで、イヤホンを耳にあてがう。

イヤホンから流れてきた曲は、アニソンでも、アーテイストが歌っている曲でもない。

これは全部、純君が作った曲。

純君の音楽プレイヤーのファイルのコピーして、仕事場のオーディオと家用の音楽プレイヤーに入れてしまった。

仕事用の曲やまだ未公開の曲。それらは全て、純君が作ったオリジナルの曲。

彼が作った曲は、履歴を見ると7年前から作り始めたものらしい。ソレが何百曲もある。

色々な楽器で、様々な音色が聞こえる。聞いていると心に響くというか、自分の中にある感情に彼の曲が共鳴する。そんなふしぎな魔法でもあるようだった。

喜びや悲しみを表現したモノや神秘的な曲に、楽しくなる曲。

どれも素晴らしい曲ばかりだ。

同時に、一つ後ろめたいことができた。

それは、純君が大切にしていたモノを勝手に持ち出してしまったことに対する後悔。

ホントはダメだっけわかってはいたけど、好奇心というか、このまま返したくなかったというか。

とにかく、あそこまで真剣に悩んでいた彼にすごく失礼なことを、私はしてしまった。

これって……ネコババじゃ、ないよね？

——純君の曲をもっと聞きたい。

——こんな事はしちやダメだ。

矛盾する二つの感情が渦巻くなか、私は作業を進めながら彼の作った曲を聴く。

● 「？」

しばらくモデリングの作業を続けていると、画面きり社内メッセの

アイコンが出てきた。

青葉ちゃんからだ。

キラキラ青葉 『ひふみ先輩 そろそろ休憩しませんか?』

「あ……」

振り返る。前に驚いてイヤホンのプラグが抜けて騒いってしまったから、一度音楽を止めるのも忘れずに。

すると青葉ちゃんたちがテーブルを広げてティータイムの準備をしていた。そろそろ一休みの時間だ。どうやら、私は結構長い時間、集中してたらしい。

振り返った私に気がついた青葉ちゃんは、苦笑いしている。

「もーひふみ先輩。何度も話しかけたのにー」

「ご……ごめんね、青葉ちゃん」

「そない聴き入ってたんですか? さっき聴いてた曲」

「え……もしかして結構前から声、かけてくれたの?」

色々考え込んだのもあったけど、純君の曲を聞きながらの作業は妙に捗っていたのもあったと思う。だから本当に聞き入ってた。

「はい……さすがに触るのは驚かれるので」

「……ごめん」

私は頭を上げて皆にもう一度謝る。

本当に申し訳ないことをしちやった。青葉ちゃんは話しやすいし、私にも仲良くしてくれるいい子なのに。

でも青葉ちゃんはそれに対して気にした素振りは見せない。

「謝ることないですよ。それより、お茶飲みましょう」

「うん……」

青葉ちゃんに誘われるがまま、自分のイスを即席テーブルに持って行って、ゆんちゃんやんが淹れてくれたお茶を手取る。

テーブルには、お茶請けとしてお煎餅が並べられてた。前にこのお茶会をしたのは青葉ちゃんが入社したその日だったかな?

そんな風に思い出していたら、青葉ちゃんは皆と話し始める。

「皆さん、休日ってなにしてるんですか?」

「内緒や」

「え、即答？」

入社してばかりの青葉ちゃんには、他のキャラ班の皆がどんな風に過ごしてるのか、やっぱり気になるのかな？ でも、私はあんまり話したくない。あと、下手に話したら純君のことまで出てきてしまいそうだから。

もしそうなったことを思うと恥ずかしくて明日から会社にこれなくなりそう。それに、純君にも迷惑かけてしまう。

私はお煎餅をかじりながら、ただひたすらに聞き手に徹する。あ、このお煎餅おいしいな。

「なにか言えない理由でも？」

「内緒なもんは内緒やの！」

「はじめ先輩は？」

「私は……いや、やっぱり内緒にしとく」

やっぱり皆、普段どんな風に過ごしてるのか知られたくないのかな？ 私もそうだし。

喉が乾いたのでお茶を飲む。

「皆さんは、彼氏とデートとかしないのかなーって、思ったんですけどね」

「っ……！」

冗談みたいに言った青葉ちゃんこ言葉に、思わず純君のことを思い出してしまい、お茶を少しこぼしてしまう。

「ひふみ先輩、大丈夫ですか？」

私を見て青葉ちゃんは心配そうな顔でこつちをのぞき込んでくる。ダメ、私はそんなこと話せない。

「大丈夫……ちよつと、お茶が熱くて……ちよつと」

咄嗟にごまかしの言葉が出てきてよかった。これも、あるとき純君と話せたからなのかな。でも、こんな風に使うのは少し嫌な気がした。

「か、彼氏なんかいるわけないじゃんっ」

「うちはそもそもおらんよ」

はじめちゃんは少し様子がおかしい。ゆんちゃんは全く動じてな

いけど。

彼氏……恋人か。

男の人と初めて仲良くなれたのは純君だけど、純君とはそういうのじゃ、ないよね。

青葉ちゃんは前に彼氏の話は話したので振ってはこない。助かる。あの時は宗次郎を彼氏と勘違いさせしちやっただけど。

ふと、恋人とかそういうのが気になってしまい、思わず青葉ちゃんに聞いてしまう。

「青葉ちゃんは……その、彼氏とか……できたら、うれしい?」

「ええ!?! そ、それはまあ」

青葉ちゃんはさっきの悪戯めいた笑顔とは裏腹に、女の子らしく照れている。すると、今度はゆんちゃんが何か企んでるような顔をして詰め寄ってきた。

「え〜? もしかして、ひふみ先輩。気になる男性でもおるんですか?」

「っ……!」

思わず胸の鼓動が速くなるのを感じる。どうしよう。今度はさっきみたいにくまぐまかす言葉が出てこない。なんて言えればいいのかわからない。

それなのに青葉ちゃんとはじめちゃんまで、畳みかけるように寄ってくる。

「き、気になる人ってどんな人なんですか!?!」

「へえ〜、ひふみ先輩も隅におけませんねえ〜」

「っ……ち、違うよ。その……純君とはそんなじゃ——」

——あ。

「「純君!?!」」

やっちゃった。

やってしまった。

すぐに口を押さえるけどもう遅い。完全に声に出してしまった。なにかごまかそうとしていたら、勝手に『純君』という単語が出てし

まった。

皆はより一層詰め寄ってくる。とても興味津々だ。

私はもはやそれどころではないのに。

「な、名前呼びなんですか!?!」

「うちの会社の子なんですか?」

「一体どういった馴れ初めで」

青葉ちゃん、ゆんちゃん、はじめちゃんの順番で一斉に質問してくる。

——待つて。お願い。とにかく待つて。

言葉にできず頭が沸騰しそうになって顔をこ隠すことしかできなくなる。

「~~~~~!」

どうしよう。明日から皆と一緒に働けない。

恥ずかしさでもう頭の中が真っ白になって、何も考えられない。

——お願い、誰か助けて。

敦さんは今、純君と同じサウンドチームにいるし。コウちゃんは絶対に助けてくれない。むしろ面白がってからかってくるはず。今はりんちゃんもいないし。

「み、皆さん! ひふみ先輩が困ってるので一旦止めましょうっ」

気を悪くしたのか、青葉ちゃんは冷静になって二人を止めに戻ってきた。よかった。

でも一旦つて言ったから話さないといけないの!?

「そ、そやな。いくらなんでもこれは人が悪いわ」

「ねーねー。もったいぶらないでくださいよー」

はじめちゃんは意地悪な顔でまだ詰め寄ってくる

「うう……」

はじめちゃんはすごく意地悪だ。

青葉ちゃんがなんとか、二人を席に戻して、落ち着いた目で私を見ってくる。

「……やっぱり話さないと……ダメ?」

「い、嫌なら別にいいですよ」

青葉ちゃん、優しい。意地悪な青葉ちゃんよりもやっぱり優しい青葉ちゃんの方が好き。

「でも、男の人を名前で呼ぶのって彼氏くらいじゃないと」

「え……、そうなの？」

「そう言えば、ひふみ先輩って皆のことも基本的に名前やもんな」

「う……うん。あ、敦さんだって……その、『敦さん』って呼んでるし」

単に、『宮本』より、『敦』の方が呼びやすいから。

でもゆんちゃんとはじめちゃんは思いつき顔をしかめる。

「いや、それは違いますよ」

「なんでえ!？」

「は、はじめ先輩もゆん先輩も、流石にそれは——」

「え?。もしかして青葉ちゃんは敦さんのことそないな風に意識しとん?。」

「——そんなわけじゃないですよっ!。ただ……一応キャラ班で唯一の男の人ですし」

今度は矛先が青葉ちゃんに向かっている。青葉ちゃんも何故か顔を赤くしてる。

「まーね。青葉は敦さんには初仕事のときとか、アドバイスしてもらってたもんねー」

「あつ、あれは少しくましくないところがあつたので教えてもらっただけですよ!。」

はじめちゃんにからかわれてる青葉ちゃんは、怒った顔をしてお茶の入ったカップを片付けて持ち場に戻っていく。

「はじめ先輩もゆん先輩も意地悪です!。」

拗ねてる青葉ちゃんを見て、はじめちゃんとゆんちゃん達も面白そうにしながら片付けをして持ち場に戻っていった。

どうやら休憩は終わりみたい。

私もカップを戻して、自分のデスクに向かい直る。

すると、画面に社内メッセのアイコンが出てきた。

キラキラ青葉 『ひふみ先輩。さつきは騒いですみません』

これを見て、少しほっとする。よかった。ものすごく恥ずかしかったけど、明日から来れなくなるほどじゃなくなった。青葉ちゃんはすごく優しい。

ひふみ☆ 『全然大丈夫だよ(≧▽≦)b それより、ありがとうー!』
私はすぐに青葉ちゃんにメッセを返信した。

私はイヤホンを耳に当てながら心の中で自分と青葉ちゃんを応援する。

——お互い頑張ろうね。青葉ちゃん。

モノを作ると言うこと

敦視点

「あの、宮本さん。少しいいですか？」

「おう？　なんだ涼風か。どうした？」

俺がアホの葉月のせいでキャラ班に配属されてからもう一ヶ月以上経ったその日、初仕事のモデリング以来、アドバイスを頼まなかった涼風が俺に尋ねてきた。

「さっき八神さんにキャラデザの仕事を任されたんです」

「へーやるじゃん」

涼風はどこか誇らしげだ。

確か、八神みたいなキャラデザやりたくてこの会社来たんだもんな。それなら納得だな。

ただどすぐに形のいい眉毛を八の字に変える。

「少し迷走中でして、何かアドバイスしてほしくて……」

「うーん……」

そう言えばコイツ、初仕事の時のアドバイスも一回だけで済んだよな。立体的に見せるコツを軽く教えただけであとは自分で何とかしたし。

なら少しくらい肩入れてやってもいいだろ。

「とりあえずどんなキャラなんだ？　仕様書見せてくれ」

「これです」

「……」

俺は涼風から受け取った仕様書を確認する。

明るい色の髪の毛のツイントールが特徴、真面目で元気だが少し天然なところがある。

……これ完全に涼風じゃねえか。

すげえ偶然だな。涼風が入社してくる頃にはシナリオはほとんど出来てたわけだし。

そして次がネックだった。

主人公一行を次のダンジョンへ案内する途中に、盗賊に襲われて死

ぬ。

あーこれ、まだ誰も手を付けてなかったのか。

「そうだな涼風、まずは最初の仕事思い出してみ？」

「それって、初めてのモデリングのことですか？」

「そうだ。八神に散々しごかれたようだが、大事なのはこのキャラの一番の特徴を理解することだな」

そこら辺は、八神にリテイクのバーゲンセールのお陰である程度わかるはずだ。だが涼風は首を傾げた。

「一番の特徴……ですか？」

「ああ、特にこのキャラはすぐに死ぬ」

「はつきり言いましたね……」

「死ぬってことはソイツの全てが終わるって事、プレーヤーからしたらそれなりにショッキングなはずだ。つまり印象に残りやすいんだ」

キャラが死ぬシーンは印象に残りやすい。だけど、それは一つ間違えればキャラを殺すことになる。

「漫画でも言われてるだろ？ 『人が本当に死ぬときは人に忘れられた時だ』ってな。つまり、ラスボス倒すまで覚えてもらえるようなキャラデザにするんだ」

「具体的には……」

「そうだな。このキャラクターの見て欲しいところ、魅力的なところを全て出し切ることだ。死ぬってことは、これ以上掘り下げができない。言い替えれば、必要が無いって事だ。その点では、このキャラは作りやすい。他のキャラと違ってストーリーに進行具合で印象が変わったりしないからな」

「なるほど……」

涼風は感心してるようだが、俺はあまり好ましく思わなかった。

コイツ、どこか八神のことを意識しすぎてるところあるからな。へ々に凝り固まった思考はデザインの仕事には向いてない。

仕方がない……。

「そーいや、これ涼風に似てるよな」

「え!?…これ私ですか!？」

「あー!…敦さんソレ、バラさないでくださいよー!」

驚いた涼風に、企みがバレた八神が茶々入れてきた。やっぱりコイツワザとやりやがった。

「最悪です!…八神さん大嫌いです!!」

「怒らないでよー。名前付けるまで黙ってよーと思ってたのにー」

「もー!!」

怒ってる涼風をからかっている八神を後目に、とりあえず自分の作業に戻る。

とりあえずなんとかなったかもな。キャラと自分の似てるところがあると親近感あると無意識にキャラデザにも反映される。

少なくとも、キャラを殺そうなんていうことはなくなるだろう。

二時間ほど作業を進める。涼風は他のキャラ班の連中にも色々相談しながら進めてるらしい。

最近はサウンドのところに行くことも少なくなった。もう曲はほとんど出来てるし、やるといっても雑音の除去とか、プログラムに音楽を入れる作業くらい。それは増田の仕事だから俺が手を出すことはない。てか、そろそろデバッグ雇うんだよな。ならプログラムのとこに回されるのも時間の問題か。やりたくねーよバグ直し。

あーそろそろタバコ吸いたくなってきたな。屋上行くか。

そう思っただけ席を立とうとすると、また涼風が俺に話しかけてくる。

「敦さんっ、描けましたので見てほしいんですけど」

「ん……ああ、別にいいぞ」

真っ先に八神に見せると思ったのだが、まさか俺の方に来るとは。アドバイスしたからなのだろうか、律儀な奴だ。

キャラデザの用紙を受け取ると、紙の上にはツインテールの可愛らしい少女が描かれていた。

うん、いいな。てか、胸元の衣装の柄って飯島のデスクの壁紙かなかなかおもしろいな。

「ちなみに、名前は?」

「い、一応は考えてはきたんですけど……えつと……なんか名前言

うのすごく恥ずかしいですねこれ！」

涼風に聞いてみると、顔を真っ赤に染め始めた。

そりゃ、自分に似てるキャラだもんな。仕方ないけど、コイツ一応ストーリー上の重要NPCだから名前もちゃんと出さなきゃいけないだよな。

「もったいぶると余計言えなくなるからサツサと言った方が楽だぞ」

涼風も腹をくくって名前を言う。

「……………ソ、ソフィアちゃんです！」

「ソフィア……………か」

「復唱しないでくださいーい！」

涼風は余計に顔を赤くしてツインテールを揺らす。確かに、八神がからかいたがるのも納得するな。だけど――

「いい名前だと思うぞ？」

「……………そうですか？」

「ああ、ソフィアってのは、智慧ちえの女神とか、イギリスやギリシャの王妃の名前だ」

「は……………初めて知りました」

「由来考えてなかったのかよ……………」

俺はそういうの割と考える方だけど、まあ、すぐに死んじまうキャラだから別にいいか。

「まあ、女性の名前としてはかなりオーソドックスな名前だから覚えてもらいやすいかもな」

「……………でも、死んじやうんですよね」

「それは仕方ねえよ……………」

俺はため息をつく。だって仕方ねえだろ、お前が入社してくるまえからそういうシナリオで葉月が組んだんだから。

ま、でもせつかくだし最後に先輩らしいことを一つ言ってやるか。

「なあ涼風、このソフィアってキャラを作ったとき楽しかったか？」

「え？」

涼風はちよつと戸惑った顔をしたが、すぐに答えた。

「はい、大変でしたけど、楽しかったです!」

「そうか、ならこれだけは覚えとけ」

俺はソフィアが描かれているキャラ容姿を涼風に返しながら言う。「キャラクターデザインっていう仕事はな、そのキャラクターの命を作るってことだ。たとえ死ぬ運命だとしても、それは価値のあるものだ。そして、」

そして俺は言った。かつて、俺がある人に言われた言葉を――

「モノを作ると言うことは、誰かの夢を作ると言うことだ」

● 涼風が八神にソフィアのキャラデザの報告に向かってからしばらく経つと、自分のデスクに戻ってきた。

どうやら、ソフィアのモデリングを始めるらしい。

だが、その前に涼風が飯島に話しかける。

「会議って何してるんでしょうね」

「あれ、青葉ちゃん知らんの? 議事録はパソコンから見れるのであぁ、そろそろ会議のタイミングだったな。俺も手を止めて涼風たちの方をに目をやって耳を傾ける。まだ就業時間だけどこれくらいならいいか。涼風も会議については知っておいて損はないだろうし。

「初耳です!」

「各リーダーとかディレクターが集まって問題ないか話してるんだよ」

「問題あったらどうなるんでしょうね?」

「え……」

涼風の言葉に、篠田も飯島も動揺している。俺は目のハイライトが消えるのを肌で感じる。

まぁ、あれは……ねえ。

「発売……中止とか?」

「え!?! 嫌です!!」

「そうそうあらへんから」

「――あるよ」

「「?」」

俺ははつきり言った。

「あるよ。いやホントマジで」

「死んだ魚のような目で言わないでください!!」

まあ、今回の『フェアリーズストーリー3』はそんなことはないだろう。あつたとしても、それは多少の誤算くらいだ。問題ない。……多分。

「じゃあ宮本君、進捗はどうだね?」

今度は篠田の奴がおもしろ半分で俺に話題を振ってくる。

仕事しろよお前ら……。

「いきなり失礼だな……」

聞かれたからには答えないといけないな。

断る理由もないし、俺は渋々答える。

「最近はこちらでいることが多いな。マスターアップが近いのもあるし、サウンドは増田に任せてる。あるとすればそろそろプログラムのところに行くかもってところだ」

「確か、あと二つ作品のお仕事してんるですよね?」

「まあな。今から9ヶ月後と来年にマスターアップのヤツがな……

あのキチ●イども算数も満足にできねえのか」

「「……」」

「……あの、それってちゃんと間に合うんですか?」

「涼風、なにを言ってるんだ? 間に合うかじゃない、間に合わせるんだよ」

「「ひいひいひい!!」」

そんなことを思ってたら、言霊というか、ホントに問題が発生しやがった。

滝本がキャラ班の残りキャラ数と残り日数が合っていないという。会議を終えてきた八神と遠山が、申しわけなさそうに帰ってくる。「ごめんなさい、私の計算ミスなの。キャラ班にはお泊まりか土日どちらかきてもらうことになると思うけど……」

「別にいいさ、この程度の誤差」

陽気に笑いながら俺は遠山をなだめる。最初は流石に焦ったが実

際のズレを見たら1日程度の誤差だった。

別にめずらしいことではない。この職場なら遠山以上の誤差を押しつけられることもよくあることだ。

ま、初めてのADでここまで問題なくことを運べただけ十分すぎる。

これで酒のんだ時の変貌がなければ本当に良い奴なのになあコイツ。

「それに、これくらいなら俺1人でもなんとかできるよ。コイツらは帰してやれ」

「え……でも宮本さん」

「心配するな、今日も泊まるしな。今更仕事が一つ二つ増えたところでもうさほど変わんねーよ」

心配そうな顔で見つめてくる涼風達を窘める。

しかし八神は少し面白くない顔をしてくる。

「敦さん、それじゃあ青葉たちの有給取っちゃうことになるんじゃないですか？ どうせ使わなくせに」

「どの道、マスターアップが近づけば否が応でも残業なり休日も出勤しなきゃいけない。だから今のうちにちゃんと休ませとけ」

うちの会社は少なくとも手当てはちゃんと出してくれるんだ。

目先の有給目当てに、今下手に無理されてマスターアップ直前で倒れられたら困る。

「……」

八神と遠山はお互いの顔を見合わせて、不服そうではあるが俺の提案を受け入れた。まあコイツらも、涼風達を休日に呼び出したりしたくないだろうしな。

● そういうのは俺のような奴がやればいい。

「あゝ」

今夜も泊まり。時計の針は1時を指している。極めていつも通りだ。

俺はサウンドチームの部屋にいる。ここは音を使う事もあって、

キャラ班のいるオフィスとは物理的に遮断されている。だから深夜はスカート脱いでフリーダムして八神とも鉢合わせることはない。キャラ班の誤算と他の作品のモデリングを一段落終えて、俺の至福の時間がやってくる。

俺はタバコとライターを手に廊下を出る。

残業の合間に屋上でタバコを吸いに行くのが唯一の楽しみだ。

ここの出入り口は防災上、二つある。一つはキャラ班の近くだから近づくわけには行かないのもう一つの方の会議室の出口を使うのがもう当たり前になっていた。

しかし、暗くてよく前が見えねえな。さっきまでパソコン使ってたからよく見えねえや。

「——うおっ!?!」 「きゃあっ!」

フラフラと廊下を歩いていると何かにぶつかって尻餅をついてしまふ。あと小さな悲鳴が聞こえた。誰かにぶつかったのか？

「痛てて……!」

八神じゃない。アイツはこんな乙女チック悲鳴を上げるなヤツじゃない。本来泊まるなり休日出勤しなきゃいけないキャラ班の連中の仕事は俺が肩代わりしたから残ってるはずがない。なら誰だ？

ようやく目が慣れてきて暗がりでも前が見てるようになってくると、そこにいたのは——クマの妖怪だった。

「うおあああああ!?!」 「きゃあああああ!?!」

また悲鳴が聞こえる。あとクマの妖怪がビクンビクンと震えてる。

……つて——

「……なんだよ涼風か」

「み……宮本さんですか」

よく見たらクマの口元に涼風の顔がある。着ぐるみ？

「えつと……なにそれ?」

「寝袋です」

クマの妖怪の全身を見ると足が生えてる。

あーなるほど。最近有名な歩けるタイプの寝袋か。

俺はゆつくりと立ち上がる。ついでに両手が使えない涼風も起こ

す。

「つーか、お前、なんで泊まってるんだ？ キャラ班の誤差はさつき片づけたし、お前が泊まる理由なんてないだろ？」

「ソフィアちゃんのモデリング、できるだけ拘りたかったので今日は泊まることにしたんです。ていうか、もう終わったんですか!？」

呆れた顔をされる。

まあ、これからそれ以外の仕事が残ってるからまだ寝れないんだけどな。

それに、自分が初めてキャラデザしたキャラに手をかけたがるのは自然の心理かもな。

「もーっ。宮本さんの目のクマのせいでお化けかと思いましたよー」

「悪い悪い」

「もう寝ようと思ったのに目が覚めちゃいましたよー。夢に出てきました」

「そこまで言うこたねえだろ……」

コイツもなかなか言うようになったな。

入社したてはまだ落ち着きもなかったのに、可愛げがなくなってきた。

「そこまで言うならついてくるか？ 飲み物くらい奢ってやるよ」

「え!? だ、大丈夫ですよっ」

うん。ここで食いつかないのはコイツの良いところだと思う。篠田とかすぐ飛びついて来るもんな。子供っぽいところはあるが、礼儀というか姿勢がいい。

俺は会議室の方を指差して涼風に寝袋を外してくるように促す。

「そういうな。俺も話し相手くらい欲しいさ。八神にはそんなの頼めねーしな」

「あ……はい」

俺の意図を察した涼風は苦笑いしながら会議室がある暗闇に消えていく。しばらくすると、暗がりからいつものツインテールとは違う、少しラフな格好の涼風が姿を表す。

「うおっ、一瞬誰かと思った」

「……それ八神さんにも言われました」

もはや完全に別人だった。

やっぱり女って髪型変えるだけで印象変わるな。てかこつちの方が女性って感じでいいと思うが、なんでいつもツインテールなんだろう。

「そんじゃこつちだ。いつもの入り口は八神が陣取ってるから行けねーんだよ」

「で……ですよね」

俺と涼風は会議室を通してもう一つの出入り口へ向かう。

やはり涼風も、八神のあの習慣には思うところがあるのだろう。アイツとはもう七年も仕事してるが、その過程で深夜のスペースの陣取りまで決まっちゃまったし。

「正直本当に女なのかも怪しいレベルに達してるよあれは」

「そういえばこの前りんさんも——ってやっぱりなんでもありません！」

涼風が急に慌てだしたと思ったら、なぜか遠山の名前が出てきた。なぜ遠山？ ほりや八神と遠山は同期だけど飲み会から察するに付き合っていないらしい。

しかし涼風のこの慌てよう。

……まさか——

「……つたく、アイツら会社で盛ってんじやねえよ」

「？」

思わず呟いてしまったのが、涼風はうまく聞き取れなかったのかキョトンとした顔をしている。

そうだ。お前は何も知らなくていい。知らなくて良いんだ。

そのまま一度オフィスを出て、俺は下の階にある自販機で適当に飲み物を買う。涼風のだ。

「ほらよ」

「あ、ありがとうございます」

やはりどこか申しわけなさそうにしてる。

真面目なのはいいが前にも話したようにコイツ、オーバーワークで倒れるんじゃないか？

手を抜くとは言わないが、体力の計算くらいししないとやってけねえぞ。

まあ、俺が言えたもんじゃねえか。

「あの……今度奢ります！」

「後輩に奢られてたまるかっ」

呆れて俺は涼風をつれて屋上まで来る。

風が少し強い。ビルの屋上からは、チラチラとまばらな光が覗いている。

どれもビルから発せられた光だ。

……よくやるよこんな時間まで。

俺はタバコを箱から出して口にくわえる。

「私、屋上初めてくるんですよ」

「ふーん……」

「まだ明かりが点いてるビルにいる人たちも、きつと頑張ってるんでしょね」

飲み物を手にはにかむ涼風に煙が行かないよう、風下にたった俺はそんな涼風に少し意地悪な感情が出てきた。

「……どうだろうな。奴隷のように働かされてる奴らもいるんじゃないの？」

「もー！ そんな事言わないでくださいよー！」

雰囲気全台無しにされた涼風は頬を膨らませながら怒ってくる。

俺はタバコの煙を風に乗せて吐き出す。

望まずしてそこにいる奴も大勢いる。自分が何のためにこんなことをしてるのかすらわからなくなる奴だって。

風に流れてく煙を目で追いながらそんなことを考えていると、涼風は何か察したのか再び切り出してくる。

「でも、私たちがって凄いい恵まれてると思うんですよね」

「？」

「だって、皆優しくして、頼もしくて、そんな人たちと一緒に働けて、

自分の夢を一番近くで追いかけることができるなんて——私って凄
いラツキーですよね」

ラフに纏めた髪を風になびかせながら、ビルの光で目をキラキラ
と反射させる涼風に、なんとも言えない感情がわき上がってくるのを
抑える。

「……」

少し懐かしいことを思い出すが、タバコの煙と一緒に腹の中に押し
込んだ。

「ちよつと宮本さん、聞いてますか？」

「聞いてるよ」

また怒った涼風を後目に煙を吐きながら気だるげに答える。

すると、涼風は何か懐かしむような目で続けた。

「私、小学生のころ『フェアリーストーリー』に出会って、それで
八神さんに憧れて本気でキャラクターデザイナーになりたいって思
うようになったんです」

それは、涼風が初めてうちに来たときにも話してたこと。

やっぱり、コイツにとってあれはそれだけ大きな作品なんだなとつ
くづく思う。

涼風にとつても、八神にとつても……俺にとつても。

「最初は出来ないことだらけだったけど、敦たちのおかげで少しず
つ色んなことができるようになって、今日初めて、やりたかったキャ
ラデザの仕事も任されて、夢が一つずつ叶っていくのが、すごくうれ
しいです」

「……そうか」

「宮本さんは言いましたよ。キャラクターデザインは、そのキャラ
クターの命を作ること。モノを作ると言うことは誰かの夢を作ると
いうこと。私、今日、ソレを初めて知れたんです。私はソフィアちゃ
んの命を作ったんだなって」

涼風は笑う。

コイツは、本当にこの仕事が好きなんだ。言うとおり、辛いことも
楽しいことも、それらを全部ひっくるめて、好きなんだ。

涼風の見せたその笑顔が、それらを物語っている。きつと美大を蹴ったのも、高卒でうちに入ったのも、後悔してないんだろう。

——俺は？

俺の時は……

「それで……宮本さんはどうなんですか？」

「……どうって？」

涼風の問いに、少しだけ焦る。まるで自分が今考えてることを当てられたらような気がしたから。

コイツにそれは悟られていないようだけど。

「この会社で働くことどう思ってるんですかって聞いてるんですけど！前は変にはぐらかされましたし、今日のことだってまるで私たちを信頼してないみたいで少しイヤでしたし……」

「……」

俺は言う言葉に迷う。

あの時は上手くごまかせたけど今回は言い逃れができそうにない。それに、今日のはきつと俺がキャラ班の誤差を全部引き受けちゃったことのことだろう。本当に律儀な性格してるよコイツ。

「……どうなんですか？」

まっすぐ見つめてくる涼風の目は、俺の言い逃れを許そうとしない。

それでもなんとか、マシな言葉を探す。嘘でもなんでもいい。コイツは単純だから、適当なことを言っとけば納得するはずだ。

「……俺に……俺にその権利はない」

「……」

予想通り。

涼風は困ったような、悲しいような顔をしている。こうなることはわかってた。

だけど、言えなかった。

そんな上手いことは。

コイツの言うことを否定することも、適当なことを言うことも、

きつと俺にそんな権利はないから。

少なくとも、ここは他の会社に比べてまだマシなところがある。俺が入社したときはそれは酷いものだったけど、それを涼風に妬むようなことではない。

やがて涼風は俯いてしまう。

しまった。さっきの言葉は失言だったか。

変に暗くなった空気をなんとかしようと思いを巡らして言葉を探そうとした時だった。

「——敦さん！」

「へ？」

涼風はいきなり顔を上げた。

てか、え……？ 名前？

「私、頑張りますっ！」

「えっと……何を？」

「敦さんが自分の仕事、楽しいって、誇らしく思えるようにです！」
あまりにいきなりだったので面食らってしまった、上手く話せない。
だが涼風はそんな俺などお構いなしに話を進めた。

「お……おう」

涼風は俺が奢った飲み物を一気に飲み干すと、そのまま屋上の出口まで歩いていく。扉の前まで来るとこちらに振り返った。

「それじゃ敦さん、また明日っ」

「また明日……お疲れ……」

涼風はビルの中へ戻っていった。

屋上には俺一人だけになる。

俺は吸いかけのタバコを火を消す。ライターとタバコをポケットに入れて、俺もビルに戻ろうとする。

「……」

すると、ふと頭の中にまた懐かしかったモノがよぎった。

『それじゃ敦さん、また明日っ』

俺は反射的に振り返るが、そこにはなにもなくただチラチラとまばらな光が俺を睨みつけていた。

「……わかってるさそんなこと」

光に背を向けて、今度こそ俺はビルの中へ戻っていった。
わかってる。わかってるさ。

——俺にはその権利はないってところくらい。

そんなのありえへん

ゆん視点

「どうした？ 飯島、おごりだ。遠慮なんてするな」

「……………」

私は今、職場の同じチームで古株の先輩、敦さんとなぜか高そうな雰囲気の中華料理のお店におる。私の実家の近くにはこういう雰囲気のお店がなかったのもあって、居心地が悪い。テーブルに置かれる料理も手を付けてええんかもわからん。

「おっちゃん！ ほんとに食べてええん？」

「おう、食べ放題だから好きだけ食え」

「わーい！」

連れてきた妹のみうと弟のれんも、すっかり敦さんに懐いとるし。……………なんでや、なんでこないなことになったんや。

思えば二時間ほど前、けんかして泣いているみうとれんをあやすために遊びに連れ出したときやった。

● 「こら二人とも、あんまり遠くいかんといてや」

「はーい」

遊びに行こうゆうてようやく泣き止んだ二人は、デパートの仲をはしやぎ回つとる。

それにしても、勘弁してほしいわ。

ここ最近忙しいなってきたし、何よりもうすぐ検診があるからダイエツトしとるけん食事も控えとるワケやし。

「……………」

今朝も朝食は抜いとったけんか、丁度夏の日差しが強うなってきたけんか、めまいがした。視界が揺れて、頭の中あクラクラするわ。やつとめまいが収まったと思うたら、みうとれんがどこにもおらん。

しもた――

うちは周りを見回すけど、どこにも見当たらん。辺りは休日やから

か人がいっぱいおつて、背の低い二人は隠れてもうとる。どこにおるんや。

「みう！ れん！ どこや！」

うちは人混みの中を走り出すけど、元々体力はないし、めまいのせいかすぐ息が上がってまう。

「はあ……はあ……あかん、息が……」

頭もよう働かん。

どうすればええかもわからん。このまま二人に何かあつたら——

「——うおっ!? なんだこのガキども！ やめろお!!」

どこからか、聞いたことのある声が聞こえた。

男の人の声や。でも知り合いに男の人なんておとん以外にだれがおるんやろ？

声が出たほうへ向いてみると、人ごみに紛れて、小さな子供二人が男の人の頭に捕まって髪をおもちやのように引っ張って遊んどるのが見える。

「怪人やー！」

「お化けやー！」

「痛い！ 髪引っ張るな！ 痛い！ 痛い痛い!!」

あ……この人知つとる。敦さんや。

青葉ちゃんが入社したときと同じタイミングにキヤラ班に映ってきた先輩、宮本敦さんや。

うちは正直この人あまり好きやない。だらしないし、ヤニ臭いし、顔は……まあ目のクマが無ければイケメンゆうよりハンサムってほうなんやけど。目のクマのせいでお化けに見える。

ってよう見たら、敦さんの髪の毛引っ張つとんみうとれんやんか！

「……なんであんなところおるんや」

見失った二人を見つけたので安心するけど、そんなことしとる場合ちやう。

えっと、とりあえず敦さんを二人から助けへんと。

うちは人混みの中を掻き分けて、なんとか二人がおる場所までくる。敦さんががいとるところが見えたから見失わずにすんだ。そ

してできる限り大きな声で声をかける。

「みう！ れん！ 何しよん！」

「あ、ねーちゃん！」

「怪人やっつけとったー！」

「だから怪人じゃねえって……」

みうとれんはやつと敦さんの頭から降りてうちのところに戻ってくる。二人を降ろすために腰を下ろしてた敦さんはよろめきながら立ち上がる。

「……って、飯島じゃねえか。何やってんだよ」

「敦さんこそ、何やっとんですか」

「買物だよ。タバコの税金上がるからな」

敦さんは足元にあるレジ袋を持ち上げてうちに見えるように掲げとる。中には大量のタバコと日用品が詰まっとる。

「てかソイツら、お前のガキか？」

「……妹と弟です」

なんとか二人を見つけることができ安堵のため息をつく。えらい心配したわ。

「……！」

また視界が揺らぐ。

目は開いてるはずなのに、目に映る背景が砂嵐に見える。

足がふらついてその場に倒れそうになる。すると、身体が大きな壁にぶつかって倒れることはなかった。

ふと鼻にヤニの臭いが通るのを感じた。

もしかして敦さん？

「おい、大丈夫か？」

「!?……」

え？ どゆことや？

今うち、敦さんによりかかっとなるんか？

あかん、前がよう見えへんし考えもおぼつかん。

「とりあえずあつちに座れ」

うちは敦さんにされるがまま、近くのベンチに座らされる。しばらく

くすると落ち着いて、視界もはつきりしてくる。

すると、みうもれんも心配そうな顔で寄り添ってくる。

「ねーちゃん大丈夫?」

「……大丈夫だよ」

二人も心配させとうないけん、できる限り気を張りつめて笑顔を作る。ホントは少しキツイけど。

ああどうしょ。明日、仕事やのに。

「……飯島、お前朝飯食ってきたか?」

「……」

うちは答えなかったけど、敦さんには多分気づかれたと思う。

この人、だらしのないクセに勘だけは鋭いもんなあ。

「つたく、ちよつと待ってろ」

そう言うと、敦さんはポケットからスマホ取り出して、耳にあてがう。誰かに電話する気なんやろか。

病院?

病院に行くほどやないのに。

「……おう、俺だ。予約の件なんだが、あれ3人くらい増えてもいいか?」

「?」

敦さんはうちらを一度見ると、もう一度通話に戻る。予約ってなんや?

「……そうか、サンキュー」

通話の相手との交渉にうまく行ったのか、どこか安心しとる様子で電話を切った。

「立てるか?」

「……なんとか」

● 「……ちよつと待ってろ。タクシー捕まえてくる」

敦さんが一度その場を離れてから戻ってきて、みうとれんも連れてタクシーに乗せられて連れてこられた場所がこの中華料理のお店やった。

「とにかく食べ。ロクに食ってないんだろ？」

「……いただきます」

「ここままやと埒があかん。

うちは目の前に置かれたスープをレンゲで掬って口に入れる。これ、変なもん入つとらんよな？」

「……！」

おいしい。

高そうな雰囲気のお店やからか、少なくともそこらのお店のはちやうのはすぐにわかった。

「おいしいー！」

「そうか、それならよかったよ」

敦さんはよほどこのお店で顔が知れとるのか、メニューにはないような子供用の料理も、みうとれんに合わせて頼んでくれた。せやけど、そこまでしてくれることに違和感を覚える。

「なんや、なんなんやこの人は。まるで親切的な親戚のおっちゃんみたいやんか！」

この人、うちに嫌われてるのわかつとるやろ。なのになんでこんな高そうなお店連れてくるんや！

「飯島、医食同源って言葉知ってるか？」

「？」

「中国医学の基礎を日本風にアレンジした概念だ。健康な身体は、まずは日頃から食べるものに気を付けなくちやいけない」

「どうゆうことですか？」

いきなりようわからん講釈たれてきた敦さんに、うちは顔をしかめる。

「ダイエットをするなどは言わないが、まずはちゃんと自分の身体の管理をするところから始めろ」

「……敦さんには、関係あらへんやん」

「あるよ。少なくとも、同じチームなんだ。へたに身体を酷使して倒れたら困る」

「敦さんには、女の子の気持ちなんかわからへんよ！」

まるで見透かされてる感じがして、うちはついキツイ言い方で答えてしまうた。みうとれんも驚いてしまうたことに気づいて、少し縮こまってまう。

うちは、実家におったときはそれはもうダサイ格好でおったから、そう言うのが嫌で家族みんなで東京に来た。流行りのものとかも必死で覚えた。

もう昔みたいなの自分に戻りとうなかつたから。

「……………」

「…………あの飯島」

せやけど、敦さんは眉一つ動かすことなかつた。

「そういうのか空回りってくらいわかるだろ？」

「それは……………」

「自分を変えようとする努力は必要だ。その姿勢は買う。けどどな飯島、それはかつての自分を全部否定するのは違うよ——いや、そういう生き方もあるんだらうけどな」

敦さんは言った。

「それは辛いだらう」

「……………」

何も言えなくなる。

この人は真つ向から否定しとるわけちゃう。ただ単に無理するなと言つとるだけ。

ほんまイヤや。

こない親切にしてくるくらいなら、もつと嫌なことをしてほしい。まるで、うちが嫌つてる方が間違うとるみたいや。

「……ある飯はみんな滋養や貧血、美容にもいいらしい。あと、腹八分目は医食同源の基本だ。食い過ぎるなよ。でもガキどもは腹一杯食え」

「はーいつ」

敦さんは自分の分の料理を食べ終わって、席を立つとお店の店員に何か話してから、店を出ようとする。その前に一度うちの方に振り返った。

「それと、今日は早めに寝ろよ。寝る前に軽くストレッチするのも忘れるな。あと夕食は抜いても良いけど朝飯はちゃんと食べ。そんなじゃあな」

そのまま、敦さんはお店を出て行った。

なんやねんあの人。散々言いたいこと言って帰りよった。

そのまま、みうとれんと一緒に食事を終えて家に帰った。お金は敦さんがもう払ったみたいで、こちらはすんなりお店を出れた。

夕食のあと、みうとれんをお風呂に入れてあげてから寝かす。

洗濯や夕食の片づけは、お母さんがやってくれた。さすがに体調が悪そうなのを気づかれてもうたようやった。

そこで今、自分の寝室で寝る支度をしとる。

「……」

今日は疲れたからか、やたら眠かった。はよ寝ようとする、ふと敦さんに言われたことを思い出してまう。

ほんまに寝る前にストレッチするだけになにか変わるんやろか。

ただ、このまま何もせず明日、また敦さんに嫌みなこと言われるのも癪やったから、うちが知つとるようなストレッチだけでもすることにする。

「痛たた……」

うち身体固いなあ。

運動なんてロクにせえへんから仕方ないんやけど。

一通りのストレッチをしたあと、布団に潜り込む。

瞼を閉じれば、強かったり眠気が一層強うなるのを感じる。

うちはそのまま、溺れるように眠りに落ちた。

ああ……今日は、ほんまに……つか……れ……た。

●

目が覚めた。

あかん。ほんまに熟睡しよった。今日朝ご飯うちが作らんといいんのに。下手したら遅刻するかもしれない。

慌てて布団から飛び起きて目覚まし時計を確認すると――

「あれ？」

時計の針は6時を指していた。普段目覚ましを設定してる時間よりも早い。

普段この時間はみうもれんも起きてない。

今から朝ご飯作っても、会社にはそこまで急ぐ必要もない。

あと、やたら身体が軽い。寝起きなのに頭がスーツとしとる。とても昨日あんなにふらついとつたとは思えんほど。

「……朝ご飯作らへんと」

みうとれんを起こして朝ご飯を食べさせる。

朝ご飯を作るんも、やたらスムーズにできた。

昨日食べた中華料理のせい？

それとも寝る前にちよつとストレッチしたせい？

ワケがわからないまま、二人が食事しとるのを見ながら、うちも朝ご飯を食べる。普段よりも食欲が湧いて自然と箸が進む。

いつもなら朝ご飯はあんまり食欲湧かへんのに。

「いつてきます」

「いつてらっしゃい！」

みうとれんに見送られて会社に向かう。と言っても、これから電車に乗っても早く着きすぎる。

そこでふと、はじめちゃんが青葉ちゃんと話してたことを思い出す。

ちよつと歩いてみよつか。

うちはいつも乗ってる駅よりも一つ先の駅まで歩いていった。運動はそこまで得意やないし体力もない。

せやけど、それくらい距離を歩くくらいなら苦にならんかった。

「あ、ゆん先輩、おはようございます」

電車に乗ると、青葉ちゃんも同じ電車乗つとつて、同じ席に座った。青葉ちゃん早いなあ。若いつてスゴいわ。なんかハツラツとしとる。

「あれ？ ゆん先輩、今日はいつもより顔色いいですね」

「そ、そう？」

「はい。最近、体調よくなさそうでしたし」

うう……。まさか青葉ちゃんにもバレとったなんて。最近太りはじめてることはまだバレとらんけどこれは恥ずかしいわ。

「別に、なんもしとらんよ。昨日はお休みやし、ゆっくり休んだだけや」

敦さんにお昼ご飯をおごってもらった。なんてことはとても言えるわけあらへん。

電車を降りて、青葉ちゃんと一緒に駅を出る。会社までは徒歩で行く。

駅から会社までの距離は、うちが遅刻しそうになって必死で走ったとしても一分足らん距離。

前は青葉ちゃんと一緒に走ったなあ。

せやけど今日はその心配はあらへん。

もしかして、これも敦さんの思惑通りなんか？

「ゆん先輩、考え事ですか？ ずっと上の空ですけど」

「え!? そ、そないなことあらへんよ! 青葉ちゃんの気のせいやっ」

うちは笑って誤魔化す。そして青葉ちゃんに怪しまれないように早足で会社に向かう。

なんやろ、敦さんの事考えると変な気分になる。

……ちよつと待って、まさかうち、敦さんのこと……。

いや、そんなんあり得へん!

冷静に考えてみい! あんなだらしなくてヤニ臭い人になんの魅

力があるんや!

そうや! そうに決まっとる。

たまたま休みの日に会って、少し体調を気遣われただけでそんなのあるわけない!

「おはようございます」

自分に言い聞かせながら会社の中に入る。キャラ班のブースにはまだはじめちゃんもひふみ先輩も来とらん。ただ――

「おう、飯島か。どうした? 随分と顔色がいいな。何か良いことでもあったのか?」

「……！」

キャラ班のブースには、敦さんがいた。

何か悪戯でも企んどるような笑みでこちらを向いてくる。

うちはなぜか言葉を無くす。あと急に体温が上がるのを感じる。

ちやう！ コレはちやう！

これは空調が利いてないのと、長袖で来たからや。

そうや！ そのはずや！

うちがこないな人、気になるハズがないんやー！！

これって、三角関係だよな

青葉視点

「おはようございまーす——って誰もいない。土曜日だからかな？
八神さんも敦さんもいないし……めずらしい」

私は土曜日の今日も会社に来た。

最近任されたキャラデザの仕事で描いたソフィアちゃんの3Dモデリングをするために。

入社したばかりのころはなにもできなかったけど、少しずつできるようになってきて、仕事ももっと楽しくなってくるのがすごくうれしかった。

「……………」

それにしてもどうしよう。

敦さんにあんなこと言うてからももう結構時間が経つののに何もできてない。

私は屋上の時の敦さんを思い出す。

——俺にそんな権利はない。

あのときの敦さんを見たとき、私は最初はなんて言えばいいのかわからなかった。敦さんの言葉には、それだけの重みがあった。辛いことも苦しいことも悲しいことも悔しいことも、私よりもずっと経験してきた。きっと、入社してまだ間もないころなら、まだ夢を追いかけていた高校生のころなら、きっと本当に何も言えなかった。

でも違う。

確かに私は敦さんや八神さんに比べれば未熟だけどわかる。

楽しいだけじゃない。それは大人として当然のこと。

だけどそれは、楽しくないだけじゃないのも同じだ。

辛いこともある、苦しいことも悲しいことも悔しいことも、きっとたくさんある。でも、楽しいって気持ちをなくしたらだめなんだ。少なくとも私は、ソフィアちゃんを作ったときにそれを知った。

敦さんのあのときの目は、まるで『俺は大丈夫だから、お前はお前の道を行け』みたいに言うてるようだった。あの人はひとりぼっち

だ。

そんなの嫌だ。私たちは、私『たち』でゲームを作ってるんだ。その中に、敦さんもいる。だから、敦さんだけが楽しくないというのを全部背負うのは間違ってる。

だから、私は敦さんも楽しいと思えるようにしたい。そのために、私のできることを精一杯やりたい。

そう思った。

「……………とは言っても何したらいいんだろ」

私はひとまず自分の荷物をデスクに置いてから少し考えてみるけど、結局なにも思いつかない。

本当に、どうしたらいいんだろう。

そんな風に行っていると、ふと誰もいない八神さんのデスクに目がいく。

「…………」

なんでだろう。以前までの私なら、八神さんの机にこっそり座って、メインのキャラデザをやる妄想をしてたと思う。

でも、あの日、敦さんのあの言葉を聞いてから、妙に心が落ち着かない。

キャラクターを作ること、モノを作ること。

この意味をあの人は教えてくれた。それは、今までの私にはなかったけど、これからの私にとって、とても大切なこと。

なのに、敦さん本人が、自分はその権利が無いと言う。

それが、どうしても納得できない。

「それにしても、八神さんの机。散らかってるなあ」

それはそれとして、八神さんのデスクはどうしても気になる。普段の八神さんがどんな風に仕事をしてるのかも、気になったりはするからだ。

その中でも、一カ所にたくさん紙を重ねて置いてあるところがあって、それが少し気になる。

前から気になってたけど、なんだろうこの紙。

紙の上に置かれた重しをどけて一枚取ってみようとする——

「なにやっつてんだお前?」

「ひゃあ!」

いきなり声をかけられて声を上げてしまう。

敦さんとは違う低い声。でも聞き覚えがあるこの特徴的な声は間違いない。

佐藤さんだ。

「さ、佐藤さん、おはようございますっ。そのどうしても気になつて」

「ああ、これか。確かお前キャラデザ志望だったもんな。だったら、見て損は無いぞ」

「?」

佐藤さんは私のところまで来ると、私が取ろうとした紙を何枚か見繕つて私に見せてくれた。

「これは、八神さんのキャラデザの絵ですか?」

それは私が子供の頃から憧れた、八神コウのイラストの山だったのだ。

でもよく見ると中には似たり寄つたりのモノもある。よく見るとボツとその理由が書かれてあつたりして、試行錯誤の痕跡が見つかった。

「微妙な違いだけど、八神さんでもボツは出してるんですね」

「まあ、アイツも見えないところで色々苦労して……ん?」

「?」

何かに気がついた佐藤さんに釣られて、私もその方向を見る。佐藤さんの視線の先にはひふみ先輩がなんだか気まずそうにこちらを見ていた。

「あつ、ひふみ先輩! おはようございますっ」

「お……おはよ、青葉、ちゃん」

「……じゃ、俺はもう行くわ」

佐藤さんはひふみ先輩をしばらく見ると、何かを察して背景班のブースに消えていった。

そこで初めて気がつく。もしかして、ひふみ先輩、最初からいたん

じゃ。

「あの…ひふみ先輩？」

「あ…青葉…ちゃん…？…」

「？」

「…えっと、ね…ふあいと」

「あ、ありがとうございます」

● 「…青葉ちゃん、佐藤君と…話して、たんだ」

「ひふみ先輩は知ってるんですか？」

八神さんのデスクを見学した後の休憩時間、ひふみ先輩は佐藤さんのことについて話してきた。

「…うん。敦さんと、同じであんまり、話しかけてこないし、それとなく、フォローしてくれたりするし…すごくいい人」

「そうだったんですか」

ひふみ先輩、男の人といるのあまり落ち着かないって言ってたけど、佐藤さんと言い敦さんと言い、宇上手いこと仕事できてるんだもんなあ。

さつきも佐藤さん、多分ひふみ先輩に気を遣って席を外したんだと思う。

「それに、確か、コウちゃんと、りんちゃんの…同期、だよ」

「へーそうなんですか…って、え？」

「どう…したの？ 青葉、ちゃん」

「いや、何でも無いです」

そこで先日私の歓迎会を思い出す。多分、佐藤さんってりんさんのこと好きだよな。そして、あの様子を見るに、まだそう言う関係になっっていない。

だとすると、とんでもないことになる。

だって、佐藤さん、最悪で七年間もりんさんに片思いしていることになるのだ。

七年間。小学校を卒業できる年数すら超えている。

も、もしかして佐藤さん。ものすごいヘタレ!?

どうしよう。本当にとんでもないことを知ってしまった!!

● 私は自分のデスクに戻って作業を進める。だけど、敦さんに言ったこと、八神さんの昔のこと、そして佐藤さんのこともあって、あまり集中して作業できなかった。

そのまま時間が過ぎていって、時計を見るともう12時になっていた。

気分転換もかねて、お昼ご飯にひふみ先輩も誘おうかな。

私は真後ろのひふみ先輩のいるデスクに振り替える。

「あの、ひふみせんぱー——」

だけど途中でやめた。

またひふみ先輩、イヤホンつけて音楽聴いてる。最近特に顕著だ。私が入社してたことはゆん先輩も聞いてたけど、前は軽く声かけたら気づいてくれたのに、最近は全然気づかない。

それだけ気に入ってる曲なのかな？

私はもう一度デスクに向き直って、パソコンで社内メッセを送る。

キラキラ青葉 『あのひふみ先輩、お昼一緒にどうですか?』

振り返るとひふみ先輩は私に気づいてくれる。画面をずっと見ているから、耳がふさがっても気づけるからだろう。

ひふみ先輩は作業と音楽を止めて、私の方に振り返る。

「うん……いこっか、青葉ちゃん」

「あ、はい」

私は少し驚いた。

いつものひふみ先輩なら社内メッセですぐ返してくるのに、前よりもしゃべる回数が増えている気がする。

まさか、前の休憩の時に話してた『純君』という人の影響なのかな？
? どんな人なんだろう。

お昼ご飯は会社に来る途中でコンビニで買ってきたものを持ってカフェテリアに向かう。

コンビニでお昼ご飯を選ぶのは私の楽しみなのだっ!

ひふみ先輩はお弁当を作ってきたらしい。いつもはハリネズミの

宗次郎と一緒に食べてるんだけど、最近少し喧嘩してるみたい。なんでも、宗次郎はひふみ先輩の笑顔が嫌みたい。

なんでだろう。とてもすてきなのに。

ひふみ先輩とカフェテリアに向かいながら、そんなことを考えていると、カフェテリアにさしかかったとき、声が聞こえた。

「ねえ聞いてよ佐藤君！ この前ね、青葉ちゃんたちと初めてのお給料何に使ったかって話してたんだけどね。コウちゃん、私と日帰りの温泉旅行行ったってこと忘れてたのよっ。もう信じられない！」

「……そうか」

「この前だって、また会社に泊まってスカート脱いで寝てたのよ。あのときだって青葉ちゃんに——ってなに言ってるのよ私！」

「とりあえず落ち着け」

りんさんと佐藤さんが話していた。

といっても、りんさんがが一方的に愚痴を言っているようなものだった。ていうか『あのとき』ってあれだよね?!

八神さんもりんさんもスカート脱いでたあれだよね!?

この前敦さんにも口を滑らせそうになったけど。

「それでね、コウちゃんが——コウちゃん——コウちゃんを——コウちゃんは——コウちゃんだか——」

本当に八神さんの事ばかり話している。

その異様な光景に呆気にとられていると、佐藤さんの視線が一瞬こちらを見た。

その刹那、いいからこっちに来てくれと言われたような気がした。多分、気のせいじゃないと思う。

ひふみ先輩は男の人に声をかけるのは苦手だしここは私が！

「あ、りんさんもお昼なんですっねっ！」

ちよつと不自然だったけど、声をかけながらカフェテリアに足を踏み入れた私に二人は気がつく。

「あら、青葉ちゃんにひふみちゃん。二人もお昼はここなの？」

「あ、はい。そうです」

「ん……」

ひふみ先輩と一緒にうなずいた私は、その場の流れでこの場所に座ることになった。

個人的に、八神さんのことについても聞きたかったし。りんさんの机の八神さんの様子とか、他にも色々。

それで佐藤さんを助けられるなら、一石二鳥だ。

「昔のコウちゃん？」

さっきの話の流れが八神さんの話だったから、自然に八神さんの話になった。佐藤さんが今朝言っていたことについて話を聞いている。

「そうねえ、確かに無口でギラギラしてて、近づきにくい雰囲気はあったけど…それがカツコ良かったわね…」

「いやそういうことじゃなくて」

二重の意味で突っ込んでしまう。というかやっぱりりんさんって、八神さんのこと好きだよな。多分、そう言う意味で。

今八神さんの話をする今の表情が全てを物語っている。なんて生き生きとした表情をしているのだろう。対称的に佐藤さんの表情からはどんどん生氣が抜けている。

これって、三角関係だよな。

だとすると、本当に知っちゃいけないこと知っちゃったな私。

「さ、佐藤さんはどうだったんですか？」

「俺か？」

「佐藤君は……なんていうか、金髪だったから、最初はヤンキーみたいで怖かった」

「つ……差別だろ」

……佐藤さん!!

話題を逸らそうとしたけどまさか傷を抉ることになるなんて。

それに、八神さんだって金髪じゃないですか!!

佐藤さんの顔色がどことなく悪い。どうしよう、なんとか佐藤さんを手助けしないと!

と思った矢先、りんさんは続けた。

「でも今は優しいし、頼りになるのは知ってるのよ。だけど……」

りんさんの顔が、少しだけ曇る。

いつも頼りになるりんさんの不安げな表情が意外で、思わず聞き手になってしまう。

「ほら、佐藤君って、背景班のみんなに仕事押しつけられ気味でしょ？ 土日に来てるの佐藤君だけだし、今日だって本当は他のみんながしなくちやいけないのに」

「別に来たいから来てるだけだよ。心配するな」

淡泊に答える佐藤さんにりんさんは少し怒った顔をする。八神さんを叱るときのような顔だ。

「またそうやって敦さんみたいなこと言う。男の人って自分が全部背負わなきゃいけないってみんな思ってるの？」

「ちよつとりんさんっ」

「あ、ごめん」

さすがに喧嘩になるのは嫌だったのでひとまず仲裁に入る。りんさんは物わかりのいい人だからすぐに引いてくれた。

やっぱり、佐藤さんも敦さんと似たようなところがあるんだな。ああいう考え方って、男の人共通なのかな？

「……いくら来たいから来てるって言っても、佐藤君にも佐藤君の生活とか、プライベートとかあるし、そういうのはちゃんと大事にしてほしいの」

「そうか」

冷静になったりんさんは、自分の意見を佐藤さんを立てて主張した。

りんさんって、ほんとにちゃんと私たちのこと見てくれてるんだ。みんなのペースに合わせて仕事も振ってくれるし、だからこそ、頑張れる気がする。

そういうところは尊敬できる。できるけど——

「やっぱり私、佐藤君にも幸せになってほしいの」

「っ……………！ っ……………！」

「佐藤君、大丈夫？」

りんさん！

なんで最後にそういうこと言うんですか！

やっと佐藤さんが落ち着いてきたと思ったのに、また顔色が悪くなってる。

それと、確信した。りんさん、佐藤さんの気持ちに気付いてない!!

「ああ、ちよつとむせたただけだ」

絶対りんさんのせいだよねさっきの咳。佐藤さんの顔色も今日一番で悪い。そりゃあ、最後の最後であんなこと言われたらしんどいですよ。

「悪い、今日は食欲ないんだそれじゃ」

「あ、ちよつと佐藤君」

佐藤さんはまだ食べ終えていないお弁当を片付けて、そさくさとカフェテリアから出て行く。あまりに急だったので、りんさんも追いかけられなかった。

佐藤さん、逃げちゃった。でもあれは誰でも逃げ出したくなるよね。

ああ、本当にどうすればいいんだろう。



その後も仕事は再開したけど、気分転換どころか、余計にはかどらなかつた気がする。それでもなんとか進めて間に合うとは思うけど。そう思いながらオフィスを出る。帰る準備をした時、敦さんと八神さんは明日のために今日の夜に出勤するという訳のわからないことまでするし。

ああ、どうしよう。この会社って社内恋愛とかって大丈夫なのかな？

ぎくしゃくしないといいけど。

「あ……」

「ん？」

そう思いながら歩いていると、佐藤さんとばったり会ってしまった。どうしよう。あのときのこと、ちゃんと謝らないと。

「おお、なんだ。涼風か」

「あ、はい。あの、今日は本当にすみませんでした!?!」

「土下座!?!」

私は精一杯の謝罪を込めて地面に頭をつける。入社したときりんさんにもやったことがすこし懐かしく思うが今はそれどころじゃない。

「何やってんだお前は、頭上げる。別に怒ってねえよ」

「ほ………本当ですか?」

顔を上げるとあきれた顔をした佐藤さんが私を見下ろしている。そもそも背が高いから余計高く見える。

私はいつまでも土下座してるわけにもいかなかったので立ち上がって佐藤さんの目を見る。

うう、やっぱり威圧感あるなあ。

「まあ、そういうわけだから」

「あ、待ってください!」

そうとうと佐藤さんはすぐに帰ろうとする。でも私は佐藤さんを呼び止めた。まだ聞きたいことがある。おなじチームの人なら、できれば力になりたいから。

呼び止められた佐藤さんはけだるげだけど振り返ってくれる。

「………なんだ?」

「あの……佐藤さんってもしかして、その………」

「?」

私は言った。

「りんさんのこと好きなんですか?」

「………」

佐藤さんの目はうつむいてそのまま黙り込んでしまう。

あれ!? やっぱり聞いちゃだめだった!?

部外者が踏み入っちゃだめな領域なのかもしれないと、言ったあとに公開してしまう。

「えっと……すみませ——」

「涼風」

また土下座しようとする、佐藤さんは急に切り出して私を止めた。

どうしよう、やっぱり怒鳴られるのかな……。

「あの……佐藤さん？」

「お前さあ……」

佐藤さんは手を額につけてため息をついたあと、顔を上げる。

お、怒られる！ と思っていた私が見たのは、なぜか腑抜けた顔をした佐藤さんだった。

訳がわからず佐藤さんを見ていると――

「お前ってチビだよな」

「!？」

恐怖！ イーグルジャンプの負の連鎖

青葉視点

「お前は毎回毎回、同じ事で説教させんなよっ！ 会社で服を脱ぐな！」

今日も出社したら、佐藤さんは怒っていました。

八神さんに。

「服じゃなくてスカートだけじゃん！」

「だからそれを言ってるんだよ」

「泊まってるの私と敦さんぐらいだし」

「残念だがな、朝とか皆気にしてるから遅れてくるんだよ」

私もさつき来たばかりで状況がよくわからないのですが、多分佐藤さん、八神さんがスカート脱いで寝てる場所に遭遇したみたいですよ。

ラッキーすけべというもののだろうけど、佐藤さんからしたら嬉しくないんだろうな。

「会社を私物化すんな。働いてるのはお前だけじゃねえんだぞ」

佐藤さんは全くその通りと思う正論をぶつけてきます。

私も八神さんのあの癖、少しは直しほしいです。

でもこのままケンカが続けるわけにもいきません。他のみんなも出社してくるのに。

「おはよー青葉ちゃん。あれ？ どうしたの？」

「あ、りんさん」

振り返ると、りんさんがやってきてくれたのがわかってん安心した。

よかった。りんさんならなんとかしてくれそう。

「えっと、八神さんと佐藤さんがケンカしてるみたいで」

「えっ!? またあ!？」

「いつもやってるんですか？」

「入社してからずっとよ。もう二人とも仲がいいのか悪いのか……」

ため息を吐くりんさんを見て私は思う。多分このケンカの根本的な根元はりんさんにあると。

佐藤さんには余計なこと言うなと口止めされてるので言えないんですけど。

「ごめんね、青葉ちゃん。私、ちよつといっってくるわ」

「あ、はい」

そういうとりんさんは八神さんと佐藤さんの所へ向かっていく。

これでこのケンカが大事にならずに済みそう。

「2人とも、どうしたのよ。またケンカしたりして!」

「あ!、ねえりん聞いてよ! 佐藤にパンツ見られた!」

「それはコウちゃんかスカート脱いで寝るからでしょ!」

りんさんは八神さんを叱っている。当然といえば当然なんですよね。

あくまでみんなが行き来するスペースでスカート脱いで寝てた八神さんが悪いんですし。

「りんまで佐藤の味方するの!?! 私被害者じゃん!」

「どつちがだよ」

佐藤さんもため息をつく。

やっぱりグラフィックチームは女の人が多いから、敦さんや佐藤さんは肩身が狭いのだろう。

そもそも、なんでここは女の人が多いんだろう。

「佐藤君。コウちゃんには私がちゃんと言っておくから、佐藤君は仕事に行つて」

「……遠山。お前なあ、穏便に済ますにしても、前に八神のパンツ見た敦さんは半殺しにして、俺はいいのかよ」

ええ!? 敦さん、りんさんになんてことされたんですか!?

言われてみれば、敦さんも八神さんがスカート脱いで泊まつてるの知ってたし、七年間も同じ会社にいたら、多分そうなるのかな?

「それは……佐藤君は信用できるから……」

「……」

りんさん! それ地雷です!

佐藤さんも嬉しいのか悲しいのかよくわからない複雑な顔になっています。

信用されてるのに、なんて悲しいんだろう。

「……チツ、次は気をつけろよ」

りんさんに根負けした佐藤さんは罰が悪くなつて自分の持ち場のあるところ、すなわち、私が覗いてるところに向かつて歩いていく。えっ、こつち？

「あ……」

佐藤さんと目があつた。

私はハツとする。このままじゃ誤解させる！

「あの……コレは盗み見してはわけじゃなくて……」

「なあ涼風」

佐藤さんは片手を私の頭の上に置いた。

「へ……？」

それからしばらくして、キヤラ班のところに敦さんが入社してきた。そして私を見て声をあげる。

ああ、恥ずかしい……。

「うわっ！ どうした涼風、髪がパイナップルみたいになってるぞ!?」

「敦さん……佐藤さんにやられました」

「お前、佐藤になにやったんだよ」

佐藤さんに髪の毛を弄られた。最近、佐藤さんがりんさんのことを好きだという事を聞いたときからずっとだ。

八神さんとりんさんが仲良くしてるところを見ると、私に八つ当たりしてくる。あと何故か最近アルバイトにやってきたねねっちにまで。

それを敦さんに話してみると、どうやら敦さんも佐藤さんがりんさんのことを好きなのは知っていた。

「なるほど、前々から思ってたはいたが、遠山が甲斐甲斐しく八神に世話を焼いて、遠山の気持ちしが八神に向いていることを思わせる度、佐藤はそこら辺にいる涼風や桜に八つ当たりしてると」

「はい……」

「世の中、循環してるな」

「とてつもない悪循環ですよね!？」

最初は佐藤さんの力になってあげたいとは思ってたけど、そのせいで変に目を付けられたような気がする。

ていうか、りんさんもりんさんだけど、七年間もヘタレてる佐藤さんも悪いと思います。

ていうか、そのしわ寄せが私に来てるんですよ!？」

あとそこら辺ってどういうことですか!？」

「あ、青葉ちゃん、宮本さん、少しいいですか——って、青葉ちゃんどうしたのその髪!？」

「りんさくくん」

私と敦さんはりんさんに私の髪の毛について話した。後、さっきの八神さんと佐藤さんのケンカについても。

話を聞いたりんさんは眉毛を八の字にする。

「そう、佐藤君が……どうしてかしら?」

主にりんさんが原因だったりするんですよ。

りんさんに髪の毛を元に戻してもらっている私も、少し言葉に迷う。

「佐藤君、背景班の子たちの仕事、肩代わりしてるところあるし、土日もよく来てくれるから、すごく助かってるんだけど……」

りんさんって、ちゃんと私たちのこと見てくれるけど変なところで鈍いって言うか、八神さんしか見てないっていう雰囲気がある。

私は無駄に事情を知ってるのもあるし。しかも話せないから余計に状況が拗れてるわけで。

「でも、私がコウちゃんと話してたり、一緒にいたりするとなんか嫌そう……!？」

りんさんは何かに気づく。私の髪を元に戻してからどこかへ向かうとする。

「りんさん?」

「ごめん青葉ちゃん、私ちよつと行ってくる」

「ちよつとりんさん!？」

「なんか面白そうなことになってきたな」

「敦さん、なんでそんなに楽しそうなんですか……?」

「とりあえず見に行くぞ」

敦さんと一緒にりんさんを追ってみると、りんさんは佐藤さんのデスクにいた。

そこには当然佐藤さんが作業をしていて、タブレットの上をペンを走らせている。

「佐藤君っ!」

「どうした?」

「あの、こんなこと聞いて、間違ってたら凄く恥ずかしいんだけど……」

「何?」

佐藤さんはペンを止めてりんさんの方を向くけど、りんさんはなぜかすごく慌てる。

もしかして、りんさん、佐藤さんが自分のことを好きだって事に気づいたの?!

「佐藤君、もしかしてコウちゃんのことを好きなの!？」

「……」

りんさんの言葉に、私も敦さんも佐藤さんも凍りついた。

は、話が変な方向に!

「もしそうなら……私、私……!」

りんさんの目が明らかにおかしい。というか、今手にもってるそれ!

前にはじめ先輩が見せてくれた鉄の剣ですよね!?

ま、まさかそれで佐藤さんを?

さつき佐藤さんが言ってたけど敦さんみたいに半殺しにはしちやダメー!

敦さんも目のハイライトが消えてるし!

「……遠山お前、馬鹿だろ……!」

「っ……えっと、割と……」

体をはって止めようか迷う中、佐藤さんは顔に手を当て、その隙間からりんさんを睨み付ける。あまりの剣幕に押し返されたのか、先ほどの凄まじい殺意は完全に殺されてしまった。

「はあ……頭痛てえ。ちよつとタバコ吸ってくる」

佐藤さんは席を外してオフィスを後にした。残されたりんさんは、佐藤さんに睨まれたのがそんなに怖かったのかその場でひざを突く。

「あ……青葉ちゃん、宮本さんも」

「りんさん、大丈夫ですか？」

「う……うん。でも佐藤君、怖かった」

「はい、ホントに佐藤さんは良い人です」

「ああ、佐藤は多分このチームで一番良い奴だよ」

「えっ……え……？」

● 「今日の佐藤君、私がコウちゃんのことすきななのって聞いてから、なんか怖い」

昼休みに入ってからもずっと、りんさんはさっきのことを引きずってるみたいだった。

そんなわけで、私と敦さんを屋上に呼んで3人で相談したいと頼まれることになった。

こんなことは、一番仲のいい八神さんには話せないので私と敦さんと呼んだみたい。

「あのな、遠山。佐藤のヤツも一応好きな人がいるんだよ。八神じゃなくてさ」

「そうなんですか!? なら本当に失礼なことしちゃったのね」

りんさん、それを反省するくらいなら早く佐藤さんの事気づいてあげてください。

「それで、佐藤君の好きな人って？」

お前だよ。

と、言いたげな目で敦さんはりんさんを見ている。りんさん、ホントに気づいてないんだなあ。

「えつとな、とりあえずヒント。なんで涼風にちよつかい出すのか

考えてみな」

敦さん!?

それ聞き方によったら佐藤さんが好きな人は私ってことになりませんか!?

「……! なるほど……」

そう思ってるうちに、考えていたりんさんは何か閃いたようにみえた。そして一度私を見る。

やっぱり!?

敦さん。りんさん絶対勘違いしましたよ。だってなんか変に嬉しそうというか、男の子ねーみたいや母親のような表情だし。

ソレを見た敦さんも、申しわけなさそうな顔をしてる。多分、心中で佐藤さんに謝ってるのかも知れない。

そのままりんさんは屋上から出て行って、そこで相談は終了。まだ昼休みは残ってると言うこともあって、敦さんはまた見に行こうとしたので私もついて行くことにした。

きつとこのままじゃまたりんさんが失敗するだけになる。

りんさんを追っていると、カフェテリアでりんさんと佐藤さんの姿を見た。

佐藤さんは前と同じように自分で作ったお弁当をテーブルに置いて座っている。りんさんはそれに近づいているところだったり

私と敦さんは前にひふみ先輩と一緒に隠れてた時のように入り口で身を隠す。

人は結構いたけど、佐藤さんが座ってる席は入り口の近くだったから聞き耳を立てるのに問題はなかった。

「……あの、佐藤君?」

「なんだよ?」

おずおずと尋ねたりんさんに対して、佐藤さんはあまりキツくない口調で応えた。

「さつきは、コウちゃんが好きなの? とか聞いちやって、ごめんな

や」

「別にいいよ。怒ってない」

多分、ホントにあまり怒ってなかったのかもしれない。でもどうしよう。このままじゃ確実に怒らせてしまうんじゃない——

「それで、佐藤君は青葉ちゃんのことを好きなのよね？」

バキッ！

「ひいっ!?!」

佐藤さんが右手で持っていた二本の箸が四本になった。ああ、やっぱりこうなっちゃったか。

「……遠山」

佐藤さんは四本になった箸をテーブルに置いて、両手でりんさんの肩を掴む。

「!?!」

「……お前はもう喋るな」

「え……あの——」

「喋るな」

テーブルに置かれたお弁当と四本の箸を片付けて、ため息をつきながら佐藤さんはカフェテリアを出るためこつちに向かってくる。あれ、このパターンって。

咄嗟に敦さんの方を向くと、敦さんがいた場所には誰もいなかった。

見捨てられた!?!

「「あ……」」

また佐藤さんと目が合う。

佐藤さんは無言で私の頭を掴んだ。

——昼休みが終わって、キャラ班のデスクに座って仕事の準備をしていると敦さんが帰ってきた。

「今度はヤシの木か。佐藤のヤツ器用だな」

「敦さんのバカー!」

誰か止めて、この負の連鎖を!

●

佐藤視点

最近、胃と頭が痛い。

ここ最近、遠山が変なことばっか聞いてくるせいだ。お陰でこの一週間のちやくちやしんどい。

まあ、だとしても言えるわけねえしな。俺が八神に勝てるワケねえし。

アイツはこの会社を有名にしたある意味英雄だ。俺のような他の社員に良いように使われてるヤツとは違う。

——佐藤 弘樹は遠山りんのことが好き遠山りんは八神コウのことが好き

これはこの会社にいる人間でも、ほんの一部しか知らない事実。

まあ、前者の方はどうか知らんが。

葉月さんと裏で協定を結んでる花男さんは、葉月さんの部下の女性に手を出すヤツを裏で始末してるらしいが、そんな彼ですら俺を憐れんだ目で見えるほどだ。

会社の何でも屋の敦さんを除いて、俺がこのチームにいるのはおそらくこの二人のせめてもの温情なのだろう。

「ちよつとりん、大丈夫？ 顔赤いよ？」

ふと、八神の声が聞こえた。俺のデスクは遠山と八神の近くに配置されてるせいで二人の声がよく聞こえる。

もしかして、葉月さんと花男さん、嫌がらせで俺をここに置いてるんじゃないのか？

「風邪じゃない？ 帰ってた方がいいよ。皆に移したら大変だし」

「大丈夫よ。少しクラクラするだけだし、それにこんなに忙しいのに休めないよ」

「だーめ。余計悪くなったらどうするの？」

……ああくそ。コイツ、イケメンすぎるだろ。なんで女に生まれたんだお前は。

この前遠山に少しキツく当たりすぎたのもあって、気づいてはいたけど声をかけずらかった自分にイライラして、余計に胃と頭が痛くなる。

あとで涼風の髪を弄ろう。前はパイナップルとヤシの木だったし、季節はずれだがクリスマスツリーにでもしてやろうか。

髪がサラサラしてるけど、整髪料使えばなんとかなるだろう。

「ねえ佐藤」

急に八神に声をかけられた。なんだ？

遠山を連れて帰るんじゃないのか？

「なんだよ？」

振り返ると、八神はとんでもないことを言ってきた。

「ちよつとりんが風邪引いてるみたいなんだ。家まで送って行つてよ」

「はあ!？」

「ちよつとコウちゃん！ 佐藤君は関係な……い」

八神はふらついた遠山を支える。よくここまでできるよお前は。

「ほら、ふらついてるし。佐藤、アンタ車で入社してたよね。私がついて行けたら一番良いけど、運転できないし、りんを歩かせるワケにも行かないし、りんの家知ってるでしょ？」

「おま——」

俺は思わず断りそうになるが途中で踏みとどまる。

ああでも、いつもそうやってるからこんな生かさず殺さずの状況が続いてるのか。見たら本当に具合が悪そうだ。なら——

俺はパソコンを閉じて席を立つ。

「……いくぞ遠山」

「あの佐藤君、大丈夫よ。仕事してていいから」

「風邪なんだろ。どうせお前、家でも仕事する気だろ」

「……」

八神に手渡された遠山の手を握る。

コイツほどじゃないにしても、俺だってお前を見てきたんだ。

それくらい、わかる。

ビルの裏の駐車場に止めてある俺の車に遠山を乗せて、俺は遠山の家まで車を走らせる。

ナビゲートはいらない。

俺はコイツの家を知っている。

7年間も共に働いているのだ。残業で終電を逃したときとかにも、体よく足がわりに使われている。

それでも、彼女といられる口実になるのなら、なんでもいいわけだが。

遠山の家に着いたら、ひとまず遠山をベッドに寝かせた。

「着替えは、あとでするから」

「そうしてくれると助かる」

流石にそれは男の俺には難しい。

「……ごめんね、佐藤君。仕事でだったのに」

流石に疲れてるのか、遠山は少し弱った目で俺を見る。

こういうところ、やっぱり女性なんだなとつくづく思う。

「別にいいさ。どうせ敦さんが勝手に徹夜して死にかけるだけだ」

「フフっ、かもね」

「……ちよつと待ってろ、台所と材料借りるぞ」

悪戯めいた笑みを見せた遠山を見て、少し居心地が悪くなったら俺は遠山の部屋を出て台所に向かった。

彼女のキッチンが整理されていて、はじめて使う俺にも使い勝手に困ることはなかった。

土鍋と米、出汁と卵、鶏肉、生姜などの材料を揃えてから俺は粥を作り始める。

洗ったまな板に鶏肉を置いて、きれいにした包丁で細かく刻む。

生姜をすりおろして、水を多めに入れた土鍋に材料を全部入れてひと煮立ちさせてから蒸らす。

粥なんてこんなもんだ。

「さてと……」

粥の入った土鍋と、小皿とレンゲをお盆に乗せて遠山の部屋に向かう。

そして、部屋の前まで来ると、お盆を廊下に置いてドアの三回叩く。

「俺だ」

すると、ドアの向こうから声が聞こえた。

「佐藤君!?! ちよつと待って! 今着替えてるから」

「!?!」

俺は思いつきり咳き込んだ。

落ち着け、この前の八神みたいにはならない。だから大丈夫だ。数分ほど待つと、またドアの向こうから声が聞こえる。

「……もう大丈夫だよ」

「……入るぞ」

俺はドアを開けて、お盆を持って部屋に入った。そこには、パジャマに着替えた遠山がベッドに座っていた。

いつも整えている髪の毛少し乱れてて、それが変な色気を出す。見られない俺はあまり遠山の顔を見ずにベッドの近くにある小さなタンスにお盆を乗せた。

「早いからびっくりしちゃった」

「そうか？ 粥なんてこんなもんだぞ？」

「やっぱり料理上手いんだね。ソレと、さつきせき込んでたけど大丈夫？」

「むせただけだ。うつってない」

俺は粥を小皿に移す。こうして置いた方が程よく冷めて食べやすい。

すると、遠山は目を細めて俺を見てくる。

「ふーん」

「……なんだよ？」

「前にもそんなこと言ってなかった？」

「……そんなことねえよ」

俺は遠山に小皿を押し付けて部屋を出ようとする。少なくとも台所は使わせてもらったから片づけくらいはしないと。

そんな言い訳を自分の中でしていると――

「――待って」

呼び止められた。

何かに後ろから刺されたような感覚になり、思わず足を止めて振り返る。

振り返って見えた遠山は、どこか心細そそうだった。

「……なんか、一人だと、心細いっていうか……」

「熱で幻覚でも見えてるのか？ 俺は八神じゃねえよ」

「わかってるよつ。でも……この前、佐藤君を怒らせた時のことまだ、ちゃんと謝れてないし」

本人は否定してるが、熱のせいなのか割と素の遠山が出てきてしまってるように見えた。

「別に怒ってないよ」

「……本当？」

「あーホントだ、ホント」

「そっか、よかった」

念を押して言うと、遠山はようやく安心したのか、ため息を出す。

「まあ、俺もキツク言い過ぎちまったのは、悪かったとは思ってるし」

「そっか、青葉ちゃんや宮本さんも言ってたけど佐藤君ってホント良い人だよね」

「……」

何か騒がしいと思ったら、アイツラ、遠山に何か吹き込んだ。涼風には明日クリスマスツリーをプレゼントしてやろう。

宮本さんにはハリセンでいいか。

「佐藤君？　なんか凄く怖い顔になってるよ」

「なんでもないからサツサと食え……いや、ゆっくりでいい」

流石に急かすわけにもいなくなつたので、途中で言い直した。

「わかった。それじゃいただきます」

そういうと、遠山はようやくお粥を口に運び始める。

風邪で弱ってるのもあるのか、やはり少しゆっくり食べている。

「……おいしいよ、ありがとう」

「そりやどうも」

「……佐藤君、タバコ吸ったら？」

「……なんで？」

「なんか居心地悪そうだし、ソワソワしてるし」

そりやするだろうさ。

そもそも異性の部屋で異性の看病したら心が休まるわけがないだろう。

「病人の前で吸えるかよ」

「いいよ。巻き込んだんじやったのは私だし」

「……」

「……」

遠山の目が俺を見続ける。

余計に居心地が悪くなるのを感じた俺は負けを認めるような舌打ちをする。

「……チツ」

俺は部屋の窓を少し開けて、ポケットからタバコとライター、携帯灰皿を取り出す。

くわえたタバコに火を付け、煙を肺の中に押し込む。

吐くときは遠山のところに煙が行かないように窓に向かって吐く。タバコは窓に出して。

「これでいいか？」

「うん」

ああくそ。本来なら俺が気を使わなくちゃいけないのになんで俺は逆に気を使わさせてんだよ。

と、胸の中で複雑な感情が渦巻く。それでも、遠山が見せた笑顔に、少しだけ穏やかな気持ちになる。

まあ、悪くないか。

遠山が粥を食べ終えて、俺は土鍋と小皿を洗う。使った台所もできる限りきれいに片付ける。

「さて、そろそろ帰るか」

何も言わずに帰るわけにもいかず、もう一度遠山の部屋に入って様子を見に行く。

ドアの前で三回ノックするが、返事はない。

開けてみると、遠山もう寝ていた。

電気はまだついてるのに、初めてのADで日頃の疲れが堪っていたのだろう。遠山をよく見ると、遠山の掛け布団は少し乱れて、肩がはみ出てる。

このままじゃまた体が冷えてしまう。

俺は黙って布団をかけ直す。その時、遠山の顔がものすごく近くなる。

「……」

近くに来るとスウスウと寝息を立てているのがわかる。

随分熟睡してるものだ。

しかし、これは一つ困ったことができた。それはこの部屋の施錠についてだ。

流石に病人のいる部屋を鍵をかけずに出るわけにはいかない。

このマンションはオートロックではない。つまり、鍵をかけるには内側からか、合い鍵がいる。

合い鍵を勝手に持ち出すなんて俺にはできない。

「ま、せつかくだし、起きるまでいてやるか」

ちよつとした休日だと割り切って、今日は遠山が起きるまで待つことにしよう。

「……」

俺はちよつと悪戯したくなった。

ポケットのなかにあるさつき吸っていたタバコの箱、それをそつと遠山のおでこの上に置く。

……起きない。

「……佐藤君」

「!？」

起こしたか!?

とは、慌てるが寝言のようだ。コイツ、いつもコウちゃんコウちゃん言ってる癖にどんな夢見てるんだ。

すると、遠山は少し笑っていた。

「……………コウちゃん」

「……」

「……コウちゃんはコウちゃん、コウちゃんをコウちゃんとコウちゃんにコウちゃんはコウちゃん——」

「……」

頑張れ、夢の中の俺……。

ピアノが弾けなくなる病気

ひふみ視点

『ピピピピッ！　ピピピピッ！　ピピピピッ！』

「……んんっ」

目覚ましの音で起きた私のまぶたはまだ重かった。最近疲れが溜まり過ぎてるのか、よく眠れなかった。

今日は土曜日だけどいつまでも寝てるわけにはいかない。あまり寝れなかったせいか食欲が湧かなかったので宗次郎に餌をあげたあと、身支度を終えてからそのまま家を出る。

あくびが出そうになるのを堪えながら電車に揺られて会社に向かう。

電車の中はイヤホンをして音楽を聞く。純君の曲じゃなくて普段聞いているアニソン。電車の中は少し騒がしいので彼の音色が上手く聞こえないから聞かないことにしてる。

会社の近くの駅まで電車で来ると、駅前のドーナツ屋さんが全品百円セールをやっていた。

まだ仕事が始まる時間まで時間がある、皆も来るだろうし。

行列に並んでドーナツを一箱分買ってから、会社のビルに入る。まだキャラ班の皆は誰も来ていない。

とりあえずゆんちゃんがいっもお茶会のおきに使ってるテーブルを使わせてもらって、そこにドーナツの箱を置く。置き手紙も忘れずに。

パソコンの電源を入れて仕事の準備をしていると、こっちに向かう足音が聞こえた。

青葉ちゃんかな？　と、振り返ってみるとキャラ班にやってきたのは信じられない格好をした青葉ちゃんだった。

「ひ、ひふみせんぱい」

「青葉ちゃん!？」

泣きながらキャラ班に入ってきた青葉ちゃんの髪が凄いことになってた。髪の毛が逆立って、木みたいになってる。飾りもたたくさ

んこしらえてあって、てっぺんにはキラキラした星が。

クリスマスツリー？

まだ夏なのに？

「……どうしたの？」

「佐藤さんが……佐藤さんが……」

話を聞くと、この前風邪を引いたりりんさんを送っていった佐藤さんが、なぜか青葉ちゃんの髪を弄ってきたみたい。

前はパイナップルとヤシの木だったような……。

「佐藤！ ハリセンは痛い！ 誤解だ！ 遠山に色々相談を受けただけで——ぎゃあああああああ！」

壁で隠れて見えないけど、奥からは敦さんの悲鳴が聞こえる。

敦さん、佐藤君に何やったの……？

「青葉ちゃん、とりあえず……髪、直してあげようか？」

「ぐすつ……お願いします」

青葉ちゃんの髪を直してあげるため、一度青葉ちゃんの椅子に青葉ちゃんを座らせようとするがあるとあるものに気付く。ソレはドーナツの箱。

青葉ちゃんも買って来ちゃったんだ。

「あ、ドーナツ被っちゃいましたね」

「うん……」

「八神さんと敦さんも買って来ちゃったのでどうしましょう？ 他
の班のところに配ります？」

「そうした方が……いいかも」

青葉ちゃんの髪を元のツイントールに戻しながら青葉ちゃんと話
す。青葉ちゃんの髪が凄く直しづらい。これ、整髪料使っていない？

それでも何とか、元の形に戻せた。佐藤君、器用だな……。

「ありがとうございます、ひふみ先輩」

「どう……いたしました」

「青葉く似合ってたね、クリスマスツリー」

「八神さんは黙っててくださいっ！」

笑いながらキャラ班に入ってきたコウちゃんに青葉ちゃんが怒っ

ていると、頭にコレでもかかってほどたんこぶを作った敦さんが足をふらつかせながら帰ってきた。ドーナツの箱を持って。コウちゃんも持ってるからコレで四個になる。

「そうでした、これどうしましょう？ 八神さんと敦さんも買って来ちゃいましたし」

「4箱も……まあ企画やプログラマーに配るんだなこれは」

「土日じゃなければねねっちも食べれたのに……」

「時給だと、土日来たり残業されると給料余計に持つてかれちゃうんだよ。下手すりゃ正社員より高くなる」

「ま、まさか、正社員ってお給料を安くするための法の抜け穴……？」

「お前のような勘のいいガキは嫌いだ」

青葉ちゃんと話してる敦さんは凄い顔で言う。どこかで見たことあるような顔とセリフだなと思う。

そして青葉ちゃんは写メで幼なじみのねねちゃんにメシテロしてる。

「じゃあ企画に一箱渡してくるわ。青葉はアハゴンにでも渡しといて」

「はい」

コウちゃんが企画のほうにドーナツの箱を持って行ってから少し経つと、青葉ちゃんは携帯の画面を見て笑っている。

「？」

それを見ると、青葉ちゃんと目があってビクツとしてしまう。

青葉ちゃん、もしかして……。

急に不安になる。

「ああ、ねねっちが悔しがったので少し可笑しかっただけですよ」

「あ、青葉ちゃんって……仲良くなると……いじわるに……なっちゃうほう？」

「へ……？」

勇気を出して聞いてみると、青葉ちゃんはキョトンとした顔をする。

そして私の言ってることの意味がわかったあとと弁明する。

「や、やだなー。そんなことない……と思います……たぶんねねっただけです」

「ふ、ふーん……」

青葉ちゃんとは仲良くしたい。でも、仲良くなりすぎると、いじわるな青葉ちゃんに、なっちゃうかも知れない……。

私の頭の中でいじわるな青葉ちゃんが私を笑ってくる。

『ふふっ、またひふみ先輩ビクビクしてる。おもしろいです』

小悪魔みたいに笑う青葉ちゃんを想像して、少し怖くなる。

うろうう……どうしよう。

「じゃあ私はうみこさんに一箱持って行きますね」

「あ……」

そうしてるうちに青葉ちゃんはキャラ班を出ようとする。

私もついていこうと声を出そうとすると――

「あ、滝本。もう一箱、サウンドのとこ持ってっくれ」

「!？」

普段あまり話しかけてこない敦さんが、私に話しかけてきた。

今まではこんなことなかったのに。

――っていうか、サウンドって純君のいるところだよね!？」

「涼風っ、早く行け!」

「は、はいっ!」

「!？」

急に敦さんに催促された青葉ちゃんはすぐにキャラ班を出て行ってしまう。

そんな……私一人で他の部署になんていけないよ。

青葉ちゃんの姿が見えなくなるのを見るだけしかできなかった私は敦さんのいるほうを見ると、敦さんもいなくなってる。

敦さんまで……。

どうしよう。はじめちゃんとゆんちゃんが来るまで待つ？

ダメ、多分二人も純君のところに行くように催促してくると思う。

「……」

私は自分のパソコンのサーバーを確認する。そこに『増田純』という名前を探す。そこにはログインのアイコンが表示されている。

土曜日なのに純君も来てるんだ。

……でも忙しいみたいだし、いきなり来たら迷惑だよな。

純君を困らせたくないし、せつかく仲良くなったのに嫌われたくない。

純君の曲を勝手に聞いていることの罪悪感があるせいで変に避けようとしてしまう自分がいる。

「ぶっしょよう……」

ふと、純君の言葉が頭をよぎる。

——またお話しませんか？

あれ以来、SNSでしか話してない。もしかしたら、純君も私を気を遣ってむこうでしか話さないようにしてくれてるのかな？

「……」

——行こう。

いつまでも逃げてちゃだめだ。

覚悟を決めた私は、ドーナツの箱を一つ持ち出してキャラ班を出る。

サウンドチームの場所は、前に音楽プレイヤーを返そうとしたときに一度見つけたから知ってる。

あの時は結局そのまま帰っちゃったけど。

サウンドチームとグラフィックチームは部屋そのものが違うから、夜はいつも敦さんはそこで作業してるみたい。

私は、会議室の通路を抜けて、サウンドチームの部屋に向かう。音を使うところだからか、他の部署とは少し離れた造りになっている。

サウンドチームのドアの前まで来て、一度深呼吸してからドアをノックしようとすると、突然ドアがガチャリと開いた。

「!？」

「た、滝本さん？」

ドアの向こうに白い髪の男の人が立っていた。純君だ。

だけど私は急に現れたのでびっくりしてしまった。

「あ……えつと……その……」

思わず口ごもってしまつて何も言えなくなる。どうしよう。このままじゃ勝手に他の部署に入つてきた変な人だと思われる。

「ん？ それ、ドーナツですか？」

私の手にある箱を見て純君は尋ねてきた。それでも私はまだ落ち着くことができなくて、満足に喋れない。

「これはね……その……えつと……」

「た、滝本さん、一度深呼吸しましょう。その方がちゃんと話せますので」

「う……うん」

私は頷いてから、できるだけゆっくり呼吸することを試みる。

えつと、こんな時つてどんな感じにするんだっけ？

「ひっ……ひっ……ふー……ひっ……ひっ……ふー……」

「滝本さん、それちよつと違う気がします」

純君に変に苦笑いされるけど、なんとか落ち着くことができた。

「……落ち着きました？」

「うん……ありがと……その、よかつたら……これ」

私はドーナツの箱の底を持ち直して、純君に差し出す。すると、純君は少し遠慮しがちに受け取ってくれる。

「あ、ありがとうございます。でも、いいんですか？」

「……うん、キャラ班の皆が……いっぱい、買って来ちやつた……から」

「そうなんですか……。すみませんわざわざ、滝本さんも無理して」
純君は私と話すのが苦手なのを知ってくれてるから、私がサウンドチームに来たことを心配してくれた。それを聞いて少し安心する。

やっぱり純君は優しい人だ。

「先輩に持ってきてもらつてもよかつたんですよ？」

「……それが、敦さん、私が行けつて言つてから……どこかに行つちやつて」

「あの人は……」

純君も何ともいえない顔をしてる。

敦さんはいい人だとは思うけど、こういうときにすぐにどこかに行っちゃう。純君もそれを知ってるのかな。

「でも、ありがとうございます。最近少し働き詰めてて、朝ご飯も食べれてなかったの」

「……」

笑ってくれた純君を見て安心する。よかった。

迷惑がられたり、変な人と思われなくて。

そう思ってた張りつめていた緊張がほどけた瞬間だった。ぐうぐ。

と、どこからか変な音が聞こえた。割と、いやものすごく近くから。

「……」

「……」

「……!?!」

音が出たところがどこかわかった途端、私の体温がものすごく熱くなるのを感じる。

うそ、こんな時にお腹が鳴るなんて……! 今朝はあんまり食欲なかったのに……! 恥ずかしくてその場から逃げたくなるけど、純君は少しテレた顔で

尋ねてきた。

「あの……よかったら食べます?」

「え……? でも純君の仕事、じゃましちゃうし」

私も仕事をしなくちゃいけない。

だからいつまでもここに居るわけにはいかない。せつかく誘ってくれた純君には申し訳ないけど断らないと。

「?」

突然私のポケットの中にある携帯が小さく鳴る。仕事用でキャラ班の皆と使ってるSNSの着信音だ。

純君に少し謝ってから携帯を見ると、送り主はコウちゃんだった。書かれてる内容を見て私は息をのむ。

コウ@働きたくない 『事情はわかったからもう少しそっちいてい

いよ。明日は日曜日だし、その分昼休みと残業は覚悟してね』

コウちゃん！

なんでこんなことするの!?

きつと、この前のお茶会のせいだ。青葉ちゃん達と休日の話をしたとき、コウちゃんにも純君のことを聞かれちゃったし。

このせいで、このまま何もせずにキャラ班に帰ることができなくなっちゃった。

そもそも、帰ったらどの道コウちゃん達にからかわれそうな気がする。

「……純君」

「……はい?」

後に引けなくなった私は、覚悟を決めて純君に尋ねてみる。

「……その、じゃまじゃない?」

「と、とんでもないですよ。それに今日のここは僕以外いませんし」

「……そうなんだ」

それは、目撃者が来ないことだから安心できるのか、この雰囲気は何とかしてくれる人が来ないから不安なのか、よくわからない気持ちになる。

でも相手が純君で本当によかった。

「それにいつまでも立ち話もなんですし、入ります?」

「……うん」

純君に案内されて、サウンドの部屋の中に入る。そこは意外にも片付いた部屋だった。というか、パソコンと学校にあつた放送室に似た音響設備の機器、それと少し大きなスピーカーが置いてある質素な場所だった。

サウンドというから、もつと楽器とかたくさんあると思っていた。

「どうぞ、座ってください」

純君は部屋の中から椅子を2つ、自分のデスクの近くに置いてくれる。ドーナツの箱も、パソコンの電源がついた純君のデスクに置いた。

とりあえず私は純君が並べてくれた椅子に座る。お礼を言うことを忘れずに。

「あ……ありがとう」

「それじゃあ飲み物持ってきてますけど、何飲みます？　僕はコーヒーにしますけど」

「それじゃあ……純君のと同じで」

普段キャラ班の皆と飲んでるお茶はゆんちゃんやんが淹れてくれたこともあって、こういうときに何を頼んでいいかわからなかった私は、とりあえず純君と同じのを頼むことにした。

純君はソレを聞くと、すぐにサウンドの部屋を後にした。

「……」

やっぱり私は、そういう……肉食系っていうのが苦手だから、純君みたいな人の方が話しやすいからいい。

って私、何考えてるんだろ……。

こうしていると、どうしても純君のことが気になって仕方がなくなる。最近特に顕著だ。

その上、仕事をしてるときも、家でくつろいでるときも、少しでも時間があれば今みたいに彼のことを考えてしまう。

さつきだって、純君と目があつたときどうにかなりそうだった。いつも人と話す時の緊張とは違って……なんなんだろうこの気持ち。

いつもの緊張よりも、胸の動悸が激しいはずなのになぜか不快感を感じないというか、むしろ安心すら覚える。

変だな……。

そんなことを考えながら手持ちぶさたになった私は、サウンドチームの部屋を見渡して見ることにした。

そこは、狭い部屋だけど最低限の防音設備の施されてるようでありよつとしたスタジオみたい。

よく見たら部屋の隅にピアノがある。漫画とか映画で見る本格的なものじゃなくて、少し小さなもの。純君が使ってるのかな？

「……」

ふと、電源が入ったままの純君のパソコンに目がいく。

パソコン画面のデスクトップにある二つのアイコンが目に入る。ファイルのアイコンだ。下の表記を見ると、『フェアリーズストーリー3』と、『試作品』と書かれている。

興味が湧いた私は、右手をマウスに置いてカーソルを動かそうとする。

その瞬間、ドアが開く音がした。

「!?」

私は慌ててマウスから手を離して振り返ると、純君が二つのカップをお盆に置いて部屋に入ってきた。

どうしよう、勝手にパソコン触ったことバレちゃったかもしれない。

「滝本さん、どうかしました?」

「えっ……その、なんでもない……」

「?」

純君はキョトンとした顔をしている。よかった。バレてないみたい。

純君は自分のデスクの、ドーナツの箱の隣にお盆を置いてくれる。その上には二つのコーヒーの入ったカップとシュガースティックとコーヒーフレッシュユが何個か置かれていた。

「……ありがとう」

差し出されたカップを受け取って、自分が飲みやすい味になるまでシュガースティックとコーヒーフレッシュユを入れる。

「あとコレも」

純君はドーナツの箱を開けて、お店の人に入れてもらったナプキンをしたにドーナツを一つ、私の前に置いてくれる。

……どうしよう。さっきから純君にされてばかりで何もできない。このままじゃせつかく誘ってくれた純君もつまらないとおもう。

何か、何か話題とか……。

考えていると、コーヒーを飲んでる純君の顔も少し居心地が悪そうになって余計に焦る。

「あの、せっかくですしなにか一曲かけましようか?」

すると、純君はしびれを切らしたのか急に切り出してきた。

私は少し遠慮気味に尋ねてしまう。

「いいの……?」

「はい。ここ防音設備のそれなりに整ってるので、なにかリクエストあります?」

「それじゃ……」

少し私はリクエストするのを躊躇うけど、勇気を出して言うてる。

「純君の……作った曲とか……ダメ……?」

「えっ? いいんですか? 滝本さんの好きそうなアニソンもありますけど」

「うん……いい。それがいいの」

「じゃ、じゃあ、最近個人的に作ったのを」

純君は自分のパソコンのマウスのカーソルをファイルのアイコンに動かす。

ファイルの下には『試作品』と書かれてある。私が見ようとしたところだ。

クリックしてファイルが開かれるとキレイに整頓されたファイルがたくさんあった。

その中で一番手前にある新しいファイルをクリックして再生ボタンを押した。

パソコンのスピーカーからは、純の曲が響いてくる。

純君の心に響く曲は、初めて聴いたものでも間違いなく彼が作ったモノだと確信できる。

静かで落ち着いたメロディーは、不思議とさつきまでの緊張を嘘のように溶かしてくれる。

「うん……素敵な曲」

「そう、ですか」

「私、純君の曲。好き、だな」

「っ……」

褒められたからなのかどこか嬉しそうな純君の顔を見て、自分はちゃんと話せてると思えて少し自信が湧いてくる。

だけど、その曲の少し悲しい曲のような気がした。こっさり聴いている彼の曲にはたまにそういうのがある。どこか必死で、賢明に、がむしゃらに、自分の存在を誰かに訴えているような。

そういうジャンル曲つてわけじゃない。ただ、音の合間に感じる無機質な呼吸が、それを助長していた。

これも、それと同じ曲なのだ。

「次は何にします?」

しばらくしてその曲が終わると、純君はドーナツをほおぼりながら次の曲を探している。

ドーナツをほおぼってる純君を見てると、変なデジャヴを感じた。

「!」

宗次郎……!

の仲間……!

とはちよつと違う気がしたけど、食べ物を口に含んでる純君がかわいげのある動物のように見えて、撫でてみたいと言う謎の衝動に駆られてしまう。

思わず手が伸びてしまい、純君の頭に触れてしまう。

「……う」

すると、振り返ってきた純君と目が合う。

「!?!」

そこで私はハッと我に返った。

純君も驚いたみたいでその場から飛び退く。

私もすぐに謝ろとした瞬間――

「――滝本さんっ!」

突然飛び退いたはずの純君に突き飛ばされた。

たまらず数歩後ろに下がってから尻餅をついてしまう。

「熱っ……!」

顔をあげて純君を見てみると純君は苦しそうな顔をしている。

そして純君の手は濡れていた。そして真っ赤になっていた。

床を見ると逆さまになって転がっているカップと、コーヒーが飛び散っている。

ソレを見た私は、こぼれたコーヒーで純君が火傷したことに気づく。

それも私を庇って。

「純君っ……………」

「あ……………滝本さん、大丈夫ですか？」

「すぐに……………冷やさないとっ……………」

私はすぐに立ち上がって、無理に笑う純君のところに駆け寄る。とありえずドーナツのハコの中にあるナプキンで純君の手を拭く。床はあとでいい。

「そんな……………大丈夫ですよ、そこまでしなくてもっ」

「でも……………ちゃんと、しないと痕……………残るから」

「す、すみません……………」

純君の手を拭き取ったあと、私は氷が置いてあるところを考える。きつと給湯室にあるはずだ。

多分救急箱もそこにあるはず。

私は火傷してない純君の手を掴んでサウンドチームの部屋を出る。

「純君、こっち……………」

「た、滝本さん!？」

純君の上げた声で、軽いパニックになっていた私は冷静になる。

私、今純君の手を握って……………」

すぐに握ってた手を話す。冷静に考えたら男の人の体に触ったのってこれが初めてかもしれない。

「(っ)……………(っ)めん」

「いえ……………僕もなんかすみません」

気まづくなつた雰囲気のまま、わたし達は給湯室に向かった。

「……………」

「……………」

その間、さつき手を握ったことを変に意識してしまつて会話が全くない。

いきなり頭を触っちゃったこともあるし、さっきのこといい変な人と思われたかもしれない。ああ、恥ずかしい……。

給湯室についたあと、純君の手をお水と氷で冷やす。

「……ごめんね、驚かしちゃって」

「僕こそすみません、突き飛ばしちゃって。ケガとかしてませんか？」

「……うん。大丈夫だよ」

でもちゃんと薬を塗って包帯をしないと痕が残る。だけど純君は片手を火傷してるからうまく巻けそうにない。

私は薬と包帯を持って手を冷やしてる純君に声をかける。

「あの……包帯、私が巻く……よ」

そう言うと少し戸惑った顔をされるけど、純君は自分の手を見て申しわけなさそうに頼んできた。

「それじゃあ、お願いします」

恥ずかしそうに手を差しでしてくる純君を見て、自分まで恥ずかしくなる。さっき手を握ったこともちらつくし……。

でも包帯くらい落ち着けば巻ける。働く前は運動会とかは保険委員で競技には出ないようにしてたし。それくらいなら。

「……ちよつと染みるかも」

「……っ」

ちゃんと断ってから、前屈みになって純君の手に触れて薬を塗り始める。

「……!?!」

「？」

「いやっ！ 何でもないですっ！」

純君は何故か凄く慌ててるようだったけど、離すわけにもいかない。なのでそのまま薬を塗り続ける。

さっきまで水で冷やしてたからか、純君の手を通してひんやりとした感覚が私の手にも伝わってくる。

その感覚が変に心地よくて、少しドキドキする。

「……」

薬を塗ったあとは包帯を巻き始める。きつと純君はこのあとでも仕事するはずだから、あまり動かすことはよくないけど、ある程度動かしてもほどこけないようにしっかりと結ぶ。

だけど途中で視線を感じて顔を上げると純君と目が合う。それに顔も凄く近くにある。

「……………!?!」

私は急いで視線を純君の手元に戻した。男の人の顔が近くにあったせいか、さつきまでの心臓の鼓動が余計に早くなるのを感じる。

……………どうしよう。なんか変な気持ちになってきた……………。

包帯を巻かれてる純君の手も、さつきまでは冷たかったのに少し温かくなってる。

でも私が純君の頭を撫でたみたいに離れることのできないのでこの状態がしばらく続く。

「これで……………よしっ……………」

「あ……………ありがとうございます」

それでもなんとか包帯をキレイに巻き終わることができた。これならパソコンを操作するくらいならできるはずだ。

「……………でも、ちゃんと病院行った方がいいよ。痕残ったら……………大変だし……………」

「はい……………そうします……………」

「?」

純君の様子が少しおかしい。変に顔が赤くなっている。やっぱり異性の手を触るのって、男の人も緊張するのかな。

私も変な気持ちになったし……………。

携帯の時計を見ると、コウちゃんのメッセが来てから三十分くらい経ってる。

そろそろ戻らないと流石に怒られるかもしれない。

「あ……………そろそろもどらないと……………」

「そ、そうですね。すすすみませんっ変に引き留めちゃって……………」

「う……………うん」

やっぱりちよつと様子がおかしい。まるで初めてあった時みたい

に慌てる。どうしてだろう。

「あの……私、変なことしちゃった……う？」

「そろそろそんなことないですよっ。僕も黒子なんて見てないですし」

「黒子？」

「なananなんでもないですっ！　そ、それじゃあ今日はこれでっ！」

「……うん、バイバイ」

慌てて給湯室を出て行く純君を見送ってから、私もキャラ班の仕事に戻るため給湯室を出た。

そのあと、コウちゃんや青葉ちゃんたちはものすごくニヤニヤした視線を送ってくるし、今日は終電ギリギリになるかもしれない。

●

純視点

給湯室から出た僕は、サウンドチームの部屋に戻ってきてようやく一息つくことができた。

「……ふう」

真つ白になっていた頭がようやく落ち着いて、冷静になると、僕がどれだけ滝本さんを失礼な目で見てしまっていたのかという現実を見せつけられる。

せつかく滝本さんが僕を気遣って手当てしてくれたのに、その間僕はなんてことを……。

滝本さんが火傷した僕の右手に包帯を巻いてくれたとき、前屈みになった彼女の胸元に目がいつてしまった。下半身で押し上げられた二つのそれは大きく肩が露出していた服装のせいでより迫力のあるものだった。

途中で滝本さんと目があつたときは本当にどうかしそうだった。

人をあんな目で見てしまった自分を今思い返してとてつもなく軽蔑した。

ていうか、黒子って……あんなところに黒子って。確かに下着もチラッと見えたけどそっちの方に魅入ってしまった。

「はあ……」

頭の中でどれだけ言い訳しても、どれだけ自分を軽蔑しても、やってしまった事実は消えない。

どうしようもなくなった僕は情けないため息を一つつく。

まあいいや、今日はこの部屋は僕一人だからゆっくり頭を冷やそう。

気を引き締め直して自分のデスクに向かう。さつきまで滝本さんと話していたところだから、食べかけドーナツや、僕が滝本さんに驚いてこぼしてしまったコーヒーがそのままになってる。

……まずはこれを片づけないとな。

先に床にまき散らされたコーヒーを手短にあるナプキンやティッシュで拭き取って、コーヒーカップも片付ける。

さて次は……。

デスクの上に置かれている二つのドーナツを見る。食べかけだけドーナキンにくるまれてまだ清潔なそれは、僕と滝本さんが食べたもの。

朝ご飯はロクに食べていなかったから、さつきと残りを食べて仕事に入ろう。

「……」

僕はあることに気づく。

そして気づいたことにもものすごく後悔した。

「どうしようこれ……」

僕はもう一つの食べかけのドーナツを見る。滝本さんがさつきまで食べていたもの。さつきのことでも僕も滝本さんもこれのことを忘れていた。

残された滝本さんの口を付けたドーナツ。

さすがに滝本さんも仕事に戻ってるだろうし、食べかけを持って行ったって失礼なだけだし、僕が処分するしかない。

そのまま捨てる？

いや、それは流石にもつたいないというか……、でも他にどうすればいい？

僕が食べるか？

滝本さんが口を付けたモノを……？

いやいや、それは余計にまずいだろ。それって間接キスじゃないか。

恋人でも何でもない滝本さんにそんなことを勝手にするなんて失礼すぎる！

「……」

突きつけられた二つの選択を前に僕は立ちすくむ。前者の食べ物を捨てる抵抗と、後者の背徳的な誘惑が、僕に押し寄せてくる。

「……よう」

覚悟を決めた僕はドーナツを手取る。滝本さんが口を付けたそれを僕は――

――滝本さんが持ってきた箱に入れた。

「……」

保留だ。それがいい。

とりあえず目に付くと気になって仕事にならないから考えないことにしよう。

箱の中にまだ残っている新しいドーナツと取り替えて僕は仕事に戻る。

さて、少し遅れちゃったから早く取りかからないと。

新しいドーナツを頬張りながら、僕は仕事に取りかかる。

僕が今行ってるのは作曲ではなく効果音等の演出。リテイクを受けた効果音や音声の不具合の修正。

曲そのものはβ版が完成したときにすでに完成してるのでやることはそのあとに起きた不具合を修正するのだけど、これがなかなか手が掛かる。

土日も出勤しないと間に合わないほど。

それでも少しずつよくなってきている。この調子なら今日にはディレクターの葉月さんも満足のいくものがてきるだろう。

耳に当てたヘッドホンから流れてくる音と、パソコンの画面に表示された数値を頼りに音をあわせていく。

先輩からは耳に頼りすぎると言われたから少しは意識しないと。
——そうやって、ひとまず区切りのいいところまでいくことができ
た。

画面に表示されてる時計を見るともうお昼だ。

朝ご飯はドーナツだけだから何か食べにいかうか？

いや、正直食べに行く時間が惜しい。ここは買いだめしておいた非
常食で何とかしよう。

「はあ」

僕はまたため息をつく。ここ最近、何度もやってる気がする。ため
息をつく度に幸せが一つずつ逃げていくなんて聞くけど、僕の場合、
千単位で幸福を逃してる気がする。

「……」

でも、実際は不幸なことばかりじゃないんだよな。滝本さんとも知
り合いになれたし。

女性と話すのも、少しずつ上手くなってる。

それに、滝本さんは僕の作った曲を素敵だと言ってくれた。

「……」

——私、純君の曲。好き、だな

……ふと、僕の曲を聞いてくれたときに見せてくれた滝本さんの笑
顔を思い出す。

あの時、彼女がそう言ってくれたとき、胸のそこから何かがこみ上
げてくるような衝動に駆られた。

なんだろう。何か大切なものを思い出しそうな、そんな気持ちにな
る。

でもそれはまだその程度で、その思い出しそうな『何か』が一体何
なのかはわからない。

ふと僕は、部屋の隅に置かれている電子ピアノに目がいく。これは
前に勤めていた人の置き土産。

そして、それに歩み寄った僕は、ピアノを弾くときに使う椅子を持
ち出して高さを自分の座りやすい高さまで整える。

ここまでは慣れたこと、子供の頃からずっとやってきたこと。

慣れた手つきで電子ピアノの準備を整える。そして、調節した椅子に座って手を鍵盤の上に置く。右手は包帯を巻いているから添えるだけ。

……もしかしたら、滝本さんは僕のピアノの演奏を聞いてみたいって言ってくれるのかな？

僕の曲を聞いてくれた滝本さんの笑顔を思い出してそんな期待をしてしまう。

でもそれはきつと無理だ。

「……っー」

僕は左手に命令する。

ピアノの鍵盤を叩くようにと。

だけど、左手の指は動かない。

キーボードに向き合って、鍵盤に手を置いて、鍵盤を叩く意識を見せた途端に、僕の左手はまるでピンに取られたように動かなくなる。

——身体が、硬直する。

「っ……っー」

懸命に左手を動かそうとしても、鍵盤の上に置かれた左手はそれ以上動く意志を示さない。

硬直した身体は、鍵盤を叩こうと意識することをやめない限り収まらない。

……僕は鍵盤を叩く意識を辞める。

すると縛られていた身体は、嘘のように軽くなる。解放された身体から出てきたのは安堵ではない情けないため息。

ああ、やっぱり無理だった。

僕は左手を鍵盤の上から降ろす。そしてその手で自分の顔を覆う。

フォーカル・ジストニア。人によってはイップスとも言う。

それが僕が患っている病気。

ジストニアは、不随意運動、つまり、自分の意思とは関係なく、体の一部が勝手に動いてしまう状態の一種。

音楽家や手をよく使う職業の人によく発症する。

症状は人それぞれで、僕の場合は両手だけじゃなく身体全身も動かなくなる。

明確な原因も治療法も確立されていない。

これは僕が高校三年生の時に起こった。

音楽科生だった僕は、そのせいで大学推薦も取り消しになり、上京して専門学校でパソコンでの音楽を学ぶことになった。

不思議と、パソコンを操作したり、鍵盤の上でなければ思うように指は動くのだ。

だけど、楽器を弾くときだけこうなってしまう。

僕は滝本さんが巻いてくれた包帯がある右手を見る。

……なんだか、滝本さんを騙してしまったような気がする。

あの時滝本さんに聞かせた曲は本当は僕が弾いた曲じゃない。

確かに僕が作った曲ではあるけれども、それを奏でたのはあの箱であって僕じゃない。

最近のDTMは優秀で、スピーカーをちゃんとしたものにすれば、プロの演奏に匹敵する。

ただ、誰にでもできるという汎用性は、音楽の単価が下がることもある。誰にでも音楽を楽しめるといいのはいいことだとは思う。

だからこそ、僕みたい楽器を弾けなくても音楽に携わることができるのだから。

僕はすぐに切り替えて電子ピアノを片付けようとする。

こういう風に諦めて切り替えることだけは、上手くなってきた。もう七年だもんな。

「っ……」

僕の頭にかつて突きつけられたら罵詈雑言がよぎる。

あそこから追い出されて、1人でもなんとか生きてこれたけど、僕はまだなにも変わっていない。

僕の時計は、七年前から止まったままだ。

当時の悔しさはもう風化して、あるのはただ今の自分を嗤うことしかできない。

「……」

ふと右手を鍵盤に添えたとき、必然的に滝本さんが巻いてくれた包帯が目に入る。

同時に、僕の曲を聞いてくれていた時に見せた滝本さんの笑顔が頭をよぎる。

……もし、僕の演奏を聞いてくれたら、滝本さんは笑ってくれるかな？

無意識にそんなことを考えてしまう自分を情けないと思いながら、右手を動かす。

鍵盤の上に添えられたら右手は鍵盤を叩いてスピーカーからは音が流れる。

……!?

音が流れて初めて気づく。

今、鍵盤を叩けた。ピアノが弾けた。今まで指一本動かすことすらできなかったのに。

深い眠りからたたき起こされたように僕は右手を動かそうとする。

「……っー」

だけど、そこまでだった。

僕の右手はさっきの左手のときみたいに動かなくなる。

「……はあ」

諦めてまたため息をつく。

やっぱりダメだった。

そうだよな。そんな都合の良いことあるわけないよな。

「——あら、めずらしいじゃない。あなたが楽器を弾こうとするなんて」

突然声をかけられて振り返る。サウンドチームの部屋の入り口の方からだ。

そこには、ピンク色の髪をした、筋肉質でピアスをした男性？が立っていた。

「あ、花男さん。お疲れさまです」

「ええ、お互い土曜日なお疲れさま」

部屋に入ってきた人は、桜庭花男という。

『フェアリーズストーリー3』とは別のチームのディレクターで、先輩と話してるところもよく見かける。

僕も一応それなりに面識はある。

ただ、この女っぽい口調あたり、うちのディレクターの葉月さんと同様にちよつと変わった人だ。

「それで、今日はどうしました？」

この人がここに来るのはそう珍しいことじゃない。そもそも、ディレクターは現場監督だから音に関しても間接的に関わる。

花男さんはウインクしながら僕の目の前まで歩いてくる。

「ああ、今日は個人的にあなたに用があつてきたのよ」

「僕にですか？」

「ええそうよ」

「……？」

突然、花男さんの雰囲気が変わった。

「花男さん？」

「さつき給湯室で一緒にいた女の子、誰？」

「……!？」

その言葉で僕はようやく気づく。

花男さんが言っているのは滝本さんのことだ。この人の噂は聞いている。この人は葉月さんと裏で協定を結んでいて、葉月さんのチームに手を出す輩を排除しているという噂があるということ。

そして思い出す。僕と滝本さんが一緒にいるところを、葉月さんに目撃されたことを。その証拠に写真もとられたこと。

まるで蛇に睨まれたみたいだ。

背筋に冷たい汗が走り、体の体温が一気に下がるのを感じる。それは決して空調によるものではない

ただこの状況を一言で現すと、ヤバいということだ。

「詳しく聞かせてもらえるかしらっ？」

じりじりと近づいてくる花男さんは、なぜか僕よりもずっと大きく見えた。

「い、いえっ、あれは違います。これにはちゃんとした理由が——う

わああああああああああ!!」

「ふーん、そんなことがあったの」

「……はい」

僕は、滝本さんと知り合った馴れ初めを花男さんに話し終えた。

花男さんはその間、滝本さんが持ってきてくれたドーナツを食べながら相槌をうつ。

というか、花男さんが食べてるの滝本さんの食べかけだし。まあ、あれは僕には手に余るものだから処分してくれるのはありがたいのだけど。

ドーナツを飲み込んだ花男さんは尋ねてくる。

「なあに？　なんか意外っていうか、拍子抜けみたいな感じになってるわよ」

「えっと、てつきり僕を始末しに来たんじゃないかって思いました……」

「あーあれね。確かに何人かやってるけど」

「!？」

その言葉を聞いて焦る。

あの噂やつぱり本当だったんだ。ってことは今度こそ本当に……。

「あ、でも純君は大丈夫よ。始末するのは合格ラインに達してない身の程知らずだけだから」

「そ、それはどういう？」

「ほら、うちって結構男に慣れてなかったり、控えめな子いるじゃない。例えば純君が狙ってるひふみちゃんとか」

「別に狙ってたりは……」

「まあ、大半しずくちゃんの趣味で人選してるからなんだけど、それで勘違いしたりするクソヤロウ共がいるからソイツラを絞めとかないとなにやらかすかわからないよね」

「……」

今、『クソヤロウ共』のところの声のトーンがいつもの取り繕ってる口調じゃなくて男の声が聞こえたような気がしたけど、それに関しては何にも言わないでおこう。

「えっと、ちなみに、僕はどういう理由で合格ラインに」

とりあえず花男さんのいう合格ラインが僕の中では大分あやふやなので聞いてみることにした。なんで僕なんかが合格ラインなんだろう。

仮に僕と滝本さんがそういう関係になったとしても、僕があの人に釣り合うとは思えない。

「そのラインは結構あやふやなんだけどね」

僕の思った通りだった。

内心少し呆れてるけど、花男さんの話はまだ終わっていないので僕は花男さんの話に耳を傾ける。

「ルックスとか、性格とか、仕事の出来具合、あとは客観的な相性と、相手の気持ち、なりより本人がどれだけその子のことが好きかよね。そもそも、闇討ちされた程度で手を引くなら最初から手を出さなつて話よ」

また、男の声になつてる。まあ、確かにそれで引くくらいならきつと体目当てとかそういう汚い理由なんだろうな。

「ほら、純君ってひふみちゃんとおなじで控えめだし、ひふみちゃんのパースを考えてくれるでしょ？ 特にさっきのコーヒーをこぼしたときに身を挺して庇ったときのガッツが決め手ね」

「あの、いつから見てたんですか？」

給湯室のことはともかく、なんでこの部屋の中の出来事を知ってるんだこの人。

「でも、給湯室のときに逃げ出しちゃったのは少し減点ね」

「だからいつから見えてたんですか!？」

「部下の事情を把握するのはディレクターの務めの一つよ」

ドヤ顔で言ってるけど説明になっていない。そもそもこの人は僕らのチームのディレクターじゃないし。

「でもね、ちよつとおかしいところがあるのよ」

「おかしいところ？」

「ひふみちゃんがあなたに心を開きすぎてることよ。あの子、男の人といると心が休まらないとか、話しかけてこない人〓良い人って思っちゃう子だから、そもそも男の子と話そうとしたり、ましてや他のチームに1人で行くなんて余程のことじゃないわ」

「そ、そうなんですか……」

まあ、最初のは共感できるけど、話しかけてこない人〓良い人っていうのはちよつとすごいな。

気を遣って自分にかかわってこようとしないからって思ってるのかな？

「純君、あなたひふみちゃんに何かした？ 返答次第では……」

「滝本さんにそんな失礼なことできませんよっ！」

まさかこの人、僕が滝本さんを脅迫したとか考えてるんじゃないかな？

冗談じゃない。そんなこと、できるわけがない。仮に弱味みたいなのを知ったとしてもそんなことに使ったりしない。

使うとしたら僕はきつと一生自分を軽蔑する。

思わず声を荒げてしまうけど、花男さんは全く動じていない。むしろどこか嬉しそうな顔だ。

「そう、安心したわ。何か困ったことがあったらうちに来なさい。

相談くらいならのってあげる。敦君そのあたり結構雑だから」

「お、お願いします」

なんだろう。上手いこと乗せられたらのような気がする。でも闇討ちされなくてよかった。

……それにしても、なんで滝本さんは僕なんかに会いに来てくれるんだろう。何か音楽をかけましようかってリクエストを聞いたときも、アニソンとかじゃなくて僕の曲を聞きたいって言うてくれたし。

前に一度聞かせたことはあるけど、猫町のBGMしか聞いてないはずだ。それ以外に聞いたかもしれないけど、それもわずかな時間のあいだだけだ。それだけであそこまでしてくれるだろうか。

あれもDTMで作ったものだし……。

なんかそう考えると、また罪悪感湧いてくるな……。

「それにしても、私以外の女の子とは満足に話せない純君があそこまで男を見せるなんて意外だったわ」

「いや花男さんどう見ても男の人じゃ——」

「殺すぞ」

イーグルジャンプの警備室

八神視点

私には最近、少し変わった日課ができた。

それは、いつも会社に泊まるときにスカートを脱いだりすることとかじゃない。

深夜になって、今日一日気まずい思いをしたひふみんを見送った私はちよつとした荷物を持ってオフィスを出る。帰るためじゃない。そもそも、終電はさつき出たばかりだから帰れない。

真つ暗なビルの廊下の中を進んでいく。

暗くてよく見えないけど、土地勘があるから迷うこともない。

だけどころも暗いとなにか出てきそうでちよつと怖くなりそうだな。そんなところ、りんや青葉たちにはとても見られるわけにはいかないかな。

と、青葉たちのことを考えていると、もう目的地に着いた。

目の前には、『監視室』と書かれたプレートが貼り付けられている部屋がある。私はその扉を軽く叩いた。すると――

「どうぞ」

ドアの向こうから、低い、ていうか渋い声が聞こえると、私は扉を開ける。扉の向こうにいるのは、警備員の服の服に身を包んだ男性がモニター画面の前の椅子に座りながら私を待っていてくれた。

「お疲れ様です、八神さん。今日も泊まりですか？」

廃課金に疲れ切ったような三白眼の据えた目つき、ほとんど変わる事のない無表情の彼は私を確認するたび、椅子を立てて丁寧にお辞儀する。身長は佐藤よりもたかい。なにより私よりずっと年下なのに私よりしっかりしてる彼のその律儀なところは、最初は少しもどかしかったけど、最近慣れてきた。

「うん。お疲れ、ヨッシー」

あだ名で呼んであげると、少し照れくさそうになる。どうやら少し困ってるようだ。

その証拠に右手を首に当ててる。彼の癖だ。

困ったり、何か考えてたり、人と話してたりすると、こういう癖が出る。これも、彼、吉田駿輔と夜にこうして話すようになってから気づいたことだ。

強面な顔ではあるけど、年下だからか、それともこういう癖とかを見つけたからかと少し可愛く思えてくる。そういえば、青葉と同年なんだっけ？

やっぱりしっかりしてるなあと感心していると、彼がさっきまで向かい合っていたにモニター画面の手前にあるテーブルに、2と3冊ほど参考書が開かれておかれているのに気づく。

それを見ると、ちよつと意地悪したくなってしまった。

「へー、仕事中なのに勉強とかしてていいんだ〜」

「す、すみません……」

「いーよいよよ。別にこの時間帯ほとんど人いないし退屈でしょ？」

ちよつとからかってみると、冗談を真に受ける彼を見て、少し青葉に似てるなと思うところがある。

彼は浪人生で、ここの警備員の仕事をしながら受験勉強してる。

去年の冬あたりに、ひったくりから助けてもらったことがある。まさかここの警備員の仕事してるなんて……。

その強面な顔で、ひったくりも腰を抜かしてたし、私も声あげちゃったし。

そんなことがあって、私が会社に泊まる日にはこうして差し入れを持ってきてあげたりするようになった。

「それより、勉強捗ってる？」

「はい。おかげさまで」

私は彼の隣の椅子に座って持ってきた差し入れをテーブルの上に置く。

ビニール袋の中には栄養ドリンクや軽食が入っているそれを、彼は丁寧に受け取ってくれる。

「いつもすみません」

「気にしないで、うちの会社こういうのケツコー常備してるから」

「会社のものなんですか!？」

「気にしない気にしない。でももう貰っちゃったんだから勉強頑張ってよね」

「は……はい」

「ふふっ、よろしい」

「……」

困った顔をした彼が、また右手を首に当てる癖が出てたのを見て少し笑ってしまう。

すると、少し目を逸らしながら今度は私に話を振ってきた。

「八神さんは、お仕事の方は捗ってられますか？」

「私？ まーね。思ったより順調だよ。この前β版が完成したところ」

思わず『フェアリーストーリー3』の名前を出しそうになるのをこらえる。一応守秘義務があるから守らないと。

「それにしてもすごいよね。仕事しながらこんな夜中まで勉強してるなんて」

「いえ、そんなことは……」

高卒で就職した私には、まるで別の世界にも見える話だから眩しく見える。

浪人しても、働きながら受験勉強するのはやっぱり立派だと思う。

その証拠に、テーブルに置かれている参考書はとても使い込んである。開かれている部分には重要と思われる部分に蛍光ペンで色づけられている。

「ちよつと気になったんだけど、どんな問題解いてんの？」

「見てみますか？」

そう言うと、ヨッシーは参考書の一つを私に差し出してくる。

物の試しにと受けとって問題を眺める。

どうやら数学の過去問のようだ。

えーなにになに？ Xが……。

「……」

「私は無言で参考書を返す。」

「ちよつとムズくない?」

「二応、試験問題ですので」

あーそつか。私は就職したから大学受験とかあんまり考えてなかったからよくわかんなかったけど、高校のとき、受験控えてたクラスメートが言ってたな。

試験は生徒を落とすものだーって。

それを差し引いても難しすぎるような気がするの私の気のせいだろうか。

これを毎日勉強してるのか。うん。私は就職してよかったな。下手に受験なんてしたら絶対浪人してた。

「ていうか話込んで大丈夫? さっきまで勉強してたみたいだけど」

「ちよつと休憩しようと思ったたところなので」

「そつか」

でもちよつと気まずいな。まだ8月で、試験まではまだ時間はあるけど、そんな時間はあつという間だ。

余裕こいてたらすぐに命取りになる。

そう思つて、本人の邪魔をするわけにも行かず、そろそろ戻ろうかと思つたとき――

「っ……」

ヨッシーが軽くふらついた。椅子に座ってたから倒れることこそなかったけど、みたところ少し疲れたがたまつてそうだ。

「ちよつと、大丈夫?」

「あ……いえ、大丈夫です。すみません」

「大丈夫に見えないんだけど」

いつも無表情な彼も、少し顔を歪めている。顔色もあまり良くないように見える。

「なんか働き詰めすぎてない?」

「……実は、他の方がぎっくり腰になってしまつて自分しか入れる人がいなくて」

「それってもしかして24時間ってこと?!」

「はい」

「ダメじゃんそんなの。勉強にも支障でるじゃん!」

「す……すみません」

申しわけなさそうにしてる彼を見て余計に見てられなくなる。

「もう今日は休んだ方がいいよ」

「ですが……」

「ダメっ。頑張るのはいいけど、体壊したら元も子もないでしょ?」

ヨッシーに詰め寄って説得する。無理するのはダメだ。頑張るのはいいことだけど頑張りすぎるのは駄目だ。

「……すみません」

「謝るのも禁止。ほら、早く寝なさい」

休憩室を指差して休むように促す。それでも彼はまだバツが悪そうにしている。

まだ、押しが足りないみたいだ。不器用な彼は、自分を許すことができないんだろう。ならこれでどうだ。

「ヨッシーがちゃんと寝るまで、私ここで見てるから」

「それだと八神さんが休めないんじゃない」

「私は明日日曜日だしーの。それに、休ませたかったらほら、さっさと寝るー!」

「……」

「……」

しばらく見つめ合うと、ヨッシーはようやく観念したのか、諦めたような顔で椅子を立つ。

「それではお言葉に甘えて……」

「うん。よろしい」

それを聞いて安心する。

ヨッシーは休憩室に入っていく。当然私も着いていく。

「えっと……着いてくるんですか?」

「だから言ったでしょ、寝るまでいるって」

寝たふりして、私が帰ったときにまた無理されたら意味がない。ちゃんと休むのも仕事のうちだ。それに、勉強もあるんだから休めるときにはちゃんと休まない。

私は休憩室の椅子に座って、ヨッシーが布団でちゃんと寝るまで動かない。

ヨッシーも本当に降参のようで、しぶしぶ休憩室のすみにある畳の上には布団を敷く。

「それでは……おやすみなさい」

「うん、おやすみ」

そう言うと布団に潜り込んで目を閉じる。でもまだちゃんと寝てないだろうからもう少しいるつもりだ。

「……」

目をつむっているヨッシーを見ると、私も少し眠くなってくる。

あくびが出そうになるけど、悟られないためになんとか押し殺す。マスターアップも近いから、残業することよりもより多くなったからか、私も少し疲れが溜まつてるみたいだ。

でもダメだ。明日は日曜日だから帰ったらゆっくり休める。昼間も寝てたらりんが文句言ってくるだろうけど、今はそんなことはない。

私が寝なさいって言ったのに、その前に私が寝たら意味がない。なんとか堪えないと……。

と、なんとか耐えようするけど、睡魔は私の想像以上に強かった。瞼が、どんどん重くなる。

耐えなきゃと思えば思うほど、睡魔は私の思考を蝕んでいった。

あ……もう……ダメ……。

私の視界が、真っ暗になった。



……あれ？ 私何してたっけ？

意識がぼうつとして考えが纏まらない。まどろみの中、つぎはぎの

記憶をなんとかつなぎ合わせる。

確か、ヨッシーを寝るのを見守ってたような……。

そこまで考えが纏まると、体がなんだか柔らかいものに包まれていくような感触がするのに気づく。

さわり慣れた感触だ。叶うなら一日中触っていたくなるそれは、布団だろうか。

「ん……」

重い瞼をこじ開けながら体を起こす。

ぼやけた視界をなんとか広げて周囲を見渡すと、そこは私がいつも寝泊まりしてるオフィスの中じやない。

監視室の隣にある休憩室だ。

そして自分が寝ているところはヨッシーが寝ているはずだった畳の上。

そこでハツとする。

なんで私がここで寝てるんだ?!

布団から飛び出た私は慌てて監視室に入る。そこには、モニター画面に向き合っていたヨッシーがこつちに振り返る。

「あ、おはようございます八神さん。疲れはとれましたか?」

「……なんでヨッシーの方が起きてんの?」

私は目を細めてヨッシーを問いたです。

少なくとも安めと言ったのは私だ。なのに私が寝てるのはどう考えてもおかしい。

「八神さん、私が布団に入ったあとすぐにお休みになられたので、椅子のままだと体によくないので」

「それで私を布団で寝させたわけ?」

不満げに私は返す。

私は大丈夫だって言ったのに、自分を休めずに私を休ませたら意味がない。畳は一つしかないし、机やソファで寝ても疲れなんか余計に溜まる決まってる。

ヨッシーも私が機嫌が悪いのを見て何か気付いたように慌てる。

「……あ、いえ! 布団は洗濯したばかりのものにしたので——」

「もー！ そーじやなーい！！」

俺はお前の…… 前編

佐藤視点

「佐藤君！」

「？」

朝、会社に入った途端だった。

オフィスの奥から遠山がなにやら慌ててこちらに走ってくる。すごい顔だ。何かに怯えているような。

「佐藤君！ 助けて！ む、虫が！」

「虫？ お前、そんなもん怖いのか？」

「もー！ 普通、女の子は虫が怖いのか！」

「普通の女……」

それは、同僚のパンツを偶然みただけの先輩を半殺しにしたりするような奴を普通の女とカテゴリーしていいものなのか？

などと物思いにふけていると、遠山は俺の後ろに回り込んで背中を押ししてくる。

「佐藤君……なんとかして」

「虫つつつたって、ハエとかそんなもんだろ？ それともゴキ——」

「やめてえ!!」

遠山の悲鳴に、若干胃がキリキリしはじめるが、なんとかこらえる。背中にしがみついている遠山の手は本当に震えている。

俺はちよūdど近くにあった雑誌を丸めて遠山のいう場所まで歩く。

まあ、虫くらいなら多少驚くことはあっても怖くはない。

どこだ？ と、とりあえずオフィスの回りを見渡していると、目に入ったのは虫ではなく、八神だった。

「ん〜どうしたの朝から大声だして〜」

まぶたをこすりながらこっちに向かってくる。コイツまた泊まっていたな。しかもまたスカート脱いでやがる。八神は薄手の三角の布を丸出しにしてウトウトとしている。

前にも一回キレたのにいつまでたってもやめやしない。もはやコイツのこの格好に慣れてきちゃったよ。

「あ……コウちゃん。む、虫が……」

「虫……？」

八神の隣にある壁を見ると、そこには小さな蜘蛛が一匹。やっぱり大したことないようだ。

そう思っているうちに――

「ふん！」

八神はなぜか手元に持っていた仕事の資料をまとめているボードでその蜘蛛を潰した。

「コウちゃん……っ」

なぜか遠山も感激している。

いくらなんでも大袈裟すぎるだろ。ゴキブリなら別にわからなくもないが。

「……って！ コウちゃんまたスカート脱いでる！ 佐藤君もいるんだから早く着替えなさい！」

「って！ 佐藤！ こっち見んなあ!!」

「あほくさ……」

いつもの調子に戻った遠山は八神に駆け寄っていく。八神に至っては慌てて下半身を隠しながらブチギレるし。

いやそれは脱いでたお前が悪いだろ。

相手にしてられなくなった俺はとりあえずその場を離れて自分の持ち場に向かうことにした。

「あら佐藤君、おはよー」

俺のデスクに行く途中にも虫がいた。けっこうデカイ。長身で筋肉質、ピアスをつけた女口調のオスの虫が。

「残念だったわねー佐藤君。また、コウちゃんにりんちゃんの手、持ってかれちゃったわね」

「……」

「痛っ！」

俺は丸めた雑誌を桜庭花男という虫に、無言で殴りつけた。

「もーひどいわー佐藤君」

「なにしてんっすか？」

「たまたま通りかかっただけよ♥」

たまたま通りかかっただけで、さっきの騒動の全貌を、話を聞かずに把握するのは不可能な気がするのだが、うちの会社のディレクターはたいていそういうヤツばかりなので今更気にもならない。

殴つてもピンピンしてる花男さんは、俺の後ろをブンブンと羽音をたてるようについてくる。

これもいつものことだから気にしない。

どうせ就業時間が始まればいなくなる。

引き続き自分の持ち場に向かおうとすると、何か小さな物にぶつかった。

「ひゃっ……」

下を見るとクリーム色の髪をした女子が目をぐるぐると回している。

俺はソイツに軽く謝った。

「ああ、すまん桜」

「ううゝ痛い」

確かコイツは桜ねね。涼風の幼なじみなんだよな。最近、デバッグのアルバイトに来ているのだが、デバッグなのになんで開発ブースうろついている。そろそろ就業時間だ。

暢気にしてるとうみこにシメられるぞ。

「っ……」

すこし心配していると、桜は俺を見上げて何か考えている。気になったので聞いてみることにした。

「どうした?」

「サトーさんって背が高いなーって思ってた」

ああ、なんだそんなことか。

コイツの身長、150cmもない気がするからやはり思うところがあ
るのだろう。

羨ましそうに見ている桜を見ると、さっきのストレスからか謎
の嗜虐的な衝動にかられる。

どうやら、この衝動は抑えられそうにない。

「手っ取り早くデカくしてやろうか？」

「え?! ホント!」

俺は桜の頭を掴んだ。

そして――

「――ほらよ。デッカくなった」

「……………」

遠山と少し長いぐらいの長さの髪は、見事なソフトクリームに変わった。

これでざつと150cm強はある。

すごいぞ。150cm代を超えたな。涼風よりもデカイぞ。

「クワツ……………」

からかわれたのが余程気に入らなかったのか、絶妙に怒った顔で俺を睨みあげてくる。

「落ち着け桜。怒ると細胞が死んで背が伸びなくなるぞ?」

「そうなの?」

「ああ、俺みたいに、背の高いやつは大体落ち着いてるだろ。あれはな、余計な細胞を無駄遣いしないからだ。だからお前も背が低いくらいで怒ったりするな」

「へー! サトーさんすごいね!」

ダメだ、笑うな。堪えるんだ。

適当なことを鵜呑みにしている桜を見下ろす俺は、胃がなぜかスツとするのを感じる。

これだから桜や涼風をいじめるのはやめられない。

「そういうことだから、これからも精進しろよ」

「がんばってね。ねねちゃん」

「うん! 私ががんばる!」

なにをどうがんばるのかは知らないが、そんな桜と別れて、引き続き自分の持ち場へ向かう。

「佐藤君、女の子の扱い上手ね。やっぱりできる男はこうでなくちや」

まだ花男さんについてきてるが。

「なんで、りんちゃんはうまく扱えないのかしら？」

「……花男さん、桜サイズに縮むまで頭殴りますよ」

またこの人は余計なことを言う。しかし、さっきの桜を見て少し思いついた。というか、八神のプリンを勝手に食べたの多分桜だろう。

「つたく、桜も桜ですけど、八神もどうにかありませんかね？ あれは、言っても全然聞かないし」

仕事をほっぽり出してはしゃぐ桜に、会社でスカートを脱ぐ八神。男性社員としてはこれ以上あまりトラブルを起こす人間が集まって欲しくないのだが。

「りんちゃんもりんちゃん、コウちゃんには甘いし」

「仕事できるからタチが悪いし」

「仕事ができる上に、ずっと二人でイチヤイチャしてるし。ホントに、コウちゃんさえいなければ、りんちゃんは絶対、佐藤君のモノになる」の「い……」

「つ!!」

余計なことを言う花男さんの襟をつかんで首を絞める。本当に黙ってくれこの人は。

● 青葉視点

今日、またねねつちが社内のごく勝手に飛び出しちゃって探してた。なぜか髪の毛がソフトクリームの形になってた。

多分佐藤さんになにかされたんだろうけど、矛先が私に向かなかつたから少しホッとしてる。

……してるけど。

私は横目で見ている。

佐藤さんとりんさんの会話を。

「ねえ聞いて佐藤君！ コウちゃんったらまたスカート脱いで寝たのよ！ 何度言っても直してくれないのー！」

「そうか」

「女の子なんだから、もっとちゃんと女の子らしくしてほしいわ！」

佐藤君もそう思うわよね？」

「そうだな」

「それでね、コウちゃんが——コウちゃんで——コウちゃんを——コウちゃんは——」

どれもこれも、りんさんが一方的に話してる。しかも、話の内容は全部八神さんのことだ。

佐藤君も適度に相槌を打って会話をなんとか成立させてる。

すごい……いや、なんで感心してるの！

佐藤さん、こうしていつも好きな人のりんさんに、りんさんの好きな八神さんの話をずっと聞いている。それがだいぶ見慣れてくるようになってきた。

でもこの話が終わったあと、佐藤さんに出くわしたら今度は私がねねつちと同じ目に……。

かつて、佐藤さんに受けた八つ当たりを思い出して少しだけ寒気がする。

「佐藤さん……、またりんさんの愚痴聞ってる。よく毎回我慢できますね」

「——甘いねえ涼風君！」

「ひゃっ!?!」

突然声をかけられて振り返る。

後ろには、メガネをかけたウェーブがかった髪の女性が立っていた。とてもキラキラした顔で。

私はこの人を知っている。

葉月しずくさん。

『フェアリーズストーリー3』のディレクターで、私はこの会社の面接を受けたときに一度会って話している。

ちよつと変わった人だけど、入社したあとも何度か離して、飼いや猫のしずくちゃんとも仲良くなれた。

でも、敦さんはこの人がどこか苦手みたい。

そんな葉月さんは、メガネを光らせてどこかとても楽しそうな顔で言ってくる。

「女の子はね、好きな人の話をしてるときが、一番キレイなのさ」
「ど、どういうことですか?」

「見たまえ! 遠山君のあの幸せそうな顔を!」

言われるがまま、佐藤さんとりんさんの方に視線を向けなおして、改めて二人を観察していると、愚痴を話しているはずのりんさんはとても幸せそうな顔をしている。

多分本人も気づいてないくらい夢中に話している。

やっぱりりんさんってキレイな人だなあと想っていると、今度は佐藤さんに目がいく。

「……」

なんだろう。複雑すぎてよくわからない顔してる。

葉月さん曰わく、一番キレイな顔をしてるのに、この顔をしているときがまさかこの状況だなんて。

「おお……幸せと不幸せが同時に!」

切ない!

切なすぎます!

あと葉月さんもそんな楽しそうな顔しないでください! 佐藤さんが可哀想すぎます!

「ところで、涼風君はどっち派かね?」

「どっち派?」

「佐藤君と遠山君、そして八神の関係についてだよ」

「も、もしかして社内に広まってるんですか!」

「そうだね。察しのいい人はもう何人か気付いてるよ。それで、ぜひ涼風君には我らが『光臨原理主義派』に――」

「――そい!」

「あたっ!」

詰め寄ってきた葉月さんが突然頭を抱えてうずくまったと思ったら、敦さんが仕事の資料をまとめた書類で葉月さんの頭を叩いていた。

「痛いではないか敦君!」

「一方的な勧誘は鼎立協定の違反だぞ」

「てい……りっ?」

聞き慣れない単語に呆気にとられてしまう。それに気付いてくれた敦さんは葉月さんとの言い争いを注視しては私の方を向いてくれる。

「ああ、鼎立つてのは、3つの勢力が拮抗してる状態のことだよ」

「3つもあるんですか!？」

なんで八神さんたちの関係で3つも勢力みたいなのができるの!?

ドラマとかで見たことあるけど、やっぱり会社の中にも派閥争いみたいなのってあるんだ。

と、少し現実味のない話が出てきたので少しだけ感心していると今度は葉月さんが続けた。

「私が筆頭としている遠山君と八神君の関係を推す『光臨原理主義派』と別チームのディレクターの花ちゃんが率いている佐藤君をいじる……じゃなかった、応援する『シユガー党』の2つが、『フェアリーズストーリー』が完成する頃にはできてたんだ」

「それって実質七年も続いているんですか!？」

「というか、シユガー党って、どういう意味？」

シユガー……砂糖……佐藤!？」

なんて安直な。

「それで社内が少し荒れてね。それで敦君が第三勢力として『楽にしてやれ派』を結成したんだよ。その時に私たちの間で結ばれたのが鼎立協定だ」

「……」

ドヤ顔してる葉月さんに、もうついていけず少し呆れた顔をしてしまふ。

この会社、最初の頃から大分変わってると思ってたけどほんとに変だ。

ふと佐藤さんたちの方に視線を送ると、そこにはもうりんさんはいなかった。

さすがに仕事に戻ったのかな？

私たちも話し込んでないで早く仕事に戻らないと、と思つてた矢先、りんさんはすぐに見つけることができた。

りんさんは……

「りんきーん」

「あ、ねねちゃん。もう、まだ就業時間だからうみこさんに怒られるわよ」

「うう……ごめんなさい」

ねねつちと話していた。

うみこさんみたいに厳しく怒るのではないけど、りんさんの優しい注意でも、ねねつちはちゃんと反省してるみたい。

それに、私たちもそうだから早く仕事に戻らないと。

だけど、なんだかりんさんとねねつちの話が気になつてのぞいてしまふ。なぜか敦さんも葉月さんも一緒だ。

「サトーさんと何話してたんですか？」

「話してたつて言うか……ちよつと愚痴を聞いてもらつてたつていうか……」

なぜかりんさんは楽しそうだ。愚痴なのに……どれだけ八神さんのこと好きなんですか。

「それいいんですか？」

するとねねつちはまた無神経なことを聞いてくる。もうねねつちだったら、またそうやってる。子供の頃からどこかぬけてるから今まで苦労したよホント……。

でもりんさんも少し反省してるようだ。

「そ、そうよね。佐藤君にも、好きな人いるのに」

「サトーさん、りんさんのこと好きなのに」

「……………え？」

「私、サトーさんのこと嫌いですけど可哀想ですよ」

「え……そ、そんなこと……」

「だって明らかにりんさんに対してだけやけに優しいし、あんまり口答えしないし怒らないし」

ねねつちー！ 仕事さぼるのにこんな時だけ鋭い！

「りんさんですよ？ サトーさんの好きな人」

「っ……」

ねねっちの言葉一つ一つに、りんさんの顔はどんどん青ざめていく。

え……うそ、まさかこんな形で発覚したやつたの!?

どうするの佐藤さん!

「はい桜、こっちおいでー」

いつの間にか2人のところ向かっていた敦さんと葉月さんはねねっちの肩を持ってこっちのほうまで連れてきた。

そのままねねっちを会議室まで連れ込むと、敦さんと葉月さんは真剣な顔でねねっちと向き合っている。

ちやつかり私もついて着ちやつたけどどうしよう……。

「ダメだろ桜。知ってることや気づいたことをなんでもかんでも口にしたら、人間関係めちやくちやになっちまうぞ。反省しろ」

「ぶ……ぶごめんさい」

その人間関係で遊んでいる敦さん達がソレをいいますか。

と、内心呆れた目で二人を見ていると、葉月さんがねねっちの頭を優しく撫でた。

「まったく、おかげで面白いことになったよ」

「ホメちやダメー!」

● 佐藤視点

何やら会議室あたりが騒がしいが、別に大したことでもないんだろう。

多分ディレクター共がなにかやってるんだろうが、どうせうみこあたりが注意するに決まってる。

それに今の俺には注意する気力はない。

さっきまで遠山の愚痴を聞いてたから胃が痛い。そもそもなんでアイツ愚痴言ってるのにあんな良い顔してんだよ。

嫌みかよ……。

ああ畜生。なんでったって俺はあんなバカを好きになっちまった

んだよ。

ため息や胸の中でざわつく様々な感情を押し殺しながら作業を進めていると、誰かの視線を感じる。

いや、『誰か』はわかった。

「なんだよ遠山。今日はもう八神の愚痴気かねーぞ？」

「いえ……あの……」

後ろから聞こえてくる遠山の声色は少し変だった。に妙によそよそしいというか、さつきまであんな顔して同僚の愚痴を話してたようなヤツの声には思えなかった。

「……？」

振り返ると、遠山は壁にかくれてん俺をずっと見ている。あと顔が変に赤い。

俺はコイツが前に風邪をひいたことを思い出す。

あん時は色々散々だったが、一応移らなかつたし、遠山もすぐによくなつたと思つたんだが。

手を止めて席立つた俺は、遠山のところまで歩み寄る。そして彼女の頭に手を伸ばそうとする。

「どうした？ 顔赤いぞ。また風邪ぶり返し——」

「ひゃあっ！」

「……………」

顔を真っ赤にした遠山の小さな悲鳴は、俺の胃を刺激する。あと割と傷ついた。

「あ……ごめんなさい……」

遠山もすこし気まずそうに謝ってきた。

「いや……なんか……すまん」

そうだよな。異性に触られるなんて普通イヤだよな。気を紛らすようにデスクに戻つてて作業を再開する。

何も考えずに手だけを動かす。パソコンの画面の背景が色々混沌としてるがそれは気にしない。

だが、遠山はまだ後ろにいるらしく、弱々しい声で尋ねてきた。

「あの……佐藤君の、好きな人のことなんだけど……」

「またその話か、今度は何だ？」

その言葉にもはや呆れるしかない。

次はあれか？ 桜が好きなの？

とか聞いてくるのか？

まったく、いい加減にしてほしいよ。

だが、次の遠山の言葉は俺の予想をはるかに越えた物だった。

「ねねちゃんがね……私だっこのいうの」

「!!……」

遠山が突然切り出した突拍子もない言葉は俺の胃を貫く。

誰だ？ 誰がそんなこと口走りやがった。いや、桜か。さつき遠山

も言っただし。

アイツ……!

「いや……あのね、間違いだっこのことはわかってるのよっ……その

一応確認……ていうか」

「……」

たどたどしい遠山の声は、今度はじわじわと俺の胃を締め付けてくる。胃酸が逆流してきそうになって、なぜか喉までキリキリしてきた。

握っているペンタブに力が入り、体中が力んでプルプルと震え出すのを、何とか堪えようとすがどうやら抑えられそうにない。

「絶対違うわよね……?」

「……!」

「あ……ありえないわよね……? ねっ……?」

「——!!」

そして抑えていた何かが、ブチギれる音がどこから聞こえた。

握っていたペンタブからプスプスと煙が出ているが、気にも留めず俺はデスクを叩いた。

「ヒツ……!」

「いい加減にしろよ……お前……」

色々限界になった俺は、席を立てて遠山の方を向く。さっきのに驚

いたのかプルプル震えてるが、そんなのには構わずに感情にまかせて進める。

「そんなに知りたきや教えてやんよ……!」

「……………」

俺は無言で遠山を指差す。はつきり言つて言葉が出なかつた俺は、情けない話だがブチギレた瞬間に冷静になつて何を言えればいいのかわからなくなつていた。

とりあえず指さしてみたが何言つてるか全然伝わらんだろう。

「……」

遠山は顔を赤くしながら無言で後ろを向こうとするが、俺は釘を刺す。

「……誰もいないぞ」

頭を真横に向けたまま遠山は凍り付く。

「!っ……………あの——」

「喋んな」

「っ……………」

「振り向くな」

さらに遠山は、まるで油のさしていないロボットのようにぎこちない動きでこつちに向こうとする。

だが、今の俺にはもはやコイツの目を見る気力もない。だから止めた。

だが、衝動的にここまでできたが、次何すりゃいいかわからなくなつちまつた。

遠山は依然動かない。俺もなにも言えない。

だんだんここにいることが恥ずかしくなってくる。

「……………」

「じゃそゆことで」

俺はその場から早足で飛び出す。

首を九十度にしたままの遠山を置いて。

どこかで俺をめちやくちや見てたような感覚があとからしたが今

はどうでもいい。

とりあえず人気のないところまで歩いていく。

「……………はあ」

そこでようやく落ち着いた俺は壁に左手を当てて、顔を右手で覆う。

体の体温が上がっているのが直でわかる。今の俺は耳まで赤くなってるかもしれない。

早足だったせいとしては、やけに動悸が激しい。

「やったわね佐藤君」

「これで遠山も少しは」

「さ……………佐藤さん？」

後ろから花男さんと敦さんの声が聞こえる。

やっぱり見てやがったなコイツら。

どうやら涼風も混ざってたらしい。なんなら今ここでコイツら全員シメてやってもいいが、少なくとも今の俺にできることはただ一つだ。

「……………帰る」

「「はあ!」「」」

そのまま何も言わずにオフィスを出る。

後ろが敦さんの声やらで騒がしいが、俺にはもう仕事はできなさそうなので無視して帰る。

「おい佐藤! お前ふざけんじゃねえぞ! まだ仕事残ってんだろ

うが! 俺がやれと? おい佐と——」

俺はお前の…… 後編

青葉視点

昨日、佐藤さんが早退した。その埋め合わせは敦さんがなんとかしたんだけど……。敦さんすごく大変そうだったし。

でもどうなっちゃうんだろ。佐藤さん、告白？したのは良いけどあのまま帰っちゃったし。りんさんも、昨日は定時で帰っちゃった。敦さんが埋め合わせのこと報告したがってたのに……。

いつもどおり出社してキャラ班のところに向かう途中、りんさんにあつた。定時で帰ったはずなのにどこかやつれてるみたいでとても疲れがたまっていそうだ。普段きちんとまとめているセミロングの髪も所々、変なところではねていてアホ毛みたいになってるところもある。

昨日のことがショックだったのかもしれない。

「あ……、おはよう。青葉ちゃん……」

「り、りんさん……お、おはようございます」

りんさんに気を遣ってできるかぎり普段どおりの挨拶を心がける。でもりんさんは元気がなさそうに返してくる。

大丈夫なのかなあ。こんな大事なときに……。

「青葉ちゃん、どうしよう私……佐藤君の好きな人、まさか私だなんて……私、そんな人の前であんなこと言ってたなんて……」

今にも泣きそうな顔で嘆くりんさんを見ると、さすがに悲しくなる。でも佐藤さんも大変でしたよ。ヘタレといいますが、りんさんのこと気を遣ってましたし……。

多分それが昨日爆発しちゃったんでしようね。

「おはよ〜って、りん……どつたの？」

「あ……コウちゃん……」

りんさんをなだめようとすると、キャラ班ブースの奥から八神さんがいつもどおりの格好で現れる。だから寝るときはスカート脱がないでください！

昨日も佐藤さんに見られたって怒ってたくせに、それ完全に八神さんの自業自得じゃないですか！

「何があつたか知らないけどこれでも食べて元気出しなよ」

と、八神さんは自分が食べていた朝ご飯のサンドイッチの1つをりんさんの口に入れる。するとりんさんはそれをそのまま食べて飲み込んでしまう。

シユレツダーみたいだ。

「…………コウちゃん、私もうだめ。これお父さんとお母さんに渡して…………」

目にいっぱいの涙をためてりんさんが取り出したのは白い封筒。

なんだろうと、見ていると表面に『遺書』と書かれていた。

…………遺書?! ちよつと待つて! りんさん早まらないで! 「いや落ち着きなって…………早まんないでよ」

私が言う前に八神さんが止めてくれる。するとりんさんは溜めていた涙を一斉にこぼし始める。

「ゴウ、ぢゃくん」

泣きつくように八神さんに抱きつくりんさんは、とりあえず八神さんに任せることにして、私は自分の仕事をするために今度こそキヤラ班に向かう。

しばらく歩いていると曲がり角にさしかかる。それに沿って曲がろうとすると、今度は大きな人影に足を止めてしまう。

誰だろうと顔を上げると、そこに立っていたのはまさかの佐藤さんだった。

「あ…………さ、佐藤さんっ。お…………おはようございませす」

「おう…………涼風か」

困惑を隠しながら挨拶をするけど声が震えてしまう。佐藤さんの顔は、長い金髪の前髪のせいでよく見えないけど、確実に機嫌が悪いのは確かだ。

まさか、この流れって…………。

「…………」

逃げようにも、前髪の隙間からちらりと覗く佐藤さんの目は、まるで獲物を狙う飢えた獣のように私をにらみつけている。恐怖に足がすくんで動くことができない。それは佐藤さんの手が迫ってきているのがわかるのだ。

そして、佐藤さんは私の頭をつかんだ。

——しばらくしたあと、私はふらつきながらようやくキャラ班にたどり着くことができた。

すると通り道のはずなのに壁にぶつかってしまふ。だけど私はまともに前を見ることすらできなかつた。

ぶつかつたときに、かすかに甘い香りが混じつたタバコの匂いが鼻を掠める。

その匂いを私は知っている。

「あ……わりい涼風。視界に入らなかつ——つてどうしたお前!？」顔を上げると、佐藤さんよりも背が低く、目にクマができた男の人。

敦さんが立っていた。

「佐藤さんが……佐藤さんが……っ!」

ようやくここまでこれたことの安堵で、りんさんのように涙があふれてしまふ。

佐藤さんにめちやくちや八つ当たりされた。今回は髪ではなく、蛍光ペンで顔にたくさん落書きされた……。

「これはひでえ……」

敦さんは布巾で私の顔を拭いてくれる。うれしいけど、なんで私やねねつちがこんな目に……。

私を自分の背中に隠したまま、敦さんは背景班ブースに向かつた。

「おい佐藤! お前、遠山に振られたからっていくらなんでもやりすぎだ!」

敦さん……前提がいろいろおかしいと思います。まだ振られてはいないはず。まだ……。

だけど敦さんの背中から背景班ブースを覗くと——

「!?!」

「佐藤君！ 手え!! すぐに血を止めないと!!」

「あー」

そこは阿鼻叫喚としていた。

佐藤さんの左手から噴水のように血が吹き出ていたからだ。近くにいた背景班の人は悲鳴を上げてたり、卒倒したりしている。

そんな中、ピアスをした筋肉質の男性が必死に佐藤さんの手当をしている。

ていうか、どうしてゲーム会社でそんな流血沙汰になっているんですか!?

佐藤さんも自分の手からあんなに血を流しているのに全然反応してない。まるで魂そのものが抜けているようだ。

止血をした佐藤さんは呆然として自分のイスで休んでいる。

そして私たちは佐藤さんから隠れて作戦会議のようにお互いを囲んでいる。

さつきまで佐藤さんと手当していた人は、よく見たら見覚えのある人だ。

確かこの会社の面接の時に話した人だ。名前は確か、桜庭花男さん。特徴的な人だから覚えている。

あの時は試験中にトイレに行かないように朝ご飯を抜いたせいでまさか面接にお腹が鳴るなんて。

今思い出しても恥ずかしい。と考えると、敦さんと花男さんは話を進めている。

「……すごい動揺してるわね。返事もまだ聞いてないのに。まあ、返事はわかりきってるけど」

「正直、この時期に背景班で一番働く二人がああだと、最悪グラフィックチームそのものが崩壊するぞ」

なんだか本当にとんでもないことになってる。グラフィックチームが崩壊するのは確かに大変だ。

なんとかかしないといけないはずなんだけどどうしたら良いんだろう。

いま下手に佐藤さんを刺激するわけにはいかないし、りんさんもど

うすればいいかわからないし。

でも就業時間が始まる前に早くなんとかしないと……。

答えを出しあぐねている敦さんたちを見守っていると、後ろから誰かくる足音が聞こえた。

「あ……青葉……ちゃん、どうしたの？」

「ひふみ先輩っ」

振り返るとひふみ先輩が気まずそうに私たちを見つめていた。どうしていいかわからずにしどろもどろしてる。

やっぱり佐藤さんのことが騒ぎになりすぎたのかも。

「佐藤君と……りんちゃん、ケンカ……しちゃった……の？」

いつものようにたどたどしい口調で尋ねてくるけど、それは違います。

ワケを説明しようとする、敦さんたちはお互いの顔を見合わせていた。

「「……」」

見つめ合っている二人を、ひふみ先輩と一緒に不思議そうに眺めている。

そして何か無言のやりとりを終えたあと、敦さんがひふみ先輩に近づいて、肩にポンツと手を置く。

「よし、滝本。お前に決めた」

「!?!」

目を丸くしてるひふみ先輩を見て私は理解する。

もしかして……ひふみ先輩に押し付けた!?!

●

ここは会社の屋上。

ひふみ先輩が何とか頑張ってるりんさんと佐藤さんをここまで連れてきた。

連れてきたけど……。

「ケ……ケンカは……よく、ないよ……ちゃんと話し合って……仲

直り……しよっ……ね？」

「「……」」

ひふみ先輩は懸命に佐藤さんとりんさんを説得するけど、二人は反応しない。うつむいて暗い表情をしている。

「うつ……うつ……」

気まづくなってきたひふみ先輩を、屋上の入り口で見守ってるけどそろそろひふみ先輩には限界みたい。

そして、あの二人の空間に耐えられなくなったひふみ先輩はこっちに逃げ込んできた。

……目にいっぱい涙を溜めながら。

「……ダメだったっ」

「ふ、二人を同じ場所に連れてきてくれただけで十分です。ひふみ先輩はもう仕事にもどってください……」

りんさんが八神さんに泣きついたときみたいに泣きついてくるひふみ先輩を必至にだめて戦線離脱させてあげる。

敦さんたちも人が悪いです。いくらなんでもひふみ先輩に任せるなんて。

でもこれでなんとか佐藤さんもりんさんが2人でちゃんと話せる状況が作れた。

私や敦さんたちがやったらさっきの二の舞だろうし。仕方がなかったのかもしれないけどやっぱり納得がいかない気がする。

でも今はそれを気にしてる場合じゃないよね。ひふみ先輩にはあとでお詫びするとして。問題はこの二人だ。

私たちは屋上の入り口から二人を覗く。ポジショニングはちょうどひふみ先輩の声が聞こえるくらいだったから二人の話し声も聞こえるはず。

二人にバレないようにしていると、先に切り出したのは佐藤さんだった。

「……遠山」

「は、はいっ！」

りんさん、やっぱり動揺してる。そうだよね、気づかなかったとしても、まさか好きだなんて謂われたら普通動揺する。私も今まで恋愛とかしかなかったけどわかる気がする。

「俺はお前の……」

「っ……」

りんさんは少し怯えているように見えた。怒られると思ったのかな。いつも愚痴を言ってた訳だし。

佐藤さんもそれに気づいて言葉を出しあぐねてる。でもこれじゃ昨日と変わらない。

頑張つて佐藤さん！

「俺はお前の後ろに……幽霊が見えるんだ」

「……え？」

(佐藤さんが壊れた!?)

(遠山もさすがに動揺している！)

小声で敦さんと一緒に声が出てしまうけど、多分二人には気づかれ
てないみたい。

でも幽霊？

何でそんな突拍子もないことをいきなり!?

「……ゆ、幽霊？」

突然切り出された予想外の言葉に、りんさんも思わず聞き返してしま
う。

だけど佐藤さんは迷わず口を動かす。

「ああ、その幽霊はな、ずっと1人の人にくつついてて、本人は今の
関係がずっと続けばいいって想ってるみたいなんだが、少しは自分の
夢とかやりたいことをちゃんと見つけた方がいいんじゃないかって
気が気じゃ無かったんだ。そんなところお前に言ってもどうしようも
ねえしよ」

ここでようやく佐藤さんが狙ってることが理解できた。

(佐藤さん、振られる前にうやむやにしようとしてる)

(ていうかその幽霊って、そのまま遠山と八神の関係じゃねえか)
敦さんもあきれてる。ていうかどこまでヘタレなんですか佐藤さ
ん!

「だから今まで言えなかったんだ(バカだと思われたらどうしよ
う)」

佐藤さんの本音がひしひしとコツチに伝わってくる。うやむやにするにしてももつと他にやり方なかったんですか!?

そんなの、りんさんだってバカじゃないんだしそんなこと通じるわけ――

「……………そうだったのね」

りんさんは涙ぐんでる。

バカだったー!

前から少し思ってたけどこの人結構バカだったー!

見たところ完全に信じ込んでる。多分それだけ精神的に追い込まれてたのか、それとも佐藤さんに押し切られたのか。

でも少なくとも、これで二人の関係が悪化することはなくなっただけホッとした。

佐藤さんも安心したようで、ポケットからタバコを取り出して一服ついている。

今気づいたけど佐藤さんもタバコ吸うんだ。

「ごめんね佐藤君。私、勝手に勘違いしちゃって…………」

「そういうことだからサツサと仕事にもどれ。滝本にもよろしく言っといてくれ」

「ありがとう佐藤君っ。私、男の子の中なら、佐藤君が一番好きっ」

「……………」

りんさんが放った言葉が、佐藤さんが吸い込んだタバコの煙をかきだしてしまう。

むせた佐藤さんはせき込んでる。

りんさんなんでそんなことを…………。

「佐藤君、大丈夫?」

「あ…………ああ」

「それじゃあ私、そろそろ仕事に戻るね」

そう言い残したりんさんは屋上を後にする。

私たち三人はなんとかドアの後ろに隠れてたからりんさんに気づかれることはなかった。でも三人である空間は少し狭すぎた。

そして敦さんはりんさんが行ったこと確認してから屋上に出る。
葉月さんに捕まって私も連れてかれちゃうけど。

「よかったわね一番で、『男の子』では」
なぜか二人はすごく楽しそうな顔をしてるけど、少なくともこれは
快拳なのかもしれない。

少なくとも、『男の子』では一番好きなのだから。佐藤さんは顔色す
ごい悪いけど。

私も刺激しないようにフオローに回る。

「け、結果オーライですよ佐藤さん。これでまた、仕事頑張れますね
……！」

「ああ……」

すると、佐藤さんはタバコはもう吸ってるはずなのにもう一本のタ
バコを加えて火をつける。

そして――

「……今日はもう帰るがな！」

佐藤は屋上をあとにした。

「お、お疲れさまですー！」

「ちよつと待て佐藤！ こんな朝っぱらから帰れると思うなよ！」

おいテメエふざげんじ――」

佐藤さんを追いかける敦さんたちはおいといて、そろそろ私も仕事
に戻らないといけない。

ああ、結構遅れてるのに……。

ため息をつきながらオフィスに戻ると、ねねつちがキャラ班のここ
ろにいた。

「あ、あおつちー！」

「もーねねつち、またここにいる」

私もさつきまで実質サボってたようなものだからあまり責めたく
ないけど、とりあえず注意する。

「なにか楽しそうなことしてたの？」

「楽しくないよっ」

自分のパソコンの電源を入れながら呆れたため息をつく。

ねねっちは座ってる私の横でジタバタしてる。ああもう、パソコンの近くなんだから暴れないで欲しいんだけどなあ……。

「ずるいずるーい！ 私も混ぜてよーい！」

「そもそもねねっちが余計なこと言ったからあんなことになっ——」

そして悲劇はまだ終わらなかった。

「あっ……」

ジタバタしてたねねっちの手がパソコンの電源コードに引っかかって抜けてしまう。

起動中だったパソコンはプツンともその画面を真っ暗にしてしまった。

え……ちよつと待って！ こんな時に電源を急に切ったりしたら……！

「あ……あおっちゅ？」

慌ててパソコンので電源コードをつないで電源を入れ直す。起動中の画面を凝視しながら必死に祈る。

お願い、なにも起こらないで……！

だけど私の願いは儂くも散ることになってしまった。

パソコンの中にあった3Dのデータは、もうすぐ完成のはずだったキャラのデータがなくなっていた。

「……い！」

得体も知れない感情が体から溢れてくる。これは、怒りだ。

「あ……ぐ、ぐめんあおっちゅ！」

振り返った私はその感情をぶちまけた。

「ねねっちのバカー!!」

相合い傘

ゆん視点

おかしい。

今の私は明らかにおかしい。

あの休日以来、どうしても敦さんのことを意識してまう。今までそ
ないなことがなかったのに。

休み明けに敦さんが見せた悪戯めいた笑顔がどうしても忘れられ
へん。

私は会社で自分のパソコンに向かい合い、自問自答を繰り返しながら
作業をすすめる。

最初はそもそも使ったとこすらなかったそれを、今はそれなりに使
いこなしている。だけど今のうちの頭の中はそんなことを考えてら
れる状態じゃない。

何か企んどるんかっても考えたけど、あれからしばらく経つとるの
に敦さんはなんもしてこん。

そもそも私はなんでそれだけの時間が経つとんのにこないなこと
になつとんや。

その上、去り際に敦さんに言われたことを試しにやり始めてからと
いうもの、妙に身体の調子がいい。体重もおもってたよりずっと軽く
なったし、検診でも看護師の人にほめられた。

ほりやあの人があええ人なんはわかっとする。

ただでさえ忙しいのにキャラ班のアクシデントを一人で肩代わり
したりしてくれとるし、ディレクターの葉月さんやからも信頼されと
る。

本人はそれめちやくちや嫌がっとなつたけど。

他の社員からも手助けされたって話しはよく聞くから、評判はいい
ほう。影でヘンタイ扱いされてる葉月さんよりずっと信頼されて
る。

……ちよつと待つて。

私はなに一人でこないなこと考えとんや？

冷静に考えてみたらただお昼ご飯おごってもらっただけやん。せやのになに1人で暴走しとんやし、こんなただの勘違いやろ。そうやそのはずや。

大体あんな目にクマできたヤニ臭くてだらしない人のどこに魅力があるんや。

うちはそんなことで揺らぐような軽い女ちゃう！

「……」

自分を叱咤した途端、ふらついて敦さんに寄りかかってしもうたとき、鼻を掠めた匂いがフラッシュバックする。

タバコの匂いなのに、かすかにハチミツのように甘い匂いを含んでいたそれは、敦さんそのものの匂いと混じっていた。不快なはずのそれはもはやある種の香水のようにすら思えた。

「~~~~~」

持ち直しかけた意識がまたぐちゃぐちゃになる。脈拍のペースも普段よりも明らかにやい。

なんでや！　なんでこうなるんや！

かれこれ、この流れをこの一ヶ月の間で4〜5回は繰り返している。

自問自答をして自分の考えは一般的に考えたら間違ってるってところまでたどり着けるのに、なぜか元の位置に戻ってくる。

……うち、どうしてこうなってもうたんやろ。

「——飯島さん」

「……!?!」

突然声をかけられて振り返る。後ろには日焼けした私より背の高い女性、プログラムチームのうみこさんが立っていた。

さっきまで頭の中がぐちゃぐちゃやったから、声かけられて少し驚いてまう。

「あの、さっきまで上の空でしたけど大丈夫ですか？」

「えっ……いい、いえっ……大丈夫です」

さっきまで敦さんのことを考えてたなんてとてもじゃないけど言えへん。とりあえず大丈夫と振る舞って誤魔化す。

「それで、どないしました？」

無理やりにも話を逸らして、うみこさんが尋ねてきた理由を聞く。

ちよつと驚いたけど、なんの用やろ？

「あなたのNPCからエラーが出ていて」

「え……そんなはず」

パソコン画面に向かい直して、提出したNPCを確認する。画面の左端にはちゃんと『error』の文字が書かれていた。

私は頭の中が余計真っ白になる。こんな初歩的なミスするなんて、新人じゃあるまいんやし。

「すつすみません！ すぐに直しますっ！」

「当然です。さつさと直してください。些細なエラーが大きなエラーにつながることもあるんですよ。新人じゃないんですし、しっかりしてください」

「……」

返す言葉もないわ。

いくら体の調子がええからって、こんなミスするなら元も子もないわ。

ああもう。あれもこれも全部敦さんのせいや……。

● 「……うち、どないしたんやろ」

昼休みになって、カフェテリアで昼食を食べながらため息をつく。マスターアップが近いこともあって、カフェテリアにはほとんど人がいない。みんなオフィスで食べながら作業を続けているんやろ。

でも一旦1人になりたかったうちはカフェテリアで昼食をとることにした。

はじめも青葉ちゃんも、今日はオフィスで済ます言うてたからそこは幸いやった。

うみこさんに指摘されたエラーは本当に初歩的なもので、簡単に直せるものだったからすぐに片付いたものの、このままじゃ絶対青葉ちゃんたちに迷惑かけてまう

一人で考えみようとしたりけど、余計にもやもやしてまう。ほんま、どないすればええんや……。

思わずテーブルの上に突っ伏してしまおうと、私を呼ぶ声が聞こえる。

「飯島さん、お疲れ様です」

「うみこさん……」

顔を上げると、さつきエラーを指摘してきてくれたうみこさんがカフェテリアに入ってきた。

私はまた焦る。まさかまたエラーが残つとった？

せやけど、その心配は杞憂やった。

「エラーの修正ありがとうございます。ばっちりです」

「そうですか……」

その言葉を聞いて安心する。よかった。また間違えたらホントにどないしようと思った。

思わずため息がこぼれてしまう。

「……あの、何かお悩みですか？」

「へ？」

どこか申しわけなさそうに尋ねてくるうみこさんに、ちよつと呆気にとられてまう。

「作業中ずつと上の空でしたので、少し気になりました。……あと、さつきは少し言い過ぎたと思ひまして」

あ、やっぱりこの人気にしとったんや。前に青葉ちゃんを注意したときも似たようなことなつとったし。

でも言えるわけあらへんよなあ。寄りにもよつてうみこさんに敦さんのこと話すなんて。

敦さんがうみこさんに痛い目に合わされてるところはよく見かける。

八神さんみたいに苗字で呼んでるから自業自得なんやけど。

そんなことを考えてると、うみこさんはうちの目をジツと見つめてくる。まるでうちの考えを覗いているような。

え、エスパーやないんやし、わかるわけ――

「もしかして、好きな人でもできました?」

「くっつ!」

言い当てられた途端に、頭が沸騰しそうになる。さつきエラーを指摘された時よりも頭が真っ白になってまう。

「いうかなんや、言い当てられたって。何がやねん。」

「凶星ですか?」

「イヤ……そんなんじゃないのうて、その……ううっつ!」

なんとか否定しようにも、言葉が出てこなくて頭を抱えてまう。

違うんや。好きな人とかそないなことやないんや。そのはずな
や。

「……飯島さん、それ多分恋の諸症状では?」

「——っ!」

「!?」

ズバリと言われてテーブルに思いっきり頭をぶつけてしまう。

痛い。痛いけど、キツケには全然足りへん。

まだ頭の中は真っ白のままや。

「あの……大丈夫ですか? 私でよければ相談には乗りますが」

「……お願いします」

このままやと埒があかん。客観的な意見が欲しい。

せやけど、青葉ちゃんやはじめには絶対そないなこと相談できひんし、ひふみ先輩に至っては、前に軽くからかってもうたことがあるからバレたら絶対あかん。

私は固有名詞等をなんとかうまいこと隠して、ことの成り行きをうみこさんに話した。

嫌ってたってゆうか、苦手意識を持つとった人に、たまたま親切にされて変な気持ちになってまう。

その本人のことをどう思っとるのかわからんようになって。そもそも、うちは学生時代は彼氏とかおらんかったし、好きな人ゆうても、学校のアイドルみたいな人を一方的に好きになってたってだけやし。

そんな内容で話した。するとうみこさんは断言した。

「それは単に親切にされたただけでは？」

「っ、そ、そうです！　そうですよね！」

「とはいえ、きっかけとしては十分なわけで」

「——っ！」

また頭をテーブルにぶつける。2度目やからめっちゃ痛い。

ウソや、そんなんウソや。

頭の中でなんども否定する。

うみこさんに相談して、少しはモヤモヤしたものが晴れたような気もするけど、まだモヤモヤが残つとる。

「飯島さん、あまり頭をぶつけない方がいいですよ。脳震盪とかありますし」

「すみません……」

突っ伏したまま応える。顔を上げたくない。

今たぶんめちゃうくちや顔赤くなつとる。

「二つ聞いてもいいですか？」

「はい？」

「飯島さんはその人のどこが嫌だったんですか？」

「へ？」

そこまで突拍子もないことじゃなかったけど、少し的外れのような質問をされてしまう。

私が敦さんを嫌いだった理由……。

「えっと、だらしがないっていうか、辛気くさいっていうか、もっとシヤキツとしたらいいのにつて思つて見てられへんかったから……」

「なるほど……」

いつも抱いていた感想をそのままいう。

せやけど本当は、そんな感じの敦さんが、どこか昔の自分に似とるような気がしたから。見てたら昔の自分を思い出すから。

せやから嫌やった。

「でもその人に親切にされたんですね？」

「はい……」

第一印象は最悪やったけど、仕事はうちの何倍もできるし、信頼

だつてされとる。ある種のカリスマ性すら感じることもある。

そのせいで、最初のときに抱いた感情と後からきた感情どうしがぶつかり合つてごっちゃになつとる。

ああもう。結局どつちが正しいんかわからへん！

「なら、もう少し時間をかけてみたらどうでしょう？　すぐに決めるようにするからわからなくなるんです」

「……はい」

そう言われて少しだけ落ち着く。

そうやな。焦るからこないなつとんや。きつと一時の気の迷いや。時間をかけて落ち着いて敦さんを見ていれば、そのうち冷めてくるはずや。

ただ、同時に気になることもできた。

と言うか、参考がてらに聞いてみたかった。

「あの、うみこさんは、そういう……恋愛とかつて経験あるんですか？」

「彼氏いますよ？」

「!？」

サラリと応えたうみこさんに驚愕する。

仕事一筋だと思つとつたのに、彼氏とかおるんやな。初めて知つた。

「そ、その人とは、どういう馴れ初めやったんですか？」

「そうですね。私が普段通っているスポーツジムで出会いまして、寡黙な方で近寄りがない雰囲気だったので、趣味が同じミリタリーでして、そこで意気投合しまして、サバゲーをする仲間になったのが始まりですね。そこからは葉月さんの愚痴とかも聞いてもらったりして、サバゲーでの対人戦がとても上手なんですよ。銃の扱いもそうですし、合気道を嗜んでるとかで、格闘ではほとんど負けなしで、私もCQCなら覚えているんですが、まるで歯が立たなくてほんとすごいんですよ。それから、自衛隊や沖縄のアメリカ軍の方とも知り合いがいて、面白いものをいつも譲ってくれるんです。なんでも——」

「」

●
疲れた……。

とんでもない地雷踏んでもた。まさか昼休みギリギリまで話し込まれるなんて思わなかったわ。前にも青葉ちゃんがうみこさんに捕まっとったから迂闊やったわ。

エラーの修正もあって、今日はノルマを片付けるまで少し時間がかかってしまった。

それでもなんとか終わらせて、家に帰る準備をする。青葉ちゃんもはじめも先に帰ってしまってた。

にしても、随分と外が暗いなあ。

そろそろ暗くなる時間やけど、それを加えたとしてもいつもよりずっと暗い。

なんでやろ。と、思ってた私の疑問はすぐに晴れた。そしてめっちゃくちや落ち込んだ。

「うそやろ……」

ビルの出入り口まで来てようやくわかった。

雨が降つとる。しかも土砂降り。

その上うちは傘を持ってきとらん。

すっかり忘れとった。確か今日雨がふるって朝の天気予報言うとったなあ。

……あーどないしよ。青葉ちゃんもはじめも先かえってもおたし、駅まで走つてもうちの足じやどのみちずぶ濡れになる。

それにこの格好やしなあ……。

うちは自分の今の服装を見下ろす。

この丈の長いロングスカートでこの雨の中を走るなんて到底無理やし、そもそもこの服買ったばかりやから濡らしたくないのに。

「……ほんまどないしよ」

溜息をつく。

……厄日や今日は。ミスするし、うみこさんに捕まるし、その上この土砂降りの中じや帰れんし。

誰かの傘に入れてもらおうしかあらへん。せやけど、青葉ちゃんもは

じめももう帰ってしまおうだし、りんさんも右に同じ。八神さんは相変わらず会社に泊まるし、他には、うみこさんはまだおったような気がしたけどまた捕まって帰り道にこの雨の中長々話なんか聞きとうないし……。

「——何やってんだお前？」

「!？」

声をかけられた。

この声の持ち主は今日1日なんども否定した、私がおかしくなってしまうた原因の人。

敦さんや。

「っ……」

声をかけられたのに、動けへん。

ホントなら今すぐ走り出したいはずなのに、頭がまた真っ白になってどないすればええかわからん。

「……はあ、無視かよ。別にいいけどよ」

「……」

重い癖に、妙に柔らかく響く低い声は、後ろから呆れの声で聞こえる。

そして足音が徐々に近くなっていく。

しばらくすると、敦さんの背中私の目の前にまでやってくる。右手には、一回り大きな傘を携えとる。

皺だらけ紺のトレーナーに、くたびれたGパン。

手入れもロクにされてないけど、その服装が変に絵になる。

「……」

「?」

「……!」

なぜかそれをジッと見つめてしまうと、敦さんに悟られたのかこつちを振り向かれてドキツとする。

「お前、傘は?」

「え……えつと……」

最悪やー! よりにもよってこの人やなんて!

前の休日の時といい、なんでこんな絶妙なタイミングではち合わせるんや！

傘を忘れたなんて、とても言えるわけあらへんうちは、説明しようにもなにを言ったらええかわからんようになってまう。

「……つたく、少しは口聞いてくれたっていいだろ。流石に傷つく……」

愚痴をこぼしながら、今度はうちのほうに歩み寄ってくると――

「……………な、なんですか？ それ」

「使えよ」

自分の傘を柄を私にむけてくる。そこでようやくハツとしたうちは目をそらしながら拒絶する。

「……………別に必要ありまへん」

「じゃあお前今日どうやって帰るんだよ？」

「それは……………あ、敦さんこそ！ どうやって家に帰るつもりなんですか!？」

ごまかすように話の矛先を敦さんに向ける。前みたいに世話を焼かれたら、余計ドツボにはまる気がしてならん。この人の手だけは借りとおない。

「俺は別にいいんだよ。家近くだし、一旦着替え取りに行ったり風呂入りに行ったりするだけだから、明け方にすりゃいいだけだし」

「……………」

せやからなんでこの人は毎回うちに世話焼きにくるんや――！

関係ないやろ――！

そもそも、本人もうちに嫌われとるってことくらいわかっどるはずやのに、同じチームってだけでここまでするかフツーツ！

「お前、帰りたくないの？」

「ほりや帰りたいですけど……………」

「なら使えよ」

「嫌です！」

「じゃあどうしたいんだよ……………」

わからへんよそんなん！

アンタのせいでうちは今大変なことになったとるつちゆうのに！
私は本当にどうしたらええかわからんようになって、うつむくことし
ができるひん。

「……あーあ、なんか帰る気失せた。戻って仕事してくるよ」
ぼやきながら、敦さんはわざとらしく自分の傘をビルの出入り口の
隅にある傘置きに置いた。

「えっ……?」

敦さんは私をおいてビルの奥にまた入っていかうとする。

え? どゆこと? このままと埒があかんからわざと傘を置い
てったんか?

なんでまたそんなことするんやこの人は……。そないなこ
としても、うちがなにかお返しするわけでも、特別感謝するわけでも
ない。

せやのになんでそこまでするんやこの人は。

「……」

世話を焼かれる恥ずかしさよりも、こんな人にそこまでされる自分
の情けなさに怒りすら感じてまう。

これじゃうちの気がすまへん。

私は振り返って、遠ざかっていく敦さんの背中に向かって叫ぶ。

「あ……あのっ! こ、こういうのはどうですか!」

● 「なあ飯島、本当にこれでいいのか?」

「だだだ大丈夫ですよ。ベベ別にたいしたことじゃありません
し……」

「もうすでに大丈夫じゃない気がするんだが……」
土砂降りの雨のなか、私と敦さんは並んで歩きながら駅まで向かっ
ている。

当然傘は1つしかない。つまり相合い傘。

昔読んだ少女漫画や恋愛小説とかでよくあるシチュエーションの
それを、私はいま会社の先輩とやっとする。

とはいっても、言い出しっぺは私。

敦さんの傘を使って、自分だけが帰るっていうのがどうも気に入らなかつた私は、これを提案した。

それなりに大きい傘やし、私と敦さんなら十分スペースもあるかと思つたけど、完全に誤算やつた。

近い近い近い近い近い近い近い近い近い近い近い……近い……近い……!

いくら大きめの傘でも、二人となるとかなり詰めんとお互いが濡れてまう。そのせいで、うちは敦さんのほんまにすぐ隣におる。

傘の下の雨を遮つとる空間は、敦さんのタバコの匂いでいっぱいになつとる。前にも鼻をかすめた匂い。

タバコの匂いなんて不快なはずなのに、どこか心地いいとすら思えてまう自分がいる。

絶え間なく降り続ける大粒の雨は、何度も大きな傘を幾度も打ち付けとるはずなのに、なぜか速くなっていく心臓の鼓動の音のせいで、よく聞こえへん。

なんでや、なんでドキドキしとんやうちは。私はこないな人なんか

「――飯島」

「ふぁい!?!」

「おまえ本当に大丈夫かよ……」

とつさに顔を上げて見えた敦さんの横顔はどこか居心地が悪そうやつた。

やつぱり敦さんもこういうのは緊張するんやな……

ため息をこぼしながら敦さんは続けてくる。

「お前、今日ミスしてたな」

「っ……!?!」

唐突に切り出された話題に言葉をなくす。なんでこの人知つとるんや!?!

「今日はアハゴンのところでバグ探ししてたからな。そもそもアレ見つけたの俺だし」

「……」

嘘やろ、よりにもよって敦さんに見つけられるなんて。

うみこさんが見つ付けてくれたと思つとつたのに……。

何より敦さんが報告してこなかったのも、私を気遣ったからなのかと思うと余計歯がゆくなる。

「何を勘違いしてるか知らんが、別にあの日のことは誰にも言わねえよ。脅したりとかしない」

「……………別に頼んでません」

「ほー？ なら明日涼風たちに言つてやろうか？ お前と相合い傘して帰つたつてこと」

「なっ……………!?!」

「冗談だよ」

思わず敦さんのほうに顔を向けてにらむと、敦さんは面白げに私を横目で見下ろしてくる。

あかん、またいいように遊ばれとる……………。完全に敦さんのペースやないかこれ。

これじゃあのとときと変わらへん。

「…………」

——やはりそれは恋では？

昼休みにうみこさんに言われた言葉が頭をよぎる。

ちやうにきまつとる。私がおこないな人に恋するわけあらへん。

そもそも、なんでこの人はうちにこんな世話焼くんや？

この人は何がしたいんや？

何が目的でここまでするんや？

隣を歩いている敦さんの考えてることが一向にわからない。

そう考えてると、変なことが頭に浮かぶ。

……………私は、敦さんをどうしたいんやろ。

なんども考えて、なんども否定して、結局答えはわからんで。

ああ、多分うちが今までモヤモヤしてたんはこれなんや。

うちが敦さんとどうなりたいかわからんようになってしもうたからこうなつとんや。

うちは……………うちは——

「――飯島！」

「へ？」

突然名前を呼ばれて、俯いてた顔を上げた途端、目の前にあったのは皺のよった紺のトレーナーやった。

それがグツと近くなった。いや、私の顔が紺のトレーナーに埋まった。

「……っ!？」

背中をグツと押さえつけられる。視界がほとんど遮られて何も見えん。

いきなりなことやからなにされたかわからん。ただ、わかったのは、あのと鼻を掠めた甘いタバコの香りが鼻孔のなかに充満していることだけ。

ええ!? なに? 何? 何!?

そしてザバーンッ! と大きな水しぶきの音が紺のトレーナーの向こうから聞こえた。遠ざかっていくエンジンの音も。

1〜2秒ほどの静寂のあと、なぞの拘束から解放された。

「――冷たっ! 畜生あの車! ふざけやがって! おかげでずぶ濡れじゃねえーか!」

「へ……?」

傘を私にかざしたまま、後ろの道路にむかって敦さんは叫んでいる。その方を見ると、徐々に遠ざかっていく車のバックライトが見えた。

「あーくそ……。飯島、お前は濡れてねえか？」

「え……あ……え？」

私は敦さんの全身を見渡す。正面は濡れてないけど髪がびしょびしょになってる。

だけど、それよりも目にいったのは、敦さんの身につけている紺のトレーナーやった。

さつきうちの顔が埋められた色と同じ色。

そこでようやくくうちはなにをされたか理解する。

「……飯島?」

「あっ……あ……！」

私は、私はさつき敦さんに抱きしめられた！

「○×※△☆#〜〜!!」

うつむいたうちの口から声にならない声が響く。

体全身がやかんのように熱くなって、心臓の鼓動が耳に直接聞こえてくる。

まだうちの鼻には、甘いタバコの匂いが残っていて、それが敦さんのおいであることも改めて理解したが、それをより掻き立てる。

「……あの、飯島さん？」

「い……い……い……」

「？」

「いやーっ!!」

私の絶叫は、土砂降りの雨にかき消された。

1秒間

うみこ視点

ようやく仕事に一段落ついた。

ひとまず家に帰れそうだ。

今日はバグが想像以上に多くててんてこまいだった。そのせいで宮本さんにも急遽助っ人に入ってもらったほどですし。

デバッグの桜さんは、旧作を知ってることなどもあって、細かく報告してくれて凄く助かっているのですが、素行が……。

まあ、今は私が隣で監視しているので余計なことはさせませんが。にしても、うちの会社って基本的に男性に慣れている方が少ないのですね。初めて知りました。

今日は飯島さんの相談に乗ってみたのですが、恋愛そのものにウブな気がするといえますか。

……なんだか葉月さんがそういう人ばかり雇うからじゃないかと些か心配になってきました。

飯島さんの意中の相手とは一体どんな方でしょうか？

この会社の中なら、少なくとも『フェアリーズストーリー3』の開発チームでしょうし、そうなると……いやこれはありえない。

どう言うわけか、『フェアリーズストーリー3』の開発チームはサウンドの増田さん、何でも屋の宮本さん、背景班の佐藤さんしかいない。

……やはり葉月さんに聞いたただした方がいいんじゃないだろうか？

でも多分無駄でしょうしやめときましょう。

それにしても誰なのでしょう？

増田さんはどういう方かわかりませんが、とにかく控えめな方らしいので多分違うでしょうし、佐藤さんはもう好きな人がいるって言うかどうかどうして気づいてあげないんでしょうか遠山さんは。

宮本さんは……まずありえないでしょう。

飯島さんがあんな人を好きになるとは――

と思った途端、飯島さんとの会話を思い出す。

「……そういえば、元々嫌っていたとおっしゃってましたよね」
これはひよつとしたら飯島さんは宮本さんのことを——いや、これ
はない。まずありえない。

人を苗字で呼ぶなどなんでも言ってるのに苗字で呼んでくる人で
すからあの人は。だとすると、他のチームの方と見るのが妥当でしょ
う。

そう思いながらオフィスを出ると、カバンの中から何かの振動する
音が聞こえる。

携帯だ。

立ち止まった私は鞆からチカチカとランプの光を放つ携帯を取り
出す。

画面を開いて、メッセージのアイコンをタップすると、少しだけ頬
が緩んだ。

…あの人だ。

どうやら今日は雨が降っているようだから車で迎えにに来てくれ
ると、メッセージには書かれていた。

傘くらい持つてきてると言うのに律儀な人だ。

もつとも、そういうところに惹かれたのだが。

エレベーターで一階まで降りて、ビルの出入り口まで歩く。

すると暗くて全身は見えないが手前の道路に車のライトが光って
いるのが確認できる。

近づいていくと車体がよりはつきりと見えていって、それがあの人
のものだとわかる。こうして送り迎えしてもらるのは女性として
は少し嬉しいが、どこかもどかしい気もする。それでもせっかく来て
くれたのだ。彼の厚意に甘んじたい。

車の向きから察するに、私が雨に濡れないよう助手席がすぐ開くよ
うになっていた。細やかな気遣いができる彼らしさに胸が躍りなが
ら、ためらいなく車のドアを開ける。

「お仕事、お疲れ様です。うみこさん」

運転席に座っていたのは薄い鼠色のスーツと紺色のカッターシャ
ツ。それをヒョウ柄のネクタイで締めた七三に別れた金髪の男性が

一人。

この人こそ、私の初めてできた大切な恋人。
名波賢人だ。

● 「お仕事の方はどうですか？ 最近忙しいと聞きましたが」

「ええ。まあでも楽しいですよ。戦場みたいで」

「うみこさんらしいです」

隣を見ると、賢人さんがハンドルを握っている。

薄暗い車内の中、わずかに差し込む街の光が、少し変わった形の眼鏡から覗く細い目と少しやせ細った顔を照らしている。

普段この人は基本的に寡黙な人で基本的に表情が顔に出ない。そういうところも惹かれ会った要因の一つなのだろう。

この人には『フェアリーストーリー3』のことは守秘義務があるので話せないのは少し残念だが、発売されたら詳しく聞いてもらう。

しかし、仕事の話をしているとつい余計なことまで口が動いてしまうモノだ。

「とはいえ、あの人には本当に苦労します。ただでさえ忙しいのに、急な仕様変更といい、それで今日一日残業しなくてはならない社員達の気持ちも考えてほしいものです」

「うみこさんはとても部下思いなんですね」

「なっ……?!」

当然、思わぬ切り替えされてドキツとする。

「え……ええ、まあそうですね。あまり無理はしてほしくないのです。普段、葉月さんとかにからかわれるときはキツク言い返すところではあるけれど、この人にはそういう必要はない。むしろ彼にはこうしたいのに、咄嗟に否定しようとしてしまう自分がある。

あまりこの人に甘えるのはよくないと、どうしても自制してしまうのだ。

それでも、普段よりも素直になれるこの時間はとても愛おしい。
穏やかな気持ちで賢人さんの横顔を眺めているとザバーンと車が

水しぶきを上げた。

見たところ通行人はいなかったの、水にかかってしまった人はいないようだ。

「……やはり雨だと運転って気を使いますよね」

「そうですね……」

なぜか賢人さんも気まずそうな顔をしていた。

「賢人さん？」

「……いえ、実は、うみこさんを迎えに行く途中で、相合い傘をしていたカップルに水をかけてしまいました……。先に気づいた彼氏さんのほうが彼女さんのほうを庇ってしまっていたのですが、多分びしょ濡れにしまったかと」

「そ、それは……なかなか災難ですね」

そのカップルたちも、賢人さんも。

でも、彼女のほうはもしかしたら彼氏のその身を挺した行動に惚れ直しているんじゃないだろうか。

なかなか粹なことをする彼氏さんだ。

「ちなみに、どんなカップルだったんですか？」

「そうですね、暗くてよく見えなかったのですが、紺のトレーナーをした男性と、背の低い……150cmほどのフリルなどがたくさんついた服を着た女性でした」

「……」

なんだろう。賢人さんの言葉にとてつもない既視感を感じる。

紺のトレーナーと、フリルのついた服？

自分の記憶の中にあるはずなのだが、情報が少なすぎてわからない。

考えているうちに、賢人さんの走らせる車は、私の部屋があるマンションにまでたどり着く。

もう賢人さんと別れなければならぬと想うと、少し寂しく思えてくる。

マンションの前まで来ると、賢人さんは助手席のドアが雨除けの方に来るように駐車した。

こういうところは、ホントに頼もしいと思える。すると、車を止めた賢人さんは何か思い出したかのように話し出した。

「ああそうでした。うみこさんに渡したいものがあつたんです」

「渡したいもの？」

「そのトランクを開けてみてください」

「？」

助手席の目の前にある小さなトランクを開ける。

本来そこには地図なども必要な小物類を入れておく場所だが、そこには英語の文字が記された真空パックがある。

見慣れた包装のそれを見て私は好奇心でいっぱいになる。

もしやこれは――

「前に話していた『デザートバー』というものです。アメリカ軍の方から送って頂けたので」

「つまりこれは、現在軍が食料として配給されているものということですか!？」

「はい」

なんとということだ。私も実物は始めてみる。

しかもアメリカの直送だなんてレア物すぎる。

自衛隊が配給しているレーションならすべて網羅したが、アメリカの、しかも砂漠でも溶けないチョコレートとして編み出されたこれは日本ではそう手には入らない。

「ですが、いいんですか？ こんな貴重なもの」

「たくさん送られて来たので。それと、まだまだ興味深いものがありますので、今度私の家に来たときに見せましょうか？」

「おお……！」

まだあるというのか。素晴らしい。

とてつもない感動と好奇心で心が躍る。

しかし、ここまでされると何もできていない私が少しもどかしく感じる。

何か賢人さんにできることないだろうか。

と、思考したとき、あることを思い出した。

「それでしたら、この40mmグレネードの空薬莖なんてどうですか？ ペン立てにも、マトリョーシヨカにもなります」

ドーナツを差し入れて来てくれた涼風さんに渡し損ねたものだ。

賢人さんの車のフロントガラスの手前に、それを置いてみる。

「おお。これはすごいですね。この硝煙の残り香、そしてこの金属のテカリ。さらには優れた実用性。どれを取っても素晴らしい一品ですね」

「そうでしょうー！」

表情は硬いけど、その瞳から見えるは確かな煌めきは賢人さんの興奮を感じる事ができた。

こんなに素晴らしいものなのに、前に涼風さんに渡そうとしたときはすごい遠慮がちだった。なぜなのだろう。

おっと、興奮してしまった。

せっかく賢人さんに送ってもらったのに、ここまで話し込むわけにもいかない。

私も明日もまた忙しいし、それは賢人さんも同じだ。

いつまでのこんなところに車を止めおくと、駐車違反になりかねない。

「それでは、今日はありがとうございました。おやすみなさい」

「はい、おやすみなさい」

シートベルトを外した私は賢人さんに微笑むと、賢人さんも少しだけ微笑む。

といっても、口元が少しピクリとなるほどだけ。

振り返った私はドアのブに手をかける。そのとき胸が少し透くような感じがした。

「……」

これからしばらくは賢人さんとうして話すこともなくなる。今日みたいを送ってもらおうのもそう何度もしてもらおうわけにもいかない。

となると、こうしてこの人と会えることができるのは今日くらいか

もしれない。

そう思うと、やっぱり少し寂しい。

仕事ばかりしてたときは、こんなことを感じることもなかったのに……。

「……うみこさん？」

どこか不安そうな賢人さんの声が聞こえる。

ダメだ。速くしないと賢人さんに怪しまれる。

心配させたくない。だから私は大丈夫と言おうとした。

だけど、その言葉は口にはできなかつた。

「っ……」

——私の口は、賢人さんの口で塞がれたがら。

触れるだけの口づけ。

目の前には目を閉じた愛おしい人の顔がすぐ近くにある。

自分のものとは異なる柔らさのそれが、自分ものと触れあっている。

一瞬強張った体はすぐに絆されて、私は目を閉じて両手を彼の胸板に置く。

「ん……」

一秒間にも満たない静寂、それは私が体験したどの銃撃戦よりも長く感じられた。

離れた後に気づく。

自分の胸の鼓動がおかしくなるほど速くなっていることに。

だけど不思議といつもより落ち着いている。

「何かつらいことでもありましたか？」

「いえ……そうではないのですが、こうして話すのもしばらくできなくなると思うと、少し寂しいなと……」

「……そうですか」

変に落ち着いたせいかわ、思ったことがすんなりと口にできる。

やっぱり自分は寂しいのだと、改めて痛感させられる。それくらいこの人に惹かれているのだと。

「あの……もう少しここにいてもいいですか？」

ソツと賢人さんの胸に寄りかかると、賢人さんは何も言わず、ギョツと私を抱きしめてくる。

彼の独特の匂いと、服越しに感じる温もりが自然と肩の力を抜いてくれる。

これからきつとこんなことをしてる暇なんてないくらいに忙しくなる。

だけど、こうしていると不思議とうまくいきそうな気がした。

彼の腕にあるモノ

ゆん視点

「やあ君たち、少しいいかな?」

件の相合い傘事件から一日が経過した日のこと。午後の仕事をしている最中に葉月さんがやってきた。基本的にキラ班のブースに顔を出すのは珍しいので、自然と皆の意識も彼女に向いた。

「どうかしましたか? 葉月さん」

青葉ちゃんが開口一番に尋ねると、葉月さんは少し困った顔で言った。

「いやあ、敦君のことなんだがね。昨日から風邪をひいたそうなんだ」

「そうなんですか!? だから、今日は見かけなかったんですね」

「なんでも、帰り道に車に水をかけられたそうでね」

「……っ!」

葉月さんの言葉に、つい肩が動いてしまう。理由はわかる。昨日、敦さんが私を庇って車に水をかけられたから。

そしてその時に芋づる式に思い出してしまう。敦さんに抱きしめられたことを。

「~~~~~!」

あの感触と体温、そして匂い。ぶり返すだけで頭が沸騰しそうになる。

そんな私の気持ちはよそに、青葉ちゃんと葉月さんは話を進めている。

「それでなんだけど、誰か敦君の家に行つて欲しいんだよ」

「お見舞いってことですか?」

「それもなんだけど、敦君からタバコを取り上げてほしいんだ。きつと家にも備えているだろうからね。少しでも早く直してもわないと」

ああ、うちのせいで少し大変なことになつとる。確かに、タバコは風邪の治りを悪くするって聞いたことがある。

それも当然だ。敦さんは何でも屋ではあるけどこの会社の主力の一人。これからマスターアップで忙しくなるからなるべく早く入社して欲しい葉月さんの気持ちも分かる。

それが私が原因つてのが一番の問題なんやけれども。

「わかりました。じゃあ私が——」

「コラ青葉っ！」

元々人が良い青葉ちゃんは、二つ返事で引き受けようとすると、背後から八神さんにチョップを入れられた。

「今日のアンタの仕事、まだ遅れてるでしょ？」

「うう……そうでした」

「となると、ひふみんはダメだね。はじめは……そっちも忙しいかなら——」

「あのっ、私が行きましようか？」

私は呼ばれる前に手を上げた。

なんで自分でもこうしたのかわからない。ただ、敦さんが風邪をひいた理由が自分であること、そして昨日のこと。ソレより前のことも含めて、私になにかしなくちゃいけないという感情に駆られた。

「おっ、じゃあ、お願いして言い？」

「……はい。わかりました」

「それにしても、ゆんが自分から言い出すなんてめずらしいね」

「そんなことないですよ」

「そう？」

「……」

「……」

八神さんはなぜか、私の顔をジッと見つめる。まるで何かを勘ぐっているような。そして、何かを納得したかのような表情を見せるとすぐにその視線を外した。

「じゃあ、よろしくね」

「は、はい。わかりました」

「これ。敦君の住所。近いからすぐ着くよ。もし、敦君がタバコを出さなかったら。渡すまで帰ってくるなって言われたと言えば良い。

そうすればきつと折れるから」

「はい……」

その後、私は葉月さんに渡されたメモを元に、会社を出て敦さんの家に向かった。その道中、先ほどの葉月さんの言葉が妙に引っかかった。

葉月さんって、敦さんの事、かなり詳しい。確かに二人が話しているところは社内でもよく見かける。いつも、仕様変更について大喧嘩している事の方が多いけど。それを抜きにしても二人が一緒にいるシーンはよく見かけるのだ。

まさか敦さんと葉月さんってそういう……。

いやいやいやいや。それが今何が関係あるっちゅう話やねん。

そんなのどうでもええやんかどうでも！

どうでも……。

「……」

敦さんと葉月さんが二人でいる光景を思い返すだけで、落ち着かない。どこか胸がチクチクして仕方が無い。この気持ちの正体は私はまだ理解したくなかった。

一人で悶々としているうちに、気がつけばメモに書かれた住所の場所にたどり着いた。そこはなんの特徴も無いマンション。本当に、どこにでもあるような普通の集合住宅だった。

あの人、本当に家あるんや。

ここで若干失礼な感想を抱いてしまうが、仕方が無い。だって、基本的にあの人は八神さん以上に会社で寝泊まりするひとなのだから。住民票とかも会社の住所にしてそうなものだとばかり思ってしまった。

「えっと、部屋の番号は……」

部屋の番号から推測するとおそらく1階。階段を上らなくて良いのはうれしいけど、思っていた以上に敦さんの家に着くという事実が変な焦りを生んでしまう。

「あった」

敦さんの家の前までやってきた。

番号からしておそらく間違いないだろう。流石にいきなり開けるほど無遠慮ではないのでベルを鳴らす。

「……」

返事が無い。

あれ？ もしかして間違ってる？

改めてメモを見返して見るも、この住所で間違いない。

「あ、あの一。敦さーん！ いますかー？」

ドアを叩いて、名前を呼んでも返事が無い。

ここまで無反応だと、先ほどの焦りよりも別のことで焦ってしまった。

ま、まさかやと思うけど、死んでたりせえへんよな？

扉の向こうではもう敦さんが孤独死しているかもしれないと思うと、体温が下がっていくのを感じる。

「入った方がええ？ その前に警察に通報？」

一応、そういうグロテスクなモンスターは何度か作ったことはあるけれど、リアルのはそれはNG。というか、それが耐えられる人間なんておらんやろ。

「……とりあえず、現場を確認しないことには」

恐る恐るドアノブを掴んでひねってみると、驚くほど簡単に開いた。

「鍵閉めてないやん。不用心すぎるやろ」

ここまで尻込みして、ようやく決心が付いた私はゆっくりとドアを引いた。そこで腐臭とか出るんじゃないかとビクビクしながら。

「……」

しかし、臭いは全くなかった。考えてみれば当たり前か。仮に死んでも一日しか経っていないし、腐臭ならもつと広い範囲で被害が出るはずや。

「あ、あの、敦さん？ 私です。ゆんです。入りますよ？」

最後の確認を済ませてから、ドアを全開にして部屋に入った。そして――

「……」

ドアの向こう側にあつた光景は意外にも普通の部屋だった。

本当に普通の部屋。一人暮らし用の狭いワンルーム。最低限の家具に、本棚、そしてパソコンしか置いていないデスク。そのほかはまったく飾り気がない質素な部屋。

ある意味で何も無い部屋。趣味の類いのモノも、一切無い。

ただ一つ、普通じゃ無いものがそこにあるとすれば、ベッドの中に膨らみがあることだけだった。それを見て驚きと安堵が同時にやってくる。

「敦さん！ 生きてますよね!?!」

慌てて布を引きはがす。そこにいたのは、風邪をひいて眠っている敦さんだった。

「……うう、あ？ 誰だ？」

私が騒いで起きたのか、急に布団を取られて驚いたのか。敦さんはうなり声を上げながらのっそりと身を起こす。

見てみると顔が赤く、衰弱しているのが一目で分かる。熱も高いせいか、汗もひどい。

「私ですよ。ゆんです。わかりませんか？」

「あ……ああ、お前か……なんでここに？」

「葉月さんに頼まれたんです。タバコ取り上げてこいって」

「葉月の差し金か……つたく」

葉月さんに言いつけられたことを言い出す前に、敦さんはポケットにあるタバコと愛用しているらしいライターを私に見せた。

「ほらよ」

「あ、どうも」

意外とすんなりと渡してくれたので拍子抜けする。もっとゴネると思っていたのに。

敦さんのタバコの箱は、佐藤さんが使っているものよりも小さく、箱のロゴはH O P Eと書かれていた。ライターも、キズやへこみ具合から、かなり使い込んでいるのが見て取れる。

「……なんだよ。どうせあれだろ？ 葉月に取り上げるまで帰ってくるなって言われたんだろ」

「……はい」

素直に答えると、敦さんは目に見えて不機嫌な顔をする。元々悪い顔色がさらにひどくなっている。もう見ているこっちまでしんどくなるほど。

「んじや、さっさと帰れ。これでも薬はもらってる。心配するな」

「……」

「なんだよ」

「ちよつと待っててください」

「お、おい」

もう、見ていられなかった。呼び止める敦さんを見無視して部屋を飛び出す。

多分、あの時の敦さんと同じ気持ちだったと思う。

それからのうちは無我夢中やった。元々、面倒見がいい性格である自覚はあるけれど、今回はいつもと違った。

何かしないとという、よくわからない使命感に背中を押された。考えるよりも、身体が動いた。

あの時抱いた疑問。敦さんをどうしたいのか、それはまだわからへん。でも、このまま何もせずに帰ることだけはできなかった。

そして、

「……なんか、悪いな」

「謝るんだったら風邪なんてひかんといてください」

敦さんが食べることができて、最低限滋養のある食べ物。飲み物。

後は身体を拭くタオル。

彼の部屋に無いであろうものを一通り買ってきて用意した。

最初から料理をする時間はないけれど、食器はあったからレトルトのおかゆでも十分はず。

「……そもそも、お前を庇ったからこうなったのだが」

「っー」

その話題になると、また顔が熱くなる。

またこの人は！

やっと忘れられそうになったと思ったのに！

「いや、悪いのはこっちだな。もっとやりようはあった」
しかし、弱っているせいかな、敦さんはすぐに引き下がる。それより、さつきまで赤かった顔が急に青ざめている。

「……あの、昨日の件なんだが、セクハラとか訴えたりしないよな？」

「……」

「飯島？」

なんか、変なところを気にしている敦さんに呆れてものも言えなくなってしまう。たしかにびっくりはしたけど、守ってくれたわけやし。一応、親切にしてくれた人にそないなことできるわけあらへんやろ。

「私は別に気にしてませんよ」

「いやでも、昨日は悲鳴上げてたじゃん」

「そりゃ、いきなりあんなことされたらっ……くっ!!」

今度は自分で墓穴を掘ってしまう。

あかん。とりあえずなんかせな。自分のペースがどんどん乱れてしまう!!

「と、とにかく、次は上の服脱いでください!!」

「は？　なんで？」

「体拭くんです。そんなに汗かいてたら治るもんも治りませんよ!!」

「いや流石に自分でー」

「ええからー!」

凄むと敦さんは渋々だけど、シワだらけのトレーナーを脱ぎはじめる。なんでもいいから顔を見られたくなかった。このまま逃げて帰るのも、負けた気がしてできなかった。

「ほら、これでいいか？」

「……はっ」

不服そうな敦さんには構わずに濡れたタオルで彼の背中を触る。

敦さんの背中は、一言で言えば枯れていた。

痩せてはいるけど、スタイルのいい体ではない。全体的に肉がつい

ておらず、本当にすぐに折れてしまいそうな枯れかけの木を彷彿させる。

それでも、タオルごしに感じる硬い感触は、男性らしさをわずかに醸し出していた。

「……敦さん、その腕」

背中を拭いていると、彼の右腕に視線が集まった。彼の細腕は、肘と手首の間にイビツなみみず腫れのようなものがあつた。

「ああ、これか？　ちよつと事故つてな。骨が折れたんだよ」

「そうだったんですか」

敦さんが怪我したところなんて見たことがないから、おそらくそれは私が入社するよりずっと前のことだと言ふことだけわかる。

それと同時に、私は敦さんのことをまだほとんど知らないのだという事実を実感させた。

「でも、治つたならよかったですね。右腕なんて、敦さんにとっては命みたいなものですし」

「………そうだな」

そのときの敦さんの顔を見ることが出来なかつた。だけど、その異様な間と声色が、とても悲しげに聞こえたのは気のせいなのだろうか。

なんのことだろう。

知りたい。聞きたい。教えてほしい。この人のこと。もっと。

無意識に、だけど強く、願ってしまった。

「……」

だけど、やめた。

背中越しから聞こえる敦さんの悲しい声をこれ以上聞きたくなくなつてなかつたから。

だから、私はあえて話題を変えた。昨日から言えずじまいだったことを。私が言わなくちやいけないことを。

「あの、敦さん」

「？」

「昨日はありがとうございました。それと、私を庇つたせいで風邪

をひかせてすみませんでした」

こんなこと、正面からでは絶対に言えない。だからここで言うしかなかった。

そうしないと、今までしてくれたことに対して、何も出来ないから。それを聞いた敦さんは、一呼吸置いたあと、いつもの調子で言った。「ま、それが聞けただけでもこうなった甲斐があったんてもんだな」「それどういう意味です!? 私は今こうして看病してるのは入ってないってことですか!？」

「ああ? そりゃ勿論入ってるさ。お前みたいな可愛いヤツに看病される機会なんざ、もうないと思ってたからな」

「なっ!? ……っ。そんな軽口叩ける元気があるなら早く治してくだ……さい!!」

これ以上変なところを見せないために、拭き終わった背中にタオルを思いっきり叩きつける。

「痛ってえ!!」

「前は自分で出来ますよね! 私はもう帰りますから!!」

痛がる敦さんには一切目をくれず、私はモデルルームのような彼の部屋を後にした。

ああもう! この人はなんていう殺し文句を!!

無自覚で言ってるんやったら悪質すぎるやろ。

どこのホストやねん!!

「……」

敦さんから逃げるように飛び出して、会社に戻る道中、ついさっきの会話を思い出してしまう。

可愛いつて……。

可愛いつて……!!

「くぅ……」

敦さんの肉声が、私の頭を何度もループしてしまう。私は熱くなる顔を押しさえて、道の隅でしゃがみこむしかなかった。

● 佐藤視点

「ゆんってき、敦さんのこと好きなのかな？」

「あら、そうなの？」

飯島が一足遅れて帰っていった矢先のこと、給湯室で八神と遠山がそんなことを話し出した。

A Dである彼女と、元々よく会社に泊まるのが習慣になっている八神がこの時間になってもここに居ることは珍しいことではない。

かくいう俺も、また仕事を押し付けられたわけだが。

「なんか最近、敦さんのことよく見てたし、今日だって、自分から立候補したようなもんだしさ」

「へえ、なんて言うか意外」

「そうでしょ？」

「それもあんだけど、コウちゃん、みんなのことしっかり見れてるじゃない」

「そりゃあ私だってそれなりに気にはなるよ。私だって色々あったわけだし」

こうして二人だけの領域を間近で展開することもいつものことなのだが。

しかし、あの飯島が敦さんを？

確かに意外ではあるな。

敦さんいくつだ？

確か32だから、年の差10は離れてるぞ。よくやるな。

「私もさ、別に職場恋愛は否定しないよ。それで仕事が手につかなくなるなら問題だけど。みんなしっかりしてるし。りんはどう思う？」

「私!? 私は……そういうのはちゃんと応援したいかなーって思うわ」

「……」

遠山の声色が明らかに違う。これで八神は遠山の気持ちに気づいていないのはなんでなんだ。

なんかもうちよつとイライラしてきた。

「にしてもさ、問題は敦さんだよなー。あの人そういうの鈍感そう」

「確かにそんな感じね。こういうのは、やっぱり相手の方もちゃんと気がついてあげてほしいわよね」

「ねー」

俺は無言で二人の頭をつかんだ。

「……………!?!?」

左手で八神のポニーテールを雑にワシヤワシヤ。

右手で遠山のボブカットを丁寧にワシヤワシヤ。

お前ら人の気も知らないで。あと人の色恋沙汰にとやかく言うのもなんかイライラするからやめてほしい。

「ちよつと佐藤！ 何すんのよ!?!」

「なんかイライラしたから」

八神は普通にキレて、遠山はなんでこんなことされたのかわからず困惑している。

両手を離れた俺は、今度はそのまま遠山の頭をつかんだ。

「!?!」

「あのな、八神。そういうのに第三者が介入しても、ロクなことにならないぞ」

そして遠山の頭を万力のごとくゆっくりと力を込め始める。

「さ……………佐藤君? 痛い……………」

「なんか、重みがあるわね。アンタが言うと……………」

俺の手のなかでカタカタと震える遠山を、八神はなぜか感心するよ
うな顔で言うのだった。

なんか！ 女の子多くないですか!?

青葉視点

仕事帰り、私は敦さんの家に向かっていた。日中は忙しくて持ち場を離れられなかったのもあるけれど、仕事のことをたくさん教えてもらってお世話になっている。

家も会社の近くにあるなら、少し立ち寄ってみてもいいだろうと、葉月さんから住所を聞いたのだ。

「ここ、か」

行き掛かりのスーパーで買ったものを引き下げながら、私は敦さんの住居であろうところにたどり着いた。

彼の家に行っていたゆん先輩にどんな場所か聞いてみたけど、本当に普通のマンションだ。

というか、敦さんって本当に家あったんだと、内心ホツとしてしまう。それこそ八神さん以上に会社で寝泊まりしているのだ。失礼かもしれないけど、そう思われても仕方がない。

敦さんの部屋の前までやってくると、私は呼び鈴を鳴らした。鳴らしたはいいけれど、少し緊張する。今まで男性の部屋に入ったことなどないからだ。

お父さんにこのことを話したら卒倒されるかもしれないと思うとなおさらだ。

呼び鈴の音がしてから数秒。玄関の向こう側から人の気配がする。きっと敦さんだろう。

彼が玄関の前に来る前に、呼吸を整えて気持ちを落ち着かせる。はじめて出社したときも、こんな感じだったなあ。

と、3ヶ月も経っていないのに懐かしさを感じてしまううちに、玄関が開いた。

「涼風？　なんでお前が？」

「えっと、あ…敦さんのお見舞いに来ましたっ」

と、変に裏返ってしまう声と共に、両手で持っていたレジ袋を差し出す。

現れたのは、いつものくたびれた顔。ちよつとボサボサになった髪の毛、どれも敦さんだと言うことが分かる。

よかった。見たところ元気そうだ。まだ熱が残っているのか顔は赤いけれど、こうして出迎えてくれるということは順調に回復しているみたいだ。

一日休んでいた割には、目のクマが取れていないのは少しきになるけれど。

「ああ、ありがとうな」

少し申し訳なきそうにだけど、私の用意したモノを受け取ってくれた。

「いえ、いつもお世話になってるので」

思えば敦さんには助けてもらってばかりだ。だから、今日は自分も何かしてあげたいと思っていたから、こうしてお見舞いに行けて嬉しい。

「敦さんは、もう夕飯は食べたんですか？」

「いや、まだだけど」

「じゃあ、私が用意します」

「流石に悪いって、もしうつしちまったら面目がたたねえよ」

「ちゃんと手も洗います。マスクもしてます！」

どうしても食い下がってしまった。私はあの屋上の時から、まだ敦さんに何もできていないのだ。未だに何をどうすればいいのか自分でもよく分かっていない。それだけ今の自分が実力不足だからだ。

ならば、せめてこういう時くらい何かしてあげたい。

私は敦さんの顔を見上げ、その目をジッと見つめる。しばらくすると、観念したのか小さくため息をついた。

「じゃあ、お願いしようかな」

「はいっ」

私は敦さんの部屋の中に入った。

敦さんの部屋は、思っていたより片付いていた。というか、何も無いと言う方が正しいかもしれない。

確かに、クローゼットなどの最低限の家具やベッド、テーブルと背

の高い本棚が一つ。それ以外は本当に何も無い部屋。特に、敦さんがここで住んでいるという形跡を感じる事ができない不思議な違和感があった。

何が一番気になるかって、敦さんの趣味のモノがまったくないのだ。

はじめ先輩のようなフィギュアやアニメグッズ、ゆん先輩のようなドクロや装飾の数々、うみこさんのようなモデルガン。

そう言ったような、敦さんのモノを象徴する何かが無い。例に挙げた人たちが珍しいだけなのか、私の感覚が麻痺しているだけなのか、とても異様に感じた。

敦さんのデスクと同じで、まるで空っぽと言っても差し支えない。

「敦さんは寝ててください」

と、いつまでの部屋の様子を見ても仕方が無い。早く敦さんのご飯を作ってあげないと。

慌てて支度に取りかかる。料理はそこまで自信はないけれど、今から作るモノなら簡単だから大丈夫……だと思ふ。

「あの、すみません。少し、失敗しちゃいました」

私はテーブルの席に、縮こまるように座っている。いつも佐藤さんにからかわれているけど、今日は本当に小さくなってしまっそうだ。

少し、というにはあまりにもひどいのは無いかという位の失敗をしてみました。作ろうとしたのは鍋焼きうどん。向かい合っている敦さんの前に置かれている。

それ自体はそれなりに上手くできたのだ。問題は、台所の方だ。

今までは実家のキッチンを使っていたのだけど、ここは敦さんの家。料理中に調理器具の場所とかが分からなくなってバタバタしてしまい、調理器具やら鍋やらがぐちゃぐちゃになってしまっている。

最初から場所とか段取りを建てておけばこんなことにはならなかったのに、敦さんに何かしたいと思うあまり、周りが見えていなかった。

「まあ、気にするな。一応、ちゃんとできてるんだし」

「うう、ありがとうございます」

ああ、寧ろ気を遣わせてしまった。これじゃあせつかくお見舞いに来た意味が無い。あとでちゃんと片付けてあげないと。

敦さんは落ち込んでいる私を見て、テーブルにのっている鍋焼きうどんをゆつくりと食べ始めた。

「うん。うまいじゃないか」

「ホントですか？」

「ああ、本当だ」

「あー、よかったあ」

彼のゆるんだ表情を見て、ようやく安堵できる。これで味まで失敗していたら本当に自分は何しにここに来たのか分からない。

体調を悪くしただけになれば、それこそ面目が経たない。

……ゆん先輩はもつと上手にできたのかな？

と、何故かそこで先に敦さんの家に来たであろう先輩の名前が頭に上る。あの人、私が入社した頃の頃は敦さんの事苦手って言ってたけど、最近敦さんの事を気にしていたような。今日だって、私に変わって自分から立候補したようなものだし。

私の気にしすぎなのかな？

と、尊敬する人に対して失礼な勘ぐりをしてしまう自分に恥ずかしくなる。それよりも、敦さんが食べ終わる前に台所を片付けないと。悲惨なことになっている台所と向き合った私は、片付けに取りかかった。

「あれ、洗剤どこだろ。スポンジは？ ああっ！」

「……なんか、ホントにすまん」

●

「まああれだ。来てくれてありがとうな」

「……いえ」

はい。なんとか片付きました。いやホントにもう、疲れしました。慌てたせいで鍋を何回か落としてしまって、床に落ちた洗剤を踏んづけて転んだりして、もう踏んだり蹴ったり。お皿とか無くて本当に良かった。

「今日は遅いし、タクシーでも使え。金は出してやるから」

「だ、大丈夫ですよそんなの」

「バカ言え。お前みたいなのが、夜中に一人歩かせるたら不安で余計に具合が悪くなるわ」

「そつ、それってどういう意味ですか!？」

また子供扱いされて声を上げてしまう。佐藤さんと言いだすと言いだす、人をなんだと思ってるんですか!？」

これでもれっきとした社会人だし、高校だって卒業してるんですよ!

「いいから、受け取ってくれ。飯も作ってもらったしな」

「……はい」

でも、ベッドの上にいる敦さんの真剣な目に出てきた反論は押さえつけられてしまった。やっぱりこれじゃあ、どつちが気を遣っているのかわからない。

自分でもちよつと嫌になってしまう。

敦さんからお金を受け取って、タクシーを呼んでもらうのを了承せざるを得なかった。私が顔に出やすい性格なのは自分でも理解しているけれど、敦さんにもそれは悟られたようで、急にこんなことをいでした。

「まあ、あれだ。タクシーくるまでで少し時間あるし、俺が画いた絵でも見てみるか?」

「えっ……いいんですか?」

「八神と勝手は違うかもしれないが、勉強になるだろうしな」

「いえ、お願いします」

敦さんの絵。

そう言えばキャラデザをしていると言っていたけどみたことが無い。どんな絵なのか興味がある。こんな機会なんてそうそう無いし、見せてもらいたい。

「んじゃ、その本棚にあるファイルにまとめてあるから見てみる」敦さんが指さす先にある本棚。そこにはクリアファイルぎつちりと詰まっていた。他に本棚に入っているのは、プログラミングやサウンドのソフトについて書かれた本と思われる。それ以外は、全てその

ファイルだった。

その中にある一冊を手にとって開いてみる。

描かれてあったのはすごい魅力的なキャラクターばかりだった。

可愛らしい女の子から、少し渋いおじさん、さわやかな少年に、ちよつとセクシーな女の子の人。ジャンルはファンタジーに寄っていたけど、本当に多岐にわたる。武器や衣装の装飾の繊細さ、鎧の質感、ある意味では八神さんよりも表現できているものがあると思えた。でも少しだけ、眉間にしわが寄るのを感じる。

というのも、

金髪のボブカットに白ウサギを彷彿させるバニーガールのような衣装を着た女の子。

長い水色の髪に白いワンピースの女の子。

大きい角に紫色の三つ編みをしたおっぱいの大きいお姉さん。

ネズミのようなカチューシャをした白髪で水着を着た少女。

「な、なんか！ 女の子多くないですか!? それもちよつとエッチなの！」

「ああ!? よく見ろ！ 他にもあんだろぅが！」

確かに、剣を持ったさわやかな少年とかライフルを構えた渋いおじさん、胸を大きく開いたタキシードのような衣装まとった色気のある男性。鎧に身を包んでキリツとしたお兄さん。神々しい男性等々。

男性も色んなジャンルを描いているのはわかるけれど、それを差し引いても女の子が目に見えて多い。色々出ているところが出ている。

大きい胸とか脇とか背中、太ももとかお尻とか!!

特に一番最初に出た金髪のボブカットの女の子。衣装の種類が尋常では無い。

これ、敦さんの趣味なのかな？

あ、それにこの子結構胸大きい……って何考えてるの私！
「……」

ふと、自分の視線が胸元に行く。

恐ろしいほどに真っ平ら。確かに、敦さんが描くキャラクターにもこんな子はいるけれど、なんだか負けた気になってしまう。

い、イヤイヤ!

あくまでこれはイラストであって、そんな邪なことなんてないはずだ。そうだ。そうに違いない。

「あの、他のも見えて良いですか?」

「ああ、いいぞ」

一応、最低限の遠慮を取ってからまた本棚と向き合う。私の手じや届かないところがあるくらい高い本棚には、敦さんが画いた絵が記録されたファイルが最後まで並べられていた。

「んっ……」

私はそれに負けじとなるべく背伸びをして一番高いところのモノを取ろうとする。なんだかここでこれに手を出さないと本当の敗北者になってしまう気がする。

「おいおい、危ないぞ」

「いえっ……大丈夫です」

賢明に手を伸ばすと、一番高い段にあるファイルに一つ触ることができた。爪先でなんとかたぐり寄せるとだんだん近づいてきた。

「もう、ちよつと……っ」

靴下のつま先立ちをなんとか伸ばし、ついにファイルを掴むことができた。

が――

「あっ!」

「涼風!」

視界が回る。

意識が点滅する。

目の前に敦さんの顔が見えては暗転、それを何回か繰り返す。どうやら私は転んでしまったようだ。

「大丈夫か? 涼風っ」

「あ、いえ、大丈夫です。ちよつと転んだだけ……あたっ」

身を起こした時、上から何か振ってきた。敦さんの手にしては固いし軽い。私の頭の上ではねたソレは、乾いた音とともに床に落ちた。

「これは……」

私はそれを手にとって見る。それは、ディスク入っているケースだった。真っ白のソレは見覚えがある。それは、八神さんが見せてくれたフェアリーズストーリー3のβ版に使われていたディスクと似ていた。

そして、そのディスクには油性のマジックで二つのことが書かれていた。

『フェアリーズストーリー プロトタイプ版』

『2008年10月15日』

と。

「おいっ!」

「あっ」

私が手に取ったそれを、敦さんに取り上げられた。

「そろそろタクシー来るだろ。ここ片付けておくから」

「あ、あの」

「いいからっ」

それはあまりに突然で、一瞬の出来事すぎて思考がついていけない。

わかったことは、敦さんは私がそれを見た途端、異様な慌て方をしたこと。ただそれだけだった。

「今日はありがとうな。ほら、さっさと帰れ」

敦さんの不自然すぎるほど優しい口調でそう言われたわたしは追い返されるように部屋を出た。

外ではタクシーが待っていた。帰るしか無い私は、運転手の人に挨拶してから車内にのり、家の住所を伝えた。

タクシーにゆられながら、私はふと、先ほど目にしたディスクに書かれてあることを思い出した。あのディスクに書かれていることが少し気になったのだ。

それは日付。

2008年10月15日。

今は2016年だから、あのディスクが作られたのは8年前のことになる。

「ん？」

そこで、私は決定的な違和感に気がついた。

高卒だった八神さんがイーグルジャンプに入社したのは7年前。フェアリーズストーリーのキャラクターデザイナーになったのも7年前。つまり、開発が開始したのは7年前だという事になる。

でも、あのディスクに書かれていた年数は、2008年、8年前のモノだった。それには確かに書いていた。

『フェアリーズストーリー プロトタイプ版』
と。

タクシーに釣られて視界が揺れる。

「あのディスクは…一体、なんなの？」

窓ガラスの向こう側から覗くビルのままばらな光が、私をじっと睨んでいた。

業界にあつた怖い話十

佐藤視点

マスターアップが刻一刻と迫る中、残業として夜遅くまで会社に残ることも多くなっていた今日この頃。仕事を片付けた俺は敦さんと増田の三人で帰り支度を済ませているところだった。敦さんはどうだか知らんけど。

俺達三人が共に行動すると言うことは、意外と珍しい話では無いのだ。というか、開発チームで数少ない男性社員である以上、肩身の狭い思いをしているのは同じなのだ。共に行動する仲としては、十分すぎるくらいの状況だ。

「途中まではまだ降ってなかったのに…傘、持ってきてよかったですわね」

オフィスの中はただでさえ暗く、外では雷と大雨が降っていた。

「ああ、全くだ」

「敦さん、また風邪なんてひかないでくださいよ」

「わかってる。これ以上身内に迷惑かけるわけにはいかないしな」

風邪が治ったばかりでまた風邪をひいたらシャレにならん。特に敦さんに関しては一泊休んで欲しくないのがディレクター達の願いであろう。本人はどれだけ酷使されれば気が済むのか知らんが。

「残っているのはもう僕たちだけなんですかね？」

「いや、今日はフルバックアップがあるから、葉月とかリーダーとか、何人が残ってるはずだ」

「雷で停電したらマズく無いっすか？」

改めて窓から覗く景色を見る。さきほどまで雨は小ぶりだったが、いよいよ本降りになり始めた。雷も何度か大きいのが落ちてきている。もしこのビルに直撃でもしたら最悪サーバーのデータ吹っ飛ぶのではと恐ろしくなってきた。

だが、敦さんが言うには杞憂らしい。

「それに関しては問題ねえよ。無停電電源装置が作動してる。サー

バールームの方もな」

そういう部分の知識についてはこの人の右に出る者はいないのだろう。実際、停電でデータが破損したとなれば発売中止になるのだ。会社としては大打撃になるだろうから、当然の措置と言える。

「問題があるとすれば、アクセス集中とかによるサーバーが一部ダウンとかだな。開発が佳境になればそれだけ発生しやすくなるぞ」

「敦さん、変なフラグ立てるようなこと言わないでくださいよ」

「んなこと言っても仕方ねえよ。起きたら起きたで対処するしかねえんだ。ほら、さつきと帰ろうぜ」

「って、会議室に誰がいるんでしょうか？」

オフィスに入る道中、暗くなつた廊下を歩いていると会議室のドアが一つ開きかけているのに、増田は気がついた。そこから光が差し込んでいる。おそらく中に誰がいるのだろうが、こんな時間に会議なんてやるか？

それこそ、先ほど議題にあつたバックアップの件ならば話は分かるのだが…。

「ぎゃあああああああ!!」

「!?!」

会議室の中から、甲高い悲鳴が聞こえた。

夜のイーグルジャンプ。外はただでさえ雨雲で月明かりすら入つてこないこの薄暗い場所で、そんな悲鳴を聞いて驚かない人間がはたしているだろうか。

どちらにせよ、確認しないわけにはいかない。

俺達は駆け足で件の会議室へ向かう。すぐさま開きかけていたドアを全開にして、中の様子を伺うと

「って、お前ら何やってんだ？」

「うわあ! ってなんだ佐藤達かあ。びつくりさせないでよお」

俺達が扉を開けたのに驚いた八神はとりあえず無視して状況を把握する。

会議室の中にいたのは、キャラ班の面子、プログラムのうみこに、ディレクターの葉月さん。さらには、さつき帰ったはずの桜までもが

いた。

「おい葉月、お前また好みの女囲んで何してんだ？」

「心外だねえ敦君。私達は、夏恒例、男子禁制のこわくい話大会の真っ最中なのさ」

「うちにそんな恒例行事ねえだろうが」

なるほど。

さっきの悲鳴はそれか。

おそらくこの中の誰かが特段良いネタをぶっ込んだのだろう。だから会議室の中を各々が囲い会うように座っているのか。

それで、さっきの悲鳴の正体だが、それも見当が付いた。涼風の腕に抱きついている桜だ。元々そういうのが苦手な八神を覗いて、他の面々とは一線を画す怯え方をしている。

……どれ。

「なあ、桜」

「えっ!? 私!？」

「車のバックミラーを見たら、首の無い女が乗っていて——」

「ぎやあああああああ!!」

「ちよつとアソビに行こうとしたらうみこに見つかって——」

「ぎやあああああああ!!」

「…ある日、森のクマさんが——」

「ぎやあああああああ!!」

「勢いで怖がってるだろ、お前」

涼風といい、桜といい、本当に面白い反応を返してくれる。

が、少々やり過ぎたようだ。さっきのネタの余韻もあるのか今にも泣きそうになってしまっている。ああ、スッキリした。

「サトーさんのバカ。怖くて帰れないよお」

「ねねつちを苛めないでください!」

「もう、佐藤君。あんまりねねちゃんを怖がらせちゃだめよ」

「…俺のせいだよ」

遠山に叱られるが、正直これで怖いレベルに入るか？

文脈なんてあったもんじゃ無いし、ちよつと深刻な雰囲気話した

だけだ。それに、思わぬ形で飛び入り参加してしまったのだ。何も話さないよりはかはマシだろ。

しかし、悪者扱いも気に喰わん。

「つたく、しょうがねえな。車で家まで送ってやんよ。夜遅いし、雨もしばらく止まないだろうし」

「…佐藤さん、ありがと」

「あと三人くらい乗れるけど、他に乗りたいヤツいるか？」

「あ、佐藤君、私いい？」

「うちもお願ひします」

「じゃあ私もお願いしていいですか？」

この場で手を上げたのは、遠山と飯島、涼風でちょうど三人。

どの道長丁場になる。多少増えても構わん。しかし、遠山の方は、まだフルバックアップを確認するまでは帰れないという。

それまで、この怪談大会に興じる羽目になるわけだが、俺はもうネタを言ってしまったわけだし、見たところ、ここにいるのも全員話し終わった後のようだ。

だとすると、他に話せる人と言えは……。

「敦さん、なんかあります？」

「俺か？」

「敦君はホラーが苦手だからねえ。そういうのできないんじゃないかなあ？」

「ああ？　ならやってやんよ。SANチェック失敗しても知らねえぞ」

葉月さんに発破をかけられた敦さんは、乗り気になっているのか饒舌に話始めた。

「とあるゲーム会社に出向してきた親会社の役員が、その会社の経費削減のために一人のベテランデバツカーをクビにしたんだ。おかげで人件費が少し減り、バグが減ったので大幅に人月が少なくなつた。その役員は評価されて本社に出世して帰ったそう。めでたしめでたし」

「「「いやよくなーい!!」」」」

ある意味、この場所で一番恐ろしいことを抜かしやがったよこの人。

「あ、敦さん、それって、バグが無くなったのではなく、見つからなくなっただけのことですか？」

怯える涼風が言うとおり、バグが減っただけで、バグそのものが無くなったわけではない。つまり見つけることができなかつたバグが放置され、そのまま発売されると言うことになる。何が質が悪いつてそれをやった張本人がチャツカリ出世して、その会社から出て行ったことだ。

挙げ句、その責任をおつ被せられるのは親会社では無くそのゲーム会社。普通にうちの会社でもあり得る話だ。

実際、その場にいるうみこや葉月さん、遠山に関してはもう怖がるのを通り越して、今にも身体を壊してしまうそうなくらい青ざめている。

「すみません、少し気分が悪くなって来ました」

「私もちよつと目眩が…」

「……敦君、その話は本当に具合が悪くなるから止めたまえ」

「はっ、ざまあみろ」

してやったり顔の敦さん。

まあ、葉月さんからは普段からの鬱憤があるのだから当然と言えば当然か。

その点で言えば、桜は良くやれているほうなのだろうな。実際、うみこも敦さんも評価してたし。バグはない方がいいに決まってるが、見つからないと不安。

なんとも歪なジレンマだ。

「さて、あと話してないのはお前か、増田」

「ぼ、僕ですか!?!」

俺に呼ばれて大げさに肩と白い髪を揺らす。

落ち着きが無いのと、さっきまで黙っていたのはわかる。コイツ、あんまりこういう場所が苦手なのだ。特に、女性が多い場所。

今この瞬間がまさにそうだ。正直、話の流れで声をかけてしまった

のを後悔している。ただでさえ苦手な女性が多いのに、その中心で話をしなければならんのだ。

「純…君、あの、無理…なら、話さなくても、いい…よ?」

「あ、そうでしょうか」

「見かねたのか、滝本が助け船を出そうとする。」

が、

「あ、よく見たらこの子、噂になってたひふみんの気になる人じゃない?」

「!?」

八神が突っかかってきた。そう言えば、この前、滝本に気になる男ができたと話していたな。

ああ、増田のことだったのか。サウンドとキャラ班って遠いからあんまり縁が無いと思っていたがそうでもないのだな。

「!? そ、そんなこと…ない、よ」

「ほんとにいい?」

「ひふみ先輩って、こういう人が好みなんですねぇ」

「えっ…う、その…あの…っ」

戸惑う滝本を見るのが面白いのか、なぜか篠田まで便乗している。助け船を出したせいで、滝本に矢面が集中している。こう女性が多い場所だと色恋沙汰というのは話題やいじりのタネになるのは宿命なのだろうが、正直これは俺にも若干被害が出そうなのでなんとかせねば。

「…あ、思い出しました」

と、俺が何か言い出す前に増田が何かネタが浮かんだようだ。

「へえ、増田。なんだよ。言ってみろ」

滝本を助けるためにも、あえて俺は増田の話に乗ることにした。おそらくコイツは滝本に気がある。本人が自覚してるかは定かでは無いが、ここは共同戦線と行こう。

「えっと、ちょっととした噂なんですけど、この会社で女の子の幽霊が出るって聞いたことがあるんです」

「「……え?」」

滝本に迫っていた二人が固まる。

増田も余裕が無いのか、たどたどしい口調で続けた。

「なんか、夕方とかに出たって話を他のチームの人が話していたんです。場所はたしか…、滝本さんがいるキャラ班の近く」

「!?」

そのたどたどしい口調は、ある意味の現実味のある話し方となり、不思議と恐怖心の煽る形となった。つーか、俺の持ち場じゃねえかそこ。

「見たって人は2人ぐらいいて7月の中頃の夕方に忘れ物を取りに行った人そんな人影を見たとか」

「ねえ、一旦ストップ、ねっ!」

「そ、そうですよ。一旦落ち着きましょう!」

彼女たちが必死に止めようとする。当然だ、そこは彼女達も持ち場でもアリ、八神が寝床にしている場所でもある。そして、今が七月であることも、恐怖を増長しているのだろう。

増田も話すので精一杯で、周囲の制止を聞いている余力が無い。

「あと、10月の末にも」

「ねえ! ちよつと! 話聞いてよ!!」

「窓からずつとこつちを見ている女の子がいるって通報が実際に—」

「ぎゃああああああああああああああ!!!」

● 純視点

その直後、雷がビルに落ちて停電が起こってパニックになったあげく、パソコンのデータやらサーバーのバックアップやらでてんやわんやになったわけだが、両名無事だったため、僕達は家路につくことができた。

僕は滝本さんと一緒に最寄り駅まで向かっている最中だった。先ほどまで振っていた大雨も止み、濡れた歩道が街灯に照らされて小さく反射している。

「……なんか、すみません」

「え？ どう、して？」

僕は滝本さんに謝った。それは最後に話した女の子の幽霊の話。彼女が矢面に立ってしまうのをなんとかするためとはいえ、自分が働いている場所がそんな日く付きであるという話をしてしまったわけだ。

怖がらせてしまったかも知れない。

「……別に、気にして……ない、よ？」

そういう滝本さんは、怖がつているわけでも、気丈に振る舞っている訳でもない。普通にいつも通りの様子だった。

「だって、お化けは……生きて、ない……から」

「え？」

「実体が無くて、見えないなら、別に……鬼とか、妖怪とか、ゾンビみたいな、生きてる……みたいな、襲ってきそうなのは……怖いけど」

「……」

滝本さんらしいと言えば、滝本さんらしい考えだ。幽霊なんかよりも人間の方が怖いって話がありきたりな話ではあるけど、ある意味心理だ。とはいえ、そう聞くと逆に申し訳なくなつて来てしまう。

「……なおさら、すみません」

「え？」

「だって、滝本さん、話すの苦手って言ってたから、あんまり話しかけない方がいいのかなつておもっちゃって」

実際、今もこうして滝本さんと一緒に帰っているわけだ。帰り道が一緒だつてこともあるけれど、男の人が得意じゃ無い滝本さんが気まぐずい思いはしてほしくない。

「……そんなこと、ない。だって……純君は、怖く……ない、から」

「あ、ありがとうございます」

俯いているせいで顔はよく見えないけれど、確かにそう言ってくれた。

「あ、そろそろ駅、着いちゃった、ね」

「そうですね。じゃあ、僕は向こうの電車なので」

どうやら滝本さんとは逆方向の電車らしい。彼女と一緒に帰れるのはここまでのようだ。

「じゃあ、お疲れ様です」

「うん、お疲れ」

先に電車に乗った滝本さんを見送る形で、お互い帰路につく。

別れ際、さつきまで見れなかった滝本さんの顔は、ちよつとだけ笑っていた。

●

佐藤視点

俺は夜の街を車で走らせる。まだまばらに降っている雨が車のボンネットを小さくたたく音が聞こえる。

八神は会社に泊まるつもりで、篠田は雨が止んでから自転車で帰るはずだったのだが、増田の話を聞いて怖くなったのか、俺の車に乗せて欲しいとせがんできた。
が。

——悪いな八神、この車四人までなんだ。

と言って断ってやった。

涼風と桜、飯島はもう家に帰して、車に乗っているのは助手席に座っている遠山だけ。

「いいのか？ 八神、置いて来ちまったけど」

「うん。気にしないで。それに」

「それに？」

少々、遠山に悪い気がしたが彼女はそう思っていないかった。

真意を聞くために話を聞くと、落ち着いた口調でゆっくりと話始める。まるで、我が子を寝かしつける様に優しい声で。

「多分、その女の子の幽霊。悪い子じゃないかなって思ってる」

「…なんで？」

「だって、7月の中頃と10月の末。お盆の日とハロウィン。どれも、幽霊たちが現世に戻ってくる日」

「ああ、確かに」

この会社で働いていると季節感を忘れることがよくあるから、彼女

に言われて初めてそれに気がついた。

「だから、その子はちゃんと成仏してて、お盆の日だけじゃもの足りないから、ハロウインの日にも来てくれたのかなって。確かにその子が死んじゃたのはとても悲しいことなのだけど」

最後に彼女は笑いながら言ってみせた。

「その子がそれだけ大切にしてくれてた場所で、コウちゃんと佐藤君に出会えたんだなって思うと、素敵だなんて」

「……そうか」

横目で覗くその笑顔を見ると、とても穏やかで優しい顔。それは、俺が確かに惚れた、遠山りんの一番の笑顔だった。

柚子のシャーベット

俺は自分の顔が嫌いだ。

別に顔が不細工なわけじゃない。むしろ整った顔つきだと思う。それでも嫌いなものは嫌いなんだ。子供の頃からずっと頭を抱えてきた。

この顔のせいで、周囲から浮いた俺は見世物同然の扱いを受けた。そんな状態で、まともに自己を保てるわけが無い。

高校を出た俺は実家を出る口実として大学に通うことになった。結果として、俺はまた、今までと同じように周囲を拒絶しないと自己すら確立できない環境に身を置くことになるはずだった。

「やつほ、ゆずつち。今日も気だるそうだね」

「……」

呼び鈴も鳴らさず、ヤツはいきなり玄関を開けて入ってきた。

確かにヤツの手にはレジ袋に飲み物やら食い物やら雑誌やらが乱雑に詰められていた。だが、今はそんなものの口にする気力すらない。ヤツは図々しくも、俺の許しもないのにズガズガと俺の領域に侵入してくる。止めても聞かないのはわかっているから、もうとつくの昔に諦めた俺は怒鳴ることすら辞めて、ただベッドで横になっていた。

「冷蔵庫開けるね」

そのうえ勝手に冷蔵庫を開けて、買ってきたものを入れはじめる。相変わらず、失礼な奴だと横目に見ていると、冷凍庫まで開け始めて何かを入れようとしていた。

「おい、なんだそれは？」

「あ、これ？ シャーベット。柚子味の」

「……はあ、アイスは好きじゃない」

「えー。もう夏休みなのに？ さすがにゆずつちも冷たいの食べたいだろうなくって思ってたのに」

冷蔵庫の前に座って、これ見よがしに手に持ったアイスクリームを俺に向けてきた。黄色いプラスチックの容器に詰められたそれは、多少時間がたっていたせいか、周りに水滴ができていた。

「ゆずっちにびったりだと思ったのにな」

「なんで?」

「ほら、これ、柚子のシャーベット」

「……」

ヤツが突きだしたプラスチックの容器をよく見ると、黄色い柑橘系の果実のイラストがプリントされている。

柚子だ。柚子のシャーベット。ヤツはそれを冷蔵庫に入れようとしていた。

「ね? ゆずっちにびったりでしょ?」

「そのままじゃないか」

「そこがいいんじゃないのー。それにさ——」

ヤツは続けた。

「私、子供の頃田舎の親戚の家に行ったときに柚子採るの手伝ってたんだ」

「今も子供じゃないか」

「なー ヒドいつ!」

客観的で、正直な事実を述べるとヤツはあからさまに怒り出す。怒りたいのはこっちだまったく。

「それで、何が言いたいんだ?」

「柚子ってね、採るときにわかるんだけど、トゲが結構あるんだー。白くて可愛い花もあるのに、近づくと刺さって痛いから」

「……」

あらためて、ヤツの手にあるそれを見る。

「やっぱりゆずっちみたいだよ」

にこやかに笑ってくるヤツを見た俺は、なんとも言えない気持ちになるのをごまかしながら寝返りを打つ。

「……食べない」

「え!」

俺は布団をかぶり、コイツと俺の間にある空間を遮断する。そもそも俺はテスト明けで眠たいんだ。少しくらいは静かにしてほしい。だけどこいつが静かにしてくれることなどありえない。

「ちよつと、ゆずつちのぼかー!」

ああ、なんでこんなことになったのだろう。

こいつの名前は桜ねね。

クリーム色の髪をして、俺よりも背丈が小さいくせに、似合わないほどの胸にふくらみのある女。

なんで俺はこんなヤツを助けてしまったのだろう。

――

事の始まりは、俺が大学に入学して少し経った頃まで遡る。

その頃には、俺はもう講義を受けることはなくなっていた。単純に退屈なのと、話しかけてくる連中の相手をするのが面倒だったから。

まだ誰にも荒らされていなかった頃の何も無いがらんのどうの部屋。

ベッドと電話しかないアパートの一室で寝転がって1週間。

それにも飽きて本当にやる事がなくなった俺は、いつもの和服に羽織を纏って、自宅を出てもう真つ暗になっている街へ繰り出した。もう真夏とはいえ、外に出るときは肌を出したくない。

買物ではない。金は持ってない。

――ただ歩き回るだけ。

気まぐれに、気分次第に。

人がにぎわう明るい大通りを通ることもあれば、薄暗い裏通りも通る。あーなんか気になるなーみたいなのりで廃墟のビルにも入る。

別に特に何かあるわけでもない。ただ歩き回る。

それが俺の日課だった。

これは、散歩というよりは徘徊に近いかもしれない。別にコースなど決まってるからだ。

裏通りを歩いていると、人がいるところに出た。少し広い。

「……」

あーここ前に来たな。派手なピアスや刺青が彫られてる男たちが、物珍しそうに俺を見つめる。ここには不良に毛が生えたような奴ら

がうろつくところだ。多分、麻薬とかもここらで売ってる。

たまたま通りかかっただけだし。ここにいる奴らがどんな連中かなど知ったことではない。俺は敵意をしめさないようにしつつ、カモにされないよう無反応でこの場を通り過ぎる。足早に裏通りを抜け、また細かい路地に入る。

「あ…」

薄暗い路地をあてもなく歩いていると、また広いところに出る。そこで起きていた光景に、俺はわずかに目を見開いてしまった。

「やめ…誰かつ、助け…っ!」

そこには、大男が三人がもみ合っていた。

喧嘩か？

と疑ったが様子がおかしい。太い腕や身体の合間から、クリーム色の髪とこの裏路地に似合わないパステルカラーの衣服から覗く細腕。

さっきの高い声が女の声だと察した俺はようやくここで行われていることに理解した。

「あっ!!」

理解したのもつかの間、大男に押さえ込まれているソイツと目が合い、俺に向かつて声をあげやがった。そのせいか、ソイツに夢中だった三人の男の意識が俺に向く。

奴らにとつて、俺にこの状況を見られるのは面白くないのだろう。つまり、俺が奴らの標的にされたということになったことを示していた。

「おい！ 見世物じゃねえぞ!」

「……」

大男三人はアイツの手を離して俺と対峙する。俺は三人の体つきと立ち方を見てすぐにこの三人の実力を把握した。

……使う奴はいないか。

「なんとか言えこのクソガキ!」

大男の一人が俺に掴みかかってくる。ものすごい勢いだ。闘牛のように突進してくる。そのままぶつかったら俺の小さな身体ではひとたまりも無いだろう。怪我で済むかも怪しいかも知れない。

ソレを見ていたアイツが大声で叫ぶ。

「危ない！ 逃げ——」

——叫び終わる前に、事は片付いた。

「なっ……!?!」

他の大男たちも動揺している。

それもそのはずだ。なにせ俺よりも一回り大きな巨人が、俺のような小さな子人に倒されれば驚かないわけがない。

「……ふう」

倒れてる大男は気絶している。無理も無い。

俺はこの大男を、体重＋突進していた勢い全て乗せてこのコンクリの上に叩きつけたんだから。

実際に俺がしたのは掴みかかってくるコイツの腕を逆にとり、真下に振り下ろしただけ。

力なんて入れてない。

だって大きな力はコイツが親切にもくれたのだから

「やっちまえー!」

今度はもう一人の大男が服の中からナイフを取り出して突っ込んでくる。

銃刀法で許されてる六cmよりも大きな刃渡りのナイフだ。

このまま突っ立っていれば腹にぶっ刺さって死ぬ。なら避ければいい。

「がはっー!」

また大男が倒れた。別に、俺は何もしていない。

そう。ナイフを避けてちょうどコイツの頭があるところに手を置いただけ。

そしたら勝手に宙返りして倒れやがった。

「……!?!」

残った大男は訳が分からずパニック状態になってる。

こりやマズいな、さっさと仕留めねえとどんなヤケ起こすかわからねえ。

「おいテメエ！ 動くんじゃねえぞ！ でねーとコイツがどうなっ

てもしらねえのか!？」

「っ……いー」

予想通り、コイツも服の中からナイフを出し、さっきまで怯えていたクリーム色の髪のアイツを人質にとった。

アイツはナイフを始めて見たのか、言葉をなくしてる。てか服とか結構破けてんな。ブラとか見えちまつてるし。

「……」

正直勢いでここまでしてやったが、俺がコイツを助ける理由が無い。故に、人質というものが全く成立していないのだ。俺はたまたまこの場所に出てきてしまっただけだし。

…どうしたものか。正直、ここは向こうに引いてもらった方が楽ではあるのだが。

「なんとか言えよ！ このクソアマあ!!」

「……………」

ナイフを突きつける大男の言葉と同時に、俺は一步步歩き出す。大男の方へ。

「な……なんだよ!？」

「……」

俺は足を動かし続ける。

一歩ずつ、大男の前へ近づく。

「お……おい！ コイツがどうなっても——」

「ッ——!!」

言い終わる前に、俺は脚を高く振り上げる。打点の高い脚は、大男の顎を真横大きく揺らす。

「ア——ポ——」

俺は片足で一回転しながら回し蹴りの勢いを殺して静止する。その際、袴田が捲れそうになったので咄嗟にはたいて戻した。

「……ふう」

羽織を着直して足元を見ると、クリーム色の髪のアイツが腰を抜かしていた。

「ふう……」

回し蹴りを至近距離で見たのがそれほど恐ろしかったのだろう。俺は呆れながら着直した羽織をコイツに渡した。

「ほらよ」

「え……なんで？」

「ブラ見えてんぞ」

「!？」

ようやく気がついたのか、顔を始めとする真っ赤にして俺から羽織をぶんどって身にまとう。多分アドレナリンが全開だったからわからなかったのだろう。

「……」

なんとか一人で立つことはできたみたいだが、まだ震えている。まあ、男に強姦されかけて、凶器突きつけられれば当然が。

このまま帰すわけにもいかねえしな。仕方がない。

「ついて来い」

伸びてる大男など無視して俺は大通りの方へ向かう。

「あ……待ってー!」

後ろからトタトタと走ってくる音が聞こえたので歩調を合わせて大通りに出て、俺が一人暮らしているアパートに向かった。

「そーいや、お前の名前なんなの？」

「な……同じ学科なのにそれはないんじゃないの」

さすがに名前も知らないのはやりにくいから名前を聞いてみると、俺の部屋があるアパートの前まで来て騒ぎ出したのだ。コイツの言い分からして、俺と同じ大学の人間らしいのだが、俺はそもそも大学にそこまで通っていない。

が、不意に思い出した。

「……ああそうか。お前アレか。あの騒がしかったヤツか」

「なっ!？」

そーうだ。思い出した。

俺が数少ない講義の合間や講義の最中、変に騒いでいたり妙に落ち着きのなかった存在のことを。

それが今、目の前にいて、俺が助けてしまったコイツだったという

ことだ。それだけ覚えていたが俺は名前も知らない。

そうこうしていると、コイツはもじもじしながら名前を言う。やはり服が破けて羽織だけだと冷えるのだろう。

「……桜、桜ねえよ。その……さつきはありがと、えつと……」

「柚貴だ」

「え？」

「名字は嫌いなんだ。名前で呼べ」

桜と名乗るコイツが俺の名前を知っている理由は大体わかる。どうせ俺の顔のせいだ。影で色々噂されていることを想像すると、無性にイライラしてしまう自分がいる。

幼い頃からずっとこんな調子。俺の名前を知っている人間が俺は相手のことを何も知らないというのは、よくあることだ。

「じゃあゆずつち」

「はあ!？」

「名前で呼ぶならそつちがいい」

「……チツ、勝手にしろ」

全く、変にペース乱してくるなコイツ。妙に調子が狂う。

舌打ちをしながら俺は桜を連れて俺の部屋がある階まで登る。俺の部屋の前まで来ると、俺よりも身長の高い男が俺の部屋の前に立っていた。

七三に分けた彩度が低い金髪にスーツ姿。

俺は眼鏡の向こう側にあるヤツの目が合った途端はまた舌打ちをすることになった。

「……柚貴さん。私はあの人になんて報告すればいいと思っているんですか」

「……」

「最近は大学にも通っていないと聞きました。その上、一人暮らしの家に未成年を連れ込もうとしているなんて、あの人に話しに行く私の身にもなってください」

「コイツは同じ大学のヤツだ」

ため息をつきながら額に手を当てている男に怒鳴りつける。

変に誤解されてあのババアの耳にまで入ったら、実家に強制送還されて地獄を見るに決まっている。そんなこと、許すものか。

「ったく、おい名波、コイツに適当な服用意してくれ」

コイツは名波賢人。

俺が一人暮らしをする上で、あのクソババアが監視という名目でけしかけてきた男だ。コイツとのつきあいは長く、クソババアからの絶大な信頼を受けている。そのせいか、度々コイツの説教を聞く羽目になるのだ。

「相変わらず人使いが荒いですね。そういうところばかりあの人に似て」

「うるさい！ サツサと行け！」

呆れた顔でため息をつきながら、名波はアパートを後にする。コイツも、後ろにいる桜のことを看過できない性格であることは知っている。ちゃんと用意することだろう。

「あ……でもサイズとか」

「別にいいよ。凶んなくてもわかるし」

「ちよ！ それどういうこと!?!」

何やら騒がしい桜は無視して、サツサと部屋に入る。ベッドと電話、風呂と洗濯機に冷蔵庫しかないワンルームの部屋だ。

「勝手にくつろいでろ」

生活に最低限のものしかない部屋に言葉をなくしてる桜を後目に、俺はとりあえず風呂にお湯を入れる。

久しぶりに身体を動かしたからこれも洗わねーとな。自分でもできるが和服は手入れがめんどくさいので基本的に名波にやらせてるが、たまには自分でやらないとまた小言を言われそうだ。

「なんで冷蔵庫の中いろはすしかないの!?!」

居間に戻ると桜が冷蔵庫を勝手に開けて勝手驚いていた。

「おい！ なに勝手にひとんちの冷蔵庫開けてんだ」

「痛っ！」

割とガチ目にキレた俺は桜の頭に手刀を入れる。非常識にもほどがあるだろ。

コイツ、他の学科の奴ともこんな感じか？ 他人との距離感見失って人間関係壊すぞ。

「ううくだって勝手にくつろいでろって言ったじゃん」

「それでも最低限の礼儀と遠慮は持て！」

なんだろう。コイツ、なんの悪気もなく何かやからして、しでかしてからパニックになるタイプだぞ。

内心呆れながら、俺の部屋着と下着を渡した。名波が帰ってくるまではこれで我慢してもらおうしか無い。

「とりあえず風呂入ってこい」

「……」

桜は何故か黙り込んでいる。

「どうした？」

「……これしかないの!?!」

「ちゃんとした服は名波がもってくるからしばらくそれで我慢しろ」

コイツ、さつきまでどんな目に合ってたのか本当にわかってるのか？

俺は真剣にコイツの将来が心配になってきた。確かに、俺が部屋着として使っているのはワイシャツだけ。本人からすれば物足りないのだろうが、今回は耐えろとしか言えない。

しばらくすると、桜は俺が置いた着替えを身にまとって居間に戻ってくる。また顔を真っ赤にしている。脱衣場で和服を脱いで風呂場に入ると、俺がさつきためたお湯が全部無くなっていた。

「……」

どうしよう。今物凄くアイツを助けたことを後悔している。あのままほっておいた方が良かった気がする。

とりあえずシャワーだけ浴びて風呂から出る。

持ってきておいたワイシャツを身につけて居間に戻る。

ベッドの上に座っている桜を一瞥すると、俺は冷蔵庫からミネラルウォーターを二本取り出してから桜の座っているベッドとは対局にある部屋の壁にもたれた。

「で、とりあえずお前はなんであんな奴らに絡まれてたんだ？」

桜にミネラルウォーターを投げ渡した俺は前から思っていた疑問を尋ねた。そもそもなんでコイツがあんなチンピラどもに襲われたのか、理由がさっぱりわからん。

「……今日、大学の皆とカラオケに行ってたらね」

たどたどしい言葉で話した桜の話の話を要約すると、その帰り道に酒を飲んだ奴があの大男三人にぶつかって、桜がそれを庇ってあそこまで連れてこられたという。

呆れた。俺はため息をつきながら言う。

「バカかお前は。おまえみたいなチビが行ったらどうなるか目に見えてるだろ」

「ゆずっちだつてチビじやん」

「お前より身長デカイ！」

本当に失礼な奴だなコイツ。助けるんじやなかった。ミネラルウォーターをあおりながら思う。

「それじゃあさ、ゆずっち。気になってたんだけど」

「なんだよ？」

「あの怖い人たち、どうやって倒したの？」

「合気道だよ。嗜む程度だけどな」

「へーすごい！」

正直コレについてはあまり話したくない。あのクソババアのことも絡んでくると余計にめんどくさいに決まってる。

だが、そんな俺などお構いなしに桜は俺に話しかけてくる。

「あと部屋の前にいた人、誰？」

「俺の付き人みたいなもんだ」

「え!? もしかして、親がすごいお金持ちだったり！」

「ちげえよ」

このまま話しても拉致があかないので、俺は渋々ワケを話した。話したくないけどしょうがない。

「俺のお袋は合気道の達人なんだよ。結構有名でテレビにも出る。弟子も沢山いるから、ガキの頃から身の回りの世話は名波がやつ

てくれたんだよ」

その上、名波も一応うちの道場の門下生であることも、桜には話した。アイツもそれなりに腕はあるから、桜の身体見ただけでサイズはある程度解る。

「それじゃあもう一つ聞いていい?」

コイツは遠慮という文字を知らないのか? と思うくらいにまた質問してきた。流石に俺もめんどくさくなってきて雑に答える。

「今度は何だ?」

「なんで大学来なくなっちゃったの? 皆心配してたよ?」

「別にいいだろ。俺はああいうの苦手なんだ」

目を逸らすようにミネラルウォーターをあおる。理由はただ面倒になっただけ。元々実家から出られるならなんでもよかったのだ。

「ゆずっちって友達いるの?」

「悪いかよ」

遠慮のない質問に答えるのに嫌気がさしてきた俺は質問に答えず、半端な答えを返す。

すると桜はとんでもないことを言い出す。

「わかった! じゃあ私が友達になってあげる!」

「……はあ?」

「それならゆずっちも皆と打ち解けると思うんだよねー」

「おい! なに勝手に決めてんだ! 頼んでねえぞそんなこと!」

思わず立ち上がった途端、玄関からチャイムが鳴る音がする。名波だ。丁度いい。とりあえずサツサとコイツを帰そう。そうしよう。

「ちよっと! まだ話は終わってないよー!」

騒がしい夜だった。

暴れる桜を名波に押し付けてご退場してから俺がよくやく眠れたのはもう12時を回っていた。

疲れた。

明日も大学に行くつもりはない。昼間まで寝ていよう。桜とも、これ以上関わることも無いだろう。

と、その時の俺はまだアイツにこの部屋を荒らされることになる

はつゆ知らずだったのだ。

●
目が覚めた。

窓から差し込む日光から察するに、もう昼頃なのだろう。

昨日口にしたモノというのは、桜と話していたときに飲んでいたミネラルウォーターのみ。流石に腹が減ってくるからコンビニで何か買ってこようと俺は部屋を出た。

「……」

玄関を出てすぐ、目の前には名波が待ち構えてた。

おそらく、俺がこうして過ごしていることに釘を刺してきたのだ。今日は平日だし、仕事に行っていると高をくくっていたのは失策だった。

「お前、仕事は？」

「今日は半休をもらっています。ところで柚貴さん、今日も大学には行っていないのですね」

「…だったらなんだよ」

俺が好き放題していることに心中穏やかではないのだろうが、落ちていた態度を崩さない名波はため息を一つ。コイツの異様すぎるほどの毅然な立ち振る舞いは、こういう時すぐく居心地が悪くなる。

打てど響かず。という言葉がまさに名波賢人という人間を象徴していた。

「貴方の幼少期からのことは知っています。ですが、だからといって周囲の全てを拒絶していい理由にはなりません。いい加減——」

「大人になれってか？ うるさいな。俺は自分の好きにしたいだけなんだよ」

コイツの説教は、あまり長くは無いのだが言い方が的を射すぎている。耳が痛い。話し終わる前に喰い気味で言い分を終わらせるに限る。

「…いいですか？ 君はまだ子供です。ですが、これから大人になっていく、まさにその境目です。その大事な時期であることを自覚して生きて欲しいだけなのです。いつも話しているでしょう？」

ああ、またコイツの十八番が来る。

さっさと逃げて飯を買いに行こう。

「枕元の抜け毛が増えていたり、お気に入りのお総菜パンがコンビニから姿を消したり、そういう小さな絶望の積み重ねが——って、どこへ行くつもりですか柚貴さん」

「腹減ったから飯買いに行く。その話なら後にしてくれ」
話を完全に無視して歩き出す。

その話は耳にタコだ。この妙に実体験の籠もった言い回しが、特に鬱陶しい。

これ以上、俺に何を言っても無駄と理解したのか、俺の去り際に名波はまた小さなため息を一つついて見せた。

「……はあ、貴方がそのつもりなら、こっちにも考えがあります」
と、何か意味深なことを呟いて。この下りも何回も繰り返した話だ。どうせしばらく無視していたら、効果が無いと諦めて辞めるに決まってる。

——と、思っていた。

「あ、ゆずっちおかえりー」

「……なんでおまえここにいる?」

アパートに帰ってきた俺に待ち構えていたのは、昨日チンピラから助け出し、名波に頼んで家に帰したはずの桜だった。俺の部屋をまるで自分の部屋のようにくつろいでいる。

スナック菓子やら雑誌やらを部屋十に広げて、その真ん中で堂々と。

「もう一度聞く。なんでおまえここにいる?」

「今朝ここに来たらゆずっちいなくてさ、部屋で待っててって名波さんが」

「アイツ……」

またいつもの意味深な事を抜かしてたが、とんでもないもの置いていきやがった。

「それとね、合鍵もくれたよー」

「アイツ……っ!!」

「あ、何か買ってきたの? 一緒に食べよっ!」

そろそろコイツに遠慮という言葉について大学の講義並に教鞭してやろうかと真剣に思い始めたが、どうせ無意味なのでしない。

ベッドと電話しかないアパートの一室に、諦めと呆れが混じった情けないため息が一つ。

そう、これが、俺と桜ねねの馴れ初めだ。

桜は俺が買ってきた物まで手を付けながら、なにやら嬉しそうな顔をしている。

「…どうした？」

「ううん。初めて会った時のことを思い出してて。あの時はびつくりしたなくって。あの怖い人達をやっつけたのもそうだけど、なによ

り」

桜は言った。

「ゆずっちが、男の子ってことに」

がらんのどう

名波視点

仕事帰り、私は車を走らせていた。

家路につくわけではない。あるいは、うみこさんの迎えに行くわけでもない。もう一つ、私に任された大事な使命があるのだ。

それは、彼。

塩川柚貴のこと。彼の様子をうかがいに行くこと。あの人のお母様から押しつけられた無理難題。

彼と出会ったのは数年前、まだ義務教育を受けていた時期だ。その頃から、柚貴さんはあんな風な立ち振る舞いをするようになっていった。

幼少期から自分の容姿が原因で周囲となじめずにいたのは聞いている。それでも、彼の歳を取って行くのだ。そうなれば、いずれ一人で生きていかなくてはならない。そのために、少しでも社会と打ち解けて欲しいのだ。

別に自分の全てを殺せとっている訳では無い。ただ、自分と社会、理想と現実。それらを摺り合わせて自分のちょうど良い点を見つけて欲しいだけなのです。

事実在即し、己を律する。

社会も同様であると勘違いしていた時期もあつた私がそうではないと理解したように、柚貴さんにもそうなってくれることを願うばかりだ。

「桜さんのこと。少々荒療治かもしれませんが、何かいい変化があればいいのですが」

最近、柚貴さんが気まぐれに助けたという女の子。

桜ねね。

彼女は少々落ち着きが無く、危なっかしい性格と行動が目立ちますが、明るく気さくな人でした。案外、柚貴さんと打ち解けてくれるかもしれません。

あの日以来、私も仕事が忙しくて様子を見に行けなかった。三ヶ月

ほど経ったが、何か心境に変化があることを祈るばかり。

やがて、柚貴さんが住まうアパートにたどり着く。車を止めた私は、彼が暮らしている部屋に向かった。時刻は19時を過ぎている。大学は夏休みに入っている。いつもの徘徊癖が出ていなければ、きっと部屋で寝ているはずだ。

部屋の玄関に立ち、呼び鈴を鳴らす。きつと柚貴さんの性格からして、鍵はかけていないのでしよう。ですが、人の領域に入るとなるならば、どんな親しい相手にも礼儀というものに倣わなければならぬ。

部屋にベルが鳴り響いて数秒後、玄関のドアが突然開いた。

「っ——!!」

一瞬の出来事だった。

咄嗟に現れた手首を掴む。私に向けられたそれに握られていたのは包丁。何をするためにそれを使ったのか、分からないほど鈍感では無い。

私は深い呼吸を一つ突いた後、視線を降ろし、目の前にいるであろう人物に話しかける。

「柚貴さん。これ、普通に殺人未遂ですよ?」

「……チツ、うるさい!」

刃物を持った手だというのに乱暴に私の手を振り払う彼は、私に殺意を向けても無駄だとわかったのか部屋の奥へと消えていく。

正直言って、さすがに死ぬかと思いました。彼が開口一番でここまですることなど今まで……いや、多少はあったな。

「失礼しますよ」

改めて断りを入れて、柚貴さんの部屋に入る。

彼の部屋は荒れていた。主に、スナック菓子や雑誌の類いがそのまま乱雑に散らかっていた。それだけで、彼がこれまでどれだけ荒んだ生活をしているのかを表していた。

「自分の部屋くらいちゃんと掃除してください」

「お前が喉けてきたヤツのせいだろうが!」

ああ、桜さんでしたか。

自由にして構わないと言いましたがここまでとは。

だとすると、元々気性の荒い柚貴さんがいきなり斬りかかってくる理由もなんとなくわかる。いや、わかっただけはいけないな。一歩間違えれば大事件なのだ。

「……大体、アイツは勝手だ」

当の本人は何をしているのかというと、ベッドの上に寝転がり、手に持っていた包丁を何度もマットレスに突き刺している。

「好きかってうちにやってくるかと思えば、オレに教えるのは電話番号だけときた。最近だつてバイトが忙しいとかいいやがつて、何だつてそんな事でオレが苛々しくなくちゃいけないんだ！」

「……とりあえず、包丁しまってください」

この言い回し。三ヶ月の間で関係が随分と発展したように見える。そもそも、彼が明確に人を拒絶するのは決まって無視から始まるのだ。

彼は自分の好き嫌いで人と一緒にいないのだ。

一緒にいても良いという感情が先、好き嫌いは後から来る。ある意味で動物的な彼だが、桜さんはおそらく一緒にいていい人間。

そして、柚貴さんは桜さんに何かを求めていたということになる。

柚貴さんには外からの刺激。あるいは、外部と関わり合いになれる人間が必要だと前々から感じていましたが、案外効果があるモノですね。

元々、桜さんの人となりによるものなのでしょう。これなら、また経過を観察してみてもよさそうです。あの人にも良い報告ができそう。

「名波、部屋、掃除しとけ」

「……」

● やっぱり、あんまり変わってないのかも知れない。

ねね視点

「ねねっち、前に話してた人のこと、まだ怒ってるの?」

「当たり前でしょっ。せっかく買ってきてあげたのにひどいよ」

私はあおつちと一緒に帰りの電車に揺られてる。最近、デバッグのバイトとして、あおつちの会社に来ただけで、その時に大学でできた新しい友達、ゆずつちのことを話したのだ。私をすごい技で怖い人たちから助けてくれたことも。昨日のアイスのことも。

せつかく買ってきてあげたアイスを食べてくれなかったから。

ひどいよもう。こっちも良いチョイスだと思ったのに。

「私も、その人にお礼、言った方がいいかな」

「あー。多分怒るかも。知らないヤツ連れてくるなって」

「あはは、そっか」

ゆずつちの怒りっぽさを話すとあおつちも苦笑いしてる。実際、あおつちも会ってみれば分かると思う。きつと会いたがらないと思うけど、ゆずつちの方は。

「ねえ、ねねつち」

「何？ あおつち」

「気になってただけだね、どうして柚貴さんをそこまで気にかけるの？」

「え？ うーんとね……」

「もしかして、柚貴さんのこと好きだったり？」

少し悩んでた私に、あおつちは悪戯めいた質問で私を困らせようしてきたのだけど、そのとき私はあまり動揺とかはしなかった。

「どうなんだろう、なんかそう言うのとは違う気がするんだ」

「えっ、なんで？」

「前も話したけどね、あの日ゆずつちに助けてもらったんだけど、そのとき色々話してたんだ」

私はトツトツと語り始める。つまるところの、恋愛感情とは少し違った感情をゆずつちに持っていた。確かに助けて貰ったときはカッコイイとは思ったし、顔をすごいきれいだし。

女の子みたいだけだ。

助けてもらって、ゆずつちの部屋に行ってゆずつちの話を聞いてたとき、私は思った。

ゆずつちは、自分が周りを拒絶してるんじゃないで、拒絶させられ

ているように見えた。自分の意思で拒絶していない。だから、自分のやりたいことすらちゃんとしてきてない。させてもらえなかつたんじゃないかって。

そういう意味では、空っぽなんだと思う。あの何も無いアパートの部屋と同じ。がらんのどうなんだ。

「ゆずっちは、きつと寂しがりやなんだよ。でも、1人じゃないといけない、1人でいなきやいけないって自分に無理やり言い聞かせるみたいだったんだ」

それを見たとき、私は何故か、そうしたいと思った。

ゆずっちの友達になろう。

ゆずっちともっと話そう。

ゆずっちと仲良くなろう。

何故か、そう思った。

「だからね、きつと私は自分がしたいからゆずっちを気にかけてるんだと思うの」

可哀想とかそういう同情の気持ちじゃない。きつとソレは彼には必要しない。

単純にそうしたいと思った。

だから私は、あの日の翌日も彼の部屋にいたんだ。

「ふーん、そっか。ねねっちもか」

あおっちはどこか変に納得したように頷いた。

私はあおっちの考えてることがわからず、そのままこの話はここで終わった。それと同時に乗っている電車が止まる。ちょうど、ゆずっちのアパートが近くにある駅だった。

「ごめんあおっち、私、降りるね」

やっぱり、今日も会いに行こう。きつと夏休みだから部屋にいるはずだ。

あおっちと別れて電車を降りた私は改札を出た途端走り出した。目的地はもちろん、ゆずっちの家。この前喧嘩しちやつたけど仲直りしたい。

ゆずっちが暮らしているアパートに着く。エレベーターもなく、階

段を駆け上がる。彼の部屋がある回まで上ると、ある人と出会った。

「あ、名波さん、こんばんは！」

「こんばんは、桜さん」

ゆずつちがお世話になっっている人だ。黄色い髪を七三分けにしてちよつと変わった眼鏡をかけた人。彼の部屋の合鍵を渡してくれた人でもある。

手にはたくさんのゴミが入ったポリ袋が3つほど。

「桜さん。柚貴さんにも言いましたが、部屋のゴミはちゃんと片付けてくださいね」

「あつ！ アハハ…忘れちゃってた。ごめんなさい」

いつものうっかり癖が出た。漫画が面白くて時間を忘れて読み込んでいると講義の時間になって慌てて部屋を出てしまったのだ。

ゆずつち、余計に怒ってるかな。どうしよう。仲直りできるかな？

「ゆずつちはいるの？」

「ええ」

「怒ってなかった？」

「少し」

「うう……」

やっぱりだ。

このまま部屋に入っても大丈夫なのかな。いきなり包丁とかで斬りかかってきたりしないよね。

部屋の中で怒ってるゆずつちのことを考えると怖くなってしまふ。

でも、名波さんは落ち着いた言い方で話す。

「ですが、きつと大丈夫ですよ。会ってあげてください」

「ホント？」

「ええ」

「わかった！ じゃあ行くね！」

名波さんと入れ違うように、改めて彼の部屋に向かい始める。

きつと鍵はかけていないのだろう。玄関の前まで来れば、私は迷わず扉を開けた。

「ゆずつち！ 遊びに来たよ！」

ベッドと電話機しかないアパートの一室。そのベッドの上で、ゆずっちは寝転がっていた。いつもの和服姿のまま。

「……桜か」

「あの一、もしかして怒ってる……?」

「別に……怒ってない」

「……やっぱり怒ってるよね?」

「怒ってない」

「いや絶対怒ってるよね!」

「怒ってないっつてんだろうが!」

「やっぱり怒ってる!」

名波さんの嘘つき!

そりや、自分が部屋のゴミを片付けずに出ていったのは悪いと思ってるけど、帰ったら一緒に片付ければいいかなって思ってたし。

相変わらず期限が悪そうなゆずっちは、ベッドから動かさず話し出す。

「桜、お前、今日は泊まってけ」

「え?」

ゆずっちは指差す。その先を見ると冷蔵庫があった。

「……アイス」

思わず尋ねてみるとゆずっちは何か出し渋るような声で呟くのが聞こえた。

「……お前が買ってきたシャーベット、始末してけ」

それはこの前買ってきた柚子シャーベットのことだ。でもゆずっちは食べないって言ったはずなのに。

私は冷凍庫を開けてみる。

冷凍庫の中には、2つあったはずの柚子シャーベットが一つになっていた。

私はそれを見てすこし嬉しくなる。

「なーんだ。やっぱり食べたんだ」

振り返って見ると、ゆずっちはそっぽを向いている。こういうところ、猫みたい。

素直じゃないんだから。

冷蔵庫から一つになったシャーベットを取り出して、彼が寝転がっているベッドの脇に座る。

黄色いプラスチックの容器を開けると、中には薄い黄色の中に混じっている柚子の皮と果肉が詰まったシャーベット。

きつとゆずっちも、これを食べたのだろう。冷凍庫の中に入っていた木のスプーンを出す。

「それじゃ、いただきまーすっ」

「……」

「？」

スプーンで掬ったそれを口に運ぼうとした途端、後ろから視線を感じた。振り返ると、ゆずっちはそっぽ向いたまま。

いいことを思いついた私は、自分が今食べようとしたソレを後ろにいる彼に向けて彼の名前を呼ぶ。

「ゆずっち」

「……なんだよ？」

まるで猫のように遅れて私の方を向く彼の顔は、相変わらず気だるげな顔をしていた。

「おいしかったなら食べていいよ」

「……いらない」

「もしかして、照れてたり？」

「照れてない」

「ふーん」

「……」

私は目を細めてニヤニヤと笑いながらゆずっちを見る。

「ふうくん」

「チツ……わかったよ。食べればいいんだろ」

舌打ちをしながらもゆずっちは了承してくれる。

素直じゃないなあ。もうちよつと素直なら可愛げあるのに。

「じゃあ、あーん」

シャーベットの乗ったスプーンをゆずっちの顔に近づけると、観念

したゆずっちは顔を少し赤くしながら口を開ける。

シャーベットがゆずっちの口に一番近くなったときだった。

——今だっ。

「なーんちやって、あげなーい！」

シャーベットを私の口の中に放り込む。とうだ！ 昨日のお返しだっ。

改めてゆずっちの顔を見ると、口を開けたまま真顔になっている。

「……………」

「……………ゆずっち?」

ゆずっちはそのまま固まっている。えっと、やりすぎた?

もしかしてそんなに気に入ったの?!

ほんのちよつと黙り込んだ後、その場でスツと立ち上がる。ベッドの上で立っているからすぐく背が高く見える。電気の明かりのせい
か、顔が影になってよく見えない。

「……………帰れ」

「ちよつ!? ゆずっち!」

「うるさい! バカ! 死ね!」

とある夏の日

柚貴視点

俺にさしかかってくる日照りに目を細める。

趣味の徘徊、家においても落ち着かなかった俺は10分程度で先の自分の行動を後悔した。

暑い……。

家まで歩いてさほどの距離ではないが、ここまで暑いとそれすら憂鬱になる。だがいつまでたっても暑いままだ。暑さ寒さは苦手では無いが、ここまで来るとうつつとうしい。早く家に帰って冷房のかかった部屋で寝よう。

意を決して歩く足を動かす。

薄手だが長袖の和服に今の湿った熱気は相性が悪いのか、すぐに汗がわきでてくる。そしてそれが和服と肌に張り付くのが気持ち悪い。帰ったら風呂に入ったほうがいいのかもかもしれない。和服はさすがに手入れしないといけないだろう。面倒だが、脱いで部屋のどこかに置いていけば名波の小言が出てくるに決まってる。

と、帰ったあとのことを考えながら帰路を歩いていく。そのうちマンションの近くまでそろそろだなと思ったところ、見慣れない光景を目の当たりにした。

道のすみにコンビニがあった。だが、このあたりでコンビニなんて見たことない。どうやらできたばかりのようだ。

その証拠に、ただのコンビニにしてはずいぶんと派手な旗や横断幕が蒸し暑い風に煽られている。

どういうわけか、ただのコンビニのはずなのにやけに気になる。コンビニの飯なんていつも食べてるのに。

「……そういえば」

そこまで考えて少し前のことを思い出した。

アイツだ。あのやかましいアイツが、俺の部屋に持ってきたモノのこと。それもコンビニで買ってきたものだった。袋に印刷されていたロゴと、今日の前にあるコンビニの看板のロゴが一緒だったはず

だ。

結局アイツが全部食べちゃった菓子類の中に混じってた、あのうまいのかまずいのかよくわからないあのシャーベット。

冷たいものは基本的に好きではない俺は、興味本位で食べてみたが、どこが柚子なのかよくわからなかった。ただ、シャーベットの中に混じった柚子の皮から香る柑橘系のそれっぽい雰囲気と、変な甘さが妙に癖になった。

「……」

まあ帰ってから寝ることしかやることがないから適当になにか買っておくか。

駅から歩いて汗をかきすぎたこともあって、俺は少しコンビニで道草を食うことにした。コンビニの中も冷房はかかっているだろう。少し涼んでいくのも悪くない。

コンビニの入り口まで歩いていくと、軽快な音楽とともに自動ドアが開く。店内は予想通り冷房がよく効いている。むしろ寒いくらいだ。

レジに立っていた店員がこっちに向かってハキハキとした声で挨拶してくるが、受け答えする義理はないのでそのまま店の中を歩き回る。

こういうのにはコンビニ側がどういう風に客を歩かせるか店の構造で決めているらしいが、この店はどういう風に客を歩かせるか知らん俺は適当に歩く。

棚に陳列された商品を眺めていると、大きな長方形の箱が、棚の棚の間に空いたスペースにどっしりと構えてあるのが見えた。アイスクリームや冷凍食品の冷蔵庫のようだ。

中身をよく見ると、あのときアイツが買ってきたシャーベットも入っている。

……何を考えてるんだ俺は。別にこんなもんほしくてこの店に来たわけじゃないだろう。

ここまでできて自分の行動に疑問を持つ。まるでわざわざこれを買いに来たみたいじゃないか。別にこれがうまかったわけじゃない。

あの時食べたのだって、アイツがバイトでうちに来なかったから、いつまでも冷凍庫に残っているそれが鬱陶しかっただけ。

だから、そういうことは微塵もない。そんなの、俺らしくないだろう。

「.....」

冷蔵庫の中にあるシャーベットを見ながらふと思う。

とは言っても、この店に買うものなんてないしな。別になにも買わずに帰ってもいいが、それも後味が悪い。

俺はひとまずすぐ近くに重ねられてあるかごを手に取ると、いつもの家の冷蔵庫に入れてあるのと同じ水を入れる。あと買うものなんて言っただけこれしかないか。

俺は冷蔵庫の中に手を伸ばして、そのシャーベットを2つ手に取る。こんな暑い日だ。2つくらい買っておいたほうがいいだろう。

2つのシャーベットをかごに入れてレジに向かう。

レジにはさつき挨拶してきた店員が、愛想よく俺の持ってきた商品を受け取ってバーコードを読み取っている。天然水とラクトアイス2つだ。コンビニとはいえこれくらいなら別に高くもなんともない。

俺は財布の中にある千円札を差し出す。それを受け取った店員は、釣り銭を俺に返したあと俺が持ってきた商品が入ったレジ袋を差し出す。

受け取った俺は、愛想よい挨拶で俺を見送る店員を背にしてゆっくりとした歩調で店を出る。

店の外は相変わらずの気温だった。さつきの冷房の効いたコンビニの店内とはまるで別世界にきたみたいだ。

この暑さだとせっかく買ってやったシャーベットが溶けてしまうと思ったが、気の利く店員だ。袋のなかをよく見たら保冷剤が入っている。この分なら家に着くまでにとけることはないだろう。

袋の中にある天然水だけ取り出して、ペットボトルのふたを開ける。そして一口。

さつきまで店の中で冷やされてたから、中の冷たい水分が炎天下にさらされている俺の体に染み渡っていく。だが、その程度でどうか

なるものでもなく、早く家に帰られねば本当に倒れてしまうだろう。さて、また歩くか。と、あきらめのこもったため息をつきながら俺はマンションを目指して歩く。

結局、コンビニからマンションまではさほど距離はなかった。

保冷剤はいらなかったかもしれないが、わざわざ察して入れてくれた厚意は受けてやらねば。

暑い道の中、道中誰ともすれ違うことなく俺は部屋にたどり着いた。買ってきたシャーベットを冷凍庫に入れる。

汗ばんだ和服を脱衣所で脱ぎ捨てた俺は、シャワーを浴びて煩わしい汗を洗い流す。部屋着代わりに着ているワイシャツに着替えた俺はエアコンのリモコンで冷房をかける。とはいっても、この空間が涼しくなるまでだいぶ時間がかかりそうだ。部屋はさつきまで冷房をかけてなかったから当然暑い。

このままだと、冷房が効いてくる前にまた汗をかいてしまうかもしれない。それはいやだ。

今更後悔しても仕方がない。ほかに涼む方法はないものか。

ああそうだ。そこまできて思い出す。

あのシャーベットだ。先にシャワーを浴びてたから忘れてた。あれなら多少は時間を稼いでくれるだろう。

俺は冷凍庫を開けて2つあるシャーベットのうち1つを取り出す。そしてリモコンをベッドに投げつけた俺はベッドに座った。自由になった手でシャーベットのふたを開ける。

思い付きで買ったようなものだが、こういう時くらいしか食う機会なんてないだろうから、食べてやろう。

保冷剤と一緒に袋に入れてもらった木のスプーンで、柚子の皮が混じったシャーベットを突きながら掬っていく。

俺はそれを口に運ぶ。

「……」

これだ。このうまいのかまずいのかよくわからないこの味。

容器には柚子とかいいながら果汁1%しか入ってない。それでどこか柚子なのだろうか。

ただ、そのほのかに香るそれっぽい雰囲気と、甘酸っぱいシャーベット特有の食感、そして後味のスツキリさがこんな暑い日に食うと落ち着くんだ。

俺は繰り返す。木のスプーンで突いて崩したそれを、掬っては口に入れる。

妙に癪に触るのを堪えながら。

——食べ終わったところには、部屋の冷房は十分行き届いていた。

さつき脱衣場で脱ぎ捨てた和服を一通り手入れしてから俺はベッドに寝っ転がる。やっぱり休むときは家で寝るに限る。

そのうち体が脱力していき、心地よい睡魔が迫ってくる。いかに鍛錬しようとも抗えないその甘い囁きに身を委ねる。

どういう時だって、寝ることはいいことだ。

重くなるまぶたを閉じて、自身の状態を完全に寝る状態にシフトさせたその時だった。

「——ゆずっちー！ 遊びに来たよー！」

俺はブチギレた。

玄関が突然開く音がした途端、俺は寝転がっているベッドの上にあった枕を投げつけた。

ヤツだ。最近暇があればうちに上がり込んでくるだ。俺はヤツのせいでここ最近のずつとイライラしている。

さつき俺が食ってたシャーベットを持ってきた、最近暇があればうちに上がり込んでくるアイツだ。俺はアイツのせいでここ最近の睡眠を大分邪魔されている。

投げ返してくる枕を細目で受け流す。

「ちよっ！ 何すんの！ せっかくご飯とか買ってきたのに！」

ヤツが投げ返してくる枕を細目で受け流す。

「なんだ、この不法侵入者！ そんなレトルト、頼まれたっているもんか！」

ほんと何しにきたんだコイツは？

人がゆっくり昼寝しようとしてこれから眠ろうという絶妙なタイ

ミングでうちに来やがって。

「……まったく、何しに来たんだよう？」

「ヒマかなーって思ってる」

「……」

ぶつきらぼうに尋ねると、大した理由なんて返ってこなかった。

コイツ、前に俺をからかいやがったこと、もう忘れてんじやねえだろうな。そのあと悲鳴が聞こえてたけどそんなの知らん。どうせうみこあたりにシメられたんだろ。自業自得だ。

眠気はないが相手にしたくないから俺は布団に潜り込む。

すると布団の向こうから桜の声が聞こえてくる。申しわけなさそうな声だ。

「二応、この前のお詫びも持ってきたのに」

桜にしては妙にしおらしく話すので、布団から顔を出した俺は桜を見たとき変な箱を見た。

「……なんだそれ？」

俺はそれを指差して聞いてみることにした。桜の手にはコンビニで買ってきたと思われるレトルト食品の入ったレジ袋の他に、他に取っ手のついた箱のようだ。

輪っかのようなものがプリントされている。

ドーナツか？ ……なんでそんなもの。

「あ……えつとね、この前からかって怒らせちゃったから……」

「……」

罰の悪そうに眉を八の字にしている桜を見ると、なんだかこつちまで居心地が悪くなっていく。ここは俺の家なのに。

ああまたこれだ。コイツが来るたび追い出したくなるのにどういうわけか俺はコイツを追い出せない。

だからこうしてイライラしてくるんだ。

「……あがれ」

「えっ？」

「いいからあがれ！」

「う……うん」

● 部屋の真ん中にテーブルを置いて、桜と二人でドーナツを囲む。

桜はドーナツを咀嚼している。

……喋りながら。

「ほれね、あほつちつたらわたひがふあいふあにいふえないのに

——ムグツ……」

「食いながら喋るな」

俺は桜の口を手でふさぐ。行儀がなってない。もつと落ち着いて食べられないのか？

まあ、言っても無駄か。

「んくっ……あおちね、私が会社に行けないのに会社のみんなとドーナツ食べてたんだよ。そんなのずるいよー！」

ようやくドーナツを飲み込んで話始める。

桜が話しているのは自分の幼なじみのこと。聞くと本当に子供の頃からのつきあいらしい。今の子供みたいなものだが。

「……………」

「どうした？」

その幼なじみについて話を始めた途端、桜の様子が少し変になる。さつきまではしゃいでたのに、その陰がまるでない。元々コイツは感情のテンションの差が大きいから別に今に始まった話ではないが、少し気になったので訪ねてしまった。

「今日土曜日なのに、あおちまた会社に行ってるから少し心配になつて……………」

「忙しけりやどこの会社でも休日出勤くらいするだろ」

いちいち心配することでもないだろ。と付け加えながら俺は言う。本人がやりたいと言ってやり始めたことなら、他人がいちいち口出す義理もないだろう。

「でもね、会社に泊まったりとかしてたし、あおちの会社っておかしいんじゃないの？」

「ふーん」

俺はドーナツをほおばりながら適当に返す。

会社に泊まるのか、確かにそれは少しやばいのかもな。最近いわゆるブラック企業なんて言葉をよく聞くし。確か、ゲームを作ってる会社だっけ？

俺には全く縁の無い世界だから全くわからない。

にしても、これ、うまいな。いや、本当にうまい。まるで宝石の指輪のようだ。

「ちよつとくまじめに話してるのにちゃん聞いてよ〜」

「そんなに心配なら、本人に言えよ。お前が心配して受け答えできらうちはまだ大丈夫だろうさ」

「ゆずつちって友達いないのにそこまでわかるものなの？」

「お前なあ．．．．．」

桜の無神経な言葉が俺を苛立たせるが、一応真剣な顔で話しているから話は聞いてやる。

桜は自分の幼なじみのことが心配である会社のアルバイトを始めたと言うし、こればかりは幼少期か道場の連中以外に人付き合いのなかった俺が言えたことではないか。

それに対していちいちコイツにキレても仕方がない。相変わらずイライラするが、今日はこのドーナツに免じて許してやろうじゃないか。俺だって高校の時はいろいろこの性格に矯正したせいでいろいろ言われたが鬼や悪魔じゃない。

「．．．．．」

ドーナツを食べ終わったあと、桜は退屈になったのかせわしく部屋を見渡している。コイツがうちに来るようになってしばらく経つが、俺はコイツがじつとしてるところを見たことがない。

常に周囲を見るくせに、すぐ近くのことを忘れる。この前は暑いとか言って靴下脱いだまま帰っちゃったこともあった。落ち着きがないんだよなコイツ。

「ねえゆずつち」

「なに？」

「あれなに？」

桜が指さしたのは俺が大学に行くときに使っている鞆。その中に

レポート用紙が挟まれたクリアファイルがはみ出ている。

当然俺はそれが何か知っている。

「なにつて……大学の課題に決まってるだろ？ やらないと名波がうるさいからな。まだ全部できてないがこの分なら夏休みが終わる頃には——」

「あ……っ！」

視界を桜の方に戻すと、桜の顔はどんどん青ざめていく。

まるで、そんなもの今この瞬間知ったような顔だ。まさかコイツ……。

「桜……お前、課題やってないのか？」

「え……えっと……進捗ダメです！」

「人の心配より自分の心配をしろお前は！」

サーバールームスパイラル 前編

りん視点

「――!?!」

それは、私が出社してきた時のことだった。

イーグルジャンプのビルの中に入る、いつも通りオフィスに向かう道中。

信じられない光景を目の当たりにした。

それは、それは……っ!!

「おはようございます。八神さん。今少しいいですか?」

「あ、ヨッシーおはよ。どうしたの?」

コウちゃんと親しげに話している男性の姿だった。しかも私の知らない人!

いや、全く知らないというのは語弊がある。見覚えはある。たしかこのビルの警備員の人だ。度重なるイベント周回に疲れ切ったような三白眼の据えた目つき、ほとんど変わる事のない無表情をした彼に、コウちゃんはあだ名で呼んでいる。

な、何者!?

咄嗟に通路の影に身を隠して話を伺う。

「それがですね。昨日の夜に見つかったのですが、そちらのサーバールームのドアが壊れて内側から開かなくなっているんです」

「え? ほんとに? 大丈夫だったの?」

「はい。こちらは。それで、サーバールームに入る仕事はあったりしますか? もしかしたら閉じ込められるかもしれないので」

「……うーん、そういうのはトラブルでも無い限り入らないから多分大丈夫だと思うけど、わかった。教えてくれてありがとうね」

ああ、ダメだ会話の内容が全然頭に入ってこない。ああ、なんだか視界もクラクラしてきた。こんな風になったのは、佐藤君の好きな人が私かもしれないと勘違いしてしまった時だ。

ただでさえプレッシャーで押しつぶされそうなのに、こんなのもって……。

「では、私はこれで」

「うん。勉強頑張ってるね」

会話を終えたのか、その男性は早歩きで私の方向に歩いてくる。

「っ」

ちょうど私が隠れていた通路の影にさしかかったところで私と目が合った。

彼は小さく会釈すると、そのまま私が歩いてきた道のりを遡っていった。

「あ、りんじゃん。ちょうど良かった」

「こ、コウちゃん。今の人……」

「ん？ あああの子。ちよつと知り合ったの」

「そう…なのね」

嘘だ。

どう見てもちよつと知り合った程度の仲では無い。それはさっきの会話で十二分にわかった。だって、コウちゃんが人をあだ名で呼ぶなんて、ひふみちゃんとうみこさん。どちらもそれなりに交友のある人たちばかりなのだから。

「それでさ、さっき聞いたんだけど、サーバールームのドアが壊れて内側から開かなくなってるんだって。青葉達らにも言っておいてくれる？」

「えっ!? ええ、わかったわ」

「ごめんね。私ちよつと朝忙しくて。じゃあ、先行くね」

「うん……」

コウちゃんは詳しいことを何も言わず、さっきの人と話していた事を私に頼んで早足で言ってしまった。

私のいつまでも立ち往生してないでオフィスに向かわないと。

「……」

でもいつ知り合ったの？

確かに警備員と言うことなら夜にコウちゃんと知り合うことはあるかもしれない。

だけど、コウちゃんがそこまでするだろうか？

もともと夜になったらスカートを脱いで寝始めるのに。わざわざ彼と会う機会などそうそう無い。

そこまで考えてようやく自分の考えの自分勝手さを自覚する。

ああ、ダメよ。これはあくまでコウちゃんのことなんだから。

入社したときは誰ともコミュニケーションを取ろうとしなかった

彼女が、外の人間とも積極的に関わろうとしているのだ。

これは喜ばしいことなのに。素直に喜べない自分がはずかしい。

私は、私はどうすればいいのだろう。

● 青葉視点

「……なんか、他のブースが騒がしくない？」

「そうですね」

「なんかあったんやろか？」

今日も出社してきて作業を始めて1時間が経とうとしていた時、グラフィックチームのブース以外るところから感じる異様な雰囲気、切り出したのははじめ先輩だった。

今日はちよつとりんさんの様子が変だっただけで、特に変わったことなど無いと思っていたのに。

「おい！ 誰か手を貸してくれ！」

「!?!」

なにかとても嫌な予感がし始めたとき、敦さんが大慌てでキャラ班のブースに飛び込んできた。あまりの人相に、ひふみ先輩もびっくりして声を出せないでいる。

「なにかあったんですか？」

「サーバーの一部がダウンしやがった」

「それってもしかして大変なことなんですか？」

「ヤバいどころの話じゃ無い。このまま全部ダウンしたら今まで作ったデータがパーだ！ バックアップも何もかも無意味だ！」

「っ!?!」

敦さんの言葉で、事の重大さを改めて知った私達は絶句する。それは私達の今までの努力が完全に無駄になってしまうこと。

そして期待されていたフェアリーズストーリー3が発売できないことと同義なのだ。

「な、何をすればいいんですか？」

「誰でも良いからサーバールームに行ってくれ。そこで冷房を全開にして、しばらく待機して欲しい。それで、俺が連絡したらダウンしたサーバーの電源を入れるだけだ」

「えっと……」

正直言つて、パソコンとかコンピュータに関しては素人に毛が生えたレベルでしか無い。モデリングの知識しか無い私達にそれができるだろうか。

という一抹の不安をよそに、敦さんは話を続けた。

「このメモに書いてあるとおりに進めれば大丈夫だ。冷房の方は湿度をとにかく下げること。湿度は結露しない範囲に保ってくれるだけがいい。頼めるヤツいるか？」

「わ、私、行きますっ！」

この前、敦さんが風邪をひいたときのこともあったけど、今までの努力が水の泡になるのを知っていて何もすることなんてできなかった。

「そうか、頼んだぞ！」

私にメモを託すと、敦さんはキャラ班のブースを飛び出していた。

「アハゴン！」

「うみこです！」

「何でも良いからさっさとサーバー復帰させるぞ！ 他のチームのプログラマーも呼んでこい!!」

ブース越しでうみこさんと話しているであろう敦さんを声を聞いて、私も急いでサーバールームへ向かった。

渡されたメモには、敦さんの連絡先と冷房やダウンしたサーバーの位置などが簡単な絵で分かりやすく描かれてて、私がやるべきことを簡潔に順序立てて書かれてあった。

「……だよね」

私はメモを元にその場所までやってきた。

サーバールームというのは、何度か聞いたことがあるけれど来るのは初めてだ。ここに私達の今までのデータが詰まっている。いわばゲーム作りにおける心臓のようなところ。

学校の教室のように札などが立て掛けられてはいないけど、敦さんのメモからして間違いない。

無地の色をした重みのある扉を開けて、私はサーバールームの中へ入った。

「うわあ。涼しいっ！」

そこは夏なのにとんでもなく寒かった。空調の温度は……20℃!?

この前、八神さんと始め先輩とゆん先輩がエアコンの争奪戦でもめていた時の最低温度をも下回っている。

驚いている場合じゃ無い。早く頼まれたことをやらないと。

「まずはエアコンの温度を全開にまで下げてと」

敦さんに頼まれたとおり、空調の温度を下げられる限界まで下げる。表示にはL0と書かれた値までだ。いくら外が暑くても、こんなに下げた試しは私には無い。

「それと、これがダウンしたサーバーだね」

段取りの確認をするため、メモを元にダウンしていると思われるサーバーを見つけた。その最中に気がついたのだけど、サーバーと呼ばれる機械の音がすぐくうるさい。

興味本位で触っても良さそうなところを触ってみるととてもなく熱かった。確か、映画で見たことがある。大量の氷を使って、サーバーコンピュータを冷やしていたシーンがあったなあ。

なるほど、だからこんな空調を下げる必要があるのか。

「うう……長いこといると寒いなあ」

しかも、この部屋は私達のいる広いオフィスとは違って狭い。

多分四分の一も無いと思う。

私の自室よりちよっと広いその空間で、この温度は半袖の私にとってはそれなりに辛かった。

でも、敦さんから連絡が来るまでは離れるわけには……。

「ん？」

そこで思いつく。別に、待つ間だけなら外でいて良いのでは？

と、一応湿度には気をつければいいと言われたけど、ちよこちよこ様子を見にくければいいだけだし。

こんな寒くて狭い部屋に長いこといたら本当に身体を壊してしま
いそうだ。

そうと決まれば、さっさとここから出よう。

と、私はサーバルームの部屋から出ようとドアノブを回して扉を
開けようとした。

ガンっ！

「……う？」

ん？

開かない。

あれ？

引く方のドアだったのかな？

ガンっ！

開かない！

いやいや、そんなこと……そうか！

横に引けばいいのか！

ガンっ！！

開かない！！

「っ……っ……！」

そこで、そこでようやく自分が、どういう状況にいるのか理解して、
全身が真っ青になっていく感覚になった。

私……私……っ！

閉じ込められちゃった!?

●

佐藤視点

今日のイーグルジャンプは一段と騒がしい。

といわれても無理も無い。何せ、開発の心臓部であるサーバルの一

部がダウンしてしまったのだ。最悪、発売そのものが中止になるかもしれない大事件。

とはいえ、プログラムに関しては完全に門外漢である自分に何ができるわけでもなく、ただ敦さん達がサーバーを復帰させてくれることに祈るしか無い。

一見、薄情に見えるかもしれないが騒いで解決する問題では無い以上、俺が首を突っ込んでややこしくするよりか、おとなしくしていたほうがいいだろう。

そう思つて、屋上にタバコを吸いに行くために屋上に向かう道中、件の大本であるサーバールームの近くを通りかかった。

その時、

ドンドンドンツッ！ ドンドンドンツッ！ ドンドン ドンドン ドンドン ドンツッ！！

「んっ。」

サーバールームに近づくとつれて、リズム良く壁を叩く音が聞こえたので立ち止まる。おそらく、サーバールームの中に誰かいるだろうか？

ドアを叩く音だけで、必死さが覗えたのでそのままスルーするわけにも行かなかった俺は、とりあえずドアを開けてみることにした。

そこには……真っ青でカタカタと身体を震えて今にも凍り付きそうな涼風がいた。

「……何してんだバカ」

「うつぐ……えつぐつ……」

俺が扉を開けてくれて安心したのか、涼風は半ベそかきながらゆっくりと俺に歩み寄ってくる。なんでグラフィック担当のコイツがサーバールームにいるのか分からんが、とりあえずただ事では無いのは分かった。

「寒いかな？ 寒いのか涼風」

サーバールームの冷房の強さは知っている。半袖でスカートの格好ではそうとうキツイだろう。

俺は震えながら歩み寄ってくる涼風を暖めるため、そっと抱きしめ

るように受け止め――

「小学生みたいに震えて」

る前にからかうことにした。

「~~~~~!!」

このワードを耳にした涼風は真っ青だった全身を真っ赤に染めて、まるでヤカンのようにわかりやすい怒りを俺に示してくれた。

「よし、暖まったな」

●

「で、お前はなんであんなところにいたんだ？」

「それが、敦さんに頼まれてー」

涼風が事情を説明しようとしているタイミングで、彼女のポケットから音楽が流れた。涼風はその音に反応してツインテールをゆらす。

「ちよつと待ってくださいね」

一度断りを入れてから、涼風はポケットから携帯を取り出して電話に出た。

「あ、敦さん。私です」

どうやら、相手は敦さんらしい。ここで色々状況を察した。要は、敦さんに頼まれてサーバールームに入ることになったのだろう。

そして、なぜか扉が開かなくなって閉じ込められたと。

「あ、もう準備できたんですね！ わかりました。すぐに、はい、わかりました！」

どうやらもうサーバーの復旧作業は一応の目処が立ったらしい。前々から思っていたが敦さんの知識量は一体なんなんだ。

ゲームを作るプログラムとサーバーシステムを構築するプログラムとは、一見似てるように見えるが畑違いではないのだろうか？

しかもこの短時間で。

と、今更敦さんのハイスぺぶりに感心しているうちに、涼風は電話を終えたようでもまたサーバールームに入っていた。

「……」

アイツ、もしかしてさつき閉じ込められたこと忘れてるよな？
だとしたら、面白そうだな。どれ。

ここでまた意地悪したくなる。

多分だけど、このドア内側から開かなくなっている。つまり……。
ガンツ!!

ドンドンドンツッ! ドンドンドンツッ! ドンドン ドンドン
ドンドン ドンツ!!

おそらく、敦さんの頼まれごとであるサーバーの復旧作業は青葉の
操作で完了だろう。多少の遅れにはなったが、フェアリーズストー
リー3が発売中止になるという最悪のシナリオは回避できたわけだ。
よくやったな。涼風。お前は偉大だ。

「さて……タバコでも吸ってくるか」

「!？」

涼風に聞こえるように大きく声を出しながら俺は屋上へ向かった。
帰り道に覚えていたら、拾ってやろう。

サーバールームスパイラル 後編

佐藤視点

「もーっ！ ひどいですよ佐藤さん！」

「なんだよ。ちゃんと帰りに拾ってやったろ？」

「それも最初はスルーしようとしてたでじゃないですか！」

サーバールームに閉じ込められていた涼風を拾ってオフィスに戻る道中、涼風は俺にさっきの仕返しをしようと手を振り回すが、俺に頭を抑えられて抑えられて絶妙に届かない。

結局涼風は俺に一発も届かないまま戻ってくることになった。

社員証でオフィスの扉を開けて、中に入るとちょうど遠山がいた。

「あら、青葉ちゃん？ コウちゃんが探してたわよ？」

その言葉を聞いた涼風はまた、サーバールームから出てきたときのような顔をした。

遠山の口から八神が探していると言うフレーズを聞いて、八神がブチキレながら私を探している光景が頭に浮かんでいるのだろう。

敦さんは多分まだプログラムの方にいるだろうし、下手に事情を話そうとしても言い訳にしか聞こえない。

つたく、しかたねえな。

「ああ、なんかコイツ、敦さんに頼まれてサーバールームまで行っただんだよ。それで、なんか閉じ込められてた」

言葉を選んでいる涼風が変わって、俺が事情を簡単に話す。

「えっ……そうなの？ 青葉ちゃん」

「はい、佐藤さんが来てくれなかったらずっと閉じ込められてたかも……」

「っ……」

涼風も俺に同調して事情を話すと、急に遠山の表情が目に見えて悪くなっていく。というか、本当に顔色が悪い。まるでさっきまで閉じ込められていた涼風みたいだ。

だが、遠山はこれ以上何かを追求してくることは無かった。

「あの、りんさん？」

「ご、ごめんね。本当に、ごめんねっ！」

本当に体調が悪くなつたのか、あまりにも大きさに謝りながら背景のブースへと走って行ってしまった。

いつもの落ち着いた遠山に似合わないその様子に、俺と涼風は顔を見合わせて首を傾げた。

「なんだったんでしようか？」

「さあな。つーか、早く戻らなくて良いのか？ 多分、八神のヤツキレてるぞ？」

「ああ！ そうでした！」

「ま、俺も一緒に事情話してやるよ」

「ありがとうございます！」

慌てていた涼風の表情が一気に明るくなる。こういう風に表情と感情が豊かなところがコイツの美德なのだろう。

八神と対等に話せるヤツって、このチームの中だと遠山と敦さんと俺くらいしかないからな。普段は髪の毛を弄ったり、子供扱いしてかからかってるから、こういう時くらい先輩らしいコトしないとな。

「んじゃ、さっさと八神のところ行くか」

「はい！」

「閉じ込められて子供みたいに泣いてましたって」

「つー！ もー！ 佐藤さんのバカー!!」

しかし……

「あれ？ りんから何も聞いてないの？」

「？」

涼風が持ち場を離れたことに対する言い訳のため、俺も涼風と一緒に八神のところを話をして来たのだが、八神は妙なことを話し出した。

なんでそこで遠山の名前が出てくるのかわからず、俺と涼風はさつき同様顔を見合わせる。

「まあとりあえず事情は分かったし、サーバーも復旧したし青葉も作業に戻ってよ。ちゃんと遅れた分取り替えしてね」

「がっ、がんばりますー！」

あまり深く考えるのを辞めたのか、八神は涼風を仕事に戻した。

どうやらそれなりの時間閉じ込められていたようで、涼風の今日の残業が確定したようだ。まあ、今日は緊急事態だったし仕方ないか。

涼風も仕事に戻ったし、サーバーも復旧した。あと気になることと言えば……。

「そういえばさ、今日のりん、なんか変なんだけど、佐藤は心当たりある?」

「いや、別に」

「そっか。わかった」

八神でさえ、峠を越えたばかりであるためか、そこまで追求する余裕は無いようだ。とはいえ、気になるといえば確かに気になる。

遠山があそこまで動揺することと言えばなんだ?

例に挙げるとすれば、この前の幽霊事件の話か。よくアイツあんな嘘信じたよな。

よほど追い詰められていたのか、あるいは本当にただのバカなのか。

まあ、バカでよかった訳だが。

あとはそうだな。八神に良い感じの男ができたとかか?

これが一番信憑性がある説だが、これも少し根拠に欠ける。というのも、おそらく、今日の遠山の様子がおかしいのは、涼風の件と関係があるものだろう。

それとこの説が繋がるシチュエーションを俺は想像できない。

「こればかりは本人に聞くしか無いか」

背景班のブースを出た俺は、遠山を探して社内を歩き回る。少なくとも背景班のブースにいなかったから、ヤマを張るとなると、給湯室とか葉月さんのところかのどちらかだな。

トイレに関してはもう仕方が無いと割り切るしかない。

まずは給湯室からだな。

向かってみるといた。

遠山はコーヒーを淹れていた。

自分の分ではない。こういう光景はいつも見る。遠山はポッドの

中のコーヒーが無くなれば、いつも気にかけて新しく淹れるのだ。
その行為自体は至って普通だ。だが様子が明らかにかかしいのは
遠目で見ても明らかだった。

「おい、遠山」

「!? な、何？ 佐藤君」

完全に上の空だったのか、遠山は俺に声をかけられてようやく反応
した。

「挙動不審で落ち着きがない様子で。」

「今日のお前、なんか変だけど、何かあったのか？」

「な、なんでもないの」

「……なんでもないように見えんのだが？」

遠山の手元を見ると酷いことになっている。さつきからは絶えず
お湯を流しているせいかもしれない。ポッドからコーヒーが溢れてしまっ
ている。

遠山がこんな状態になるなんて、よほどのことしかない。本人も自
覚はあるのか、急に背中を見せた。

「……佐藤君」

「……何？」

「私のこと……好き？」

「っ……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……まあ……まあまあ」

彼女の震えた声から出たその問いに対して、この十数秒以上の沈黙
の末、俺が出した答えはそれだった。いや、語弊がある。

それしか言えなかった。というのが正しい。

俺の答えを聞いて、遠山は小さく肩が震え始めた。

「わ……私は、佐藤君にまあまあ好かれる価値も無い子なのっ！」

「っ!？」

突然走り出した遠山は、俺の脇をすり抜けて給湯室から出て行った。そして去り際に、

「私はダメな子なの！」

と叫んで。

「……はあ」

一人取り残された俺は、先ほどの答えが間違いであったことを知り、情けないため息をこぼすしかなかった。

そして遠山とすれ違うように、給湯室から人影が入ってきた。遠山と比べて背が低く、クリーム色の髪をしたフリルの多いワンピースの女性。

服装が派手だから見覚えがある。飯島ゆん。キャラ班の一人で、先日、八神が噂していた件の人物。

俺はソイツと目が合った。

「……なんだよ？」

「い、いえっ！」

半分八つ当たりだが、俺に睨まれてビビったのか、そさくさと給湯室へ用事を済ませて彼女も出て行った。

ああ、多分さっきの会話聞かれたな。

最悪だ。バレてはいないと信じたいが。

俺はまた一人残された給湯室の中で、小さくため息をこぼすのだった。

● ゆん視点

佐藤さんから逃げるように急いで給湯室を飛び出した。情報が多すぎて整理が全然できひん。

なんか変なタイミングで入ってしまったせいで会話の文脈がわからないまま、りんさんが急に飛び出してきて、佐藤さんが落ち込んで、その上、なぜか睨まれて。

最後の絶対八つ当たりやろ。

前も青葉ちゃんが良くターゲットにされてるし。

だけど、途中に見せたあの落ち込んだ表情がひっかかる。

「でもあの感じ。佐藤さんってもしかして、りんさんのこと好きなんじゃない」

少なくとも、私が考え得る範囲で、逃げ出した女性と取り残された男性という状況というのはそういう、恋愛が上手くいかなかったときのこと。

というか、前々から佐藤さんって何かとりんさんに対して優しかったり、八神さんに対してキツかったり……。

「ん？」

そう言えば、確かりんさんって八神さんのこと気にかけてるって域じゃないほどに意識しているし。あれって、もうそういう目で見ているとしか……。

そこまで考えがまとまってきた途端、自分の脳内の相関図が更新される。

「もしかしてこれ、三角関係……？」

いやいやいやいや、流石にこれだけの情報だけで決めつけるのは早すぎや。

冷静に考えてみれば、佐藤さんとりんさんの話している内容が全然わかっていない。完全に自分の憶測でしか無い。

もしかしたら違うかも知れないし、勝手に思い込むのはよくない。

「今日のりんちゃん、なんだか変ね」

「そうすつね」

一人、ブースの外れで思案していると、別の通路から佐藤さんともう一人、ガタイの良いピアスをした男性？が歩いているのを見つけた。

確かこの人は花男さん。葉月さんとは仲の良い、他のチームのディレクター。

なぜか彼と佐藤さんが一緒にいるのはよく見かけるのだ。

……やっぱり気になる。少し聞き耳を立ててみよう。決してやま

しい気持ちはない。事実確認もせずに憶測で考えを進めることこそ佐藤さんに失礼や。

そうや。そうに決まっとる。

「花男さん、何か知りませんか？」

「あら、りんちゃんのことか心配？ 相変わらず片思いは大変ね」

「えーっ!？」

「?」

花男さんの口からではその単語は、私に声を上げさせるには十分な言葉だった。

そして、声を出してしまったことにより、二人がこっちを見た。

「……」

「……」

「……っ」

二人の視線に耐えられず、私はその場からまた逃げ出した。

「チッ!」

「ちよつと待つて! わざとじゃないわ! ホントツ! ホント

よお!!」

逃げ出す後ろでは、何か騒いでいるけれど、今の私に振り返って実情を知る余力なんてなかった。ただ、さっきの疑惑が確定になったことの方がずっと大きかったのだから。

しばらく逃げた先で立ち止まって息を整える。その間に、今までの情報が頭の中で整理され初めて行く。

佐藤さん、りんさんのこと、好きなんや。

しかも、恋敵はあの八神さん!

佐藤さんに勝ち目無いやん。

だって、八神さんとりんさんが仲良くしている光景はこの会社でも名物みたいなモノ。そんなのに佐藤さんが勝てるわけがない。

それに、あの三人が同期だってことは、七年間もこの状況が続いているということになる。

七年間も、勝ち目の無い戦いを強いられている佐藤さん。

あかん、こういうの考えてしまうと、劣勢な佐藤さんの方に共感し

てしまう。佐藤さんの報われない思いに無意識に共感してしまう。

ああ、なんだか涙が出てきた。

「うっ、あかん、佐藤さんが可哀想すぎるっ」

「あれ？ ゆんどうしたの？」

「は、はじめえ」

涙のせいで前がよく見えなかったせいで反応が遅れてしまったけど、その声でハツラツなアニメ声ははじめのものだとわかった。涙を流している私の顔を見たはじめは慌てて駆け寄ってきた。

「な、なんで泣いてるの？」

「さ、佐藤さんが……」

「佐藤さんが何かしたの!? 青葉ちゃんもそうだけどまさかゆんにまで！ ゆるせない！」

「ちや、ちやうんよ。そうじゃなくて……行つてもうた」

訳を話す暇も与えてくれず、はじめは佐藤さんのところへ走り出してしまった。これじゃあ、私が佐藤さんに泣かされたみたいやん。実際はそうなんやけど。

あと、佐藤さんの青葉ちゃんいじめが今まで野放しにされているのはノーカウントなんかいい！

という私のツッコミすら、口に出すことは叶わなかった。



佐藤視点

「佐藤さん！」

花男さんを一頻りメた直後のこと、なぜかモーション班の篠田が俺を訪ねてきた。しかも、かなりご立腹の様子で。

しかし、彼女個人を怒らせた心当たりなどないので首を傾げるしかない。

「なんだよ？」

「とぼけないでください！ ゆんを泣かせるなんて最低です！ ほら、これ！」

何を思ったのか、篠田は自分の携帯電話を差し出した。

「？」

「それでゆんに電話かけて謝ってください！」

「なんで電話だよ」

「ゆんは泣いているんですよ！直接会ったら怖がるじゃないですか！」

待ってくれ。さつきから俺が飯島を泣かしたって事になっているのは何故なんだ。確かに飯島とはさつき色々あったが、それで泣くよ
うなことがあるのか？

「ちやんと電話して謝ってくださいね！」

「……」

俺に携帯を押しつけて、篠田はキャラ班のブースへと消えていった。渡されたそれを見て呆然としてみると、いつの間にか生き返った花男さんが話しかけてきた。

「まあ、はじめちゃんのそういう思い切りの良いところ、私は好きよ」

「ちやんとウラ取ってほしいものですがね」

元々、篠田と花男さんは顔見知りらしい。なんでも、入社する前にゲームで知り合ったとか。

「それで、どうするの？」

「かけますよ。釘は刺しておきたいので」

篠田の携帯の電源を入れると、すぐに飯島と通話できるようになって……はいなかった。

おいおい、マジで後先考えずに俺に携帯渡したのかよ。マジで不用心じゃねえか。

しようがないな、余計なモノはなるべく見ないようにして飯島の番号を探るか。

あまりの無鉄砲さに呆れつつも、飯島の電話番号を見つけ、通話ボタンを押す。数回のコールの後、端末越しから先ほど騒いでいた声が聞こえた。

「も、もしもし」

「佐藤だけど？」

「は、はい」

「お前何泣いてるんだよ。泣きたいのはこっちなんだが」

好きな人にいきなり自分のことを好きと聞かれてにげられるわ、好きな人が職場の一人のバレるわ、なんか悪者扱いされるわ、正直踏んだり蹴ったりなのは自分のほうだ。

「すみません。なんか、佐藤さんが可哀想で」

「……」

もし本当に可哀想だと思ってきてくれているのなら、それを本人の前で口にしないで欲しい。事故とは言え、泣かしてしまった手前、強く言い返せないが、一応釘は刺しておかないといけない。

「余計な感情移入はするな。遠山にはもちろん、他人に言うなよ?」

「言いませんっ」

「もし言ったら、俺もお前が敦さんの事好きってこと、本人に言いかねないからな?」

「っ!? ……な、ななっ、なんのことですか?」

半分カマをかけたつもりでふっかけたのだが、この様子だとどうやら本当のようだ。先日話を聞いておいて正解だった。

これならお互い同じ弱みを握っているからこれ以上変に干渉し合う事もないだろう。

さて、これで飯島の話は終わり。あとは遠山だけと想っていたが、飯島はまだ何か言いたげだった。

「あ、あの、佐藤さん」

「なんだ?」

「頑張ってください!」

「……お前もな!!」

俺は通話を切った。

「あ、あ、……」

なんかもう、どこから出してるのかわからないため息が出てしまう。がんばれって、俺にこれ以上どうしろってんだよバカ。

あとなんでお前の方が泣きそうになりながら言うんだよ。泣きたいのはこっちなんだよ!

「まあまあ、聞いてたのが、りんちゃんじゃなくてよかったじゃない

い」

「……そうすつね」

隣で必死に笑いを堪えている花男さんの言うとおり、こんな形で遠山に俺の気持ちが大げたら死ぬる自信がある。実際、失血死で死にかけたわけだし。

しかし、これで本当に飯島の件は終り。あとは遠山だけか。一度は逃げられたけど、ちゃんと話を聞いてやらないと。

その前に、さつき笑った花男さんに一発蹴りを入れておこう。

結局、遠山が変になった理由は、本人から聞き出すしかなさそうだし。しかし、下手に問い詰めてもまた逃げられてしまうかも知れない。

何か遠山を食い止めることができること。俺にそんな都合の良い物があるだろうか？

そんなことを考えつつ、ビルの中で遠山を探していると、屋上にいた。

涼風と帰ってきたときからずっとあの調子。

ひどく落ち込んで、なにか考えを巡らして、ため息をついている。

結局、彼女を引き留める決め手は無いが仕方が無い。少しは篠田の後先の考えなさも見習わないと俺は屋上に身を出す。

「おい、遠山」

「っ！」

俺に声をかけられて、また大きく肩を揺らし挙動不審な様子を見せる遠山。一体何がコイツをこんなに追い詰めたんだ。

「お前、もしかして、涼風と八神になにかやましいことでもあるのか？」

ここまで来る道中、遠山がここまで思い詰めることになった理由はおそらくこれだと断定できた。どう考えても、涼風が閉じ込められたと言いついた途端からおかしくなったのだ。

なら、それについてなにか知っているはず。だとすれば、多分あの部屋のドアが壊れていたことを周知忘れたってことになる。

そしてそれを八神は知っていた。なら、遠山に伝えていてもおかしくはない。八神の性格だ。どうせまたコイツに押しつけたのだろう。

「なつなななないわよっ」

「本当かよ」

「ほ、本当じゃないの。……あっても言えないの」

「あるんじゃないかよ」

まさか、ちよつと問い詰めただけでここまで簡単にボロを出すとは。若干呆れるが、話が早くて助かるが、ここまで先延ばしにされて正直イライラしている。

「言えよ。鬱陶しい」

「だって、こんなこと話したら私、嫌われちゃう……」

彼女の目尻には、今にも涙が溢れてしまいそうになっていた。俺に問い詰められて、今まで抑えてきたものが爆発しそうになっているのだろう。

「コウちゃんや佐藤君や、青葉ちゃん達に嫌われて……もうどうしたら……っ!」

遠山は本当に泣き出してしまいそうだ。同じ日に二人も女の泣かせたとか普通にしんどい。

だからこそ、なおさら放っておくわけにわいかなくなる。

彼女の涙を止める方法はないか？

なにか無いか……クソ、ああもうなんでもいい!!

「落ち着け! 俺はお前のこと、嫌いになつたりしない!!」

「っ……!」

「……あと八神も、涼風たちだって」

勢いで言い過ぎたせいで、自分も言ったあとに恥ずかしくなってきた八神と涼風の名前を出した。そうだ。そんな簡単にお前に対して印象を変えたりするような奴らじゃ無い。

だから、うん。きつとそうだと……思う。

「やっぱりお前、知ってたんだな。あのドアが壊れてたって事」

「……うん」

結局、俺の見立てたとおりの話だった。それだけなら、遠山だって忙しいし、忘れることもあるだろう。でも話はそこで終わらなかつた。

「それでね、それを話してくれた男の人がコウちゃんと仲良く話してて動揺して」

「……どんなシチュエーションだよ」

「だってえ……」

要は、その警備員の男が八神と親しげだったのに動揺して話を忘れてしまったというのが、今回の原因らしい。コイツらしいと言えば、コイツらしいが。

「俺はてつきり、八神と良い感じになった男をやっちゃったのかと思っただ」

「そ、そんなことしないわ！　ちゃんと手加減するもの！」

「手加減はするのかよ……」

できれば、手加減だけで無く手を出すこと自体を辞めていただきたいのだが、これを言えるような状況では無いから今回は飲み込むしか無いようだ。

とはいえ、これで解決の糸口は見えた。あとは話は早い。

「ま、一応報告に行くぞ。ついでに、涼風にも謝つとけ」

俺は遠山の手を握って、そのまま八神達がいるオフィスに戻る。意外な話かもしれないが、彼女と最低限触る事に対してはそこまで緊張しないのだ。

これでも七年は一緒にいる。知らないことの方が多いのは確かだが、それでも、迷ったときにこうして彼女の手を引くことくらいはできるのだ。

そして、オフィスに戻るといつもの二人が待っていた。

「そうだったんですね」

「りん。やっぱり話してなかったんだ。だから、青葉閉じ込められたんだね」

「青葉ちゃん、コウちゃん、ごめんね。頼まれたのに」

「めずらしいね。りんが忘れるなんて」

「つーか、本来ならお前も周知するべきもんだろうが。遠山だって忙しいんだ。少しは気を遣ってやれ」

一応、八神にもツツコミは入れておく。そもそものことの発端はコ

イツなのだ。多少なりとも責任は負ってもらおう。

「えー！ なにさー、佐藤はいつも私に対してだけキツイよね！」

「日頃の行いだろ？」

「なんだとー！」

「……」

そんな感じで、八神と涼風には簡単に事情を話した。とはいえ、遠山が今朝見たという、八神と親しげだった男の話は伏せて。

話がまとまって、八神と涼風がいなくなったあと、遠山は俺に話しかけてきた。

「あの、佐藤君。コウちゃんのこと」

「ああ、流石に八神や涼風にはあんなこと言えないだろ？」

「佐藤君……」

「なんかあるなら相談に乗る。俺も、同期だからな」

「うん」

やっと、遠山はいつもの笑顔を見せてくれる遠山に戻ってくれた。結局、今回の争点も八神だったし、コイツの中での一番は八神で決まっているのだろう。だけど、ようやく見ることができた今日初めての笑顔を見ただけで、この散々な一日が報われた気がする。

「んじゃ、悩みも無くなったことだし、ちゃんと働こうぜ」

俺は先に持ち場に戻ることにした。今日はかなり振り回されたから仕事が少し止まっている、多少は残業覚悟しないといかななこれは。

しかしまあ、それにしても今日は疲れた。

「はあ」

誰もいない通路に出て一人、頭を抱えてため息をつく。なんかもう、すでに胃痛と頭痛がひどい。遠山に対しても、あんなことよく言えたものだ。

言えたところで俺の気持ち伝わることはないのだろうか。

「佐藤く〜ん」

知らない間にいなくなっていた花男さんがまた俺のところに来た。いつものことだがこの人は他のチームのヤツにちよっかいかけすぎ

だろうが。

「疲れた顔してるけど大丈夫？」

「……まあ、なんとか」

「それにしても、なんであそこで押し切らないのかしら」

「……」

「佐藤君？」

俺は無言でハリセンを取り出す。しかも今回はスペシャルサービ
スで二刀流だ。そもそも、この人のせいで飯島にバレたし、普段から
の恨みもある。

それに今日の俺は、特段虫の居所が悪いのだ。

「え……ちよ、佐藤君、なんでハリセン出してるの？ ていうかダブル
!?! いやそれはマズいわ佐藤君！ それは危ないわ佐藤
くううううん!!」

●

りん視点

「ふう……」

佐藤君に遅れてデスクに戻ってきた私は一息つく。今日はずっと
悩んでいたせいで全然考えがまとまっていなかったこともあり、仕事
が全然進んでいない。早く終わらせないと。

「……」

だけど、佐藤君には恥ずかしいところ見せちゃったわ。自分も気が
動転していて、変な方向に考えを進めてしまった。

依然、コウちゃんと話していた警備員の人のことは気になるけれ
ど、今はそんなコトしている余裕はない。コウちゃんもこれから忙し
いと思うから、変なことしないと思うし。

それにしても、私ってダメね。

佐藤君が元気づけてくれたからよかったけど、こんなことで動揺し
て、頼まれたことを忘れてしまうなんて。これからはもっとちゃんと
しない。

「……？」

あれ……？

どうしてかしら。、ちよつと顔が熱いわ。おかしいわね。
佐藤君の名前が出てきたとき、一瞬だけ、あのときの佐藤君が頭を
よぎった。

——俺はお前のこと、嫌いになつたりしない!!

まつすぐな目でそう言われた。

さつきからずっと、私の胸は高鳴っている。

私は……ときめいているのかな？

って、なに考えてるの!?

佐藤君にも好きな人がいるのに……!

私は思わず手でほっぺを覆う。

あのとき、私は、佐藤君にそう言われたことが嬉しく思えてしまっ
たのだから。

なんでもっていった

純視点

今日もかなり遅くなってしまった。マスターアップが刻一刻と迫っているから仕方がないけど、ここまで残業続きだと正直辛い。早く帰って明日に備えようと、早々とサウンドチームの部屋を出た。

ビルの廊下を歩いているとき、僕は自分の右手を見る。

滝本さんがサウンドチームの部屋に遊びに来てからしばらくたった。右手のやけどは滝本さんがちゃんと手当してくれたおかげで病院に行かなくてもよかった。

だけどあの日以来、時間を縫ってはなんどもピアノを弾こうとした。けど結果は言うまでもない。そもそもなんで右手だけが動いたのだろう。

……だけど、今考えても多分無駄だよな。

内心、自分を自嘲する。無理に決まってる。七年間もこの状態なんだ。もう諦めも着いてるはずなのにな……。

でもなんでだろう。不思議な気持ちだ。

喪失感こそあれど、もうこんなことで悩むことなんてないと思つたのに。

ここ最近ずっと続いているもやもやを溜め込みながらビルを降りるためエレベーターに向かった僕は思わず足止めてしまった。

だってエレベーターの前には先客がいたからだ。しかもその人は、滝本さんだった。

「あ……」

振り返った滝本さんと目があつて、体が反射的に反応してビクツと震えてしまう。それは滝本さんも同じだった。

「えっと……その……き、奇遇です……ね」

「うん……」

タイミングが良いのか悪いのか、滝本さんが相槌を打った途端にエレベーターの扉が開いた。

どうすればいいんだこれ？
僕も乗った方が良いのか？

でも女の人とこんな狭い空間なんて……でもここで逃げちゃったら滝本さんに失礼だ。前もその……逃げちゃったし。怪談大会の時は、佐藤さんがいてくれたけど。

前にも花男さんにドヤされたんだよなあ。右手のやけどの手当のことのお礼と、逃げ出しちゃったことの謝罪。まだちゃんとできてない。

……やるしかないな。覚悟を決めて僕は改めて滝本さんを見る。

「あの……滝本さん、今帰りですか？」

「う、うん。そう……だよ」

「じゃ、じゃあ……今日は駅まで送りますっ」

「えっ……」

滝本さんはキョトンとしてる。

「……」

数秒間の静寂のあと、僕は自分の発言を心底後悔した。

や……やらかしたあ！ 絶対変なこと企んでるとか思われたあ！

滝本さんもキョトンとしたあと俯いてるせいで余計頭の中が真っ白になってしまう。それでも両手がジタバタと動かしてなんとか弁明しようとするけど、余計変に見えるかもしれないよどうしようっ！

「あ、特に深い意味があるわけでは……!!」

「い……いよ」

「え……っ？」

「その……純君が、大丈夫……なら」

ゆっくりと顔を上げた滝本さんの顔は真っ赤で、落ち着いてなかったけど、嫌がつてるようには見えなかった。僕を変な人となんてとでも思っていないと思えるほどに。

——そんなワケで僕と滝本さんは同じエレベーターに乗り込んだ。当然エレベーターの中にいるのは僕と滝本さんだけだ。

僕はエレベーターの奥の右側。滝本さんは左側。やっぱり女の人

とこんな狭い場所にいると緊張してしまうな。サウンドチームの部屋のときは、所謂僕のホームグラウンドだったから少しは落ち着いてられたけど。

でも、ちゃんと当初の目的を果たさないと。僕は勇気を出して滝本さんの方を向く。

「あの、滝本さん」

「……何、かな？」

「えつと……この前はこれ、ありがとうございます。あと、急に帰っちゃってすみませんでした」

もう包帯がとれた右手を掲げて滝本さんに見せる。それを見た滝本さんもわかつてくれたみたいだ。

「痕……とか、残って……ない？」

「はい、滝本さんがすぐに手当してくれました」

「そっか……よかった。私も、ごめん……ね……純君を、驚かせちゃつて……」

「滝本さんが謝ることじゃないですよ。こぼしちゃったのは僕ですし」

「で……でも、純君の……お仕事、邪魔しちゃったの……私……だから」

「それは……僕も滝本さんに同じことしちゃいましたし……」

「でも……でも……」

僕が非を認めても、滝本さんは頑なに自分のせいだと言って僕の非を認めてくれない。

……滝本さんって、結構ガンコなんだな。

でも、滝本さんはやけどした僕の手を手当してくれた。それでもう滝本さんは十分に自分の非を償ってくれてるはずだ。

最後に逃げ出しちゃった僕の非はまだ残ってる。滝本さんが、僕なんかにそこまで抱え込む必要なんてないのに。

どうすれば滝本さんが納得してくれるのだろうか。

考えたすえ、とっさに一つの考えが出てきた。でもこれ大丈夫かな？

今度こそ変に思われるかもしれない。だけどこれ以上良い考えな

なんてたぶん思いつかない。

ええいままよ。神様、どうかこのヘタレの僕に勇気をください。もう一振りでいいから！

「じゃっ、じゃあこうしましょう！ 僕が滝本さんのお願いを一つだけ聞きます。滝本さんは、その後に僕のお願いを一つだけ聞いてください。それで、この前のことはオアイコってことにしませんか？」

……って何言ってるんだ僕はあ！！

やっぱりこれ絶対変だよこれ！

どうしようどうしようどうしよう！！

おわった。今度こそダメあ！

言った直後に頭を抱えてしまう。

「な……ナシで！ やっぱり今のナシでえ！！」

後悔しても、もう遅い。ああもうダメだ。やっぱりダメでしたよ神様あ……。

こんなことならいつそ死にたい。このエレベーターごと誰か生き埋めにしてくれ。

あ、でもそれじゃ滝本さんまで巻き添えに……。

「——純君」

「な……なんですか」

滝本さんに呼ばれた僕は、頭を抱えたまま答える。

もしかしたらゴミを見るような目で見られてるかもしれない。

そうだろうなあ。突然こんなこと言われたらそんな風に見られる

よなあ。

「その……私からで……いいの？」

「……えっ？」

思わず顔をあげると、滝本さんの目はゴミを見るような目ではなかった。ちよつとだけ照れてるように見えたけど。

ていうか、私からってことはもしかして……。

「いいんですか？」

「うん……純君が、それで納得する……なら、私も……それで」

「……ああくよかった。ホントすみません。変なこと言って……」

滝本さんの言葉を聞いて、安堵のため息をこぼしてしまう。けどよかつた。本当によかつた。

せつかく仲良くなれた女の人に嫌われたら、僕はもうショックで生きていけないかもしれなかったから。

それと同時に、玉砕覚悟で勇気を振り絞った僕を賞賛するようにエレベーターのドアが開いた。どうやら、もう一階にいたみたいだ。僕とのエレベーターを降りて、会社を出る。なんだろう。エレベーターに乗っただけなのに体感した時間は一時間もあの場にいたような気分だ。

駅まで送ると言ったからちゃんと駅まで送らないといけないのに、大丈夫だろうか。

安堵もつかの間、また不安に煽られてしまうなか、滝本さんが話を切り出した。

「……ねえ、純君。その……どんなお願いがいい……かな？」

遠慮がちに尋ねてくる滝本さんを見たとき、僕は笑顔で答えた

「えつと……滝本さんがしてほしいことで、僕にできることならなんでも」

僕なんかここまで気を遣ってくれたんだ。変な失言を二回もしたとしても許してくれた滝本さんの頼みなら、僕もできる限り応えてあげたい。

でもなんだろう。滝本さんの頼みごとってちよつと想像つかないな。

「そう言われても……」

やつぱり悩んでるな。公平にしようとして僕のお願いも聞いてくれるようになったけど、どんなことをお願いすればいいんだろ。あんまり失礼なことは頼みたくないし……。

「すぐじゃなくてもいいですよ。ゆつくり考えてください」

「うん……」

ようやく会社を出て僕たちは駅に向かって歩き始める。

歩き始めるけど……。

「ねえ……純君は、どんな……お願いにするの？」

「えっと……実は、まだ決まっていなくていいんですよ」

「そうなんだ……」

「はい……」

「……」

それ以降から会話が続かない……っ！

僕もそんなに面白い話ができるわけでもないし、滝本さんに無理させたくない。何か……何かいい話題はないのかっ！

隣を歩いていく滝本さんを見る。結構近い。歩幅を合わせて歩いているから必然だけど、女の子とこうして歩くのも、滝本さんたちと話すことができたときだけだ。あのときは、あたりが騒がしかったし、そこら辺に話題がたくさんあったからあんまり緊張とかしなかったけど、今回は静か過ぎる。

滝本さんもやっぱり緊張してるみたいだ。居心地が悪そう。人との距離感がわからないのは、きっとお互い様なのだろう。

前から思っていたけど、滝本さんってキレイな人だな。

いや、冗談ではなく本当にすごく綺麗な人だと思う。今までほかに男性経験があるんじゃないかって疑ってしまうほどだ。それだけ、僕にとって美しいと思える。隣で歩いている自分が、釣り合っていないんじゃないかとすら思える。

……何考えてるんだ僕は。

これじゃまるで僕が滝本さんに気があるみたいじゃないか。

そんなこと、あり得るはずがない。だって僕なんか、僕……なんかに……。

そこまで考えたとき、脳裏に焼き付いた記憶が頭をよぎった。

——出ていけ。

——お前の居場所などどこにもない。

僕の頭にかつて突きつけられたら言葉がよぎる。

うるさい。黙れ。違う——自分の中では何度もその言葉たちを否定した。だけどホントはわかっていた。

ピアノが弾けない自分に価値なんてない。それは僕があそこにいる誰よりもわかっていたからだ。

だって僕にはそれしかなかったから――

「――純君っ」

滝本さんの声が聞こえてようやく浮き足立った意識が地に着いた。慌てて視界を滝本さんのいる隣に向ける。滝本さんはすごく不安げな顔で僕を見ていた。

しまった。今、滝本さんの隣を歩いているんだった。

「あ……………す、すみません」

「大丈夫……………？ 顔色……………すごく悪そう……………」

滝本さんは、足を止めてしまった僕に合わせて立ち止まってくれた。

「えっと……………その……………あ、あれです！ 最近夜遅くまで残業してたので少し疲れて……………、心配かけてすみません」

「……………そっか」

咄嗟についた嘘。滝本さんは納得してるけど、そんな嘘、滝本さんに通じる訳ない。でも本当のことなんて、言える訳ない。

きつと失望する。きつと悲しんでしまう。傷つけてしまう。

本当の僕のことなんて、本当はピアノが弾けないことなんて、僕の曲を素敵だと言ってくれた滝本さんにだけには。

「だから大丈夫ですよ。家に帰ってちゃんと休むので」

「……………わかった」

滝本さんにはもうしわけないけど今は気丈に振る舞って、なんとかこの場を押し切る。

すると滝本さんは、自分のポケットから自分のスマホを取り出した。すぐに画面を開いて何かを必死に操作している。滝本さんの指は素早くスマホの画面を駆けている。すごいな、SNSの時も思ってたけどこれなら五秒以内に返信してくれるのも頷ける。

けど、何してるんだろう？

「……………滝本さん？」

「ちよつと、待って……………」

しばらくすると、指を止めて向き合っていたスマホの画面を僕の方に見せてくれる。

「これ……」

長方形の画面に映っていたのは、ジト目をしたハリネズミの写真だった。

このハリネズミには見覚えがある。滝本さんがSNSでいつも送ってくれた宗次郎の写真だ。でもこの写真は僕も始めて見たものだ。

でも、なんで？

立て続けに起こる不可解な事態を前に、さきほど思い悩んでいたことは忘却の彼方へと消えていった。

「……滝本さん？　これは？」

「宗次郎の、写真……お気に入り」

言われてみると、なかなか可愛らしく移っている。ジト目で気だるそうなのもまた可愛らしい。

「私……励ます時、何言えればいいか……わからないから……でも、元気……出してほしかった、から」

「そ……」

そんなことの為に、と言おうとしたけど堪えた。

それは言っちゃいけない気がしたから。

でも嬉しい。嘘だとわかってるはずなのに、そこまで心配してくれるなんて。

「純君……笑ってる……」

「え、そうですか？」

「……うん」

不思議と心が軽くなったような気がした。病は気から、と言うのはちよつと違う気がするけど確かに元気が出てきた。

「あとね……こういうのも……あるの」

「へーっ」

画面をスワイプして別の写真が現れる。宗次郎がティーカップに入っている写真だ。

ネットでよく見かけるけど、どうしてこうも、動物が何かに入っているだけで可愛く見えるのだろう。

次は宗次郎がトイレットペーパーの芯に頭を突っ込んでいる写真。柄付きたわしみたいだ。深くハマりすぎて芯が抜けなくなってるのもちよつと面白くていい。

そして次は宗次郎じゃなかった。ムーンレンジャーの画像のようだ。

あれ？　なんか髪の色がアニメの色と違う気がするな。金髪じゃなくて暗紅色の髪をしているし、イラストにしては妙にリアルに見えるけど。

……あれ？　なんかこれ滝本さんに似てるような……いや滝本さんだこれ。

え？　どゆこと？

「あの……滝本さん、これ……」

聞いてみると、キョトンとした顔のん滝本さんはスマホを自分の方向に向ける。

その途端、滝本さんの目が変わった。ていうか様子が明らかにおかしい。

「○×△／（・o・）／☆※〜!!」

滝本さんは声にならない叫びをあげている。

え、もしかして、さっきの画像、事故で見せちゃったの!?

「た……滝本さん？」

「……」

スマホを持ったまま俯いてしまう滝本さんは、まるで世界の終わりに絶望してるようにみえる。

僕もついさっきまでそんな感じだったのだけど……。

だけど、しばらくすると僕の名前を呼んだ。顔を上げた滝本さんの顔は林檎のように真っ赤になっている。

「……………純君」

「な、なんででしょうか？」

「内緒に……してくれる？」

「も、もももちろんですよ。誰にも言いません！　滝本さんが……」

その……コスプレが趣味だなんて……」

「……っ！」

しまった。失言した。

余計なことまで言っちゃった。

滝本さんはまた俯いてしまう。なんとかかしないと……。

「大丈夫ですよっ。その……コスプレも素敵な趣味だと思いますし、すごくよくできてましたし……」

「……」

ヤバイヤバイヤバイ。どんどんよくない方向に進んでる。滝本さんの顔が只でさえ真っ赤なのに、湯気まで上がってきてる。

どうしよう。もう弁目もフォローのしようもなくなっちゃったような気がする。

そんな滝本さんだけど、ボソボソつと何かを喋った。

「……っ」

「えっ？」

だけど、あまりについて小さな声だったので聞き返してしまう。

「……証拠……見せて」

「証拠……ですか？」

顔を上げた滝本さんの言葉に、まだついていけない。証拠ってなんだ？

「純君が……そんなことないって……思える証拠……」

「そう言われましても……」

流石に返答に困る要望が来た。

証拠なんてなくても、誰にも言いふらすつもりなんてないのに。

でも、どうしたら滝本さんを納得させてあげられる証拠を見せられるのだろうか。

ダメだ。思いつかない。

僕がいくら考えでも思いつかないのを察したのか、滝本さんは自分から切り出した。

「なら……明日、また純君の仕事場……行ってもいい？」



滝本さんに証拠を見せてと言われたその翌日。

出社する時には滝本さんに会うことはなく、そのままいつも通りサウンドチームに向かった。

朝のうちには滝本さんはここに来なかったけど。

そこから何の滞りなく仕事を初めてから昼休みになったわけだけど、そのときサウンドチームにいた先輩は、何かを察してサウンドチームを出て行った。

……僕はここにいるようにと念を押して。

僕は出社前にコンビニで買ったパンでお昼は軽く済ませようとしたときだった。

コンコンツ……と、ドアをノックする音が聞こえた。

先輩ではない。あの人はここに入るときにノックなんて丁寧なまねなんてしない。

ディレクターさん達の場合、音もなくこの部屋に入ってくるからまた違う。

でも心当たりはある。だから僕はドアの方へ向かい、ドアをゆつくりと開けた。ドアの向こうに立っていたのは……やっぱり、滝本さんだった。

「お邪魔する……ね」

「滝本さん……それ、なんですか？」

僕はサウンドチームに入ってきた滝本さんが持ってきた荷物に目を奪われる。何かでいっぱい詰まった紙袋と、白い箱のようなものだ。

「……」

尋ねても、滝本さんは何も話さない。持ってきた荷物を置いてから、何か紐状のものを取り出す。

それをめいっぱい伸ばして、コッチに向く。

「滝本さん？」

「……こっちに来て」

「え？ は、はい……」

動揺を隠しきれないまま、僕は滝本さんのところに近づく。とは

言っても、距離は昨日隣で歩いたときよりも離れた。

「ん……」

すると驚くことに滝本さんから僕の胸板にグツと近づいてきた。

女の人がいきなり近づいてきたので、思わず後ろめいてしまうと、滝本さんは不満げに呟く。

「動かないで……」

「あの……これは一体？」

「なんでもって言った……」

「……う？」

「なんでもって言ったっ……!」

必死に訴える滝本さんを見てみると、昨日僕が提案したことを思い出す。お互いがお互いのお願いを一つ聞くというものだった。

でも、滝本さんのお願いつて一体なんなんだ？

ここまですられても全然状況を理解できない自分が情けない。

「……っ」

滝本さんは、めいっばいに引つ張った紐状のものを僕の体に巻きつける。

一周すると、滝本さんはその紐状のものをジツと見つめる。

言われるがまま、僕は滝本さんに身を任せるけどすごい状態なのでドギマギしてしまう。

昨日隣で歩いてたときよりも近い距離だ。ここまで近いと、その……滝本さんの胸元が本能的に意識してしまう。

右手を手当てしてもらった時の『あれ』がフラッシュバックする。ダメだ、また変なこと考えてる。

滝本さんは真剣な顔で作業してるのに……。

でも、滝本さんがやっているこれってもしかして……。

僕は頭と中に浮かんだ心当たりを滝本さんに聞いてみることにした。

「あの……これって、採寸ですか？」

「……うん。じゃあ次はバンザイして」

「あ……あの——」

「なんでもって言った」

「あ、はい」

身幅の採寸を終えた滝本さんは、次は後ろに回って肩幅の採寸をするようだ。

だけど滝本さんの手が肩に触れたとき、背中の真ん中あたりに柔らかい物が押し付けられる。

こ……これってまさか……!!

心臓の鼓動がバクバクと自分の耳にまで聞こえてきそうになる。

「……っー」

僕は突如としてやってきた柔らかい刺激に耐えられずに逃げ出そうともがいてしまう。

だけど滝本さんは僕を逃がしてくれなかった。

「あつ……動いちや、ダメツ……んっ!」

逃げようとする僕を逃がすまいと、僕の背中にしがみついてくる。

「……っ!!」

当然密着するので、さつきとは比べものにならないほど、滝本さんのそれが背中に押し付けられる。

柔らかい……そして、大きい……!!

ふんわりというか、ふかふかというか、とにかくヤバイ。

お願いだから、早く終わってくれえー!!

一通り採寸を終わらせることができた。

ああ……疲れた。

だけど、安堵もつかの間だった。次に滝本さんは持つてきたもう一つの荷物、箱のようなものから何かを取り出した。

これは……ミシン?

何でそんな物が会社に?

「そのミシンは、どこから?」

「会社の……備品……みたい」

いやだからなんでそんな物が会社の備品として置かれているの!?

と聞いてみたかったが、それを言い始めたらこの会社はたいいていの物は置いてあるのでいちいちツツコンでたらキリがないからやめて

おこう。

「ちよつと、机……借りる、ね」

ミシンを手頃なスペースがあるデスクの上に置いて、紙袋からは市販と思われる黒いズボンを取り出す。

滝本さんは長い裾のズボンを膝下およそ10cmほどのところで大きなハサミで切ってしまう。そこからミシンで切ってしまった部分を次々と加工していく。

すごい手際だ。モノの数分もせずに切ってしまったズボンの裾を直してしまった。

「おお……っ！」

思わず感嘆の声をあげてしまうほどだ。

だけど、僕も薄々感づいてきた。さっきの僕の体を採寸したのは、もしかしてこれのため？

だとすると、滝本さんがやってることってまさか……。

加工し終わったズボンと一緒に、紙袋からはキレイに畳まれたシャツと黒いネクタイに、やたら長いベルト、指がない変な手袋、サスペンダーを取り出した。

そしてそれを僕に渡すと――

「……着て」

やっぱり。

これ絶対コスプレだよな。

なんのキャラかはまだわからないけど多分知ってる気がする。

でも、いくら衣装を用意されてもいきなりコスプレだなんて……。

「なんでもって言った」

「あ、はい」

その日以来、僕は他人に、特に女の人に対して、なんでもするとは絶対に言わないと心に誓った。

――流石にいきなりこの場で着替えることは出来ないので、一旦滝本さんにはサウンドチームの部屋を出てもらうことにした。

この部屋は完全に袋小路のため、外に滝本さんがいるかぎり僕は逃げも隠れも出来ない。

だから腹をくくって渡された衣装を身にまとう。途中、背中ของサスペンダーをつけるのがうまく行かなくて滝本さんに助けってもらったけどなんとか着れた。そのときにまた胸が当たってしまったのはもう恥ずかしいから思い出したくない。

サイズは市販のもので揃えられたこともあって、ほとんど問題なかった。

着てようやくこの衣装のキャラクターがわかった。確かこれ、文豪をイケメンにしたキャラクターたちが異能力で戦うヤツだ。

万人受けするムーンレンジャーにこそ劣るけど、女性を中心にかなりの人気を集めてる今季の覇権アニメの一つだ。

そして今は滝本さんに髪型を調節してもらっている。髪の色は僕と同じ白だから、ワックスでそのまま形にもらった。

「これで……よしっ」と

「あ、ありがとうございます」

手渡された鏡をみると、すごい出来だ。移っているのが僕とはいえない。思えない。

「じゃあ、撮るね」

滝本さんはスマホを取り出して、コスプレ衣装に身を包んだ僕にシャッターを切る。

不思議と満足げだ。さっきまでまずつと無表情で作業してたのに、えっへんと誇らしげ。

「これで、オアイコ……だね」

その上、昨日うっかり事故で見てしまった滝本さんのコスプレのことも、納得してくれたらしい。

滝本さんはどう思ってるかわからないけど、その……コスプレした滝本さんもすごく可愛いかったな。そこまで隠すようなことでもないと思うのだけど、やっぱり恥ずかしいのだろうか。

などと考えていると滝本さんはまた紙袋から何かを取り出した。

今度はなんなんだ!?

と、連続で起こる怒涛の展開に恐怖すら覚え始めた時、滝本さんが持ってきたのは二つの箱だった。

思ったより拍子抜けだったこともあり、つい呆気にとられてしま
う。

「滝本さん……それは？」

「お弁当……作ってきたの」

「僕に……ですか？」

「うん……前、ここに来たとき……あんまり、ご飯食べてないっ
て……言ってたから」

「滝本さん……」

確かにそんなことも話した覚えはあるけど、まさかそこまでしてく
れるなんて思ってもいなかった。僕は料理はできないから基本的に
食事は買って済ましてるから、こうして手作りのものは随分久しぶり
だ。

「あとは……口止め料として」

「……」

前の千円札のことは反省してくれたんだろうけど、それならコスプ
レなんてさせなくても最初からそつちを渡してほしかったなと思う。
それでも滝本さんのお願いを聞くといい、それがこのコスプレなの
だとすればしかたがない。

苦笑いしながらでも、僕は滝本さんが作ってくれたお弁当を受け
とった。

——滝本さんはすごく料理が上手だった。

今まで食べたお弁当のなかでも一番おいしい気がするほどだ。時
間がないから急いで食べたけど、本当はもっと味わって食べたかった
からすごく残念だ。

「ごちそうさまでした。おいしかったです」

「ごちそうこそ……お粗末様です」

お弁当箱を返すと、滝本さんもうれしそうにしてくる。だけど、
時計を見ると、もう昼休みが終わる時間だ。これ以上滝本さんを長居
させるわけにはいかない。

「滝本さん、ミシンは僕が返しに行きますのでもう戻ってください」

「あ、うん、ありがと……」

「あと、もうこれ脱いでもいいですよね？」

「ダメ」

「え？」

「ダメ」

東京ゲーム展 表

青葉視点

「ゲーム展、どんなかんじなんでしようね」

「企業日やから一般の日よりも空いとるはずやで」

「去年も行ったけどすぐおもしろかったよー」

八神さんにゲーム展に行ってみるようにと進められた私たちとゆんさんとはじめさんは、キャラ班を後にしてオフィスを出ようとしていた。

ゆんさんをはじめさんも凄く楽しみにしてるみたい。それもそのはずだ。

だって、今日初めて、『フェアリーズストーリー3』が一般公開される。私もちよつとドキドキしてる。

そうしていると、前から敦さんと葉月さんが並んで歩いてくるのが見えた。

「そーいや葉月、前に桜が見つけた階段付近のバグについてなんだけどあれどうすんだ？」

「ああ、あれは仕様だよ。偶然にチラリと見えるパントウ…そこにロマンがあるのさ」

「それCERO的にアウトじゃね？」

敦さんと葉月さんが二人で話しているところは、入社して半年も経っていない私から見てもそう珍しいことじゃない。

多面的に制作に携わってる敦さんにとつてはディレクターの葉月さんと話すことはほぼ毎日に見かけることだ。

「おやっ？」

そう思っていると、葉月さんが私たちに気づいてこっちを向いてくる。敦さんも遅れて私たちに気づいた。

目があった途端、私たちは揃って挨拶する。

「おはようございますっ」

「っ……おはようございます」

一応、先輩と上司だからちゃんとしないと。

でもゆんさんは何故か敦さんを睨んでる。何でだろ？

「涼風君じゃないか……ああ、今日は企業日だったね。八神君が行くように言ったのかな？」

「そういやもうそんな時期か」

「敦さん達も忙しいんですか？」

「まあな」

ため息をつきながら敦さんはぼやいている。さっきの話もバグのことみたいだしやっぱり忙しいみたい。

でも、さつきねねっちがそれ見つけたんだよね？

ねねっち、ちゃんと働いてるんだ。よかった。

この前コード抜いちやったことや、うみこさんにいつも叱られてるところがあつたから少し心配してたけど安心した。すると、敦さんは突然顔の色を変えて私の方を向いた。

「なあ、涼風。もしも俺と同じ背丈の、灰色の髪をした男が話しかけてきたら、無視して逃げろ。いいな？」

「えっ？」

あまりに当然切り出されたので、困惑した私は思わず聞き返してしまふ。敦さんはさらにグツと近づいて念を押して言った。

「いいなっ。」

「は……はい」

その瞳はまっすぐ私を見つめていた。それがよりいっそう恐怖を引き立たせる。ゆんさんもはじめさんも怖がってる。

その時の様子は、依然敦さんのお見舞いに来て、私があるディスクを見つけたときの雰囲気とどこか似ていた。

誰なんだろう……その人。

「あ、確かにアイツも行ってるだろうな。敦君、せっかくだし君も行ってみたらどうだ？」

「はあ!？」

敦さんの忠告を聞いた葉月さんは何か面白いイタズラでも思っていたような顔で敦さんにも話を向けてきた。

それに対して敦さんは露骨に嫌な顔をする。

「嫌に決まってるだろ。なんでよりもよってアイツがいるところに行かなくちやいけねんだ」

「へー、でもアイツ、涼風君達が無視した程度でなんとかできるとは思えんのだが」

「……っー」

嗜虐的な笑みを浮かべながら、葉月さんは敦さんを追いつめていく。

敦さんも返す言葉が無くなってきているのが見て取れる。

そんなに怖い人なの？ 二人が言っているアイツって……。

「決まりだな」

「待てよ！ まだ行くとは言って——」

「はなちゃん！」

「はーい♥」

葉月さんのかけ声と同時に、ピアスをした細身の男性がどこからともなく現れて驚いてしまう。

えっ……、今どこから出てきたの?!

つてよく見たら前に佐藤さんとりんさんの時に敦さん達と話してた人だ。

「今日はどんな感じにする〜?」

「はなちゃんのおまかせで」

「OK♥」

「だから話を勝手に進めんじや——ぎやあああああー!」

敦さんが言い終わる前に、敦さんを捕まえた花男さんはそのまま彼を引きずって会議室がある方向に消えていく。状況にいまいちついていけない私たちは、敦さんたちを追いかけようとしたけど、葉月さんに止められた。

「あ……敦さんたちは何を?」

「なに、10分もしたらすぐにわかるさ」

葉月さんに言われるがまま、私たちはその場で二人を待つことにした。

すると、会議室の方から2つの声が聞こえた。

「フンッ!」 「アーッ!」

「!.....!」

今のは聞かなかったことにしようと、私たちはその場で無言のやりとりを行った。

こうしてると敦さんたちがひふみ先輩に佐藤さんとりんさんのことを押しつけたのと似たようなことなんだけど、こんなかんじなんだな。

.....そういえば、ひふみ先輩はどうしてるんだろ。

八神さんは先に行っていると言ってたけど、メールの返信はまだない。いつもなら早いのに。

と、そこまで考えていると葉月さんの言うとおりの10分経っていた。そろそろ二人が戻ってくる頃と思ってた時、会議室の方から二人の人影が見えた。

片方はピアスをした細身の男性、花男さんだ。

そして、花男さんの隣を歩いていたのは――

「!?!」

私たちは息をのんだ。

「あの.....敦さんですか?」

「それ以外の誰だつて?」

「いやホントに誰ですか!?!」

私たちの目の前に現れたのは見たことのない宮本敦だった。まず違ったのは見た目。

特徴的な目のクマは消えてなくなつて、むくみのある顔もすつきりとしている。その上、綺麗に整った顔の上には縁のない眼鏡まである。髪の毛も散髪されていて、ほどよい癖っ毛になっている。

服装も、八神さんのようにだらしない格好ではなく、ファッション誌で見かけるような格好だ。

「どうかしたかい? 青葉。ああ、素顔を見せるのはこれが初めてだね」

「えっ.....あの.....名前?」

そして次はしゃべり方。低くて重く、そのくせに変に柔らかい声

は、いつものだらけたしゃべり方とは違って随分ていねいだ。

あと、私のことを名前で呼んだ。

「そこまで驚かなくてもいいじゃないか。ま、涼風たちには初めて見せるもんな」

そう言いながら眼鏡を外すと、いつものだらけたしゃべり方に戻った。

「素顔はハンサムなんだから、ずっとその顔でいればいいじゃない」

「花男、簡単に言うな。維持するのがしんどいんだよ」

余計に訳がわからなくなってしまう。はじめさんもきよんとしてゐるし、ゆんさんに至っては、あんぐりと口を開けて顔をいろんな色にコロコロ変えている。

「こういう仕事していると、メディアに露出する時もあるからね。視界の有無で性格をスイッチしてるんだよ。ちよつとしたおまじないさ」

また眼鏡をつければ、だらけた口調とは打って変わって、ていねいな口調に早変わり。

まるで役者のような口ぶりだ。

どっちが本当の敦さんかわからない。まさか二重人格!?

いや、使い分けてるだけだし、そういうのじゃないのかな?

TPOとか言うんだっけそういうの。なるほど、八神さんみたいに正直じゃなくてもこんなやり方もあるんだ。

そこまで考えると、ふと気になることが一つできた。

「視界の有無ってことは、敦さんって目が悪いんですか?」

「軽い近視だね。でもまあ、普段仕事してる時とかにはつけなくても青葉たちの顔くらい見れる範囲だから仕事には支障はないよ」

そこで日常生活と言うのではなく、仕事と言うのが敦さんらしい。やっぱり口調が変わってもこの人は敦さんなんだとちよつと安心したりする。

でも眼鏡をつけるのは、あまり落ち着かないからか、敦さんはすぐに外して胸ポケットにしまう。

「ま、涼風はまねしない方がいいかもな」

いつもの口調に戻ってから、敦さんは前に私をからかったみたい
に私の頭を撫でようとする。とっさに私はそれをガードする。

「！」

敦さんといい、佐藤さんといい、背の高い男の人に頭上を許しすぎ
てる気がするから必死だ。

だけど、敦さんの手は私の頭とは違う方向に逸れた。

「あれ？ お前ちよつと背が伸びてないか？」

不思議そうな顔で頭を撫でてる敦さんを見て私は戦慄する。

「くっつ!!」

だって……敦さんが撫でてるのは私じゃない。

「敦さん、それゆんさんです……!」

「うおあ!」

言われてようやく気がついた敦さんは慌ててゆんさんの頭から手
を離す。

ただ、その時一瞬だけ、普段長袖で隠れてる敦さんの右腕に、一筋
の縫い傷があることに気付いた。

「……」

はじめさんはそれに気づかず、ゆんさんの頭を撫でたことを笑いな
がら敦さんをからかい始めた。

「全然大丈夫じゃないじゃないっすかー」

「眼鏡外した直後だからよく見えなかった。あー飯島？ 大丈夫か
？」

「ゆ……ゆんさん？」

「……」

「立ったまま気絶してる……」

●

ゆんさんが目が覚めたあと、私たちは電車に乗ってゲーム展の会場
までたどり着いた。

あの後も、ゆんさんはしぶしぶついてくることになった敦さんを陰
しい剣幕でずっと睨んでいて、そのせいで敦さんはすごく居心地が悪
そうだった。

機嫌を悪くしたゆんさんだけど、それもすぐによくなくなった。
というもの――

「ああ！ ソフィアちゃんが映ってる!!」

「私を作ったモーシヨンも!」

「うちのモンスター!」

私たちが作ったモノたちが、プロモーシヨンビデオとして大きなモニターに映し出されている。

こんなたくさんの人が見てる中でなんとか恥ずかしいけど、八神さんが行けって言うてくれたことがわかった気がする。

ふとはじめ先輩とゆん先輩の方を見ると、目をキラキラさせてモニターを見つめている。

そっか…。はじめ先輩もゆん先輩もこれが初めてなんだよね。しかも入社したばかりの私なんかよりも一年多く……。

そんな凄い作品がこれから、発売されるんだ。

……敦さんは一度PVを見たら適当な感想を述べてから、トイレに行つてくるとか言つてたけど。

やっぱり何回も作つてるとそういう反応になっちゃうのかな？

それは……なんかやだな。

敦さんは、そんな権利なんてないって言つてたけど、やっぱり違ふと思う。

でも、それを違ふって証明できない自分かもどかしい。

「――ねえ君たち、もしかして『イーグルジャンプ』の子達かい?」

「「?」」

突然知らない人に声をかけられた。

振り返ると薄い灰色の髪をした男の人が立っていた。背広姿をしたその人は、敦さんと同じ体格をしていた。灰色の髪の毛は一本一本が繊細で、毛先はふんわりとしている。それはまるで絵本で出てくるような王子様を思わせた。

「あ……あの、どこかの企業の方ですか?」

「ああ、失礼。こういう者なんだ」

男の人は自分の服の中から長方形の紙切れを取り出す。見たところ

ろ名刺だ。

今日ここにくる前に八神さんに教わったからわかる。一番前にいた私が自分の名刺を取り出して男の人の前に出す。

「か、株式会社イーグルジャンプの、涼風青葉と申しますっ」
ちゃんと言えた。練習したとはいえホントに名刺交換することがあるなんて……。

でもその人は私をじっと見つめるだけで、なにも反応しない。

「……」

「あ、あの……」

「ああ、ごめんね。あんまり可愛いから見惚れちゃってたよ」

「ええ!？」

「気にしないで、ほら名刺」

男の人はまるで私の緊張を溶かすような明るいのような笑みを見せながら私の名刺を受け取って、自分の名刺を私に渡してくれる。

受け取った名刺にはこう書かれていた。

株式会社 sy games 代表取締役社長 渡邊新一

と。

「……」

「……へ？」

だいひょーとりしまりやくしやちよー？

「青葉ちゃんーその人誰——!？」

「あ……青葉ちゃん？ その人ももしかして……」

はじめ先輩もゆん先輩も、私が受け取った名刺を見て固まってる。

知ってる。

sy games。

有名なソーシャルゲームの会社だ。企業として最近できた会社だけど瞬間に業績を上げていった。

初めてリリースした『神撃のファフニール』や、最近なら『シャインバース』、『プリセスコネクタ』、『アイドルシスター』どれも有名なゲームだ。

私も高校生の時にクラスのみんなが話してたことを思い出す。
そんな凄い人が今日の前に……!

「——おいシンン！」

突然肩を掴まれた私はそのまま後ろに引つ張られる。顔を上げると敦さんが私を抱き寄せたのだ。

「敦さん!？」

敦さんの顔が、いつものお化けの様な顔でないのと、彼の身体と密着してしまっているせいか、不思議と顔が暑くなってしまう。

真剣な顔のまま、敦さんはその人に話しかけた。

「うちの社員に何してやがる?！」

「何もしていないさ。ちよつと挨拶ただけだよ」

敦さんっ！ この人社長さんですよ!!? なんで眼鏡かけてないんですかー!?

そんな風な喋り方だと殺されちゃうんじゃないかと、思ったとき、私はピンときた。

敦さんが話してた同期のことを。

確か社長をしてる人がいるって、まさかこの人!?

そして、今朝会社で敦さん達が私たちに忠告してた人のことも。

「ひさしぶりだね、敦」

「頭の湧いた廃人共から搾取した金で食うステーキの味はうまいか?」

「まるで人の仕事をヤ●ザみたいに言わないでほしいな。ちやんと消費者の了承を受けて提供してるんだよ? 課金するかしないかは消費者の自由さ」

「……チツ。これだからここに来るのはやだったんだよ」

彼の外連味の無い笑顔に悪態をこぼしながら私を手放した敦さんは、私たちを一瞥すると、目の前にいる社長さんに目を迎直りながら言った。

「お前らは先に帰って仕事でもしとけ。俺は、コイツと話がある」



敦視点

「マール・ド・ブルゴーニュ ロマネ・コンティ って知ってるか？」
涼風たちを引き返させたあと、俺は、フェアリーズストーリー3の
ブース付近の空いたスペースにいる。

隣には、忌々しいコイツを置いて。

「ああ、もちろんだとも。一本二十万する高級ブランデーだろ？」

「社長のてめえにやわからんだろうが、安月給だろうがコツコツ貯
めて、ここぞって時に味わおうとした秘蔵の品だ」

「それが？」

「てめえが会社を辞めたあの日、俺はソイツを開けて祝った。そん
くらいてめえにやウンザリしてたんだよ」

「僕も、あの時、君のパソコンにウイルス流しこんだりしたっけ？」

「やっぱりあれてめえか！」

だと思つたよ。

うまい酒飲んでいい気分の仕事しようと思えば、コイツの自作クソ
ゲーをクリアしないとパソコンが開かない仕様になってやがった。
そもそもあんな質の悪い嫌がらせするのはシンを除いて他にいない。

本当に最悪な気分だった。

特に今している笑み。

一見気を許してしまいそうになるその顔とこの外連味の無い声は、
コイツのなりよりも恐ろしい凶器だ。この笑顔の裏の性根がどれほ
どひん曲がっているのか、俺は痛いほど知っている。

目的のためなら、どんな手段も選ばず、身内に火中の栗を拾うこと
すら厭わない男。

だからこそ、わずか数年で自分の会社をあそこまで大きくできたの
だろう。きつと、相当な恨みを買っているはずだ。

「そうそう、葉月は元気にしてるかい？」

「まあな。いつも通り女ばっか囲ってこつちが苦勞してるよ」

「アハハ、大学の頃から相変わらずだね」

笑みを崩さないシンは『フェアリーズストーリー3』のプロモー
ションビデオが表示されてるモニターに目を向ける。

その瞬間、ヤツの笑みが変わった。

「八神はどうだい？ あの子、また後輩を苛めてないかい？ あの可愛い子達も心配だよ。ホントのこと知ったらどんな顔するかな？」

「おい……」

ヤツの口からその名前が出た途端、測らずとも声が濁る。ヤツがこれから話そうとしていることが、それほど胸くその悪いことだからだ。

「今だから言うけれど、あの子の教育には難儀したよ。要領は悪いし、独断専行でチームの雰囲気悪くする。おまけにあの子供だましのキャラデザときたまもん——」

「シンっ!!」

言い終わる前に、俺はヤツの名を叫んだ。周囲の視線がこちらに集まるのを感じるが、そんなことすら些末ごとだ。

ただ、目の前にいるコイツの言葉を俺は許すことはできない。

コイツがうちを辞めたのは、フェアリーズストーリー2の開発中。その時期に、コイツはある新入社員と一緒に、イーグルジャンプを辞めたんだ。

「あの時八神を見限ったお前に、今の八神をとやかく言う資格はねえよ」

「…なんだよ。軽い冗談じゃないか。そんな怖い顔しないで。せつかくのハンサムが台無しだよ。ほら、スマイルスマイル」

目の前にいるこの男は笑みを浮かべ、軽く流そうとする。だが分かる。その瞳は一切笑っていない。ただまっすぐ、『僕は絶対に間違っていない』と疑っていない。そんな目だ。

「アイツじゃ縁の代わりにはなれないよ」

そうだ。だから俺はコイツと涼風達を遭わせたくなかったんだ。ここに来たのだって、こうなることを分かっていたから。涼風達には、コイツの話聞かせてはならないと。

まるで道化のように大げさな身振り手振りでこちらに歩み寄ってくる、俺の肩に手を置く。

「まああれだ。帰ったら八神に伝えといてくれよ」

そして、俺の耳元でささやいた。

「君がクビにしたあの子、次の新作のキービジュ担当になるんだ。今度のはすごいよ。この国にいる糞虫どもが狂ったように金を貢ぐだろうさ。まるで、悪い薬にでもハマったようにね」

「……てめえ、つまんねえヤツになったな」

「でなきや何も守れないよ。あの時みたいだね」

あの時という単語に、すでに逆立った俺の神経はさらに逆なでされる。いいや、コイツの場合、虫酸が走るという方が正しい。それは、俺にとつて、いいや俺たちにとつて忘れることのできないあの事件の事。

「まったく、せめて君がやってくれたなら、まだマシだったんだけどね」

「その手の苦情は、もう何万回も承ってるよ」

俺はヤツの乱暴に手を振り払う。

あの時の後悔のことを俺は未だに後悔している。俺がコンペに出られなかったことじゃない。俺にとつて、そんなことどうでもよかつたんだ。

いやいつそのこと、俺があの時死んでいけば……あんなことにはならなかった。知りたくもないことを、気づきたくもないことを、ああして直視することなんてなかつたのに。

無知でいれば、ただの子供のように夢を追いかけていれば、一度も振り返ることなく前に進んでいれば後悔なんてしなくてよかつたのに。

だが……そんなこと、もう今更どうこうすると言った話ではない。もう色んな事が、手遅れだったんだ。

「俺はもう……モノを作ることは、できない」

「……勝手にするといいい」

俺に背を向けたシンは、ゲーム展のざわめきがあつた返す人ごみに消えていこうとする。

だが、その前に立ち止まって再びこちらを振り返った。そして、わざと周囲に聞こえるような大きな声で言った。

「ああそういえば、敦、葉月とは寄り戻したのかい？」

「あ？ んなわけねーだろ。アイツとはもうとつくに終わっ——」

「「ええ——————!!??」」

「……」

今、聞き慣れた声が聞こえたような。

それが聞こえた方角に目を向けると、俺の素顔を見たときに見せた顔よりもあんぐりとした顔でこちらを覗いている涼風たちがいた。

湧き出た感情は焦りではなく怒りだった。俺はすぐにヤツがいた方向に目を向ける。

だがそこには人ごみがごった返しているだけであの嫌がらせ野郎の姿はどこにもない。ヤツは、最後の最後にとんでもない爆弾を落とす。いきやがった。

……あの、あの……クソ野郎ー!!

東京ゲーム展 裏 前編

純視点

アニメのキャラのコスプレをしながら仕事を再会する羽目になった僕が、いつもの格好に戻れたのは夜、帰りに滝本さんが衣装を持って帰ってくれたときのことだった。仕事中、帰ってきた先輩や花男さんにかわられたわけだけど……。

それと、ミシンはどうやら本当に会社の備品のようで、会社の倉庫にちゃんと片付けた。でも、何でゲームを作る会社にミシンなんてものが備品で置いてあったのかは、今でも不可解な謎だ。

そして僕はなんとかその日を乗り越えられたわけだけど、どうやら滝本さんの『お願い』は、まだ完了してなかったみたいだった。

——そんなわけで、僕は今、とある都外の駅の入り口前にいる。そこは大きくて丸い植木がよく目立って見えるところで、待ち合わせにはちょうどいい場所だ。

さらに言えば、そこは、僕と滝本さんがちゃんとお話をした場所でもある。そうつまり、4月にあったライブの時と同じ場所。

あれから5ヶ月経ったわけだが、ここは年がら年中イベントを行っている。

そして、今日ここで開かれるイベントは僕がいる業界ではかなりの一大イベントといえるだろう。

そのイベントの名は『東京ゲーム展』。

会場は千葉県にあるはずなのにどうして東京なのかは黙っておくとして、まさか僕がこのイベントにくるとは思わなかった。

しかも、滝本さんに誘われて……。

誘われたって言うか、衣装を返したときに半ば強制的に取り付けられたような形でだけど。

やっぱり女の人に対して、軽々しく『なんでも』と言うべきではないなとつくづく後悔してしまう。

とはいっても、滝本さんに頼まれたことが嫌だった訳ではない。少なくとも僕なんかを頼ってくれたことなのだからそれは、すぐくうれ

しい。

でもまさかこんな時間に待ち合わせだなんて。

僕はスマホで時間を確認すると、7時と表示されている。つまり僕は始発でここに来た。それも滝本さんが指定した時間だ。

それに、そろそろ待ち合わせの時間になるけど滝本さんはまだかな……？

女の人と待ち合わせをするのはこれで二回目だけどやっぱり緊張するな。すると僕のスマホがメッセージを受信した。確認すると、滝本さんからだった。

ひふみん☆ 『今、駅に着いたところだから、もうすぐ合流できるよ(≡▽≡) b』

MASUDA 『わかりました。僕は前と同じ場所にいます。急がなくていいのでゆっくり来てください』

ひふみん☆ 『うん、ありがとう(*▽*)』

滝本さんからのメッセージを見て、僕は少しだけ苦笑いする。

スマホの画面で話してる滝本さんは、すごく饒舌だ。顔文字もよく使ってるし。

SNSで話してた頃はよく知らなかったからあまり気にしなかったけど、リアルで話するときがああだと流石に違和感を感じないもの無理もないな。

ひふみん☆ 『あ、純君見つけたよっ。後ろ後ろゞ(≡▽≡)』

追加のメッセージを確認した僕は、言われたとおり後ろを振り返る。

そこにはスマホと二つの紙袋を携えた滝本さんが立っていた。僕はすぐに滝本さんの元に駆けていく。

「滝本さん、おはようございます」

「おはよ……純君」

挨拶をすればやっぱりたどたどしく返してくる。やっぱりメッセージで話すとくと全然違うんだな。

「荷物、持ちましようか？」

「じゃあ……こっち、純君の衣装だから」

「あ、はい」

ここまでくればなんとなく察しがついてたけど、やっぱりコスプレするんだよな。

東京ゲーム展は企業がゲームの紹介をするのが主旨のイベントだけど、来客の中にはコスプレをするブースも揃えられてる。

紙袋を受け取って中身を確認すれば、前に滝本さんに着せられたアニメのキャラの衣装だ。中に何かモフモフしたものが混じってるけど。

……ちよつと待て。

ふとある考えが浮かぶ。

この紙袋が僕の衣装だとすれば、滝本さんが持つてる紙袋はなんだ？

僕はたまらず滝本さんに尋ねてみた。

「あの…、滝本さんも、コスプレするんですよね？」

「うん……」

ちよつと恥ずかしそうに滝本さんは頷く。

やっぱりか……。

考えるまでもない話かもしれないけど、多分滝本さんの衣装だろう。この前、滝本さんがコスプレしてる写真、見ちゃったわけだし。

「それじゃ……行こっか」

合流を果たした僕たちは会場に向かうことにした。

●

僕たちは他の来場者達とは別の入り口から会場に入る。どうもそこはコスプレ用の更衣室のようで、早朝8時までに来場した人には早めにも場所を提供してくれるみたいだ。

「滝本さん、まだかな…？」

そして衣装に着替えた僕は、一旦別れた滝本さんが着替え終わるのを待っている。やっぱり滝本さんもコスプレするみたいだ。さっきスマホで連絡を取ったらもう少しかかりそうだと顔文字を添えて送られてきた。

僕の場合、最初的时候はサスペンダーの付け方がわからずに滝本さ

んの手を煩わせたけど、二回目となると流石に一人でも着替えられる。

髪型は、滝本さんがメモを用意してくれたお陰でそれも一人で整えられることができた。メモはすごくわかりやすかったけど、やたら顔文字が多かったのが気になった。

滝本さんって顔文字使うの好きだなあ……。

「純君、おまたせ……」

滝本さんの声が聞こえたので、声の方を向く。そこには、見たことのない滝本さんの姿に目を奪われてしまった。

ウィッグをつけてたから一瞬誰だかわからなかったけど、臆気な瞳を見てすぐに滝本さんだとわかった。

「……っ！」

滝本さんが身にまとっていた衣装は前に見てしまったムーンレンジャーの衣装ではなかった。

端に笹の模様が入れ込んである真っ赤な着物姿、何故か右腕の振り袖だけたくしあげている。首にはうさぎのぬいぐるみのストラップがついたガラケーがつるされている。

滝本さんの衣装のキャラクターを、僕は知っている。僕の衣装のキャラクターと同じ作品のキャラクターで、事実上ヒロインとして登場してるキャラクターの一人だ。

あのアニメには文豪たちをイケメン化してるけど、女性キャラも当然いる。ただ、患者を瀕死の重傷にしないと治療できない五千円札の人とか、相思相愛のブラコン自称妹とかで、特に序盤まともな女性キャラがいなかったんだよな。

いや、でもむしろこれはこれで和服美人っていうかすごく似合ってる。コスプレと言われなければ普通の格好と差し支えないんじゃないのかなのか？

「その……あまり、ジッと……見つめ……ないで……っ」

見つめられるのが恥ずかしかったのか、顔を真っ赤にしてる滝本さんの声を聞いてようやく意識がハッキリした僕は、慌てて目を逸らす。……ダメだ、すごく綺麗だったから見惚れてしまった。

でもいつまでも目をそらしていても仕方がない。目をそらしながらでもなんとか話さないと。

「……その、すごく似合ってますよ」

「〜っ！」

誉めたつもりだけど、滝本さんは余計に恥ずかしそうにしている。ヤバイ……また地雷踏んだー

だけど、それは杞憂だった。顔は依然とリンゴのように真っ赤に染まっっているけど、その顔はどこか嬉しそうに見える。

「ありがと……、知り合いに見せるの、初めてだから……緊張、してて」

そういう滝本さんを見て安心する。

コスプレって、人に見せる趣味だと言うのが僕の認識だけど、やっぱり知り合いに見せるのは恥ずかしいよな。知らない人の方がまだ緊張しなくてすむ気がする。

「純君も、似合ってる……よ」

「あ、ありがとうございます」

お互いを誉め合ってから、更衣室をあとにした僕らは、一般来場者達が会場に入るために並んでいる列の最後尾に並ぶ。

一般来場者といっても、今日のゲーム展はビジネスデイ、つまり企業関係者が中心にやってくる日だ。当然、一般公開日より空いてる。だから列もさほど長蛇の列というほどではない。

企業日とは言え、並んでる行列を見渡すと、僕達以外にもコスプレしてる人たちは何人かいる。

みんな凄くアニメのキャラを再現してる。すごいな……。

でもそのままの状態がしばらく続くことには変わりない。列に並んでる間、僕たちはどうしても手持ち無沙汰になる。

「あの、純君……」

「なんですか?」

何か滝本さんが面白がるような話題はないかと考えていたら、意外にも滝本さんから話しかけてきた。

滝本さんはもじもじとしながらたどどしく言う。

「その……今日は、来てくれてありがとう……」

まだイベントすら始まっていないのに、お礼を言うのは少し気が早い気がするけど、僕は滝本さんの話を黙って聞くことにした。

「こうやって…コスプレする仲間とか……いなかった…から」

「こつちこそ、誘ってくれてありがとうございます。こんなのめつたに経験できないので」

「……でも、ちよつとだけ…強引に、誘っちゃったし…」

……あれでちよつとなんだ。

でも大した問題じゃない。言い出しつぺは僕だし、それでちやんとそれを頼ってくれるのが凄く嬉しい。

「気にしないでください。あの時は、ちよつと状況がわからなかっただけなので」

「うん……」

気がつくど、目の前に並んでる人たちが動き始めた。どうやら会場に入れるみたいだ。企業日だからか思ったよりも列の進みも早い。この調子ならすぐに会場の中に入れそうだ。

僕たちは会場に入るため、前の列を追って歩き始める。

歩き始めたとき、長い紐が足に当たるのが気になって足元を見る。このキヤラはベルトが足元まで垂れてる。歩いているとどうしてもそれが気になってしまう。

うーん。やっぱりこのベルト結構長いな。踏んづけて転ばないよ
うに気をつけないと……。

「純君……」

そう思っていると、滝本さんは歩きながら僕に声をかけてくる。何か凄く深刻な顔だ。

もしかして、何かトラブルでもあったのか？

ならばすぐに係員の人を呼ばないと、と思ってもみたけどどうやら違うみたいだ。

「覚悟しててね……」

「え？」

そう言った滝本さんの言葉に首傾げた僕だけど、会場に入ってから

彼女の言葉を理解した。

『——きゃあああっ!!』

最初に聞こえたのは黄色い歓声。どこから聞こえるかと言うと、もはや方向すらわからない。ていうか囲まれてるから方向とか関係ない。

『企業日にこんな素敵なおコスプレを拝めるなんて……!』

『まるで本物みたい!』

『あれ地毛? すごーい!!』

『こっち向いてくださいっ!』

「あ、はいっ……」

『こういうポーズお願いしますっ!』

「……ここ、こうですか?」

『はいっ! そのままで!』

奇声を発しながら僕たちを囲んでいる人たちは皆両手にカメラを携えている。撮影してるのも当然僕たち。

一人一人応対してるあいだもパシャパシャと写真を撮られる音がある。

コスプレって、こんなに人が集まるものなの!?

あとこのポーズキツツ……。何故かさつきから低い体勢のポーズばかり要求されてる。

隣を見れば滝本さんにもギャラリイがたくさん集まってる。しかも僕よりもずっと多い。やっぱり美少女キヤラは人気があるのだろう。

でも恥ずかしくないのかな?

心配してもう一度見ていると、むしろノリノリで凄く楽しそうだしつき話していた滝本さんとはまるで別人に見える。

『次はツーショットお願いします!』

「えっと、わかりましたっ……た、滝本さんっ」

隣に滝本さんと呼ぶと、当然滝本さんが集めてたギャラリイもドツと押し寄せてくる。

その上、人だかりのテンションは天井知らずに上がっていく。
この作品はいわゆるBL系……つまり腐女子系の二次創作もかなりあるけど、その中でも僕のキャラと滝本さんのキャラは普通の異性同士のカップリングとして人気だ。

それがリアルで実現してるから、余計にテンションが上がっているのだろう。

僕はこっちにきた滝本さんに耳打ちで話しかける。

「す、すごい人の数ですね……」

「うん……でも企業だからまだ少ないほうだよ」

「……!」

滝本さんの言葉に絶句するしかない。

重ね重ね思う。コスプレって、こんな大変な趣味だったの!?

『次はこう、お互いの身を寄せ合うかんじで!』

ギャラリー達が要求したポーズに息を呑む。ちよつと待って!

いくらなんでも異性同士なのにそんなの恥ずかしすぎる!

さすがに滝本さんだつて嫌なはず――

「わかりました」

「!?!」

滝本さんは即答して僕に身を寄せてくる。うわっ……ちよつとほんとに待ってほしい。着物で締め付けられてるからわからなかったけど、また滝本さんの柔らかいあれが当たってる。

滝本さん……完全にコスプレのキャラになりきってるみたいだ。

雰囲気がいつもと全然違う。羞恥心が微塵も感じられない。

『きゃあああ!』

身を寄せ合う姿が余程絵になっているのか、ギャラリー達のテンションはまだまだ上がる。

お願いします……ちよつと待ってください。あと一分だけでいいんで休憩させてください。

こうしているの凄く体力使うんです……。

でもギャラリー達はそんなこと許してくれるわけもなく、次々と僕たちを写真に収めていく。

こういう写真って、どういう風に使われるんだろ。SNSとかにあげられるのかな？

帰りに確認してみよう。もしかしたら上がっているかもしれない。

『視線くださーい！』

僕たちは次の要望に応えるべく、この状態で一人一人応対している。

「!?」

ん？ 滝本さんの様子がちよつと変だ。

視線を要求されて向いた方角を見て何故か凄く慌てている。

試しに滝本さんの視線の先を辿ると、3人の女の子のグループと、1人の男性が話していた。こっちは気づいてないみたいだけど誰だろう。

滝本さんの知り合いかな？

……いやまて。

女の子はともかく、男性に対して僕の視線にかかった。

普段の目のクマは無くなっていたからわからなかったけど、あれ先輩じゃないか！

ゲーム展には行かないって言ったのになんでいるんだあの人は！

しかもメディア露出用フォームに変身してるし！

じゃあもしかして、あの女の子達って、滝本さんと同じチームの人!?

まずい……先輩には前にも見られたけどこんなところで見られたら最悪だ。何とかして隠れないと。

慌ててしまった僕たちは、ギャラリ―を影にして身を隠そうとする。

「純君……！ その、隠れて——きやつ!?」

「——うわっ!?」

だけど、そのせいで気づかなかった。滝本さんが足元まで垂れてる長いベルトを踏んづけてしまったことに。

腰から大きく崩れた重心は、とても立て直すことができない。

僕たちは、身を寄せ合ったまま倒れてしまった。

「ん……んんっ！」

痛い……。背中がジンジンと痛む。

頭は打ってないみたいだけど、転んだ衝撃のせいで視界がはつきりしない。

僕が滝本さんの下敷きになったため、怪我はないだろうが、とりあえず大丈夫ですか？　と言おうとしたけど、口が……なにか柔らかいもので塞がって喋れない。

あと、さつきから聞こえてたはずのギャラリーの声が聞こえない。視界がはつきりしてきた時、僕が目の当たりにしたものは、青い瞳だった。

凄く近い。文字通り目と鼻の先だ。

この青い瞳は見覚えがある。滝本さんの瞳だ。なんでだ？　なんで滝本さんの顔がこんな近くに——!?

「んんんっ!？」

突然、滝本さんの顔が遠ざかっていく。その顔は真っ赤だ。

と思ったら今度は真っ青に、次はピンクにとコロコロと顔の色を変えてパニツクになってる。

口を抑えながら後ろに跳んだ滝本さんは、声にならない声が響く。僕もここまで来てようやくよく理解した。

どうしよう……。僕、今……。今っ、滝本さんにキスしてしまった！

東京ゲーム展 裏 中編

純視点

—— 思えば最近、滝本さんのことばかり考えてるような気がする。 どういうわけが、滝本さんと初めてちゃんと言ったこの場所に一足先に着いた時にそんなことを考えていた。

考え始めたのはいつだった？

無くしたウオークマンが返ってきてからだと思う。

それ以来、入社する度にうっかり滝本さんに会えないかなとか無意識に考えてしまったこともあった。

それだけじゃない。仕事の合間や家でくつろいでるときも、彼女の顔が頭に浮かんだことさえあった。

ドーナツを持ってきてくれたとき、あの時は無理しなくていいと言ったけど、滝本さんが来てくれたことがうれしかった。

花男さんが、滝本さんに手を出す男を始末してる話をしたとき、どういう訳かとても安心した。

そもそも、弾けもしないピアノをまた弾こうなんて思ったのも、滝本さんが絡んでる。

なんで弾こうと思ったんだっけ？

そうだ。滝本さんが笑ってくれるかなと思ったからだ。

滝本さんが僕の作った曲をすてきだと言ってくれたから、それがうれしかったんだ。

僕の行動原理の中心には、いつも滝本さんがいた。

僕が悩んでいることを、誤魔化したときも、滝本さんは深入りしなくても元気づけようとしてくれた。

それも、本当にうれしかったな。

ピアノの弾けない自分に価値なんてないはずなのに、あそこまでしてくれる滝本さんが僕には女神様にでも見えたのだろうか。

いや、彼女は女神様なんかじゃない。人間だ。男の僕と話すことだって、本当は怖いはずなんだ。

怖いこともあるし、きっと悲しくて泣いてしまうこともあるだろう

う。

ならば僕には何ができる？

そこまでしてくれた滝本さんがそうなってしまったとき、僕は、何ができるのだろうか？

● 「滝本さんっ、こっちー！」

「え……あ——」

滝本さんにキスしてしまった僕がその直後にしたことは、滝本さんをつれてその場から逃げる事だった。

不幸中の幸いにも、ギャラリー達は呆然としている間に抜け出すことができた。

滝本さんの手を握った僕は、とりあえず人気のないところまでたどり着くことができた。企業日だということもあつて人が比較的少ないのも運が良かった。

けど、あんなたくさん人の前でキスしてしまうなんて……っ！

「はあ……はあ……ここまでくれば」

「……っ」

いきなり走ったので息が切れる。胸の動悸も激しくなってる。それに滝本さんの少しつらそうにしてる。

とりあえずここで休ませないと。着物だから走りずらかったはずだろうに……。

「すみません……いきなりはしりだしちゃって——っ！」

滝本さんのほうに振り返ろうとするけど、僕はすぐに目をそらしてしまう。

無理だ……顔なんて見れない。だってキスしてしまったんだ。

多分、滝本さんにとって、初めての……ファーストキスのはずだ。それを……あんな形にしてしまうなんて。

最低だ、僕は……っ！

僕がもつと落ち着いていればこんなことにならなかったのに……。僕の不注意が招いた事態だ。

もう、言い訳も弁明もできない。滝本さんにどんな酷いことを言わ

れても仕方がない。

「——ごめんね」

「え……？」

後ろから聞こえてきた言葉は、罵声でも暴言でもない……謝罪の言葉だった。

思わず振り返ると、膝をついた滝本さんは涙で顔をぐちゃぐちゃにしている。

「た、滝本さん……？」

「私のせい……だよねっ……私が1人で……舞い上がったやつたから……」

「っ……！」

「私が……むりやり誘った……から、そのせいで……純君に、迷惑かけて……あんなことに……なって……私のこと、嫌いに……なったよね……っ」

涙声で唸る滝本さんを見て愕然とする。そんな、滝本さんは悪くないはずだ。

あのベルトだって、危ないだろうと気をつけていたのに、肝心なときに忘れてしまったのは僕のせいだ。

なのに、この人は自分のせいだと言う。滝本さんのような人が、そこまで抱え込む必要なんてないのに。

ふとそこで、かつての忌々しい記憶がまた蘇ってしまう。今でも鮮明に覚えている。

間違えるたびに殴られた。泣いても許してもらえず、余計に殴られた。

ピアノを弾いていた頃の僕には、暴力は日常だった。

実の父親からの教育は、それほど厳しかった。

——音楽の才能だけがおまえの価値だ。弾け。でなければ呼吸をするな。無価値な人間に呼吸する権利はない。

なんで今更そんなことを思い出すのだろう。と考えたけど、理由はすぐにわかった。

似てるんだ。あの時、あの場所にいた僕に、今ここで涙を流してい

る滝本さんが……。

僕も、こんな風に泣いていたから……。

「……っ」

……そうだ。僕はいつだって見捨てられながら生きてきた。泣くことも許されず、音楽以外の価値を認められず、人間としての居場所もなく……それでも僕は——

——お前には何もできません。お前ごときが何ができる。

また、聞こえてくる幻聴を、僕は強引に振り切る。だからどうした。だから見捨てろと言うのか？

ふざけるな。もし僕が今ここで滝本さんを見捨てれば、それはきつと、かつての僕も見捨てることになる。

それだけはイヤだ。ずっと気づかないフリをしていたけど本当は自分の気持ちに気づいていた。先輩や花男さんには否定したけど。

僕はこの人にだけは悲しんでほしくない。そんな所は見たくない。

今朝、滝本さんと待ち合わせてたときに思いつけていたことを思い出す。

ああ、なんで僕があんなに滝本さんのことを考えているのかわかった。

僕は好きなんだ。この人が。

僕の曲をすてきだと言ってくれたから、逃げ出したいはずなのに勇気を出して会いに来てくれたから、僕を頼ってくれたから。

だからそれに応えたい。その優しさに。

「私……もう、純君には——」

滝本さんが言い終わる前に、僕は動いた。

理性はない。ただ考えるより先に体が動いたというヤツだ。

「——あ」

僕は目を閉じて、滝本さんの唇を塞ぐ。

さつきと同じ感触が、また僕の唇に触れているのを実感する。

それと同時に滝本さんの体がビクンッと震え上がるのが両手を肩に置いているからわかった。

でも、それはすぐに落ち着いた。

——どれくらい時間がたっただろう。ものの数秒間の出来事のはずなのに、数分間かかったような感覚だ。

さつきまで走っていたにしては、胸の鼓動もヤケにうるさい。そのくせ、ヤケに心地よいと感じてしまうからたちが悪い。

顔を遠ざけて、目を開けたときに映った滝本さんの顔は、ポウツと惚けていた。

「純……君?」

「……泣かないでください」

声は、少しだけ震えてしまった。だけど構わずに僕は続ける。

「迷惑だなんて思ってません。嫌いになんてなりません」

彼女と目を合わすようにしてちゃんと話す。ちようどポケットに入っていたハンカチで、涙を吹いてあげる。

「だから、泣かないでください」

すると、滝本さんは自分の唇に手を触れて何かを確認する。

「……でも、今……き、キス……」

「……」

そこでようやく我に返る。そして自分がどれだけ恥ずかしいことをやらかしてしまったのかを実感してしまう。

さつきまで倒れそうなくらい暑かったのに、今度は凍り付きそうなほどに体温がさがる。

しまった。やってしまった。

滝本さんになんてことを……っ!

しかも今度は僕から。

「す……すみませんでしたあ!」

「!?!」

言い訳のしようがないのはわかっているけど必死に口を動かして弁明する。

「えっと……なんて言いますか、勢い……じゃくて、ノリ……でもなくて、その……滝本さんに泣いてほしくなくて、それで無我夢中で……それで……」

なんでこんなことしたんだ僕は!

ほかにもっとあつたはずだろう！

なんだよりもよつてあんなことやつちやつたんだ！

死にたい、ていうか死ね、誰か殺してくれえ！

「……イヤじゃ、ないの？」

「え？」

悶える僕に向かつて、唐突に飛んできた訳の分からない質問に、思わず面をあげてしまう。

「えつと……私に……したの、イヤじゃ、ないの？」

滝本さんは恥ずかしそうにもじもじとしながらも一度問いかけてくる。

僕もようやく質問の真意がわかって余計に慌ててしまう。

「そんなの……イヤじゃないに決まってるじゃないですか。だって僕は滝本さんのことが……」

思わず口が滑ったくせに肝心なところで止まってしまふ。でも、ダメだ。恐れるな。中途半端なんて一番最悪だ。

恥ずかしくては逃げ出したい気持ちでいっぱいだけど、言おうと思つた途端、胸の鼓動が破裂しそうになるけど、ここでやらなければ、多分一生後悔する。そしてそれはきつと、やってしまったことよりもずっと嫌だ。

一呼吸置いて、僕は言つた。

「……僕は滝本さんのことが好きです」

言つた。僕がいま、滝本さんに想っている気持ちを。

まだ逃げ出したい気持ちが残つてる。まだ胸の鼓動は聞こえてくる。

でも、もうこれを言えただけでつつかえたものがとれたみたいにすがすがしい気分になる。

「~~~~!!」

だけど、僕の告白を聞いた滝本さんは今までのどの顔よりも真っ赤に顔を染めてしまふ。

ムーンレンジャーのコスプレを見せてしまったときよりもだ。

声にならない悲鳴で何を言っているかわからない。これは……ど

うなんだ？

滝本さんはどう言っているんだ!?

「……っ」

滝本さんは耳まで赤くしたまま俯いてしまう。しまった。やっぱりダメだった。

だけど、そう思った瞬間、滝本さんは一気に僕に迫ってきた。

「——っ!？」

息をのむ間もなく、滝本さんは僕の胸板に頭を寄せてくる。

小さな両手で僕の衣装をギュッと掴み、そのまま顔を埋めてしまう。

え？ 何？ 何!?

一瞬何が起こったかわからずに、固まった僕は恐る恐る滝本さんに尋ねた。

「た……滝本さん？」

「……もう一回」

「はい？」

すると、小さな声がかすかに聞こえた。

意味が分からずに聞き直してみると、滝本さんはグイッと顔を上げてくる。

そのせいでお互いの顔の距離が一気に縮まった。

間近で見る滝本さんの顔は、いまだに真っ赤で、その上何かを渴望しているような切ない顔だった。

「……もう一回……して……っ」

荒い吐息と一緒に流れてくる掠れるような甘い声とその言葉だけで、滝本さんが何を望んでいるか、僕にでもわかった。

「——」

僕はまた、滝本さんの唇に僕の唇を重ねる。これで3度目。触れるだけの幼いキス。

だけど、滝本さんの唇の柔らかさ、汗と滝本さんの匂いが混じった香りが鼻腔を掠めて、それだけで脳を溶かしてしまいそうだ。

「ん……」

唇を離せば、ちよつと不満げな声が滝本さんの口から漏れる。閉じていた目を開けば、まだ足りないと上目使いで訴えている。

「もう一回……んんっ……」

期待に応えるように四度目の口づけを交わす。

ここまで来ると勝手がわかってきた。僕は滝本さんの背中に手を回す。

今度は触れるだけのキスじゃない。お互いの舌が絡み合っている。

「ん……ちゅ、んっ……」

僕よりの小さい滝本さんの舌のザラザラとした感触が僕の舌をなぞって、背筋をゾクゾクときせて平衡感覚も無くなって立っていられなくなる。僕は、壁を背にして滝本さんを受け止める。そうすれば応えるように滝本さんも僕の後頭部に腕を回してくる。

「ん……じゅん……くうん……」

体中の感覚がどんどん無くなっていき、滝本ひふみだけしか感じなくなる。いや、もう彼女しか感じたくない。

ずっとそうしていたかったけど、息ができなくなった僕たちは酸素を求めてお互いを唇を離す。

こう言うときは鼻で呼吸するとか聞いたけどそんな余裕なんてなかった。

そんなものなど忘れるほど夢中になってしまっていたから。

二人を挟む空間にはお互いの荒れた呼吸だけが響く。

呼吸を整えながら、僕はゆっくりと切り出した。

「……あの、滝本さん……もう、なんかいろいろめちゃくちゃになっちゃってるけど、前に話してた『お願い』……あれ、今使っていいですか?」

「……」

滝本さんはまだ呼吸が整っていないみたいだけど、それでも首を縦に振ってくれる。

それを確認した僕は、ずっと考えていた『お願い』の答えを滝本さんに伝えた。

「僕と付き合って……ください」

数秒間の静寂のなか、滝本さんは息を整え終わってから、とろけるような顔で応えた。

「……はい」

東京ゲーム展 裏 後編

純視点

結局泣いてしまった滝本さんが完全に落ち着いたのは、一目を避けてなんとか更衣室ブースにまでたどり着いたときのことだった。

コスプレ衣装から今朝会場にやってきた私服に着替えている間、ようやく僕自身も冷静になった。

「……僕、とんでもないことしてしまったような」

我に返って、滝本さんのキスを思い出すと、また頭が沸騰しそうになる。

いきなりキスしてしまって本当に良かったのだろうか？

しかも四回も。最後のは舌まで入れてしまった始末だし……。

生まれてこの方異性と触れ合った試しがない僕にとって、その基準がよくわからない。

そもそも、例の『お願い』をあんな風に使ってしまったってよかったのかということについても、後悔の念を捨てられずにはいられない。

滝本さん、二つ返事ではいと言ってくれたけど、あれは本当に滝本さんの本心なのだろうか。

なんていうか、無理やり押し切ったというか、色々めちやくちやだったから滝本さんも混乱してしまっつてついはい、と答えてしまったのかもしれない。

……ダメだ。僕から告白したはずなのに、もう滝本さんとまともに話せる自信がない。

キスした後の滝本さんのとろけた顔が頭をよぎって余計に恥ずかしくなる。

反省と罪悪感、はたまた自己嫌悪故か、頭を抱えて唸ってしまう。

「……純君？」

「滝本さん!？」

——突然、どこからか滝本さんの声が聞こえて抱えていた頭を上げて周囲を見渡す。

でも滝本さんの姿はどこにもない。更衣室の狭い壁が僕を囲って

いるだけだ。

ならば滝本さんはいったいどこに……？

考えた末、唯一信じられる可能性が浮かんだ途端、僕は声がしたであろう方向にもう一度話しかけてみる。

「も……もしかして、壁の向こうにいます？」

「……うん」

僕の予想が本当に当たってしまった。

即席で作られた更衣室ということもあってなのか、男女を隔てる壁も薄くなってしまったのだろう。

……ていうか、今滝本さん、着替えてるんだよな。あの壁の向こうに滝本さんがあられもない姿で……って何を考えてるんだ僕はあ!!

「——っ！」

変な方向に飛んだ思考を、地面に頭を叩きつけて無理やり引き戻す。

脳が揺れて一瞬だけ視界が霞んだけど、なんとなく意識をハッキリと保てた。

だけどよほど強くぶつけたせいかな、壁の向こうから滝本さんの心配そうな声が聞こえてくる。

「……純、君？ 転んじやった……の？」

「いえ……大丈夫です」

声は震えてしまったけどなんとか気丈に振る舞う。ただでさえ先ほどまで泣いてしまっていたのに気を遣わせるわけにはいかない。

ただ、冷戦になった途端、少し不安になってしまった僕は思わず壁越しにいる滝本さんに聞いてしまった。

「あの、滝本さん……、その、無理してないですか？」

「……え？」

「いや……なんか、ノリとか、勢いに流されすぎてるんじゃないかなって……思っちゃいました……」

「……」

しまった！

返事が返ってこなくて僕は焦る。

「ち、違うんですっ！ その、もしそうだったら滝本さんを傷つけちゃうんじゃないかって思ってた……それで」

僕は滝本さんのことが好きだ。

だからこそ、この人に傷ついてほしくない。

イヤなら正直にイヤだと言っちゃってほしい。

ウソについて僕に余計な気を遣わせて、それで失敗なんてしたら大変なことになる。

今更何言ってるんだと言われても仕方がないけど、壁越しから聞こえてきた滝本さんの声は、僕の不安を全てわかっているとわんばかりの声だった。

「……そういうところ、だと……思う、よ」

「……？」

「純君の……素敵な、ところ」

ちよつと恥ずかしがっているけど、滝本さんは懸命に言葉を紡いでくる。

「……間違えたとき、素直に……謝るところとか、人が傷つくところを、ちゃんと気づいて……あげて、気にかけてくれる……ところとか……そんなの、普通、できないから」

「……っ」

たどたどしく聞こえるその言葉は、胸の中の感情がこみ上げてくるような温もりを帯びていた。

滝本さんは話すのはあまり得意じゃないはずなのにそれでも、自分の気持ちを伝えようとしている。

「だから……無理なんて、してない……よっ」

僕なんかそこまで言ってくれる嬉しさと逆にそこまで言わせてしまう情けなさが入り混じっているが、それがなぜか居心地がいいとすら感じてしまう。

「……うう、言ったら……恥ずかしく……なってきた」

「む、無理しないでくださいっ」

さつきみたいに唸る声が聞こえて、また無理してるんじゃないかとやっぱり心配になる。

滝本さん、やっぱり話すの苦手なんだな。

「……ぼ、僕はそろそろ行きますね」

これ以上、滝本さんをこの状況に置くわけにもいかない。僕は着替え終わったし早いところ更衣室を出て滝本さんを待とう。

「あつ……待って——きやつー！」

——だけと、滝本さんは僕を呼び止めた。

その時、滝本さんはどうしたかったのだろうか？ 呼び止めたかっただけなら、声をかけるだけよかったのに、僕のいる壁の方向に手を伸ばしたのだ。

そう、即席で作られた更衣室の薄い壁。

僕と滝本さんが普通に話してお互いの声が聞こえるほど、それは簡単な作りをしていた。

だから、その壁が倒れるのはドミノのように簡単だった。

「あつ……」

とつさに更衣室から飛び出た僕は、壁に押しつぶされることこそなかった。いや、いつそのこと壁に張り付いて支えるべきだったのかもしれない。

だって、倒れた壁の上に張っていたのは、あられもない姿の滝本さんだったから。

薄紫の下着姿で四つん這いになっている、それ以外なにも身につけていない滝本さんに。

何が起こったのかわからず、その様を呆然と眺めてしまう。

あの時の口づけと同じくらいの時間がすぎた後、滝本さんはその時と同じくらいの顔を真っ赤に染めてしまう。

「○×△／（、○、）／☆※〜!!」

滝本さんの声も出ない悲鳴が、隔てる壁のない二つの更衣室に響く。

この声、前にも聞いた気がするけど、今の僕はそれどころじゃない。

「す、すみませんでしたあーっ!!」

僕は更衣室を飛び出した。



更衣室を飛び出した僕は、しばらくして私服に着替え終わった滝本さんと合流した。

その前に、更衣室ブースの空いているスペースの隅でなんども自分の頭を殴打したことは割愛する。

そして今、会場を出てすぐそこにあるベンチに隣り合って座っているわけだけど――

「……」 「……」

会話がない。

僕も何か話を逸らそうとしても、さっきの滝本さんのあられもない姿を思い出してまともに顔が見れない。

ヤバい、見てしまった。思いつきり。

滝本さんの下着姿。

必死に忘れようとしても、面積の狭い薄紫の布地、露出した色白の肌が脳裏に焼き付いて離れない。

その上、その前にその人と交わしたことがより一層それを引き立たせる。

でも、いつまでもこうしていられない。これじゃ告白した意味がない。

なんとかかしないと……。

「あの……」 「ねえ……」

「……」

切り出すタイミングが被った。

うわ……最悪だ。さっきの勢いがまるで嘘のようだ。なんでこんなにうまくいかないんだ……。

「……純君?」

「はっ、はい?!」

また悶々としてしまっていると、滝本さんがまた声をかけてきた。それがあまりに不意打ちすぎて変な声が出てしまう。

しまった。滝本さんを驚かせてしまった。

すぐに謝ろうと慌てた途端、滝本さんはなぜかクスツと笑みをこぼした。

「っ……」

「た、滝本さん？」

「……なんだか、初めて…話した時…みたいだなって」

「あ……」

「そういえばそうか。」

滝本さんのハンカチを拾ったときは、まともに話せなくて、ライブの日にここでちゃんと話せたんだ。

あの時も、滝本さんが僕を引き留めてくれたから逃げ出さずに済んだんだよな。

そうか、こうして滝本さんと話せるのも、滝本さんのおかげなんだ。なんとなく、さつき滝本さんが僕を引き留めようとした理由がわかった気がする。多分、告白の返事をちゃんとしたかったんだと思う。

それがあんな形になっちゃってこんなことになったんだ。

恥ずかしいはずなのに、勇気を出して。

なら、今度は僕が勇気を出す番だ。

意を決して僕は滝本さんの手を握って、彼女の青い瞳を見つめる。

「滝本さんっ、改めていいですか？」

「……うん」

滝本さんも、目を逸らさずに見つめ返してくれる。

いつものような朧気な瞳ではなく、覚悟を決めたようなまっすぐな瞳だ。

ああ、いざ言おうとすると本当に緊張するな。心臓の動悸のエンジンがオーバーヒートしそうだ。

体も変にふわふわしてる気がする。

でも、それでも僕は言った。さつきみたいにめちやくちやな形ではなく、ちゃんと向き合って。

「滝本さんのことが好きです。僕なんかでよかったら、僕と、付き合ってくださいっ……」

僕はまだ滝本さんを見つめる。

言った後も心臓の動悸は収まることを知らない。余計にギアを上
げて爆発しそうだ。

「……なんかじゃないよ」

滝本さんの答えは――

「私も……純君が好き」

――変わらなかった。

滝本さんは笑顔で僕の告白を受け入れてくれた。

「……」

「……」

だけど、お互いの手を握ったまま何をすればいいのかわからなく
なってしまう。

「……あれ？ この後どうするんだ？」

告白した↓付き合ってください↓OK

この後どうするんだ?!

キスとかするのだろうか？ いやそれはさつき散々やったし。そ
もそもこんな平日の真つ昼間にやっていいものなのか？

いやそれを言い始めたらこの告白自体どうなんだ？

滝本さんも手を握ったまま、徐々に顔が引きつっていく。

ヤバい、このままじゃまたふりだしじゃないか！

「え……えっと、と、とりあえず、会社まで送ります」

「……うん」

いつまでもそうしてるわけにもいかない。そもそも今日は平日で、
特例でこうしてるわけだけど用が終わったら早く会社に戻って仕事
をしないといけない。

今の状態でまともに仕事ができるかは怪しいけど。

僕は滝本さんの手を握ったまま、ベンチを立ち上がる。

とりあえず、滝本さんの彼氏として、最初の責務は滝本さんを会社
までエスコートすることみたいだ。

「……なんか、こうして……手、握るのって……恥ずかしいね」

「そうですね……」

さつきまで、こんなことよりもっと恥ずかしいことをやっていたよ

うな気がするけどそれは棚に上げておこう。

余計なことは考えないのが吉だ。

でも、滝本さんの手を握るのは初めてじゃないけどすごいドキドキするな。

男の指とは違って、細くて、柔らかくて、温かくて、ほんのり心地よい。

今までの女性と話すときの逃げ出したくなるようなドキドキではなくて、むしろずっとここにいたいと思うような、安心するような、そんなドキドキ。

ふと目を横に向ければ、彼女がすぐそこにいるという幸福。

多分、これが恋って言うんだろうな。

——だけど、僕たちのそんな幸福は儂くも砕かれることになった。

「ひふみ先輩？」 「増田？」

「?!」

聞き慣れないアニメ声と聞き慣れた低音ボイスが、後ろから聞こえた。

胸の中で踊っていたドキドキは、すぐさま絶対零度にまで落ちてゆく。

忘れてた。

滝本さんとキスしてしまった原因は、まだここにいると言うことを。

「あ……青葉、ちゃん？」 「……先輩？」

振り返れば、コスプレでギャラリー達の相手をしていたときに人混みの影から見かけた女の子が3人。

薄紫のツインテールをした女の子、クリーム色のやたらフェミニンな格好の女の子、ショートカットのやたら動きやすい格好の女の子。

そして、さつき見かけた時はやたらハンサムな格好をしたのに、どこかやつれていろいろ見るに耐えない職場の先輩が、僕たちを呆然と眺めていた。

「……なあ増田あ」

振り返ってから数秒、永遠に続くように思えた静寂を破ったのは先

輩だった。

「俺は今さつき、コイツらに元カノのことで散々弄られた」
いやそれは知りません。

でも意図がわからず僕は、聞き返してしまおう。

「そ……それが？」

「よってコイツらの面倒はお前に任せる！」

先輩は突然駅に向かって走り出した。

速い。

ちよつと待て！ アンタそこまで運動得意じゃなかったろ！

「ちよつ！ やっぱり二人とも付き合ってるんですか？」

「ていうか敦さん！ まだ葉月さんのことちゃんと聞いてまへんよっー！」

「滝本さん！ 走れますか!?!」

「えっ……!?! あ、うん……」

「あ、敦さんもひふみ先輩も待つてくださーい!!」

僕は滝本さんの手を握り直して走り出す。

滝本さんと同じチームであろう女の子たちもパニックになっている。

今しかない！

走り出した僕は、心の中で自分の不幸を呪った。

畜生……なんで……なんでこんなことになるんだよおおおおお
おおおおお!!

話したくない

青葉視点

「ふーん、それでケンカしたわけ？」

「ひどくないですか？ 私頑張ってるのに」

敦さんと一緒にお弁当屋さんを出た私は今朝起きたことを話していた。

昼休み、1人で会社を出た私は近くのお弁当屋さんで敦さんとぼつたり会った。

それでちよつとグチを聞いてもらっていたのだ。

……りんさんほどじゃないけど。

今朝、入社する途中、ねねつちとケンカした。

ケンカした理由は、ねねつちが余計なこと言うからだ。心配してくれるのは嬉しいけど、頑張ってるのをバカにされたように聞こえてつい売り言葉を買ひ言葉で返してしまったからこうなってしまった。

「ま、桜だって心配してるんだよ。お前マジメすぎるから」

「……それ、敦さんも似たような気がしますけど」

隣を歩いている敦さんを横目で見上げながら呟くと、敦さんはちよつと自嘲気味にひねくれてくる。

「俺がマジメに見えるってのか？」

「普通、不真面目な人なら何でも屋みたいなことしませんよ」

「仕事でやってるだけだよ。前にも話したが、ペース配分くらいしろ」

「……それはわかりますけど」

敦さんが言ってることもわかるし、ねねつちが心配してくれることもわかるけど、なんか納得できないっていうか、私が好きでやってることだからあまり口出しされたくない。

「ま、今は余裕がないからキツく当たっちゃったただけだろ？ すぐ仲直りできるだろうさ」

「……別に仲直りしたいわけじゃないですよ」

「このまま桜のアルバイトが終わっちゃったら、疎遠になるかもだ

ぜ？」

……別にそんなの気にしないし。

私の夢のこと、ずっと前から知ってく癖にあんなこと言ってきたのはやっぱり許せない。

自分に言い聞かせるけど、そこでちよつと不安になる。

……でも、もしこのままずっと仲直りできなくなって、ねねっちとずっと離れ離れになったらどうなっちゃうんだろう。

ねねっちとケンカしてからずっとぎわついていた胸が余計にぎわつくのを感じる。

やっぱりイヤだ。

だって、私が八神さんに憧れてキャラクターデザイナーになりたかってことを一番最初に話したのは、ねねっちだもん。

『フェアリーストーリー』だって、ねねっちと一緒に買いに行ったんだ。

あの時の約束もこのままじゃ果たせなくなってしまふ。

それなのに、こんな風になるなんて。

そんなの……イヤだ。

「……っ」

「なんだよ……どうすりゃいいかわかってんじやねえか」

敦さんの言葉が、私の背中を押してくれるのを感じる。

そうだ。ちゃんとねねっちに謝ろう。ねねっちだって、私を心配してくれてたんだ。

それなのにあんな風に返しちゃったから怒ったんだ。

そう考えれば、不思議と胸の中にぎわついていたものがキレイに吹っ切れたような気分にもなる。

「たまには先輩らしいこと言っておくが、友達に限った話じゃない。自分の周りの人間のことはちゃんと気にしとけ」

「はいっ」

やっぱり、敦さんって普段はだらしないけどしっかりしてる人なんだなと思うところはある。

だけど、こうしていると、敦さんのことが気になってつい聞いてしま

う。

「……敦さんは、同期の人とケンカとかしたことあるんですか？」

「……まあな。ゲーム作っていると色々衝突するからな。あのころは毎日が戦争みたいなもんだったよ」

「……あの、それってもしかして——」

本当なら、そこでやめておけばよかったのかもかもしれない。

だけど、不思議と次の質問が出てしまった。

きつとこういうのを。魔が差したと言うのかもしれない。

「緑さんのことですか？」

……それだけ、昔の話をしているときの敦さんの顔が悲しげに見えたから。

「……」

ゲーム展の時、敦さんとその同期だったシンさんが話していた人の名前を私は口に出してしまった。

あの日、敦さんのお見舞いに行ったときからずっと気になっていった。

八神さんがいない間に作られていたフェアリーストーリーという作品。

それはきつと、敦さんが作っていたはずだ。それについて、この人の過去について、聞かずにはいられなかった。

「あの、あの時は、盗み聞きしてたわけではなくて……」

「……」

「あ……敦さん？」

その静寂に耐えられなくなった私は思わず敦さんに聞き直してしまう。

しばらく黙り込んでいる敦さんの顔は、怒っているのだろうか、驚いているのだろうか、正直、よくわからなかった。

だから、聞き直してもどうしていいかわからなくなってしまった。だけどそれを壊したのは私ではなく敦さんの方だった。

「……なあ、涼風」

「は、はいっ。すみません！ 変なこと聞いて！」

「いや、それはいい。別に怒ってないしな。だが、それはどうしても聞きたいことか？」

敦さんは頭を下げた私をなだめてくれる。私はかおをあげたけど、その時の敦さんの顔を、私は怖くて見ることができなかった。

「え……？　それは、敦さんが話したくないなら……」

「ならはつきり言ってやる。『話したくない』』」

淡々と、敦さんは拒絶した。

端的に『話したくない』とただ一言。

ただ、そんなことはよかった。

「……」

あのとき頑張ると言っていないながら、私は結局、この人にはその程度しかできないのだと、そんな自分の無力さを突きつけられたような気がしたから。

それが、たまらなく悲しかった。

「……ったく、道草なんて食ってないで昼飯くおうぜ？　昼休み終わっちゃうぞ」

ため息をついた敦さんは、私よりも歩調を上げて会社の方へ歩き始める。

速い歩調で歩く敦さんの背中は、徐々に遠ざかって行く。

そのとき、その遠ざかって行く背中を見たとき、私は得體も知れない何かに煽られるような感覚になった。

「敦さんっー！」

考えるより先に動いた私は遠ざかって行く敦さんの手を掴んだ。

「つ……どうした？」

「えっ……あ、その、なんか……敦さんが、どこか遠くに行っちゃいそうな気がして……」

手をつかまれて驚いた様子敦さんは、足を止めて私の方を振り返る。

衝動的に動いたはいいけど、これをどう説明すればいいかわからなくて、ひふみ先輩みたいなたどたどしい答え方になってしまう。

「……いや、遠くもなにも、これから飯食いに行くだけだか？」

「す……すみませんっ」

キョトンとした顔で返されて、自分が訳の分からないことをしてることに気付いて頬が暑くなる。

うわ、なにやってんだろ私っ！

というか、手！

慌てて私は掴んだ手を離す。

「……まあどうでもいいが、サツサと行こうぜ」

「あ……はい」

今度こそ歩き始めた敦さんを追いかけるように、私も会社に戻ることにした。

……あのとき、どうして私は敦さんの手を掴むようなことをしたんだろう？

それに、それが届いたことが……少しだけ安心した。

その背中に手が届いただけのこと。たったそれだけのことに、ホッとしたんだ。

だけど、私の前を歩いていた敦さんの背中は、やっぱりどこか寂しげで、今にも消えてしまいそうな儚さは、以前、私の焦燥感を煽っていた。

マスターアップ前夜交響曲

佐藤視点

今日はイーグルジャンプでもっとも長い一日だ。

社員は総出で泊まり込み、各々の作業を完了させるために没頭している。

それもそのはずだ。

なぜなら今日が、俺たちが今まで作り上げてきた『フェアリーズ トーリー3』のマスターアップをする日だからだ。

「遠山、指定されてたエラー箇所の修正、片づいたぞ」

「佐藤君、お疲れ様。じゃあ、ちよつと休憩していいよ。そのあとはもうデバッグしてて」

俺はA Dの遠山に、自分の持ち場のエラー箇所を修正を全て片づけたことを報告したばかりだ。

ゲーム業界はマスターアップは徹夜というイメージが強いが、それはプログラミングのイメージで、グラフィックは比較的早く片が付く。

とは言っても、社員総出でデバッグをしているわけだが。

敦さんに至っては今頃、プログラミングチームの連中と一緒に修羅場つてるところだろうが、そこは向こうの仕事なので俺は知らん。

まあ、ここ最近は仕事が立て込んでいたこともあって、八神は服を脱がないし、遠山はそれを着に俺に愚痴を垂れることもなくなつたから個人的に胃の調子はむしろいい。

そう思っていれば、どうやら涼風も自分の仕事を全て片づけたようだ。涼風がキャラ班リーダーの八神に報告している姿が目に見える。

入社して半年しか経ってないのによくここまでついてきたな。

「今回は、佐藤君や宮本さんにはホントに助けられたわ。二人が背景班を回してくれたからちゃん和其他の子達のスケジュール組めたし」

「つても、お前だつて俺らのスケジュールも考えてくれたろ？ 背景班も兼任してるのによくやったよお前は」

「うん……ありがと」

微笑んでくる遠山を見てると、また胃がきりきりしてきた。

とは言え、初めてのADなのに本当によくやったよ。俺だって、今までで一番よく動けたと思う。

敦さんも遠山のことはそれくらい評価してた。

だから葉月さんもADに指名したんだろ。

「ちゃんとマスターアップできたら、しばらくはお休みだから、お互いゆっくりできるわね」

「まあな」

そこでふと視線を感じた俺はその方向に目をやると、オフィスの壁から花男さんが顔を出してこちらを見ていた。

——誘いなさい！　せっかくの有休なんだからデートにでも誘いなさい！！

と、花男さんの必死な眼孔は訴えかけてくる。

後でハリセンを見舞いしてやろうとは思うが、このままいつものようにヘタレたままではまたドヤされるに決まってる。

この前だってなんだよあれは。

お前の後ろに幽霊が見えるとか、自分でも突拍子もないことどうやむやにしてしまったことを早退したあと自宅のベッドで悶絶してた始末。

何も言わず遠山の顔をずっと見つめてしまっていたため、遠山も少しキョトンとした顔で訪ねてきた。

「……………佐藤君？」

そこでハツとした俺は、体をわずかに震わせたあと、またキリキリと痛み始める胃の痛みを強引に押さえつけながら口を動かした。

「……………遠山」

「？」

やる。やってやる。

なんか最近、あのコミュ障で有名な滝本ですら彼氏ができたという話を耳にしたこともあってか、普段なら前見たくうやむやに誤魔化すはずだが今日の俺はなんか違う。

「その……………今度の休みなんだが……………その……………」

お前がよかつ——」

「——ううう……りん——」

だが、その決意の行動は、忌々しいアイツのうめき声とともに無様に崩れ去るのであった。

「……………」

何かを堪え忍ぶようなうめき声でふらふらとこちらに現れたのは、八神だった。

おそらく、コイツもつい先ほど自分の仕事を片付けたのだろう。

それに、今にも死にそうなのは、多分、仕事のせいじゃない。そんなもので倒れるほど、コイツは乙女じゃないからだ。

「もうコウちゃん。変な声出さないの」

「だつて。普段ならもう脱いでる時間なんだもん」

「だーめ。まだみんな仕事してるのよ。もうっ、ねえ佐藤君。佐藤君も言つてあげて」

「……………」

「……………佐藤君？」

「すまん、ちよつとタバコ吸ってくる」

「う、うん」

この極限状態でも発揮される二人だけの空気に耐えられなくなつた俺は、適当な言い訳をして逃げることしかできなかつた。

ああわかつてるよ。どうせ遠山の一番はコイツなんだよな。

それなのになんで七年間も思い続けてるんだか、自分自身でも馬鹿馬鹿しくなってくる。これが惚れた弱みというヤツなのだろう。

「あ、佐藤さんも仕事終わったんですか？」

道中、なんか水色の髪をしたちっこいのが俺に声をかけてきた。

「佐藤さん？」

「ああ、小学生かと思つた」

「ガーンツ!!」

落ち込む涼風をよそに、一人屋上に出て好物のタバコに火を付けて煙を吸いこむ。肺の中に煙が一杯に詰まって、脳にニコチンが染み渡つていくのを直で感じる。これまでの鬱屈した思考も、これが聞い

ているうちは冴えてくるのだ。

「佐藤君」

柵の上に肘を置いて、紫煙に包まれた時間を過ごしていると、隣で俺を呼ぶ声が聞こえたので振り向く。この柔らかい声は遠山のものだとすぐにわかった。

「なんだ？」

「さっきはごめんね。コウちゃんったら、いつもあんな調子で」

「……気にするな。そっちはいいのか？」

「うん。ちよつと休憩」

遠山に風で煽られた煙が行かないよう、すぐに火を消す。彼女は俺のすぐ隣で肘をついて風に当たっている。

ビルの風で小さく揺れるボブカットを軽く手で抑え、紅色の髪が月明かりと反射する光景に、凶らずも魅了されてしまう。

改めて、彼女が美人であり、自分が惚れている理由が分からされる気がする。

「こうしていると、初めてマスターアップしたときみたいで懐かしいね」

「その時から八神は脱いでたから勘弁して欲しかったよ」

「ふふっ、確かにそうだった」

昔の話、特にフェアリーストーリーの話は彼女が好きなお話だ。あの頃から、八神の輝きはあの頃からずっと色あせていないのだから。八神を慕っている彼女なら当たり前だ。

「あ、そうだ。確か佐藤君。あの時、私達が寝落ちしてる時、いたずらしてたでしょ？」

「そうだったけ？」

「ほら、タバコの箱。頭に置いてたの気がついてたんだからね。それに私が風邪引いたときも」

「なんだ、バレてたのか」

その単語が出てきてようやく琴線に触れる。確かあの時は俺はまだ未成年だったから、敦さんのタバコの空箱を寝ている二人の頭に乘せて遊んでいたのだ。それを開き直って伝えてみると、わかりやすく

むくれる。

「もー、佐藤君って結構意地悪でしょ。さつきだつて青葉ちゃんからかってたし」

「からかい甲斐があるんだよ」

確かにほぼ八つ当たりというか、ストレス解消として役立てている側面もかなりあるが、そこは伏せておこう。

口では怒っている彼女だが、その表情はどこか穏やかで、寧ろ懐かしんですらいるようだった。

「でも、私、こういうの好きだな。皆色んなことがあつたけど、肝心な所は変わってない。そういうところを見つけるとね、同じ時間を過ごしているんだって実感できるの」

そう語る遠山の瞳に映るまばらなビルの光からは、本当にかつての記憶をリプレイしているように見えた。

そして、最後にニコツと笑ってみせる。

「だから、私達も、ずっとこのままであいられたらいいなつて」

「……」

彼女の言葉、それは優しさと慈愛で満ちたささやきだった。だがそれは俺の心には重くのしかかる。

ずっとこのまま……つまり、これからも永遠に無駄な片思い。い。

「……………はあ」

「ため息!」

そんな俺を見て、誤解させたと思ったのか彼女は身振り手振りで必死に自分の真意を伝えようとしてくる。

「ずっとこんな風に過ごせたらいいわね? ね?」

「……そんなわけねえだろ? お前はもうするつもりか知らんけど、俺たち全員、いつかはバラバラになるぞ」

彼女の気持ちも分からなくはないが、あえて俺は否定する。

理由は簡単。この仕事は長いこと続けられるような仕事では無いからだ。一番の古株の敦さんや葉月さんでも30ちょい。

実際、この七年間で辞めた先輩を、俺は何人も見てきている。だか

からこそ、彼女の言葉を安易に肯定などできない。俺自身、いつまでこの仕事をやれるかわからない。下手な言葉で、彼女に無駄な期待は背負わせたくないのだ。

「この会社だっていつ潰れるかわからないし、八神だって、こんな小さな会社で収まる器じゃ無いだろ？」

「……佐藤君も、いつか辞めちゃうの？」

「さあな。そうなる可能性の方が高いって話だよ。ほら、さっさと仕事に戻るぞ」

戸惑う彼女を置いて、自分の心を押し殺した俺は一足先に屋上を出る。一応、マスターアップ前で皆忙しいのだ。あんまり長く休憩を取っていても睨まれてしまう。

俺だって彼女と同じ気持ちだ。俺が求めている形と彼女が願っている形は、決定的に違う。だから、言えるわけが無い。

「で、でも宮本さんだって長いこと働いてるし」

「俺は敦さんみたいになりたくない」

オフィスに戻る道中で、ふと思う。

ああ、結局どこにも誘えなかったな。

●
りん視点

「アレ？ どうしたのりん。落ち込んで、何かあったの？」

佐藤君よりも一足遅れて背景班のブースに戻ってきたとき、コウちゃんが話しかけてきてくれた。

「あ、コウちゃん。あのね」

私はコウちゃんに、さっき佐藤君に言われたことを簡単に話した。佐藤君の言っていることは間違っていない。あそこで安易に肯定しなかったのも、彼なりの優しさだということにはわかってる。でも、ここまで一緒だったのが、いつかは最初からなかったことになるのかもしれないと思うと、どうしても腑に落ちなかった。

「確かに、何人も辞めちゃった人はいるよね。でもさ、佐藤だって今すぐやめるわけでもないじゃん？ 気にしすぎだって」

「……そう、そうよね」

ここで、『コウちゃんは辞めたりしないよね』と本当は言いたかった。

コウちゃんとはずっとそばにいたい。いてほしい。だけど、この前の警備員のこともある。彼女の意思を、自分のわがままだけで縛り付けるのは良くないことだと言うことは、十分理解している。

なんだか、ずっともやもやしている。佐藤君が私の相談に乗ってくれたあの日。もっとうとうと、佐藤君に励まされたときからだ。

なんだか、自分の中で別の自分が生まれてきているような感じがする。まるで正反対。だけど矛盾していないこの気持ちの名前を、私は知らなかった。

「……」

ふとデスクに飾ってある写真立てを見つめる。

一つはフェアリーストーリーを完成させたときの記念撮影。コウちゃんやチームの皆と撮った写真。

もう一つは、私とコウちゃん、そして佐藤君の三人で撮った写真だ。私が同期の皆で撮ろうと言い出して撮ったのを、今でもよく覚えている。

真ん中に映っているのは私。隣には一枚目の写真みたく落ち着かない表情をしているコウちゃんとちよつと困った顔をしている佐藤君。

でも、皆笑っている。私の宝物。

「……ダメなのかな。ずっとこのままでもいいって思っちゃ」

●

敦視点

「あ、あのーうみこさん？ 敦さん？」

「どうした桜？」

「指定箇所のデバッグなんですけど……」

「停止バグでもありましたか？」

「……正解っ」

「!!」

「ひい！ ごめんなさいっ!!」

桜のちよつとふざけた声に反応したアハゴンは自分のデスクを
ブツ叩く。

いつもは冷静なコイツがここまで取り乱すとは、それだけ追い込ま
れていることの何よりの証明だろう。

実際ここにきて停止バグは俺自身も落胆の意を隠せないでいる。
しかし、そんなことをしている暇は無い。

「んで、どこで止まった?」

「この辺なんですけど」

「そうか。その辺りなら……」

桜が見せてくれた画面の情報を下に、ある程度あたりを付けた俺は
星の数に感じられるコードを確認し該当する箇所を見つけた。

「……こと、こと、あとこの関数の計算が暴走してるんだな。簡単な
間違いだから担当に報告してくれ。直し方は――」

「……」

桜が担当の方に向かわせている合間、妙な視線を感じたのでその方
を振り向く。そこには、少し目を丸くしたアハゴンが俺を見ていた。

「なんだ? サツサと手を動かせよ」

「いえ、相変わらず、見つけるのが早いなと思って」

「まあ、これに関しては病気みたいなものだ」

「病気?」

「いや、なんでもない。忘れてくれ」

普段は名字のことで言い争いになったりするが、俺自身も余裕が無
い。下手に言い合いになるのも、身の上話をするのも好かん。

今は目の前の作業を終わらせることに心血を注ぐしか無いのだ。

複数のディスプレイを下に、それぞれのプログラムを同時に進めて
いく。

と、そこで、デスクに置いていた俺の携帯が突然なった。

通話のようだ。

こんな真夜中に連絡するヤツなんてまるで検討もつかないが、忙し
さの余りに画面を確認せずに俺は通話を始める。

無論、作業を進めながらだ。

『先輩助けてくださいっ!』

耳を携帯に傾ければ、よく聞き慣れて最近リア充になったヤツの声が聞こえてきた。

随分と慌てた声だ。

「なんだ増田?」

『今、変なところで音声バグが発生しまして』

「どの辺り?」

『えっと、コナーとの一騎打ちのところで急にBGMが止まって』

……』

「見つけた」

『えっ?』

「これ、単純な計算間違い。式の前後が逆になってる」

『えっと、あつ! 直りました! ありがとうございます!!』

今にも泣き出しそうな声で通話を切られた。増田のヤツ、俺が教えてやってるんだからこれくらいミスしないでほしい。彼女ができて気が緩んでるのだろうか、勘弁してくれ。

というか、マスターアップ直前でなんでそんなミスするか。まあ、可愛い弟子みたいなもんだししかたないか。あとで滝本でもけしかけてやろう。

「なんで貴方は電話だけでバグの箇所と直し方まで分かるんですか」

こつちが親切でやっているのに、そんな驚きと呆れの混じった声で感心するなこのあまんちゅ怪獣。

「はあ……桜さん、今日はみんな泊まりになりますのでこれで皆の栄養ドリンクや差し入れを買ってきてください」

ため息をついていると、いつの間にか戻ってきた桜に声をかけていた。

「イエッサー!」

「……心配なので涼風さんも一緒に」

「信じてくださいよ!!」

……まあ、桜って結構天然っていうか、無神経だよな。

涼風も似たようなところあるけど、あれは人間味があるっていうか、桜の場合、ちよつと別の方向の問題があるんじゃないのか？

なんかいたよな。こういうの。

学生の頃クラスに2〜3人くらいそんな感じのやつがいたなあ。

ちよつと懐かしく思ったところ、俺はプログラミングブースを飛び出そうとした桜を呼び止めて、財布から追加の金を取り出して差し出す。

てか早いな。呼び止めなかったらほんとにピューツて会社を飛び出しそうな勢いだつたぞ。

「あ、桜。ついでにこれでケロリン社長、買ってきてくれ」

「はーいっ」

「買ったときは、レシートと領収書、両方とも貰つとけ」

「レシートでいいんじゃないんですか？」

「会社に報告するときを使うんだよ。忘れないようにメモでも書いてやるよ」

レシートよりも、領収書の方が経費として使うために法的な効力を持つ。

もし忘れてたりしたら下手すりゃ横領と勘違いされることもあるからだ。

もつとも今回の場合は俺とアハゴンのおごりだから気にする必要はないわけだが。

「大丈夫ですよそんなの〜」

「ほーら動くなよー」

俺は油性マジックを手にして桜の額にでかかど領収書と、書いてやる。

「ちよつ！ もーつ！ 敦さんのバカー！」

額にでかかど領収書の文字が書かれた桜は泣きながらプログラミングブースを後にしていった。

そして、

「買ってきましたー！」

しばらくすれば、油性マジックの跡が残ったままの桜は、涼風と一

緒に栄養ドリンクなどが入ったレジ袋を下げた帰ってきたわけだが……。

「……なあ桜」

「なんですか敦さん？」

俺はレジ袋の中身を確認した後、桜にゲンドウポーズをしたまま訪ねた。

俺が額に書いてやったように、レシートと領収書を両方とも持ってきてくれた。

そこは評価しよう。

……だが、どういうわけか、俺が頼んだケロリン社長はどこにもなかった。

代わりに別のケロリンが二本、他は普通の栄養ドリンクの箱詰めやお菓子やジュースの類だった。

「なんで大魔王なん？」

「敦さんやうみこさんにはこれかなーって」

「いや俺ちゃんと社長って言ったよね?!」

おいちよつと待て。

ちゃんと言ったはずなのになんでこうなった？

涼風もいるから大丈夫と思っただが、まさかこんなミス？ をするなんて。

ていうか、ケロリンって社長より上があったのか。初めて知ったよ。

てかなんで大魔王？

会長とかじゃないの？

「でもまあ、飲んでみるか」

「そうですね。私も飲んだことはなかったのですが、少し気になってはいましたし」

どうやらアハゴンも珍しく乗り気みたいだ。確かに俺も普段は社長を飲んでたから気になってはいたんだよな。

基本的に栄養ドリンクは飲まない主義の俺は、こう言うときに高い奴を飲む。

常用していると慣れて効かなくなるんだ。

箱を開けてみれば、普通の栄養ドリンクと比べてまた大層な包装と一緒に説明書まで入っていた。

まあ、領収書を見れば三千円もしてたから普通の医薬品とは違うの
だろう

「なんだか緊張しますねっ」

「飲む前からテンション高くなってどうするんですか」

興奮している涼風に絶妙な突っ込みで答えるアハゴンは俺よりも
先に大魔王を口にします。

「……?」

てか、アハゴンってストロー使って飲む派なんな。

そんなの一気に飲みやいいのに。

だが、大魔王を飲んだアハゴンの様子が変わったのは見るまでもな
かった。

「こ、これは……なんだか目がさえて……」

「そんなに!?!」

「飲んでみますか?」

桜はアハゴンから大魔王を受け取ると、早速口に含み始める。
だが……。

「……ウエ、なんか薬臭くてヤダー」

ふむ、やはり桜にはキツすぎたか。コイツ結構甘いものばっか食べ
てるとこ見かけるから舌がなれていないのだろう。てかコイツの場
合そこまで疲れてないだろうし。

「ははは、ねねっちは舌がお子様だから。貸してよ」

おい涼風、それを葉月曰くフラグと――

「けほっけほっけほっ」

「桜さんよりも子供っぽいですよ……」
だと思った。

すげえ涙目でむせ混んでやがる。

佐藤が遠山の前でタバコ吸ってるときよりひでえぞ。

「ていうか、敦さんは飲まないんですか?」

と、どうやら子供っぽいところを見られたところが気に障ったのか、涼風はちよつと怒ったような顔でこちらに矛先を向けてきた。涼風たちの反応が見てて面白かったから、いつ飲むのを忘れてしまった。

さて、サツサと飲んで最後の追い込みといこうじゃあないか。

今夜はトコトンまでつきあつてやる。

俺は大魔王の箱や包装を雑に開けて、およそ30mLしか入っていない瓶の中の液体を一気に飲み干すことにした。

働き過ぎて頭がおかしくなっているのと、涼風達が見ているのも相まって、ちよつと調子に乗っているのを自覚してしまう。

「あ、敦さん、後ろっ！」

瓶を飲み干すために大きく煽ったとき、青葉の焦る声と同時に背後から気配を感じた。だが、その時にはもう遅かった。

「ワアッ！」

「ブハッ！」

後ろから肩を大きく叩かれたと同時にやってくる大声と衝撃に意図せずとも、瓶の中に入ったどろりとした液体が気管に入ってしまった、大きく咳き込んだ。

「つ……おま、桜なにしやがる！」

「えへへ、さっきの仕返しですよーだ」

振り返ると、俺の後ろでは桜がやってやったと言わんばかりの顔で笑っていた。コイツ……いいだろう。ここまでコケにされたら俺も受けて立ってやる。

佐藤ほどにはいかんだろうが、俺の絶技がコイツの髪を昇天ペガサスMIX盛りにしてやろう！

「この悪いガキめ、大人の俺が教育してやる！」

「きやーあおつち助けてー！」

「ちよつ、ねねつちこつち来ないでー！」

「仕事してください!!」

●
純視点

「これで、とりあえず完了かな」

サウンドの部屋で一人、さきほど先輩に見つけてもらったバグを修正したばかりのこと。先輩にはこういう時に助けてもらえばないだ。

実際、僕にとつてプログラム関係についてはあまり詳しくない。だけど開発が終盤になる頃には楽曲をプログラムに入れてる仕事もやるようになってくる。

結構慣れてきたつもりだけど、やっぱり苦手だな。と、自分が音楽しかできない不器用な人間だと、改めて自覚する。

とはいえ、ちゃんと解決できた。今はそれだけ評価しよう。

「んー、ん？」

大きく伸びをした途端、小さなドアの開閉音が聞こえた。誰かは言ってきたのかと入り口の方を振り向く。その時、視界に入った人物を目の当たりにして、僕は思わずドキッとしてしまった。

だって、サウンドルームに現れたのは――

「あ、純君」

「滝本さん!？」

一度目を疑ったが間違いではない。

印象的な暗紅色の髪を、可愛らしい赤いリボンでポニーテール、それに対してなるようなおぼろげな青い瞳。

今日は黒を貴重にしたミニスカートのワンピースを身にまとっている。

世の男性が見れば、それこそ魅入れてしまうであろうその美しい女性と僕は、この前から・・・その、恋人になったのだ。

「……………えっと、お邪魔する……………ね」

「あ、どうぞぞ」

僕は急いで滝本さんが腰を下ろせるように椅子を用意する。

それにしても、滝本さんが来てくれるなんて思ってもいなかった。慌てている反面、うれしくなっている自分がいるのがまた憎らしい。

「その……………これ、差し入れ。こっちは、もう、お仕事終わっ

た…から」

滝本さんが来てくれたのと、滝本さんが座るスペースを作るのに気をとられて、手元がよく見えなかった。

よく見ると、前のドーナツの時みたいにお菓子や飲み物が乗ったお盆を両手に抱えている。

「わざわざありがとうございます。僕も、さっき片付いたところだったんです」

「じゃあ、ちよつと休憩、しよつか」

「は、はい」

お盆をデスクに置いて向かい合うように座る。けど、沈黙が続いてしまう。

情けない話、滝本さんと付き合うようになってからほとんど話していないのだ。マスターアップ直前に告白した自分が悪いのだけど、あれ以来、会社で少し会うくらいしか一緒にいられていない。

だから、あの時のことは本当は夢なんじゃ無いかなんて思ってしまう自分がいる。

「あの、なんていうか、夢なんかじゃ無いかなんて思うんですね。たまに」

「どう、して？」

「だって、その、滝本さんとうちで一緒にいられるなんて、思っていなかったのよ」

本当はもっと堂々としているほうが、彼女も安心してくれるだろうけど、今の僕にはそんな甲斐性はない。実際、ここまで色々花男さんや先輩に遠回しにからかわれてばかりだったからだ。

相変わらずのネガティブ思考にふけていると、滝本さんはふと僕の頬をつまんでムニーツと引っ張ってきた。

「あ、あお…ふあきもふおふあん？」

「夢、じゃない、よ？」

あ、やば、可愛すぎる。

ちよつと前屈みになって首を傾げているのが、特にくる。頸動脈に直接、何かヤバイ薬でも入れられているようだ。前はびっくりして

コーヒーをこぼしてしまっただけ、今はこの光景を楽しむので頭が
いっぱいだ。

「私も、ね、最初は…夢かなって、思ってた。だから…ね、嬉しい、
の」

頬を赤らめている彼女を見ると、僕も少しだけ触れてみたくな
る。というか、触りたくて仕方が無い。もっと近くにいたい。

不意に手が伸びて、滝本さんの頬をつまんで見せた。

「っ、純…君?」

「あ、すみません。あの、夢じゃ無いですよって、言いたかったんで
すけど」

「…うん、あり、がと」

「あ、いえ…」

「…」

「…」

また会話が途切れてしまう。ダメだ。変に意識して全然うまいこ
とを話せない。彼氏として、ちゃんとリードしないとイケないのに。
これじゃ前来てくれたときと同じじゃ無いか。

なにか無いか、なにか滝本さんが喜ぶようなこと…

「ねえ」

「は、はいっ?」

滝本さんの言葉に、肩が震えてしまう。というかもう、彼女の一拳
手一投足が僕の心を狂わせる。今思うと、こうして腕をギュツとして
いるのも可愛いな。

恥ずかしそうに何か言いたそうにしている彼女の答えを待ってい
ると、

「その、また、聞きたいな。純君の…曲」
と言ってくれた。

「え?」

「だ、ダメ?」

「いえ、大丈夫ですけど」

いつかの時と同じ、僕の曲を聴きたいと言ってくれた。

前回も会話に困って、僕が言い出したけど今回は、滝本さんからの直接のリクエスト。答えない訳にはいかない。

とはいえ、最近は作曲する時間が無かった。一番新しい曲でもこの前聴かせたモノなのだ。フェアリーズストーリー3の曲も良いけど、今は仕事のことを少しでも考えて欲しくない。それに、せっかくだしなにか一工夫加えたい。

……そうだ。

「あの、ちよつと待ってもらって良いですか？」

僕は使っているパソコンを立ち上げて、少し操作をする。やることはそんなに難しくくない。曲は決まった。楽譜もある。楽器を変えるだけ。

それだけなら、DTMの独壇場。すんなりできるのだ。

準備が整うと、僕は再生ボタンをクリックする。

スピーカーから奏でられるその音色に滝本さんは反応してくれた。

「これ、あの時…の」

「はい、この前来てもらったときの曲です」

「この音、オルゴール？」

「そうです」

今は真夜中だし、あんまり激しいのは好まないかなと思ってこの曲にした。でもそれだけじゃ物足りないから、一つ楽器の設定をピアノからオルゴールに。

静かで落ち着いた音色。どこか懐かしく、安らぎを与えてくれるそれは、さつきまで落ち着かなかった滝本さんの目の色を変えてくれた。

「なんだか、安心、する…ね」

「喜んでくれたなら何よりです」

彼女の瞳からは緊張は無く、ほどけた笑みを浮かべてくれる。柔らかくて優しいその笑顔は僕の視線を釘付けにして離さなかった。

「純君、わらってる」

「滝本さんも、ちゃんと笑顔できてますよ」

「…ホント？」

「はい」

「おかしく、ない?」

「はい。素敵です」

「~~~~~!」

寧ろこれ以上美しい笑顔がほかにあるだろうか。それを、僕の作った曲で見せてくれるのだ。これ以上に幸福なことなど無い。

でも、褒められるのになれてないせいかな、せっかくの笑顔を両手で隠してしまうのだ。そんな仕草も可愛らしいわけだけども。

「……ねえ、もつと近くにきいても、いい?」

しばらく手で顔を押しえながら、彼女はそんなことを言い出した。

「えっ?」

「だ、ダ…メ?」

「いえ、とんでもないっ」

「じゃあ」

滝本さんは立ち上がると、自分がさっきまで腰を下ろしていた椅子を持って、僕の隣まで寄ってきた。

そして、僕の隣に椅子を置く。しかも物凄い近くで。そこまできて、やっと僕は滝本さんが何をやろうとしているのか気がついた。

「……滝本さん?」

彼女は今、僕の隣に座っている。それもほんの少し身体を寄せただけで触れ合ってしまったいそうなほどに肉薄している。

「あんまり、顔を、見られるの…恥ずかしい、から」

こつちの方がもつと恥ずかしい気がするのですけど!?

と声をあげたくなるけれど、それは滝本さんにとつて僕はそれだけ気を許せる相手である何よりの証明だと解釈できた。

とはいえ、本当に近い。

呼吸とか、触れていないのに体温を感じる。等身大の彼女が本当に僕の隣にという感覚になる。目で見ることができな分、より敏感になっってしまったている。

「ん……」

「っ?」

ただそれだけでも、僕の身には手に負えないほどなのに、彼女は突然身を傾けて自分の肩を預けてきた。

「……なんだか、純君の、曲、聞いてると、こう…したくなつて」

「そ、そうですかっ」

さつきまで感じていた体温が、肌に直接触れて伝わってくる。滝本さんもドキドキしてくれているのか、とても暖かい。

そして、彼女の少し波打ったポニーテールが僕の頬をわずかに掠め、きめこまやかな感触と滝本さんの匂いが感覚を埋め尽くしていく。

「……あれ？」

不意に、滝本さんの呼吸のペースが変わる。落ち着いて、一定のペースを保った穏やかな呼吸。

まさかと思つて隣に視線を送ると、滝本さんは目を閉じていた。そして、スウスウと心地よさそうな寝息を立てている。

起こした方がいいかなと思ひ、手を伸ばしたけどやめた。滝本さんも疲れているだろう。僕の曲で安心して寝静まってくれたのなら、寧ろ本望だ。

僕は寄り合っている方の手を、彼女の手と絡ませて優しく包み込む。

隣で感じる温もりと呼吸、そして優しい音色がこの小さな部屋を幸福な気持ちでいっぱいにしてくれる。僕も、少しだけ眠ろう。きつと幸せな気持ちで、朝を迎えられるはずだ。

「……ん？」

次第に瞼が重くなりつつあり、何度か長い瞬きをする瞬間。わずかに見えた視界に映ったのは、少しだけ開いたサウンドルームのドア。そこから覗くいくつつかの人影。

「!？」

「あ、気付かれた」

ドアの隙間から覗いていたのは、おそらく開発チームの面々。金髪の女性と紅色の髪の女性。その他、色んな女の人。

というか、おそらく滝本さんのチームの人たちだ。手前の二人はよ

く見かけるし、後ろの方で隠れている人たちもゲーム展で見たことがある。

彼女たちは色とりどりの表情をして、サウンドルームの様子をうかがっていたのだ。

「ひふみんも隅に置けないく、ラブラブじゃん」

「ダメよコウちゃん。ああでもこんなひふみちゃん初めて見たわ」

「寝てる間に写真でも撮っちゃおう？」

「ちよっ！ 起きて！ 滝本さん起きてー！」

頑張った証

八神視点

「おーい、ヨッシー、遊びに来た——ってどうしたあ!？」

それはフェアリーズストーリー3が無事マスターアップした直後のことだった。青葉やりんは始発で私より先に帰ったこともあり、少し手持ち無沙汰になった私は、久しぶりに、あの警備員の彼のところに行こうと思った。ちやうど差し入れのおやつのみもあり、多分そろそろ彼の仕事も終わる頃だろうと思っていた私は、明け方の静かなビルの経路をたどって、警備室に足を踏み入れたのだが、

「……あ、八神さん」

彼、ヨッシーこと、吉田駿輔は、びっくりするほどやつれていた。

元々疲れ切っているような三白眼の据えた目のまわりには、さっきまで修羅場っていたプログラムチーム（敦さんを含める）人たちみたいになどくなっている。

それ以上に、どんよりとした良くない雰囲気、彼から漂っていた。

「な、なんかあったの？」

「いえ……八神さんが気にすることではないのですが」

「そんなこと言われても……って、なにそれ？」

気丈に振る舞っている彼が向かい合っているテーブルの上には、2〜3枚ほどの冊子が並べられていた。

「あ、これはですね……その、模試の結果なんです」

「見ても大丈夫？」

「……はい」

了承をもらって、テーブルの上の冊子を手取る。右端に吉田駿輔と記されているその冊子には7教科ほどのテストの総合結果のような物が書かれていた。

当然、過去の成績も明記されている訳なのだが、それと今回の模試の結果を照らし合わせてみると、前の模試までBランクを維持できていた成績が、Cランクまで落ちていたのだ。

「……予備校の先生からは、大学のランクを落とす方がいいと

言われました」

「でもさ、今回はたまたま調子が悪かっただけかもしれないじゃん。まだ本番までは時間あるんだし、大丈夫だって」

「そうだと・・・いいのですが」

「・・・」

うくん。随分落ち込んでるなあ。でも仕方ないかあ。ここまで頑張ってきて、別の大学に行くつても苦しい選択だと思うし。

でも、このまま引きずってたらそれこそ勉強に集中できなさそうだ。

——あ、そうだ。

「ねえ、ヨッシーのバイトのシフトってそろそろ終わる頃だよね」
いいことを思いついた私は、ヨッシーに訪ねる。彼は少し考えながら答えてくれた。

「・・・そうですけど、それがどうかしましたか？」

「それなら、ちよつと寄り道していかない？」

●
そのときの彼のきよとんとした顔は、ちよつと面白かったので、印象に残っている。

せつかく模試が終わって、バイトも終わったんだ。それでまた帰って勉強するなんて少しハードすぎると思う。だからどこか遊びに行かないかと切り出したんだ。

といつても、今は明け方だし、私もさつきまで仕事の追い込みで疲れているから、派手に遊ぶこともできない。

でもちよつどいいところを私は一度行ったことがある。

「ねー、ここのスパ、結構いいところですよー？」

ここは、青葉が入社してきたころに、りんと一緒に来たスーパー銭湯。

あのときは私が初任給何に使ったかかっていうのでりんと旅行に行ったことを忘れちゃって怒られちゃったからそのお詫びとして一度来たことがある。

そのあと、また怒ってたけどなんでだろう。せつかく教えてあげた

のに。

「……」

と思っただけながらとなりで隣で同じ岩盤浴を浴びているヨツシーに声をかけるけど返事が無い。

「……ヨツシー?」

彼がいる方に目を向けると、完全に寝落ちしていた。

青葉と同じ年とは思えないほどの据わった目つきも、今は脱力して閉じきっている。

「やっぱり青葉と同じ年なんだ、ちょっと可愛いかも」

ほほえましい気持ちになり、小さな寝息を立てる彼の頭を、2〜3回ほど撫でてやる。

「……」

こうしてみると、いろいろ懐かしいな。私も青葉やヨツシーと同じ年の頃に『フェアリーストーリー』のキャラデザに選ばれて、嬉しいこともあったし、辛いこともあったな。

そりや今思えば、単に私が生意気だっただけなんだけど、でも、そのせいでいろんな人に迷惑かけた。

りんや葉月さん、敦さん、私のせいで辞めていった人たち。

でも、それがあったから今の私があるわけで……正直、今の私もちゃんとできているか心配なんだけど。それでも、きつと今までよりマシになっている。

少なくともそれだけは、確信できる。

少しだけ、感傷みたいなのに浸りながら、隣で彼を眺めていると、やがて彼のまぶたがゆっくりと開いてきた。

「あ、ごめん。起こしちゃった?」

「……あ、すみません」

「いや。そのまま寝てて」

「……わかりました」

よほど疲れていたのか、また素直に岩盤浴に身をゆだねている。

熱を帯びた石のベッドが、布越しからほどよい熱気を体全身に浴びさせてくれる。私も相当疲れていたもので、こうして横になるだけでも

十分心が安まる。

もうしばらくこうして横になつていよう。家に帰るのは昼頃になるかもだけど、これからせつかく休みがもらえるんだからゆつくりしないともつたいない。

「なんだか、すみません」

そのまま、石のベッドに身をゆだねていると、となりから彼の小さな声が聞こえた。普段から敬語のせい、その声は随分自信がなさげだった。

「なんで謝るの？」

「いえ、なんというか……ここまで親切にされてるのに、結果をだせない自分が情けなくて……」

「……」

「同じ予備校の生徒は、どんどん成績が上がっていついて、それを見てると思うんです。自分は、結局、中途半端で、努力すらしていなかったんだ……と思わされるんです」

「……」

「元々、最初に大学を落ちたとき、親からはもう就職しろと言われて、だから予備校のお金も、自力で稼ぐしか無くて」

「……」

「その上、今でもこうして八神さんの気を遣わせてしまっていて、それでもなんも成果も出せない自分が——」

——惨めで仕方が無い。

その声は、弱々しくて、とても辛そうだった。でも、それを必死に隠そうとしているような気がして、より一層、痛ましく思えた。

「……やめてよ」

不意に手が伸びた私は、そんな言葉が漏れてしまった。

「八神……さん？」

「なんの成果もなかったなんて、言わないでよ」

伸ばした手が彼の頬に触れる。りんや青葉と違って、肉質が堅い頬からは石のベッドから発せられた熱のせい、かほんのり暖かい。

でも、触れていると、彼の気持ちがあるとなく伝わってくるような

気がする。だから続けた。

「働きながら予備校に通って、勉強して、お金稼いで、学費とか払って、後輩に仕事教えたりして」

彼を見ていると昔を思い出す。

昔、私のせいで壊してしまったあの子のことを。

「私がね、初めて『フェアリーストーリー』のキャラデザを任せられたときとか、私ってもしかしてすごい奴なんじゃ無いかって調子に乗ってさ、生意気言ったり、先輩とか、友達とか、後輩とかからもガツカリされちゃってさ。今だって、正直ちゃんとやれているか不安なんだ」

要するに、何も知らなかったんだ。なのに自分はもう一人でなんでもできるって勘違いしていた。ホントは、一人じゃ何もできないくせに。

「私だって、今よりマシになりたいと思って頑張ってるつもりでいる。けどたまに不安になるときはあるよ。でもさ、頑張ったことが、努力したことが結果に結びつかなかったとしても、それを自分が最初から頑張ってたみたくに言うのは、ダメだよ」

「……」

「頑張ってたよ。私は、ちゃんと見てたよ」

「っ……」

そこまで言うと、彼の顔はあふれてくる何かを必死に押さえつけようとしているような顔になり、やがて石のベッドに備え付けられている枕にその顔を埋めた。

うん、いいんだ。辛いなら辛いことを我慢しなくていいんだ。たとえばしっかりしていても、彼はまだ子供なんだ。

伸ばした手を戻した私は、そのまま彼と並んで石のベッドの上で目を閉じる。

「もう少しだけ、休んでこ。その方が、また頑張りたいって思えるから」

「……はい」

手の温度

うみこ視点

『フェアリーズストーリー3』の開発が、無事完了した直後のことだ。貴重な3週間の有給をどう過ごすかというのは、ずっと前から決めていたことだった。

「長い間のお仕事、お疲れ様でした。うみこさん」

「ありがとうございます。賢人さん」

各々が始発の電車で家路につく中、私は賢人さんが走らせる車の助手席に腰をかけて東京の街のなかを走っている。彼はなんと、私が仕事を終えるまで、会社の近くで待っていてくれたのだ。

いつも夜にしか会えないこともあって、こうして平日の朝に会えることだけでも心が安らぐような気持ちになる。

私はこれから彼の自宅に向かって、二人で過ごす。三週間の有給のそのほとんどを私は賢人さんということに費したい。今までの時間を取り戻すように。

何をするかはまだ決めあぐねている。買い物にも行きたい。来週に控えたサバゲーの装備の新調に、社員旅行へ向けた防寒装備も見に行きたい。今まで立て込んでいてやれていなかったFPSもやりたい。

リアルも臨場感があって楽しいのだが、ゲームでやりこむのも趣があつていい。なにより、それが好きな人と一緒というのが、なんかこう・．．ともに背中を預け合つて戦場を駆け抜ける感覚はたまらない。やはりサバゲーという存在そのものが素晴らしい。もっと多くの人に広めなくてはいけない。

特に涼風さんとかに。

と、今年入社してきて、サバゲーを進め損ねている涼風さんのことを考えていると運転席にいる賢人さんが声をかけてきた。

「あの、うみこさん、少し寄り道をしたいのですが、いいですか？」

「かまいませんよ」

申し出を受け入れると、彼はウインカーを付けて進路を変え、彼の

家路から少しずれる。

「……んっ」

手持ちぶさたにして不意にまぶたが重くなる。

マスターアップの直前の修羅場から今日にかけて、まだ落ち着けて睡眠をとれていなかったせいも、強烈な睡魔が私を包んでいく

……少しだけ、休んでおきましょうか。

彼の家に着くまでの間だけと、自分に言い訳をする。彼の香りがする車内だからか、これまでずっと張り詰めていた緊張が一気にほどけてしまったことを後押しして、抗うことをせず、ゆっくりと瞳を閉じた。

——体が軽い。

まるで浮いているようだ。普段感じることのない感覚に私は目を覚ます。まだ重たい瞼をゆっくりと開けると、目の前に愛おしい人の顔があった。

「すみません、起こしてしまいましたか？」

「えっ？ ああ、賢人さん、これは……!？」

意識がハッキリした途端、彼の顔があることに違和感を覚えた。そして遅れて気付く。自分がどういう状況にあるのかを。

私は抱きかかえられてたまま、賢人さんの自宅に向かっているのだ。

俗にいうお姫様だっこ。女性であるのなら、一度は夢見たことのあるシチュエーションに、どう反応して良いか戸惑ってしまう。

「嫌でしたか？」

「い、いえ、決してそのようなことは……」

正直、自分が男勝りの性格である自覚はある。慎重だつて職場の仲間と比べれば背の高い私が抱きかかえてもらえるなんて、夢にも思っていないかった。

一度身構えてしまうがやめた。彼の無骨な腕に身を預ける。きっと会社では恥ずかしくて、こんなところ見せることなどできないだろう

う。

「寧ろ、嬉しいです。職場ではこんな風に振る舞うことなどできないので」

「ならよかったです」

「あ、そろそろ降ろしていただいて大丈夫ですよ」

もう少しだけこのままでいたい。という私のわがままはどうやらここまでのようだ。流石に、彼の自宅に入るためには私を抱えたままでは難しいだろう。

彼の部屋がもう目と鼻の先にあるのは分かっていたから、あらかじめ降ろしてもらえよう頼むと賢人さんは思わぬ事を言い出した。

「部屋までまだかかります。それまで、このままでいましょう」

「っ……はい」

ああ、本当に、この人はどこまで、私の気持ちを汲んでくれるのだろう。彼の腕の中で完全に脱力する。あとほんの数分も満たない時間だけど、そのわずかな瞬間すらとてつもなく愛おしいのだから。

●

「今日は、ゆっくり過ごしましょう」

「……すみません」

賢人さんの部屋に上がると、彼はそんなことを言い出した。

ソレを聴いた私は少し申し訳ない気持ちになる。当然だ、せつかく二人を過ごせるというのに自分がこんなに疲れていては楽しめるはずが無い。

「謝らないでください。昨日は寝ていないのでしょうか？　まずは疲れを取らないと。そこで休んでいてください」

彼は私をベッドの上に座るように促す。ベッドの柔らかい誘惑に負けた私は、言われるがまま腰を下ろす。手で押すと優しく押し返してくる低反発の素材。

ここ最近布団で寝る機会すらなかった私にとって、無遠慮に横になることを我慢できるはずもなかった。

柔らかい。このベッドは普段、賢人さんが休んでいるのだと思うと一塩だ。枕元にある金髪の抜け毛が、彼の残り香を物語っていた。

「うみこさん」

「っ!？」

またまどろみの中に誘われようとしていたとき、彼の声の呼びかけが私の意識を現世に戻してくれた。賢人さんを見ると、両手にはマグカップ。

「とりあえず、温かいモノを。それと、さすがにシワになるのは困るので寝るのは少し待ってください」

「はい…」

渡してくれたマグカップの中身はココアだった。私はそれを口に運ぶ。

甘い。そしてとても落ち着く。

今日に至るまで、飲み物と言えば濃いコーヒーやエナジードリンク。どれもカフェインが多く入ったものばかりだったからか、こういう甘くて眠くなるようなモノを飲めるのは飲めなかったのだ。

淡々とした口調で打てど響かずの彼だけど、こういう温もりが今まで気が立っていた私の心をほどこいていく。

「少し、後ろを向いてもらえませんか？」

「? ええ、わかりました」

賢人さんい言われたとおり、私は彼に背中を向けた。普段なら、誰であろうと絶対に見せない背中を、私は彼に見せた。

「失礼します」

後ろから賢人さんの声が聞こえた途端、彼の両手が私の肩に触れる。

「んっ…」

「やっぱり、デスクワークばかりだと肩に疲れが溜まっていますね」彼の堅い手が、その指先が、連日からの疲れが溜まっている私の首から肩にかけて張り詰めた筋繊維の一本一本を、まるで髪の毛をとかすように丁寧に本来あるべき形に戻していく。

こういうのはテレビだとやたら痛がっている風に見えるときがあるが、それは賢人さんなりの配慮なのか、痛みはほとんど無い。

それ以上に、ふれあっているということも相まって、さつきまでの

落ち込んでいた気持ちまでも綺麗に洗い流されているようだ。

「んっ……ふう……」

やがて、肩の力全体が抜けて、完全に彼に身を預けている状態になる。血の巡りがよくなってきているせいか、肩から全身にかけて少しずつポカポカとしてくる。

会社では絶対にならないこの状態は、慣れていない感覚ではあるが、不思議と受け入れてしまうのだ。

もつとも、こんなところ葉月さんとかに見られるわけには絶対にかかないのだが。

「肩、どうですか？」

「そうですね。やっぱり、マッサージというのは、自分でするより人にしてもらうほうがいい気がします」

「人肌に触れているだけでも心には余裕が生まれるものですから……さて」

そういういながら、肩のマッサージを終えた賢人さんは、今度は私の正面を向くように促す。

「うみこさん、顔に触れても大丈夫ですか？」

「え？…ええ…大丈夫です」

私は彼を信じて目をつむる。これも普段なら絶対しないこと。特に葉月さんの前では何をされるかわかったものではない。

この間の雨の日のとき、車でキスをしてくれたときとはちがって、少し真剣みがある口調だったから、きつとそういうのでもないのだらう。

「っ……」

やがて、彼の両手が私の頬に触れる。太くて硬いその指先は、私の頬——いや、顎の筋肉辺りを刺激しているのが、目を閉じていてもわかる。

「やっぱりここも凝っていますね」

「賢人さん……これは？」

「うみこさんは普段、歯を食いしばったりしますか？ 集中しているときとか、イライラしているときとかに」

「……後者には心当たりがあります」

「そうですか。デスクワークをしてるとどうしても前傾姿勢になるので顎関節に力がいってしまいうんです。そうになると、骨格がずれたりするんですよ。特に、20代から30代の女性は」

「なるほど……」

耳の下から首の付け根にかけて、先程のよう同様に丹念な手つきでマッサージを進めていく。

感覚は先ほどと同じで、痛みはほとんど感じない。顔全体が収まるところに収まっていくのを感じる。

……でも、この体勢を維持するのは少し、恥ずかしいですね。

つい目を開けてしまったのだが、びっくりするほど賢人さんの顔が近くて困る。

血の巡りがよくなったにしては、少し脈拍が早い気がする。

ああ、でも嫌じゃ無い。むしろこうしているだけで心地が良い。

「——こんなところでしょうか。違和感が残るようでしたら、病院へ」

でも、そんな、永遠と続きそうな時間にも終わりが訪れる。時計が刻む時間と、体で感じる時間にズレが生じているみたいだ

「……そうですね」

言われてみれば、顔だけじゃなく、体全身もまるで風船のように軽くなっているのを感じる。

正直言えば、もう少しだけ、彼に触れてほしかったけど、あまりわがままを言うわけにはいかない。

「……」

それに、少しだけ情けない気がする。

賢人さんだって男の人なのだから、女性に対して甲斐性を見せたいという気持ちはわかる。だけど、こうしてされるがままというのも気が引ける。

思えば、初めて彼と出会ったときからずっと彼の背中を追いかけている。

だから、どうしても訪ねてしまいたくなった。

「あの、賢人さん。一ついいですか？」

「なんででしょう？」

「・・・私、その・・・ちゃんと貴方の彼女をできていますか？」

今の彼の目には私しか映っていないとしても、それはまるで、『恋人』という対等な立場ではなく、もつと違う物じや無いかと不安になる。私が彼にしてあげたことなんて、あつただらうかと。

怖くて仕方ないのだ。あまり目つきがよくない自覚はあるし、職場のせい、性格のせい、今まで恋人という関係を経験したことのない私は、どうしても怖くなってしまう。

「うみこさん・・・」

「すみません、聞き流して——」

「——そんなことはないですよ」

言い終わる前に、彼の声で口をつぐんでしまった。

彼のまつすぐな目に、言葉を無くしてしまったからだ。

「今日はたまたま、うみこさんが疲れていただけです。私は私のできることをうみこさんにしてあげただけです。私はうみこさんにもつとわたしのことを頼ってほしい。だから・・・」

賢人さんは私の手を取る。

「私が困ったときは、うみこさんに頼らせてほしいです」

「・・・」

胸の奥から、なにか熱いものがあふれてきそうになる。

ああ、そんなこと言われたら、嬉しくなってしまうじゃないか。

私は、彼の大きくて堅い、そして何よりも優しいその手をギュツと握り返した。

ねねとゆずき

柚貴視点

「おい桜、お前またひとんちで何してんだ？」

「んがっ!？」

夕食を買ってきた俺は、断りも無くベッドの上でパソコンを広げて眉間に皺を寄せている桜に好物のスナック菓子を投げつける。

他を買ってきた水やシャーベットは冷蔵庫に手早くしまおうと、ベッドの脇に座って買ってきたサンドイッチの封を開ける。その時に、桜が睨めっこしているパソコンの画面に目が行った。

「なんだそれ？」

「あ、これ？ 気になる？ 知りたい？」

「……勿体ぶるなバカ」

パソコンの画面には黒いウィンドウが一つ開かれており、よく分からないアルファベットや数字の羅列が並んでいる。

機械に関してはほとんど触ってこなかった生活を送ってきた俺には皆目見当も付かない。

「これはね、ゲームのプログラムなんだ。バイトが終わってから一人で作ってるの」

「ふーん」

中身の無いサンドイッチをついばみながら、桜の話を聞き流す。どうも最近まで通っていたアルバイトの影響か、自分でも作ってみたいと言いだしたのだ。

「もーちゃんと聞いてよろほら、これ、ちゃんと動くんだから」

だが、俺が興味なさげなのが気に入らないのか、パソコンを持ち上げてこちらに向ける。随分と自信満々に見せるから相当な物かと画面を見る。

が、

「……おい、全然動かないぞ」

「あー、また止まってるー」

遅れて画面を見た桜はガツカリした声を出し、パソコンを持ったまま

まベッドに倒れ込んだ。

「なんとか起動するまでいけるようになったんだけどなあ」

どうやら、桜のゲーム作りとやらは随分と難航しているようだ。教本がそばに置かれていたあたり、一から勉強を初めて、手探りで進めているのだろう。

随分と気の長い話だこと。

食事を終えた俺は、桜が持っていた教本を暇つぶしの雑誌代わりに手に取ってみることにした。

「あ、それ、読みやすいからオススメだよ」

「…おい。なんだこの染み」

表紙を見てすぐに違和感に気付く。多少は読み込んだのか端が削れているのは特に気にならない。問題なのは表紙の半分が茶色に染まっていることだ。

「何かこぼしたのか?」

「(っ、(っ)で(っ)ぼしてないよ!」

それを俺のベッドの上で、しかもスナック菓子とコーラを楽しみながら言われても説得力の彼らも無いのだが。ペットボトルに至っては蓋を閉めてすらいないじゃないか。

あとで取り上げておくか。

と、半ば道楽で俺は茶色に染まった教本のページを開いた。

そして……

「おい桜、それ、同じ処理繰り返してるぞ?」

「ええ!? どう!?」

「ほら。(っ)」

話の流れで桜のパソコンを見ることになったのだが、気がつけば彼女のゲーム製作に口を出してしまっていた。知識として頭に入れたことを、目の前で不器用にこなされていては見てられなくなるのだ。

「ゆずっちす(っ)いね。もうそこまでわかるようになったの?」

「その本に書いてることを覚えてただけだよ」

俺がいくつかが口を出すと、桜の作っていたゲームは多少はマシに動くようになった。要は、同じ処理を何度も繰り返してしまつてパソコ

ンが容量をオーバーしてしまっただけだ。おそろくまだ画面の動作が覚束ない辺り、まだそういうのが残っているのだろう。

それよりも気になることがあって俺は集中できなかった。

「というか、なんだよその絵。ただの落書きじゃないか」

「だって、絵かけないんだもん」

それは桜が開けているゲームの画面。

馬に乗った騎士のようなもの。なぜかその辺に置かれているにぎりめし。それと猪。黒い太字のペンで下書きもせずに書いたであろうそれは、ハッキリ言っただけの子供の落書きと投げ捨てられても文句は言えないほどのお粗末な出来だった。

本人はグラフィックと呼んでいるそうだが、これをその枠組みに入れていることすら失礼に当たるのでは無いかと思うほど。

「こんなんじゃない先が思いやられるな。俺が描いた方がマシなんじゃないのか?」

「むっ! そここまで言うなら描いてみてよ! このゲームに合うイラスト!」

「ああ、いいぜ。やってやるよ」

売り言葉に買い言葉で引き受けた。

大学のレポートに使うために用意した紙とペンで俺は絵を描き始めた。

自分の気が済むまで、俺はペンを走らせる。

俺自身、口に出した以上舐められるのは癪だし、やり始めた以上は手を抜く気にもなれない。

——そして、2時間ほど掛かったが、俺が納得のいく出来の絵が完成した。

「ほらよ」

「なっ……なっ……なんでそんなにうまいの!?!」

とりあえずレポート用紙に数枚のキャラクターを描いて見せた。

桜のゲームに合うという要望が絡んだため、あまりリアルな絵柄にはせず、2頭身から3頭身のデフォルメにした。

一人は和服にナイフを持つ女。もう一人は黒縁眼鏡をかけたひ弱

そんな男、タバコをふかす赤髪の女。しかい、自分で描いておいてなんだが、2番目のこの男が妙に意識してしまうのは気のせいかな？

ひとまずはこの程度にしておこう。一度手を付け始めると止まらなくなる性格なのは俺自身知っているのだ。

「むう〜悔しい！これが才能ってヤツ!? 腹立つう〜」

並べられたレポート用紙の前でのたうち回る桜。

どうやらよほど悔しいそうだな。それを見ていると少々申し訳なくなってくる。コイツなりに本気でやっているなによりの現れなのだ。

それを今ちよつと嚙つた程度の俺に抜かれたのがそれだけ堪えるのだろう。

「まああれだ。多少は手伝ってやるよ。いい暇つぶしになりそうだな」

「負けないからね！」

しばらくのたうち回った彼女はベッドの上によじ登ると、また教本を片手にパソコンと向き合い始めた。さて、本当に少しくらいは手を貸してやるか。

そこからまたしばらく時間が経った。夜はもう更け、時計の針は12時を超えていた。

桜は依然、パソコンの作業に没頭している。いつもの注意散漫な姿は見る影も無い。

「桜、お前、帰らないのか？」

「んー……」

返事はあるがこちらを向かない。

「明日は講義あるんだろ？」

「うー……」

今度は生返事。

「もう遅いぞ」

「……うん」

やはりこつちを見ずに返してくる。

「そろそろ帰れ」

「……」

さらに無視される。

そこでようやく気づいた。彼女が帰りたがっていないことに。確かに、一人暮らしの部屋に誰かがいるというのは何とも言えない安心感がある。それは理解できる。だが、それではいけないのだ。それはきつと彼女の為にはならない。

「桜」

そう思っって呼びかけると、パソコンの前で寝転んでいる桜は気だるげ答える。

「何い？」

「このままだと終電逃すぞ」

「大丈夫だよ。私、歩いて帰るから」

「バカ。それでまた襲われたりしたらどうすんだよ。お前チビだし」

「チビじゃないもん！ ゆずっちのいじわるっ！」

桜は頬を膨らませながら立ち上がり、荷物をまとめ始めた。

「待て。駅まで送っていく。こんな時間に一人で返すわけにはいかないからな」

「ええ、でも悪いよお」

「うるさい。ほら、さっさと行くぞ」

「…うんっ」

駅の改札口前まで来た。

「今日はありがとう。楽しかったよ」

「ああ、俺もいい暇つぶしになったよ」

「じゃあ私はもう行くねっ」

踵を返して家路へつこうとする彼女を引き止めるように声をかける。

「なあ、桜」

「なに？」

桜は振り返り、首を傾げた。

「お前、なんでゲーム作ろうと思ったんだ？」

ずっと気になっていたことを訊いてみた。

コイツはどうしてここまでするのだろうか？ ゲーム作りなんて大学の講義で習うことでもない。

ましてや、わざわざ自分で調べ、独学で学ぶ必要もない。

時間もかかるし、労力だつて使うことになる。普通ならば避けるような事だと思う。なのになぜ……

「それはね、前に話したでしょ？ あおちのこと」

桜は前に俺に話した幼なじみのことについて話し出した。

「夢に向かつて頑張ってるのを見てたらさ、私まで頑張らなくちゃって思ったの。私にも出来ることがあるんじゃないかってさ。だから少しでも力になりたいなって……それだけかな」

「それだけって……」

その言葉には彼女の決意が宿っていたように思えた。

他人の為にそこまでできる人間がこの世にどれだけいるのだろう。

「あとは、ただの自己満足かもね。なんか恥ずかしいなあ」

照れくさそうに笑う彼女に俺はかける言葉を持ち合わせていなかった。

「……そっか。まあ、あれだな。そういうことなら俺も協力しないこともないぜ」

結局出てきたのはそんな言葉だった。

「ホント!？」

桜は目を輝かせて顔を近づけてきた。近い。顔が近い。

「お、おう。まあ暇つぶし程度だけだな」

思わず仰け反ってしまう。

「それでも嬉しいよっ。ありがとうね、ゆずっち」

満面の笑みを浮かべ、桜は礼を言った。

「べ、別にいいけどよ……」

不意打ちの笑顔にドキツとしてしまった。

こういうのは苦手だ。

「ところで、いつ完成する予定だ？」

「うーん。まだまだ先は長いと思う。でもいつか作れたらいいな」
「そうだな」

「うんっ」

その時、遠くの方から電車到着を知らせるアナウンスが流れた。

「あつ、ヤバい。電車来ちゃう！」

「おい走るな！ 危ないぞ！」

「大丈夫大丈夫」

「ちよ、待ってっ!!」

桜は改札を通り抜け、ホームへと走って行った。

相変わらず落ち着きの無い奴だ。

「じゃあ、また明日ねー」

桜は手を振りながら去っていき、すぐにその姿が見えなくなった。

佐藤弘樹の休日

佐藤視点

——それでね、聞いて佐藤君。コウちゃんつたら——

「……はあ」

目が覚めた途端、すぐさまついたのはため息だった。

まさか夢にまで出てくるなんて。

しかもよりにもよってなんで八神の話してるんだよお前は……。

俺は自分の部屋を見渡す。

八時四十五分を差した目覚まし時計を見て思わず出勤しなければ
と思ってしまうたがなんとか思いとどまった。

……そうだ。今日は休みなんだ。

ついこの間『フェアリーズストーリー3』をマスターアップして
やってきた有休。

うちの社長はマスターアップした直後に今までたまつた有休を一
気に消費する方針にしてるため、今日から長期間の休暇が保証され
る。

しかし、それだけ長くもあるとその間なにするか逆に決めかねて困
るな。

「……その前に飯だな」

一通りの身だしなみを整えた俺は、キッチンへ向かった。

食パンをトーストに放り込んだ俺は、コンロで熱したフライパンに
油をひいて馴染ませる。

卵を2つ。片手で割って熱いフライパンの上に乗せれば心地よい
音が踊り始める。あらかじめ用意しておいた水を少量注いで蓋を閉
めて1〜2分待てば目玉焼きは完成だ。

その間に、サラダを作る。と言っても、レタスを軽く割いたものに
プチトマトを添えてドレッシングをかけただけの簡単なものだが、一
人暮らしで朝飯なんてこんなもんでいいだろう。

そろそろ目玉焼きも半熟になったころだろう。コンロの火を止め
て、半熟の目玉焼きをサラダと一緒に皿に乗せれば、それと同時に

トーストがチンツと焼きあがった。

トーストと目玉焼き&サラダが乗った二つの皿をテーブルに置く。眠気覚ましのブラックコーヒーを添えて。

と言つても、これはインスタントなんだがな。欲を言えば、もっとちゃんとしたコーヒーも飲んでみたいものだが贅沢言つてられないしな。

それよりも飯だ飯だ。

自分で作った朝飯を食べ始めた俺は、テーブルの目の前に置いてあるテレビの電源を入れて適当にニュース番組でも見ようとする。

しかし、よく見てるのはニュース番組もうとつくに放送時間を過ぎてるので個人的にめばしいものがない。

あれ結構見てておもしろいんだよな。やたら貝に詳しいアナウンサーとか、番組の最後にはイケメンがなんか料理作ってるし。

たまにまねするし。

いや、別に高いところからオリブオイルかけねえよ？

とは言え、飯を食うときに静かすぎるのもいかんせんもので、こうして無理やり音を作ってるわけだ。ボーツと飯を食べながら番組を見ていれば、ちよつと面白そうなのが目に入ってきた。

「……市場か」

それは、風景からして生放送のそれは、朝の市場を紹介してる番組で、どうやら俺んちから車でそう遠くない距離らしい。

ていうか、前にもここには行ったことがある。そうか、あそこって市場とかしてるんだ。

……最近、働きつめてて飯を手抜きが多かったから野菜とかあんま食えてねえんだよな。

行つてみるのも悪くないかもな。スーパーで買うよりも、安くてうまそうだし。

それと、コーヒーもインスタントじゃなくて本格的なの買つてみようか。

……なんだ、結構やりたいことあるじゃねえか、俺。

朝飯を食べ終えた俺は、タバコに火をつけながら時計を見れば、九

時半を指している。

市場は昼過ぎまで行っているようなので今から出かけても十分に合うだろう。

適当に一服を終えた俺は、私服に着替えて支度をする。

家を出た俺は、親から借りている車に乗って、その市場の会場へと車を走らせた。

「……」

車を走らせながら、手元にあるシガーソケットで新しいタバコに火をつける。

最近では職場だけでなく、色んなところで禁煙が進んでるから家か、車の中、会社の屋上くらいしか吸える場所がない。

それこそ、体に良いものではないし、百害あって一利無しというものもあるからやめておいた方がいいのは山々だが、こんな仕事してたらタバコ吸わねーとやってらんねえよ。

やがて、赤を示す信号が見えたのでブレーキを踏んで交差点の前で停車させる。

吸い殻を灰皿に落としかかった頃なのでちょうどいい。

しかし、停車していると手持ち無沙汰になってふと周囲を見渡してしまふ。

「？」

すると、向こうの歩道で見たことのある人影を見つけた。

……遠山だった。

アイツ、なにやってんだ？

こんな朝っぱらから散歩でもしてるのだろうか。それにしても見るからに挙動不審だ。

手元を持つてる紙を何度も確認しながら辺りをキョロキョロと見渡している。

「！」

あ、目があった。

「……！！」

すると、遠山の表情は目に涙を浮かばせながらパアツと明るくなっ

た。

「……………え？」

● 「よかつた〜あんなところで知り合いに会えて」

どう言うわけか知らんが、何故か俺を見つけた遠山は、俺の車の助手席に乗せてほしいと頼み込んできた。

あまりに突然のことだったので訳が分からないまま車に乗せたわけだが。

ふと遠山の持っていた紙を見ると、それは俺が行こうとしてる市場のチラシだった。

そんなわけで、俺は道に迷っていた遠山を乗せて市場にたどり着いたわけだ。

駐車場で車から降りた遠山は、先ほど見せた涙目とは打って変わった機嫌が良さそうだ。

「それにしても、佐藤君もこういうところ来るのね」

「……………まあな」

いつも通りぶっきらぼうに答えてしまう。涼風や桜あたりならもつとちゃんと接しられるのだが、そもそも今日会えるとは思わなかった。

今朝みた夢は正夢か？

幸先がいいのか不吉なのかわからなくなってきた。そもそも、先日妙なことを言ってしまった手前、少々顔を合わせづらい。

「それにしても、ちゃんと地図見てたはずなのに……………変ねえ」

と不思議がりながら、遠山は地図が書いてあるチラシを車のハンドルのようにクルクルと回しながら眺めている。

「……………遠山、地図を回すな。それだと余計迷う」

「えっ……………そうなの!？」

驚いている遠山を見て、少し心配になった俺は、一つ聞いてみることにした。

「なあ遠山。…………お前、北ってどっちだ？」

「北？ もー佐藤君。それくらいわかるわよ」

……と、自信満々に言い張る遠山だが――

「えつと……今、朝だから日があるほうが東よね。だから……えーつと……あっち！」

「……遠山。残念だがそっちは南だ」

「あ、あれえく？」

「……」

いやさつき明らかに迷ってたよな。

コイツ、方向音痴なのか。初めて知ったなそんなこと。職場でしか会ったことないからこういう部分は見たことがなかった。普段のしつかりした様子とは大きなギャップを感じさせた。

「まあ、とりあえず目的地には着いたわけだし、サツサと買い物済ませようぜ」

「そうね。この季節だと、どんな野菜があるのかしら？ コウちやんの口に合えばいいけど」

遠山の口から、八神の名前が出た途端、俺の肩が一瞬すくむ。

……まあ、こうなるよな。

「実際、マジで立て込んでたもんな」

「そうなの。コウちゃん、最近偏ったモノばかり食べてたから」

「……ふーん。ま、仲良きことは美しきことだな」

俺は遠山の頭に手をおいて、キッチンと整っていた髪の毛をワシヤワシヤ。

「……は、発言と行動が一致してないわ佐藤君っ！」

いや別に、遠山が休みの日にわざわざ八神の飯作りに行つて、それで一緒に食べて仲むつまじくしてるところを思い浮かべて嫉妬しているわけではない。

そんなやましい感情など微塵もない。

そうだ。そんなものない。

これはあくまで本人がやりたくてやっていることで、それに対して俺がいちいち口を出すほどのものじゃない。そう、そうに来まつている。

「それより、サツサと行こうぜ。良いヤツ売り切れちゃうかもしれないよ」

「そ、そうね」

遠山のワシヤワシヤとした髪の毛を元に戻してから、俺たちは市場の会場に向かうため、歩き始めた。

つまり、俺は今、遠山と肩を並べて歩いてるわけだが――

「――それでね、聞いて佐藤君。コウちゃんったらね、前からこの市場楽しみにしてたから行こうって離してたのに、『今日は眠いからヤダー』って言つてドタキャンしたの。せつかく二人で色々見て回れるかなって思ってたのに、少しくらい付き合ってもいいのに。ホント、困っちゃうわ。この前のマスターのときだって、ひふみちゃんの寝顔撮ろうとして色々騒いじやったし、この間だって――」

「……」

やっぱり今朝のは正夢のようだった。

コイツと会った時点で覚悟はしてたが、まさか休みの日まで八神の話しを聞くことになるとは。

……俺、遠山のことは何にも知らねーのに、八神のことばっか詳しくなってきたよ。

「遠山。お前、まさか涼風とかにも八神の話してたりしてんのか？」
気になったと言うか、ちよつと心配になつてそんなことを聞いてみた。

「えっ？ もー佐藤君。コウちゃんの愚痴話せる相手なんて、佐藤君ぐらいしかいないわよ」

「……そうか」

一点の曇りもない笑顔で応える遠山に、俺は、最低限の返事しかできなかつた。

……これは、喜んでいいのか？

いや、多分違うんだろうな。

でもなんで俺だけなんだよ。俺が同期だからか？

この前だつて、『男の子の中では』とか言つてたけど、コイツはその意味ちやんとわかつて言つてんのか？

……わかってないんだろな。

「佐藤君、どうしたの？ 顔色悪いよ。疲れてるの？」

「……なんでだろうなあ」

その原因そのものに心配されたせいか、ため息交じりの声で答えてしまおう。実際、自分の気色がどんどん悪くなっている。正直、働いているほうがマシかもしれない。

「あ、見えてきた」

視線を前に向ければ、様々な出店を構えた大通りがたくさんの人だかりで賑わっている。実際、色んな種類の農作物以外にも、パンやお菓子、軽い軽食なんかも売っていた。

駐車場も多少込んでたから、やはりこれくらい人が集まるのだろう。

「こういう朝市みたいなのって、結構人が来たりするのね」

「なんか、縁日みたいだな」

「コウちゃんも来ればよかったのにね」

……また八神が出てくんのかよ。好きだな。

もういろいろ開き直って内心楽になっちまってる節がある中、出店に囲まれた大通りを歩いていくわけだが、ふと農作物の出店を見つける。

何があるのかと見てみれば、カゴやバスケットに並べられていたのはキノコだった。

「いらっしやいませー。キノコは今が一番おいしい時期ですよ。

あ、彼女さんおきれいですね」

「違うんで」

と、俺たちを見つけた出店の店員が声をかけてきた。

黒い髪をおかっぱにして、大きくて丸い縁無しメガネの女性だ。俺のじいちゃんばあちゃんの子供の頃の格好を彷彿させる容姿だ。農業をやってるのか、農家っぽい格好がより一層ほれを引き立ててしまっている。

「……」

なにより、そこでふと変なデジャヴを感じた俺は、思わず店員に訪

ねてしまった。

「……なあアンタ、前に別の仕事してなかったか？」

「はい？」

「佐藤君、知り合い？」

「いや……健康診断のときの看護師に似てたような……」

「えっ？ 私は高校卒業してからずっとこの仕事してますけど？」

キョトンとした顔で訪ね返されてしまい、こっちまで首を傾げてしまふ。

あれ？ なんかやたら似てたような気がするぞ？

あのめちやくちや危なっかしい新人看護師に。

あれか？ ポケ●ンでいうジョー●さんやジユン●ーさんと同じ

類のあれか？

「よかつたら、ご試食になられますか？」

と、話をそらしたかったのか、出店の奥でホットプレートで調理していたキノコを紙皿に乗せてこちらに差し出してきた。

「あら、良い香り」

「彼氏さんどうぞ」

「彼氏じゃねえよ」

即座に否定しながら試食のキノコを頂く。

……ふむ、この芳ばしい香りは醤油バターか。定番だな。

肝心の味の方は……

「うん、キノコも美味しいわね」

「そうだな」

遠山の言うとおおり、旬のものだからか旨いな。キノコは年中生えるイメージがあったからこれは面白い。

「今日のお昼ご飯はキノコ料理にしましょつ。コウちゃん、どんなのが好きかな。多分直接聞いても、『なんでもいい』っていうのよ。そういうのが一番困るのにね。でも、最後に『りんが作るならなんでもおいしいから』って、そういうこと言われるとやっぱりうれしくなっちゃって』

……こうして八神の話を聞いていると、本当に今までコイツのこと

なんにも知らない自分が、自分のヘタレさが嫌になってくるな。

参考がてらにこの前、葉月さんが勝手に開いた闇鍋大会で知り合った増田に聞いてみたわけだが、勢いで押し切ったと。

……無理だ。それができたら苦労せん。

「じゃあ、これとこれをください。佐藤君はどうするの?」

「んじゃ、これをもらおうかな」

適当に吟味したキノコを二つほど手にとって、会計を済ます。

「あ、彼女さん、よかつたら——」

「違うつつつてんだろうが」

釣り銭を渡す合間に、そんなことを言われたので即座に否定する。下手に勘ぐられるのも、本人に悟られるのもたまったものではないからだ。

その後も、俺と遠山はこれから作る料理の献立を話し合いながら、市場を回ることにした。本人の口から出てくるのはどれも八神の話題ばかり。

当然、今話している料理の内容もすべて八神が口に合うもので、なおかつバランスの取れた食事にできるかというのが肝になってる。

「佐藤君は他に、何か探すつもりなの?」

「そうだな。あとは野菜とか、コーヒーとかあればいいな」

「わかったわ、じゃあ、あの辺りから順番に回りましょ」

こういう段取りの組み立てを考えるは彼女がとても得意なことの一つだ。共に働いている過程で、それはなんども見てきたし助けられてきた。

自分が知り得る限りでも、わずかに捉えることができた彼女の個人のこと。だけどそれは、本当の遠山りんとは少し違うのだろう。あくまでこれは、自分がやらなきゃとおもってかぶっている仮面の一つ。自分のやりたいこととは違うのかも知れない。

それでも、それが彼女にとって俺に見せたい自分と言うことは、それを本当の彼女の一部なんだろう。

「ふふっ、さっきの店員さんも言ってたけど、これってまるでデートみたいね」

共に出店に並べられた数々の旬の食材の中から吟味したモノを買い、車に戻る道中、不意に彼女はそんなことを言い出した。思わず、反応してしまう。

まさか、悟られてしまったのか？

と思つたが違うらしい。

「やっぱり、八神の方がよかつたか？」

変に踏み込まれたせいで、俺は妙にひねくれた返しをしてしまった。俺に対してそういうことを言うことは、俺をそもそもそういう目で見ていないと言っているようなものだからだ。

無論、彼女はそんな気で言っているわけじゃ無い。というか、多分言っている意味を分かっていない。それでも俺が気を悪くしたと感じたのか、少しだけ困つた笑みを浮かべた

「もー、そんなこと言わないの。でも、こういうの憧れてないわけじゃないから」

「…そうか。なあ、遠山？」

「何？」

「この間はすまなかつた。変に水を差すようなこと言つて」

俺はなぜかこのタイミングで、この間の非礼を詫びた。

彼女の困つた顔を見ると、先日言つてしまった夢の無い話を思い出してしまう。自分も疲れがたまっていたのもあつたが、あそこであからさまな態度を取るなんて大人げなかつたと後悔している。

「ううん、気にしないで。私も考え無しだったと思うから」

「……」

「さあ、それよりも早く行きましょ。コウちゃんもお腹空いているだろうし」

また八神かよ。と内心ため息をつくが、こうして八神に健気に尽くしているところも、一周回つて愛らしいと思うときがあるのだ。

だから、この前彼女が話していたことも、俺は案外悪くないとは思ふのだ。

と、そこまで考えたあたりでふと思う。

「まさか、今から八神の家に行くのか？」

「うん。佐藤君も来る？」

「……」

一瞬、断りたいとも思ったが、ここまで来るのに道に迷っていた彼女を置いて帰る訳にもいかない。それに手にはたくさんの買った食材達。これをもつて歩くのも、電車やバスに乗るのも大変だろう。

ああ、覚悟を決めるしか無いか。

「わかったよ」

「じゃあ決まり。せっかくだから三人で食べましょ」

俺がうなずくと、目に見えて嬉しそうな様子を見せる。こういう顔をするから、俺は断れなくなるのだ。

彼女を助手席に、荷物は後部座席に乗せてからエンジンをかける。行き先は八神の家。きつと俺の顔を見たら嫌がるのが目に浮かぶ。この際だ。俺がいつも感じて居心地の悪さを味わってもらおう。きつとそれを彼女が諫めるのだろう。そしてなんやかんやで俺の目の前でイチャつくのだ。

……まあ、こういうのも俺らしくていいか。

夜の居酒屋にて

純視点

「・・・・・・・・」

『フェアリーズストーリー3』がようやくマスターアップしてから、およそ三日が経った。会社からは、3週間の有給が与えられている僕は、その三日目の夜に、リヨウさんの居酒屋に来ていた。

「おい増田、なんでこんなところで油売ってんだよ。あ、リヨウ、ウイスキーおかわり」

「もう敦君ったらそんなに怖い顔しちゃだめでしょっ。あ、リヨウちゃん、このカクテルおかわり」

「・・・・・・・・そこにはなぜか先輩と花男さんもいる。」

「は、は〜い・・・・・・・・」

リヨウさんは苦笑いで注文を聞いてから厨房の奥へ逃げていった。おそらく花男さんを避けてるんだろう。まあ気持ちはわからなくも無いけど、ここを僕一人に押しつけられるのは厳しいのではやく帰ってきてくださいお願いします。

居酒屋のテーブル席の天井にぶら下がる照明に向かって、先輩はいつものタバコの煙を立ち上がらせながら空になったコップを弄んで僕に言う。

「てめえはこの有給をなんだと思ってたんだ？ こちとら今日も仕事終わらせてきたってのに3週間なんてあつと言う間だろうが」

「敦君の場合、もう結構溜まってそうよね」

「お前が言うのと、下ネタにしか聞こえないからやめろ」

「も〜いけず〜」

と、身をくねらせながら先輩に身を寄せようとする花男さんを、全力で阻止する先輩。会社でもかなり見慣れた光景だ。うちの会社の女性に手を出した男を襲うという噂は本当のようで、僕もあのときはいろいろな物が失われそうな気がした。

そんな二人を眺めながらいつも飲んでるワインを飲んでみると、先輩にじゃれつくのに飽きた花男さんがその矛先を僕に向けてくる。

「それで、ひふみちゃんとの近況は？」

「それは……」

それだ。そのことについて相談をしたかったからここに来たんだ。そうしたら、まさか先輩と花男さんが飲んでいたとは。店に入った僕を見るなり、何か察した顔で僕をむりやりこのテーブル席に座らせられて現在に至る。

マスターアップの直前のあの日、僕は仕事中的なものにもかかわらず滝本さんと……その……まあいろいろあった訳で、また顔を合わせずらくなっているのだ。

あのとき、肩に触れた感触と温もりはいまでも肌に残っている……気がする。

「休みの夜にこんな居酒屋に入ってくる童貞が、できたばかりの彼女となにかあるわけねえだろうが」

「悪かったね、こんな居酒屋で。じゃあこのウイスキーはなしと言うことで」

「あー リヨウ！ それはねえだろ!?!」

あーまたこの人は墓穴掘ったよ。この人の憎まれ口は大概だけど、その後たいてい碌な目に遭わないから憎めないんだよなあ。

そもそもこの人がいないと会社回らないし。

「そういえば、もうひふみちゃんときあつて結構経つんだよね?」

結局、先輩にウイスキーを置いてあげたりヨウさんは、自分のお酒を持って僕の隣に座ってきた。おそらく、もう営業時間は過ぎたのだろう。ここからはイーグルジャンプだけの夜になる。

よかった。やっとリヨウさんとまともに話せる。この人には是非相談を受けてほしかったんだ。

「はい、でも最近は仕事も立て込んでたのであまり会うことは無かったんですけど……」

言う途中で口ごもる。やっぱり言葉にするのはかなり恥ずかしかったことなので。でも、リヨウさんは察してくれる。

「けどってことは、つまり何かうれしいことでもあったわけだね?」

「まあ、そんなところですよ……」

詳しいことは恥ずかしいので伏せておくことにした。リョウさんもそこは根掘り葉掘り聞いてくるような人では無い。だからこの人を選んだんだ。

「うれしいことってあれか？俺らが修羅場ってる最中に、滝本と乳練りあ——」

「——そおい!!」

「あらくなかなか良い雰囲気だしてるじゃない。さすが私が見込んだだけはあるわね」

「花男さんも黙ってください!」

先輩がまた余計なことを言う前におしぼりを投げつけてなんとか阻止した。

まあ、知られてるよな。写真とか撮られたし、結構騒ぎになっちゃったし。というか、今はそんな話はいいんだ。とにかく本題に入らないと。

「その……この休みの間に、滝本さんと……デートできたらなあと思っただんですけど……そもそも何をどうしたらいいのかわからなくて」

この三日間、滝本さんと直接会えてない。本当は、この前の時になにか約束でもできたらよかったんだけど、それどころの騒ぎじゃ無かったからなあ。

だから、誘うタイミングを完全に見失ってしまったのだ。

「んなもん、付き合ってるんだからデートしたいからデートしようで済む話じゃねえか」

すると、また先輩が割って入ってきた。いきなりハードルの高いことを言ってきたので思わず声を荒げてしまった。

「だっ……だからそんな簡単にいかないんですってば!」

「なにがそんな簡単にいかないんだよ?」

「え……いや、だってほら……滝本さんも都合が悪かったり忙しかったりするかもしれないじゃないですか?」

「滝本も有給で3週間休みだろうが」

「うっ……!」

「ようするにお前がヘタレなだけじゃねえか」

「グハツ……！」

ズバズバと的確に僕の言い分を打ち破ってくる。この人の憎まれ口は、こういうところでは無類の強さを誇ると思う。

「……いや、多分これは僕がヘタレなだけだ。多分

ああそうですよ。僕はどうしようもないヘタレですよ。」

ヘタレという言葉をとドメとなり、テーブルに突っ伏してしまった僕にリヨウさんは助け船を出してくれた。

「いずれにしても、聞くぐらいなら失礼じゃ無いと思うよ。君の人となりは知ってるし、敦達の見方からしても、嫌々付き合ってるようには見えないし」

「リヨウさん……。」

うわ……。やっぱりこの人イケメンだ。この場にいる誰よりも聖人に見えてくる。いや、そもそも僕のいる会社にいる男性社員自体が結構おかしい方だと思うほどだ。

と、そこまで考えると少し不思議になる。

なんでリヨウさんはイーグルジャンプを辞めたんだろう。こんなに人当たりのいい人なら、会社でも上手くやっていけそうだし。

気になるけど、さすがに今その会社で働いている僕が聞くのは少し失礼な気がしたので、僕はその疑問を腹の中に押し込んだ。

「でも、誘うにしてもどこに誘えばいいんでしょう？ 遊園地とか？」

「はい、0点」

「ちよ、なんでですか先輩！」

考え得る範囲で妥当なものを上げたが、即座にだめ出しを食らってしまった。それにしても0点はないだろう。0点は。

「まずな、遊園地とかは止まっていることが多いんだよ。平日でも混んでることがあるし、アトラクションに乗るのだって長いこと待つから会話が持たない。その間に楽しませる術があるってのか？」

「うつ……。」

確かに、なんとなく想像できる。確かに子連れとか他のカップルと

かで並んで大変そうだ。その間に、お互い気まづくなったらデートどころの話じゃ無い。実際、初デートで遊園地に行ってすぐに別れたなんて話をよく聞く。

「じゃあ、どこならいいんですか？」

「水族館とか無難だがアリだな。天候に左右されないし、平日とかなら比較的混んでないから移動がスムーズだ。色々見て回るだけでも楽しめるだろうぜ」

「ウインドウショッピングつてもアリね。パ●コとかO●I●Iとか、家電量販店とか家具屋さんとかを色々見て回るだけでも楽しめるよ」

「あとは美術館もアリだね。落ち着いた雰囲気のところだから、ゆったり過ごしたりするのはちょうど良いし、色々見て回るだけでも楽しめると思うよ」

「……なんか色々見て回ってますね」

デートってそんなものなのだろうか？

もつとこう、楽しませるために趣向を凝らした方がいいのではと愚考していると、見透かされたかのように先輩に指摘される。

「デートってのはそこまで気張らなくてもいいんだよ。お前は気負いすぎ。寧ろ相手が萎縮するだろ？」

「でもそうだね、体験の共有がデートの醍醐味になるだろうから、一緒に何かをするってものいいとおもう。やっぱり、付き合ってから初めてのお出かけは思い出になるし」

「体験の共有……」

確かにリョウウさんの言うとおり、一緒に何かをしたという経験は良い思い出になると思う。でも何がある？

滝本さんが喜びそうなことはなんだ？

今まで関わってきた上で、彼女が好きなのや興味のあるモノが何かを探す。出会う前には何度かアニメのことをSNSで話していたし、初めてにあったのはライブ。その後は、僕の作った曲。それと、ああ、コスプレも一緒にしたな。

と、そこまで考えて少し良い案が頭に過ぎった。

「何か思いついたのかい？」

「まあ、まだ色々考えがまとまってはいないんですけど」

「とりあえず言ってみ」

「……コスプレ、とか？」

「「は？」」

テーブルに乗っているグラスの水面が揺れる。当の本人達からしたら考えもしないジャンルの話だからだ。とはいえ、僕にとって滝本さんが一番好ましいと言えるものがそれだったからだ。

ゲーム展のことは色々滅茶苦茶になっちゃったし、改めてちゃんとコスプレを楽しんでみたい。

「なんか、確かに涼風がそんなこと話してたな。コスプレが趣味だって」

「となると、コスプレのイベントとかかしら？ でもこの前ゲーム展があったばかりだし、他にイベントあるかしら？」

「そうですね」

花男さんは言うには、調べれば県外とかに色々あるかもしれないけど、初デートで県外までいくほど大がかりにしたいくない。滝本さんも疲れてしまいうしろ、トラブルも多いはずだ。

やっぱり、コスプレって難しいのかな？

この前も衣装は滝本さんに用意してもらったし、ほとんどリードもしれもらえた。これじゃ僕が引っ張ってあげられない。

と、振り出しに戻ってしまいそうになった時、リョウさんは言い出した。

「スタジオで撮影するとかはどうかな？」

「そんなことできるんですか？」

「個人客でも貸してくれるところになれば、準備も簡単だし」とか貸し出してくれるところにすれば、準備も簡単だし」

確かに、それができるなら調べてみよう。屋内のスタジオを貸し切りにできれば、比較的トラブルも少ないし、なにより、一緒ににかしたってという思い出を写真に残せる。

「んじゃ、それで決まりだな。あとは段取りきめっぞ」

「段取りですか」

「どこのスタジオにするかとか、集まる時間とか、そのあとどうするかとか、周辺を調べて退屈させないようにするんだ。こういうのは、男の仕事みたいなものだしな」

先輩は具体的なプランを決めるため、僕にスマホでスタジオについて調べるように促した。先輩が言うには、アクセスしやすいこと、スタジオの設備や貸し出したりしてくれるもの、周辺に何かほかに食事とか楽しめる場所があるか、気にしだすときりがないほどたくさんある。

だけど、四人で話し合っていると、時間はかかるもののそれなりに良い立地にあるスタジオを見つけることができた。予約の方も、平日の日ならいい時間が空いている。終わった後は食事とか、楽しめる場所もたくさんある場所だ。

「まあ、段取りつつつても、決めたことを必ずしなくちゃならんってわけじゃない。その場でやらなくていいって思ったことはしなくない。その辺は相手の雰囲気を見て決めるんだ」

「先輩、なんでそんなに詳しいんですか」

と、話がまとまりつつあったとき、先輩はそんなことを言い出した。ここまで話して気になることができた。この人、妙に知識がある言い回しをする。

浮いた話なんて聞いたことない…あ、この前元カノがどうか言っていたな。

「あれ、純君には話してなかったの？ 敦君、しずくちやんとできてたのよ」

「えっ!?! そうだったんですか!?!」

「花男！ 余計な事いうな」

言われてみれば確かに葉月さんと一緒にいる機会は見かけるし、あの意味打ち解けた関係ではあるとは思っていたけど、恋仲だったなんて。

「あーそういうえば、ひふみちちゃんって、しずくちちゃんのお気に入りよね。確か、面接の時にひふみちちゃんを雇うか雇わないかで口論になっ

て別れたんだっけ?」

「もうそんな昔の話はすんじやねえ!!」

ちよ………なんで滝本さんを巡ってそんなことになってたの!?

ていうか、やつぱり葉月さんもちよつと変態なんだよな。それを言い出したら葉月さんのおかげで滝本さんと今の関係を持つことができたと思うと、逆に感謝するべきかもしれない。

本人は多分うれしくないだろうな。

「ちなみに、先輩は葉月さんとの初デートはどうしたんですか?」

目の前にわかりやすい実例がいる以上、聞いてみたくなった。こういう話は成功体験も失敗談も両方聞いておきたいからだ。参考になるかはわからないけれど、聞いてみて損はないだろう。

「さあ、どうだったかな」

しかし、先輩はその話題を振られると少し顔をしかめてはぐらかそうとした。

「おい敦。お前が忘れるなんてことあるわけないだろ?」

「黙秘権を行使する」

「え〜? 気になるう〜、しずくちゃんとなにしたの〜? ねえ教えてよ〜」

話の矢面が先輩に集中し始めた。しかし一向に喋ろうとしない。個人的に気になる話ではあるけれど、話が逸れてしまいつつあるような気もする。

それは先輩も気が付いたのか、話を戻そうと僕に声をかける。

「そうだ、今滝本に連絡してみろよ」

「ええっ!?!」

いきなり切り出してきた先輩の言葉に耳を疑う。

今? いくらなんでも遅すぎだろう。だってもう時計の針は11時を回っている。終電までにはまだ時間があるけど、こんな夜遅くに連絡するのはいくら恋人の仲とは言え失礼すぎるんじゃないか? 僕は慌てて、それは失礼じゃ無いかと先輩に訴えた。

「さすがに電話は迷惑かもしれないから、メールかSNSにしてみ

たら?」

「リョウさんも先輩に乗り気なんですね……」

「攻めるときはちゃんと攻めない」と

「いつやるの? 今でしょ!」

「花男、それも古い」

まさか信頼していたリョウさんも、先輩達について僕を囲んでくるとは思わなかった。このまま僕がヘタレいてもキリが無いだろう。しばらく黙り込んだ僕は、観念してスマホを取り出した。

……よし、こうなったら僕も覚悟を決めるしか無い。スマホの電源をつけて、SNSの画面を開く。

相手は当然滝本さん。マスターアップの直前のあの日の謝罪以降で、会話はもう途切れている。僕はキーボードを開いて文字を打ち込む。

MASUDA 『こんばんわ。夜分に突然すみません。起きていますか?』

いざ画面に向かい合うと緊張するし、ドキドキもする。心の片隅で失礼じゃ無いかなどといった後ろめたさも残っているのに、皮肉にも、こうしてSNSで文字をうつときは自然と言葉が出てくる。ホントは直接会って、ちゃんとおしゃべりできたほうがうれしいんだけどなあ。

胸の内で嘆きながら送信ボタンを押した。

「送りました」

「しばらく様子見だね」

「やっぱりもう寝てるんじゃない? 睡眠不足はお肌に悪いし」

「そうですよ——」

——言いかけた途端、僕のスマホが端的なメロディを発した。この音は間違いなくSNSの着信音だ。その上、送ってきてくれた人は滝本さんだ。

「き、来ました」

「相変わらず早いな」

「それで、どんな感じかしら?」

ここにいる全員にせかされるようにスマホの画面を目に向ける。メッセージのアイコンは滝本さんのものだ。やっぱり起きてたんだ。

ひふみん☆ 『はーい(´・`・´)／ 起きてるよ(*´・`・´*)』
機嫌がよさそうな顔文字が添えてあるのをみて安堵のため息が出る。ふと周囲を見ると、先輩達が見世物を見るような目で僕を見ているのがしやくになつて、意識を画面に集中させる。ついでに見えないように手で画面をガードしながら。

MASUDA 『今、なにやってたんですか?』

ひふみん☆ 『宗次郎と遊んでたんだ(´・`・´)』

ひふみん☆ 『最近忙しかったから、かまってあげられなかったの(――)』

なんとなく滝本さんらしくて少しだけ頬の筋肉が緩むのを感じる。もつと話していたいと思い、周囲の視線も忘れてSNSの画面に意識が集まっていく。

MASUDA 『ちなみに、どうやって遊んでるんですか?』

ひふみん☆ 『えつとね、宗次郎の好きなりんごとかあげたり、爪を切つてあげたりしてるの。普段は臆病だけど、今日は撫でられるくらい懐いてるの(●´・`・´)』

返信が来るとすぐに、おそらく、パジャマ姿の滝本さんの太ももの上で心地よさそうにしている宗次郎君の写真が送られてくる。

今少し滝本さんの太もものにドキツとしたのは内緒だ。だけど、この三日間、滝本さんの顔を見れてないのがさみしかったので、できたら宗次郎のツーショットの方がうれしかったな。

「やっぱりひふみちゃんって、画面越しだとすごくおしゃべりなのよね」

「顔文字は安定なんだよな」

「先輩も花男さんもあんまり見ないでくださいよお」

これ以上、滝本さんの個人情報はいけ好かない二人にまでばらしたくない。僕は二人の正面を向いて、二人には画面が見えないように立ち回る。するとリョウさんも二人の蛮行に見てられなくなったのか、なんとか二人を邪魔してくれる。

リョウさんに止められてようやく観念したと思ったら、先輩は今度はヤジを飛ばしてきた。

「おしゃべりばっかしてねえで、さつきと用件を言ったらどうなんだ？」

「用件とは？」

「デートの誘いだよ。そのために連絡したんだろうが」

「で、でも……いきなりそんなこと……」

ホントに僕にはハードルが高すぎる。いくら画面越しとはいえ、デートしませんかだなんて恥ずかしすぎて遅れる訳が無い。

そ、それに……今じゃ無くても明日でも大丈夫だろうし。こうして連絡できるなら——いや、そんなことばかりしてるから先輩にいつもドヤされるんだろうが。ならどうすればいい。考えろ。

音楽ばかりしか勉強してこなかった足りない頭を必死に動かして考える。大丈夫だ。リアルの時とは違ってアガったりしていない。ある程度の冷静さは保ててる。ならあとは機転とちよつとの勇気だけ。

何かを思いつく語彙力とそれを行動に移すことだけだ。

「……よしっ」

さつきまで話し合っていたことを、端的に伝えられるように文字を起こす。

MASUDA 『滝本さん、またコスプレしたくないですか？』

ひふみん☆ 『えっΣ(。)。急にどうしたの？』

あ、やばいやらかしちゃった!?

性急に話を切り出したせいかわ、滝本さんを驚かせてしまった。確かにいきなりこんなこと言われても驚いちやうのも無理もない。

言い出した自分が言えたものではないが、前回の件で大変なことになったのがまだ印象に残っているのだろう。でも送信した以上、話を続けないと。

MASUDA 『あの、せっかくのお休みですし、なにか二人でできないかなって思っ』

ひふみん☆ 『それっ』

ひふみん☆ 『つまり』

ひふみん☆ 『あれだよねヨ。ㄩ。(;) () ドキドキ』

MASUDA 『一応、デートのお誘いのつもりです』

ひふみん☆ 『／／／(エ)／／／ カーツ』

顔文字だけで照れてるのが十分わかるけど、メッセを小刻みにして
るあたり、本当に動揺してるように見える。申し訳ないことした
なあ。もうちよつと滝本さんの出方を見ればもつとうまくできたか
もしれないのに。

MASUDA 『今回は、イベントじゃなくてスタジオを予約した
んです。そこなら前みたいにならないかなって』

ひふみん☆ 『前って……ゲーム展の時のこと(／／／△／／／)』

MASUDA 『その、あの時は本当にすみません』

やばい、また墓穴を掘ってしまった。これじゃあ全然話が進んでく
れない。ゲーム展の時を引き合いに出すんじゃないかった。でもそれ
以外にどうすれば。

ひふみん☆ 『あのことは、私、嫌じゃなかったよ？ それで純君の
気持ちを知ることができたし〃、ー〃』

MASUDA 『ありがとうございます』

それだけわかっただけでも安心した。何度も確認したことだけど、
あのことは今思い返しても恥ずかしいし、正直どうかしてたと思う。
とはいえ、早く本題に戻らないと。

MASUDA 『あの、それで、都合はどうですか？ 場所はこうい
うところなんですけど日時は三日後で時間は午前10時くらいに』

ひふみん☆ 『うん。大丈夫だよ』

MASUDA 『それと、待ち合わせ場所は——』

少し話が逸れたりしたけれど、なんとかデートの約束を取り付ける
ことができた。一時はどうなるかと思ったけど、案ずるよりも生むが
やすしとはこのことなのだろう。

僕の感情は想像以上に高揚していた。学生時代から女性に縁が無
かったからこうしてデートの待ち合わせの場所とかを相談するなん
て未知の体験だった僕には、これだけでもう胸がいっぱいになる気持

ちになってしまっていた。

MASUDA 『それじゃあ、今夜はもう遅いですし、この辺にしましよう。次はまた明後日で』

ひふみん☆ 『うんっ。お休みなさいと・◇・と／＼／＼ オヤスミー』

MASUDA 『お休みなさい』

と、そこで滝本さんのやりとりを終わらせた。スマホをスリープモードにして一息。だめだ。まだドキドキしてる。SNSでも、好きな女の人と話すつて、ここまでドキドキするとは思わなかった。その上、三日後には滝本さん本人と話すことになると思うと余計にだ。

SNSでもこんななんだっただ。リアルではどうなってしまうのだろうか。

「……………」

と、自分だけの世界に浸ってしまっていた僕は、しばらく、僕を物珍しそうに見つめてる先輩達に気づかなかった。

「うわっ……………」

思わず後ずさってしまうと、その空間を埋めるように花男さんがぐっと詰め寄ってくる。面白そうなおもちやを眺める子供のような笑みで。

「その様子だと、うまくいったみたいね」

「やればできるじゃないか。でもここからが本番だよ」

「そ、そうですよね」

そうだ。本番はここからなんだ。そしてこれからずっとこれを続けていく。恋人とはそういう物だ。でもここまで来ると少し自信がわいてきた。だけどここで調子に乗るのは死亡フラグだ。三日後に向けて万全な準備をしないと。

「しかし、ゲーム展のときもそうだったが、コイツつてやるときややるんだよね」

「そうよね。佐藤君も少しは見習ってほしいわ」

「増田も大概だが、佐藤は筋金入りだしよ」

「……………」

またこの二人はこんなことを話している。ほりやその通りなんだから言い返せないけどもうちよつと気を遣ってくれてもいいだろう。そもそも、こんなこと、佐藤さんの前ではしばかれるのが怖いから話さないくせに。

と、ふとさつきからおとなしかったリヨウさんがさつきの僕と同じようにスマホをいじっているのが見えた。

「あら？ リヨウちゃん、さつきから誰と話してるの？」

「ああ、これはですね。さつきの会話を佐藤君にも知らせてあげようと思つて」

「おいー!!」

ああ、明日のこの二人の悲惨な未来が目に見えかぶようだ。人の恋路を笑うと馬に引かれるなんて言われるけど、この際僕にはまったく関係ないので無視しよう。

それよりも大事なことがある。

——何せ三日後は人生で初めてのデートなのだから。

ヤマアラシのジレンマ

純視点

まだ紅葉が彩っていない十月の中頃、まだ着込むほど寒くは無いが、少しずつ冬が近づいてきているのを知らせてくれる。例年よりも強い低気圧発生したせいか、肌を伝う冷たい風に僕の身体は冷えることはなかった。

それもそのはず、今日は三日前から待ち続けた滝本さんとの初デートの日だからだ。彼女と恋人という関係になってから初めて行う外出。僕は待ち合わせ場所に指定した銅像がある駅の改札口に30分以上前から経っているが冬の予感が感じる程度の寒空では、この日照りは静まりそうにない。肌を撫でているこの秋風ももつと冷たくてもかまわないほどに。寧ろもつと冷やして欲しい。でなければ緊張でどうにかなってしまいそうだ。

「変じゃないよな」

ある程度時間に余裕を持ってきたから、駅の窓ガラスに映る自分の格好や髪型がどうにも気になってしまう。昨日は、佐藤さんにフルボッコにされた花男さんが服選びに付き合ってくれたから大丈夫と信じたいのだけれど。

「ん？」

駅前を歩く人だかりに視線を移すと、人だかりや看板の合間からひよっこりとこちら見ている人物を見つけ、目が合うと同時に心臓の動悸が跳ね上がった。

遠目からでも分かる。あの特徴的な暗紅色のポニーテールとそれを留めている大きなリボンの主は滝本さんだ。

彼女は人の波をゆっくりとよけながらこちらに向かってくる。僕もそれに合わせて呼吸を整えて準備をする。

落ち着け、滝本さんと会うのはこれで初めてじゃないだろう。実際、ゲーム展のときはちゃんとできたじゃないか。

「っ……」

それでまた、ゲーム展でやらかしたことを思い出してしまう。こう

いう時に、先輩から今までやってきた通りにやれば良いというアドバイスも完全に頭から消し飛んでしまうほどだ。

だけど彼女は待つてくれない。あと十数秒もすればこちらにたどり着く。いいや、大丈夫だ。僕にならできるはずだ。

「純君、お、おはよ」

「お、おはようございますっ」

僕のところまで歩み寄ってきた滝本さんに簡単に挨拶を交わす。時間的にはおはようでいいのかと迷いながらも、彼女に合わせる。きつと滝本さんも慣れ得ていないはずだ。ちゃんとエスコートしてあげないと、せつかくのデートを楽しんでもらえなくなるだろう。

ああそうだった。最後に服装を褒めることを忘れるところだった。これは花男さんからのアドバイス。女の子は初デートは格好にも気を遣うから褒めてやれと口を酸っぱく言われた。

「その服、可愛いですね」

「…ありがと」

この言葉はお世辞では無い。彼女が今身にまとっているのは、ちよつと厚着のコートに可愛いベレー帽。肌寒いからか少し温かくするために来ているであろうソレは、シンプル故に滝本さん本来の魅力を十分に主張していた。

でも、ストレートに可愛いというのもお互いに恥ずかしいようで、また目を反らしてしまう。

「に、荷物持ちますよ」

「あ、ありがと……」

滝本さんが手に持っている紙袋を受け取る。コスプレの衣装だと言うことは疑うまでも無い。僕の衣装はゲーム展のときにもらったものを用意した。滝本さんも、前回と同じでいいと言ってくれた。

一応スタジオで衣装やウィッグなどは貸し出されているらしいが、滝本さんのこだわりなのだろう。

手慣れた手つきで受け取ることができた僕は、滝本さんに手を差し出す。

「じゃあ、行きましようか」

「……うん」

差し出された手に少し驚かれるけど、確かな返事と共に、僕の手を取ってくれた。柔らかくて温かい手に包まれる。その感触は僕の心臓をさらに高鳴った。改めて、僕はこの人と恋人なのだと。

ここまでは予定通り、あとはスタジオで撮影して、そこから二人でお昼ご飯。そこからは色んなところをウインドウショッピングで見回る。

初めてにしては完璧なデートプラン……になるはずだった。

「え？ スタジオが用意できてない!？」

「もうしわけございません。他のお客様とのご予約が重複していたみたいでして」

手を繋いでスタジオまでたどり着いたとき、絶望は突然やってきた。

黒い髪をおかっぱにして、大きくて丸い縁無しメガネの女性スタッフが言うには、すでにスタジオには他のお客様がいるという。つまり、ダブルブッキング。

そ、そんな…せつかく予約して、トラブルに備えて段取りもすっかり考えたのに。

想定外のトラブルにより、平衡感覚がなくなり視界が揺れる。

だめだ、動揺するな。滝本さんが不安がる。

いや、もうこの時点ではぼ詰みなのだが、せつかくの初デートがこんな風に終わってしまったって滝本さんが可哀想だ。何か他に代案はないか？

と考えると、奥の方でスタッフが話し合っていた。そして、

「あの、スタジオは使えないんですけど、ポートレートなら可能なのですが、いかがなさいますか？」

「ポートレート？」

オカッパのスタッフが話すには、それは屋外の施設や公園などを歩き回りながら撮影を行うというものだ。スタジオなどの撮影と違って、自然な背景から人物を際立たせるような写真を撮れるというものだ。僕はまるで勝手がわからないが、段取りや構図はスタッフの人が

決めてくれるのでそこまで気負う必要はないらしい。

「えっと、滝本さんはどうですか？」

念のため、滝本さんの了解を得るため、彼女にも話してみる。僕にとってはこのままトボトボと来た道を帰ることだけはしたくなかった。

それも彼女は同じのようで、暗紅色のポニーテールをわずかに縦に揺らして見せた。

「じゃあ、それでお願います」

と言ったものの、実際にやってみるとかなり度胸のいるものだと言ったことがわかった。

衣装に着替えた僕たちがスタッフの車にのせられてやってきたのは近くの公園。

東京近辺では有名な広くて自然に溢れた場所は、確かに写真撮影にはもってこいの場所だった。

ただ一点。

コスプレでそれを行うということを除いては。

「じゃあ、行きましょうか。滝本さん」

「う、うん」

オカツパの撮影スタッフに簡単に挨拶をしてポートレートを開始する。

大まかな流れは、二人で公園内を廻りながらよさそうところで写真を撮る。

ただそれだけ。

とはいえ、恥ずかしくないといえは嘘じゃない。コスプレはこれをはじめではないけれど、イベントの時とは勝手が違う。

何が違うかって、イベントの時のような非日常感がないということだ。

日常の中でコスプレをする感覚にまだ慣れていない。

「今日は前と違った衣装ですね」

「うん。前に、作って…おいた、の」

滝本さんの衣装はゲーム展の時の和服ではない。三つ編みにウエ

イトレスを彷彿される衣装。

これも件の文豪をイケメンにした漫画に出てくるキャラクターだ。このキャラクターと僕が来ている衣装のキャラクターは境遇が同じという接点から作中でもよく関わっている。

それを自作するなんて、滝本さんすごいな。

「……ちよつと寒いですね」

「うん」

日が上っているとはいえ10月の公園に吹く秋風は、コスプレの衣装では十分寒かった。

滝本さんもそれは同じようだ。半袖の僕と違って袖は長袖だけど、生足だから余計に冷えるのだろう。

やっぱり他の案を探した方がよかったのかなと今さら後悔してしまふ。

迷いながらも園内を散策しながら撮影を行う。

開けた池を背景にしたシーンや、ベンチに座ったシーン。その辺りはスタッフの裁量で決めつつ、事を進めた。

「……」

が、やっぱり寒い。僕はまだ我慢できるけど撮影の合間に見せる滝本さんの指先が少し震えていた。正直、それを目の当たりにした今の瞬間に寒気を覚えた。

これじゃ楽しめていないに決まっている。とはいえ、やると決めた以上、今更中断するのもできるはずがない。何か無いだろうか。何か、滝本さんを楽しませて、暖めてあげられる方法は……。

「次は、あの木陰に行きましようか」

考えを巡らせている間に、眼鏡のスタッフは次のシーンを撮るようだ。指示された場所は広場の中に一本だけ立っている木の下。

木陰に入って撮影するようだ。

「滝本さん、こつち」

「純君っ……？」

僕は彼女の手を取って指示された木陰に向かう。その時、僕の脳内に変なことが閃いた。正直ばかげた考えだ。もしかしたらコスプレ

のせいで気でも触れたのかも知れない。ただ、今の僕にはそれしか思いつかなかった。

「嫌だったらすぐに言うてください」

「えっ?」

木陰に入った僕は、滝本さんの華奢な身体を抱きしめた。

「!？」

衣装越しからでも伝わる柔らかい感触が、僕の全身に伝わってくる。僕は彼女がバランスを崩してしまわないよう、木に背を預けて体勢を保つ。

「え、あ…純、君?」

「た、滝本さんが寒そうだったので」

僕が思いついた考えというのは、彼女を抱きしめて暖を取るといふ。本当になんでこんなことをしたのか自分でも分からなくなるようなことだった。

きつと、後で思い返して悶絶するに違いない。ただ、初めてのデートが、こんな冷たい形になるのだけは許せなかったのだ。

「い、嫌でしたか?」

「っ…そんな、こと、ない…よ? 　ただ、びっくり、しちやっとなにやら、外野が騒がしい。さつきからもすごい勢いでカメラのシャッターを切る音が聞こえるがその音は僕の意識を逸らすほどのものではなかった。それだけ、今腕の中にいる彼女のことしか感じる事ができなかったからだ。」

「すみません、やっぱり寒いですよね?」

「…:…ううん。暖かい。すぐく」

僕は滝本さんが疲れてしまわないように、ゆっくりと腰を下ろして彼女を膝の上に乗せる。

滝本さんの顔は、形容しがたいほどに真っ赤だった。でもその顔色は決して不快を思わせていない。ただ、僕の胸に自分を預けてくれた。

「ごういうの、初めてだったから、すぐく…うれしい」

「そう言うってくれるとうれしいです」

答えると同時にさらに抱きしめる。彼女の身体が壊れてしまわないように優しく、それでも確かに強く。二人の間に生じる温もりを噛みしめる。

なんだろう、心の中で、まだ足りないって気持ちが強くなってきた。そして、その感情を、我慢したくないっていう気持ちも同時にだ。

僕はまた滝本さんの手を握った。僕と彼女の体温が直接肌を通して伝わってくる。

今までは彼女との距離を意識しすぎて萎縮してしまったのかも知れない。嫌われるんじゃないかって、幻滅されるんじゃないかって。触れあうのは、ちよつと怖いかもしれない。でも、それはこんなにも暖かいんだ。

● 「写真。すごいたくさんもらっちゃいましたね」

「…うん。どれも…すごく、綺麗」

そんなこんなで、当初の予定と随分とずれたデートプランになってしまったけれど、撮影を終えることができた僕たちは、あらかじめ見つけておいた喫茶店で休憩をしている。

もちろん、もう衣装は着替えた。今は撮った写真を何枚かテーブルに並べて成果を吟味する。滝本さんも満足してくれたようだ。

撮ったデータは後日、スタジオのサイトから送られてくるのだけれど、今回は向こう側の手違いがあったこともあり、特別に現像してくれたのだ。

「これ…もらっても、いい?」

滝本さんはその中で、一枚の写真を手にとった。それは、僕と滝本さんが木陰で抱き合ってたときの写真だ。お互いの手を握り合い、おでことおでこをくっつけている。

スタッフの技量もあるのだろうが、一番写りがいいこのシーンだけ取ってみると、本当に漫画でこんなシーンがあったかのように見えてしまう。

僕たちは完全に忘れていたけれど、ものすごい形相で撮っていたからな。

「もちろんいいですよ」

「…ありがとう」

当然僕に断る理由はない。滝本さんが喜んでくれたのなら、これ以上望むものはない。

快諾する僕を見て、今日一番の笑顔を見せてくれる。

ここで、リヨウさんの言葉を思い出す。体験の共有と思い出。一次はどのようなかと思っただけれど、こういうのも含めて思い出の一つにできるなら、トラブルというのも案外悪くないモノだ。

「……クチュン」

「……」

やっぱり、トラブルは無い方が良いな。

今度はもっと気をつけよう。

ファツションは大事

敦視点

有給？

夏休み？

なんだそれは？

そんなものはない。

よろめきながらキャラ班ブースにたどり着いた俺は、自分のデスクにそのまま突っ伏した。

『フェアリーズストーリー3』が完成してから二週間が経った。マジでどうにかなるんじゃないかと覚悟したがなんとかなった。

ところがどっこい、俺の仕事はそれで終わりでは無い。元々、俺の仕事は『フェアリーズストーリー3』だけじゃないのだ。まだ開発中の作品がまだ二つも残っている。

どーせあの葉月のことだ。あと2〜3ヶ月もしたら次の作品作るとか言い出すんだろう。

この理屈でいくと、このループは永遠に終わらない。畜生、一番負担かかってるのはだれだと思ってるんだ。

「あゝあ、働きたくねえ〜」

「なんか久しぶりですね。敦さんからその台詞聞くのって」

「あ？？」

振り返ると、八神が呆れた顔で俺を見下ろしていた。

「そうか？ 結構言ってた気がするんだが」

「言ってますでしたよ。なんていうか、青葉が来てからですかね？」

「なんだそりゃ」

八神の言葉を鼻で笑いながら一蹴する。

そーいや、そろそろアイツの有給は終わる頃合いだったか。

ま、十分に羽を伸ばせたのならいいか。アイツを見るのは色々面白かったしな。目に見えて何かができるようになっていく用を見るのは久しぶりに心が躍るものがあった。

とはいえ、今の俺にそんなことを考えている暇は無い。

「たく、暇なら話しかけんな。俺は忙しいんだよ」

「他の作品のキャラデザでしたっけ？」

「ああそうだよ。葉月がここの仕事を持ってこなければ、とつくに終わっていたはずのな」

ぼやきながら、白紙の用紙とペンを手に取り、作業を始める。八神も察したようで、どこかへ行ってしまったようだ。

どうせ八神の仕事は電話番号くらいだろうから暇だろう。社内ならばどこにいてもいいはずだ。

さてと、こういうのはさすがに手を抜くなんてできないから、本気出さねえとな。

今日は仕事をどうしても早く終わらせないといけない退つ引きならない事情があるのだ。会社に泊まっている場合ですら無いほど重要な。

故に、集中モードに入った俺は、ペンを走らせるが、

「うわ、誰かと思ったら青葉じゃん！」

元々、コンデイションの悪い状態で集中モードに入ったせいか、八神がちよつとはりあげた声で右手に持っていたペンの芯が砕けてしまった。

「……………」

とりあえず一息つく。やがて近づいてくる足音が二つ俺の後ろから聞こえてきた。

「あ、敦さん、おはようございます」

振り返ると、涼風が出社してきたようだった。だが、いつもと様子がおかしい。

涼風の格好は、いつものスーツ姿とは違って、私服だった。

青を基調としたチェック柄のジャンパースカート。同じ柄のベレー帽をかぶっているのと、この季節だということもあって、芸術の秋という言葉が、頭をよぎった。

もつとも、季節を感じる生活なんて送っていないのだけでも。

「おう……おめかしなんかして、随分と気合い入ってるじゃねえか。

なんか好いことあったのか？」

「スーツがクリーニング中なんですよ……」

まるでそのツツコミはもういいというような顔で返してくる。

おそらく八神にも同じこと言われたのだろう。

ここ別に私服でいいのによくもまあ、律儀に通勤できたな。

もともとこの国の気候にあつてないだろ。スーツって。

「お前基本スーツだよな」

「そりゃ、私だってちゃんとした社会人ですし」

……少なくとも、ここにいる連中はまともな社会人なのかと言われると、少しだけためらってしまいが、涼風にそこまでイジワルしても仕方が無いので腹の内に秘めた。

「にしても、なかなか良いセンスなんじゃないのか？」

「えっ!?! そ……そうでしょうか？」

素直な感想を述べてやると、涼風はどこか自信なさげだ。なんとうか、自分で選んだ訳じゃ無いのに褒められてしまって気まずそうな感じだ。

さては……

「ははくん、お前、さては親に選んでもらったな？」

「な……なんでわかるんですか!?!」

ちよつと言い当ててやると、涼風は顔を赤くしながら目を丸くした。

その顔を見ると、さっき腹の内に秘めた嗜虐心がよみがえってくるようだ。

「お前、割と思ってること顔に出やすいからわかりやすいんだよ」

「も…… からかわないでくださーい! 敦さんのバカー!」

ホント、コイツを見ていると退屈しないな。

からかわれたのが気に触ったのか、俺に一発かまそうとグルグルと腕を回す涼風。小さな身体で行うソレは、頭を押さえつけているだけで空しく空を切るのであった。

「もう、宮本さん、青葉ちゃんをからかわないでください!」

涼風の頭を掴みながら声をかけられた方向に向くと、遠山がいた。

眉を八の字にし、涼風とくらべて少し淡い紫の瞳をとがらせている。本人の性格的にも、あまり涼風をからかうのを面白く思っていないのだろう。

まあ、佐藤にからかわれていることに関してはお前に原因があるわけだが。

だが、共に働いていると彼女の見た目に変化があることぐらいには気がつく。随分と洒落た服装をしている。まあ、当然か。

「宮本さん、今日は出版社の方々に来るんですよ？ そんな格好じゃ先方を怖がらせちゃいますよ」

まるで八神に説教を垂れている時のような顔で俺をしっかりとつけてくる。無論、俺も社会人だ。こんなくたびれた上にお化けみたいな顔するわけない。先方に失礼の無いように手は打ってある。

「ああ、わかってるよ。準備してる。つーか、八神以外にもそんな顔すんのな」

「っ!? べ、別にコウちゃんが特別なんて思っただけです!!」
冗談半分で言った言葉に、わかりやすい反応で返してくれる。

まさかそんなに顔を真っ赤にするとは。

……佐藤、こういうこと言うのは野暮だったのは百も承知だが、先輩のよしみとして言わせてもらう。

もうこの際、別の相手探したほうがいいんじゃないかねえのか？

健康的にも、精神的にも。

俺は心配だよ。保険に入ることまで勧めたくなるほど。

つつつても、聞かないんだろうな。恋愛とは好きになった方が負けと聞くが、まさにその通りのようだ。

それに、遠山本人が悲しむからというものもある。彼女にとっては佐藤も共にフェアリーズストーリーを完成させた大切な同期。何も言わずに辞めたりなんてできないのだろう。もし遠山が佐藤のことをなんとも思わないのであれば、幾分かは救いがあった。だが、現実はどうじゃない。

可哀想なヤツだとホント。

とはいえ、俺の何度か佐藤に仕事を教えたこともある。愛弟子の一

人に肩入れしたくなる気持ちも多少はあるのだ。

「お前、佐藤に八神の愚痴話してるときも結構いい顔して——グハア!!」

突如背後からの衝撃に、俺の身体は吹っ飛ばされる。涼風のグルグルパンチでない。この紙のように軽く、それでいてパワー、スピード、精密動作性、すべてを兼ね揃えた一撃を繰り出せる人間を、俺はこの会社で一人しか知らない。

「俺がなんですって？ 敦さん？」

「あ、佐藤君、おはよう」

「ああ、おはよう」

「佐藤さん、おはようございますっ！」

「……」

「佐藤さん？」

「ああ、幼稚園児かと思ったら涼風か」

「ガーン!!」

この一連の流れも、イーグルジャンプではもはや当たり前の光景になりつつある。それだけ、涼風がこの会社に馴染んでいることのなによりの現れなのだろう。

それよりもハリセンでぶん殴られたままの状態で放置するのは流石に勘弁して欲しいものだ。

● 「ま、普通でしょ……」

出社直後の一悶着後、遠山がコーデした格好に着替えた八神が俺たちの前に現れた。フェミニンな白いワンピースに、整えられた髪。本人は自分は似合っていないかと思っっているせいか随分としおらしくなっている。普段の男勝りが見る影も無い。

「すごい！八神さんかわいいですよー！」

「ほんと。コウちゃんかわいいー！」

「え、ウソ？」

「かわいい！」

「かわいい！」

「~~~~~!」

と、八神LOVEの遠山だけで無く涼風まで大絶賛の出来映えのようだ。確かに、普通に可愛らしい女の子になっている。

俺が口に出した色々問題になりそうだから黙っておくが。

「つーかお前、自分の髪くらいちゃんと手入れしとけよ。痛んでたから整えるの大変だったんだぞ?」

八神が出てきた会議室から遅れて姿を現す佐藤。

口ではこう言っているが、涼風の髪をあの手この手といじり倒してきたコイツにとって、八神の髪に手を加えるには造作も無いのだろう。

「ありがとう、佐藤君。おかげでコウちゃん、すつごく可愛くなったわ」

「……」

おお、佐藤よ。

何故お前はそうやって恋敵に肩入れするようなことをするのだ。確か無印の時も髪型セットしてやっていなかったかお前。

愛しの遠山きつての頼みだから、断れない気持ちもわからなくないが、その生気がなくなっていくようなオーラを出すのはやめろ。ただでさえこの2週間働きづめだった俺には堪えるのに。

あ、また涼風が髪を弄られてる。これもいつもの光景か。

「あーもう! 恥ずかしいからやめてよお! だから嫌だったのにいー!」

「何言っただ八神、俺たちはエンターテイナーだろうが。メディアに出る時ぐらい、シャンとしやがれ」

「ふーん。じゃあ敦さん、お手本見せてくださいよーだ」

この姿になっても生意気な中身は全く変わっていないようだ。というよりか、本人も半ば自棄になっているせいかな、俺にまで矢面をむけてきやがったのだ。

しかし、俺も腐ってもプロだ。よりユーザーを楽しませるため、より心地よくゲームをプレイしてもらうため、それくらいの荒行、なにをするものぞ。

「全く仕方が無いな。こい！ 花男っ！」

「はーい♥」

「アンタも他人任せかーい!!」

そして、ほんの十数分後のことだ。俺は花男をつれて会議室から涼風達が待っている廊下に出る。

ゲーム展と同様、ふちのない眼鏡をかけて。

「前回と比べて柔らかい感じにしてみたわ」

「まあ、こんな感じかな」

「これで2回目ですけどすごい変化ですね」

「私も何度見ても慣れないわ」

眼鏡をかけたお陰で口調も変わり、普段の俺の姿とあまりに乖離しているせいか、毎回こんな反応になる。流石に慣れてくる。だが、恥ずべき事など何も無い。堂々としていればいいのだ。

今の俺の格好は、ベージュのジャケットの下に黒地のシャツ。深緑色のパンツと茶色の革靴。

普段来ているような皺でヨレヨレになったトレーナーやジーパンにサンダルとは違い、どれもピンツと張った新品そのもの。

顔のむくみに目のクマは、花男のメイクの腕でなんとかしてもらい、髪型はゲーム展の時に切ってもらったばかりだから、軽くセットしてもらっただけ。

八神のそれと比べると、華やかさこそ敵わないが、男の格好など要は清潔感さえあれば良いのだ。

「それじゃ、私は満足したから帰るわ♥」

好みの男を好きに着飾って満足したのか、花男は颯爽と帰って行った。残された一同は、まだ俺の変化について来られていないようだった。

特に見慣れていない涼風は。

「八神さんと言い、敦さんと言い、なんでこんなに印象変わるんでしょうね。なんか不公平です」

「そんなことないさ。今日の青葉だって、十分可愛らしいじゃないか」

「なっ!？」

●
とはいえ、俺がいくら着飾ったところで、出版社の目当ては八神だろう。

キャラクターデザインにキービジュアルまで手がけた八神はイーグルジャンプの広告塔そのものだ。その記事にほとんどのページが割かれる。

と、思っていた。

「ま、まさか、俺までインタビュウを受けることになるとは……」

丸眼鏡にオカッパのカメラマンが話すには、どうやら俺の特集を入れるとの話だった。

いいや、俺達と言った方が正しい。

というのも、

『今回の開発チームでわずか三人しかいない男性というのに逆に注目が集まったので、特集を組むことになったのです』

とのことだった。

葉月の依怙鼻頂のしわ寄せが、こんなところにまで来ることになるとは予想だにできなかった。俺は普段しない眼鏡をかけて、口調をスイツチしてインタビュウを受けることになった。

想定していなかった仕事をしたせいもあつてか、先方が引き上げた頃には、入社時と同様にデスクに突っ伏してしまった。

というか、今日の仕事も全然進んでいない。今日は用事があるので手早く済ませなくては。

「こんな姿、確かに記事には載せられませんね」

「なんだ涼風、さっきの仕返しかな？」

突っ伏している俺の下にやってきた涼風にうなる様な声で対応する。どこか不機嫌そうだけど、申し訳ないが、カメラマン達に見せた振る舞いをお前にやっている余裕はないのだ。

「いえ、イメージと実態ってこうも違うんだなと」

「別にいいじゃねえか。普段からこういう格好で仕事してますって一言も言っていないんだ。オシヤレですわねって言われても、今日は『少

し』気合いを入れましたって言えば良いだけだし。ウソなんてついでねえよ」

「少しの定義とは……」

大人の常套句に苦笑いを示す涼風。

こうなる気持ちも分かる。ただ本当にウソはついていない。そんな事は一言も書いていないし、言っていない。ただ相手が勝手にそうあって欲しいと思っただけに過ぎないのだから。

「悪いが、あんまりお喋りに付き合ってる暇は無いだ。ちよつと約束があつてな」

「珍しいですね」

「ああ、ホントにな」

自分でも本当に珍しいと思う。

元々、花男に服やら髪型やらを用意してもらったのは出版社への対応のためでは無い。いいや、それも充分にあるのだが、それを終わらせてた後にもう一仕事あるのだ。

何分、火急の用件。

もし遅れてしまえばどんな目に遭うか分かったもんじゃ無い。

涼風を追い返した俺は、改めて仕事に向き合った。このインタビュウの合間にキャラデザのイメージは固まった。あとはソレを紙にアウトプットするだけ。本気で掛ければ1時間とちよつとで済むだろう。それでも多少の遅刻は覚悟せねば。

「よし、こんなもんだろ」

なんとか1時間で終わることができた。やはりある程度頭の中で形を決めておけばあとは早い。それを差し引いたとしても、やはり約束の時間にはギリギリ。今から準備するとなると普通に間に合わない。

これは、多少は大目玉を食らわなければならぬかもしれんな。

手早く支度を済ませた俺は、急いで会社を出る。元々体力に自信がないが、今回ばかりは走るしかあるまい。

さて、ここまで来て俺の用事とやらがなんなのか気になってきた頃だろう。なんとなくわかるであろうが、俺はとある人物に会う約束を

していた。

争点はそれが誰かという話だ。

待ち合わせ場所が見えてくると、その人物はいた。俺はインタビュウの時と同様に縁の無い眼鏡をかけて視界をクリアにする。そして瞬きを数回。少しボンヤリとした風景の輪郭が明瞭になつていく。

こうなると、自分の中の浮き足だった感情が軒並み収まっていくのだ。

そして、その人物は俺を視界に捉えた。

「遅いですよ。敦さん」

「ごめんよ。仕事を立て込んでね。それで、話ってなんだい？ ゆん」

フリルの多い、今日の八神を思わせるような衣装を身にまとつている彼女の名前は、飯島ゆん。

俺が珍しく急いで仕事を終わらせたのは、彼女に会うためだったのだ。

お姫様との密会

敦視点

まず、時計の針を巻き戻そう。

それは夜の居酒屋。リヨウの店で増田が滝本との初デートの段取りについて話し合っていたときまで遡る。デートの予定を取り付けるために四苦八苦する増田を見届け、リヨウに呼び出された佐藤に、花男と仲良くしばかれた後のことだった。

「……ん？」

突然俺の携帯が鳴った。そしてすぐに止んだ。画面を見ると知らない番号。今の時刻は0時を過ぎている。詐欺や変な営業の類いでもこんな夜更けにかけてくるものだろうか？

あるいは会社の誰かか。携帯で間違い電話なんてそうそうあるわけ無いし、確かめてみた方がよさそうだ。

佐藤に現在進行形で殴られている花男と期待と不安で押しつぶされそうになっている増田を置いて、俺は店の外に出てから掛かってきた番号に折り返して電話する。

「もしもし？」

「え、あ、敦さんっ!？」

「その声は」

数回のコールの後に耳に入ったのは、聞いたことのある声。高いアニメ声と関西弁特有のイントネーション。俺の知る限りで該当する人物はただ一人。

「飯島か？ お前、なんで俺の携帯の番号知ってんだよ？」

「えっ!?! えっと……ソレは……」

なんとも歯切れの悪い返事を返されたものだ。そっちからかけてきておいてそれはないだろうと呆れるが、声に出すほどのことでもない。そもそも、心当たりはある。

「ったく、どうせ涼風から聞いたんだろ？」

俺の連絡先を教えたキャラ班に所属する人間をあげる。サーバーの復旧のために番号を教えた涼風なら、口づてで教えてもおかしくな

いだろう。

「あつ！ それです！ その通りです！」

まるで今この瞬間、それを思いついたかのように答える彼女に若干の不信感を抱いてしまうが、前々から俺と接する時はこんな風に落ち着いていなかったたので気のせいだろう。

しかし職場の後輩に連絡先を聞き出してまで電話してくる動機が完全に不透明だ。俺と彼女は最近妙な縁があるが、それにしつたつて、こんな夜遅くに電話をしてくるなんてあり得るだろうか？

「で、何のようだ？」

「あ、えつと…その、大した用事やないんですけど」

「大した用事じゃ無いなら切る」

「あつ!? ちよつとつ!?!」

「冗談だよ」

「っ……」

まるで滝本のように口ごもりながら話す彼女をからかってやりたくなつた俺は、あえて一度断つてみせた。それが随分とシヨックだったのか、期待通りの反応を示してくれる。携帯の向こう側で悔しそうにしている飯島を想像すると少し可笑しくなる。しかし、前に余計なこと言つて怒らせた手前、さっさと弁明して本題に映してもらおう。

「それで、用件はなんだ？」

「あの、えつと……敦さんと直接おうて話したいんですけど、空いている時間ありますか？」

「今ここで話せばいいじゃないか？」

「そ、それは……とにかく電話じゃダメなんですつ」

「なんだよそれ……」

相変わらず彼女の目的がわからない。仕事のことかとも考えたが、そもそも今の彼女は仕事をしていない。店内にいる増田と同様、マスタ―アップ休暇のまっただ中。

真つ先に候補から外れることになる。ならば、彼女が俺に直接会う理由などなにかあるだろうか？

訝しんだ俺を完全に置いてけぼりにして飯島は続ける。

「それで、どうなんですか？ 仕事の後でもええので」

「……なら、ちよつと先になるがいいか？」

これでも可愛い後輩の頼みだ。特に断る理由は無い。飯島の真意は測りかねるが、現状の俺が抱えている仕事は把握している。2週間ほど先になるが、定時でなんとかかなりそうな日付は一応ある。それまでに色々前倒しでこなさねばならんわけだが。

「っ……はい、それでも」

その旨を伝えると、携帯越しにした飯島の声色が高くなる。彼女の顔は覗えないが、どこか嬉しそうだ。なんで俺なんかと会えることの何が良いのか。

「そんなじゃ、もう遅いから切るぞ」

「はい、おやすみなさい」

「ああ、おやすみ」

細かい日時を伝え、俺は彼女との通話を終えた。

結局、飯島の目的は判明しなかったが、それは直接会ったときにわかることなのだろう。さて、俺も明日から仕事なのだ。そろそろお開きにしよう。

「あ・っ・し・く・ん♥」

携帯をしまい、店に戻ろうと振り向くとそこには花男の顔があった。

「うお！ なんだよ！ 近い！」

「だーれと話してたの？」

「知り合いだよ。なんか、用事があるんだってさ」

これも飯島の名誉のため、花男には彼女の名前は伏せて曖昧な回答をする。チームこそ違うが、本人も同じ会社の面子に自分の予定なんて知られたくないはずだ。

特に愉快犯のコイツなら尚更だ。

「それって、女の子？」

「……まあ、そうだけど」

「あら〜。純君だけじゃなくて敦君にも春が来たのね〜」

「そんなんじゃねえよ…」

色恋沙汰が好きなた花男は身をくねらせて俺に迫ってくる。これだから嫌なんだよ。

両手で花男の頭を抑えながらしみじみと思う。

が、途中であることに気がついた。

「ああ、そうだ。花男、そういうことだからまたいつもの頼むわ」

「ええ、もちろんよ。そんな格好じゃ、女の子も恥ずかしくて隣なんて歩けないわ」

「うるせえ！」

さつきまで散々佐藤にぶん殴られたであろうコイツの鳩尾に、俺は蹴りをお見舞いしたのだった。

そして――

「遅いですよ。敦さん」

「ごめんよ。仕事を立て込んでね。それで、話ってなんだい？ ゆん」

そして今に至る。

花男に服装を整えてもらって、眼鏡をかけて口調も変えて、俺は2週間前から会う約束をしていた彼女と向き合う。俺を見つけた彼女は不機嫌そうだ。俺が遅れたから反論はしない。申し訳ないという意思が伝わるよう、柔らかい笑みを作る。

「つ…べ、別に良いです。敦さんが忙しいのはわかってますから。それより、ソレ、辞めてもらえませんか？」

彼女が不機嫌な理由は他にあるようだ。

ソレという単語に、俺はピンとくる。俺は自分が少しやらかしたことに気がついた。急いでいた手前、いつもの癖がでてしまったのだ。「ああ、呼び方だね。ごめん。このしゃべり方だと名前の方を呼んじゃう癖があるんだ。気をつけるよ」

「そうやなくて…いや、それもあるんですけど」

「ん？ なんだい？」

「だから、そのしゃべり方です！ 私は、いつもの敦さんに会いに来たんですっ」

「………こうか？」

やっと意図が分かった俺は眼鏡を外して胸ポケットにしまう。
ああ、なるほど。そういうことか。

こつちの方は調子が崩れるのか。俺も見栄えとかしゃべり方とか
気をつかったつもりだったが、後者に関しては蛇足のようだった。

「はい、それで…いいです」

「つたく、いきなり電話してくるから変に身構えちまったよ。こつ
ちも気を遣ったのに」

「…すみません」

「別にいいさ。それより、お前、飯はまだか？」

「え？ まだですけど、どうして？」

「ここで立ち話するわけにもいかねえだろ？ エスコートぐらいし
てやるさ」

直接会いたいと言われ、会ったその場で用件を聞くほど野暮では無
い。それくらい甲斐性は持ち合わせている。せつかくこうしてお
互い良い格好で出会ったのだ。それでただ話してはいサヨナラって
言うのも味気ないだろう。俺だって急いで仕事を終わらせた身だ。
少しはゆったりとした時間を過ごしたい。

「それで、お前は何か食べたい？」

「じゃあラ…イタリアンが良いです」

「……」

「な、なんですか？」

今一瞬、ラからはじまるものが出てきたような。

……ラが頭文字の食べ物。まあいいか。変に詮索するのは辞めよ
う。雰囲気が悪くなる。何より飯島に失礼だ。

「ああ、わかったよ」

「ちゃんとオシヤレなところですよっ」

「はいはい、わかりましたよ。お姫様」

「おひっ!？」

あからさまな言い方で発破をかけてやると、面白いほど顔を真っ赤
にしてくれる。

あんまりからかいすぎると怒らせてしまうから、ほどほどにしない

といけないのはわかってはいるのだが、こうも反応してくれると余計なことを言ってしまう。

実際、俺は今、わがままなお姫様を相手にしている気分だ。今日この日まで、大慌てで仕事をこなしてきたのだ。しかも、未だ肝心な用件は聞けていない。その上、ああでもないこうでもないと言われていく。ただでさえこっちは常に向こうの顔色を伺って言葉を選ばなければならぬのに。

からかうんだけども。

だが、後輩から頼りにされるといいうのは面倒ではあるが、どうしても気にかけてしまうものなのだ。

「2名で」

「かしこまりました」

店に着いた俺達は、店を一人で切り盛りしているコックが案内したテーブル席に向かい合って座る。

飯島の希望通りのイタリアンの店。

会社の最寄り駅から少し歩いたところにあるそれは、大通りから少し外れた小道にあり、隠れ家のような落ち着いた佇まいの場所だった。こういう独り身で忙しい身分にとって、職場近くのうまい店を見つけるのは数少ない娯楽の一つだ。

会社に寝泊まりするから周辺の上手い店には大体目星が付いている。この店も俺のお気に入り。

「…まあ、敦さんにしてはええ線いっとるんとちやいますか？」

「そうかい」

どうやら、お姫様の及第点は頂けたようだ。

俺といるのがそんなに居心地が悪いのか、あるいはさっきのことをまだ根に持っているのか、未だにツンケンとした態度を崩さない。

それでいて、彼女は落ち着かない様子で店の様子を観察している。内観はほとんどが流木のような自然な木材が使われており、調理しているコックの後ろには数々のワインが壁紙のように並べられており、所々に黒猫の写真やイラストがこちらを覗いている。

俺達が座っているのは窓際のテーブル席。外からはこの周辺の街

波が植物の隙間から見える。

「お前、ワインいけるか？」

「…多少は」

「なら同じのでいいな？」

「……」

こういう場所はあまり来たことがないのか、それとも今まで異性と二人で食事する機会がなかったのか、いつかの中華料理店のごとく、借りてきた猫のように彼女が頷くのを確認した後、俺が持ち込んで置いてもらっている一品を頼む。

食事の方は、俺はいつも注文しているコース料理を頼むつもりだが、飯島の方はと言うと……

「ムムムっ」

眉間に皺をよせ、眉毛を八の字にして真剣にメニューとにらめっこしていた。この店は良い店だ。だから、基本的に外れを引くことはないだろうが、初めての店だと大体そうなる。

こういうちよつと幼い様子はまだまだ若いことの現れなのだろう。

「んじゃ、まずは乾杯というか」

「…はい」

なんとか注文を済ますと、一番先にやってきたのはワインが入ったグラス。俺と目の前の彼女の前に置かれたソレを手にとり、そのまま腕を上げる。

口に含めば俺好みの芳醇な香りと味が口内を満たしていく。飯島の方も、反応はよさげだ。一口含むと、目の色が変わった。

「へえ、意外といけるんだな。涼風の歓迎会の時はすぐに酔っ払ってたのに」

「……あの時もそこまで酔うてませんよ」

「あんまり無理すんなよ」

「いけますって、ほら、この通り」

「あっ」

一口目なのにそれなりにできあがっているのに、何をムキになったのかグラスに入ったそれを一気に飲み干そうとする。空きっ腹で一

気は流石にマズいと制止しようにも、もう手遅れ。

もうグラスは空っぽだった。

「ほくらあ、ぜえんぜん酔うてまへんよお」

ああ、完全にできあがってしまった。

くそ、しくじった。変に調子づかせるんじや無かった。これじや用件が聞けない。つーかまだ飯も来てないんだぞ。どうすんだこりや。そうなったと同時に、やや遅れてやってきたコックが俺達の目の前に注文した料理を並べだした。

「あの、コイツに水を——」

「これおかわりお願いしまゝす」

「なっー」

ちよつと待て！

お前これ俺のボトルキープってこと忘れてないか？

うん忘れてるな。つーかもう誰と何してるのか分かってなさそう
だ。

ああ、くそ完全にやらかした。このワイン、ボトルだと10000
円したぞ。あとはチャージ代とかコースの料金、ボトルキープの額も
含めるとなると……。

●
そこまで数字が脳裏に浮かんだ瞬間、俺は考えるのをやめた。

「おい飯島、大丈夫か？」

「だあいじょうぶれふよ〜」

「人はそれを大丈夫とは言わんのだが」

結局、ベロンベロンに酔っ払った飯島に俺の秘蔵の一本を飲み干さ
れてしまった。

そのあとも何杯か飲んでいたし。

結局、あの店で要件は聞けなかった。彼女が話しやすいような雰囲気
にしてやろうという俺の気遣いは、完全に失策に終わった。

店を後にしてから大通りに出る頃にはもう飯島は立っていること
もできなくなっていた。

大通りの脇で腰を下ろして夢見心地。

「つかもう帰るぞ？ お前、自分の家言えるか？」

「え〜？ もう一軒行きましようよお〜」

ダメだこりや。

まさか、こいつ俺に奢らせるために呼び出したんじゃねえだろうな。

こつちがどんな思いでこの2週間を過ごしたと思ってるんだか。

「……」

まあ、それだけ元気になったならいいか。

涼風が入社してからしばらく立った時の彼女を思い出す。妹と弟に振り回され、体調も崩していた彼女がこうして心地よさそうにしている様子を見れただけでも安堵してしまう自分がいる。

とは言え、この状態で連れ回す訳にもいかん。一刻も早く家に帰さねば。ここがまだまともに話せる最後の分水嶺だ。

最悪住所だけでも聞き出して置かないと。

「おい飯島。お前、ホントに自分の家言えるか？ 自信ないなら今のうちに教えてくれ。俺、物覚えだけはいいんだ」

「え〜、なんですかそれ〜うち、実家暮らしやからあ、敦さん来ても、なあにもおできませんよ〜」

「何も起こさないために聞いてるんだが……」

このワガママお姫様は未だ夢現のようだ。

正直もう付き合ってられん。こつちも増田を焚き付けた出前、スマートにこなして見せようとしたがもう仕方ない。

なんとしても、ここで全部答えてもらおう。

「あとそれと、結局、お前の要件ってなんだよ？ わざわざ電話までして呼び出して。何か用事があったんじやないのか？」

「……」

改めて本題を繰り出すと、さつきまでお花畑にいた彼女が急に喋らなくなった。

まさか、忘れたせいで絶句しているのかと様子を伺う。が、どうにも違う。

うつむいて、ブツブツと何か言いたげだった。

「……ダメなんですか？」

「あ？ なんだって？」

「だからあ…理由がないとお、敦さんにい…会いたいつて思っちゃあ、ダメなんですかあ？」

よく聞こえなかつた俺は顔を近づけて耳を傾けると、飯島は俺の服の袖を掴まみながら、上目遣いでそう言った。

「っ……」

俺も酒が回っていることもあつてか、目の前にあるその光景に不覚にも心臓が跳ね上がる。

少女の上目遣いというものは、保護欲と父性本能が刺激されてたまらないのだ。

と、何故か女である葉月が雄弁に語っていたのを思い出す。

それよりも、コイツはなんでそんなことを俺に言うのだ？

「お前、それどういう意味で言つて…」

「……クウ」

「寝るなー！」

完全に酔いつぶれてしまい、大通りの脇で眠り姫になってしまった彼女の肩を大きく揺らす。

これでも10月下旬の夜。さすがに寝たら風邪を引くに決まっている。この前こいつに看病してもらつた出前、病気にさせるわけにはいかないのに。

くそ、最悪、こいつの親に来てもらうしかないのか？

「ん？」

眠り姫を帰す算段を建てながら、彼女の肩を揺らしていると、フリルの多いワンピースの中から一枚の紙切れが落ちた。

キレイに折り畳まれたそれを手に取って広げると、そこに書いてつたことに覚えがあつた。

「コイツ、なんでこれ持つてるんだ？」

それは、いつかの会社のサーバーが一部ダウンしたときに涼風に渡した、俺のメモだった。

筆跡にも、サーバールームの場所、ダウンしたサーバーの場所、涼

風と連絡を取るために書いた俺の携帯番号にも全て書いた覚えがある。それ以外に、涼風がちゃんと動けるように細かく指示されたそれを何故か飯島が持っていたのだ。

「……んあ？ あつし……さん？」

遅れて目を覚ましてくれた眠り姫は、数回ほど瞬きしたあとに俺の方を向いた。まだその瞳は朧気で焦点があっていない。まだ酔いの中にいるようだ。

「……あ、それ」

だがそれも、俺が今広げているものを視界に捉えると段々意識がはつきりしたのか、表情もわかりやすくなってくる。

浅緋色の瞳孔は小さくなり、ただでさえ真っ赤になっている顔色が耳にまで染まり尽くし、口を魚のようにパクパクさせている。

「あ……っ!？」

「おい、お前、なんでこれ持って——」

「イヤアアアアアア!!」

「グハア!？」

目覚めた眠り姫は俺の左頬に大きなまだ少し早い紅葉を咲かせてみせたのだ。

それから小一時間ほど。

本当に小一時間ほど経ったあとでも、お姫様は膝を抱えてうずくまっただまだ。

もう何がなにやら。

流石に面倒になってきたから、俺も隣で一服させてもらっている。俺の顔はまだ彼女が咲かせた紅葉のせいでひりひりしている。

「それで？ お前、なんでこんなことしたんだ？」

「っ……」

相変わらず、お姫様はだんまりのご様子で。

とはいえ、大体の想像は付いた。

まず、飯島が俺の番号を知っているのは、俺が涼風に渡したメモのおかげ。

居酒屋でのまるで今ソレを思いついたかのような不自然な言い回

しにも説明が付く。おそらく、涼風がゴミ箱なんかには処分したのを後から拾ったのだろう。

だとすると、あのワン切りは、間違って俺の番号にかけてしまっただけ。

それ以外の身の振り方については完全にお手上げだ。わざわざそのメモを回収して、そのあげく、自分の携帯に番号を入れ、電話する直前にまで持って行くという動機も、こっちからすれば完全に意味不明。

なにがやりたいのかさっぱりだ。

……一応、これはほぼ憶測の域をでない話だが、さっきの上目遣いのことを思い出す。

案外、用事や理由なんてもの、最初からなかったのかもな。

ただ俺に会いたかっただけ。

なーんて、いい年したおっさんにしては些か自意識過剰がすぎるか。

「さて……今日はもう帰るぞ」

俺はタバコの火を消してから立ち上がる。彼女の酔いもさっきのメモのおかげで冷めたようだ。まだまだ宵の口。一人で電車に乗れるだろう。

これで一安心と、歩き出そうとした途端、後ろから何かを引っ張られるような感じがした。

振り返ると、さっきまでうずくまっていた飯島が俺のジャケットの袖を掴まんでいた。

「……ラーメン」

「？」

「驕りますんで、さっきのこと、忘れてください」

「……」

それ、お前がメに食べたいだけでは？

と口に出せばきつとさっきのリプレイになるだろう。

それでもまあ、このお姫様の気持ちは汲んでやろうとするかね。

呆れ混じり、安堵混じりのため息をついた俺は、今夜最後のエス

コートに勤めることにした。

フェアリーズストーリー3 発売日

青葉視点

秋です。

私がゲーム会社 イーグルジャンプに入社してもう半年がたちました！

冬にはまだ遠いけど、早朝となると冷たい空気が風に乗って地肌突き刺さる。普段なら布団の中でギリギリまで寝込んでいたくなるけど、今日は、今日だけは違うのだ。

今日は待ちに待った日。

そう、今日は『フェアリーズストーリー3』の発売日なのです。そして今日は、キヤラ班のみんなと約束して発売日のお店の様子を見に行こうと約束したのですが、

「ちよつと早く来すぎちゃったかな・・・」

今日が楽しみ過ぎてあまり眠れなかったせいか、私は早く目を覚ましてしまい、八神さんと約束した待ち合わせ場所に一人待ちぼうけていました。

「・・・」

ちなみに、敦さんは来ない予定らしいです。敦さんの仕事は『フェアリーズストーリー3』だけじゃないようなので、こうして並ぶ時間もないみたいで、ちよつと寂しい気もします。そりゃ、この前からかわれたのはちよつと気に障ったけど・・・。

ゲーム展のことといい、やっぱり、ゲームをずっと作っているとそういう感覚になるのかなと少し不安になる。

ねねっちと喧嘩したときの敦さんの顔や、話したくないと言われた緑という人のこと。いろんなことがぐちゃぐちゃになって頭がおかしくなりそうだ。

いやダメだダメだ！

私は約束したじゃ無いか。敦さんも、自分の仕事を誇らしいって思えるように頑張るって。八神さんから教わったことを忘れたくない。それに、やっぱり私は、たとえ半年間でも一緒に働いてきた人たちと

みんなで頑張って生きたいんだ。

落ち込んでいた気持ちをなんとか持ち直して自分を奮い立たせると、どこから車のエンジン音が聞こえた。それがしたであろう方向に振り返ると一台の車が道路の脇の駐車できるスペースに留まっていた。

そして車のドアが開くと、

「おーい、青葉ー」

コートに身を包んだ八神さんが私に手を振りながら顔を出してきた。

私は八神さんがいる車に駆け寄る。八神さんって運転できたのかな？

いやでも、八神さんが乗っていたのは後部座席のほうだし、誰が運転してるんだろう。

でもすぐその疑問は解けてしまった。

「おはよ、青葉ちゃん」

「よう涼風か、さつきと乗れ。店までつれてってやる」

助手席にはりんさんが、運転席には、佐藤さんが座っていた。

「みなさん、おはようございますっ」

佐藤さんの車の後部座席のドアを開けると、そこには八神さんとゆんさんも乗っていた。

「青葉ちゃん、おはよ」

「ゆん先輩、おはようございますっ」

「行きしなに偶然おうて乗せてもろたんよ」

「そうだったんですね」

手短に挨拶を済ませると、八神さんの隣の座席に座ってシートベルトを締めると、それを確認した佐藤さんは車を発進させた。車内はさつきまで走っていたから暖房が効いて暖かい。

けど、佐藤さんが普段タバコを吸っているせいか、ちよつとタバコ臭かったりする。今は吸ってないけど、車の中は密室だから香りが残るんだと思う。

でも、敦さんのタバコの臭いとちよつと違うな。

敦さんのタバコは、蜂蜜のような甘い香りでどっしりとかまつたりといった感じだけど、佐藤さんのはほんのりというか甘い香りであることに違いは無いんだけど、敦さんと比べて、軽い印象を受ける。

「佐藤の車って結構くさいよね」

「悪かったな」

八神さんも、気にしているようだ。うちの会社は屋上以外禁煙だし、やっぱり気になりますよね。でも――

「あら、そうかしら？ 私、佐藤君の車の匂い、結構好きよ」

りんさんは八神さんとは違った感想だった。

「っ……」

隣でそれを聞いた佐藤さんの様子は、ちよつと変だったりするけど……。

「えー、もしかしてりんまでタバコ吸う気？ やめときなつて〜」

「別にそういうわけじゃないのだけど、ちよつと安心する気がするのよね」

「……」

りんさん……それ、自分が何言ってるのかわかってるんですか!?

しかも佐藤さんの隣でそんなこと言うなんて、普通の男性なら勘違いしちゃうじゃ無いですか!!

「あ、でも佐藤君。あまり吸い過ぎちゃダメよ？ タバコは健康に

悪いって言うし、仕事も大変なのはわかるけど、適度にね」

「あ……ああ、気をつける」

りんさん。

おそらく貴方が一番、佐藤さんの健康を害している気がするのですがそれは……。

佐藤さんの顔色が悪くなっているのが後ろからでもわかる私にできることは、佐藤さんから八つ当たりされないように祈るだけだった。

そんな調子の悪い佐藤さんが運転する車は、事故でも起こるんじゃないかと違う心配事まで思い浮かんだけど、なんとか『フェアリーズストーリー3』が発売されるお店のちよつと近くの駐車場に留めるこ

とができた。

「すごい！ 少し行列ができていますよ」

やってきたゲームショップの入り口には、まだ早朝で、開店もしていないのに人だかりが列を組んでお店のスタッフに指示された方角に続いている。

ざっと数えても、百人は並んでいそうな数だ。

「あれ？ はじめさんとひふみ先輩は先に来ているはずなのにいないですね」

お店の周辺を見回しても、二人の姿はどこにもない。私達は佐藤さんの車で来たから先に着いちやっただのかな？

「いやあそこや・・・」

「並んでる!？」

ゆんさんが指さした方向を見ると、防寒着に身を包んだはじめさんとひふみ先輩が、お店の前の行列に並んでいた。しかも割と前の方に。

それに、ひふみ先輩の隣には誰かいる。

ちよつと灰色がかった白髪に、二人と同じで防寒着に身を包んでいるその人の手はひふみ先輩の手とつながっている。

その人には見覚えがあった。この人は私達と同じイーグルジャンプで、サウンドチームで働いている増田純さん。そしてこの人はひふみ先輩の彼氏さんでもある。

ゲーム展のときに知り合ったけど、まさかひふみ先輩に彼氏ができたなんてびっくりした。

でもいくら彼氏と一緒にいても、あんなふうに行列に並んできるときとかは手持ちぶさたにならないのでしょうか？

ひふみ先輩だって、あまりしやべるのは得意じゃないはずですし、彼氏さんもあまり女性に慣れていないって聞いているからちよつと心配になったりしてる。

「・・・」

あ、ひふみ先輩と彼氏さん同士の目があった。すると、ひふみ先輩はちよつと恥ずかしそうだけど今まで見せたことも無いような幸せ

そんな笑みを浮かべている。彼氏さんも右に同じだ。

なんて言うか二人のいる空間だけ別の世界と言うか、いわゆる、二人だけの世界みたいになってる。

・・・不思議とその前で並んでいるはじめさんがちよつと気まずそうな顔をしているような気がするの、多分気のせいじゃ無いと思う。

「うわ、相変わらずラブラブだね」

「ひふみちゃん、幸せそう」

「はじめ・・・なんであの二人と一緒に並んだんや・・・」

その後、結局私達も特典がほしくなって、ソフトは持っているのに並んじやったけど、その途中で買いに来ってくれた人の顔が間近で見ることができたからちよつとうれしかった。

ちゃんと買うこともできたし、はじめさんやひふみ先輩のところに合流したのだけれど・・・、

「ゆん。買うなら一緒に並んでよ」

出会い頭、はじめさんはもう色々おなかいっぱいの様子でゆんさんに泣きついてきた。

「いや・・・うちもさすがにあの空間には行きたくないわ」

「うつぶ・・・ラブコメの波動に酔った」

はじめさんは、なぜか二つもある特典入りの紙袋を持ちながら二日酔いしたお父さんみたいなリアクションを取る。

た、確かに、ひふみ先輩と彼氏さんの間に入るのって結構辛そう。すると、今度は八神さんが、

「ひふみも隅におけないなあ。並んでる間もずくつとイチャイチャしてたし、羨ましいぞくつ」

「・・・っ、い・・・イチャイチャなんて・・・して、ない・・・よ？ ただ・・・その、寒いから・・・手・・・握ってた・・・だけ」

「そっそうですよ。別にた、滝本さんとたまたま目が合ったりしただけでそれで・・・」

ひふみ先輩も彼氏さんも、顔を真っ赤にしながら必死に弁明しているけど、それをみた八神さんは今度は呆れてしまった。

「だからそれをイチャイチャしてるって言うんだってば・・・」
「ええっ!?!」

その反応だと、ひふみ先輩に取って彼氏さんとイチャイチャするってどういうことなんだろう。やっぱり恋人同士になると手を繋いだりするのだけでも普通のことなのかな。

お、大人ってすごい・・・。

「まったくお前ら、何やってんだ?」

「あ、佐藤さん」

後ろから聞こえる低い声。ひふみ先輩の彼氏さんのような少し高い少年のような声とは対称的に、大人らしい声は間違いない。

私達が並んでいる間、車を留めていたはずの佐藤さんだった。彼も手に紙袋を抱えている。それも三つも。

「あおっちゅ」

そして、佐藤さんの脇でねねっちも紙袋を両手に抱えていた。

ねねっちが持っていたのは私達を買っていたフェアリーズストーリー3のソフトや特典が入ったものだ。でも佐藤さんのは違う。それは、紙袋にプリントされたロゴでわかった。

真ん中に波打つ海と女性のようなイラストが描かれているそれは、私がよく知ってるカフェエーラのそれだとすぐにわかった。

「あ、それって、もしかして」

「並んでると冷えるからな。色々買ってきた」

「ありがとうございますっ」

佐藤さんは持ってきた紙袋から色々な種類の温かい飲みものを一つずつ取り出すと、私達に配ってくれた。

「遠山はコーヒーでよかったか?」

「ありがとうございます、佐藤君。あ、でもお金」

「別にいいよ。ソフト買ってるんだから。ほら、八神は甘いヤツ」

「お、サンキュー。こういう時に気が利くよね、佐藤は」

佐藤さん、八神さんの好みを熟知しているような気がする。そりゃあ、毎日りんさんに八神さんの愚痴聞かされてるもんなあ。

きつと、八神さんのこと色々知ってしまったてるんだらうなど、余計

な勘ぐりをしてしまうのも、この会社に入ってから当たり前前になつてしまった。

寒くなり始めた早朝の秋空の下で、甘いココアを楽しんでいると、コーヒーを口にしていたりんさんが一息ついて話し出した。

「…なんだか懐かしいね」

「そうか？」

「ほら、佐藤君。初めての時も車出してくれたでしょ？ それで、私とコウちゃんが並んでる間にこうして飲み物買って来てくれたなつて」

「そうだったか？」

「うん」

佐藤さんも、りんさんと同じ懐かしそうな顔をしている。

そうか、7年間だもんね。片思いしているの。私がキャラクターデザイナーになりたいと思った時間よりも長く、りんさんのことを好きになつてしまっているんだ。

こういう時、私はすごく迷う。

りんさんは八神さんのことが好き。

佐藤さんはりんさんのことが好き。

私は、どっちを応援すればいいんだろう。
と。

最初は、佐藤さんを応援したい気持ちもあった。でも、いつかりんさんはどちらかを選ばなくちゃいけない。そうになると、もう、この3人はバラバラになっちゃうのかな？

…そしていつかゲーム展の時に見た、敦さんと新一さんのように、大きな溝が、できちゃうのかな？

「まさか聞落ちしてラスボスになるなんて思ってもなかったけど」

「そうそう、意外だったよね」

「だから最後の一騎打ちもすごい」

そんな私とは裏腹に、ねねっちとはじめ先輩は仲良くフェアリーズストーリー3の感想を言い合っていた。制作中でシナリオは熟知しているから、こうして語り合っているのだけど……ん？

「ちよ、ちよつとねねつち?」

ねねつちの発言が、完璧なネタバレになってしまっていることを、少し遅れて気付いた。というか、なんだか周囲が騒がしい。

ざわざわと噂するようにこちらの様子をチラチラと伺っている。

「やばい、帰ろう!」

流星にいつまでのこの場所にいるのはマズい気がする。居たたまれなくなったのは八神さん達も同じで、すぐにここから離れようとした。

それにつられて私達の歩き出す。

「どうしよう。怒られるかもしれない。怒られるかもしれない。最悪クビ……」

「だ、大丈夫だって!」

さつきまでノスタルジーに浸っていたりんさんも血相を抱えている。佐藤さんの件で結構思い込みの激しい性格もあいつてか、いつもの優しい声がすごく震えている。

「青葉ちゃん……これ……」

今度は、彼氏さんと一緒に歩いていたはずのひふみ先輩がスマホをもって声をかけてきた。見せられた画面を見ると、ネットではフェアリーズストーリー3のラスボスの名前で持ちきりになっている。

「もう広まってる!?!」

うそでしょ!?!

今日発売日だよ!?!

もしかして、本当にさつきの会話のせいでこんなことになったの!?!
だったら、本当にとんでもないことしちゃったんじゃないの!?!

「八神さん、これ」

「?」

慌てて八神さんとりんさんにもそれを見せる。

「はやいよー!」

やっぱり八神さんにもこれは想定外の反響だったみたい。りんさんに至っては声を上げられずに絶句してしまっている。

「ちや……ちやいますよ!きつとフラゲしてもうクリアした人が書き

こんでるんですよー!」

「なるほどそれだ!そういうことにはしておこう…」

「もう〜!折角の発売日が〜!」

そういうことにできるんですかそれは!?

でも、他に都合の良い言い訳なんて思いつかないよ。私も半分パニックになっているけど、それよりもりんさんがひどい。

ドンドン血相が悪くなっている。

「ああ、コウちゃんごめん。また胃が痛くなってきた」

「遠山、胃薬あるけど使うか?」

そんなりんさんに気を遣ってか、佐藤さんは胃薬を取り出して渡す。

今、どこからそれ出したの?

「あ、ありがとう。ああでも、頭も痛くなってきた」

「頭痛薬」

「さ、佐藤君っ…ありがとうっ!」

佐藤さん、やっぱり自分用に常備してるんだ。

「あ、あとこれ水」

佐藤さん!!

フェアリーズストーリー3 祝賀会

佐藤視点

今日は言うなれば、我らイーグルジャンプの努力が改めて実を結んだと言える日だ。

その場にいる者は、みな満足げな笑みを浮かべていて、各々の歓談が広いパーティ会場の中を支配している。

俺たち以外にも、営業や外注会社、クレジットに名前が載っている人間のほとんどが集まっているから当然と言えるだろう。

イーグルジャンプが手がけた『フェアリーズストーリー3』は、それだけ多くの人の手によって作られていたのだと、改めて実感できる。

この日ばかりは車では無く電車で通勤した俺は、カクテルを片手にパーティ会場をうろつく。どうやらデバッグのバイトも呼ばれているようなので、桜の髪でも弄ってからかかってやろうかと思っていると、会場の隅で一息ついてる遠山を見かけた。

俺はたまたま近くを通りかかった会場スタッフに声をかけ、もう一つのカクテルをもらってから遠山のところへ向かった。

「よう、遠山。司会おつかれさん」

「あ、佐藤君。ありがとう」

せっかくの打ち上げだというのに、司会の仕事をこなしていたことへの劳いの言葉ととともに、さつきももらったカクテルを差し出した。

遠山がそれを笑顔で受け取るのを見て、若干胃に負担がかかるのを感じるが、今日はこれが始まる前に飲んだ胃薬が効いてるせいかまだ耐えられる。

「つたく、お前もお人好しだな。わざわざ司会を買って出るなんてよ」

「気にすること無いのよ？ 私、人と話すのは得意だし、それに…」

「それに？」

ちよつともったいぶっている遠山を見て少し不自然に感じた俺は、つい聞き返してしまった。すると、遠山は少し考えたあと口を動かした。

た。

「そうね。コウちゃんにも伝わってるだろうし、佐藤君にもちゃんと言っておいたほうがいいわよね」

遠山は言った。

「私、次の開発から、プロデューサーになるの」

「・・・」

「と言っても今のプロデューサーと共同なだけだね。元々私も希望してたし、だから背景班も抜けることになるの」

「・・・」

「コウちゃんには話してないから、びっくりさせちゃうかもしれないけど、こればかりは私自身で決めなきゃって・・・佐藤君、大丈夫？」

「あ・・・ああ、大丈夫だ」

いきなりすっ飛んできた言葉に動揺しながらも、なんとか気丈に振る舞うフリをするようにカクテルを飲み干す。

「・・・ま、自分で決めたことなら、別にいいんじゃない？」

「そ、そうよね」

「・・・すまん、ちよつとタバコ吸いたくなつたから外つてくる」

「え？　ちよ・・・佐藤君?!」

空になったグラスをスタツフに返して、俺はタバコを吸うために会場を飛び出す。

というか、飛び出さずにはいらなかった。

俺は気持ちに整理が付かなかつたが、なんとか喫煙所にたどりつくことができた。

「・・・」

ため息すらつかず、俺はポケットからタバコを取り出した俺はそれに同時に取り出したライターでそれに火をつけようとする。

いや別に、シヨックを受けているわけではない。驚いただけで、別に落ち込んでなんていない。同じ背景班じゃなくなるから一緒に働けなくなるとかそんなことを考えてたわけじゃない。タバコを取る手が震えているのも多分気のせいだ。それにアイツの言い方からし

て、かなり前から考えていたような様子だったし、そんなことをいちいち俺がとやかく言うのも筋違いも甚だしい。うん。だからこれは俺には関係ないことだし、いちいちこうして驚く必要だってそもそも

「——ちよ、ちよつと佐藤君、タバコの向きが逆よっ！」

急に耳に飛び込んできた母性的な声に、俺はハツとした。

声が聞こえた方向に目を向けると、遠山が俺を見上げていた。当然、俺の方がずっと背が高いので、必然的に彼女の視線は上目遣いのようになるのだが、いきなりそれを見せられたせいでまた少し胃が刺激される。

「あ……すまん」

彼女に言われたとおり、自分が手にしていたタバコに目をやると確かに俺が加えようとしていたタバコの先はフィルターではなく巻紙に巻かれた葉っぱだった。

俺はすぐにタバコの向きを直して、改めて火をつけた。

「ごつちこそ、いきなり話してごめんね。びっくりしても仕方がないわよね」

「……いや、まあ、気にすることねえよ。俺も悪かったな。逃げ出すようなマネしちまって」

タバコの煙が遠山に行かないように立ち回りながら、乱れた心を落ち着かせる。ニコチンが脳に染みこんでいくせいか、さっきの動揺が軽くなっているようだ。

「それで、さっきの話の続きなんだけどね」

「おう」

再び先ほどの話を切り出してきたから耳を傾ける。おそらく、仕事のこととしてちゃんと話しておかなければならないことなのだろうから、まだ残っているタバコの火を消す。

「私がプロデューサーになるってことは、ADと背景班のリーダーに空きができるじゃない？ そのとき、葉月さんともう話してあるんだけど、ADはコウちゃんに、背景班のリーダーは、佐藤君に任せたって思ってるの」

「・・・俺がか?」

「佐藤君って、背景班のなかじゃ一番仕事ができるほうじゃない?」

「・・・まあな」

といつても、それは他の背景班のメンバーが、俺と遠山が話す機会を多くしようとは画策してわざと俺にばかり仕事を押しつけてるだけなんだが・・・。

でもまあ、昇格か。

「あ、でも嫌なら無理に引き受けなくてもいいのよ。宮本さんとか頼りになる人はいるし」

「・・・いや」

・・・正直、ドンドン先に行く八神の背中を見ていれば、俺なんか昇格するなんて思いもしなかった。

だけど、そうだな。八神だつて、一度ADでしくじってるわけだし、アイツだつてアイツなりに悩んでいるはずなんだ。俺ばかり、立ち止まってもいられない。それに、リーダーになれば、ただの平よりかは遠山と関われる機会も増えるはずだ。

「受けるよ。まだ決まった訳じゃ無いんだろうけど、心構えはしとく」

「そつか、ありがと。引き受けてくれて」

「気が早すぎないか?」

「そんなことないわよ。葉月さんだつて佐藤君の仕事ぶりはちゃんと評価してるし」

・・・あの人、そんなことするタマか?

どうせ自分の周りを好みの女性で固めてるの、あれ絶対わざとだろう。

そんなこと、今更言つても仕方がねえからもう気にするだけ無駄か。

半分諦めながら新しいタバコを取り出して火をつける。

「あのね、佐藤君。一つお願いがあるんだけどいいかな?」

「何?」

「せっかくだからこの機会に」

遠山の方に吸った煙が行かないように吐きながら聞き返すと、とんでもないことを言ってきた。

「りんって呼んで」

「・・・っ！・・・っ！」

その言葉を聞いたとき、吸っていた煙が逆流して口から思いっきり吐き出してしまふ。当然むせたので、何度も咳き込んだ。

「佐藤君っ。佐藤君、大丈夫!？」

な・・・なんだコイツ、いきなり突拍子もないことを・・・。

いきなり咳き込んだ俺を心配したのか、背中をさすってくれる遠山に俺は尋ねた。名前で呼び合うなんて男女の間じゃあまりよろしくないんじゃないのかよ。

「・・・なんでそうなるんだよ」

「えっとね。その、気分の問題っていうか・・・次の作品の開発も心一つにしたいって言うか・・・だから、それで——」

「?」

とりあえず、遠山なりの理由を聞くため、呼吸を整えてからもう一度タバコをくわえた俺は彼女の話の話を伺ってみると、

「私は佐藤君のこと、弘樹君って呼ぶっ」

「・・・っ！・・・っ！」

さつきよりのとは比べものにならない言葉が俺を貫いて、俺は肺に溜めていた煙をまた吐き出してしまった。それも、さつきよりも盛大に。

「む、むせるならタバコ止めればいいのに・・・」

また遠山は俺の背中をさすってくれる。いや、違うんだ遠山、別にそういんじゃない。ただお前のそれは色々俺の心臓に悪いんだ。もつとも、そんなこと、本人に言えるわけないし。

「すまん。俺、昔から下の名前で呼ばれると喘息が出るんだ」

「まあ、そうなの・・・私ったらごめんね」

お前はそんなありもしないようなウソを信じるなよ。

「あの、コウちゃんや佐藤君とはもう7年も一緒に働いてるのに名字で呼び合うのってなんかよそよそしい・・・」

「ま、それはわかった」

別に断る理由もないし、それこそ本人がそうして欲しいならなおさらだ。俺はなし崩し的に遠山の提案を受け入れた。といっても、これからはコイツのこと、名前で呼ぶのか。それはそれで胃に悪そうだな。

「よかった。私、何年ぶりかしら名前で呼ばれるの。男の子の『友達』に」

——『友達』に

——『友達』に

『友達』に

遠山から発せられた言葉が、まるでエコーのように頭に響いてくる。

「・・・お前、わざと言ってんじやねえだろうな？」

「？」

●
ひふみ視点

私は今日の『フェアリーズストーリー3』の打ち上げを開発中からずっと楽しみにしていた。

なぜなら、今日この場所にはムーンレンジャーの声優さんが来てくれている。今作のヒロインを演じてくれたおかげで、私はライブや握手会なんかよりも近く彼女に会えることができるのだけど・・・

「あのくサインいただいても大丈夫ですか？」

私は声優なんていうまぶしい存在に声をかける勇気なんてないため、こうして青葉ちゃんに頼んでもらい、青葉ちゃんの背中に隠れて待っている。だって、緊張するし、純君とははぐれちゃったし・・・

「大丈夫ですよ」

ピンクのショートカットを赤色のカチューシャで留めている彼女を間近で見ると、やっぱり本物だ。ライブで見るとよりもずっと近い。しかもすごく綺麗な人。お人形さんみたい。

ああ、近くで見ると思ってる以上にまぶしく見える。やっぱり緊張してきた・・・。

「さあひふみ先輩！」

で、でもせつかく青葉ちゃんが手伝ってくれたんだし、こんなチャンス滅多に無いし、勇気、出さないと……。

「あ、あの、ムーンレンジャーから……ファンで……」

「わっ、ありがとうございます！」

青葉ちゃんに背中を押された私は勇気を振り絞って、色紙を前に出しながら彼女に話しかけると、彼女は笑顔で答えてくれたあと、手でハートの形を作って、

「メガ粒子レクイエムシユート!! ですね？」

「……!」

思わず言葉を失ってしまう。

まさか生のボイスで『メガ粒子レクイエムシユート』の台詞を聞けるなんてっ。やっぱりアニメで録音された声よりも迫力がある。

すごいっ。こ、この仕事してて本当に良かったっ！

そのまま彼女は私の色紙を受け取ると、慣れた手つきでペンを走らせる。

「私、実は無印のころからこの作品のファンなんです。だからオーディションの受かったときは嬉しくて」

「そ……そうなんですネっ」

今までなら、緊張や興奮のあまり話すことさえできなかつたけど、少しずつ話すのになれてきたおかげで相づちくらいなら打つことができる。

これも、青葉ちゃんや、純君と付き合うようになったからかな。

「あと、今作のBGM、私、大好きなんです」

あ、純君の作った曲のことだ。私も純君の作った曲は気に入っているのが多いから、少し彼女とシンパシーを感じることもさえできた。

私はグラフィック専門で音楽にはあまり詳しくないけど、とりあえずお礼を言ってから色紙をもらった。返してもらったそれには彼女が書いてくれたサインが記されている。

さつきまで彼女が触れていたこともあって、不思議なオーラさえ感じる。これを手にしていると思うと、不思議と顔が緩んでしまうのを

実感する。

サインとプロのパフォーマンスを間近で体験した私はこのうれしさを誰かに自慢したくなかった。

いつもなら一人で抱えて思い出に浸っていたけど、今は違う。それを真っ先に話したい人がいる。青葉ちゃんと別れた私は会場の中でその人の姿を探す。しばらく周囲を見渡すと……いた。

息が詰まるくらいに溢れてた人並みの中で、白髪の彼を見つめる。

純君だ。最近恋人になった大切な人。すぐに声をかけようとしたけど、私は足を止めてしまった。

「いやあしかし、新作はかなりの反響のようで」

「ありがとうございます」

「確か、今回は一人ですべての楽曲を手がけたとか、どれも素晴らしい曲でしたよ。サントラの売り上げも上々」

純君は人と話していた。それも大勢の人。どれも恰幅の良い男の人。歳も敦さんよりか老けていると思える人達の真ん中に、彼はいた。

どうしよう。話しかけられる雰囲気じゃ無いよ。

「いやー流石、——トの名は伊達で——ませんな」

「演奏——きなくと——の表現力。素晴——才能です」

「……いえ、それほど」

彼が会話をしている相手はとても褒めちぎっているように聞こえるけど、どこか彼を見下すような口調にも聞こえてしまう。

なんだろう、すごく嫌な感じ。胸の奥がざわつく。

純君と恋人になる前から感じていた違和感。

それは、たまに怖い顔をする事。

何かに怯えていて、それを否定するために必死に取り繕うその顔。

そんな顔を見るたびに心が痛む。

今もそうだった。あの人の前では、きつとそういう表情を浮かべてるんだろうな……。

でも、どうして？ あんなに頑張って作曲をして、売り上げにも貢献しようとしてるのに……。

「では、次の予定があるので、私はこれで失礼します」

「ええ、またよろしくお願いします」

「はい」

あの人たちは純君とどんな関係なのだろうか。

そんなことを考えながらそのやり取りを見てみると、彼らはその場から離れていった。

たぶんあの人達は純君のお仕事に関係している人。多分、レコード会社の偉い人達なのかな？

でも、だとしたら……。

あの人の態度が妙に引つかかる。まるで、息子の才能を認めたくない親みたいに思えた。

もちろん純君とは血のつながりが無いし、年齢だって離れているから親子ってわけじゃないんだけど、それでもあの人純君を下に見ているような気がしてならなかった。

「純君っー！」

「っー！」

彼らが見えなくなってから私は彼に話しかけた。彼は肩を大きく揺らす。

「あ、滝本さん」

振り向いた彼を見ると、やっぱりいつもの笑顔を向けてくれる。

でも、私は見てしまった。彼の手が震えていたのを。それが、あの人たちに対する恐怖からきているものだということはすぐに分かった。

でも、何で、こんなに怖がらないといけないのかな。

私が知っている純君は、誰よりも優しく、真面目で、努力家で、私なんかには勿体ないくらい素敵な人で、なのに、なんで、今日の前にいるあなたは、こんなに辛そうにしているの？

純君が何をしてきたのか知らない。

もしかしたら、それは彼にとってそれだけつらい過去かもしれない。

彼はそれを必死に隠してる。私を傷つけまいと。

でも、悲しくて仕方がない。だってそれは、私を頼ってくれていないということなのだから。

「あ、それ。あの声優さんのサインですよ？　僕も貰ってこようかな」

「う、うん。凄く、綺麗、だったよ」

気丈に振る舞う純君は誤魔化すように私の手にある色紙を見てそう言った。

純君は、とても優しい人。私を嫌いにならないと、好きだと言ってくれた人。

なのに私は彼になにもできない。

……私、純君の彼女失格なのかな？

● 青葉視点

「あの、葉月さん。あと一ついいですか？」

——少なくとも今の八神さんは、私の尊敬できる上司です！

そう言つて八神さんを迎えに行つた私は、会場に戻つてきたときまた葉月さんに声をかけた。八神さんが一度ADになつて一度失敗したことをさつき葉月さんから聞いたばかりだ。いても経つてもいられなくなった私は八神さんのところに向かつたのだ。

……だけど、もう一つだけ気になること、聞きたいことが、私にはあつたのだ。

「ん？　まだ何か聞きたい様子だね。涼風君」

「えつと、その……あ——」

「敦君のことかい？」

私の口調と合わせるように、葉月さんは私の聞きたいことを言ってくれた。

「……………」

「その顔は、正解のようだね」

そう、私が聞きたいこと。それは敦さんのこと。

今聞くようなことじゃないのはわかっているけど、それでも聞かずにはいられなかった。八神さんのこともあるけど、敦さんのことは私

が入社したときからずっと気がかりだったのだ。

だから――

「アイツの童貞を喰ったのは私だよ」

「!？」

その言葉に、飛び上がりそうなほどドキツとしてしまう。

え……ええ!?! ど……童貞!?!

思わず言葉を無くしてしまった私を葉月さんは少しからかうように笑いながらなだめてくれた。

「ハハハ、別に驚くことでも無いだろう？ 成人の男女の恋愛とい

うものはそういうものさ」

「そ……そういうものなんですか」

ひふみ先輩のこともあるし、やっぱり大人の恋愛って色々すごいんだ……。

改めて感心させられるけど、今はそんなことに驚いている場合なんかじゃ無いんだ。

「私、敦さんの家に行った時、あるディスクを見つけたんです。それが八年前に作られていたフェアリーズストーリーっていうタイトルだったんです。それからずっと気になって。だから、そのディスクのこと、それと緑さんっていう人のこと、なにか知っていることがあったら教えてくれませんか？」

「……」

葉月さんはちよつと目を丸くして驚いた顔をしたけど、すぐに元の余裕のある表情に戻った。

「もう彼女のことも知っているのかい？ 敦君なら絶対に話したがないことだと思ってたけど」

「あの、ゲーム展のときに渡邊新一さんって言う敦さんの知り合いがそんなことを話していたので」

「そうか。アイツもツメが甘いのか、それともわざとかいずれにしても私と同じものを感じたのかもね」

「同じもの？」

ゲーム展の時に、新一さんから受け取った名刺を葉月さんに見せる

と、葉月さんは納得して私にその名刺を返してくれた。

けど、最後の言葉が気になってしまい聞き返してしまったけど、葉月さんははぐらかしてくる。

「いや、すまない。こっちの話だ。それで本題に入ろうか」

次の瞬間、葉月さんの視線は、いつもの様子ではなく今まで以上に真剣みを帯びているというか・・・少なくとも今まで話したことのあ
る葉月しずくという人物とは違う雰囲気醸し出していった。

「先に断っておくけど、この話は敦君なら君には絶対に話したくないことだ。特に、八神君に憧れてこの会社に入ってくれた君には、ね」
「・・・」

「その沈黙は、覚悟の上ということだね。いいだろう」

その雰囲気は圧倒されて、固唾を飲んだ私だけど、それでも聞かなくちやいけないことだと私は葉月さんの言葉にじつと耳を傾ける。

「君の疑問に対して、全ての答えになることを話そう」

「はい・・・」

「八神が入社する前、一人の女の子がこの会社にはいた。彼女の名前は寿ことぶき。縁みどり。彼女は」

彼女の名前は、私が直接、敦さんから『話したくない』と言われた人のこと。それがこの人の名前なんだ。

葉月さんは休まず言葉を紡ぐ。それは私にもう後戻りはできないぞと代弁するように。だけど、そこから続く葉月さんの言葉を聞いたとき私の視界は大きく揺らいだような感覚に襲われた。

そんな・・・ウソだ。そんなことって――

● 敦視点

司会を務めていたはずの遠山が、佐藤を追いかけるとか言って会場を出たせいで、後に控えていたビンゴ大会を俺が仕切る羽目になってしまった。元々花男に頼んだおかげで見た目はいつもとは違うのでビジュアル的には問題無いのだが、猫の皮を被るのは疲れる。

ひとまず休憩したくなった俺は喫煙所とは違い、ひとまず店の外に出た。なんとなく外の空気を吸いたくなったこともあったが、それ

上に一人になりたかった。

いや、俺はきつと奴が来ることを待っているのだ。

『フェアリーズストーリー3』が完成し、その作品が成功したことが
確実なものとなった今、奴は必ず俺に声をかけるはずだ。そのとき、
俺はどうしても奴に涼風達を近づけたくなかったんだ。

「……」

タバコに火をつけた俺は、煙を肺いっぱい詰めてそれでそれをはき
出す。はき出されたそれはガラガラとした人類の営みによつて作ら
れた光で包まれた夜の街に解けていく。

いつかのようにブーツと眺めているわけではない。俺の目は、アル
コールが入った夜にも関わらず冴え渡っていた。

——そして、俺が待っていた時はやってきた。

「いい夜だね。敦君」

「……なんだい社長。この会社の代表者が会場を離れるなんて言語
道断だろう？」

吸いかけのタバコの火をおろしたての靴で踏みけしながら、俺は声
をかけてきた男を睨む。背広を赤いネクタイで締め、黒いコートを身
に待っているこの男こそ、我がイーグルジャンプの社長、本人だ。

「確かにそうだが、今回の開発の一番の功労者をねぎらわずに組織
の長という者は勤まらないよ」

「よく言うぜ。どうせ今回のことも全部アンタの計算通りなんだろ
？」

「そんなことはないよ。すべてそれが合理的だと判断したからこ
そ、私はこの作品が成功したと信じているよ」

「その合理的という考えには、一人の社員の命を捨てることさえも
合理的だというのか？」

コイツが口癖のように口ずさむこの言葉を聞いたとき、抑えていた
ものがあふれてしまいそうになる。だが、そんなことをしても意味は
ない。なぜならば、

「敦君。君はまだ誤解しているようだね。確かに、緑君の身に起
こった不幸は悲しいものだ。だがそれは私とどう因果関係があるの

かね？」

そう、少なくとも、奴の言うとおり、何の因果関係もない。アレは一言で言ってしまうえば不慮の事故でしか無い。ただ、アイツをその不幸の連鎖に陥れたのは・・・間違いない奴だ。

「・・・なら、せつかくだから当てる差し上げましょうか？ さつき、葉月と八神がADになるかならないかでわめていたのを見かけたんでちよつと思ひ出しましてね」

「・・・聞こう」

わざと口調を変えた俺の詭弁に、奴は耳を傾けざるを得ない。少なくとも、ここで言い逃れをしたりするような人間では無いからだ。

『フェアリーズストーリー』がヒットして、入社してわずか一ヶ月の八神の成長が目を見張るものだった。だけど、それを面白く思わない連中は五万といた。経験の少ない青二才とは言え、一度自信の付いたアイツを止めることはできない」

「・・・」

「だからアンタは、あえて八神の出世の速度を速めたんだ。いくら圧力をかけたところでアイツは止まらない。自分がいくら傷ついたって自分の目標のためならば構わない。それが、八神コウという人間の本質だ」

一つの目標のために死にものぐるいでなんでもやる。周囲と対立したって実力でねじ伏せるんだ。だが――

「だが傷つくのが、自分では無く他人なら別だ。八神を、『フェアリーズストーリー2』のADにすることによって、アイツと周囲を衝突させる。そしてわざと、入社して間もない新入社員と衝突させるように仕向けたんだ」

最終的に命令したのは葉月だ。おそらくアイツは、八神ならその過程で成長できると信じていたのだが、賭けはコイツに分があったのだろう。

「そして結局、その社員は半年で辞めた。言い方は悪いが、八神のせいだな。当然、ADとしては失敗だ。あのときADの役割がスムーズに俺に落ち着いたのだから、元々失敗する前提だったんでしょ？」

八神に対する周囲の人間の溜飲を下げるために、出る杭だった八神を打つために」

いずれにしても、あのまま八神を野放しにしていれば最悪の事態になっていただろう。いくら自分が傷ついても構わないという本質は、所詮表面のハリボテに過ぎず、遅かれ速かれ崩れ落ちる。

だがそれがもし八神の存在が大きくなってからでは？

八神以外の戦力を、八神本人が食いつぶしてしまっただ後は？

言わずもがな、この会社は崩壊する。だからそのハリボテを壊したんだ。まだ手の施しようがあるうちに、八神がまだ、イーグルジャンプの主力になる前に。

「そのため5年前、アンタは入社して間もない新入社員を一人、八神の当て馬にした」

俺は社長の目を見る。それはまるで、獲物を刈り取る蛇のようなその目を。

「そして8年前には『フェアリーズストーリー』の発案者であり、キャラクターデザイナーだったアイツの——緑の夢を、アンタは殺したんだ」

個人面談

純視点

「……えつとあの、葉月……さん？」

朝の時間に面談の予定だった僕は、言われた通りの時間に打ち合わせ室にやってきたのだが、部屋には行ってきた矢先、異様な雰囲気の中葉月さんが待ち構えていたので身構えてしまった。

「気にすることはないよ。増田君。さ、席に座りたまえ」

「もう、葉月さん。そんな威圧しないでください。面談になりませんよ」

妙に饒舌な葉月さんを、隣に座っている紅色のセミロングの女性に落ち着かせているを見て少し安心するけど、相変わらず葉月さんに対して気を抜いてはいけないと直感してしまう。

「えつと、失礼します」

とは言っても、逃げ出すなんてできない僕は、意を決して椅子に腰掛けて葉月さんたちと向かい合う。女性が二人もいる空間なんて本当なら緊張で動けなくなりそうだけど、今回の場合、別の緊張のほうが強い感じがする。

でも、先に口を動かしたのは、葉月さんでは無く隣の女性だった。

「増田君と話すのは、発売日以来になるけど改めて自己紹介するわね。私は遠山りん。次回の開発からプロデューサーをさせてもらうことになったから面談に参加させてもらってるの」

「あ……はい。よ、よろしくお願いします」

ああそういえば、この人、僕が発売日に滝本さんと一緒にお店に並んだあとに、滝本さんに話しかけていた人だ。プロデューサーってつまりこのチームでも相当偉い人ってことになるのか。うわ……そう考えると余計緊張してきた。

「それじゃあ本題に入ろうか。とりあえず、今回の開発の感想や反省、思ったことならなんでも聞かせてくれ」

形式のような挨拶が終わり、本格的に面談が始まる。前にもこういった機会はあったけど、今回はやっぱりいつもと違う気がする。

「・・・そうですね。仕事とは関係ないことも多かったですけど、今回の開発は・・・僕にとつて色々初めてなことが多かったです」
隠すなんてことができるほど、語彙力に自信がない僕は思ったことを正直に話した。

正直言つてこの半年間、本当にいろんなことがあつた気がする。
まさかSNSで話していた人がまさか同じ職場の人で、それが滝本さんだったりして。

滝本さんに自分の作った曲を聴いてもらつたり、七年前からずっと目を反らしていたピアノと向き合つて、なぜか少しだけ弾けて、そのことで滝本さんにちよつと励ましてもらつたりして、一緒にコスプレとかしたりして、滝本さんと恋人として付き合うように、キスしたり、デートしたり、手を繋いだり――

「・・・」

なんか全部滝本さんのことばかりなんだけども!!

ここ半年前のことを思い出しているといたまれなほど恥ずかしくなる。記憶のページのどこかに、必ず滝本さんがいて、彼女のことを考えていたことばかり覚えている。

何これ・・・思い出しただけでメチャクチャ恥ずかしい!

「やっぱり、ひふみちゃんとお付き合いするようになって色々変わったのかしら?」

「――っ!」

遠山さんが突然、思っていたことをえげつないほどにストレートに抉ってきたせいで、僕は動揺を隠しきれなくなった。ついオーバーなリアクションまで取ってしまうほど。

そして、すぐに気づく。滝本さんの名前が出てきた途端、葉月さんの目の色が変わった。

「ふくん。やっぱり噂は本当だったんだねえ」

「葉月さん・・・?」

「ふくん? ほくん? へえ〜?」

ああ、なんで葉月さんがこんな風になつてのかわかる。
花男さんが言っていた。

葉月さんは女の子が大好きなんだけど、特に滝本さんが一番のお気に入りのようなのだ。葉月さんからしたら、花男さんと同盟を組んでいるのは十中八九これが目的なんだろう。それが僕みたいな男と付き合うようになったのだからこうして異様な雰囲気になっているのだろう。

うわあ・・・これ本当に居づらくなってきたぞ。

「それで、実際どこまでやったんだい？ ん〜？」

完全に圧迫面接のような圧力で葉月さんは僕に迫ってくる。

っていうか、どこまで行っただかって・・・そんなの言えるわけ無いじゃないですか！

しかも余計なこと言ったらそれはそれでとんでもない目にあう気がする。

「もう葉月さん、あまり増田君をいじめないでください」

あまりに暴走しすぎた葉月さんを見かねた遠山さんが、僕に助け船を出してくれたおかげで少しだけホツとした。

「だって仕方ないだろう」

「だってじゃありません！ 全く、いい加減にしてください。そんなんだから青葉ちゃんにもあんなこと言われるんですよっ」

・・・なんか、毎度毎度思うけど、この会社の立ち位置って上司と部下の力関係が逆転してしまっているような気がする。葉月さんがこうしてメンバーの意見をちゃんと聞いているからなのか、それとも自分が好き勝手やっている分、周りにも好き勝手やらせているからなのか。

それと佐藤さん、面談で何があっただろう。割と面識があつて話すこともあるから気になるんだけど。

「ごめんね、増田君。葉月さんちよつと変わってるけど気にしないでね」

「あ・・・はい」

遠山さんに横槍を入れられたせいで、どこか不満げな葉月さんではあるが、しぶしぶ面談を続けるようになったらしい。

「それじゃあ、増田君。目標とかある？ やりたいこととか」

「今後のこと・・・ですか？」

「うん。何か新しいことにチャレンジしてみたいとか、そういうの、ない？」

「……」

その質問に、僕は沈黙で答えてしまう。

「……そう、だよな。いきなり言われても困っちゃうか」

「いえ、あの」

「ごめんね。変な事聞いちゃった」

「……」

申し訳なさそうな顔をする遠山さんを見て、僕はますます何も言えなくなってしまう。

「どういうジャンルの曲を作りたいとか、そう言うのでも良いの。増田君の曲はどれもすごく好評で、サントラの売り上げも良い数字が取れてるし、今のままでも十分すぎるくらいだから」

「……ありがとうございます」

確かに、僕で作る曲の多くはアニメ関連だったり、ゲーム関連のものだったりする。

理由は単純。この業界は僕の名前を知らない人が多いから。それ以外の場所で、僕が音楽に関われることはできなかったから。

「ただ、一応参考までに聞かせてもらってもいいかな？ 増田君はどんなジャンルの曲を作っていききたいと思ってるのかなって思って」
「……」

遠山さんの言葉を聞いて、一瞬、脳裏に浮かんでしまった。

『ピアノ』

「増田君？」

「あつ、すみません。何でもありません」

無意識のうちに口に出していたらしく、慌てて誤魔化すように笑いながら手を振った。

「そっか。まあ、増田君も色々考えてる時期だと思うから無理には言えないけれど、もし良かったら教えてほしいな」

「はい。わかりました」

結局、僕は曖昧な返事しかできなかった。

もちろん、遠山さんが悪いわけではないのだが。それでもどこか後ろめたさを感じてしまう。

だけど、今はこうすることしかできない。

——僕自身が、まだ迷っているのだから。



面談を終えた僕は小休憩もかねて屋上に出て一息つく。冬が秋空のせいもあって、屋上だと少し冷える。冬が近づいてくるのが肌で感じる。だけど、今のままじゃ仕事にならないのでとりあえずしばらくはこうして雲で覆われて明るさを無くしてる町並みを眺めていた。

「…」

僕のやりたいたいこと。本当はわかっている。でも、それを口に出すことができなかった。

自信が無い。だって、僕はすでにソレを失っているのだから。

作曲だって、僕がやりたいと思って始めたわけじゃない。僕には音楽しか無い。でもピアノが弾けない僕が生きていくためにはそれしかできなかったからだ。

だから、自分の未来のことについて考えられないんだ。

——いやあ、流石元天才ピアニストの名は伊達ではありませんな

——演奏などできなくともあの表現力。素晴らしい才能です。

祝賀会の時に言われた言葉が僕の耳を支配する。

あの人達が見せた憐憫の目。あの時と同じだ。僕がピアノを弾けなくなってしまう時にみた父の目と同じ。

あれを思い出すと身体が、心が萎縮する。

——そうだ。お前は出来損ないだ。

——何も生み出せない者に生きる価値など無い。
うるさい。

ああ、まただ。

あの呪いの言葉が僕の耳に入る。

父の声。僕を追い詰めたあの憐憫のまなざしと同じように映った。怖いんだ。前に踏み出すことが。また誰かの期待を裏切ってしまった。

う。そんな恐怖が僕の足をすくませていた。

「はあ…」

ダメだな。せっかく滝本さんのことを好きになって、想いが通じ合って、恋人として付き合うようになったのに、僕の根っこは結局何も変わってない。

ちよつとはマシになったと思ってたのにな。と、自分のけなすようにため息をつく。祝賀会の時も、滝本さんに僕の過去を悟られたかもしれないと思うと尚更。

地元を飛び出した夜。これでいいんだと夜行列車に飛び乗って、窓の向こうから離れていく故郷を眺めていたときからずっと——これでいいのかと、不安になる。

「あら、祝賀会以来、敦君だけじゃなくて純君も荒れ模様ね」

後ろから、無理矢理女性のマネをした声が聞こえる。

「花男さん」

「なにかあったの？」

「それは…」

僕は花男さんに事のあらましを話した。

この人は僕のことを知っている。この会社で、僕がピアノを弾けないその理由を知っている数少ない人間だ。他に知っているのは先輩と葉月さんだけ。

「なるほどね。確かに、アナタはもう立派よ」

「それは・・・そうなんですけど」

「自信がない？」

「はい」

弱々しく答える僕の肩を、花男さんは優しくポンツと叩く。いつもは変な事ばかりしてる人だけど、こういう時すごく頼りになる。普段からこうしてくれたらいいんだけどなあ。

「時間はまだあるわ。これから社員旅行もあるんだし、楽しみながらゆっくり考えなさい。音楽家はインスピレーションのために旅行とかにも行くってよく言うじゃない」

「そう・・・なんですけどね」

社員旅行の話題が出たとき、ただでさえ右肩下がりの僕の気持ちさがさらに落ち込んだ。

「あら、嬉しくないの？ 旅行よ？ しかも北海道。カニ、スキー、温泉、楽しいことだらけじゃないっ」

「あの・・・花男さん」

「・・・もうこの際正直に話そう。」

「実は僕、道民なんです」

「ええ!？」

「だからあまり大っぴらに喜べないというかなんとというか……」

「そっかー。そうよね。うん。ごめんなさい」

素直に謝る花男さんを見て少し気が楽になり、僕は苦笑した。

やっぱりこの人に隠し事はできなさそうだ。

「ま、でも、自信持ちなさい。アタシはどんな答えが出てても応援するから安心して」

「ありがとうございます」

「それにい、旅館に泊まるんでしょお？ だったら、ひふみちゃんの湯上がり姿、見れちゃうわねっ！きやく!!」

両手を頬に当てて奇声を上げるその姿はどう見ても変態にしか見えなない。

「……そんなこと考えてたんですか」

「そりゃあねえ？ 恋人同士の男女が2人。そして旅先の非日常感と開放感。こりゃあ、やるっきやないでしょう!」

「その発想が既にアウトです。訴えますよ」

「冗談、じよ・う・だ・ん♥」

全く反省の色を見せずに舌を出す花男さん。そんなんだから佐藤さんに殴られるんでしように。

ダメだこの人……。

決意ですが、何か？ 前編

佐藤視点

そろそろ昼飯か。

他のチームの手伝いくらいしかやることのない俺たち背景班は、昼飯時になると俺以外のメンバーはこぞつてどこかへ行く。ま、元々背景班は俺以外に男がいないから孤立するのは当たり前なのだが。

いつも通り自分で作った弁当を片手にカフェテリアへ向かう。

・・・そういや、今日は午後から面談か。

イーグルジャンプには、作品が一つ完成すれば、ディレクターとの面談を行うようにしている。開発の感想とか、今後の昇進についてとか、そういうのは今時どこでもあるものなのかはわからないが、この時期になると一部の時間だけ戦争になるんだよな。

敦さんと葉月さんが喧嘩するのだ。あの二人、もうとつくに別れるはずなのによくあそこまで派手に喧嘩できるよな。

この前の開発だつて――

――てめえまた仕様書弄りやがってよ！ しかもこの前徹夜で修正したところじゃねえかふざけんな!!

――仕方ないだろう！ そうでもしないと面白くならないんだよ!!

――それを面白くするのがてめえの仕事だろうが！ 怠けてんじゃねえよ！

――それこそクリエイターの仕事だろう!? 妥協して作った作品がなぜユーザーに評価されるんだ!!

――ぐるぐるるるるる！
――がるるるるるる！

あのかきは殴り合いに発展してお互いの顔面に見事なクロスカウンターが決まったんだよな。

ま、俺には関係ねえか。なんやかんやああ言いながらもちゃんと作品は作ってるんだし。

それよりも、俺は今日話し合うであろう背景班リーダーの話について

てだ。あの思いつきでなんでもやる葉月さんのことだからもしかしたら降ろされる可能性もあるのだが、それも含めてこれから話し合えば良いこと――

「――もずくちやくん。もふもふさせてえ〜」

・・・今、向こうの廊下の奥で何か聞こえたような。いや、確実に耳に入った。この母性的な声は間違いない。

俺はそつと、壁の陰に隠れて様子をうかがう。

廊下の先には、予想通り、遠山がいた。なぜかしゃがんでいるようにも見えるが彼女が抱いているもの、それは葉月さんが会社に連れ込んできているデブ猫、もずくだった。

もずくは抵抗こそしないが、ちよつと嫌そうな鳴き声をあげている。

「うう〜午前中の葉月さんと宮本さんの板挟みにあつた私をなぐさめてえ〜」

どうやら、遠山は午前中から面談のようだったらしい。しかも敦さんと葉月さんか。そりゃあ疲れるだろう。プロデューサーも大変なんだな。

つーか、遠山つてあんなふうになるんだ。八神の前でも見せたことないのに。

・・・なんでそう考えるんだよ俺は。

「はあ・・・暖かい。なんかね、宮本さんと葉月さん、いつもの喧嘩じゃ無くて大変だったの。なぜか青葉ちゃんの名前が出てきた途端ね、宮本さんが豹変して葉月さんに怒鳴りかかったの」

なんだそれは？

思わず遠山がもずくに話す言葉に耳を傾けてしまう。そりゃ確かに、敦さんと涼風が一緒にいることはよく見かけたが、一体何があつたんだ？

そもそも、敦さんが、なんでつたつて涼風のことと葉月さんに怒鳴るようなことがあるんだ？

「葉月さんが言う・・・緑？　つて人が、なぜか青葉ちゃんに似てるっていったんだけど、誰なのかしら？　そんな人、会社で今まであつた

こともないけど」

「・・・どうやら、俺にもよくわからんことのようなだ。」

聞いてもさっぱりわからん。葉月さんも敦さんも、長いこと会社にいるのは確かだがよくわからんことが多いんだよな。

ていうか、なんで敦さんはあんな働き方して生きてられるんだろうか。

「葉月さんには、コウちゃんや他の子達にはなるべく話さないようにって言われたし、なんなんだろうホント」

まあ、盗み聞きつてのも趣味が悪いし、ここはひとまず自分のデスクで食うか。遠山だって昼休みくらいはもずくにくらい甘えてもいいだろう。

足を来た方向に向けようとしたとき、廊下の奥からもずくのあまえるような鳴き声が聞こえた。

「ん〜？ そんなに甘えた声で、どうしたのかにやん？ 遊びたいにやん。それじゃあ何して遊ぼうにやん」

そう思った矢先、とんでもない台詞が耳に飛び込んできて我を失いそうになる。音を出して気づかれてしましそうになり、心臓が止まりそうになったが・・・。

止めてくれ遠山。お前のその声で猫語は俺に効く。止めてくれ。

とにかく、こんなところにいられるか。俺は戻る。そう・・・したかった。

俺の服の中にしまつてあるスマホから発せられた音が廊下に響き渡る。

「!？」

しまつ・・・携帯の音消しとくの忘れてた！

「え・・・さ、佐藤君？」

さすがにその音に気づいてしまった遠山は、恐る恐るこつちに振り向いてくる。その様子は、まるで後ろに鏡の前に幽霊が現れたかのような形相だ。

「と・・・とうや——いや、りん・・・こ、これは・・・色々」と

自分でもどう弁明すればいいかわからなくなり、結局何も言えなく

なっていました。

「その・・・どこまで見てたの?」

遠山の声は震えていて、それがより一層俺の焦りをかき立てて正常な判断能力を鈍らせていく。

「いや・・・その、さつき通りかかっただけで」

「さつき!」

「あつ・・・しまつ・・・」

そうだった。さつきと言えば、それこそ遠山が猫語でもずくとじやれていたところじゃないか。完全に失言した。もうこれ以上誤魔化せきれない。

遠山は抱いていたもずくなど、とうに投げ捨てそのまま耳まで真っ赤にしたままうずくまってしまう。

「ん~~~~~~~~っ!」

そこから、半刻ほどたったあとのこと。

うずくまった彼女はようやく落ち着いて話を聞いてくれる状況にまで回復してくれた。なお、その時間で俺の昼休みが消し飛んだ訳だ
が。

昼食を早めに済ませ、開発後の面談に向けて打ち合わせ室へ向かっている。そこは会議室と比べると小さく、簡単な仕切りしかない場所だが、少ない人数で話し合うのにはちょうど良い場所だ。

「ごめんね、佐藤君。あんなところ見せて」

「いや、別に」

「お昼ご飯も急いでもらったし、面談の時間、ずらしてもらえるよう葉月さんに相談しておいた方がいい?」

「気にするな」

「そう? なら、それで良いのだけれど」

実際、彼女もさつきまで敦さんと葉月さんの板挟みにあっていたのだ。これ以上気を遣わせるわけにはいかない。本人は気丈に振る舞っているが、人と関わる機会は今後も増えている。それだけ今回のようなことは発生しうる。

彼女の下で働くのなら、少しでも負担を減らしてやりたい。祝賀会

の時は動揺したけれど、プロデューサーになる彼女の背中はやんと押してあげたい。

「あ、それと、ちゃんと名前でも呼んでくれたね」

「まあ。一応はな」

「でも最初は間違えてた」

「……すまん」

「気にしないで。でも、これから呼び慣れてくれたら嬉しい」

そうはにかむ遠山とともに、打ち合わせ室に差し掛かる刹那、俺は不意にあることを思い出したので、彼女に報告することにした。

「そうだ、りん」

「なに？ 佐藤君」

「給湯室のコーヒーなんだが、減ってたからもう注文して……」

俺は、打ち合わせ室にいる存在が視界に入った途端、さきほどまで盛り上がっていた空気が一気に冷めたのを感じた。というか、これは俺個人が勝手に思ったことだ。

なぜなら、今打ち合わせ室にたむろしていたのは葉月さんと花男さんだったからだ。

二人は俺と遠山を見ている。片方は口をあんどりと開けて、もう片方は面白そうなおもちやを見つけた子供のような目をしている。

「ところで遠山さん。今日は天気が良いですね」

「さ、佐藤君。何か変よ。ほら、りんって呼んで」

「いえいえ、遠山さん」

「佐藤君！ 何かあったの!? ねえねえ!」

「と、遠山君！ 何で佐藤君に呼び捨てなんて許しているんだい!」
ああ、やっぱり聞かれていた。

祝賀会の時に話していたから彼らが知るよしも無いのだが、それにしたって少しくらい穏やかして欲しいものだ。

大慌てで席を立った葉月さんに迫られて、遠山も少し動揺している。彼女からしたら意味がわからんは無したが、二人にとってはこの上なく面白いことなのだ。

「え？ 葉月さん。佐藤君は」

「八神の気持ちはどうしたんだい!? こんな柄の悪そうな男に呼び捨てを許して良いはずが無いだろう!」

「アンタひでえな」

うん。この人多分俺をリーダーにする気ねえな。

本当なら俺らなんてとつと外してハーレム状態にしたいはずなのだろうが、チームが回らないから手放せないだけなのだ。

と、俺が言っても自惚れに聞こえるだけか。

「葉月さん。佐藤君のこと悪く言わないでください。確かに佐藤君は、ヤンキーっぽくて変わった髪型だけど」

「…髪型のことは、言ってなくね?」

「佐藤君は同期で、私の友達なんですつ!」

「……」

「大切な『友達』なんです!!」

先日の祝賀会同様、無垢な遠山の言葉が俺の頭に突き刺さる。比喻では無い。物理的に。

それはまるで鋭利なナイフが俺の脳髓に直接突き刺さったように。友達。

俺達は同期で友達。

そう、友達、ともだち、トモダチ、トモダチ。

「ねえ佐藤君。私達、友達よね?」

「……」

「嫌なの!?!」

「イヤジャナイデス…オレタチ…トモダチデスヨネ」

「ならどうして敬語なの!?!」

ああ、リーダーになれば遠山と一緒に働ける機会もあると思って受けた話だけど失念していた。彼女がそばにいるということはこちら言ったことを、受け入れないと言うことなのだから。

「二応、遠山君が話していたとおり、君を次の背景班のリーダーにしたいのは本当だ。君の意思にもよるがね」

「はあ」

その後、また一悶着会ったものの、こうして打ち合わせ室のテーブル

ルを囲んで面談を進めることができています。件のことも、葉月さんの思いつきでご破算になる事もなかった。

「それで、君はどうしたいんだい？」

「受けます。俺も自分の実力を試してみたいです」

「ああよかった。引き受けてくれてっ」

背景班のリーダーになることを喜んだのは、俺では無く、遠山だった。それはまるで、自分のことのように。

それも本当に嬉しそうに笑っている。どこか、彼女の周りに花でも咲いているようだった。

「また3人で仕事ができるのね」

「…そうだな」

彼女の笑みに不思議と不思議と口角があがる。人から見れば無表情に見えるかも知れないが、これでも結構表情豊かに生きている自信がある。主にマイナス方面についてだが。

「……」

だが、相変わらず葉月さんだけは浮かない顔をしていた。

● 面談も一段落付いた俺は、またタバコを吸いたくなくなったから屋上までやってきた。タバコに火を付けて煙を吸う。

まさか次から背景班のリーダーか。前は遠山の隣でサポートに徹していたとはいえ、勝手はわかる。問題は、他のメンバーが話を聞いてくれるかだが。

「ちよつといいかい？」

「葉月さん？」

と、初めての大病に多少不安に駆られていたところに先ほどまで浮かない顔をしていた主が屋上に現れた。

「単刀直入に聞くが、君は遠山君の事が好きなんだよね？」

「……」

今それを聞くのか。

と、呆れ半分、動揺半分。

葉月さんなら知っていても可笑しくないが、それについて俺に直接

何かしてくる事など今までなかったゆえ、身構えてしまう。

「あくまで黙秘するつもりか。まあいいだろう。私も今日のために用意したものである」

というと、懐からプリントを数枚取り出した。何をするつもりなのかと、沈黙で訪ねると、葉月さんはいつもの変なテンションになり高らかに宣言した。

「遠山君ウルトラクイズッ！」

「クイズ？」

「遠山君のことが好きなら、彼女のことをよく知っておかないといけないだろう？ それをクイズで試すんだ。さあ、君の遠山君への愛を見せてみたまえ!!」

こういう変なことを思いついて実行するのは葉月さんの十八番。きっと敦さんもこの調子に何年も付き合わされたのだろう。そりや別れたくなるわ。

「じゃあまずは小手調べ。遠山君の誕生日は？」

「知らん」

「…遠山君の好きな食べ物は？」

「知らん」

「血液型」

「知らん」

「遠山君の足のサイズ」

「知らん」

「好きなアパレルブランド」

「知らん」

「出身地！」

「知らん」

「好きなテレビ番組！」

「知らん」

「っ!!」

全ての問題を言い終えた途端、葉月さんは持っていたプリントをその場に叩きつけた。屋上だったそこは、風もそこそこ吹いており、プリント達は煽られて空を舞って街に消えていく。

「君！ 元々知らないのは仕方ないとして！ 少しは本人に聞けよ!!」

「……」

返す言葉も無い。

自分がそれを聞く度胸もなく、ただ遠山の話聞いていただけなのだから。

それこそ、好みなんて聞いてしまえば気があるとバレてしまいかねない。だから、7年間ずっと言えなかったのだ。

「全く、これじゃあせつかく用意したこれも意味がないじゃないか」「なんすつかそれ?」

葉月さんはまた懐からプリントを取り出した。ソレも数枚。さっきの個人情報満載の内容のクイズと動揺の枚数をだ。

「遠山君クイズを解いたときに出そうと思っていた、八神クイズだ。遠山君といえ、八神だからな」

まあ、敵を知り己を知れば百戦危うからずという言葉もあるが、それを答えたところで何かあるのだろうか。

もうこの下りもうんざりしてきたし、そろそろ仕事に戻りたいのだが。葉月さんは気だるげに読み上げるのだ。

「1問目が八神の誕生日」

「8月2日」

「っ!? け、血液型」

「A」

「得意なこと」

「どこでも寝れる」

「苦手なこと」

「人混みや騒音の激しいところ」

「…休日の過ごし方」

「家でだらだらしている」

「好きな食べ物はっ?」

「遠山の作る料理」

「初任給の使い道!」

「遠山と二人で日帰りの温泉旅行」

「…:君、まさか八神の事が…:!?!」

「違う」

青ざめている葉月さんに喰い気味で否定する。正直、変な風評被害は承っていない。勘弁して欲しい。

「じゃあどうしてそこまで知ってるんだ」

「遠山から、八神の愚痴聞いて覚えちゃったただけっすよ」

7年間。飽きもせず俺に八神の愚痴を話すのだ。それもほぼ毎日。そうすると、大体八神が何しているのかがわかってしまうのだ。

うん、今考えるとヤバいなこれ。ただのストーカーじゃねえか。

というか、八神のプライバシーってもんがあつたもんじゃねえ。

「全く、しょうがないヤツだな君は。どうせアレだろ? 遠山君にフラれるのが怖くて何もできなかつたんだろう。このヘタレめ」

「あ?」

ため息をつく葉月さんの言葉に俺の琴線が触れた。何というか、本能的というか、本来の自分というべきか、どこかに繋がっている俺のオリジンのようなものが、この人にだけは絶対にそれを言われたくないという確固たる反骨心をもたらしした。

「別にフラれるなんて怖くねえよ」

「!?!」

そうだ。怖いのはそんなことじゃない。俺が一番恐れていること。それは、

——男の子の中なら、佐藤君が一番好きっ!

——あら、そうかしら? 私、佐藤君の車の匂い、結構好きよ?

——私は佐藤君のこと、弘樹君って呼ぶっ。

こんなことを平然と話してみせる、

「一番怖いのは本人だろうが!」

「それはそれでどうなんだい!? 君がその気なら私にだって考えがある。私に逆らうと怖いぞー! 怖いんだぞー! それでも好きと言えるのか? というか好きなのかっ!」

「……好きですが、何か?」

「……」

まるで子供のようにまくし立てた彼女だが、ただ一言、そう言っで見せると黙り込んだ。

そうだ、これが俺の気持ちだ。他に何かある?

怖かろうがなんだろうが、惚れてしまったのだ。

例え創造主が俺の存在を否定しようが、人類最強が襲ってこようが知ったことか。

一呼吸置いて、俺は最後の啖呵を切る。

「……もう知らん。干すなり、クビにするなり、やってみろっつーの!」

ここまでではつきりと言われると思っていなかったのか、葉月さんは手を握りしめ歯軋りをする。

「……っ、わ、私は、お前が嫌いだー!!!」

「アンタの気持ちはどうでもいい」

屋上を飛び出した葉月さんの背中を見送ったあと、疲れた俺はもう一本タバコに火をつける。

「……ふう」

煙を吐き出し、また吸い込む。思い返すと、結構ヤバイことを口走ったかもしれない。

勢いでああ言ってしまったけど、自棄になった葉月さんが遠山と八神にバラすかも。

まあどうでもいいか。今さら葉月さん気を使う必要なんてないし。

…若干スッキリしたし。

そろそろ俺も、腹を括ったほうが良いのかもな。

タバコの火を消して、俺も屋上を出る。不意に、足元に柔らかい感触を感じた。

「んなあ〜」

「なんだもずくか。葉月さん、置いていきやがったな」
俺は彼女のデブ猫を抱えてオフィスへと歩み始めた。

●
りん視点

「なんの会話だったんだろう」

私は屋上からオフィスに戻る道中、一人そう呟いた。

数分前、まだ全体の面談が終わっていないのにいなくなってしまう葉月さんを探して屋上まで向かった私は、佐藤君と葉月さんが話しているところを目撃した。思わずドアの後ろに隠れた私は二人の会話を盗み聞きしてしまったのだ。

その時、佐藤君はこう言った。

——好きですが、何か？

と、それが何の会話だったのか、文脈が滅茶苦茶でわからない。普通に考えれば、佐藤君が葉月さんに告白してみたけど今まで二人が話しているの見たこと無かったし。っていうか、佐藤君には他に好きな人がいるはずだし…でも、あれ？

「りん」

「……」

「りーんっ」

「!? こ、コウちゃん!?!」

突然声をかけられて肩が跳ね上がる。振り返るとコウちゃんが立っていた。

「そろそろ私の面談の時間ですよ？ 葉月さんのところ行かなくていいの?」

「あつ、そうね。ごめんねっ。すぐに行くからっ」

そうだった。もうすぐコウちゃんとの面談だった。これじゃ葉月さんを探しに行った私の方が遅刻してしまう。せつかく皆時間を割いてくれたのに。ちゃんとしないと。

「じゃあ、私、行くねっ」

「う、うん」

私は打ち合わせ室に向かって走り出す。葉月さんも先に行つて待っているはずだ。次の開発からチーム全体を引っ張らなきゃいけない。なのに私、なにやってるんだろ。

● 佐藤視点

「青葉、最近のりんの様子、また変なんだけど何か知らない？」

「なにかありました？」

葉月さんとの面談が終わってから二日たったある日のこと、今やっているヘルプの仕事も一段落付いた俺がカフェテリアで休憩をしていると八神と涼風が話しているところを見かけた。それも、遠山の話だ。

八神も、そういうところはしつかり気にかけているだろう。俺も、なんとなく変だと思っていた。

「すみません。私もよくわからなくて」

とはいえ、涼風は俺がいるのに気付いているのか適当にはぐらかしている。俺も彼女に口止めしている。律儀な性格の涼風のことだ。変に漏らすことも無いだろう。

「私もさ、りんが元気になるためにあらゆる手を尽くしたんだけどだめだった」

「あらゆる手？」

「そりゃあもう、甘い物を食べさせたり、辛い物を食べさせたり、しょっぱい物を食べさせたり……もう、手の施しようが無い」

「食べ物ばかりじゃ無いですか！」

…やっぱり本当に気にしているのかわからなくなってきたな。
ん？

そうしていると、遠山も入ってきた。今朝からずっと落ち着かない様子で。

正直、近くでそんな風にしていられると気になって仕方が無い。少なくとも、何か聞いておいた方が良さだろう。

「なありん」

「!？」

「お前、定期的におかしくなるよな」

そもそも、彼女の様子が変わになるのは最近に至ってはよくあることだ。桜が俺の気持ちを漏らしたりした時とか、サーバルームの時とか。

元々思い込みの激しい性格なのは知っていたが、最近は特に顕著だ。

「えっ、あ…なんでもないので。私、佐藤君のことで悩んでるわけじゃ」

俺が揺さぶりを入れれば何かボロを出すと思ったら、俺の名前が出てきやがった。

「あの、ホントに、ごめんねっ！」

俺から逃げるようにカフェテリアを後にする遠山の後ろ姿を見送る。

これは……。

「佐藤！」

俺が考えをまとめる前に、突然、八神が俺のテーブルにまで迫ってきた。それもすごい剣幕だ。今にも気圧されそうになるほどの。

「アンタ、りんにかかしたの？」

「別に何もしてねえよ」

「ウソつかないで！ りんがあんな風になるなんて絶対普通じゃ無い」

ソレについては同感だ。八神にとっても彼女が大切なのは本当なのだろう。まあ、心当たりもあるしな。

「佐藤、アンタまさか」

「…なんだよ？」

「りんのパンツ見たんでしょ！」
「濡れ衣にもほどがある」

決意ですが、何か？ 後編

佐藤視点

「……」

俺は背景のブースでただ無心になつて手を動かす。

あの感じ、葉月さんが自棄になつて遠山に何か言つたか。

あるいはこの間の会話を聞かれていたか。

マジでいよいよ潮時かもしれん。

今度こそ遠山に俺の気持ちがバレてしまえば、もうこの会社にいられるかも怪しくなる。開発が始まるまでまだ猶予はある。辞めるなら今がチャンスなのだ。

だが、遠山をあのままにしておくわけにも。

「佐藤さん。 magariんさんのことで悩んでるんですか？ 私でよければ話してください」

「わかるか？」

「わかりますよ。だって」

俺の真下、足元にいる涼風は言う。

「こんな素敵な髪型にしてくれるなんて、いつものいじめにキレがないです」

「…キレ、か」

俺はブラシと櫛を持って、ひたすら涼風の髪を弄っていた。

今回はシニヨンヘア。セイバー結びと言えば通りはよいだろう。

仮留めのポニーテール作り、山形になるようにハーフアップにする。それより下の余った髪でミツアミを作る。このときにハーフアップにした髪を取りすぎないようにするのがコツだ。そうすることによって、後ろ髪の内側にミツアミができるようになる。

仮留めのポニーテールをほどいて、ミツアミの根元が隠れるポイントで結び直す。

新しくできたポニーテールをお団子にして、ヘアゴムで固定する。そしてリボンで飾り付け。

仕上げに最初に作ったミツアミをお団子に巻き付けてヘアピンで

留めれば完成だ。

2本の長いミツアミは、あえてそのまま流すことにした。自分的には邪道なのだが、涼風には好評のようだ。

「なるほど。そういうことだったんですね」

すでに俺に気持ちを知っている涼風にまで隠す必要は無いと感じた俺は、事のあらましを伝えることにした。

だが、正直これに関してはどうでもいい。問題は、今の遠山がおかしくなったのをなんとかすること、それと、この三角関係の終着点についてだ。

それについて、涼風は何か思い当たることがある様子だった。

「私、思うんですけどね。こういうのって、具体的に期限を設けた方がいいんじゃないかなって」

「期限？」

「はい。佐藤さんは7年間も片思いしてたわけですよ。要は、それだけ時間があるからいつでもできるかという甘えがあったんじゃないかなって」

「……甘え」

「だから、期限とかなんらかの制約を加えて自分を追い詰めてみるんです」

「なるほど」

かなりの的を射た答えが返ってきた。

言われてみれば確かにそうか。いつでもそばにいられて、十分な時間があるから手を抜いてしまう。だから、問題を先延ばしにしてしまうと彼女は言いたいのだ。

それを払拭すれば、俺もこの状況を打破できると。

「私も、実は目標があるんですけど、ただ漠然と頑張るだけじゃダメなんだと思い知りました」

「それは、キャラデザじゃないのか？」

「はい。敦さんのことなんです」

ある意味意外な人物が出てきた。涼風にとって一番のあこがれは八神のはずだ。ならば八神に追いつくと言うのが目標かと思えたの

だが。

「私、敦さんに約束したんです。いつか、敦さんが自分の仕事を楽しいって、誇らしいって思えるようになって」

涼風の目はまっすぐだった。それだけ、彼女の言の葉の重みがあるのが伝わる。

思えばそう可笑しい話では無い。敦さんは涼風がキャラ班に入ると同時に合流してきた。それ以来、なにかとアドバイスを受けていた。きつとそれでなにか感じるどころがあったのだろう。

しかし、涼風の表情はすぐに崩れた。

「でも具体的に何をすればいいかわからないんです…」

「ふむ」

「すみません。相談に乗るとか言つて、こんなこと話して」

「気にするな」

実際、涼風にとってこの半年間は自分の仕事を覚えるだけで精一杯だったはずだ。仕方が無いと言えば仕方が無いのだが、そう言つて先延ばしにした状況が今なのだ。

本人も焦る気持ちもわかる。せっかく相談に乗ってくれたよしみだ。多少は堪えてやりたいのだが。俺にも見当が付かない。敦さんのこと。俺もよく知らないんだよな。

「あの、ところで佐藤さん」

「なんだ？」

「これどうやって解くんですか？」

「……」

さて、光明も見えてきたことだし、景気づけにタバコでも吸つてくるか。

「あの、佐藤さん？　ねえ！　佐藤さん!?!　ちよつと!!」

●
りん視点

午後の休憩の合間、また佐藤君に髪の毛を弄られた青葉ちゃんに、はじめちゃんはキラキラとした目で西洋の剣を渡していた。

「青葉ちゃん、青葉ちゃん！　これ！　これ持つて！」

「は、はい」

「それで、このセリフ読み上げながら剣振ってみて！」

「えっと」

渡されたカンペを見た青葉ちゃんは、誰もいない方に身体を向けると、ゆっくりと剣を構える。そして、

「東ねるは星の息吹、輝ける命の奔流。 受けるが良い！ エクス、カリバー！」

と、有名なアニメのキャラクターの必殺技を再現していた。確かに青葉ちゃんの髪の毛は今、そのキャラクターと同じ髪型。

とても似合っている。でも、ある意味では佐藤君らしくない。きつとこの前の葉月さんのことを気にしているのだろう。

「……」

私はずつと気になっていた彼の方に視線を向けてしまう。そして、声をかけたいのに何を話せば良いのかわからず目を反らす。それを何度も繰り返してしまっている。

佐藤君は真面目に、ただ黙々と作業を進めている。なのに自分は全然集中できていない。こんなところ、他の皆に見せたくない。

社員旅行が終わればすぐに開発が始まる。こんな調子じゃ皆の足を引つ張ってしまう。

居たたまれなくなつた私は、外の空気を吸いたくて屋上に向かった。

「…私が悩んでも、仕方の無いことなのよね」

屋上で一人、11月の冷たい風が頬を伝う。でも、私の気持ちは全く晴れない。寧ろその冷たさが余計に心を締め付けるようにすら感じた。

どうして悩んでいるのかしら？

私は、佐藤君が誰か好きな人と幸せになれるように応援して……

「誰か、好きな人と……」

私の中で、佐藤君の隣に誰か素敵な女の人がある。その光景が浮かぶ。

「……」

「りん——」

その時、私は何故かそれを見たくなかった。想像したくなかった。理由は分からない。ただ、佐藤君がどこか遠くに行ってしまうと思うのを、脳が、心が拒否してしまう。

「嫌っ！」

「すみません、遠山さん」

反射的に頭を抱え、声を上げた直後に気付く。

この低い声は佐藤君の声。

振り返ると、扉の影にこじんまりと身を潜めている佐藤君が、眉毛を八の字にしてこちらを覗いていた。

背が高いはずの彼が、どこか小人のように見えてしまう。

「えっ… あ、ちがつ…色々違うのっ！ ど、どどどどうしたの!？」

身振り手振りで必死に誤解を解く。どうやら、佐藤君は自分が声をかけたのを拒絶させたと思っっているようだ。

そんなことはない。それが伝わってくれたのか、佐藤君はゆっくりと扉の影から姿を現す。

「…お前、やつぱりちよつと変だよな？」

「……」

彼の問いに、私は沈黙で答える。

ああ、やつぱり気付かれていた。

あんなに動揺していたら、佐藤君も流石に分かるよね。コウちゃんにも気付かれていたし。

これ以上、誤魔化すのは彼に失礼だ。私は自分が耳にしたことを正直に話すことにした。

「そうか。葉月さんとの話、聞いてたのか」

「ごめんね。『好きですが、何か?』辺りから」

「……（また絶妙のタイミングだな）」

何故か佐藤君の顔が妙な曇り方をする。確かに、私も話の途中から聞いてしまったから文脈が滅茶苦茶で話が全然分からない。

自分がどうしたいのか、佐藤君にどうなって欲しいのか、それらが全然整理できていない。

「で、でもね。前みたいに葉月さんが好きなの？　って思っちゃったわけじゃなくて…なんかこう、頭がごちゃごちゃになって」

「…なんか、すまないな。俺がはつきり言わないせいで」

「そ、そんなことないわ！　私ね、佐藤君には幸せになって欲しいと思っっているの…友達だから」

「……」

「だから、頑張って…佐藤君」

そうこれでいい。

自分の気持ちはまだわからないけれど、それで佐藤君の気持ちを縛り付ける訳にはいかない。佐藤君が頑張っているのは知っている。だから彼は絶対に幸せになるべきだ。

7年間。ずっと見てきたのだから。

でもなんでだろう。どうして、こんなに不安げな言い方をしてしまうのかな？

「…ああ、いい加減、俺もケリをつけたいと思っていたんだ」

頑張る。と、そう言うと、私の方へ一歩踏み出して見せた。

俯いていた私はゆっくりと佐藤君の顔を見る。まっすぐに迷いの無い黄色い瞳。

それは、彼が何か決意を固めたことを物語っていた。

「…で、今度の開発が終わるまでに、ダメだったらスッパリと、会社辞める」

「っ!?　な、なんで？　会社関係ない…」

佐藤君の言葉に耳を疑う。

そこまでする必要なんて無いのに！

でも、彼の目は真剣だった。私の目をジッと見つめていた。

「…まあ、なんというか、具体的に期限とか制約を加えて、自分を追い詰めて頑張ろうという…：決意の表れのような」

「そう…なのね」

でもすぐに目を反らす。

多分、自分でもまだ考えがまとまっていないのだろう。

だけど、彼の言葉から説得力がなくなることはなかった。

きつと本気だ。

考えてみれば可笑しい話じゃ無い。恋愛だつてとても大事なコトだ。だって、将来、その人とずっと一緒にいるかもしれないのだから。佐藤君がそこまで真剣なのは伝わってくる。

私、私は…っ！

「あ、あのっ！ 頑張つてね！」

そうだ。彼が決めた以上、私ができるのは応援だけだ。

私の個人的なわがままで彼の覚悟は踏みにじることはできない。だからこれでいい。自分の胸の中にある気持ちよりも、佐藤君の決意の方が大事なのだから。

「ああ、頑張る」

「……」

「……」

「…わ、私に何かできることある？」

「いや、俺が勝手に頑張るだけだから、いつも通りでいい」

「そう？ いつも通りね。わ、わかったわ。えっと、じゃあ、ほ、ほんじつーはおひるが」

「いつも通り、八神の愚痴でも聞かせてくれ」

「え、いいの？ それで」

「ああ、それでいい。いや、それがいいんだ」

そう言うと、佐藤君は笑ってくれた。

ちよつとだけ口角が揺るんで、目尻と眉毛がわずかに柔らかい。7年間ずつと見てきた彼の笑顔。今までで、一番優しい笑顔だった。それを見ると私の心の中に絡まっていたモヤモヤがほどけるていく。

つられて私も笑顔になった。

●

佐藤視点

「あ、佐藤さん。りんさん元気出してくれましたよっ」

持ち場に戻ってきた俺を見つけた涼風は、開口一番に話しかけてきた。どうやら、遠山はさっきの八神の愚痴を話したおかげもあつてか

ある程度気が晴れたようだった。

これで、なんとか一段落。一番社交的な彼女が明るくなったおかげか社内の雰囲気もどこか暖かさを感じる。

「まああれだ。お前のアドバイス通り、自分を追い詰めて頑張ってみるよ」

「そうだったんですね！ ならよかったです」

今回のMVPは涼風だ。実際、俺が一步踏み出せたのは彼女のおかげだ。何か礼でもしれやらんと、と考えているとあることを思い出した。

「ああそうだ。敦さんの事で俺も一つ思い出したことがある」

「え？」

俺の悩みを聞いてくれたのだ、涼風の悩みの解決の糸口ぐらいは教えておいても損はないだろう。

「敦さんってさ、『働きたくない』ってのが口癖なんだ。でもな、最近は言っていないんだよ」

「…言われてみれば、聞いたこと無いです。敦さんからその言葉」

「それな、お前が入社した頃からなんだ。社内でも結構噂になっている」

「そうだったんですか!?!」

涼風の顔が驚きと感動の両方が混じった顔つきになる。それはつまり、涼風の存在が、少なからず敦さんに変化を与えていたことの証明なのだから。

「お前がどうすればいいかまではわからんが、ヒントくらいにはなるんじゃないのか？」

「はいっ！ ありがとうございます！」

「あ、あとこれもお礼だ」

「？」

俺は嬉しそうにお辞儀をした直後の涼風の頭を、俺は掴んだ。

さて、こんなもんだろう。

ほどきたがっていた彼女のシニオンヘアを別の髪型に変えてやった。

涼風の脳天には見事な鶴が羽ばたいている。

うん、我ながら改心のできた。

「いじめのキレが戻りましたあ……」

● さて、今日は定時で帰るか。

パソコンの電源を閉じた俺は、帰り支度に取りかかる。他のチームのヘルプ故、そこまで本腰を入れる必要も無いからだ。

開発が始まればそうも言っていられない。実際、この開発までに遠山をなんとかすると決めたが、このまづかな暇だけでも楽しんでおくことにしよう。

「さ・と・う・く・ん♥」

と、思いがけた時、花男さんが背景班のブースに顔を出してきた。随分と上機嫌なご様子で。

「聞いたわよ。君もようやく本気でりんちゃん攻略にとりかかるのね」

全く、どこで聞きつけたんだこの人。

「そうよね。現実問題、もつと本気を出すべきだったわよね？ これでまた面白——じゃなかったわ、楽しそうな事になるわね」

おい、今、面白そうって言いかけたの聞き逃してないからな。

だが、花男さんはトークは止まらない。身体をくねくねとひねらせて、満面の笑みで俺に迫ってくる。

「あーもう本音が隠せないわ。私も積極的に、佐藤君が動けるよう協力するわ。甘やかさないから、そのつもりでね♥」

「花男さん」

「ん？ なあに？」

「薬って、水より湯冷ましで飲んだほうが飲みやすくてね？」

「現実逃避するな」

恋の共同戦線

佐藤視点

昼休み。

昼食を取るために席を立った俺は、ふとブースの壁に立て掛けられているホワイトボードが目に入った。

それには、来週から行われる社員旅行を周知する内容がと書かれていた。

来週から俺たちはフェアリーズストーリー3開発チームの面々は4泊3日の北海道の旅が待っている。

当然俺も参加するわけなのだが……。

「スウー、来週から北海道へ旅行か。チャンスだな。これを機に遠山をどこかに誘おうか」

実際、俺ら男性社員は少ないため、それぞれ個々で過ごす予定になると聞いている。俺も特に予定は立てていない。

「スウー、ここでグツと距離を縮めて、八神とコーナーで差をつけてやるんだ。そうして遠山の心は俺のものに、そうだ。そうしよう」

「後ろでゴチャゴチャうるせえんだよこのオカマ野郎!!」

さつきから聞こえる雑音の主の襟元を絞める。

あいつも変わらず、花男さんはやかましい。面談以降、それが特に煩くなっている。

「くっ……でもやめないわ！ 佐藤君がヘタレをやめるまで、私は嫌がらせをやめないわー!!」

今にも首を絞められそうになっているのに、まだ減らず口が静まらない。確かに、今回の開発が終わるまでに遠山に振られたらこの会社を辞めると言ったのは本当だ。

だからって調子に乗りすぎだろうか。

「それで、どうするの？ 現実的な話、唯一のチャンスよ？」

俺からの拘束から脱した花男さんは、先ほどとはうってかわった態度を取る。

それは自分のチームにいる男性社員に見せる表情によく似ていた。

「開発が始まれば、プロデューサーになるりんちゃんの外に出る機会も多くなる。リーダーになったからって会える機会は今までより減るのよ？ わかってる？」

「……」

珍しく出てきたまともな指摘に、手も足も出なくなってしまう。そこだけは花男さんの言う通り。

開発が進めば進むほど、遠山と個人的に関われる機会もなくなる。ここは分水嶺そのものだ。

「いい？ 別にこの社員旅行の間に告白して付き合えって言うてるわけじゃないの。りんちゃんにとって、貴方を異性の対象として意識させればいいの。そう言うのは、非日常的な空間でそこできるとなのよ！」

「なるほど……」

花男さんの言葉には説得力があった。普段ふざけているように見えても、やっぱり先輩なんだなと思う。

「大丈夫。不安なら私も一緒について行ってあげるわ。ダイレクター権限で！」

「やめてください」

「それは！ 邪魔しないでってこと?! 余計なことするなってこと?! 私と一緒に旅行したくないってこと?!」

「全部です」

●
とは言ったものの、どうしたものか。

俺は思考を巡らせながらカフェテリアに向かう。考えているのは遠山をどう誘うかについて。

おそらく遠山のことだ、そこら辺は前もって準備しているはずに違いない。

それも全て八神と過ごす予定なのだろう。

いや、八神も八神で予定があるはずだ。どこかに隙はあるはず。時間に限られている。

なんとかさせねば……。

「いいですか！ これは戦いです！ 女の戦場です！」
カフェテリアに入ると、いきなり力強い演説が繰り広げられていた。

それもたった一人に対してだ。

「何してんだアイツら」

演説をしていたのはうみこ。それを聞いていたのは滝本だった。

本来、この二人は班も違えば話す機会もない。普段ならこうして話す機会すらないはずなのだが。

「あ」

ヤバい。滝本と目があった。

うみこの演説に気圧されているせいか、その視線からはSOSと訴えられているような気がした。

いや、マジでしてる。俺と似て、意外にも表情豊かな彼女は本当に俺に助けを求めている。

「おや、佐藤さんですか」

滝本の視線に吊られて、うみこは俺の気配に気づき、射程にとらえた。

「…まあなんだ。俺は別のところで食べるから、お前らはご自由に」
「ーいえ、良い機会です。貴方の話も聞きましょう」

いつの間にか回り込まれて唯一の逃げ道を塞がれる。

ほんの一瞬。俺が後ろを向いたその瞬間にはもう出入り口に立っており、壁に足をかけて道を阻んでいた。

「佐藤さん、遠山さんのことでお悩みなのでしょうか？ 滝本さんも彼氏さんことお悩みらしいので、彼氏持ちの私が相談に乗りますよ」
なるほど。合点がいった。

この二人、基本的に縁がないが一つだけ共通点ある。
それは彼氏がいるということだ。

俺がうみこに彼氏がいるのを知ったのは最近、祝賀会の帰りの時、
一人颯爽と彼氏の車で帰っていったからだ。

となると話が見えてきた。

滝本が何か増田のことで悩んでいて、それをあまつさえうみこに相

談してしまっただろう。

だったら尚更帰してほしいところだが、実際のところ、味方は多い方がいい。

俺に時間がない以上、協力者の手を惜しむことなどできないからだ。

俺は事情を話すことにした。

「なるほど、この社員旅行の間に距離を縮めたいのですね。わかりました。ならば八神さんには私がベイトします。その間に遠山さんに詰めてください」

言ってる単語がFSP用語で全然意味がわからん。

八神は自分が引き付けておくから、その隙に遠山を誘え。

と言いたいのだろうが、そう言えばいいんじゃないのか？

それに……。

「ありがたいが、いいのか？ 俺に協力してくれるなんて」

「ええ、構いません。遠山さんの気持ちも気づいてはいますが、八神さんは私のことを名字で呼ぶので」

「…それが決め手なのはどうかと思うが」

いずれにしても行幸だ。思いがけない協力者ができた。

これでかなり動きやすくなる。遠山を誘う口実もできるだろう。

となると、後は俺の度胸だけか。

「つーか、滝本は一体何に悩んでいるんだよ？ 発売日の時とか凄

かったじゃないか」

「…それ、は」

先日のお熱い空間の話をされたせいか、顔を赤くして目を反らす。が、どこか不安げな表情をしている。

「佐藤さん、滝本さんは今とても大事な時期なんです。ソツとしてあげてください」

「お前がそれを言うのか」

さっきまで高らかに演説していたお前が言っても説得力の欠片もないぞ。

まあ、男の俺が口を挟むなという意味なのだろうが。

「滝本さんは全ての恋人同士がぶつかる最初にして最大の壁にぶつかっているのです！」

拳を天井に突きだして高らかに叫ぶ。

「そう！ 倦怠期に！」

「っ……」

「滝本は違うって言いただけだ」

滝本が違うっていう視線をひたすら送っている。

うみこは俺のツツコミも耳に入っておらず、演説を再開する。

「付き合う前と付き合った直後のドキドキ感！ それが日常なつてどこか冷めてしまう！ ちようど！ このタイミングが！ 一番危険な時期なのです！」

うみこは完全にヒートアップして、この場を止めることかできる人間はもはやいなくなる。

「いいですか！ 滝本さん！ これは決して貴女が彼のことを嫌いになったわけではありません！ 状況の変化に貴女達2人が付いてこれていないだけです！ 貴女が彼のことを想う気持ちも、彼が貴女を想う気持ちも本物です！」

「……」

「しかし、付き合いが長くなれば長くなる程、どうしてもマンネリ化してしまいます！ それは仕方ありません！ 誰だつてそうなるでしょう！ ですが！ ここで問題なのは彼が飽きてしまわないかということですよ」

「……な、なる、ほど」

「彼はきつと、今まで通り接してくれていると思います！ ですが、内心では少し、ほんの少しですけど、不満を持っているかもしれない。だから、ここで一歩踏み出す必要があるのですっ！」

「っ……」

「そこで、今回の社員旅行です！ 旅先で彼と過ごすことで、普段とは違う一面を見ることが、彼にもっと自分のことを知ってほしいというアピールができるはずですよ！」

「……う、ん」

「そのために！ 新しい下着を買いに行きましょう!!」

「・・・っ!」

コイツ!

なにとんでもないこと言い出してやがるんだ!

たまらず俺は肺に入っていた空気を吐き出してしまおう。とんでもない勢いで。

一体何をどう考えればその結論に至るんだよお前は。

滝本も顔を真っ赤にして口を魚みたいになっている。

うみこはそんな俺たちの反応すら目に入っておらず、ただ熱弁するのみ。

「良いですか!? 滝本さん!! 大切なはそのドキドキ感を思い出すことです! だからこそ、『飽き』を感じさせないように工夫が必要なのです! そこで今回おすすめたのがセクシーランジェリーです!」

「・・・せ、え、え?」

「はい! この機会に是非買い揃えるべきです! 彼氏さんにも喜んでもらえること間違いなしですよ!」

「そ、その、あの」

「なので! 仕事終わりに一緒に行きましょう! 大丈夫、恥ずかしくなんてないですよ!」

「・・・え、えっと」

「よし、決まりですね!」

滝本はまったく了承していないのだが、勝手に決められてしまった。

「大丈夫です。私もサポートします。貴女達ならきつと乗り越えられます! 滝本さん、頑張ってください!」

滝本の肩をポンと叩き、彼女は去って行った。

残されたのは滝本と俺だけ。

彼女の顔には汗が流れており、まるでマラソンを完走したかのように疲弊しきっていた。

「まあなんだ。頑張れよ」

俺はそれだけ言い残し、その場を去った。正直、これ以上俺が彼女にできることは無い。

結局、最後まで滝本は何も言わなかった。

あの調子だと、どう行動するは彼女次第だろう。

まあ、俺が心配することではないだろう。

俺は俺の目的のために動けばいいだけだ。

結局ろくに昼飯にありつけなかったわけだが、ブースに戻って急いで食うか。

「ん？」

「あ、佐藤君」

ブースに戻る道中、俺は件の女性、遠山とぼったりと会ってしまった。

「もうお昼は食べたの？」

「いや、ちよつとな」

俺は適当な言葉で濁す。

さつきまでうみこと滝本の3人で話していたことなど言えるわけがない。

「もう、ダメよ。今は余裕があるかもしれないけど、ご飯はちゃんと食べなきゃ」

「……すまん」

遠山が八神に見せるような、母親が叱りつけるような顔。彼女の代名詞のようなそれを見ると本当に申し訳ない気持ちになる。

完全にとぼつちりなわけだが。

……これ、もしかしてチャンスじゃないのか？

少なくとも、今この瞬間は誰にも邪魔されない。社員旅行が始まるのは目と鼻の先。

誘うなら、今が好機だ。

——これは戦いです！

——だから、ここで一步踏み出す必要があるのです。

俺の脳内に、さつきのうみこの演説が反芻される。一見頭の可笑しい話にしか聞こえんが、確かにそれは、今俺に足りないものなのだか

ら。

——そのために！ 新しい下着を買いに行きましょう!!

「っ……」

「佐藤君、どうしたの？ 顔色悪いよ？」

「い、いやなんでもない」

「そう……体調悪かったらすぐに言っただけ？」

「ああ……」

「うん。じゃあお大事に」

遠山はそのまま立ち去ろうとする。

ダメだ。このままだと唯一のチャンスを棒に振ってしまう。待つてくれ！ 行くな！ 心の中で叫ぶ。

そうだ。俺はやると決めたのだ。覚悟を決めたのだ。

これ以上躊躇うことなどあつてはならない。

勇気を出すのだ。

「り、りん！」

「？」

思わず、呼び止めてしまった。

「どうかしたの？」

振り返った彼女は首を傾げていた。

「あ、いや……」

俺は口ごもる。

何を言うか決めていなかったからだ。でも、何も考えていないわけではない。

何度もシミュレーションしてきた。そして、成功した時のイメージもできている。

ただ、言葉にするのが難しいだけで。でも、言わなければ始まらない。

俺は一度深呼吸をして、彼女に向き直る。

「来週の……社員、旅行……二人で、どこか……行かない、か？」

「——やったわ！ ついに佐藤君がやったわ！ 若干片言だったけどやったわー!!」

毎度毎度、恒例常時のごとく、どこからともなく現れた花男さんは、俺達の前で愉快な踊りを披露しながら通路の奥へ消えていった。

「花男さん、どうしたのかしら？」

「気にするな。……で、都合は？」

「え？　ええ、もちろん大丈夫よ」

「……………そうか」

（今、断ってくれても良かった的なオーラを感じたわ）

●
りん視点

帰り支度を済ませた私はオフィスを出る。

前からずつとやりたかったプロデューサーの仕事。皆の意見をまとめたりするのは得意だけど、今後は他の会社のスケジュールも考えなければならぬ。

責任は重大、不安が無いと言えはウソになる。だけど、やつとつめたチャンスなんだ。絶対にモノにしなくちゃ。

「……」

だけど、一つだけまだ引つかかることがある。

それは佐藤君の事。

前に、この開発が終わるまでの思いが実らなかつたら会社を辞めると。

それはつまり、佐藤君と働けるのは今回が最後になるかも知れないんだ。だから、私もちゃんと彼に誇れる仕事をしよう。

「でも、その前に来週の社員旅行ね」

これもチームを引っ張る私の仕事。

飛行機や旅行の手配、旅先のスケジュール。

自分の予定以外にも、他の子達のこととも考えないといけない。良い予行演習になるだろうから、しつかりこなそう。

佐藤君にも誘われちゃったし。

「おや、遠山さんも帰りですか？」

「あ、うみこさん。それと…ひふみちゃん？」

「あ…りん、ちゃん」

エレベーターの入り口に、知り合いを見つけた。
うみこさんとひふみちゃん。

二人が仕事帰りに行動を共にすることなんて見たことが無い。
班も別で、話しているところもほとんど無かったのに。珍しい。でもひふみちゃんは相変わらず落ち着きが無い。やっぱりあんまり縁の無い人と話すのは緊張するようだ。

「……っー」

何故か私をジツと見つめていたうみこさんは、急に目の色が変わった。まるで何か良いことを思いついたような顔だ。

「遠山さん、ちょうどよかったです。貴女もご一緒しませんか？」

「？」

うみこさんがひふみちゃんで行こうとしていた場所。

そこは、ランジェリーショップだった。

「うう…、なん…かスゴイ、ところ…きちやった…ね」

「そ、そうね……。こんな所に入るの初めてかも……」

店に入った瞬間、独特の匂いに包まれた。こういった高級なお店に入ったのは初めてだ。店内には可愛い下着がたくさん並べられている。

男性のお客さんもちろほらと見える。

「あの人、女性用下着のコーナーにいるけど、何考えてるのかしら？」

「さ、さあ……」

「それより、私たちも入りましょう。いつまでもここにいるわけにもいきませんから」

「そ、そうですね」

「は、はい……」

三人揃って、同じ棚の前に立つ。

「それで、どうして私まで？」

「そうですね。少し、頼まれ事がありました」

「？」

「それって…どういうこと？」

「いえ、特に深い理由はありません。強いて言うなら、共同戦線のよ
うなものです」

「……」

「わ、分かりました……じゃあ、一緒に選びましょうか。ね？ ひふ
みちゃん」

「え!? う、うん……っ」

こうして私たちはそれぞれ好みのものを選んでいくことにした。
だけど、しばらく経つても、一向に決まる気配がない。

普段は忙しいから通販で買うことが多かった。実際にこういう高
級なお店で吟味する機会はほとんどない。コウちゃんもそういうの
には疎いから一緒にいかなかったし。

私は手に取ったブラジャーを眺めながら、困っていた。
すると、横にいたひふみちゃんが声をかけてくる。

彼女は上下セットになった、淡いピンク色をした下着を手にしてい
た。

「りん、ちゃ……ん。これ、どうか……な？」

「え？ どれのこと？」

「この、水色の……」

そう言つて彼女が指差したのは、薄いブルーのレースがあしらわれ
た上下の下着だった。普段着ないデザインだから新鮮味があるけれ
ど、それ以上に彼女に似合いそうだと思った。

「いいと思うよ！ 可愛い」

「そ、そうかな……」

「ええ、とてもよくお似合いですよ」

「うみこさん」

いつの間にか背後に来ていたうみこさんが、私達と同じデザインの
下着を持つて立っていた。

「この色は清楚な雰囲気でありながら、どこか妖艶さも兼ね備えて
います。この色合いは、きっと貴女の白い肌によく映えるでしょう」

「そ、そうですか？」

「はい。私も、貴女のような綺麗な人が付けていればさらに魅力的

になると思います」

「……あ、ありがとう……」

「どういたしまして」

「……あれ？」

ふと、ひふみちゃんの持つもう一つの下着を見る。

それは私が持っているものよりも若干色が濃く、胸元にリボンが付いている。

「ひふみちゃん、それもかわいいよね」

「……っ！」

「あら、そちらも素敵ですね。ひふみさんの髪の色ともよく合っていますし、ひふみさんの魅力を引き立ててくれることでしょう」

「あ、あり……がと……」

真つ赤になって俯いている彼女を見て、微笑ましく思った。いつも落ち着いていて大人っぽいと思っていただけに、こういう一面を見れて嬉しい。ひふみちゃんとは仲良くなれそうな気がした。

でも、うみごさんは何がしたいのだろうか？ ひふみちゃんを褒めることだけじゃない。

そもそも、どうして急にひふみちゃんを誘ったのだろうか。

二人になにか共通のことってあったかしら？

「っ！」

そうか。わかった。二人とも恋人がいるんだ。

なにかひふみちゃんがサウンドの増田君のことで悩んでいるのを、うみごさんに相談したのだろう。

だから、その悩みを解消するきっかけ作りとして、今日はここに連れてきたに違いない。

なるほど、確かに共同戦線だ。

うみごさん、やっぱり優しいところがあるのね。

たまにキツク言い過ぎちゃうところを気にしていると言っていたけれど、こんな風に相手を想って行動できる人なんだから、そんな心配はいらないんじゃないかしら。

ひふみちゃんもキャラ班のリーダーのこと、増田君のことで頑張っ

てるんだ。私も頑張らないと。

「そうね、私はこれにしようかしら」

「あつ、りんちゃん、も…決まった…?」

「ええ、なんとか」

「それで、うみこさんは何を選ばれたんですか？」

「ああ、これですが」

「「……」」

2人揃って、固まってしまった。

「あ、あの…うみこさん。これは一体なんでしょうか？」

「見ての通りですが」

彼女の手にあったものは、紐パンと呼ばれるものだった。

しかも、色とりどりのラインナップがあつた。

「どれも可愛らしくて選べなかつたのですが、やはりここは無難なものが一番かと思ひまして。ああ、ちなみに私は黒が好みです。なので黒のこれが一番かと」

「「……」」

「では、失礼します」

「あ、はい……」

そのままレジに向かつて行つた彼女を、私たちは呆然と見送つた。

「りんちゃん……ん。これ、どう思う？」

「わ、わからないわ……。とりあえず、私たちは私たちが選びましたよ
うか」

「う、うん……」

結局、私たちは最初に吟味していた下着を購入してお店を出た。

「……」

だけど、ひふみちゃんの様子は少し変だった。

「ひふみちゃん？」

「…りん、ちゃん。ごめん、私…やっぱり、買って…くる…っ！」

「え!?! ちよつと、ひふみちゃん？」

そしてなにか決意を固めるように両手をギュツと握りしめてお店の中へ戻っていった。

彼女が何を買いに戻ったのか。気付かないほど鈍感では無かった。ひ、ひふみちゃん、もしかして、アレ買うつもりなんだ。さっきまで持っていたやつより過激なデザインのものを。

「無理よ…私には…」

あんなの、履けるわけがない。

私は自分の下着が入った袋を抱えながら、ただ呆然と立ち尽くすことしかできなかった。

めっちゃやいい匂いするー!!

純視点

結局、来てしまった。

まさか、社員旅行で地元に来ることになるとは思わなかった。だって、それこそもう二度と帰ってくるなんて無いと覚悟していたのにこんなにあっさりどどど。

複雑な気持ちで夜空を見上げる。

僕が今いるのは温泉。しかも生憎露天風呂では無い。今は外が少し嵐になっていて、使えなくなっているのだ。とはいえ、源泉のお湯であることには変わりはない。飛行機で来たとは言え移動だけでほぼ一日を使ってしまった僕たちはこうして湯船につかって疲れを癒やしてる。東京では秋だけど、この季節ではもう雪が降り気温だって東京の冬よりも寒い。

でも、こうして肌を出していても温泉のお湯が暖めてくれて芯までほぐれていくようだ。

「……」

まあ、これが現実世界ではなく、ラノベ系のアニメだったら、美少女の入浴シーンを見てしまったりするのだろうが——そんなテンプレはない。

「まさか、社員旅行に来てる男性社員が、俺と敦さんとお前だけではないなあ」

「そうですね」

隣で湯船につかっていた佐藤さんが声をかけてくる。僕よりずっと背の高い佐藤さんは、腰を下ろしていても僕の頭2個分くらい高い。やっぱり背の高い人はいいな。普通にしてもスラッとしてて格好良く見えるしモテそうだ。道中に着ていた服も、それこそモデルみたいだった。

あと髪型もなんかセンスがあるっていうか……どこの美容院になんて言っただけでもらってたんだらう。

「つーか、よく来られたよな。敦さん」

「あー確かに」

そう言われて、湯船の反対側に目をやると、

「……………」

湯船に完全に身をゆだね、いつもの目のクマで不気味に見える顔はお湯のタオルで覆われている先輩がいた。タオルから覗く顔からは、まるでそこから精魂が出て行っているように口を開けているのが見える。要するにだらけきっている。

一応、『フェアリーズストーリー3』の開発チームの行事ということもあるかた、敦さんも来たわけだけど、この人、前日仕事はまだ溜まっているとかぼやいてたな。

といつても、この旅行でしつかり休んだ方が進むと思うんだけど。

「あの人寝てないよな?」

「いや寝たら死にますよ」

「湯船にタオルつけるのはマナー違反だろ?」

「そっちの心配ですか!」

先輩の生死はどうでもいいんですか!?

そりやマナーは守らないといけないですけど。まあ、あの人結構頑丈だしそう簡単に死んだりしないだろう。

「あの、先輩、起きてますよね? こここで寝たら死にますよ」

「あゝ? 起きてるよ」

先輩はタオルは取らずに口だけ動かして返事をする。ていうか起きてたんですね。声が完全に脱力しきってる。そりや普段からあんな働き方してたらそうなりますよ。呆れてるけど、言っただって多分無理だから言わないことにする。

「んじゃ、そろそろあがるか」

「そうですね。ほら、先輩、行きましょう」

「あ? ああ、すぐ行く」

その後、僕らも温泉から上がって、部屋に戻る前に各々がしたいことをするためにバラバラになって分かれた。

といつても、売店で何か買うくらいしかやることないんだけど。手持ち無沙汰になっていた僕はとりあえず旅館の中を散策する。

とはいえ、僕はあんまり旅行を楽しめるような気分じゃ無い。

それは旅行先が地元って事もあるけれど、祝賀会の時からずっと僕の聴覚を支配していたモノのせいだ。

——自惚れるな出来損ない。

——何も生み出せないお前に生きる価値など無い。

また父の言葉が頭に浮かぶ。いや、これは実際に彼が言った言葉じゃ無い。きつとこれは僕の中に埋め込まれた呪いだ。僕自身が勝手に思い込んでいるだけでしかないのに、それが今も僕の心を蝕んでいる。

怖いんだ。前に踏み出すことが。また誰かの期待を裏切ってしまう。そんな恐怖が僕の足をすくませていた。

「あ、純君」

僕を呼ぶ声が聞こえたと思つた途端、廊下でバツタリと滝本さんと出くわしてしまった。僕は一瞬ドキツとしてしまう。しまった、こんなときに会ってしまうなんて。

滝本さんには前にも僕が昔のことを思い出したときに心配をさせてしまったことがある。祝賀書きの時もそうだ。でもこれは僕の問題であつて、彼女まで巻き込むわけにはいかない。

「・・・た、滝本さんっ、奇遇ですね。キヤラ班のみなさんは？」
僕は咄嗟に平気な表情を装つて笑みを作る。ただ、さつきまで父のトラウマに当てられていたせいで歪な笑みになっていることを実感する。

「・・・さつきまで、青葉ちゃんたちとは、温泉に入ってたんだけど・・・飲み物、欲しくなっちゃつて」
なるほど、だから僕と同じ格好しているのか。

滝本さんは、出発前の格好とは違つて、僕が今着ているのと同じ浴衣だ。屋内とは言えこの北の大地の寒さがあるからその上に羽織り物をしている。

そういえば、滝本さんの和服姿は前にも見たことあつたな。あれはコスプレだったけど。やっぱり和服はとても似合う。大和撫子という言葉は、きつと彼女にふさわしいだろう。

「そうだったんですか。僕もちょうど何か買いに行く途中だったんです」

「そっか・・・なら、一緒にいてもいい?」

「はい、もちろんです」

目的が重なったこともあり、滝本さんと肩を並べて歩き始める。それにしても、さつきのはまづかつたかもしれない。さつき、僕がどんな顔をしていたのか多分、滝本さんにはバレた。

けど――

「・・・」

「・・・純君? どうか...した?」

「い・・・いえ、大丈夫です」

「・・・めっちゃ良い匂いするー!!」

隣で歩いているとわかるけど、甘く、透き通った匂いが鼻腔のなかに充満する。温泉につかりながらお酒を飲んでいたのか、ほんのり鼻につくアルコールの匂いも、香りとなっている。

温泉に備え付けられていたシャンプーやボディソープは、男女とも同じのはずなのに、信じられない。

まだ乾ききっていない髪の毛は、後ろで結んでいるのもあって、真っ白できめ細やかなうなじが覗いている。

滝本さんの顔はちよつと火照っていて、妙に色っぽい。あと浴衣姿ということもあって薄着であるということも想像してしまう。

「・・・これは、か・・・体に悪い!!」

花男さんがあれだけ気色の悪いテンションで熱弁していたか今なら理解できる。ラノベのテンプレ展開なんかよりずっとドキドキしてしまう。

頭がのながやよからぬことで悶々としてくる。雑念や煩悩を無理矢理押しのけていると、また滝本さんから話しかけてきた。

「・・・その、純君は、明日・・・どうするの?」

「明日ですか?」

「・・・うん。私は、さつき・・・青葉ちゃんとスキー、する約束したんだけど・・・その、純君はスキー、できる?」

「はい。できますよ。っていうか、ここ地元なんですよ」

今更隠すことでもないので打ち明ける。一応、僕のここで育っていたので体育の授業でスキーはいつもやっていたから慣れている。でも久しぶりだな。上京してからめっきり機会がなくなったから。

「じゃ・・・じゃあ、純君も明日・・・どう、かな?」

「でもいいんですか? 僕が来たら涼風さんの邪魔になるんじゃない?」

「あ・・・そっか、どうしよう」

滝本さんがさっきから言っている涼風という人物を、僕は知っている。ゲーム展の時に先輩と一緒にいるところに出くわして、発売日もみかけた子だ。

最終的に彼女の友達みたいな人と一緒に佐藤さんに髪を弄られて泣き顔になっていたのが印象に残っている。

もちろん、滝本さんの誘いは嬉しいけど、一応、彼氏の僕と一緒にいたら涼風さんも気を使わせてしまうんじゃないだろうか。

「まだ時間がありますし、明日は涼風さんと一緒にいてあげてください」

「・・・うん。ごめんね」

ちよつと残念そうな顔をする滝本さんを見て、やっぱり一緒に行こうかなと後悔しちゃうけど、その前に気になることができた。

「・・・」

「あの、何か悩んでいたりします?」

ちよつとだけ、滝本さんの顔がどこか別のことを考えているように見えてしまい、訪ねてしまった。ひふみは凶星だったのか、目を丸くする。

「・・・わかるの?」

ちよつと、僕も悩んでいたからか、滝本さんも同じなんじゃ無いかと思っただけ予想通りでびっくりした。なにより、旅行が始まる前からずっと一人で考えているように見えたから心配になったんだ。

・・・いつもなら、言いたくないなら言わなくて大丈夫と言ってしまっただけで、彼氏なんだし聞いておいたほうがいいのかな。

花男さんも、女の子の悩みは聞くだけ聞いた方が良く。あと、解決

するのが目的じゃ無く、相手と悩みを共有して共感するのが嬉しいのって言ってたな。

「僕でよかったら、話してみてください」

「……うん、わかった」

滝本さんは最初はちよつと遠慮気味な顔をしてたけど、ゆつくりと彼女のペースで話し始めた。

「あのね、青葉ちゃんのことなんだけど……いつもすごいなあって、思っちゃうの」

「どうしてですか？」

すごいって言っても、何がすごいのかわからなかったので聞き返してみる。これも、花男さんに教わったことだ。適度に相づちや質問をして、相手が話しやすいようにしろって言っていた。

「その、青葉ちゃんはね、私より後輩なのに……キャラ班のみんなと、笑顔でおしゃべりできるの……」

確かに、前に見かけた時だって、ちゃんとチームの一員っていうか、その空間に入り込んでいた印象がある。それは、ひふみのいるキャラ班の人たちがみんないい人だってこともあるんだろうけど、ひふみの言うとおり、入社して半年でそれができるのってすごいな。

「私は……いつも考え込んでばかりで……青葉ちゃんより先輩なのに、ダメだなんて……青葉ちゃんみたいにできればキャラリーダーの話も、前向きに考えられたのに……」

え？ キャラリーダー？

滝本さんが!?

いきなり昇進の話になってびっくりしてしまうけど、ここで滝本さんの話を遮ったら元も子もないので黙っている。

「私なんかより、青葉ちゃんがキャラリーダーになった方が……いいんじゃない、かなって……思っちゃって」

滝本さんが不安がるのはわかる。僕も同じ悩みを抱えていた。

でも、少なくともそれはちがう。滝本さんがリーダーに向いて無いだなんて間違ってる。

「……滝本さんなら、きっと大丈夫だよ」

「思わずそう口にせずにはいらなかった。」

「そう・・・かな？」

「だって、考え込んでるってことはみんなのことをどうすればいいかってちゃんと考えてるからだと思うよ。滝本さんのそういうところは、僕も励まされたことはあるから」

「そうだ。」

滝本さんはみんなのことをちゃんと考えてる。考えてるから迷うんだ。でもそれが間違いかと言われたらそうじゃないと思う。

「人のことを考えられない人もいる。多分そういう人って、裏切られるのが怖いんだと思う」

実際、僕もそんな節があったと実感する。上へ上へという上昇志向は視野を狭くする。昔の僕と今の僕でも、見えているものは後者のほうが多くなっている自信がある。

「そして何より——」

「——僕が滝本さんの部下なら、この人を裏切りたくないって思える。だから、自信を持って欲しい」

自分を卑下しないで欲しい。滝本さんは、自分が思ってるよりもずっと素晴らしいひとなのだから。

「・・・」

と、自分が言わなきゃと思ったことを全部、滝本さんに伝えたと思った途端、僕は冷静になる。そして自分の失態に気づく。

「す、すみません！ 話を聞いてるだけだったのに余計なこと言つて・・・」

「う、ううん。大丈夫・・・だよ。ちょっと、恥ずかしかっただけ・・・だから」

うん、確かに僕も恥ずかしい。

なんだよ、この人を裏切りたくないって・・・なんのドラマの台詞だよ。

恥ずかしさのあまりに、逃げ出してしまいたいとおもってしまいうになるけど、どこかつきものが取れたひふみの顔を見て、安心した。

「純君、ありがと・・・」

ああ、こうして彼女と話しているだけで、憂鬱な気持ちだったこの旅行も楽しいと思えそうだ。

その後、滝本さんとは売店に向かう道中やその最中はずっと一緒にいた。帰りはひふみの部屋まで彼女を送ってから自分の部屋へと向かった。

「……」

だけどうしてだろう。

滝本さんはまだ浮かない顔をしていたような気がした。

私にできること

佐藤視点

社員旅行の最初の夜が明けて、日がもう空の頂点に上がっているころになっていた。社員旅行に来ている他のメンバーはスキーをするためにゲレンデに飛び出したり、各々がしたいことをしているところだろう。

それで、俺は何をしているかというところ――

「りん、俺だ。入るぞ?」

俺は旅館の部屋のドアをノックすると、しばらくしてドアが開かれた。ドアの向こうにいたのは遠山だった。

「あ、佐藤君。どうかした? あら、それは?」

遠山は俺の手元にあるものを見て目を丸くする。

「八神が風邪で倒れたらしいからな」

俺が盆の上ののせていたのは一人前程度の小さな土鍋だ。中には粥が入っている。

八神の奴、今朝急に倒れ込んだと思ったら風邪をこじらせたらしい。そりゃ、こんな寒いところなんだから急な温度の変化に体が着いてこなかったんだらうか。日頃から身の回りのことを遠山に任せてるからこうなるんだ。

「わざわざありがとう。これ、もしかして佐藤君が?」

「旅館の人に事情を話したら台所貸してくれたんだよ」

テレビの旅番組とかで、料理人がホテルのキッチンを貸してもらっていたことがあったから試しに頼んでみたらあっさりOKしてもらえた。

「まあ、そうだったの」

「つか、お前、さっきまで八神の看病してたのか?」

「うん、やっぱり心配だったから」

俺はため息をつく。よくもまあ、毎度毎度、あのバカの世話をしてくれるなこのバカは。

・・・そのバカを好きになっているバカがこうしてなんで自分の恋

敵のバカのためにこんなことしてんだらう。

「つたく、朝から看病しててお前がうつつたら世話ねえだろ」

「そうだけど・・・」

「お前も少しは休んどけ、八神の看病は俺がするよ」

「ええ!?! いいのよ佐藤君! 佐藤君だつてせつかくの旅行なのに」

「それはお前も同じだろ? 休めるときに休んどけ」

「・・・」

遠山はどこかもしかしそうに俺を見ているが、やがて首を縦に振つた。

「そうね。せつかくだから佐藤君に任せるわ」

そう言うと一度部屋に戻った遠山は、しばらくして戻ってきた。どうやら荷物をまとめてたらしい。

「その、ありがとう。佐藤君」

「・・・」

遠山が見せた笑顔に少し目をそらしつつも、俺は彼女と入れ違いに部屋に入つていった。

「ゲッ・・・なんで佐藤が入つて来んの?」

部屋に入つて待ち構えていたのは、俺ら男性社員達の部屋よりも数倍は広い部屋とその真ん中で布団にくるまった八神だった。八神は俺を見る度顔色を変えた。

「お前が風邪で倒れたつて言うからりんと変わつて看病しに来たんだよ。ありがたく思え」

「・・・別に頼んでないよ」

冷静に考えれば、こうして風邪を引いた奴の看病をするのは二度目になるのか。あのときは八神が遠山を早退させようとしたとき俺に車を出させたんだつて。

八神は遠山と違い、弱つても気丈に振る舞っているのだが・・・まあ、恋敵なんだしちよつとイラツとした。

「お前がそうやって身の回りのこと全部りに押しつけた結果だろ
うが、少しは反省しろ」

「……」

「とりあえず粥でも食べ。旅行の間ぐったりしてりんがお前に気を遣ってるのを見るとうっとうしいからさっさと治せ」

持ってきた盆を八神の布団のとなりに置く。それから、前に遠山の看病していたときのようになり、粥を小皿によそおってそれを八神に差し出す。

「……わかったよ。もう」

不満げだが、起き上がって小皿を受け取る八神。今朝はあまり食欲が無かったから少なめにしておいたが、普通に食べている。食欲が沸かなくても、胃に何か入れておかないとそれこそこの三日間をつぶすことになる。

それは遠山の三日間もつぶすことだということをわかってるのだろう。

八神は驚くほど早く小皿の中の粥を食べきった。どうやらまだ足りないらしく、また小皿を受け取ってよそおってやる。

「……佐藤って、料理上手いんだね」

もう一度小皿を受け取った八神は、ボソリとそうつぶやいた。

「別に、レシピ通り作ってるだけだ」

「うっそだ。私で作っても全然上手くならないもん」

「練習すりゃ誰でもできるようになる。絵もそんなもんだろ？」

「そりゃそうだけどさ……」

遠回しに、遠山の世話なしに自炊でもしてみろと言ってやるとすぐに弱気になった。まあ、俺も一度コイツの家に行つて遠山の飯を食つてんだよな。

「まったく、俺も俺でなにやってんだか。」

結局、八神は粥を全部食べ終えることはさすがにできなかったらしいが、電子レンジもあるので時間が経ったらまた食べればいい。

風邪を引いた病人にしてはまだ元気な方だ。俺もコイツの頭を冷やしているタオルを新しいのに変えている最中に、また八神は言葉をごぼした。

「アンタはさ、なんか私のこと嫌いみたいだけどさ」

「？」

耳を傾けると八神は独り言のように続けた。

「私はアンタのこと嫌いじゃ無いよ。少なくとも、いつも真面目に頑張ってる人は皆好きだ」

真面目・・・ねえ、俺はそんなまつとうな理由で頑張っちゃいないのだが。

「だから佐藤のこと結構好きだよ」

「そりやどうも」

そういう言葉の意味が毎度毎度あやふやだよな。俺ら三人つてよ。英語ならLIKEとLOVEではつきり分かるつてのに、難儀なもんだ。

「りんの次にだけど」

「・・・まあいけどよ」

俺はゆっくり立ち上がる。いくら看病つて言っても四六時中いたらそれこそ八神が休まらないだろう。

・・・遠山なら話は別だろうが。ま、ついでにスポーツドリンクなんか買つといてやるか。

部屋を出るためにドアの前に立つとなんだか人の気配がした。

ドアを開けるとそこには遠山が立っていた。

「・・・何やってんだお前？」

とりあえず寝ている八神を刺激しないために部屋を出てから遠山に話しかけると、返事をしてきた遠山はなんか機嫌がいい。つかお前、休んでろつていったのになんでこんなところでスタンバってるんだよ。

「なんか二人とも良い雰囲気だから邪魔しちゃ悪いかなつて」

「なんだそりゃ？」

前にも話しただろうが、俺は八神が好きとかそんなんじゃないんだよ。それはどうやら本人も分かっているようで、

「いつも喧嘩ばかりだけど、やっぱり私達って同期なんだなつて思っただけ」

と嬉しそうに微笑んでいる。

「あ、そうだ佐藤君。この前誘ってくれたの。今夜でも大丈夫だよ」
俺に気を遣ってか、遠山は前に話したことを振ってくれる。
しかし、

「いや明日にしよう。八神が心配だろ？ 気を遣わなくて良いから」

あえて俺は断った。

これは、俺がヘタレたわけじゃない。れっきとした作戦だ。

「えっ、そう？ なら、そうするね」

少し驚いた顔をしたが、すぐにいつもの顔に戻ると彼女は俺と入れ違うように大部屋へ消えていった。

それを確認してから俺は一息つく。

「…ふう」

そして、すぐにその場から立ち去った。スマホの画面を開くと、俺はある人物にメッセージを送った。

佐藤：八神の容態は良さそうだ。明日には体調は回復すると思う。

うみこ：了解です。

佐藤：遠山に誘われたが、指示通り断っておいた。

うみこ：良い判断です。

うみこは続けてメッセージを送る。

うみこ：遠山さんの事です。風邪をひいた八神さんが心配で貴方に集中できない可能性があります。

確かに、容易に想像できる。

それでは意味が無い。

少なくとも、俺にもつと魅力があればそんなことする必要はないのだが、無い物ねだりしても仕方が無い。

うみこ：決行は明日。1900に。八神さんは私が引きつけます。

こういう時にも軍隊用語を忘れないのか。普通に午後7時とかでいいだろうに。

まあ、協力してくれるのだ。本人も乗り気な以上、水を差す必要も無いだろう。

うみこ：ご武運を。

最後のメッセージに、珍しく心が燃える。

ここまでハッキリと背中を押してくれる人間がいなかったからだ。
花男さん、敦さん、葉月さん、飯島、涼風。

今思うと碌な人間がいらない。涼風は比較的まともなほうだったが。

「さて……鬼が出るか蛇が出るか」

明日、俺の史上最大の夜が始まろうとしていた。

●
ひふみ視点

「あの、ひふみ先輩、何か困ったことでもありますか？」

「え？」

今日一日、日が暮れそうになるまで青葉ちゃんとスキーをしていた私は、青葉ちゃんと温泉に浸かりながら寒いゲレンデで冷え切った体を温めていたときだった。

青葉ちゃんは露天風呂の石畳の上に積もった雪で雪だるまを作った拷問？してたのをとなりでお酒を飲みながら見ていたところ青葉ちゃんがそんなことを切り出してきたのだ。

「さっきの食事中も元気が無いように見えて、思い返してみると、空港の時から上の空だったりするのも何度かみかけましたし……」

青葉ちゃんの言葉に反射的にドキツとしてしまう。なにより青葉ちゃんに心配をかけてたなんて思いもしなかった。

私は葉月さんにこの前相談されたキャラダーのこと、そしてそれを相談した純君のことで、実は今日一日頭がいっぱいだったんだ。

「もしかして、彼氏さんと昨日なにかありました？ ま、まさか……今日私のスキーの練習に付き合ってくれたせいでケンカしたとか!？」

「う……ううん。そんなんじゃないよ。純君も、わかって……くれたから。……ただ——」

——ただ、昨日の純君のことが私はずっと気になっていたから。

思えば昨日に始まったことじゃない。昨日見た純君の辛そうな顔を、私は見たことがある。

たまに見せる怖い顔。

あの純君の顔——自分には何の価値も無いって思っているような

顔を見たとき私は純君が無理に隠そうとしている節が、それを私はただ励ますことしかできなかった。

純君と付き合うようになってから、しばらくは純君がああ顔をすることはなくなつたから、大丈夫なんだと思つてたけど違つた。

でも、祝賀会以来、またその顔をするようになっていた。きっと純君は何か抱えてるんだ。それこそ私なんかよりもずっとつらいものを。

それなのに昨日、キャラリーダーのことで、ただ自分に自信が無いだけの私にあんなことを言つてくれた。純君にはいつも助けてもらつてばかりだ。

私が彼にしてあげたことなんて何も無いんじゃないかと思つてしまふほど。

その上、私はまだ純君の作つた曲をネコババしちやつたことをまだ打ち明けられてない。

純君は優しく、勇気があつて、思いやりがあつて、自分より私なんかを気にかけてくれて、それに甘えてる自分が情けない。しかも、隠し事なんてするし……。

「ひふみ先輩っ。また上の空になってますよ！」

「えっ!? あ、ご……ごめんね、青葉ちゃん」

青葉ちゃんの言葉にハツとする。また青葉ちゃんに心配かけさせちやつた。

うう……純君のことともそうだし、青葉ちゃんにまで、やっぱり自信なくしちやうなあ。

「やっぱり、その、彼氏さん……純さんのことなんですよね？」

訪ねてくる青葉ちゃんに対して、私は何も言わずにうなづくことしかできない。すると青葉ちゃんは言つた。

「その、私で良かったら話してください。なんていうかその——裸のつきあいですっ」

突然の言葉に私は青葉ちゃんに聞き返してしまふ。

「えっと、それってどういう——」

「すべてをさらけ出した裸のつきあいの最中なら、なんでも話せ

ちやうと思っんです!」

「な、なんでも・・・」

「はい、なんでもです!」

「・・・・・・・・」

なんだか、青葉ちゃんももうノリと勢いで話しているような気がする。その証拠に、勢いよくそう言ったけどすぐに自信のなさそうに眉毛を八の字に変えた。

「すみません。こんなことしか考えつかなくて・・・・・・・・」

でもその八の字もすぐに消えて、まっすぐな目で私を見てくれる。

「でも、悩んでるひふみ先輩をみて、何もできないのは嫌だなんて思っちやっただんです」

「青葉ちゃん・・・」

青葉ちゃんの目を見てると、思い切つて、相談して見ようかなという気が少しずつだけ湧いてくる。

もう私が悩んでることはバレちゃってるんだし、このまま黙つても、青葉ちゃんに余計に心配させちゃうだけだもの。

なにより、このまま言いたいことを言えない自分が純君に釣り合うわけがない。

「ありがとう、青葉ちゃん」

私は、青葉ちゃんにできる限りぜんぶ話すことにした。キャラリーダーこと、純君のことも。

純君のことは全部話すのは恥ずかしかったけど、青葉ちゃんは最後まで聞いてくれた。

自信がないことも、

自分が皆の意見を聞いたり、自分の考えをちゃんと伝えたりできるか心配なこと、

純君が悩んでることに私がなにもできていないこと、

そしてなにより、私のせいで純君や皆にめいわくかけたくないから、何も言えなかったこと。

それをつたなくても、自分の言葉にして青葉ちゃんに伝えた。

「こんなこと相談されても、困るよね」

全部話し終えたあと、黙って聞いてくれた青葉ちゃんに申し訳なく
なつてつい謝つてしまう。

「ごめんね・・・」

「あの、ひふみ先輩は、キャラリーダーのことや、純さんと恋人でい
るのが嫌なわけじゃないんですよね？」

「え、それは・・・」

改めて青葉ちゃんにそう尋ねられると一瞬迷うけど、違うつてすぐ
に思えた。私は純君のことが好き。だけど、彼女として自信がない
だ。

青葉ちゃんは私の気持ちを代弁してくれるように続けてくれる。

「自信がないから迷ってるだけで、本当はやってみたって、純さん
のことだつてもっと頼つて欲しいって思ってるんじゃないですか？」

・・・そうかもしれない。私は純君にもっと頼つて欲しい。それこ
そ、もっと甘えてほしい。頑張り屋の純君が少しでも自分に自信を
持つてもらえるようになってほしい。

だつて私は知っている。彼が7年間、作ってきた曲の数々を。

それが、何よりの証拠だ。

音楽のことを全然知らない私にできることは少ないかも知れない
けれど。

彼を支えられるような私でありたい。

「私、ソフィアちゃんを任せられたとき、実はすつごく不安だつたんで
す。八神さんの足を引っ張ったりしないかな、他の仕事もたくさんあ
るし大丈夫かなつて」

確かに、コウちゃんがいきなりキャラデザの仕事を渡したとき、青
葉ちゃんすごく大変そうだったことを覚えてる。でも青葉ちゃんは
楽しそうに続けた。

「でも、やってみたらすごく楽しかったんです！ 敦さんの受け売
りなんですけどね、私はソフィアちゃんの命を作ったんだつて。モノ
を作ることは、誰かの夢を作ると言うことだつて。それつてすごいこ
とだと思いませんか？」

青葉ちゃん、敦さんにそんなことを言われたんだ。でも、そんなこ

とより、青葉ちゃんが必死になって私を励ましてくれてるってことが伝わってきてとても嬉しくなる。

「うん、思うよ」

「ですから——え、えつと……あれ？ 私何が言いたかったんだろ？」

「私も……前向きになってもいいってことだよね？」

「そ、そうです！ 私、ひふみ先輩がキャラリーダーをやってくれたら、すごく嬉しいですもん！ それに、ひふみ先輩が好きな人とうまくやれていくなら、なおさらです！」

「どう……して？」

青葉ちゃんは良い子だけど、そこまで言ってくれるのか、私なんかここにまでしてくれるのか聞かすにはいらなかった。

「だって私、ひふみ先輩が作るモデル、大好きですから！」

笑顔でそう、言ってくれた。そして——

「それに、ひふみ先輩が純さんに見せた顔、今まで見たことなかったですもん。だからきつと、ひふみ先輩なら、純さんも信じてくれるはずです！」

やっぱりすごいよ、青葉ちゃんは……。すごく前向きで、力強くて……。そんな風に言われると私もそうした方が良くないかと思ってきちやう。

私は青葉ちゃんに、改めてお礼を言った。

「ありがとう、青葉ちゃん」

すぐに答えを決めるなんて、私にはできないかもしれない。でも少しだけ考え方が変わった。

そして、私が純君に何をすべきなのかも、分かった気がする。

明日はもつと純君と話そう。せつかくの旅行なんだし、二人でどこか遊びに行こう。

純君の辛いことは、一人で抱え込ませないように彼の話を聞いてあげよう。

自分に価値がないなんて言わせない。

そして、純君の支えになってあげられるように。

私は音楽とか、サウンドとか、純君の仕事のこと全然分からないけど、とおおいけど、そんなモノがなくなつて、純君と隣を歩いて行ける存在になりたい。

だって、私は、純君の『彼女』なんだから。

湯煙の中で

ゆん視点

「はく、極楽、極楽」

夜、はじめと一緒に初体験のスキーを楽しんだ私は、温泉に浸かって、雪山で冷えた身体を暖めていた。

最初はまったく滑れへんかったけど、コツを掴むと案外楽しめるもんな。青葉ちゃんもひふみ先輩とリフト降りられてたし。

件の二人はというと、なんか、二人で話している。随分と真剣な雰囲気だから、私は少し離れたところで湯船に浸かっていた。

「ゆん、おっさんみたいだよ」

「なんやてー!」

後ろを振り返ると、そこには私の悪友のはじめの姿があった。

はじめにはいつも揶揄われている気がするわ。

まあ、ええんやけど。

隣り合って湯船に浸かりながら、いつもの調子で言い合っていると、脱衣所を遮る戸が開く音がする。

「おや、先客かい。相変わらず二人とも可愛いね。携帯を持ち込めないのが惜しいよ」

バスタオルで髪を結んでいたから一瞬誰かと思ったが、特徴的な眼鏡ですぐにわかった。

葉月さんや。

いつものボリウムのある灰色のウェーブがかかった髪が結んであったから気がつかなかった。相変わらず綺麗な人や。普段の変態的な言動がなければ、普通に美人の部類に入る。

「あー、葉月さん、お疲れ様です!」

はじめは葉月さんを見ると、いつもの調子で挨拶をかます。私もうるさくならないように会釈して。

なんか、はじめと葉月さんは最近よく話している気がする。前の面談とか企画書を出したとか話してたような。

ようやるわ。そんなん作ってたって通る訳ないのに。

「隣良いかな?」

「はいっ」

葉月さんはお湯で身体を軽く流したあと、私達と同じ湯船に浸かる。それも、すぐ隣。

「……」

うっ……大きい。

はじめもとてつもないほど大きいけれど、葉月さんもそこそこある。

二人が隣で並んでいるのを横から見ていると、さながら昼間滑った雪山を彷彿させるほどだ。

まさに、山脈。

それに比べて私は……思わず両手で掬ってしまった。手の平に乗るくらいの量しか無い……。

「ゆん?どうしたの?」

「なんでもあらへん!」

変に悟られないように気丈に振る舞うが、あることを思い出ししまった。

それは、敦さんと葉月さんの関係。

二人はかつて恋人同士だった。

それは、学生同士のようなアソビなどでは無い大人の関係。つまり、恋人として行う行為を最後までしているということを意味している。

敦さんは、かつて葉月さんの……その、はじめに匹敵するほどのモノを――

「?」

あ、あかん!

葉月さんと目が合ってしまった。さつきまで胸元見ていたのがバレてまう!

恥ずかしくなって目を逸らしてしまう。

「あ、あの、私、もうあがりますねっ!」

「ちよ、ゆん!?!」

もの目のクマやむくみが完全に消えている。ゲーム展や有給の時に見せてくれたハンサムな顔。

あの時はある程度覚悟してたからまだ耐えられたけど、今は違う。心臓がドキドキして、頭が沸騰してしまいそうだ。

「ん？」

敦さんもこちらに気づいたようで、私に声をかける。

「飯島か。なんだ、お前も受けに来たのか？」

「ちやいますよ。ちよつと散歩してたらたまたまここを見つけたんです」

「そうかい……」

相変わらず私を見ると、少し距離を置くような態度を取る。この前の夜以来、私が苦手になってきているみたい。確かに、ビンタしたのは悪いと思っているけれど、あれはもうチャラってことになったはずなのに。

何を気にしているのだろう。

でも、あれだけひどい状態だった身体が見違えるほど綺麗になっている。温泉の効能の成果、肌も艶が出ている。

「……」

「……」

「んじゃ、俺はもうひとつ風呂浴びてくるよ」

敦さんは、しばらく私を観察してから、避けるような態度を崩さなのままその場を去っていった。

「……」

何も無い踊り場で一人残された私は周囲を見渡す。

「……………はあく、死ぬかと思ったあ」

誰もいないことを確認してから、その場に膝をつく。緊張のあまり立つことすらできない。

いやほんま心臓に悪いわ。まさか、敦さんに、しかも綺麗な方と遭遇してしまうなんて思ってもいかなかったからだ。

まだ心臓の音が脳まで響く。元々体温が高くなっていたせいか汗もヒドい。敦さんがいるときはまだなんとかなったけど、今は全身か

ら滝の余蘊流れている。これじゃあ温泉に入ったばかりなのに、これじゃあ意味があらへん。

「……うちももう一辺入ろうか」

このままじや寝苦しいに決まっとする。とはいえ、さっきの温泉に戻ればまだはじめと葉月さんがいるかもしれない。

はじめの性格や。葉月さんと長話している可能性がある。

鉢合わせてしまうのは避けたい。

「あ……」

と旅館の散策を再開していると、また開けた場所に出た。またのれんが下げられている。それには湯と書かれていた。

あ、そう言えば、まだここの温泉には入ってない。

ええ機会やし入ろうか。

他の人もおるかもしれないけれど、はじめと葉月さんじゃなければこの際なんでもええわ。

のれんを潜って通路を進むと脱衣所に出た。そこもさっきの同じく薄暗くて不気味な雰囲気がある。

「……誰もおらん」

意外にも、脱衣所には誰もいなかった。拍子抜けしたけどまあええわ。服を脱いで、タオルを持って浴場への扉を開ける。

「おおお……」

思わず感嘆の声が出してしまった。

私の視界に広がったのは広々とした露天風呂。それも、かなりの広さがある。

空に映える満天の星空の下、大自然と一体化したかのような解放感のある景色が広がっている。

眼前に広がる濃い湯気が夜空をより際立たせていた。

「すごいなあ……」

早速、洗い場に行って身体を洗う。

この場所を貸し切りで楽しめるといふのだ。心が躍らないはずがない。

ゆつくりと肩まで浸かりながら星空を眺めていると、今日一日の疲れが取れていく気がする。

大きく息を吐くと、身体から力が抜けていきそうになる。先ほどまでの動悸もウソみたいや。

「はく、極楽、極楽」

なぜか、声が揃った。

誰かおるのかと思ひ、顔を上げると、隣には

「……ん？」

「……え？」

敦さんがいた。

「なんだ飯島か」

「敦さんですか」

「……」

「……」

「!？」

二人同時に驚いてしまった。慌ててお互い顔を背ける。

な、なっ、ななななんやこの状況!

いるはずが無い場所に、彼がいた。さつき、踊り場で出会った綺麗な顔で。

しかも、お互い裸のまま。身にまとっているのはタオルのみ。

な、なんでこんなコトに!

「なんでお前がここに」

「それはこっちのセリフです!」

私はパニックになる思考を必死に整理させる。落ち着け私、こんな時こそ冷静になるんや。

まずは状況を把握せえへんと。今この瞬間において一番気になることは何や?

決まっている。

敦さんのことだ。彼はなぜここに来たんだろう。それは温泉に浸かるためだ。でもなんでここににいるのか。

ここは女湯じゃないという可能性しか。

「……」

「……」

「……まさか」

今度は二人の言葉が一致した。

そして、そのまさかだった。

「こ、こ………混浴ですか？」

「ああ、考えたくないがな」

最悪や。

最悪の状況や。

「………」

沈黙が痛い。

「すまん」

先に口を開いたのは敦さんの方だった。

「いや、俺の配慮が足らなかつた。まさか混浴だとは思わなかつたんだ」

そう言い訳しながら頭を下げる。こういう時、すぐ謝るのは彼の癖。風邪を引いてお見舞いに行ったときもそうだった。

しかし、今の私にとって彼の謝罪などどうでもいいことだった。

それよりも、問題なのは……。

ちらりと横目で彼を見る。

そこには一糸纏わぬ姿の敦さんがいる。

彼が風邪をひいたときに見た枯れた身体。

それがすぐ隣。お互い裸同然の格好で、無防備に晒されている。それだけじゃない。

いつもはだらけているのに、こうして真面目に謝っているときの表情。普段とのギャップに胸が高鳴ってしまう。

「……あ、あの」

「なんだ？」

「……あまり見ないでください」

「わ、悪い」

私のお願いに素直に応じてくれた。

「……」

「……」

あかん、ドキドキしてきた。今まで意識していなかったのに、急に
見てはいけないものを見てしまった気分になってしまう。

「あー、ここ広いですね!」

「そうだね、まだこんな場所があつたなんてね」

「!?!」

聞いたことがある声が、露天風呂に響いた。

それは、先ほどまで共に湯に浸かっていたはじめと葉月さんの声
だった!

う、ウソやろ!

なんでこのタイミングで!?

こんなところで敦さんと一緒にいるところなんて見られたら絶対に
誤解されてしまう。というか、会社にもいられへん!

「おい、隠れるぞ」

それは敦さんも同じようだ。幸い、まだ二人は気がついていない。
周囲の湯気が、私達を隠しているようだった。私たちは急いで岩陰に
隠れて身を潜める。

「な、なんで一緒のところに隠れるんですか!?!」

「仕方ないだろここしか無いんだから!」

見つからないようにお互い小声で言い合う。

「もうちよつと向こう行ってくれませんか?」

「無理言うな! これ以上動いたら見つかるだろうが!」

「じゃあ、もつと離れて下さいよ!」

「お前こそ離れろつて! くつつくな!」

「敦さんこそ!」

「つーか、お前は見つかっても大丈夫だろ!」

「嫌です!」

「何でだよ!?!」

嫌なもんは嫌なんです。私も二人から逃げてここに来てもうた
んです。

ここでまた遭遇したら、さっきのことを聞かれるに決まってる。私に誤魔化せる自信なんて無い。

「ふうく、やっぱり露天はいいですねえ」

「伸びをするはじめくんも可愛いよ」

言い合っている私達にはまだ気がついていないのか、はじめと葉月さんはのんきに談笑を続けていた。

「そう言えば、ゲーム展の時に敦さんの同期って人にあったんですけど、葉月さんと敦さんって付き合ってたんですね」

「!？」

その場に葉月さんと自分しかいないと思いついでいるのか、随分踏み込んだことを聞いている。そんなこと、ディレクターである葉月さんに聞くなんて、はじめの心臓は何で出来とるんや。

図々しいにもほどがあるやろ。あの時も、敦さんに逃げられて何も聞けなかったし。

「ああ、流石にバレちゃったか。まあ、いつまでも隠せるモノでもないか」

「…」

葉月さんは照れるわけでも、否定するわけでも無く、ただ事実を認めめた。

その言葉に、どこか自分の胸が鋭利なモノで抉られるような感覚になった。

「敦さんとはいつ頃からお付き合いを？」

「それは秘密だよ。私はあくまで永遠の20歳なんだから」

はぐらかすような言い方だったが、きつと入社当時からだろう。敦さんが入社した時にはすでに一緒に働いていたはずだし。

「またいつものヤツですか。じゃあ、付き合い合ってた頃はなにしてたんですか？」

「…そうだねえ」

葉月さんの声に肩が震えた。

いや…やめて。

聞きたくない。敦さんが他の女の人と一緒にいた話なんて。

耳を塞ぎたいのを我慢して必死に堪えた。だって、すぐそこに彼がいるのだから。

そんなところ見せたくない。

でも、彼女の口から決定的な言葉が出るのは時間の問題だった。

そして……。

「手を繋ぐぐらいかな」

「ええ!？」

「嘘だけど」

「ちよ、勘弁して下さいよお」

「ごめんね、はじめ君をからかうのが楽しくて」

「……」

私は、安心なんてできなかった。

それは、ある意味では本当に恋人だったことの裏返しだ。

だって、葉月さんは敦さんとの関係そのものを否定していない。自分の年齢を誤魔化しているだけ。

本当にかつて二人は愛し合っていたというなりよりも証拠だった。

「それじゃあ、少し早いけどそろそろあがろうか」

「はい!」

はじめと葉月さんは二度目からか早めに湯船から出て、露天風呂から消えていった。

「……」

また、私と敦さんしかいない空間にもどる。

「……」

「……」

気まずい沈黙が続く。

あんな話を聞かなければ、もう少し浸かっていたかった。

なんで、どうして、よりによってこんな時に聞いてしまうんよ。

彼の過去に嫉妬しても意味がないのに。

そんなことを思う自分が嫌になる。

「……………」

先に口を開いたのは彼の方だった。

「なんで泣いてるんだよ？」

言われて目元に手を当てると涙が出ていた。慌ててそれを拭いながら誤魔化する。

「な、なんでもありませんよ。目にゴミが入っただけですって」

「ほんとか？」

「ホンマですってば！」

彼は心配そうな顔をしながら私の方に近づいてくる。

もう、これ以上来ないでほしいのに！ 今、彼に近づいたら、抑えている感情が爆発してしまいそうになる。

もう、やめてほしいのに！ なのに、彼は止まらない。

そして、目の前まで来たところで足を止める。

「本当に大丈夫なのか？ ならいいんだけど」

そう言っただけで私から離れていく。

離れていけばいくほど、心が落ち着く。

安心してはいるはずなのに、胸の奥に穴が空いたように寂しさを感じる。

矛盾だらけの気持ちに心がぐちゃぐちゃになった。

「まあ、大丈夫ならいい。俺はもう上がる。お前も早いうちに上がれよ？ 他の男の客が来るかもしれん」

「…はい」

そう言うと、敦さんは身体をゆっくりと起こして温泉から上がる。

「……」

最後に残されたのは私一人。誰もいない露天風呂に私だけ。

さっきまでの賑やかな雰囲気とは一変して、静まり返ったこの場所。

そこでただ一人、うずくまる。

「っ……」

葉月さんと敦さんの関係は、もう終わっている。二人の性格だ。寄りかたを戻すことなんてないに決まっている。

なのに、聞きたくなかった。想像したくなかった。

敦さんが私以外の女の人で笑っているところなんて、
ずっと見ない振りをしていた。
気付いていたのに否定していた。
他人にまで悟られたのに誤魔化した。
でももう無理だ。
この気持ちを無視できない。

私は――

私は――

私は――

——敦さんの事が、好き。

名前を呼ぶよ

純視点

今日も、あんまり眠れなかったな。

旅館の食堂から出た僕は、朝ご飯を食べたあとなのに、僕は大きくあくびをしてしまう。

社員旅行に来て、2回目の朝になった。なんと僕たち男性社員は狭い部屋を三人で分け合った。だけど、必然的に相撲部屋のようにギチギチになり、とても熟睡できたものじゃなかった。

やっぱりこれって、葉月さんがわざと狭い部屋を取ったんじゃないのか？

一番熟睡できていたのは先輩なんだけど、あの人でなんであんな環境で寝られるんだ？

不満の籠もった疑問が膨らむけど、それを言い出したらいつもとほとんど変わらない理不尽だったりするので口にするのも億劫だ。

まあ、いずれにしても、この北海道じゃ、昔のことが夢に出てきてしまいそうだから寝れないとは覚悟していたことだし、実際、浅い眠りに入れてもそれが夢に出てきたような錯覚に陥り結局眠れなかった。

「——ん」

まあいいや、まだ旅行の時間はある。疲れは温泉でもじっくり休まるはずだ。

さて、今日は何をしようか。昨日はずっと旅館で作曲してたのだけど、一日中ねばって全然筆が進まなかった。旅行前に花男さんも言ってたように、気分転換でもしようか。

「——くん」

といっても、街に観光なんてやることないしな。地元だし、スキーは・・・いっつか。とても体を動かす気にはなれない。ていうか眠い。どうしよう。となるとますますやる事がなくなってきたぞ……………。

「純君っ！」

「はっはっはっ!?!」

「っ!?!」

突然、僕を呼ぶ大きな声が聞こえて心臓が爆発しそうなほど驚いてしまった僕は慌てて振り返ると、僕が振り返ったことに驚いている滝本さんがいた。

滝本さんはよっぽど驚いたようで、そのまま尻餅をついてしまい、廊下の上へへたり込んでしまう。

「あ……す、すみません。滝本さん、大丈夫ですか!?!」

「うん……大丈夫」

すぐに滝本さんののもとに駆け寄って、手をさしのべて立ち上がらせる。

「あの、もしかしてずっと呼んでくれてました?」

「うん……」

「すみません、ボサツとしてて」

しまった。まさか寝ぼけたせいで滝本さんのことを無視してしまっうなんて、僕はなんてことを……。

申し訳ない気持ちでいっぱいになる。下手すれば滝本さんに嫌われてしまうところだったのだから。

「昨日……あんまり眠れなかったの?」

「……はい、ちよつと寝心地が悪かったせいで」

「そっか……」

「?」

滝本さんはなにか考える素振りを見せるけど、すぐに何か閃いたよくな顔をした。でもまた彼女の顔色がわかった。今度は恥ずかしそくな顔をした。

「……ねえ、純君」

ゆっくりと話始めた滝本さんの言葉を聞くことに徹していると、滝本さんはとんでもないことを言ってきた。

「私達の部屋に……来ない?」

●
なぜだ?

なぜこうなった?

僕は今、滝本さんが泊まっている部屋、つまり、女性達がついさつきまでここで眠っていた部屋にいる。そこは僕たち男性社員三人の部屋よりも一回り大きい。これなら、8人くらい入っても十分個人のスペースがあるくらいだ。

・・・葉月さん、なんでそこまで依怙贖するんだアンタは。さすがにこれは言い訳できないだろう。

だけど今の僕には、そんなことをいちいち気にしている余裕はない。だって僕が今いるのは女性がいた部屋。たとえそれが1日程度だったとしても、僕たちがいた部屋よりも違う空間にいるみたいに錯覚してしまう。

あと不思議と良い匂いがするし・・・。

「その・・・楽にしている、から」

「あ・・・はい」

滝本さんは僕を部屋に案内してからというものの、部屋の中を見渡して何かを探している様子だ。それから何かを見つけた彼女はそれらを手取る。

「滝本さん・・・それは?」

ひふみが手にしていたのは綿棒の入ったプラスチックの袋だった。昨日、佐藤さんが同じモノを寝る前に使っていたのを思い出した。

この袋がゴム製のあれに見えなくもないのは気のせいだと信じていんだけど・・・。

いや、端から見たらすごい状況だよなこれ。

恋人と、旅館の個室で二人つきり。これが社員旅行じゃなかったらどうなっていたのだろうか。

自然と邪な考えが本能的に浮かんでしまうのを理性で押さえつけていると、滝本さんは何も言わずに座布団を敷いてそこにチョココンと正座をした。

それから――

「その・・・おいで?」

自分の膝を、ポンッと叩く。

「・・・滝本さん?」

いや・・・あの、滝本さんが何をしたいのかはもうここまで来れば大体わかる。

綿棒に正座——つまり、耳かきと膝枕。

でも・・・なんで？

「いいから・・・おいでっ」

顔を真っ赤にして、両手をもじもじさせながらも、改めて僕に言う。どうやら滝本さんもこれをするのに相当勇気を振り絞ったようにで恥ずかしそうに、というか半ば自棄になってるような気もするのだけど。

「え・・・えっと、失礼します」

僕は正座している滝本さんの隣まで来る。そして僕はなるべく、滝本さんに負担のかからないようにゆっくりと彼女の——浴衣だけの薄い布で隔たれただけのふとももに自分の頭を乗せた。

右耳の穴が滝本さんに見えるように顔を横にするけど、緊張しすぎて全然リラックスできない。

だって太ももだよ!?

浴衣の薄い布地の向こう側には滝本さんの太ももがそのままある。これを想像しただけで心臓が張り裂けてしまいそうだ。

「純君・・・その、肩の力、抜いて？」

あまりに緊張過ぎていたのを見かねたのか、滝本さんは僕の頭をソツと撫でてくれた。

「・・・いーん、いーん」

「・・・」

この感覚は・・・。

不思議な感覚に陥るのを自覚する。この感覚は、マスターアップ直前に滝本さんと肩を寄せあった時と同じだ。心臓は聞こえてくるほど高鳴っているのに、なぜか心が落ち着く、安心する。

女性を目の前にしたときにアガってしまうときとは違う不思議な感覚。

「落ち着いた？」

「はい・・・なんとか」

なんか滝本さんの雰囲気がいつもと違う。あのちよつと儂げでたまに慌てたりするんじゃないやなくて、年上の……余裕のあるお姉さんみたいなの。

「それじゃあ、耳……いくね？」

ひふみは綿棒を手にとると、それで僕の耳の溝や入り口を優しい手つきで吹いていく。

耳の中をすぐに掃除すると思ったけど、まずは外側の方からやるのか。でも、僕の肌と綿がこすれあう音だけでも気持ちよくなってしまう。

想像以上に脱力してしまった僕は、ひふみが取る次の行動を予測することができなかった。

「――」

ふーつと僕の耳に甘い香りを帯びた吐息が僕の耳を通り抜けていく。

まるでそれは僕の全身を突き通っていくようで、僕は身震いせずにはいられず、情けない声をこぼしてしまう。

「っあ……！」

「……純君、可愛い」

微笑むような声でささやく。やっぱりいつもの滝本さんじゃないという違和感を感じるけど僕にはそれすら考える余裕がない。

今ので、完全に彼女に身をゆだねてしまった。

だけどこれで終わりじゃない。まだその本番だつて始まっていないのだから。

「その……危ないから、動かないでね？」

滝本さんの手に持たれている綿棒が、僕の耳の穴に入っていく。為す術ない僕はそれを受け入れるしかない。

「っ……」

耳の中は外側とは違って、肌が柔らかい。それに柔らかいけどほどよく固い綿棒が触れあって、行ったり来たりを繰り返している。

クリクリと、ソリソリと、コリコリと、場所によって変わる音や感触が僕の背筋を振るわせる。ゾワゾワさせる。

滝本さんの繊細な手の動きが耳の穴の皮膚の表面にこびりついた古い角質を剥がしていく。それがどれだけ心地良いか、言葉にすらできなかつた。

やがて、永遠かと思われた時間も終わりを告げ、僕の耳から真っ白だったはず綿棒が茶色くなって出てきた。これで半分。そしてその前にまたアレが来た。

「――」
滝本さんの息が、また耳の中を透き通っていく。今度は耳の中には何も邪魔をするモノがないので奥へ奥へとその余韻が響き渡ってくる。

同時に、一昨日意識しすぎてしまっていた匂いが脳に染みこんでいく。

もはや声すら上げられない。それだけ骨抜きにされてしまっていた。これでようやく半分。意識を保てる自信がなかつた。

――
――
「……どれだけ時間が経つただろう。」

僕は滝本さんの太ももの上で横になったまま動けない。

左耳も同じようにされた僕には、もう起き上がる気力さえも抜け落ちていた。ここまでされて意識が保っていただけまだ行幸なのかもしれない。

「……ねえ、滝本さん?」

完全に彼女に身をゆだねていたけど、どうしても口に出さずにはいられなくて、僕はゆっくりと半開きになった口を動かす。

「なに?」
「どうして、ここまでしてくれんですか?」

いくら腑抜けになっても、骨抜きになっても、頼りがいなんてない、情けないところを見せてしまったのに、どうして僕を想ってくれるのか、聞きたくて仕方がなかつた。

「私は、純君のことが好きだから」

滝本さんは僕を見下ろしながら、迷わずそう言ってくれた。こんなところ、意地も見栄も全部取っ払ってしまったのに、この人はそう言ってくれるんだ。

「……だから私、純君がどんなことで悩んでるのか知りたい」「え……っ?」

「だって純君は、私の悩み、聞いてくれたでしょ?」
「でも……」

僕はこの期に及んで隠そうとしてしまう。知られたくないから、今まで滝本さんがすてきだと言ってくれたモノが、全部偽物だなんて、そんなこと――

「私は、純君の隣でいたい。嬉しいことや楽しいことだけじゃない。辛いことや悲しいこと、分かち合っていたい。だって――」

――私は純君の彼女だから。

堪えてきたモノが、歯止めが気がづ溢れていく。こみ上げていく熱いナニカを留めることができなくなっていく。

そうか。僕の好きな人は、こんなにも僕のことを想ってくれていたのか。

視界がかすんで、ほほえみかけてくれる愛しい人の顔が見えなくなってしまうと、彼女はそれを優しくぬぐってくれた。

「だから聞かせて? 私、ちゃんと聞くから」
「……」

もう、何を取り繕ったって無駄だ。それに、僕はこの人ともっと一緒にいたい。だから話そう。それは、きつとこれから大切にしなければならぬことだから。

「……えっと、何から話せば良いんでしょうか」

ここまで引つ張っておいて、そんなところでつまづいてしまった。元々誰にも話すつもりもなかったことだから、一から記憶を掘り返さないといけない。でも、滝本さんの顔を見ていると次第に落ち着いてきて少しずつ話す言葉を思い出してきた。

「僕は子供の頃から、ピアノを習っていたんです」

かつての栄光を、もう忘れたいと思っていた過去を、僕は口にする。

「まだ小学生にもならないころからピアノを始めたんです。父のレッスンも厳しくてよく殴られました。でも、そのおかげなのか、僕は色んなコンクールで優勝できたんです」

言うなれば無双だ。

小学、中学、高校、同じ年や一つ二つ年上のライバルなんて相手にするまでもなく、日本のコンクールを総ナメし尽くした。海外にも出たこともある。そこでも入賞したことだって。

「父はどれだけ結果を出しても、一度も僕を褒めてくれませんでした。でも、それは割とどうでもよかったです」

「・・・なんで？」

「僕を認めてくれる人は、たくさんいました」

封印した記憶を、過去の栄光を思い返す。するとあの風景は目を閉じていても目に浮かぶ。

「コンクールで素晴らしい演奏をしたとき、優勝したときの観客の顔。あれを見る度、僕は自信を持てた。僕は、認められている。僕は生きていいって言ってもらえる気がして」

だから頑張れた。どんなに辛くても苦しくても、それが僕が生きていいと言う証明になるのであれば僕はやっていけると勝手にそう思ってしまった。けど――

「けど、違ったんです。僕は本当は嫌だったんです。ピアノだって本当は大嫌いだっただんです」

ならば、僕がジストニアになったのは必然かもしれない。だって、僕が何よりも憎んでいたのはそれだったから。

「僕はピアノが嫌いだった。僕の生き方を、僕の尊厳なしに勝手に決める。そんなモノが憎くて仕方なかったんです」

これに気づいたのはいつだろう。多分、無意識には感じ取っていたことだけど、わかったときにはもう全部遅かったんだと思う。

「それでも、周りは期待していた。僕がそれを奏でることを。たとえそこに、僕の意味がなかったとしても。だから応えるしかなかった」

でもそんなハリボテはいつか壊れる。

嫌いなことを、憎むことを一生やり続けることなんて、それは好きなことを一生やり続けることと同じくらい難しいんだ。

「だから、18歳最後のコンクールの前日、突然僕はピアノが弾けなくなっただんです。僕の指どころか、体全身まで動かなくなっただんです」

「それって、もしかして・・・」

「・・・ここまで話せば、彼女でも分かるだろう。」

「僕が滝本さんに聞かせた曲、アレ全部僕が弾いた曲じゃないんです。確かに作ったのは僕だけど、それを奏でたのは僕じゃないんです」

これが僕が滝本さんにずっと隠していたことだ。

怖かったんだ。もしも、この人の期待まで裏切ってしまうことが。僕の曲を素敵だと言ってくれた人を、また僕のせいで裏切ってしまうんじゃないかって。

そして僕は続けた。

あのととき、僕がピアノが弾けなくなっただけで、コンクールを棄権せざるを得なくなっただけで済んだときのこと。そして、ジストニアと診断されてしまったこと。

当時の周囲の期待は、僕がかつて打ち立てた功績のせいで、とても収集がつくものではなかった。散々なことを言われた。

そして、父からも――

――お前はなぜ生きている。

――何も生み出せない人間に生きる価値など無い。

それは僕の心を踏みつぶすには十分すぎたこと。

そして、逃げるようにここを飛び出した僕は東京に出て専門学校に通ってここに就職した。

この会社に入ったのも、音楽の業界では名前が知れすぎていたから、どこも採用してもらえなかっただけ。

でも、僕には音楽しかなかった。例え、ピアノが弾けなくなっても。だって、ピアノが弾けなくなった瞬間、僕には何も無くなっちゃったから。

それが、僕の全部だと。

「……………」

「それ以来、ずっと聞こえるんです。父の声が」

「…っ」

そして、ようやく本題だ。

彼女が知りたいこと。僕が見せてしまったあの姿の話だ。

「その声が聞こえると、心が竦むんです」

「…そっか」

「その言葉の通りなんです。だって、ピアノを弾くこと以外で、僕が僕である理由が無かったから」

ピアノを弾けなくなっと思って思い知ったのだ。

自分が空っぽであるということに。

だから、父の言葉を聞くときどんな時でも心が折れそうになる。聴覚がそれに支配されて、心と体が萎縮してしまうんだ。

滝本さんの目が、とても悲しそうな色になる。だから話したくなかった。

「ああ、でも」

僕は続けた。

「二度だけ、一度だけはそうならなかったんです」

そう、一度だけその声を振り払えたことがある。

「それって？」

「ゲーム展の時です。あの時、滝本さんが泣いちゃった時も父の声が聞こえたんです」

でも僕は止まらなかった。いつものように萎縮して、否定することで精一杯ではなかった。だって、滝本さんが泣いていたから。

「……………」

僕は裏切りたくなんて無かった。

滝本さんを。

本当は怖いはずなのに僕と話してくれた、逃げ出したいはずなのに勇気を出して会いに来てくれた、僕を頼ってくれたこの人を。

「滝本さんの勇気と優しさを、裏切りたくなかったから」

滝本さんは僕の長い話を、最後まで聞いてくれた。でも、どう言い繕うとも僕は彼女を騙してしまった。裏切りたくないと言って置きながら、状況をごまかしただけで結局、彼女を裏切ってしまった。僕をこんなにも大切に思っている人を。

「ごめんなんさい。今まで騙すようなことをして」

すべてをさらけ出してしまった僕はもう何もごまかすことができない。ただ彼女の返事を待つ。怒るかもしれないし、失望させてしまいかもしれない、ひよつとしら泣いてしまうんじゃない——

——でも、僕を見下ろす滝本さんの手は僕の頬を優しく撫でた。

「話してくれて、ありがとう」

予想外の滝本s何の返答に呆気にとられてしまう。なんで・・・僕はずつと騙すようなことをしていたのに、あのときの滝本さんの笑顔を裏切るようなことを、なのに、どうしてそんな優しくそんな顔をしてくれたんだ？

「・・・私ね、その、純君の演奏。今まで聞いたことないからわからないけど・・・でもねこれだけはわかるよ」

ひふみは言った。

「私は、純君の曲が大好きだから。それに、私は純君がピアノだけしか価値のない人だとは思ってないよ」

「・・・なんでですか？」

僕の声は、震えていた。もう過ぎたはずのものがまた溢れてしまいそうになっていたから。でも、彼女はやめてくれない。

「私にまたお話しようって言うてくれたこと、一緒にドーナツを食べてくれたこと、コーヒをこぼしてやけどしそうになったとき私を庇ってくれたこと、一緒に帰ろうって言うてくれたこと、私のこと嫌いにならないって言うてくれたこと、わたしのことを・・・好きって、言うてくれたこと」

・・・ああ、この人は一体——

「純君は私に素敵なことをたくさんしてくれたんだよ」

——どれだけ僕の心を締め付ければ気が済むのだろう。

そこからさらに時間が経った。僕はずつと泣いていた。滝本さん

はずっと、僕のそばでいてくれた。

「・・・ねえ、純君。私も純君に話したいことがあるんだけどいい・・・かな?」

僕は無言で頷く。

「・・・えつとね、純君は、私が純君のプレーヤーを間違って持って帰っちゃったときのこと、覚えてる?」

忘れるわけがない。

今思えば、あれがあったからこうして滝本さんといれるのか。運命って何が起るか分からないな。でも、それが今どうしたのだろうか?

「私、敦さんのデスクに置く前に自分のパソコンに純君の曲、勝手にダウンロードしちゃったんだ」

「えつとそれって?」

「ね・・・ネコババ、しちゃったの」

「もしかして、キャラリーダーのこと以外で悩んだのって・・・」

「それ・・・なの」

それを聞いたとき、僕は思わず吹き出してしまった。さっきまで泣いていたのがウソみたいだ。

「え・・・ええ!?!」

「そんなの、メッセでも相談してくればよかったのに」

「も・・・もうっ! わ・・・私も、言うタイミングとか、き、嫌われちゃうかもって思ったんだよっ」

「す・・・すみません」

想像以上に怒ってしまった滝本さんを見て、すぐに謝るけど説得力の欠片もない。

でも彼女にお詫びできることなんて考えつかない。

「・・・反省、してる?」

「・・・はい」

「なら、お願いが・・・あるの」

願っても無い。ここまでしてくれたのに怒らせてしまったのだ。どんなことでもやってあげたい。

「その…名前、で、呼んで…ほしいの」
「へっ？」

滝本さんは頬を赤らめながら小さな声でつぶやくように言った。

「ほ……本当に、いいんですか？」

「うん……」

恥ずかしそうに俯いて、小さくうなずく滝本さん。

「ひ……ひふみ……？」

「うん、純君……」

その瞬間、心臓が大きく跳ね上がった。全身の血流が激しくなった
感覚に襲われる。顔から火が出そうだ。きつと今の僕の表情は真っ
赤になっているに違いない。

「…もう一回」

「えっ、あの」

「だめ……かな？」

そんな聞き方、卑怯じゃないか。

「…ひふみ」

「…うん」

「ひふみ」

「うん」

「ひふみ」

「くっっ！」

名前を呼ぶ度に顔を赤くして照れるひふみ。

嬉しくなった僕は何度も彼女の名前を呼ぶ。

きつとこれからずっと、この名前を呼ぶのだろう。

この愛おしい人の名前を。

「あの今日の夜、二人で観光行きませんか？」

「え？」

「だって、昨日は涼風さんとスキーしてたみたいだし、午前中はひふ
みとゆっくりしてたいっていうか」

「……うん」

ナチュラルにジゴロめいたことを言ってしまうけど、滝本さん――

いや、ひふみはちよつと照れながら首を縦に振ってくれた。

「でもさすがにこの部屋にいるのはマズいと思うので」

「あ・・・確かに」

忘れてたけど、ここはあくまで女性社員達が取っていた場所。いくら彼女のが承があつたとしてもそうそう長居して良い場所じゃない。二人でいるなら、ロビーとかもつとゆっくりできる場所があるはずだ。

僕は立ち上がって、ひふみに手を伸ばす。

「立てますか？ 足痺れたりとかしてないですか？」

つていうかさつきからずつと膝枕されてるんだから、ひふみにも負担がかかっているんじゃないか？

僕はようやく動く気になつたというか、いつもの調子に戻つた気がする。とりあえず起きよう。

足とか痺れたりしてるかもしれない。そろそろどいたほうがいかもしれないな。

身体を起こした僕はひふみの手を取る。ひふみは答えるように僕の手を握り返してくれる。

「大丈夫・・・正座は慣れ——きやつ!？」

「——うわっ!？」

ひふみは立ち上がった途端、バランスを崩した。やつぱり足が痺れていたんだ。

そして、当然彼女の手を握っていた僕も、バランスを崩してしまう。

「痛てて・・・」

派手に尻餅をついてしまった僕だったけど、目の前の光景にそれどころではなくなつてしまった。

「・・・あ」

ひふみは、まるで僕を覆い被さるようにして怪我はないみたい。でもこの体勢は、ひふみが僕に寄り掛かっている形になっている。

そして、ひふみの顔が今日話して一番近くなる。それは、キスができてしまいそうなほど。

僕はひふみの青色の瞳を見つめる。ひふみもジッと僕を見つめ返

してくれた。

そうだよな。動こうにもひふみが足が痺れてちや動けないよな。なら——僕たちは目を閉じる。

「んっ……」

そのまま、僕達は深いキスをした。

絡み合う音が僕達の世界を支配していくなか、僕達は幸せに満ちていた。

史上最大の夜

ひふみ視点

社員旅行

三日目の夕方、私は休んでいた大部屋で一人。
あるモノと対峙していた。

それは、社員旅行に来る前にうみこさんと買いに行った2種類の下着だ。

私はこれから純君と二人で旅館の外へ観光に行く。その時にどちらを身につけていくべきか迷っていた。

「…」

一つは可愛いデザインが気に入って買った物。

もう一つは、うみこさんが颯爽と買っていたのを目の当たりにして、買ってしまった物。

一度お店を出た後、思い直した私が衝動的に手に入れた。正直後悔している。

明らかに面積が小さく、サイドを紐で結ぶ物。

デザインは前者の様な可愛らしいものであるのが唯一の救いだけど、これを履いて純君に会ってしまったて大丈夫なのだろうか。

彼の目の前でほどけてしまったりしたらと思うと、何も考えられなくなる。

「……」

私は後者を手に取る。

もう覚悟を決めなければならぬだろう。

ここであんなことまでしたんだ。今更、怖じ気づいてもしかたがない。

そうでない、全部話してくれた純君に答えることなんてできないから。

それに、純君は優しい人だからきつと笑って許してくれる。そう思うけど……、でもこんなことで嫌われたりしないかな。引かれたりしないかな。

私は二つの下着を持ったまましばらく固まっていると、突然部屋の扉が開かれた。

「あ、ひふみ先輩。温泉行きませんか？」

現れたのは昨日、私に相談に乗ってくれて、背中を押してくれた青葉ちゃんだった。

彼女に私の持っているものをてしまった。

「ひ…ひふみ先輩、なんですか？ それ」

「え、いや、その……」

恐る恐るの声で青葉ちゃんが指さしたのは、私が手にしていた下着だった。

「その…まさかっ」

聡明な青葉ちゃんのことだ。これがどういう用途で使われているのか、きつと気付くに決まっている。

その証拠に、目を丸くして、口をパクパクさせていた。

「ごっ、ごっごっごめんなきーい！ 何も見てませーん！」

「あ、青葉ちゃ…待って、その、これは……行っちゃった」

●
うみこ視点

「にしても、アハゴンが私と二人で飲みたいだなんてめずらしいね」「うみこです。いい加減にしてください」

私は居酒屋のテーブル席で向かい合うように座っている八神さんにツッコんだ。

この人は毎回毎回、何度言えばうみこと呼んでくれるのでしょうか。

まあ、今回は良いです。あまり雰囲気悪くして遠山さんと合流なんてさせたら意味ないですから。

……佐藤さん、うまくいつていると良いのですが。

私にできるのはここまでです。後は佐藤さんがどこまで遠山さんと距離を縮められるにかかっている。

この社員旅行のチャンスを逃すのは、かなり痛手だ。せめて、何かしらの進展があればいいんですけど……。

「ん〜、このお刺身おいしく」

私の心中など察するわけもなく、八神さんは目の前のお造りを口に運ぶ。

「誘った私が言うのもなんですが、病み上がりで大丈夫なんですか？」

「大丈夫だよ。昨日はずっと寝てたんだし」

と、余裕綽々でビールをあおる。

その顔を見る限り、確かに体調が悪いように見えない。

でも、先日の体調不良の原因は明らかに過労でしょう。普段から体調管理を遠山さんに任せている証拠です。

しかし、それはそれだけ二人の関係の良さを表している。

佐藤さんにとって戦況はかなり厳しい。本人も覚悟の上だろうが、このままでは遠山さんの気持ちは変わらないかもしれない。

「おーいくね」

少し考え事をしていたら、いつの間にかグラスが空になっていた。作戦のこともある。

お酒は強い方ではあるが、酔いつぶれるほど飲むわけにはいかない。少しでも時間を稼がなくては。

あるいは、何か有用な情報を聞き出すことができればいいのだけだ。

「すみませーん。ビールおかわりお願いしますーす」

「あ、私も同じものを……」

「あいよー!」

店員さんの声と共に厨房の方へと消えていく。

これでしばらく時間稼ぎができるはずです。その間に何か打開策を考えなければいけませんね。

私は運ばれてきたジョッキを手に取りながら思索した。

「そう言えばさ、最近、りんが変なんだよね」

「？」

不意に、八神さんがそんなことを言い出した。

「なんか、この間の面談の後もなんか悩んでたし。結局、原因わかん

なかつたし」

「……そうなんですか」

これは好機だ。

八神さんからその話題を振ってくれば、こつちも話を聞きやすくなる。

「何か心当たりはないんですか？」

「ゼーんぜん、普段なら、どこかご飯連れて行ったら機嫌良くなるのにならなくてさ」

「…」

佐藤さんが7年感。この生殺しの状態にされている理由がわかった。

八神さんと遠山さんの関係が進展しない理由も。

この人、遠山さんがご飯を食べたから元気になったと思っただ。

正確には、八神さんと出かけたから機嫌がよくなったなのに。

確実にこの人の鈍感さも一枚噛んでいる。

それと遠山さんがそんな八神さんに夢中なのと、佐藤さんがヘタレだということ。

なんですかこの地獄。

複数の気持ち渦を巻いて、抜け出せなくなっている。巻き込まれた涼風さんが本当に可哀想だ。

「あーあとさ。なんかさ、最近、佐藤の話ばかりするんだよね」

「……詳しく聞かせてもらえますか？」

● 佐藤視点

旅館のロビーで一人、コートに身を包んだ俺は人を待っていた。

昼間、元気にスキーを楽しんでいた涼風達を思い出すと、これからどれだけ冷え込むかを予感させた。実際、そこそこ暖房が聞いているはずのロビーも多少冷える。

これは、早めにどこか店に入った方が良いな。

「佐藤君」

そして、俺が待っていた時が来た。

柔らかく母性的な声に反応すると、遠山が歩いてくる姿があった。肩からストールをかけており、その上に紅色コートを羽織っている。彼女も夜が冷えると思いい、準備していたから遅れたのだろう。

早歩きで俺の隣までたどり着いて、遠山は小さく息をつく。

「ごめんね、待たせてしまつて……」

「いや、そこまで待つてないさ」

本当は結構待ったけどな。

まあでも、このぐらいの嘘なら良いだろ。

「んじゃ、行くか」

「うん」

こうして、俺達は旅館を出ると、旅館側が用意したシャトルバスで駅前まで降りる。

既に日は完全に落ちていているが、街灯のおかげで歩くには困らない。むしろ、雪道の方が暗いかもしれないくらいだ。

時折、風に吹かれて舞い上がる粉雪を見て、遠山が小さく笑みを浮かべて言う。

「綺麗……」

その横顔はとても美しく見えて、思わず見惚れてしまった。

だが、すぐに正気に戻ると慌てて顔を逸らす。

「どうかした?」

「……別に」

……危なかった。

見惚れていたのがバレるところだった。

しかし、改めて見てみても、彼女は美人だ。

「もーコウちゃんったら、前から約束してたのにうみこさんの挑発に乗っちゃうなんて、ひどいよね」

「…そうだな」

少しだけ罪悪感がわく。

うみここと口裏を合わせて八神と彼女を引き離したんだ。きっと彼女にも予定が合ったのを、無理に俺に合わせてくれたのだろう。

そう思うと申し訳なくなる。

「私だって楽しみにしてたのに」

「それは災難だったな」

「本当！ だから、今日は思いっきり楽しまないとね！」

遠山の言葉を聞いてホツとする。

「どうやら怒ってはいないらしい。」

それに、彼女が言った通り、せっかく来たのだ。うみこに背中を押してもらったのだ、やれるだけのことをやろう。

そんなわけでまず向かった先は居酒屋。

テーブル席で向かい合うように座り、簡単に乾杯を済ますと早速注文をする。

この店に着く頃にはもうかなり冷え込んでいたから熱燗にした。

日本酒はあまり飲まないのだが、遠山と同じ物を頼んでみた。

「じゃあ、乾杯」

「うん、乾杯」

チンツとグラスを当てて、同時に一口含む。

アルコール特有の苦味が口に広がり、喉を通って胃に流れていくのを感じる。

美味しいかどうかはよくわからないが、嫌いではない。

そして、遠山の方を見ると……彼女は幸せそうな表情をしていた。

「うん、おいしい」

「こういう居酒屋でよかったのか？」

「うん、結構有名なお店なんだって」

「そっか」

それなら良かった。

適当に料理を頼みながら話をしているうちに酒が進んでいく。

「佐藤君はお酒強い方？」

「まあ、ソコソコ」

見てみると、彼女の頬が少し赤い。

結構飲んでいるが、これでもセーブしているほうだ。

涼風の歓迎会とか、祝賀会みたいになつたらどうしようかと思つて

いたが、

「それでね、コウちゃんつたらね、旅行前日なのに全然着替えとか準備して無くてね。結局全部自分が用意したの。いつも自分でやりなさいって言ってるのに、ホントしようがないんだから」

「……」

いつもと変わらんな。

●
純視点

「あ、ひふみ…どうしたの?」

「う、ううん。大、丈夫…だよ」

旅館のロビーで僕はひふみと待ち合わせていたのだけど、少し不自然な様子だった。

どこかソワソワしているというか、特に腰周りを気にしているような気がする。

…もしかして、今朝のアレが原因なのかな。

僕には想像することしか出来ないけれど、やっぱり恥ずかしかったりしたんじゃないかな。

まさか、女性社員が休んでいた部屋であんなに大胆にキスしたわけだし。

「そっか……。じゃあ行こうか」

「うん……」

いつもより口数が少ない彼女と一緒に旅館を出た。

旅館から出ているシャトルバスである場所に向かう。

この辺りは地元では無いけれど、有名な観光地。彼女に是非楽しんでもらいたい場所がある。

シャトルバスの奥の席で隣り合うように座る。

その間ずっと彼女は自分の腰周りとか太股とか気になるのか落ち着きがないように見えた。

「あの、ひふみ、どこか具合でも悪いんですか? 顔色が悪いように見えるのですが……」

心配になった僕はそう聞くと、彼女の肩が大きく跳ね上がる。

「そ、そんな…こと、ない…よ」

「本当に大丈夫ですか？」

「うん……」

「ならいいんだけど……」

ひふみは誤魔化す様に微笑むだけだった。

そのまま僕は無言のまま目的地に到着するまでバスに揺られた。窓から見える山々が近づいてくる頃、ようやく目的地に到着したようだった。

バスから降りると、目の前に広がる光景に息を飲む。

「すごい……」

それは圧巻としか言いようが無いものだった。

眼前に広がるのは煌びやかな装飾で彩られた街波。建物も日本らしいモノでは無く、まるで別の国に來たかのような錯覚に陥る。

背後にはナイトスキーのための照明が点灯しており、夜の街と雪で覆われたゲレンデを幻想的に照らし出していた。

来月に迫るクリスマスに備えてか、街全体が色めき立っているようだ。

「あ、雪……」

ふと空を見上げると白い粒のようなものが落ちてくるのが見える。

「降ってきましたね」

「うん」

「風邪引いちゃわないようにしないと」

「そう…だね」

先程から様子がおかしいと思っていたけど、どうやら今は景色に見惚れてしまっているみたいだった。

「喜んでくれたなら嬉しいです」

「あり、がと……」

二人してしばらくその景観に見入ってしまう。

「……あつ、ごめん、ね。私、ばかり…見ている」

「いえ、大丈夫です。それより、少し歩きますか？」

「うん……」

そう言うと、僕らは並んで歩き始めた。
手を繋いで。

手袋も、わざわざ外して。

でも、手を伝う温もりのおかげか、全然冷たくなかった。

ここはスキーだけじゃ無く、洗練された飲食店やお土産、宿初施設が充実したりゾート開発地。

並ぶ看板は英語ばかり、日本語表記のお店は数えるほどしかない。
僕たちはそんな異国情緒あふれる道を二人で楽しむことにした。

日本では見ることの出来ない海外の食品、お土産やスキーグッズなどを見て回り、お店に入ってみる。店内に流れる音楽はロック調の音楽がかかっており、お客さんも外国人が多め。そんな中に日本人として 入るのはなんだか不思議な気分だ。

「あ……これ、かわいい」

「どれですか?」

ひふみが見つけたのはスノードームと呼ばれる小さなガラス製の置物だった。

中にはサンタに扮した女の子の人形が入っている。

「買いますでしょうか?」

「え……?」

「すいませーん!」

僕は近くを通りかかった店員を呼び止めると、「プレゼント用で」と伝えると包装された袋を受け取り財布を出す。

「あ……あの」

「はい?」

「ありがとう……」

「どういたしまして」

そして僕らは再び手を繋ぐと店を後にした。

時刻は既に19時をとくに過ぎていくこともあり、夕食を取ることにした。

選んだ場所はスキー場内にあるレストラン。

僕らが案内されたのは個室のようなテーブル席で、目の前には大き

な窓があり、そこからゲレンデを一望できる。

「わあ、すごい……」

「いい眺めですね」

僕らは向かい合って座り、メニュー表を見る。

「何にしましょうか」

「私は、これが……いい」

彼女が指差したのは『本日のディナーセット』と書かれたページ。そこには数種類の料理の写真が載っている。

「じゃあ、僕もそれで」

「わかりました」

ひふみは店員を呼ぶと、注文をする。

数分後、運ばれてきたのは小さめの鍋とサラダ、それにワイングラスに入った赤紫色の液体。

「これは……?」

「シエリー酒、って……言うんだって」

「へえ、そうなんですか。初めて見ますね。なんかおしやれな飲み物ですね」

「うん……」

ひふみは小さく笑うと、僕の方を見た。

「あの、今日は、本当に、ありがと……」

「いえ、こちらこそ付き合ってくれて、ありがとうございます。楽しかったですよ」

そう言っただけで、彼女は俯いて頬を染める。

しばらくして食事を終える頃には夜はすっかり更けていた。

外に出ると、イルミネーションでライトアップされていた。降っている雪と反射して、さらに煌めいて見える。

「きれい……」

ひふみも同じことを思ったのか、感嘆の声を漏らす。

そのまましばらく見ていると、不意に手を強く握られる。見ると、顔を真っ赤にしたひふみがいた。

「まだ……帰りたく……ない……」

消え入りそうな声でそう言った。

「……っ!?!」

彼女の言葉に心臓が大きく跳ね上がる。もちろん、それは僕も一緒だった。

周りを見ると、他のカップルたちも同じようなやり取りをしているようで、辺り一面幸せムード一色だった。

「……」

「……」

お互い何も言えず、ただ黙ったまま見つめ合う。すると、突然強い風が吹き荒れた。

「きゃっ」

短い悲鳴と共によろめく彼女を支えるように腰を抱く。

「大丈夫ですか?」

「はい……でも、ちよつと寒いかも……」

そう言うと、肩を寄せてくる。

その仕草にドキツとした。

「じゃあ、もう少しだけ、歩きませんか?」

「……うん」

僕は彼女を連れて、再び異国情緒の街波へと歩みを進めた。

――
――

「もうバス、なくなっちゃいましたね」

あれからどれくらい歩いただろうか? 気付けばシャトルバスの時間は終わってしまい、今や車が通ることの無い道路に僕らは立っていた。

「ごめんなさい。こんな時間まで連れ回してしまって……。寒かったですよね?」

「ううん……大丈夫。それに、私も……もつと一緒に居たかった……から……」

上目遣いで恥ずかしげもなくそんなことを言う彼女にまたドキドキする。

しかし、ここから旅館までは距離がある上にバスは通っていないためタクシーを使うしか無いのだが……あいにく今は近くにいないよ
うだ。

「……」

「……」

無言のまま立ち尽くす。

その時だった。

ひふみが僕の手を握りしめて来た。思わず驚いてしまう。

「ど、どうしました?」

「……」

顔を上げて何かを喋ろうとするが、すぐに俯いてしまう。

そして何度か口を開きかけるが、結局何も言わずに口を閉じた。

「……」

「……」

それからしばらくの間、沈黙が流れる。

「あの、そろそろ、戻りましょうか」

これ以上遅くなる前に彼女を帰さなくては。

そう思つて声をかけるが、彼女は首を横に振る。

「あ、あの……」

「もう少し、純君と、いたい……」

「え……?」

「お願い……」

ひふみは真つ直ぐに見つめながらそう言うと、僕の手を握る手に少し力を込めた。

「……っ」

胸の奥がきゅっと締め付けられるような感覚に襲われる。

「で、ですけど……旅館に戻らないと」

「明日、東京に、帰るん……だよ……?」

「……」

「だから、せめて……今夜、だけは……」

「……」

「わがまま……なのはわかってる……だけど、どうしても……純君と、一緒に……いたくて……」

ひふみは僕の目をじつと見つめたまま、そう告げた。

「……」

正直、ここまでストレートに気持ちをぶつけられたのは初めてのことであった。

僕も同じ気持ちだ。この旅行が終われば、お互い忙しくなるだろう。

こうして、二人つきりになれる時間も限られてくる。

「わかりました」

そう答えると、ひふみの瞳が潤んだ。

それが喜びによるものであることは、口にするまでもなかった。

「本当？ よかった……」

嬉しさを隠しきれないといった様子だ。

「それでは、もう少しだけ、お付き合いしますよ。どこへ行きたいですか？」

「ほんと？ いいの？」

「でも……どうしましょう。随分と夜も更けてきたし、どこかお店とかあるかな……ん？」

ふと顔を見上げると、目の前には看板があった。この地区の看板は基本的に英語表記で、一瞬何を書いているのかよくわからなかった。

でもよく読んでみると、どうやらホテルのような名前が書かれているようだった。

「まてよ……これってもしかして。」

嫌な予感が頭を過りながらも恐る恐る聞いてみる。

「……」

「あっ……あのっ……そのっ……」

急に慌て出したところを見ると、やはりラブホだったらしい。しかも、ここはこの開発地の中でも一番高級そうなホテルだ。

「……っ」

「……」

「またもやお互い黙ってしまおう。」

「え、えっと……あのっ」

「……よ」

「え？」

「……いいい、よ」

「彼女は確かにそう言った。」

頬を赤く染めたひふみは、顔を逸しながら続ける。

その言葉の意味はすぐに理解できた。

「だって……その、純君と……なら」

「え、でも……」

「ダメ……？」

不安げにこちらを見る。

普段のたどたどしい口調にも、どこか強い覚悟が秘められていた気がした。

ひふみはきつと勇気を振り絞っているのだ。

ならば、僕はそれに答えなければいけないと思った。

彼女の方へ向き直ると、彼女の手を握る。

すると驚いたようにびくつと身体を震わせる。

そんな彼女を見て、静かに告げる。

「じゃあ、行きましょうか」

「……うん」

コクリとうなづく。

そのまま手を繋いで歩き出す。

僕らはそのホテルの中へと入っていった。

中に入ると内装は思ったよりも綺麗だった。

ロビーで部屋を選び鍵を受け取る。エレベーターに乗って目的の

階に着くまで待つ間、なんとも言えない緊張感に包まれていた。

やがて到着音が鳴り扉が開くと、そこはもう部屋の中だった。

「うわ……」

思わず声が漏れてしまう。

さすがは高級ホテルというべきか、そこらのビジネスホテルとは比べ物にならないほどの豪華な作りになっていた。

「すごい……」

隣にいるひふみが呟いた。

「とりあえず……座ろ」

「そ、そうですね」

二人で並んでベッドに腰掛ける。

ふかふかしていても心地が良い。

照明はまだついていないせいかな薄暗い。

けれど、窓から差し込む月明かりやゲレンデの雪が反射して、それなりに視界は良好で躓くことはなかった。

「純君……」

不意に名前を呼ばれて振り返る。

ひふみは真っ赤になった顔を隠すようにして俯いていた。

そしてゆつくりと手を伸ばしてくると、僕の手の上に重ねた。

ドクンと心臓が鳴る。

手から伝わる熱にドキドキしながらも、それが決して不快なもの

じゃないことを自覚する。

むしろ嬉しく思うほどに。

しばらくそうした後、彼女は顔を上げて僕の目を見た。

朧気な青い瞳。

潤んだそれに吸い込まれそうになる。

「キスして、欲しい」

消え入りそうな声でそう告げる。

「!?!」

あまりにも唐突なお願いに驚いてしまう。

「ご、ごめん……私、変なこと言ってる……よね」

困ったような笑みを浮かべながらそう言う。

「い、いえ、別に謝ることなんてないですよ」

慌ててフォローを入れる。

「ただ……ちよつとびつくりしたというか……」

「そうです、よね……やっぱり、ダメ、かな？」

少し悲しげな表情になる。

ここで断つたらまるで僕がひどい男みたいじゃないか。

「わ、わかりました。それじゃ……目を閉じてください」

「うん……」

恥ずかしそうにしながら、言われた通りに瞼を閉じる。

その様子を見届けてから、僕も目を閉じた。

お互いに見つめ合う形になって、ますます緊張が高まっていく。

ゆつくりと顔を近づける。

お互いの顔が近づくにつれて、鼓動が速くなっていく。

唇が触れ合った瞬間、身体中に電流が走ったかのような衝撃を覚え

た。

柔らかくて温かくて甘い味が口いっぱい広がる。

何度も触れあつた感触。だけど、慣れることも、飽きることもない。

名残惜しさを感じながらも、一度顔を離す。

「んっ……ふう」

息苦しかったのか、吐息を漏らしながら大きく呼吸をする。

「あの……大丈夫ですか？」

「うん……すごく……幸せ」

「なら良かったです」

「ねえ、もっと……して欲しい」

「っ……」

「お願い」

「……はい」

再び顔を寄せる。

今度はもう少し長く。

お互いの舌を絡めるようにしながら、じつくりと味わい尽くす。

静かな部屋に水音だけが響く。

どれくらい経っただろうか。

長い時間のように思えたけど、おそらくほんの数秒だろう。どちらからともなく口を離すと、銀色の糸を引いた。

「はぁ……」

ひふみは大きいため息をつくとき、そのまま寄りかかってきた。その重みを抱き止める。

「純君って、キス…上手、だね」

「そ、そうでしょうか」

「うん。なんか大人の人みたいな感じがした」

「……」

正直自信は無いのだけれど。

実際、僕は今まで女性と付き合ってきた経験はない。

当然のことだが、誰かとこんなことしたことはないはずだ。

なのにどうして……。

「それより、お風呂とか入らないんですか？」

「あ……そっか」

思い出したように立ち上がると、鞆を持ってすぐ隣にあるシャワールームの方へ歩いていった。

「ちよつと…待ってて、準備、して…くる」

「はい」

そう言うとき彼女はバスタオルと着替えを手にとって、浴室の中へと入っていった。

それを確認してから、僕はベッドに横たわった。

「ふう……」

天井を見上げながら大きく深呼吸する。

「やばい、かも……」

これから僕らがすることが、大体想像ついてしまう。まだ覚悟が決まりきっていない。

気持ちとは裏腹に彼女を傷つけないという理性が、すり減りそうになる。

いつ限界がきてしまうか、僕にもわからない。

未だに迷いがある内に、ひふみは戻ってきた。

「!?」

彼女が身にまとっていたのは浴衣。

見覚えがある。

僕らが泊まっていた旅館モノのだ。

「な、なんで、それを？」

「……だって、純君、昨日……ずっと見てた、から……こういうの、好き

……なの、かなって」

つまり僕の趣味に合わせてくれたということらしい。

わざわざ旅館から持ち出しただろう。ということは、もしかして、
こうなることをひふみは最初から予感してたのかな？

「ど、どうかかな？」

不安げな表情を浮かべる。

「……とても、綺麗です」

率直に感想を述べる。

「本当？」

「もちろんです」

力強く答える。

「嬉しい……」

嬉しそうな笑顔を浮かべる。

その仕草がまた愛らしくて、思わず抱き締めたくなくなってしま
う。でも、ぐっと我慢する。

ここで手を出したら、全てが台無しになってしまう。

そんな気がした。

ひふみはまた、僕の隣にチョココンと座る。そして、肩を寄せてきた。
彼女の体温が伝わってくる。

「……ねえ、純君」

「？」

震えるような声で聞いてくる。

「……本当に……私で、いい……なの？」

そんなの、決まっているじゃないか。

「僕は、あなたが良いんです」

「……ありがとう」

そう呟いて、彼女は目を閉じた。

ゆっくりと顔を傾けると、僕の方へ近づいていく。

僕はそれに応えるように、顔を近づけていく。

再び唇同士が触れ合った。

さつきよりも長く、深く。

それから、お互いの舌を絡ませる。

「んっ……ちゅ、はぁ……」

唾液の混ざり合う音が聞こえる。

それがより一層興奮させる。

「ふはっ……」

口を離すと、ひふみは口元から垂れていた唾液を拭いながら、トロンとした目つきでこちらを見つめている。

「いい…ですか？」

「…」

無言で小さく頷く。

それを確認してから、今度はひふみを優しくベッドに押し倒した。

「あっ……」

上から覆い被さるようにキスをする。

舌を入れ、さらに激しく貪っていく。

「じゅ、くん……」

呼吸ができないのか苦しそうにしている。

一旦口を離すことにした。

二人の間に透明な橋がかかる。

名残惜しそうに離れるその橋はプツンと切れてしまった。

ひふみは荒くなった息を整えながら、潤んだ瞳で僕を見上げてくる。

その仕草にドキツとすると同時に情欲が沸き上がってくる。

浴衣の前部分をはだかせると、信じられない光景が目飛び込んできた。

「え……これって……」

ひふみは、とてつもない下着を身につけていた。ゲーム展で見たような可愛らしいモノではなかった。

デザインこそ、明るい色でフリルも着いていて可愛らしいけれど、面積も小さい、布地も薄い。

まさか、待ち合わせたときに落ち着きが無かった原因ってこれのことか？

「やっぱり、変だよ、ね……」

「ち、違います！ ただちよつと驚いただけで……」

「ご……ごめん……こんなの、着けて、きて……」

「いや、謝らないでください。むしろ、もっと見たいって……」

「う、うん……」

「すごく、似合ってます」

「っ……あり、がと」

ひふみは恥ずかしいのかぎこちなく返事をした。でも、嫌がっていない。

安心している様に見えた。

「ねえ、純君」

「はい」

「……来て」

両手を広げて、僕を迎え入れる体勢を取る。

窓から満月の月明かりが差し込んで、彼女の身体を照らした。

目の前の光景はこうだった。

まず、この空気とお酒で惚けたひふみ。

少し乱れた暗紅色のポニーテール。

はだけた浴衣から覗くのは彼女が僕のために用意したすごい下着。

柔らかくて真っ白できめ細かい肌。

そして、右の胸元に見える黒子。

「——っ」

そんな彼女を見た瞬間、ギリギリまで保っていた理性が、全て消し

飛ぶ音がした。

● 佐藤視点

「それでね、コウちゃんったら、昨日青葉ちゃんに弱つてるところ見せたくないって話しててね。それで手を握ってほしいって」

酒が大分回ってきている。遠山が話す八神の愚痴のペースもかなり滅茶苦茶になってきて、ほぼ惚気みたいになっている。

俺もタバコを吸いながら、適当に相づちを打って熱爛を啜っていた。

「それでコウちゃん、飲み物買ってきととか甘えてくると、可愛いからついつい持つてきちゃって——あ、コウちゃんの話は一旦置いといて」

「ん？」

置いた？

あの遠山が、八神の愚痴を？

「この間ね。久しぶりに新しい下着を買いにいったの！」

「っ——！」

俺は口に含んだ熱爛を吐き出してしまった。

咄嗟に横を向いて遠山にかかることだけは避けたが、彼女は一切ペースを緩めずに話を進める。

本人もかなり酔っていて、興奮してるのか両手をブンブンと振りながら続ける。

「普段は忙しいから通販で買ってるんだけど」

「りん……」

「その時はひふみちゃんとうみこさんの三人でお店に行つてね」

「っ……」

「お店の中は可愛い下着がいっぱいで」

「遠山さん！」

俺が彼女のことを名字で呼んで初めて、俺に反応してくれた。正直、この話をこれ以上聞かされると胃が持たん。ただでさえ酒が入っているせいか針で刺されたような感覚になる。

「?」

本人はどうやら、もう何を誰に話しているのかちゃんと理解していない様子だった。

普段の豹変が鳴りをひそめているから問題無いと高をくくっていたが、こんな伏兵がいるとは思っていなかった。

「あれ? 私、何か変な事言った?」

「……いや、その……なんだその話題のチョイスは」

「……」

「……」

「……っ!?!」

どうやら、ようやく気がついたようだ。今の今まで、自分が何を口走っていたのか。

遠山の顔が一気に赤く染まっけいき、涙目になり始める。

慌ててハンカチを取り出して差し出す。

それを受け取って、顔を隠して俯いている。

「ご、ごめんね。私、ちよつと飲み過ぎてるかも」

「……ああ、そうだな。今日はこのくらいにしとくか」

「……うん」

取り乱した遠山を先に店から出して、会計をすませる。

店を出ると俺を待つ紅色のセミロングが風に揺れる。

夜風に当たったおかげか彼女の動揺も酔いもある程度収まっているようだった。

「ごめんね。お金まで」

「いや、誘ったの俺だし」

さつきまでの失態を思い返しているのか、少し顔を赤らめて目を伏せながら言う彼女。

その姿がまた可愛らしく見えてしまう。

だが、それと同時に自分の気持ちにも気付かされる。……遠山に対する好意の度合いが、前よりも深くなっていることに。

「ねえ佐藤君」

店を出た俺達は、帰りのシャトルバスが待つ駅前まで道のりを隣り

合って歩いている。そんな中、ふと遠山が口を開いた。

「この前の祝賀会のこと、覚えてる？」

「…プロデューサーの話か？」

「うん」

最近のことだ。忘れるわけが無い。

いつも八神の愚痴ばかりだから、彼女がこうして自分のことを話すのは珍しい。

きつと大事な話だ。俺は黙って耳を傾ける。

「私ね、プロデューサーになろうって思ったの、佐藤君がきつかけなの」

「…なんで俺が？」

全く心当たりが無かった。

俺は遠山の仕事のモチベーションは全て八神と対等であるためだと思っていた。

そこで俺の名前が出てくるなんて完全に予想外だ。

彼女は続けた。

「コウちゃんはね、自分の信念を持ってて、強くて、キラキラしてて、それがすごく格好いいって思ってたの。でも、そんなコウちゃんの隣に、私がいていいのかなって、不安になってたんだ」

「……」

そんなこと、考えたことも無かった。

彼女が八神と共にあることに不安があるだなんて、一辺も。

「でもね、佐藤君を見てたら勇気をもらったの。どんな状況でも腐らずにコツコツ頑張ってるどころとか、目標のために真剣になってるところとか、そんな佐藤君を見ると、自分も弱音なんて吐いていられないなって」

「…そうか」

初めて聞いた、遠山りんが抱く俺への気持ち。

本当に、こいつはどこまで健気で、真っ直ぐで、バカがつくほど素直なのか。

そう思うと、胸の奥がきゅつと締め付けられるように苦しくなる。

俺はただ、お前と一緒にいたかっただけなのに。

「そんな佐藤君に恥ずかしくないように、自分もできることをしようって、そんな気持ちにさせてくれたのが、佐藤君なの」
頬を赤らめて、隣で満面の笑みを見せてくれる。

それは、俺が惚れた、彼女の笑顔。7年間、追い続けてきた笑顔で、彼女は言った。

「いつも本当にありがとう。佐藤君、よかったですら、ずっと一緒にいてね」

「っ……」

思わず息を呑む。

いつか、屋上で放った同じ言葉。

それに一瞬、頭が真っ白になった。

そして、まるで時間が止まったかのように、周囲の音が聞こえなくなる。

気付いた時には、既に手遅れだった。

「あ……」

隣で笑う彼女の手をつかみ、俺は引き寄せていた。

「俺も……」

そのまま、腕の中に彼女を閉じ込める。

俺が求めている形と彼女が願っている形は、決定的に違う。だから、この気持ちは言えるわけが無い。

——
だけど

——
だけど

だ
け
ど
—

「俺も……ずっと一緒にいたい」

俺だって彼女と同じ気持ちなのだから。

月明かりに照らされて

青葉視点

3泊4日の社員旅行もいよいよ最後の夜になってきました。

佐藤さんと出かけていたりんさんは帰ってきてからずっと上の空だったし、彼氏さんと観光に行ったひふみ先輩は何故かまだ帰って来ない。

その状況に葉月さんは、

『（、0言0、*）くヴェアアアアアアア!!』

と、眼鏡を割りながら憤死してた。まるでどこかのモンスターの泣き声のような、はたまたモフモフや妹が大好きなお姉ちゃんの子の悲鳴のような声をあげながら。

大部屋でひふみ先輩が持っていたモノを思い出すと、頭が空っぽになった。

ひふみ先輩・・・大胆すぎです!!

あ、あんな下着で観光に行っていたなんて!!

一体彼氏さんと何をしているんですか!?

先に帰ってきたりんさんはずっとぼんやりと大部屋で窓からの風景を眺めていた。

佐藤さんも、何かしたの!?

何をやらかしたの!?

もしかして、私また何か八つ当たりされるの!?

そんな感じで、三日目の夜を迎えた私達は旅館に戻って最後の食事や温泉を楽しんでから就寝していたところでしたが、

「・・・・・・・・んんっ」

私は目が覚めてしまいました。

初日の時に見た、スキーでリフトに降りられない夢を見たときは違って急に目が覚めたというか、眠くなかったというのかわからないけれど、なんだか目が冴えていた。

辺りを見回せば、八神さんも眠っている。どうやら私だけ起きてしまったようだ。

「・・・・・・・・」

なんだろう。眠れる気がしないな。せつかくだし、ちよつとお手洗
いっいでに最後の散歩でもしようかな。

皆を起こさないように布団から抜け出した私は、ちよつと冷えるの
で羽織り物を身につけてから部屋を後にした。

夜の旅館というのは電気が消えているので暗くて、まるで幽霊が出
てきそうな気分にもなる。こういうのって、ホラーゲームみたいな感
じがしてちよつと怖いな。

こう・・・夜のつぶれた旅館に入った主人公達がそこに住まう怪物
に襲われるくとか、でも考えてるとちよつと楽しいかも。

イーグルジャンプに入社して、ちよつと職業病？みたいに考えてし
まう自分がいて嬉しく思えてしまう。

なんだか深夜の散歩も楽しくなってきた私はついスキップしながら
薄暗い廊下を歩いていると、やがて月明かりが照らす広いスペース
に出た。

ここはロビーだ。朝や昼間には何度も行き来したところではある
けれど時間が変わるだけで違う印象を受ける。月明かりに照らされた
ロビーはどこか幻想的だった。

そして、その風景の中に一人、人影を見つけた。

敦さんだった。

月明かりで照らされたロビーの椅子に腰掛けている彼の手には見
慣れているタバコ。蜂蜜のような甘い香りがほのかに香る煙は、ロ
ビーの空間へ溶けていく。

月明かりに照らされて、不思議とそれは幻想的な雰囲気になっ
てる。

やがて、敦さんは私がいるということに気がついてこつちを向い
た。

「へ、こんばんわ・・・敦さん」

敦さんと目が合って、ドキツとしてしまう。葉月さんから、緑さん
の話を聞いてから今に至るまであまり口をきいていなかったのだ。

なんとなく、打ち上げ中の敦さんはどこか怖い雰囲気があったし、

近づきずらかったのだ。それでもいつかは向き合わなくちゃと思っ
いたけど、今このタイムミングではったり会ってしまうなんて。

「・・・なんだ、涼風か」

敦さんは灰皿でタバコの火をすり潰すと一息ついて月を眺めてい
る。

「座れよ。どうせ目が冴えてここまで来たクチだろ？」

「・・・はい」

私は敦さんの向かいの席に腰を下ろす。敦さんは、私に気を遣って
くれているのか、次のタバコに火をつけずにただ窓から照らされてい
る月を見上げている。

「葉月から、色々聞いたみたいだな」

「・・・」

敦さんにしては珍しい穏やかな口調だけど、どこか言われようのな
い雰囲気を感じた私は、沈黙で肯定する。

「ま、別に隠すつもりはなかったんだよ。お前が八神に憧れてるつ
てのは聞いてたから、それが元々は違う誰かのモノだったなんて言う
のは知らない方がいいって勝手に思ってただけだしな」

「・・・緑さんは、結局どうなったんですか？」

「なんだ？ 葉月もそこまで話さなかったのか。無理もないか」
寂しそうにつぶやく敦さん。

なんだか怖くなる。まるで、もう緑さんはこの世にいないような言
い方だからだ。

いや、おそらくは本当に――

「お前が考えてることは合ってるよ」

「っ!？」

考えていることを先に当てられた私は息をのむ。それでも敦さん
は変わらず、不気味な穏やかさで続けた。

「さすがに社長がどんな奴かは聞いてるだろうが、心配するな。今
のヤツは無害だ。お前らに何かしようだなんて思っすらいないよ」

「・・・」

「だから、お前がああクソ野郎におびえる心配なんざない。少なく

とも、俺がいる間は」

敦さんのその言い方は、まるで私達を庇護している。

と上から目線にそう言われているように感じた。でも実際は事実だ。私達は思い返せば、この人にずっと助けられている。

やっとわかった。この人の仕事が。

皆が乗り越えられない困難の先に排除しながら、皆が成長しきれるように立ち回る。

それが敦さんの仕事なんだ。

「だから安心しろ。お前らの夢は、何があっても穢させない。五年前からそう決めたんだ」

「それって……」

間違いない。『フェアリーズストーリー2』のときだ。八神さんがはじめてADになった時のこと。そして失敗して、私と同じくらいの新人を辞めさせてしまったこと。

……まさか、八神さんの失敗は、誰かに仕組まれていたことだったの？

知りもしなかった真実が脳を揺らす。そのせいで、言葉を失った私は敦さんになんて言えば良いか分からなくなる。

「さて、おしゃべりはこんくらいにして寝ようぜ。明日から帰ればすぐに仕事なんだからよ」

呆然としている私を見て、不気味な雰囲気は抜けた敦さんはゆつくりと立ち上がると月明かりが届かない暗闇に消えていった。

「……」

ああ、結局、私は頑張るとか言いながら何もできてなかったんだな。それどころか、あんな風に一方的に守られていたんだ。

自分の無力さを実感する。今までよりも強く。自分の実力が足りない云々じゃなく、単にこの人には私の助けはいらわないと言われたことが一番重くのしかかる。

——— だけど、

「……負けるもんか」

私は立ち上がる。

あのとき、敦さんの言ってくれた言葉を私は忘れない。

ソフィアちゃんを作ったときに褒めてくれたこと。そして、あのとき
きに言ってくれた言葉を私は忘れていない。

——モノを作るといふことは、誰かの夢を作るといふことだ。

もしも、もしもそれが本当なら、私は敦さんの夢を作ることができ
るだろうか。いいや、作ってみせる。だって私の夢を、漠然とした夢
なんかじゃなく目標に変えてくれた。

駆け上がるべき階段を上ろうと背中を押してくれたのはこの人な
んだから

夜を越えて 前編

花男視点

「さ・と・う・く・ん、おはよう♥」

今日は待ちに待った日。

私が見込んだあの子達が、北海道から帰ってくる日。きつと何かあったに違いない。

さあ、私が優しく受け止めてあげるから、その胸の内を明かして頂戴！

「っ——!!」

入社してきてから開口一番、私は佐藤君に殴られた。

ハリセンで。その速さは、今までとの一線を画すほどのキレがあった。

「な、なんでいきなり殴るの!? 差別? 差別なのね!? オカマ差別なのね!!」

「いえ、なんか、なんでも知ってるわ的なオーラにイラツときて」

「ヒドいわ! 社員旅行を楽しんでる佐藤君達に代わって、頑張ってる働いていたのに!」

「…すみません」

「……」

北海道から帰ってきて、何かあった予感がしたんだけど、殴ってくるなんて、私の思い過ぎしなのかしら。

チツ、相変わらずのヘタレね。

うみこちゃんにも協力してもらったのに、なんて情けない。

これから忙しくなるから、りんちゃんと会える機会が少なくなるって事、本当に分かっているのかしら。

「あっ……」

後ろから、声が聞こえた。

振り返ると、ちょうど佐藤君の思い人であるりんちゃんが背景班のブースに入ってきたところだった。

「さ、ささ、佐藤君、お、おはよう」

「…おう」

でもなんか様子が変だ。

いつものりんちゃんじゃない。明らかに落ち着きが無い。というか、佐藤君を見た途端に急にもじもじし始めた。

佐藤君を見てこんな反応をした彼女は今まで見たことが無い。

「……」

「……」

私は二人を何度も見返す。

これは…まさか…っ！

「佐藤君！ 何かあったの!? 何かしたの!? ねえねえ!!」

「っ……」

私が迫ると、また佐藤君はハリセンを構えた。放たれたれ一意撃は先ほどよりも速くて重い一撃だった。

伸びている私を完全に無視して、佐藤君とりんちゃんは話を進めているところだった。

「佐藤君…あの、あの…昨日は、ありがとう」

「……」

「え、えっと、奢ってもらったことのほうね」

「おう」

ああ、そういう事。

二人で誘うところまではいったのね。

さすが佐藤君、ここで割り勘なんて言い出したらどうしようかと思っただけ、そこは男気を見せたようね。

でも、この言い方。妙ね。

「それで…あの、奢ってもらったことじゃない方なんだけど」

やっぱり、佐藤君。

攻めたわね。何をしたかは大体想像つく。

でも、これは私が言った通り、ちゃんと異性として認識させるところまで行ったという証拠に他ならない。

佐藤君、やっとなへタレを卒業できたのね。

「あ、あれは、どういう意味なの?」

「自分で考えてくれ」

…やっぱりまだヘタレなのね。

ほら見なさい。りんちゃんも引いているじゃないの。

「さ、佐藤君、私頑張ってるのに……」

「俺はこの間で、頑張りが許容範囲を超えた……」

そう言ってる、佐藤君はりんちゃんの顔を見ないようにしながら横を向いた。

まあ、仕方ないわよね。

ここまで来るのにどれだけ時間がかかったと思ってるのよ。でも、これは大きな進歩だ。

小さいかも知れないけれど、確実にりんちゃん攻略に前進しているわ。

現段階でも目標は果たしている。よかったわ。

さて、次はもう一人の方ね。

私が一番期待している子。

彼がそろそろ入社してくる時間！

オフィスの扉が開く音がした。

私の直感が言っている。間違いなく純君だ。

「!？」

「あ、花男さん、おはようございます」

「…おはよう、ごい…ます」

私は、目の前の光景に息を飲んだ。

オフィスの扉が開いたのは純君とひふみちゃん。

しかも、手を繋いでいる。

「お、おはよう、純君。良い雰囲気じゃない」

「えっ、あつ！ これは、そのっ、ちよつとそこでばったり会って、

その」

「っ……」

何か弁明しようとしているけれど全然その体をなしていない。

現にその間もずっと手を握りっぱなしだ。完全にカップルのそれである。

「ふーん、そうなの。へえ〜」

「花男さん！ 違うんです。これはその、成り行きと言いましようかなんといいましようか」

私の直感が言っている。

間違いない。

彼はついにやった。やり遂げたのだ。ようやく彼は大きな壁を乗り越えたのだ。

私は思わず感極まって泣きそうになった。

「うん、大丈夫。分かってるから」

「え、何がですか？」

「ううん、なんでもないの。それより、もう仕事始まるから、席に着いて頂戴」

「……はい」

「……」

「……」

仕事の話をする、二人は名残惜しそうに互いの顔を見合わせる。きつと離れたくないのだろう。

無言で見つめ合う二人。

もうこの空間だけでも胸焼けしそうだ。

なんていうか、アイスクリームに黒蜜をかけてマシユマロをトッピングしたお汁粉に、さらに和三盆糖を振りかけたような甘さ加減になっっているような気がする。

糖度が高い！

「…じゃあ、僕は行きますね。ひふ……滝本さん」

「うん、また…ね」

「はい」

「……」

「……」

そして、最後にもう一度だけ手を繋ぐと、二人の姿は消えていった。ああ、本当に良かったわ。

これで、今回の社員旅行はひとまず成功と言っていいでしょね。

今度から、毎日この調子なら少し心配だけど、今日一日くらいは目を瞑りましょう。

●
りん視点

「はあ、自分で考えろって言われちゃった。分からないから勇気を出して聞いたのに」

先日の社員旅行を思い出す。佐藤君と二人で飲みに行った時の帰りのことだ。

私は佐藤君に抱きしめられた。

あれが、どういう意味だったのか、私にはわからない。

その後、佐藤君はタクシーを呼んでくれて私は一人で帰ったんだけど、その間、全然考えがまとまらない。

「……」

記憶の中にあるあの時の光景がまた浮かぶ。

：佐藤君のギュツとする力、強かったな。

タバコの臭いもしたし、やっぱりコウちゃんとは全然違う。

男の人だもんね。

それにしても、どうして私をあんな風に抱き寄せたんだろうか。

いくら考えても答えは出てこない。

結局、そのまま夜は更けていき、今日も寝不足のまま朝を迎えた。

「おはようございます。おや、遠山さん？ 顔色悪いですけど、どうかしました？」

「あ、うみこさん」

悶々とした気持ちでオフィスの中を歩いていると、褐色の肌をした彼女とバツタリ会う。

「…社員旅行の時から様子が変ですが、何かありましたか？」

「っ!」

私は驚いて一歩後ずさってしまった。

「やはりそうですか」

「ど、どうしたんですか急に」

「いえ、佐藤さんと何かあったのかなと思ひまして」
「っ！」

的確に当てられて言葉に詰まる。そんな分かりやすい反応をしていたのだろうか私は。

でも、うみこさんが知っていてもおかしくない。佐藤君と出かけていたという話は、他の子達も聞いていたはずだ。

…誰に相談した方が良いのかな？

こんなこと、コウちゃんには話せないし。

「あ、あの実はですね……」

それから私はうみこさんに悩みを打ち明けることにした。

先日、佐藤君と二人で飲みに行ったこと。

その帰りに、ギョツとされてしまったこと。

それがずつと頭から離れないことなどだ。

「なるほどそういうことですか」

一通り聞き終わると彼女は納得したように小さく呟いた。

「すみません。ご迷惑をおかけして」

相談する相手を間違えてしまったかもしれないと思ったけれど、うみこさんの表情はいつもより柔らかいように見えた。

「別に構いませんよ。しかし、遠山さんは面白いことを考えますね」

「え？」

「普通はそこで勘違いしますよね。男女の関係に」

「そ、そうですね、私と佐藤君は友達で……っ」

何でだろう。

自分で口にしたはずの言葉なのに、それを耳にしたくなかった。

そういう言葉で、当てはめたくなかった。

佐藤君とは友達なのに。

彼には、他に好きな人がいるはずなのに。

「……」

私が黙っていると、うみこさんはまっすぐな目で言った。

「……私は、遠山さんがいますと思っている気持ちを、ちゃんと本人に伝えるべきだと思います」

それは、私の心の奥底にあるモヤモヤとした感情を言い当てたような言葉だった。

まるで、今の自分の心境を見透かすような一言に、思わずドキツとする。

「多分、それが一番大切なことです。貴女のためにも、佐藤さんのためにも」

「わ、わかりました」

「はい。では、頑張ってくださいね」

それだけ言うと、彼女は立ち去って行った。

「……頑張るって何をすれば良いんだろう」

一人取り残されてポツリと呟く。

わからない。

わからないけど、とりあえず言われた通りにやってみよう。

私の気持ち、今思った感情をちゃんと彼に伝えよう。

だから、まずは行動あるのみ。

「よし、まずは佐藤君と話そう」

私は仕事モードへと意識を切り替えると、彼の席へと向かった。

●
うみこ視点

さて、遠山さんと佐藤さんの様子を見てみますか。

先日の社員旅行、どうやら佐藤さんはかなり攻めたようだ。

彼がヘタレさは承知していたのですが、抱きしめるまでいったのは可愛らしいというべきか、頑張ったと言うべきか。

いずれにしても、後は遠山さんの反応のみ。

ここは変に入れ知恵はせずに、ただストレートに今の気持ちを伝えるべきだとアドバイスしたのだけど。

うまく行くでしょうか？

と、背景班の様子を覗ける場所にたどり着き、佐藤さんを射程に捉える。

彼は黙々とヘルプの作業をこなしていた。相変わらず真面目な人ですね。

さあ、これからが見物ですよ。

私は静かに二人の動向を観察し始めた。

すると、程なくして遠山さんが佐藤さんの元にやってきた。……ふむ、早速何かアクションを起こしましたか。

彼女がどのような行動をするのか少し興味があったので、そのまま見守ることにする。

「あの、佐藤君」

「？」

「こ、この前のことなんだけど、私、今の気持ち正直に言うね」

「…おう」

「……私、佐藤君と友達でいたくないかも！」

いや言い方っ!!

もつとオブラートに包んで言ってくださいよ!

いつもの人当たりの良い貴女はどこに行っただんですか!?

「っ……」

ああ、佐藤さんも顔色が悪くなってる。そりやそうだ。いきなりそんなことを言われれば誰だつてショックでしょう。

「その、私も気持ちの整理がついていないし、佐藤君にも好きな人がいるのに迷惑かも知れないけれど、なんだか佐藤君と友達だと思いと、心かもやもやするっていうか、なんというか……」

「……」

「…佐藤君、話聞いている？」

「…絶交？」

「佐藤君!」

ああもう滅茶苦茶じゃないですか。

何故そこで『絶交』なんて言葉が出てくるんですかね。

遠山さんも遠山さんで、それじゃあまるで私たちの関係が恋愛関係みたいに聞こえてしまうのではないですか。

ほら見て下さい。佐藤さんも固まってしまっている。

「そ、そうじゃなくてね、逆って言うか、ぎゅつとされたのは嫌だったわけじゃなくて、うまく言葉も答えも出てこないんだけど、友達よ

りもその……」

「……りん」

佐藤さんが遠山さんの事を名前で呼ぶ。

これから何か言うつもりなのだろう。

頑張ってください！

遠山さんの言い分なら勝算は充分にあります。

貴方の思いをぶつけるのです！

「佐藤君……」

「……」

「……」

二人の間に、静寂が訪れる。

そして、佐藤さんが口を開いた。

私は固唾を飲んで、その様子を見守った。

「………俺は胃が限界なので帰る」

「佐藤くーん！」

それだけ告げると、彼は逃げるように帰って行ってしまった。

ああ、これは先が思いやられますね。

夜を越えて 後編

ひふみ視点

「りんさん、最近また様子が変ですよね」

「うん」

社員旅行が終わって最初の出勤日。

そのお昼休みの時、私は青葉ちゃんと最近のりんちゃんのことについて話していた。

もはやこの状況すら日常になりつつある気がする。

「多分なんですけど、社員旅行で佐藤さんと出かけた時に何かあったと思うんですけどね」

「うん」

その日のことは私は知らない。

だって、私が純君とのデートから旅館に帰ってきたのはその日の朝。

その時点から、ずっと上の空。東京に戻ってきてても、なにか考え込んでいる様子だった。

「あの、ひふみ先輩」

「どうか…したの？」

「ひふみ先輩は、その日、なにしてたんですか？」

「…」

「…」

「……っ!?!」

青葉ちゃんの問いかけに、私はあの日の夜のことを思い出す。

私と純君といた時間。

あの部屋で私達がどんな夜を過ごしたか。

何度触れあったか。

何度口づけを交わしたか。

何度愛し合ったのか。

思い出すだけで顔が熱くなる。

感触は未だに残っている。

組み付されたに感じた力強さも。

時折見せてくれた優しさと温かさも。

場所も時間も、状況も、全部忘れて身を重ねて、お互いの熱をぶつけて蕩け合い、気がついた時には朝になっていた。

いつもより少しだけ早く目覚めた私の隣には、寝息を立てて眠る純君の姿がそこにあつて……。

嬉しくなつて撫でた頬の柔らかさも。

全部鮮明に思い出せてしまった。

「ちよー！ ひふみ先輩!？」

「え？あつ!? ち、違う…よう？」

「いや、どう考えても今思いつきり赤面しましたよね!? しかも、なんかもうそれじゃ説明つかないくらい真つ赤になつてますつて!!」

「えつと…その、これは……」

「まさかひふみ先輩、ついに大人の階段を上つちやつたとかじゃないですよね?」

「うう〜!」

恥ずかしくて顔を手で覆つてしまう。

そうだ。私はとうとう一線を越えちゃったんだ……。

でも後悔はない。むしろ幸せだと思つた。

私の初めてをあげられたことが、本当に嬉しい。

これから先、この思い出があれば生きていける。そう思えるほどに。

「どつちなんですかー!? はつきりして下さいよお〜!!」

「ごめん、ね……内緒」

だけど、こんなこと言えるわけない。

言つてしまえば、きつとみんなにも迷惑をかけてしまうだろうか。

だから言えない。

言えるはずがない。

「そ、それより、り、りんちゃん……のこと」
そうだ。

私のことはいい。

だってこんなにも幸せなのだから。今はそれよりもりんちゃんのことをなんとかしないと。

あんな調子だと、仕事に支障が出てしまうかもしれない。

それに心配なのはそれだけではない。

なんとかしないと。

でも、私、前もりんちゃんと佐藤君が喧嘩しちやったときもうまく仲裁できなかったし。

どうすれば良いんだろう。

——滝本さんなら、きっと大丈夫だよ

——僕が滝本さんの部下なら、この人を裏切りたくないって思える。だから、自信を持って欲しい。

旅館でそう話してくれた純君の言葉を思い出す。

面談の時、キャラ班のリーダーを打診されて不安な私を励ましてくれた。

まだキャラ班をひっぱっているのはコウちゃんだけど、コウちゃんが忙しいとりんちゃんを支えることもできない。

私が一番年上なんだ。なら、私にできることがあるのなら、やってあげないと。

それが一番の恩返しになるはずだから。

「そ、そうですね。どうしましょうか」

「わ、私が、なんとかか…して…みるっ」

●

りん視点

ああダメだ私。

旅行から帰ってきてから仕事に集中できていない。

再来週に迫るキャラコンペに向けて、向こうのプロデューサーである大和さんともちゃんと話し合っておかないといけないのに、全然話がまとまらなかった。

これ以上皆に迷惑かけられないのに。

「っ……」

また、あの瞬間が脳裏を過ぎる。何度も反すうしたせいで記憶に焼き付いてしまった光景。

そのせいで佐藤君ともちゃんと話が出来ない。彼と向き合っても言葉が出てこない。

顔を見るだけで胸が苦しくなってくる。

どうして？

ぎゅつとされたことも嫌な気持ちはならなかった。

なのに、なんで？ わからない。

自分の心が理解できない。

まるで自分じゃないみたい。

自分の中で、もう一人の自分が生まれてきている感覚がする。

旅行の時の夜、コウちゃんと青葉ちゃんが布団の中で話していたのを聞いていたときでも、こんな気持ちにはならなかったのに。あの時はただ二人が仲良くしているように見えて、ちよつとモヤツとしただけ。

「はあ……」

ため息が自然と出てくる。

原因はわかっている。

でもそれをどうやって解決すればいいのかがわかんない。

「……」

だめだ。こんなんじや。

今日は早めに帰って休もうかな。

「りん……ちゃん」

「ひふみちゃん……？」

するとそんな時だった。ひふみちゃんに声をかけられたのは。

「どうか……したの？」

「えっと……なんでもないの」

「そっか……」

「うん……」

「……」

「……」

沈黙が流れる。

どうしよう。何か言わなくちゃいけないのに、何を言えばいいかわかんない。

「りんちゃん……ん」

「はい？」

「えっと……その……元気……出して？」

「ひふみちゃん」

彼女にも気づかれていたみたい。やっぱり隠しきれなかったんだ……。

「ありがとう、でも大丈夫よ」

「で、でも」

「本当に大丈夫だから。心配しないでください」

「うん……」

「では私、もう行くね。お疲れ様」

「あつ……ま、待って！」

「？」

「えっと……その、私も……そろそろ……帰る、から……ご飯食べに、かな
い……？」 一緒に……食べたいな」

「……」

正直、断りたかった。

だけど、今の私は誰かと一緒にいたかった。

一人でいる方が辛くなる。だから彼女の提案に乗ることにした。

「そうね、そうしましょう」

「う、うん……！ じゃあ、行こうか」

それから私たちは二人で駅の近くにあるレストランに入った。

テーブル席で向かい合う彼女が、普段より大人びて見えた。

「ねえ、りんちゃん……」

「何？」

「その……旅行中のこと、だけどさ」

来たかと思った。

彼女が切り出してきた話題は間違いなくあれだろう。どうしよう。

なんて答えよう。

佐藤君のことは言いたくないし、ごまかせるだろうか。

「ど、どうかしたの?」

「え、あ、ほら、りんちゃん、旅行の…時に、佐藤…君と、なにか…あつた、の?」

「!?!」

どうしてわかるの!?

まさか私の態度ってわかりやすいのかな? 確かに以前ひふみちゃんに佐藤君と一緒に呼び出されたことがあつたけど、その時と今は状況が違う。

彼女は佐藤君とあまり面識がないはずなのに、なんでわかつたんだろう。

「聞か…せて?」

「えっ…と、それは…」

「教えて…私、ちゃんと…聞く、から」

「…」

「お願い、りんちゃん…」

「…じゃ、じゃあ、話すね」

覚悟を決めるしかない。

そう思った。

「実は…」

「…」

「…」

全てを話し終わると、ひふみちゃんは黙ってしまった。やはり言うべきではなかったかもしれない。

「ごめんね、こんなこと相談して」

「…りんちゃんは、どう…したいの?」

「わからない。私にもわからないの。あの時、抱きしめられて嫌だと思わなかったのも、コウちゃんたちを見てモヤツとした気持ちの違いも、なんなのかわからない」

「そっか…」

「それに、最近変なの。仕事なのにボーっとしちやったりとか、佐藤君のことを考えたりとか、胸が苦しくなったりとかするの」

「……」

「でも、佐藤君とはいっつもどおり話したいの。だって、佐藤君、この開発が終わったら辞めるかもしれないから。だから、今まで通りに接して欲しい」

それが私にとっての願い。

佐藤君がこの会社でいることを後悔しないようにしたい。

「わ、わたしは」

「？」

「わたしは……別に、いいと思う」

「え？」

「だ、だから、いいんじゃないかなあ……って」

「どういう意味？」

「そのままの意味だよ……あと、このことは誰にも言わない……から」

「ありがとう。助かるわ」

「ううん……こっちこそ、あり……がとう」

ひふみちゃんには感謝しても仕切れない。

おかげでだいぶ楽になった気がした。

「ふうー」

「りんちゃん」

「ん？」

「今日は、頑張った……から、たくさん……食べよ？」

「うん、そうだね」

それから私たちは二人だけで食事を楽しんだ。

一人じゃないご飯はとても美味しく感じられた。

● 「佐藤君」

「？」

次の日、私はまた佐藤君に声をかけた。

この前は体調が悪くなったと言って逃げられちゃったから、今度はちゃんと言葉を選ぼう。

今思い返すと、すごく失礼なことを言った気がする。

佐藤君を傷つけないようにしないと。よし、頑張れ私！

「あ、あのね。い、いつも通りにしようね！」

「……俺はいつも通りだけど」

「え？ あ、そうね」

あれ、おかしいな。なんか言葉選び間違えたかしら。

でも、大丈夫よね。普通にできてるはずだもの。

「……」

「……」

会話が途切れる。

え、嘘でしょ。これって結構きついんだけど。

なんとかして話を繋げないと……。

「きよ、今日のお昼はなにを食べるの？」

「牛丼」

「へえ、そうなんだ。おいしいもんね」

って、違う!! なんでそんな無難な話題しかできないかなあ。

もつとこうき、あるじゃ無いの! こう、天気の話とか、好きな食べ

物とか色々!……って何考えてるんだろ。

「八神の話はしないのか？」

「えっ!? あ」

そうだ。コウちゃんの話ならうまく話せるかも知れない。

「でも、いい、の？」

「いつも通りって言ったろ？」

「あ、うん。じゃあ」

「おう」

そこからはスムーズだった。

コウちゃんのこと盛り上がった。

東京に戻ってきたコウちゃんが全然片付けしてなかったり、夕食も食べてなかったり、それを私が作ったり、ちゃんと自分でやらないと

ダメだって注意しても、私の料理が一番おいしいからって嬉しいこと言われたり、そんなことをたくさん。

「それでね、その時のコウちゃんは本当に子供みたいで、ほんと、しっかりしてほしわ」

「そうか」

それを、一通り話し終えてしまった。だって、この前の旅行で、コウちゃんの愚痴はほとんどはなしてしまったのだから。

でも、いつも通り話すことができた。

「……えっと、じゃあ行くね」

「おう」

「その…また誘ってねっ」

そう言って、背景班のブースを出て自分の席に戻ろうとした。けど……

「あ、私の席ここだった。やだ私ったら」

「……」

でもそれからはいつも通り仕事に集中できるようになってきた。

用事があつて席を立った私は、その道中、コーヒーを淹れに行ったコウちゃんとバツタリ会つた。

「あ、りん。なんか元気になつたんだね。この間まで変だつたのに」

「コウちゃん、さつきね、やっと佐藤君といつも通り話せたの」嬉しくなつた私は、さつきの話をコウちゃんもした。

旅行の時からずっともやもやしていた気持ちを整理できたような気がしたからだ。それを、一番話したいのがコウちゃんだったから。

「ふーん。そっか」

「なんだかね、佐藤君といると、色々頑張ることが多いけど、自分も新しいことに挑戦したいって思えるというか、自分の世界が広がっていく感じがするの」

「……」

「ちよ、コウちゃん!? コーヒーこぼしてる!」

「あ、ごめん」

「ちゃんと気をつけてよー。あと、早く拭かないとシミになるよ?」
「わかってるよ」

「もう、コウちゃんったら、ほんとしようがないんだから」
ホント、相変わらず、放っておけないんだから。

でもまた、佐藤君と話せる口実ができた。

これなら、またちゃんと向き合えると思う。

叱っているはずなのに、不思議と笑顔が溢れた。

●

ひふみ視点

「りんちゃん、元気に…なった、ね」

「はい、よかったです」

定時になって、一緒済ませている済ませている青葉ちゃんと、今日のりんちゃんの話になった。

昨日、一緒にご飯に誘って話を聞いてあげたのがよかったみたい。

正直、うまく話せた自信は無いけれど、これからもっと上手になりたい。そうすれば、キヤラ班のも引っ張っていけるし、もっと純君とも恋人らしいことできるかな。

「なんだ、お前らも帰りか」

「あ、佐藤さん、お疲れ様です」

「ああ」

そこに、作業を終えたと思われる佐藤君も今から帰るようなのか、鞆を持って背景班のブースから出てきた。

「あ、そういえば、りんさん、元気になりましたね」

「涼風が何かしたのか?」

「いえ、ひふみ先輩が相談に乗ってあげたんです」

「そうなのか?」

「……う、うん」

「なるほどな」

私も長い間、あの三人を見てきたからわかる。

佐藤君はりんちゃんが好き。

りんちゃんはコウちゃんが好き。

この三角関係が、佐藤君を苦しめている。でも、私の勘があっているならりんちゃんは……。

「佐藤…君」

「ん？」

「……ふあいと」

そう言つて、私は両手でガッツポーズを作った。

すると、彼は少し驚いた表情をした。

でも、すぐにいつもの無愛想な顔に戻る。

そして、私と青葉ちゃんのところまで来ると――

「きゃっ!?!」

「わあっ!?!」

その大きな両手で私と青葉ちゃんの頭を掴んでワシヤワシヤとしてみせた。

でも、それはいつもやってる青葉ちゃんの髪の毛を弄っている感じじゃ無かった。

まるで、ありがとうと言っているような、そんな手つきだった。

「じゃ」

すぐに手を離すと、佐藤君は軽い足どりでオフィスから出て行った。

「もう佐藤さん、ひふみ先輩にまで」

「いい、よ。大丈夫」

「……そうですね」

髪の毛を直しながら、青葉ちゃんと顔を見合わせた。

すると、青葉ちゃんが笑ってくれた。

それが嬉しくて、私もつられて笑った。

「じゃあ、私たちも…帰ろっか」

「はいー!」

でも幸せならOKです

葉月視点

ああ、しんどい。

私はふらふらと倒れそうになりながら入社してきた。

開発が始まる前からこんなにしんどいことはフェアリーズストーリーの時以来だ。

私の心中にあるのは、彼女。私がこのチームで一番可愛いと思っている女の子。そう、ひふみ君のことについてだ。

彼女も、ついに私と同じ領域に足を踏み入れてしまったのだと思うと心が痛い。

いや、その彼氏である増田君の評判は、はなちゃんから聞いている。きつと彼女を幸せにしてくれる人間だということは理解できる。

ただ、なんだこの辛さは。

なんとというか横になりたい。

今まで気に入っていたのアイドルや声優の結婚報道もそうだったが、そんなのとは非にならないほど堪える。

でも幸せならOKです。

なんて言葉、私には言えないよ。

ああ、あの純粹で無垢で、綺麗なひふみくんはもう彼の中にある虎に食べられてしまったのかと思うと悔しくてたまらない。

そりゃ、恋する女の子の顔が一番可愛いに決まっている。

現にひふみ君が彼に見せる顔は今までで一番輝いていた。

クソー！

絶対次の面談の時に洗いざらい吐かせてやるー!!

「なありん」

「？」

と、無理矢理自分の心を燃やしてオフィスと歩いていると、話し声が聞こえた。

それも、低い声。敦君とは違うこの声は佐藤君のものだ。

相手は遠山君だろう。

先日の旅行で何かあったし、一体何を話しているのやら。私はそつと聞き耳を立てる。

やましいことはない。チームの人間関係を把握しておくのもディレクターである私の仕事だ。うん。

決して興味本位ではないのだ。……嘘だけどね。

さて、何を話しているのかな？

「お前、誕生日いつだ？」

「……明日」

「つ……つ……」

遠山君の言葉に、力の無い咳で応える佐藤君。

「どうかしたの？」

「……いや」

タ、タイミング悪!!

この前佐藤君をクイズで煽ったはいいけれど、おい大丈夫なのかい佐藤君、明日だぞ!

急に用意できるのか!?

聞いたからにはなにかプレゼントしないと遠山君が可哀想だろ!

というか、もつと早く聞けよ!!

そのまま、仕事に戻った二人だが、遠山君は次の開発にむけたキラコンペの準備があるようなので席を立った。

背景班のブースにいるのは佐藤君一人だけ。

もう見ていられない。

私は声をかけた。

「おい、佐藤君」

「なんだ、葉月さんっすか」

「明日、遠山君の誕生日だぞ」

「さつき聞きましたよ」

ふてぶてしく答える彼にいらつきを覚える。

遠山君以外ではこういう態度を取れるんだから、本当に腹が立つ。

しかし、今はそれを気にしている場合では無い。

彼女のことが最優先だ。

「今日は半休にするよう八神に話は通しておくよ。だから買いに行くんだ。プレゼント」

「なんのつもりですか？」

「いいから」

「そんな気遣いはいりません」

「なんでだい！」

「買いに行きませんし」

スルーする気がコイツ！

私がいくら言っても聞く様子のない佐藤君。

そして、その態度にだんだんイラついてきた私。

なんだこいつ、いつもなら嫌味の一つでも言うくせに、なんで今回はこうまで頑ななんだよ！

普段だったらここまで言わないけど、今はそういうことを言っている暇はないのだ。

彼も意地になっていいのか、私が何を言っても聞かなかった。

「なんなんだい、彼は」

諦めて一人デスクに戻ってきた私は愚痴のようにこぼした。すると、後ろから肩をポンつと叩かれた。

「あら、しずくちゃん。どうしたの？ せつかくの美人が台無しよ」

「ああ、はなちゃんかい。聞いてくれよ。佐藤君なんだがね」

私は今朝の事をはなちゃんに話す。鼎立問題に関しては今は休戦だ。

このままでは遠山君が悲しむに決まっている。なんとかならないものか。

「彼、想像以上のヘタレだよ。ガツカリしたよ」

「なるほどね。でも心配はいらないわ」

「なんでそう言い切れるんだい？」

「しずくちゃん。佐藤君のヘタレは、その想像を超えてるから」
はなちゃんが自信ありげに言った。

「どういうことだい？」

「それは、明日のお楽しみに♥」

● 次の日。

遠山君の誕生日当日、私は入社した私は身を隠して背景班のブースの中をうかがう。

そこにはもうすでに出社していた遠山君に、佐藤君が話しかけてようとしていたところだった。

手には、箱がある。

まさか、それは!?

「なあ、りん。これ、誕生日プレゼント」

「あ、ありがとう。昨日の今日でごめんね」
なぜだ?

昨日は仕事していたし、プレゼントを買いに行く余裕なんてなかったはずだ。

でもまあ、ちゃんと用意していたのは評価しよう。

あの態度も、買いに行かないのでは無く、買いに行く必要がないという意味だったのだな。

「気にするな。あと、これも」

「…2つもくれるの?」

「いや、これも」

そういうと、なんと3つ目のプレゼントまで渡しだした。いったいどこから出した?

遠山君は少し驚きながらも嬉しそうだ。

顔は見えないけど、きつと喜んでいることだろう。

だがしかし、なぜだ?

遠山君が喜ぶことは嬉しいのだが、ちよつと引つかかることがある。…なぜ、複数も渡すんだ?

「これも」

「え?」

「これも」

「えつと…?」

「これも」

「あ、ああ…?」

「これも」

「……」

明らかに遠山君が動揺している声が聞こえる。これは、やはりおかしい。

何個買ってきたんだ?

私は身を乗り出す。

そこで見ると、本当に遠山君の席にはプレゼントが7つも置かれてあった。

「どういうことだい?」

「おかわりいただけただけかしら?」

横にいたはなちゃんに声をかけられる。

彼は得意げだ。絶対にこうなるという確信があったような風貌だ。

「はなちゃん、これは一体」

「佐藤君はね、入社してから7年間、りんちゃんに片思いしてたの。そして、今年初めて、誕生日を聞いたの」

「片思い7年…プレゼント7個……」

7年の恋心を1年に凝縮させる男・佐藤弘樹。確かにそれなら納得いくかもしれない。

しかも、今までずっと何もしなかったことを考えると、すごいとへタレだと言える。

しかし、問題はそこじゃない。

「つてことは、つまり、7年間プレゼントは用意していたけど、渡せてなかったってことなのかい!?!」

「せいかーい♥」

「……なんというへタレだ」

呆れて物も言えないよ。

そんなんだから今まで八神に先を越されていったんだろうが!

「でもそうか、7年間か、ちよつと応援したくなる気も出てきたね」
「そうでしょう?」

「でも同時に焦れつつなくてイライラしてきたよ……！」
「そらでしよう……！」

ユーザーが求めるモノ

ゆん視点

「あくもう頭が爆発しそう！」

次の新作のキャラコンペが明日にまで迫っている今日この頃、隣の席にいる青葉ちゃんは先週からずっとこんな調子や。

青葉ちゃんと言い、はじめといい、ようやるわ。

こんなん八神さんの出来レースだって分かっているのに。

参加したって恥かくだけやろうに。

私も何かアドバイスをしようにも、この前やる気を削ぐようなことを言ってしまった手前、声をかけずらい。

でも青葉ちゃんの様子は隣で見たいし、ずっと追いかけている夢やから何らかの形で報われてほしいんやけどなあ。

と、作業をしながら青葉ちゃんの方を一瞥しようとした私は肩を揺らしてしまった。

「…先週からなに騒いでるんだ涼風。お前流石にうるさいぞ」

そこには、先日の社員旅行で混浴になってしまった敦さんが、青葉ちゃんに声をかけていた。

彼がこの場に出てきただけで、私の心中は穏やかではなくなってしまった。

だって当たり前や。

ほぼ裸の状態で同じ空間にいたし、敦さんの前で涙も見せてしまった。そんな彼の前で平静を保っている方がおかしいというものだ。

……それに、あの時以来、彼も私に対して気まずさを感じてあまり話しかけてくれへんかったら……。

「す、すみません！ ちょっと考え事をしていて……」

「ふーん……まあいいけどよ。つーか、なんだそれは？」

と、頭を下げる青葉ちゃんに呆れるようなため息で答えると、敦さんは青葉ちゃんの机の広げられている紙を指さした。

「これは、明日のコンペに提出するキャラデザです」

「……」

敦さんはそのうちの一枚を手にとって、しばらく眺めた。
そして――

「なっていないな」

「うぐっ……」

と、紙を青葉ちゃんに突き返した。

その言葉を受けて、青葉ちゃんは胸を押さえながらよろめいてしま
う。

普通に可愛く描けてるのに。何がダメなんや??

「何がダメかわかるか?」

「…それが、私も何がダメなのかよくわからなくて」

「お前が今、書いているのは新作のキャラデザじゃ無い。フェア
リーズストーリーの劣化版だ」

「……: どういう、意味ですか?」

「そのままの意味だ。前々から思っていたが、お前の八神に対する
意識が強すぎる。これじゃただの二番煎じだ」

敦さんの言葉には容赦がなかった。

今までそんな様子、見たことが無い。

後輩や下の子らに、こういう厳しいことを言う姿はあまりに珍しく
見えた。

「私に何が足りないんですか?」

「そもそもの意識の問題だ。コンペは明日だから時間が無いし、今
ここでレクチャーしてやりたいのは山々なんだが、生憎今日は電気の
点検があるようだな。遅くまで残る訳にはいかないんだ」

「じゃあ――」

青葉ちゃんが放った次の言葉に、私は耳を疑った。

「敦さんの家に行って良いですか?」

「はあ!？」

な、なんでそうなるねん!

いくらなんでも大胆過ぎるわ!

ほ、本当にこの子は男の家に上がり込むつもりなんか?

いや、でもそれくらいしないと、コンペ本番まで時間が無い。
とはいえ不用心すぎる。

敦さんに限ってそんなことないって信じたいけれど、襲われるとか
考えへんの!?

この前の旅行でひふみ先輩が彼氏と何したのかわかってないん!?

「お願いしますっ!」

「っ……………」

青葉ちゃんの熱意に根負けしたのか、頭を数回ほど搔いたあと、た
め息をつく。

そして…………。

「ったく、しょうがねえな」

え?

待って。

ホンマに行くん?

マジで言うとなの?

嘘やん。

私達の視線などお構いなしと言わんばかりに、彼は椅子に掛けて
あったジャケツトを取ると、袖を通した。

その光景を見て、私は胸の奥にチクリと痛みを感じた。

…………嫌や。

行かんといて、青葉ちゃん。

その人を連れていかないで…………!

「行くぞ」

「はい!」

「あ、あの!」

私は思わず声を上げてしまった。

「私も行っていいですか!?!」

「?」

私がそう言うと、二人は驚いた表情を見せた。

…………つい口走ってしまった。

何を考えているんだろうか。私は。

葉月さんの話を聞いてしまつてからおかしくなっている。

敦さんが誰か他の女の子と一緒にいるところを頭に浮かべることすら拒むようになっていたのだ。

「ゆ、ゆんさん……?」

「……お前、コンペ出ないんじゃないのか?」

「えつと……」

二人とも怪しんでる様子だった。当然の反応だと思う。こんなこと言われても迷惑だろう。

青葉ちゃんも訝しんでいる。当たり前だ。

この前消極的なこと言つたばかりなのだ。なんて言えば……。

「……まあ別に良いよ。涼風もいいだろう?」

「え? はい」

意外な返事に少し戸惑う。

しかし、青葉ちゃんは特に気にしていない様子だった。

さつきまでの意気込みはどこにいったんだと言いたくなるほどあつさりしていた。

そういうところも青葉ちゃんらしいけれど。

「んじゃ、行くか」

「はい」

「は、はいっ」

そんなこんなで就業時間を過ぎた、私は敦さんと青葉ちゃんの三人で、彼の家に向かうことになってしまった。

「さて、まずは最初に話していたところからだな」

夏に看病にしに来た時に入った敦さんの部屋に入る。

私達は敦さんと対峙するようにテーブルに座った。

青葉ちゃんはかなり本気だ。寝袋まで持ってきている。

相変わらず最低限の家具しかない質素な部屋。

ベッドとテーブル。

パソコンがあるデスク。

背の高い本棚。

彼の趣味を思わせるモノがなにも無い部屋。

ほとんどがほこりかぶっていたことから、おそらく、本当にしばらくの間この部屋は使われていなかったことがわかる。

「私の意識の問題についてですよね？」

「ああ」

「何が足りないんですか？」

先に切り出したのは青葉ちゃんの方やった。

彼女は真剣な眼差しを向けていた。

きつと、彼女なりに本気で取り組もうとしているんだろう。

それを察してなのか、敦さんは腕を組んだまま答え始めた。

「まず物事を逆算して考えろ。この開発の最終目標はなんだ？」

「えつと、それは、ゲームを完成させることじゃないんですか？」

「違う」

青葉ちゃんは戸惑いながら答える。

確かに、この会社ではそれが目的だと思っている人は多いと思う。

でも、敦さんの言っていることは違うみたいや。

「発売された作品が数字を取って黒字になることだ。今回は完全新作だ。つまり、新規のユーザーを取り込みたいと考えている。そして、そういうユーザーは何に惹かれて作品を手にとると思う？」

「それは、例えば有名なキャラクターデザイナーが手がけているとか？」

「好きな声優さんが出ているとか？」

「それはあくまで、ある程度うちの名前を知っているユーザーだろう？ 確かにそれも重要な客層だが、新しいユーザーが求めるものは違う」

その言葉に私と青葉ちゃんは固唾を飲む。

一体何が求められているというのだろうか？ 敦さんは大きく息を吸い込むと、ゆっくり吐いて言った。

「そういうユーザーが求めるのは世界観だ」

「世界観……ですか」

「ああ、基本的にユーザーが作品に興味を持つのは、宣伝のPVとか

だろう？ ソレを見て、この世界に興味が持てて、この世界に入ってみたい。そう思わせる必要があるわけだ。今回のコンペも、要領はそれと同じだ」

真剣な目で話す敦さんの声に、自然と聞き入ってしまう。

「上の連中に、この世界をもっと知りたい。作ってみたいと思わせることだ。だって考えてみる？ 作る側の人間が面白いと思えないモノが、ユーザーが面白いって言うてくれると思うか？」

……たしかにそうだ。

私は思い浮かべてみる。

自分が作ったものがプレイヤー達からどのように思われるかを……。

……ダメだ。全く想像できない。

だって今までは、ただ仕様書通りのモノを作ることには精一杯だったから。

私がもしゲームを作るとしたら、どんなものを作りたいのだろう。前にキャラ班のみんなと話したときはシリアスな雰囲気がいーいしと言えなかったし。

「私に足りなかったのはそれだったんですね」

「そうだ。お前、はじめてソフィアのキャラデザしたときに話したろ？ キャラの特徴を理解しろって、それを世界範囲で拡大すればいい」

「はい」

「……」

青葉ちゃんは納得したように大きくうなずいていた。

一方で、私は彼女の隣で黙っているだけだった。

何か言わないといけない気がするけど、何も言うべき言葉が見つからなかった。

いや、むしろ何を言えば良いのかすらわからなくなっていたのだ。

「飯島、お前は前に涼風に出来レースだと言っていたよな？」

急に話を振られてびっくりしてしまう。

いきなりだったせいで、声が出せなかった。

確かにそんなことを言った。でもなんで今それを聞いたんや？

「この話を聞いていればわかることだと思うが、お前達にも勝算は充分にある。キービジュアルならコンペする間もないだろうが、キャラクターデザインに関しては別だ」

「な、なんでそう言い切れるんですか？」

「ユーザーはわがままな連中だ。低いクオリティのモノは絶対悪のごとく叩くし、高いクオリティでも飽きたら逃げていく。お前らだって、好きな食べ物毎日食ってたら飽きるだろ？」

敦さんは私の質問に対して当たり前のように答える。

すると青葉ちゃんも食いついた。

「つまり、八神さんに勝てるってことですか!？」

「言ってしまえば、上の連中はお前らが作った作品の最初のユーザーだ。ソイツらが面白いって思えるモノを作れば、他の連中の心を動かすことも出来る」

「なるほどー」

「とはいえ、連中に媚びるような作品は作るなよ？ あくまで、上の連中と、一般のユーザーの両方が興味を持つモノを作るんだ」

「はいっー」

敦さんの言葉に、青葉ちゃんは目を輝かせながら返事をする。その姿を見て、少しだけ複雑な気持ちになった。

どうして、彼女はこんな前向きになれるのだろう。

私には、とても無理だ。

人の期待に応えることも、自分の才能を信じることすら出来ない。やりたいことも、目標も、私には無い。

それが出来る彼女の方が、ずっとすごいんじゃないかと思ってしまふ。それに比べて私は……。

「んじゃ、講釈はここまでだ。コンペまで時間が無い。ここは自由に使って良いから、2人でしっかりやってくれ。俺はちよつと風呂入ってくるよ」

「ありがとございましてっ!!」

「え？ あ、は、はい。どうもです……」

敦さんはそれだけ告げると、そのまま部屋を出て行った。残されたのは、私と青葉ちゃん。

「よし……」

と気合いの入った声と同時に、青葉ちゃんは紙とペンを取り出した。

そして、私に向き直ってこう言った。

「さあ、やるぞー！ ゆんさん、一緒に頑張りましょう！」

「……うん。せやな」

「大丈夫ですか？ なんだか元気ないように見えますけど……」

「そ、そんな事あらへんよ？ 全然平気やから、気にせんでくれてかまへんから？」

私は笑顔を作って彼女に応えた。

「……わかりました。じゃあ、始めましょつか！」

「う、うん」

こうして、私は再び彼女と向かい合うことになった。

流れるに、自分までコンペに参加しないとイケない空気になつてる。

ここまで来て何もしませんでしたってなったら、それこそ敦さんに申し訳が無い。私は覚悟を決めて、作業に取り掛かった。

「はいいいもの……」

「……」

あかん。

全然出来へん。仕様書はある程度把握しているけれど、そもそも参加するつもりなんてなかったからイメージがふくらまへん。こういう時、どんなキャラを作ったらええんやろ……。

「あの、ゆんさん？」

「ふえ？」

急に声をかけられて変な声が出してしまった。

顔を上げると、青葉ちゃんの顔が目の前にあった。

「ひゃっ……」

思わず、体を後ろにそらす。すると彼女は慌てて謝ってきた。

「ごめんなさいっ！ ちょっとまた煮詰まってる、ゆんさんはどんな感じかなっと思っつて、つい覗き込んでしまいました。ホントすいませんー！」

ペコペコと頭を下げる青葉ちゃん。

そんな彼女に私は手を振りながら応えた。

「ああ、気にせんというて、私もそんな感じやし」と言いつつ、青葉ちゃんの手元を見る。そこには既にラフ画が出来上がっていた。

それも何枚も。

「結構描けてるやん？」

「いえ、でも、これじゃ多分八神さんにはとても及ばないと思います。もつと良くしないと」

「そうなん？」

「はい。ほらこのことか、まだ裝飾がちゃんと描けてないでしょ？」

彼女が指差した箇所を見ると、確かにそうかもしれない。

ただ、言われないとわからないレベルだ。

「それに、この辺の線もちよつと荒いかなって思うんですね」

「へー、凄いなあ」

「そんなこと無いですよ。私なんかより、ゆんさんの方はどうなんですか？」

「え？ わ、私？」

「はい。私、この前、八神さんの絵を見たとき、悔しいって思ったんです。こんな気持ち、初めてだったんです。それに…」

「それに？」

まっすぐな目で青葉ちゃんは続けた。

「敦さんと約束したんです。いつか敦さんが自分の仕事を楽しいって、誇らしいって思えるようになって」

「……」

「そのためには、やっぱり私たちがちゃんと成長して、敦さんの足を引っ張らないようにしないといけないなって、そう思ったんです」

ああ、やっぱり青葉ちゃんはすごいなあ。

私と違って、目標があつて、そのために努力して、結果も出して、なのに私は……。

私の心の中に、黒いものが湧き上がる。それはどんどん大きくなつていく。

嫌だ。こんな気持ちになりたくない。

でも、どうしようもない

「だから、お互い頑張りましょうっ」

青葉ちゃんは笑みを浮かべながら私に言う。

その表情を見ると、彼女の言葉を信じてしまいそうになる。

それに後ろめたい気持ちになった。だって、私はただ、青葉ちゃんと敦さんが二人きりになるのを見たくなかつただけなのだから。

「あ、あはは。せやな。お互いに頑張ろうな！」

私は精一杯の作り笑いをしながら、彼女に応える。

……もう、嫌だった。こんな自分が。

「はいー」

屈託のない笑顔を見せる青葉ちゃん。

その顔を見ていると、胸の奥がチクチクと痛んだ。

「……あ」

その時、ふと思いついた。

確か、前に青葉ちゃんの事を『かわいい』と言ったことがあつた気がする。

それを覚えていたから分からないけれど、今、私の目に映っている彼女は、いつも以上に可愛らしく見えた。

：敦さんは、青葉ちゃんみたいなのが好きなのかな？

そんな考えが浮かぶと同時に、胸の内で抑えていた黒いものが溢れそうになるのを感じた。

あかん……！

これは考えちゃあかんヤツや。

私は必死になって湧き上がる黒いモヤをかき消そうとする。

けれど一度生まれたそれは消えることなく、どんどん大きくなつていく一方だった。

「……ゆんさん、どうかしましたか？」

「え？ な、なんでもあらへんよ!？」

「そうですか？ なんだか顔色が悪いように見えますけど、さつきだつて……」

「そ、そんな事あらへんよ！ 全然大丈夫やから！」

「本当ですか？」

「ほんまやから！」

「ならいいですけど……。もし具合悪くなったら言ってくださいね？」

「あ、ありがとう……」

私は何とかお礼を言うことができたけれど、本当は限界を迎えようとしていた。

「お前ら、調子はどうだ？」

突然、玄関のドアが開いた。

振り向くとそこには、レジ袋を持った敦さんが立っていた。

お風呂から上がってからしばらく部屋にいないと思っていたけれど、買い物に行っていたみたいだ。

「あ、敦さん、おかえりなさい」

「腹減ってるだろ？ 飯買ってきた」

彼は手に持っていたコンビニの袋を差し出す。中にはおにぎりやサンドイッチが入っていた。

「ありがとうございます」

青葉ちゃんは嬉しそうな声で返事をする。

「飯島も食うだろ？」

「あ、はい。いただきます」

私は少し戸惑いながら答える。正直、食欲なんて無かった。でも、せっかく用意してくれたものを無下にもできない。私は青葉ちゃんと一緒に、敦さんが差し出してきたビニール袋を受け取った。

「じゃあいただきます」

「……いただきます」

私たちはそれぞれ好きなものを手に取って食べ始める。

でもその間もずっと頭の中にあるモヤは晴れることはなかった。

「あの、敦さん、これちよつと見てもらって良いですか？」

そう言いながら、青葉ちゃんはさつき描いた絵を見せてきた。

「ん？ どれ？」

敦さんは青葉ちゃんから手渡された紙を何枚か受け取る。

「…確かに、世界観は良く描けてるな」

敦さんは会社の時のような辛辣な評価はしなかった。

「だが、ここ、もつとよくならんか？」

でも、しつかりとした指摘をした。

「あー、やっぱりそこですよー」

「それに、全体的に主張が弱いな。だから印象に残りにくい。メイ
ンキャラは作品の顔だ。もつと意識しないと」

「具体的には？」

「何か飛び抜けたパンチがほしい。初めてそれを見たユーザーが驚
くようなモノにしないと」

二人は何枚もあるラフ画を見ながらああでもないこうでもない
話し始めた。

その様子を横目で見つつ、私はゆっくりと自分の手元にある食べ物
を口に運んでいく。

「……」

結局、全部食べることはできなかった。

「ごちそうさまでした」

「え？ もう食べたのか？」

「はい。あまり食べられなくて……」

「体調悪いんじゃないか？ 無理ならコンペも参加しなくていい
ぞ。流石に今から始めるんじゃないやしんどいだろう？」

「いえ、そういう訳じゃないんです。ただ、ちよつと疲れちゃっただ
けで」

そう言うと、青葉ちゃんも苦笑いを浮かべて見せた。

きつと私気分悪くしている事に気付いていたんだと思う。

私のせいで青葉ちゃんまで迷惑かけてしまった。本当に申し訳な

かった。

「飯島、お前も見てやるけど、いいのか?」

「えっ!」

急に声をかけられてびっくりする。

「えっと…すみません、見せられるほどできてなくて」

「まあ。さすがにすぐには難しいだろうな」

敦さんの言葉を聞いて、ホツとする。そして同時に罪悪感を感じた。

……敦さんには見せたくない。絵自体はそこそこ得意やけれど、青葉ちゃんの絵を見てあんな反応をしていたから、私の絵を見たら絶対ガツカリするはず。

……嫌や。失望されたくない。嫌われたく無い。

だったら、最初から関わらなければ良かったのかもしれない。

そしたらこんな気持ちになることもなかったのに……。

だったらせめて、これ以上醜態を晒さないように努めへんと。

せやないな、夢のために頑張ってる青葉ちゃんの足引っ張ってるだけやし。

……だから罰が当たったんかな?

「まあ、迷ってるなら、自分の好きなモノでも描いてみたらどうだ?」

「……え?」

その言葉を聞いた瞬間、思わず顔を上げてしまう。

「気分転換にもなるだろうしな」

敦さんはそれだけ言うと、タバコを吸いにベランダに出て行った。

「ゆんさん、好きなものってなんですか?」

「……へ?」

唐突すぎる質問に変な声が出てしまう。

「絵を描く時ってどういう風に描くことが多いんですか?」

「そ、それは…構図とか描きたいもののイメージを固めてから……」

「それだと時間がかかるから苦手だって言ってますでした?」

「うぐう……」

「正論すぎて何も言えない。

「好きなものを描くなら、すぐ描けるんじゃないですか？」

「……」

確かにそうだと思った。

でも、私の好きなモノって一体……。

私はふと窓を見た。

窓の向こう側で、タバコを吹かしている敦さんが目に入る。

「っ……っ」

私の好きな人。

社員旅行の時に思い知らされた、もう無視できない自分の気持ち。

私はもう一度ペンを握った。

……できた。

「っ……っ」

すぐに両手でソレを隠す。

こんなの敦さんはもちろん、青葉ちゃんにも見せられる訳が無い。

私が描いてしまったのは椅子に腰をかけ、タバコを吹かしている3

0代くらいの男性の絵。

紙の上に描かれているのはどう見ても敦さんだ。

服装や風貌こそファンタジーっぽい格好にしているけれど、よほど

鈍い人で無い限りこの会社にいる人間が見れば分かる。

なんでや！

なんでよりにもよってこの人描いたんや！

あかん！ 私、敦さんの事が好きすぎる!!

とにかく隠さないで。

流星にこれ一枚だけだと絶対青葉ちゃんとかが不審がる。

どうしても他の絵を描かないといけない理由ができてしまった。

幸い、青葉ちゃんはさつきから自分の絵に集中している。

やるならいまいかない。私はまたペンを握って新しい絵を描き始

める。

もうなんでもいい。木を隠すなら森の中、紙を隠すなら紙の中や。…そして、しばらくすると、敦さんがまたベランダから部屋に戻ってきた。

「ん？　なんか増えてないか？」

「え？」

気づくと私は10枚以上も絵を描いていた。

仕様書のとおり、敵を吸収して変身するというのをテーマを主軸に、ただ描きまくっていた。

「……随分と描いたな。見てやろうか？」

「い、いえっ…大丈夫です」

私は慌てて全部隠す。

うっかりアレを見られたら死んでしまう。

「そうか。ならいいが」

「はい…私、もう帰りますねっ」

「あ、でも終電もう終わってるぞ！」

「大丈夫です。タクシーで帰るんでっ」

描いた絵を全部ファイルにしまって、足早に彼の家を飛び出す。

これ以上あの場所にいたら今の私は絶対に墓穴を掘る。

敦さんも、青葉ちゃんに変なことしないはずだ。……多分。

私は大通りにでると、すぐに通りかかったタクシーを止め、自分の住所を伝えて家路についた。

「……」

その道中、タクシーに揺られながら、さつき描いた絵達を眺めている。

ほんとうにたくさんできてしまった。あの短時間で。

…せつかく描いたんだし、ダメ元でコンペ、出てみようか。

もしかしたら、案外ええ評価もらえるかもしれない。

ああ、でも安心したからなんか眠くなってきた。これの整理はまた明日にしよう。

タクシーに揺られた私は、突然やってきた睡魔に負けて眠りに落ち

た。

奪い合いの中で

ゆん視点

「え？　じゃあ、全部ダメ？」

「もつたいないけれど、自由に書いてもらってる分、もつと遊んでほしいんだ」

キャラコンペ当日。

序盤から波乱の展開だった。

というものの絶対選ばれると思っていた八神さんがまさかのリメイクをもらってしまったからや。

理由はフェアリーズストーリーと世界が同じ。もつと世界を広げて欲しい。

とのことだった。

奇しくも、昨日敦さんが話していたことと一致する。

ユーザーが求めるモノ。

世界観のこと。

敦さんの言葉が頭に浮かぶ。

まるでこうなることを予期していたかのようだ。

それだけ八神さんに期待しているという裏返しなのだろう。だけどある意味チャンスなのかも知れない。

もしかしたら、私の案が通ることだってあり得るんじゃない？

「じゃあ次、涼風君」

どうやら次は青葉ちゃん。

私が帰った後も描いていたんだろう。

でも青葉ちゃんも緊張しているみたい。

当然だ。だってチームの皆が見ている前でプレゼンしないといけない。

でも、その目には迷いが無い。きつと何か掴んだのかな？

「うん。結構面白いね」

「そ、そうですかつ」

葉月さんの反応はよさげだ。

表情も明るい。ウソやお世辞を言っているわけじゃないのはわかる。

これはもしかして……っ。

「でもインパクトが弱いね。もう少し意外性が欲しいな」

「うう……わかりました」

ああ、それも敦さんに昨日言われていたことや。

結局、うまくいかんかったんや。

でもしようがないよ。

一日でどうにかできるもんでもないし……。

「ん？」

葉月さんが青葉ちゃんが提出した紙を整理しようとして持ち上げたとき、一枚の紙が落ちた。

彼女がそれを手に取ると、目の色が変わった。

それは感動や関心によるものではなく、驚きによるモノだった。

「涼風君？　これは？」

「……？」

葉月さんが見せたそれは、クマの着ぐるみに包まれた女の子の絵だった。

というか、着ぐるみに飲み込まれている。

「わあああ！　すみません！　それ私の寝袋を元に描いたものでっ、ラクガキというか……でも面白いかなって」

それをみて慌てている青葉ちゃん。

青葉ちゃんも私みたいなことしてたんや。

きつと気分転換か思いつきで描いたんやろう。

でもあとで恥ずかしくなって、隠すつもりだったんだ。でもまさか、提出した紙にそれが混ざっていたなんて。

「なるほどね。確かに面白い。ていうかこれじゃあキャラが吸収されてるよね」

「ですよねははは」

確かに葉月さんの受けがいい。

というよりか、笑いという意味で受けている。

それ以外には少し滑ってすらいないかとすら思える。

「でも…うん、決めた。この方向で行こう」

「ですよね…：うそ!？」

…え？

私の聞き間違いじゃないん!？」

ということとは…青葉ちゃんの案が通ったん!？」

あの八神さんを抑えて!？」

「もちろんこのままでは使えないから、次のコンペまでにブラツシユアップしてくれるかな？」

「は…はい!？」

会議室がざわつく。

驚きと戸惑いの声。

その中でも青葉ちゃんの笑顔は輝いている。

「すごいやん青葉ちゃん」

「はい!… まだ決まったわけではないですけど、嬉しいです!？」
と同時に落胆の気持ちも私にはあった。

青葉ちゃんの案が通るということは、私の案は通らないってこと。
せつかく描いたのに評価される間のなくきまってしもうた。

でも、これでよかったかもしれない。

だって、こんなに喜んでる彼女の横顔を見ると、昨日のことを
思い出して、胸が締め付けられるように痛くなるから。

「じゃあ次は飯島君だね」

「あ、はいっ」

私の番がきた。

とは言え、もう消化試合みたいなもんやし。

パパっとすまそう。

「ふむ、良いじゃないか。世界観もしっかりしているし、キャラも
立っている」

「ありがとうございます」

「ただ、やつつけ仕事感が強いね。もっと細かく描いてほしかった
な」

「は…はい。すみません」

あの絵を誤魔化すために描いただけやし。

少し期待したけどこんなもんか。

……あれ？

私、昨日あの絵ちゃんと片付けたっけ？

「ん？」

と、私の考えがまとまる前に、最後の一枚に目を通していた葉月さんは声をあげた。

「飯島君」

「はい？」

「…これは？」

葉月さんが私の方に向けた一枚の紙。

それには、昨日私が描いた敦さんをモデルにしたキャラの絵が描かれていた。

「……」

「……」

「……っ!？」

私は言葉を失った。

それと同時に顔の温度が一気に上がっていくのを感じる。

あかん。

これはあかん…っ!

なんで、どうしてここにこれが!

そんな…確かにちやんと帰ったあと片付けて…っ!ない!!

あの後タクシーで寝てしまった私は風呂に入っただけのままぐっすり寝てもうた!!

私の動揺とは裏腹に、葉月さんが続ける。

いつもの不敵な笑みで。

「へえ、なかなかいい絵だね。こういうの描けるんだ」

「いえ…っ!あの、それは…っ!」

やばい。

絶対にバレてる。

そもそもテーマと全然違うし！
どうしよう。

恥ずかしい。

しかもここにその本人がおるのに！

穴があつたら入りたい！

というか、もうこの場から逃げ出したい！

「うん、いいね。もっと見てみたい。他の衣装とか三面図も描いてほしいな」

「……え？」

その言葉に、今度は血の気が引いた。

彼女は一体何を言っているのか。

本当に意味がわからなかった。

なんで？

「ちよつと葉月さん」

あまりの無茶な采配に、隣にいた遠山さんも苦言を挺する。

当たり前や。だってそもそも青葉ちゃんの案で決まってる上に、この絵はテーマに沿ってない。

コンペ以前の問題やのに。

「いいじゃないか。こういうキャラを描ける娘は意外と少ないしね。お願いできるかな？」

「え……？ あ……はい。わかりました」

「よし決まり。次のコンペの時に仕上げて持ってきてくれるかな？
楽しみにしてるよ」

そうして、私の番は終わり、葉月さんは次の人が描いた絵に目を通しはじめた。

やがて全ての案が発表された。

結局、葉月さんのお眼鏡にかなったのは青葉ちゃんの案。

私の案も、通ったと思ってええんやろうか？

会議室からぞろぞろと人が出ていく。

それと一緒に私も自分の席に戻った。

机の上に突っ伏すようにうつ伏せになる。

終わった……。

あんなことを言われるとは思わなかった。最悪、怒られるくらいはあると思ってたけど、まさか採用されるなんて……。

しかも、よりにもよってあの絵が。

「ゆんさん、やりましたね」

「あ……うん、せやな」

声をかけてきた青葉ちゃんの方を見ることなく答える。

「すごく良かったですよ！」

「そっか、ありがと」

「はいー」

私は力なく笑いながら、それでもなんとか笑顔を作った。

こんな気持ちのまま彼女と話せるほど私の心は強くない。

「お互い、次のコンペも頑張りましょうっ」

と言いつつ、彼女は自分の席に戻っていった。

「ふう〜」

私は大きく息を吐いて、自分が描いた例の絵を広げる。

タバコを吹かした30代くらいの男性。

敦さんをモデルにしたキャラ。

葉月さんからは他の衣装と三面図を描けと言われたけれど、今は描ける余裕なんて無い。

「……」

でも、通るかもしれない。

私の絵が葉月さんの目に留まって、私のイラストが彼女の作品に使われる可能性がある。

そう考えるだけで胸が高鳴った。

正直、今回のコンペは落ちるのが目に見えてるからやるだけ無駄やと諦めていた。

でも、まだ可能性はある。

主役は青葉ちゃんかもしれないけれど、サブキャラやって大事や。

最初ははじめや青葉ちゃんのこと、カッコ悪いって思ってたけど、やれるだけのことをやろう。

さつきまで沈んでいた気分が一気に晴れ渡っていくのを感じた。
よし、やってやろうじゃないの！

私は広げたままの紙を手にとって気合を入れ直す。
さあこれから忙しくなる。まずはこれを仕上げないと。

●
敦視点

しかしまあ、なかなか面白いことになったな。

屋上で一服していた俺は、昼間のコンペのことを思い出していた。

「まさか、涼風が描いたあのラクガキが通るなんてな」

葉月らしいと言えばらしい。

あの思いつきはこういう時は吉と出るときがある。

大半は後ろから背中を刺されるわけだが。

「それと飯島の描いたヤツ、なんであんなの描いたんだ？」

確かに気分転換に好きなの描いてみるとは言ったが、それであれが
出てくる理由が見当が付かん。

飯島はああいう男性は嫌いだというイメージが強いから。

どっちかというと、もっと爽やかな青年でも描くと思っていたの
に。

「まあ、それが通ったならいいか」

今回のコンペは精々、次の開発のコンペに期待ぐらいの線と高をく
くっていた。

それが、この快挙。

俺が入れ知恵したとは言え、その二人が両方、八神を抑えるとは思
わなんだ。

今回の開発、多少は楽しめそうだな。

「……」

いや、何考えてるんだ俺は。

俺にそんな大層なこと望む権利はないだろう。

旅行の前の葉月の面談を思い出す。

…葉月は涼風にアイツの話をした。

フェアリーストーリーという名前の裏に葬られた彼女のことを。

涼風が緑と似ているだつて？

やつとアイツの企みがわかった。

俺が涼風と同じタイミングでキャラ班と合流させたのも。

全部葉月の悪知恵だ。

ふざけるな。

葉月の野郎。

そんなくだらないことに何心血を注いでるんだ。

緑のことをなんだと思つてやがる。

涼風のことをなんだと思つてやがる。

緑は誰かが代わりになれるような存在じゃ無い。

涼風は誰かの代わりになるような存在じゃ無い。

「…」

思考がまとまらない。

イラつく。

葉月にも、自分にも。

どうしようもなく苛立つ。

吸っているタバコの味すら煩わしいと思えるほど。

吸い殻を地面に落として、踏み潰す。

この苛立ちを鎮めることを諦めた俺は、オフィスに戻ることにした。

仕事をしていた方がまだマシだ。俺は足早に階段を降りて行った。

「さっき全否定されたんだよ？　そうそう新しいの思いつくわけ無いじゃん！」

社員証でオフィスの扉を開けて、中に入った途端、耳に入ったのは怒鳴り声。

この男勝りの言い方と声は八神のモノだ。

なんかマズい雰囲気だな。今顔を出すのはよそう。

「…あ」

しばらくすると、八神が出てきた。

その瞳は震えていた。

きつと居心地が悪くなつたから逃げてきたのだろう。

「……」

俺は特に何も言わない。

多分、俺が言いたいことは、コイツ自信が一番分かっているはずだ。だから必要ない。

「っ……」

何も言わない俺に気を遣わせたのが気に触つたのか、すれ違うようにオフィスから出て行く。

大体察しは付く。

大方、コンペが通つてはしゃいでいる涼風に対して八神が怒鳴つたのだろう。

要は八つ当たりだ。

負けず嫌いの八神らしい。大人げないといえば仕方ないが。

俺はキャラ班のブースへと向かった。

「っ」

そして、ブース内の光景に息を飲んだ。

「ちよ……青葉ちゃん？」

遠目で見てもわかる。

涼風は泣いていた。

考えてみれば当たり前だ。

憧れの存在からあんな言葉を投げつけられたのだ。相当なショックに決まっている。

それを慰めようと、飯島がオロオロしている様子が見て取れる。

「大丈夫か？ 何があつた？」

「あ、あつ、し……さん」

涼風に問いかけると、泣き腫らした瞳でこちらを見てくる。

「落ち着け。ゆっくりでいい」

「う……うう……ごめん……なさい、こんな、だいじな………とき……」

このままじゃ説明もままならない。

彼女が泣き止むまで、少し待とう。

話はそれからだ。俺は飯島と涼風と隣り合うように席に座る。

「……すみません、お待たせしました」

しばらくして、落ち着いた涼風の様子を見計らい、話を聞くことになった。

「実はですね……」

事の経緯はこうだった。

先ほどのコンペの修正案を八神に相談しようとしたとき、妙な言い方をしてしまったらしい。

そこからあの怒鳴り声に繋がる訳か。

涼風も案が通って気持ちが高鳴っていたのもあるが、八神に対する憧れがあったのだろう。

八神なら、これくらい簡単にやってのけるといふ無慈悲な信頼を。

だからこそ、そんな無様な姿を見たくない。

そんな気持ちが溢れた結果だった。

「……なるほどな」

「……敦さん。私の夢ってこういうことなんですか？ 憧れている人を……蹴落としてでもしないと、叶わないんですか？」

「……」

涼風は迷っている。

自分のやりたいこと。

仲間とやりたいこと。

この場所で成し遂げたいこと。

その狭間で揺れ動いているのだ。

「……涼風、その質問にだけ答えるなら、その通りだ」

「っ……」

俺の言葉を聞いて、また泣きそうになる涼風。

「ちよつと敦さん」

極端な言い方をする俺を止めようとする飯島に目配せして制止させる。

俺が言いたいことはそれだけじゃないからだ。

「この世の大抵のことには限りがある。場所も、時間も、金も、何もかも。それに対して、人の欲望は限りが無い。その全てを満たすことなんてできないよ」

これは昨日した授業の続きだ。

正直まだ早いと思っていたが、こうなった以上やるしか無い。

「お前がもし仮に、八神と共同で今の案を通すことができたとしても、それは所詮、その場しのぎだ。次は同じようにはできない」

「……じゃあ、じゃあっ……私は、どうすれば……っ」

涼風はさすがのように聞いてくる。

遅かれ早かれ、この壁にはぶつかる。ならば、答えてやらねばならない。

彼女の夢を壊さないために。

俺は、おぼろげに揺れる紫色の瞳を真っ直ぐ見て言った。

「まず、お前が肝に銘じないといけないことが2つある。一つ目は、奪い合いを否定するということだ」

俺は続ける。

「さっきも言ったが、世の中の大抵のことには限りがある。限りがある以上、奪い合いは避けられない。例えば、お前が1つの仕事をもえれば、誰かがその仕事ができなくなる」

例を挙げればキリが無い。

それだけ、人の欲望は無限だからだ。

「奪うことを一切拒否したら、お前はなにも手に入れることはできなくなる」

でなきや自分の夢すら奪われることになる。

と俺は付け加えた。

「奪い合いを嫌悪して生きていくことなんてできない。仮に働かず、誰かに養ってもらったとしても、自分の食い扶持は誰かが奪い合いによって得た結果で生きている」

要するに、生きるということとはそういうものだ。

何かを犠牲にしなければ、生きていけない。

それが資本主義の世界なのだ。

「奪い合いの結果で生きているのに、奪い合いを否定するような卑怯なヤツになるな」

涼風は何も言わない。

ただ、真剣に俺の話を聞いている。

涙も、もう流していなかった。

俺は、そのまま二つ目のことを話した。

「もう一つは、バランスを取れ。人は奪わずに生きていけない。だがな、強欲すぎたら人でなしだ」

俺達は、知ってか知らずかその狭間でいる。

奪い合いの中で、自信と他者との折り合いをつけながら、生きている。

それこそが、人間の本質だ。

「奪い合いの中で生きていくことを自覚して、そこをどうバランスを取るかが重要だ。このバランスが取れないヤツは、奪い合いを否定して逃げ出したり、結果のためになんでもする人でなしになる」

…不意に、俺の脳裏に二人の面影が浮かんだ。

思い出したくも無い奴らの顔。

一人はこの会社の一番高い椅子に座っている男。

もう一人は、ゲーム展で出くわしたクソ野郎。

だが、この話をする以上、奴らのことも話さねばなるまい。

「…なあ涼風、奪い合いに飲み込まれた人間は、どうなると思う？」

「え……？」

唐突に聞かれたせいで、涼風はよくわからないようだった。

「心がずつと、奪い合いの中にいるんだ。そしてそういう奴らが一番恐れることがある。それは……」

「…奪われること、ですか？」

「そうだ」

俺は言った。

奴らは自身が奪ったモノによって、どれだけ自分が潤ってきたかを身をもって知っている。

だから、怖いんだ。
自分が奪われることが
と。

「そうなるとな、奪われる前に奪おうとするんだ。そうになったら、俺はおしまいだと思っっている。だって、自分と自分が奪って得たモノ以外、何も信じられなくなってしまうからな」

「……」

「そうならないように、常に考えて行動しろ。じやないと、いつか大事なもの失うぞ」

「……はい」

「……ま、こんな感じかな」

と、俺は締め括る。

我ながら、柄でもないことを長々と話した気がする。

「……ありがとうございます、敦さん」

「ん？何がだ？」

「いえ、なんだかスッキリしました。私、頑張ります」

「おう」

俺が返事をする、飯島が言った。

「……なんか、凄かったですね。あんなことまで言うとは思いませんでした」

「必要だから言っただけさ。こういうことは遅かれ早かれ起きるからな」

「……でも」

また涼風の顔が曇る。

「なんというか、敦さんの言ってたこと、正しいですけど、悲しいですよね」

「どうしてだ？」

「……奪う側と奪われる側に分かれている時点で、平等ではないっていうことなんですよね。結局、人は人と支え合って生きていけないといけないのに」

「確かにな。だけど、そんな綺麗事ばかりじゃ回らないんだよ。特

にこの世界ではな」

俺は苦笑しながら答える。

「それに、俺達の仕事も、言っちゃえば、他の会社の商品をプレイする時間を奪うわけだしな」

「……そうでした」

「だからこそ、自分達がモノを作っている間は、全力で楽しむべきだ。奪っているという意識は捨てろ。お前が楽しいと思えることで、誰かが楽しんでくれる。それを忘れるな」

「……はい！」

涼風はようやく、元気よく答えた。

「さて、ほんじゃやるか。涼風。わからないところがあるんだろ？

見せてみ？」

「あ、ありがとうございますっ」

涼風は笑顔で答礼した。

その顔にはもう涙の跡は無かった。

「あ、それと飯島、お前のも見せてくれ」

「え？」

と、突然言われて驚く飯島。

涼風も不思議そうな顔をしていた。

「お前も次のコンペであれ出すんだろ？ なら世界観は合わせておいた方がいいし、その方が葉月の印象もいいだろ。ほれ、早くしろ」

「は、はい。お願いしますっ」

これで、一安心。

あとは八神だけだが、きっと大丈夫だ。

シンは見限ったが、俺と葉月はまだ捨てたもんじゃないと思ってる。

それはこの一年間で証明して見せた。

というか、これは俺の願望だ。

アイツは俺達の…緑の夢を形にしてくれたんだ。

この程度で終わるような人間じゃ無い。

なあ、緑、お前もそう思うだろ？

独りぼつちじゃない

八神視点

5年前。

それは、フェアリーズストーリー2開発のまったただ中のことだった。

私は、異例のADとしての役割に苦戦していた。

『ねえ、全然できてないじゃん！ やる気あるの!?!』

『……っ』

キャラ班の席で、私は一人の子に怒鳴り声を上げていた。

彼女は半年ほど前に入社してきた新人の子。

私の画面に映されているのは彼女が手がけたモデリング。

ある程度3Dができるようになってきたから任せるようにしたモ

ブの村人だけど、はつきり言って全然なっていない。

『だ、だって……』

『言い訳しない!』

『……』

私の声がフロアに響き渡る。

他のスタッフ達は心配そうに見つめてくるけど、もう気にしなかった。

いい加減イライラしてきた。

キャラ班全体の仕事もかなり遅れている。私がスケジュールを管理して指示しても、全然動いてくれない。

どれだけ必死に動いても、状況は好転しない。寧ろ悪くなっている。

まるで蟻地獄にいるみたいだ。

抜け出せない。

このままじゃいけないとわかっているのに……。

なんとかしないと足掻けば足掻くほど、悪化していく一方。

この子もそれはわかっているはずなのに、なんでもっと必死にならないのか理解できない。

『ねえ、何しにここに來てるの?』

『……』

『答えなさいよ!!』

私は自分のデスクを叩く。

周囲の視線が集まってくる。でも止まらない。止められなかった。

『あなた自分が何をやってるか本当にわかってんの? 3Dモデ

ル一つまともに作れない人がキャラデザの仕事できると本気で思っ

てるの!?!』

感情のまま叫ぶ。

自分でも酷いことを言っている自覚はある。

それでも言わずにはいられなかった。

この子は真面目な子だ。その気になればもつとできるのに。

彼女も頑張ってくれているんだろう。

だからと言って甘えさせるわけにはいかない。そんな優しさはこ

の業界では通用しないから。

現に彼女は、私の言うことに反論すらしようとしない。

『……ごめん、なさい』

その顔からはポロポロと涙が溢れ出していた。

でも泣いている暇はない。時間がないのだ。

泣きたい気持ちはよくわかる。

だけど同情している余裕もない。

『泣くくらいならさっさとやりなさいよ!! なんのためにここに來

たの!?!』

『……うぐ……ひつく』

『泣いたら許してくれると思ってるんでしょ! ふざけないで!

あんたが今やるべきことはそれじゃないでしょう!!!』

そしてまた怒鳴りつける。

彼女の嗚咽が大きくなる。

そこでようやく、私は我に返った。

『おい、何やってる!』

騒ぎを聞きつけた敦さんがブースの中にやってきた。

『八神、お前言いすぎだ』

『っ…、で、でも…』

私の話を聞いても無駄だと言わんとするかののように、私から目をそらした敦さんは泣いている彼女の方に歩み寄った。

『大丈夫か？ 食堂で少し休んでろ』

『はい…すみ…すみま…』

『謝るな』

敦さんの一言に、彼女がビクツと震えた。

彼は優しい口調で言う。

『ほら、涙拭いてこい』

彼女は小さくうなずくと、そのままブースから出て行った。

私には一切目もくれず。まるで逃げるように。

『敦君』

入れ違うように人が入ってきた。

葉月さんだ。

それだけじゃない。もう一人いた。

『なにになに〜随分と賑やかだね。何か面白いことでもあったの？』

彼女の後ろにはさらさらした灰色の髪をした男の人がいた。

この人の名前は渡邊新一。

敦さんの同期だ。

『シン、テメエは黙ってる。でなきやその口に殺虫剤ぶちこむぞ』

『おお、怖い怖い』

全然怖がついていない様子の彼は、まるで茶化すような態度だった。

敦さんは彼を睨んだあと、葉月さんの方を向いた。

『葉月、悪いがこっからは俺が仕切るぞ。それでいいいな？』

『ちよ、なんでそんな勝手に…』

それは私がAD失格を意味していた。

そんな、私はまだやれると、口を挟もうとした。

『……』

周囲の目が刺さる。

さつきまで気にならなかった視線。

それが私を串刺しにした。
もう私にはついて行けない。

それを無言で訴えていた。

葉月さんも困った顔をするだけで何も言わない。それは、敦さんの申し出を受け入れた何よりの証拠だった。

『遅れているところは全部俺に持つてこい。シン、プログラムの方はまかせたぞ』

『え〜？　なんでコイツの尻ぬぐいなんてしないといけないの？』

今日は定時で帰れると思つたのに』

『テメエ……』

『わーお、こっわーい。悪いのはこの子でしょ？　なのにどうしてこんな目に合わないといけないのかな〜』

嫌みつたらしく言う渡邊さんに、敦さんは舌打ちで答えた。

『八神、仕事に戻ってくれ。キャラデザに専念しろ。いいな』

私は力なくうなずくしかなかった。

結局の所、私はADとして役立たずだと言われているのと同じことだった。

嫌な静寂に静まりかえつたブースの中、渡邊さんは私を一瞥して言った。

『まあ、いい機会だったんじゃない？　化けの皮を剥がす……ね』

『……お前、いい加減にしろ』

『あれ？　なんか僕、悪者になってる？　も〜ひどいなあ。ま、いつ

か。どうせ残業確定だし、食堂に行つてメロン食べよっ♪』

そう言つて飄々とした態度のまま、渡邊さんはブースを出て行った。

敦さんと葉月さんも何も言わず、彼を追いかけるようにその場を去る。

ブースの中には私一人だけになった。

きっと彼らは私に気を使つてくれたのだ。

情けなくて涙が出てくる。

私は何をしているんだろうか。

何のためにここにいるんだろうか。

悔しくて悲しくて惨めで仕方がなかった。

自分はソコソコできると思っていた。だけど現実はこちらだ。

こんなにもダメなのかと痛感させられた。

私は結局、自分のことしか考えられなかったのだから。

● 会社にいても捗らないから、珍しく定時退社したけど、一人暮らしの部屋に戻りたくなかった私は、電車に乗ること無く、近辺の繁華街を当てもなく歩いていた。

私、なにしてんだろ……。

コンペに負けたからって、みつともなく青葉に怒鳴って、完全に八つ当たり。

私、最低だ。

昔のことを思い出してしまう。

あの子は結局、会社に来なくなり、やがて辞めた。

私がクビにしたようなものだ。

……あの時と、全く同じだ。

「……」

心のどこかでおごりがあつたのかもしれない。

自分が選ばれるものだって。

そんなこと、あり得るはずが無いのに。

思い返せば、私が入社したてのフェアリーズストーリーの時だつて、敦さんがたまたま交通事故にあつて絵が描けない状態だったから、自分が抜擢されただけ。

もしあの時、敦さんが万全の状態だったなら、私に勝ち目はない。

今回のコンペだって、敦さんは参加してないから、私を抑えて他の子の案が通るなんて考えすらおよばなかった。

それすら忘れていた自分が落ちるなんて当然だ。

青葉やゆんが敦さんに入れ知恵されていたことなんて言い訳に過ぎない。

結局、私は昔と変わってない。

ただ周りに助けられながら、ここまでやってきただけの人間なのに。

りん、ひふみん、青葉もそうだ。

なのに、私は自分のことしか考えてなかった。運が味方して、誰かの力を借りて、ようやくここまでこれたのに。

それを自覚しないで、勝手に落ち込んで……本当にバカみたい。

「りん相談すれば、よかったのかな……」

…ダメだ。

今、りん頼るわけにはいかない。

旅行から帰ってきた直後のことを思い出す。

私以外のことであんなに楽しそうな顔をしているりんを、久しぶりに見た気がする。

りんも佐藤のことといっぱいっぱいはずだ。

今までずっと彼女に甘えてきた、そのせいで、自分がりんの時間を奪っていることを気にしなかった。

これ以上負担をかけることはできない。

でも、他に相談できる相手なんていない。

……気付きたくなかったな。

私からこの仕事を取ったら何も残らない、つまらない女だつてことに。

こんな私じゃ、誰も好きになつてくれないよね……。

「……」

泣きたい気分だった。

だけど、こんなところで泣くわけにはいかなかった。

こんなところ、知り合いに見られたくないし、それに……泣けば少しは気が晴れるだろうけど、余計惨めになるだけだ。

私はポケットの中のスマホを取り出して時間を確認した。午後2時半過ぎ、そろそろ帰ろうと思ったその時だった。

「八神さん？」

振り返ると、人並みの中でもひととき目立つ人が立っていた。

背が高く、疲れ切った三白眼、コートに身を包んだ彼を私は知って

いた。

彼の名は吉田駿輔。

うちのビルの警備員のアルバイトの傍ら、受験勉強に勤しんでいる浪人生だ。

「あの、なんで泣いているんですか？」

「!？」

慌てて涙を拭く。

まさか泣いていたなんて。

見られた。

よりによって一番知られたくなかった人に。

彼は心配そうに見つめてくる。

私のことを本気で気にかけてくれているようだ。

「ご…ごめん、気にしないで」

青葉と同じ年の子にまで心配をかけるわけにいかない。

私は彼にそう言って立ち去ろうとした。

だけど、彼が私の腕を掴んだ。

「待ってください！ こんな状態で放っておくほど僕、無責任じゃないです！」

「離してよっ!!」

「離してよっ!!」

私は思わず叫んでしまった。さすがに彼も驚いて手を離す。

ああ、もう最悪だ……。

こんな形で彼と接点を持ちたくはなかったのに……。

「今のごことは忘れて、お願いだから……」

私は必死に懇願するけど、彼は首を横に振った。

「嫌ですよ。八神さん、すごく悲しそうな顔してました。理由くらい聞かせてください」

「聞かせてください」

「関係ないじゃん……」

「じゃあ、なんであの時、励ましてくれたんですか？」

「…それは」

彼が話しているのは二ヶ月前のことだ。

マスターアップした直後、模試の結果がふるわず、落ち込んでいた

彼を励ますために連れ出したことがあった。あの時は確かにそういうつもりだった。

「ただ今とは違う。」

「私自身にも分からない。」

青葉に当たってしまった私が、惨めで情けなくて、そんな自分が許せなくなっただのか、それとも、自分のことを見てくれなかったことが悔しかったからなのか、自分でもよくわからない。

「そんなの、言えるわけがない。」

「確かに自分は八神さんと違って社会人にすらなっていない。でも、あなたがどれだけ努力してるか知っています。だから、誰よりも頑張ってることぐらい分かります。」

「……」

「絵のことはよくわかりません。それでも、何か力になれるなら協力したいです」

「……」

「なんでこの子はこんな風に言ってくるの？」

「どうして私なんかのために。」

「私は、本当に最低なのに。」

「八神さんが手がけた作品は自分もやりました。とても面白かったです」

「え……」

「私は耳を疑う。」

「今、なんて言ったの？」

「八神さんが画いたキャラクターはどれも魅力的でしたし、どのキャラも生きていました。僕はあのゲームが好きです」

「彼はまっすぐな目で言う。」

「嘘をついているようには見えない。」

「本当に面白いと思うってくれてるんだ。私が作ったものを……」

その瞬間、私の中で抑えようとした感情が爆発しそうになる。ダメだ。これ以上この子の前で醜態を見せるわけにはいかない。でも彼は待ってくれなかった。

「設定画集も攻略本も買いました。インタビューの記事も読みました！」

「……ん？」

それってまさか…。

「…あの、もしかして、読んだの？ あれ」

私の中で、嫌な予感が出てきた。

それは、彼に私のあの姿を見られた可能性が浮上したからだ。

「はい」

私は頭を抱えたくなつた。

なんで読んでるのおおお!!

私は心の底から叫びたかった。

だつてアレだよ!?

普段の私を知らないお客さんが読むだけならまだ耐えられたけど、彼に見られたとかマジ無理。恥ずかしすぎる。

「とても綺麗でした。髪もサラサラしていて、フリルが可愛い服も似合っていました。正直言ううちよつとドキドキしました……」

「やめてえええ!!」

私は顔を真っ赤にして叫んだ。

もう本当に死にたい。

青葉達に見られただけでも恥ずかしかったのに、ヨッシーにまで見られてたなんて！

「……すみません、つい興奮してしまいました」

「……」

彼は申し訳なさそうに謝ってきたけど、正直、怒りも悲しみも通り越して呆れてしまった。

「……まあいいや。なんか少し楽になった。ありがと」

でも不思議とさつきまでの悶々とした気持ちは無くなっていた。代わりにあったのは彼に対する感謝だ。

今の私にこんな風に言ってくれる人がいるとは思わなかった。

やっぱり一人じゃダメなんだね私は……。

「いえ、少しでも元気が出たようで良かったです」

ヨッシーは微笑む。

「だ〜け〜ど、ダメだぞ〜ゲームなんてして。受験勉強はどうしたの?」

「す、すみません」

私が言うと、彼は苦笑いを浮かべながら謝った。首に手を当てるいつもの癖と一緒に。

それを見ると、不思議と笑顔になった。

「こつちもごめんね。あんな態度とつちやつて」

「気にしないでください。僕が悪いんですから」

この子は本当に優しい。

そして、強い。

自分より年下の子に氣遣われるなんて情けない。

私がつっかりしないといけないのに。

けど……

「……ねえ、そのついでみたいなものだけども、この後空いてる?」

「え?」

「……いや、なんていうかき、ちょっと付き合っただけか、相談したいことがあるというか……」

けど今は、もうちよつとだけ甘えたかった。

一人に、なりたくなかった。

私は口籠りながらも、なんとか声にする。

すると、彼は小さく笑ってくれた。

「いいですよ。どこに行きましようか?」

「そ、そうだなあ……。じゃあさ、美味しいもの食べに行こうよ。奢るからさ!」

「え、悪いです」

「大丈夫、大丈夫。どうせ給料日前だし。それに、お金使うことないから溜まってるし」

「……では、お言葉に甘えて」

私は小さく笑う。

ヨッシーは遠慮がちだけど、私の誘いに乗ってくれた。

それが嬉しくて、思わず笑ってしまった。

それから私たちは、繁華街の一角にある居酒屋に入ってしまった。ここはチェーン店ではなく個人経営のお店らしい。

店内は木目調の壁で統一されていて、爽やかな茶髪の男性のオーナーが温かく出迎えてくれる落ち着いた雰囲気のところだった。

私たちの他にサラリーマン風の男性たちが数人いたくらいでほとんど満席状態だ。

「いらっしやいませ。二名様でよろしかったでしょうか？」

「はい」

オーナーは慣れた手つきでテーブルを案内する。

「お飲み物の方はいかがいたしますか？」

「とりあえずビールをお願いします」

「ではウーロン茶で」

「かしこまりました。お料理は何にいたしましたでしょうか？」

「んー、どうしようかな……」

私はメニューを見る。

値段的にはリーズナブルなお店で、お酒の種類も多いみたいだ。

「この焼き鳥盛り合わせで」

「僕はこのハンバーグセットを」

「かしこまりました。少々お待ち下さい」

オーナーが注文を受けて奥へと入っていく。

「ハンバーグ好きなんだ。意外とこどもっぽいところあるんだ」

「ダメでしょうか？」

「ううん。ごめんね。ちよつと今年入ってきた新人の子みたいで可愛いなって思ってる」

私はクスツと笑う。

でも、彼がちよつと不安げに見える。

なんでだろと思って様子をうかがっていると、彼は気まずそうに訪ねてきた。

「…すみません。その、その人ってもしかして、男の人ですか？」

「へ？」

私は一瞬キョトンとする。

「ううん。女の子だよ。私よりも背が小さくて顔立ちとか表情は幼い感じの子。結構仕事熱心な子だから、今日も残業してるんじゃないかな」

「そう、ですか」

私の答えを聞いて、どこか安心した顔をしてみせた。

……変なの。

そんな話をしているうちに、先程の男性がビールと料理を持ってきてくれた。

乾杯をして喉の渇きを満たすように流し込む。

切れの良い炭酸が心地よい刺激を与えてくる。

「あ〜うまいっ」

冬は熱燗が美味しいけれど、暖房の効いた部屋の中で飲む冷えたビールもまたいい。

「ぶはあ〜」

一気に半分ほど飲み干した。

「いい飲みっぷりですね」

「まあね。ヨツシーも成人したらわかるよ。この気持ち良さが」

「楽しみにしています」

苦笑いを浮かべながら、彼も同じようにジョッキを傾ける。

「それで、相談したいことって何でしょう？ 何かありました？」

「えっとね……」

私は箸を止める。

そして、一呼吸置いてから話し始める。

「……実はね」

私は今日会ったコンペの話をした。

私が落ちて、青葉の案が通ったことも。

それで青葉にきつく当たってしまったことも。

他にも色々、りんのこと、自分の気持ちに整理がついていないことも。

「ごめんね。こんなこと聞かせちゃって」

私は申し訳なさそうな顔になってしまう。

すると、彼は首を横に振った。

「いえ、気にしないでください。僕で良かったら力になりますから」
「……ありがとう」

彼の優しさが胸に染みる。

やっぱり、もう少しだけ甘えてもいいよね……。

私はまたビールを流し込んで、小さく息をつく。

すると、彼は静かに口を開いた。

それは、私にとって意外な言葉だった。

「あの……八神さんはその人にどうなって欲しいんですか？」

「……私は」

私は俯く。

どうなって欲しかったのか……。

よくわからない。

ただ、悔しかったんだと思う。

だけど、それだけじゃない気がする。

もっと別の感情があるような……。

私が悩んでいると、彼は続ける。

淡々としていたけど、どこか安心する言い方で。

「きつと、八神さんなら正しい方を選べると思います」

「……なにそれ、丸投げじゃん」

「すみません……」

少し間を置いて、お互いに笑ってしまう。

なんか、悩んでいた自分がバカらしく思えた。

そうだよね。

結局、自分次第なんだもん。

それに、まだチャンスはある。

もう、諦めたくない。

だって、やっと見つけた大切な場所だから。

私は残りのビールを飲み干し、ニッコリ微笑む。

やっぱり誰かに相談してよかった。

そっか、私は、独りぼっじやないんだ。

「んじゃ、湿っぽいのはどこまでにしよっか！ ほら、飲んで、食べようー！」

「はい」

それから私たちはお酒を楽しみつつ料理にも舌鼓を打っていった。今日はとことんまで飲もう。明日のことは明日の私がなんとかしてくれる。今はただ、目の前にある楽しい時間に没頭したかった。だが――。

残念なことに、楽しい時間はあつという間に過ぎていく。

居酒屋を出ることには夜はかなり更けていた。

「大丈夫ですか？」

「あーらいじょうぶ〜」

呂律が回らない。

頭がふわふわしてる。

全身が熱くて、気分が良い。

自分も正直今なにをどうしてるのかわからなくなってきている。結構飲んでしまったから、今はヨツシーに肩を貸してもらっている。

「タクシー捕まえましょうか？」

「らいじょーぶらいりよういっ」

「全然平気じゃないですよ」

私のことを心配してくれているのか、彼は優しく声をかけてくれる。

タクシーを探しているのか困った顔で周囲を見渡している。

その表情が、ちよつと可愛く思えた。

「私のことしんぱいしてくれるの〜。うれしいねえ〜」

「や、八神さん？」

彼が慌てふためく。

それが面白くて、ますます笑ってしまふ。

ああ、なんて素敵なお日なんだろう。

私のために一生懸命になってくれる人がいるなんて、思っていない

かったから。

それだけで幸せだった。

「おれいにいこくんなことしちゃうもんね〜」

「えっ？」

私は空いている手で彼の肩を掴んで、グツとたぐり寄せた。

そして——チュツと唇を重ねた。

ほんの数秒の出来事。

唇が離れすと呆然とした三白眼があった。

「……」

「……」

「……」

「……」

沈黙が続く。

だんだん酔いが冷めてきた。

と同時に血の気も引いていく。

そして、今ようやく、自分が何をしたのか理解した。

「えっ？ あ、あの、わた、わたし!？」

私は慌てて飛び退く。

「ご、ごめん!! 酔っていて、つい!!」

「い、いえ」

「ち、違うの! 今のは事故だから! 本意じゃなくて! あ、あは

ははは」

私は誤魔化すように笑う。

笑ってる場合ではないのだが、とにかくその場を取り繕いたかった。

でも、彼は何も言ってくれない。

ただ、驚いたように固まったままだ。

私は恐る恐る彼の様子を伺う。

すると、彼は口元に手を当てていた。

「ヨッシー?」

「……」

「ど、どうしたの？」

「……」

「ねえ、ヨッシーってば」

「……」

「おい」

「……」

ダメだ。完全にフリーズしてる。

しばらく待っても動かないものだから、仕方がなく自分で処理することにした。

まずは謝罪。

それから弁解。最後に言い訳。

よし、これでいこう。

「ご、ごめん。本当にごめん。わ、わざとじゃないの。お酒とかその、そ、それにほら、私たちまだそういう関係じゃ無いし、ヨッシーも受験生だし、その色々ノーカンってことで」

私は必死に頭を下げた。

「……」

反応がない。

「ごめんね！　ほんつとごめんね！　責任取るから！　お金は払うから！　それでチャラにしてー！」

「……金はいりません」

「へ？」

「責任もいらないます」

「え？」

「僕もすみませんでした。……そんなつもりはなかったんですけど、結果的にそう捉えられてもおかしくないことをしてしまいました。ごめんなさい」

「い、いいよ。気にしないで。私が勝手にしたことなんだから。謝られる方が辛いつていうか、むしろ怒られた方が良いというか、なんというか……アハハ」

私は頭を掻いて苦笑いする。

なんか変な雰囲気になってしまった。

まあ、あれだけ酔っていたんだから、なかつたことにするのが一番かもしれない。

うん、そうだよね。

無かつたことにしよう！　それが一番良いはずだ。

だが――。

彼の言葉は予想外だった。

「なかつたことにはしたくないです」

「へ？」

「今は受験もあるので、受験が終わったちやんと答えを言います。だから、その時まで待ってください」

「ちよつ、ちよつと待って！　ヨッシー!!」

呼び止める間もなく、彼は立ち去っていつてしまった。

取り残されたのは、状況についていけず戸惑っている私一人。

でも、彼の言葉の意味はわかった。

それってつまり……。

私は両手で顔を覆った。

熱い。

12月の夜風すら、全く気にならないほど、恥ずかしさでどうにかなりそうなくらい体が熱かった。

心臓がバクバクとうるさい。

こんなにドキドキしたのはいつ以来だろうか。

思い出せない。

わからない。でも、嬉しい。

すごく嬉しかった。

私はその場にしゃがみ込んで、しばらくの間動けずにいた。

●
そして次の日。

「あ、八神さん」

二日酔いに頭を痛めながらもなんとか出社した私は、ビルの入り口でぼったり青葉と鉢合わせてしまった。

昨日から口を聞いていなかったから、気まずそうにしている。私も同じだ。

だけど、悪いのは私だ。

慢心して負けて、青葉に出し抜かれただけ。

なのに向こうから謝られたりしたら本当に立つ瀬がない。

だから私から声をかけた。

「あ、青葉っ…その、昨日はごめんね、大人気なく当たっちゃって」
「い、いえ！ もっと言い方があったのに、申し訳ありませんでした！」

あの後、きつと敦さんに何か言われたのだろう。

だからこれでもうこの話は終わり。

来週のコンペに切り替えよう。まだ逆転の目あるはずだ。

とはいえ、けじめはしないと。

「そう言えば、昨日、わからないところがあったのは大丈夫だったの？」

「あ、はい。敦さんが見てくれて。それめで、ゆんさんと一緒に考えることになったんです」

なるほど、だから3人で話していたのか。

納得。

なら、私の出る幕はないかな。

私はほっとすると同時に少し寂しく思った。

でも、これで良かったのだ。

敦さんも教えるのはうまい。きつといい案ができるだろう。

私は私でまた頑張ればいい。

私は自分に言い聞かせるように胸中で呟く。

「そっか、じゃあ頑張っつて。私も負けないから」

「はい」

と言うと、笑顔を見せてから青葉はビルの中へ入っていった。

さて、私も行くか。

青葉を追ってビルの中へ入る。すると、目の前に見知った顔が現れた。

「あ、八神さん」

「あ……」

特徴的な三白眼と目が合う。

それは昨日相談に乗ってくれた彼、吉田駿輔本人だった。

「お、おはようございます……」

「お、おはよ……」

挨拶を交わす私たち。

ビルの通路にとっても気まずい空気が流れる。

当然だ。だってあんなことをした昨日の今日なのだから。お互い何を言っても良いかわからず黙ってしまおう。

年上の私が何か言わないといけないのに、青葉の時と違って全然言葉が沸いてこない。

どうすれば……。

「あの……」

「!?!」

私が悩んでいるところに、彼が口を開いた。

ビクツとして彼を見る。

彼はまっすぐ私の目を見て、はっきりと言った。

「今は、何も言わないでください。ちゃんと答えを出します。その時まで、待っていてください」

では、と言って彼は踵を帰して警備室がある方へ歩いていった。

私は呆然とそれを見送ることしかできなかった。

彼の言葉。

それは私が昨日、彼にしたことは夢なんかじゃないということ、改めて突きつけた。

私はその場で顔を覆い、またしやがみ込んでしまった。

ああ……やばい……。

ごめん、青葉。

今回のコンペ、私無理かも。

俺だつて

佐藤視点

「ねえ聞いた？ 八神のヤツ、コンペ落ちた後、新人の子に当たってたんだつて」

「聞いた聞いた。完全に八つ当たりだった。マジサイテーだよね」
ブースの話題は昼間のコンペで持ちきりだ。

背景班のメンバーももれなくその話に夢中。

席に座っていれば耳に入るのはどれもその話題ばかり。

八神は入社一ヶ月のコンペで抜擢されて、フェアリーズストーリーのキャラデザを勝ち取った。

当然、それを面白く思わない連中は大勢いた。今、話をしている奴らもそうだ。

この場にいる人間は、善人か悪人かで言えばおそらく善人の部類だ。だが、こういう鬱憤やらスキヤンダルがあると虫のようにはたかり出す。

そして、こういう連中に限って――

「アイツ、結局前と全然変わってないよね」

「大丈夫かな。あの子辞めさせたりして。自分の粹欲しさに」

「アハハつ、それマジであり――」

「――おい」

俺は声を上げた。

そして、ゆっくりと奴らを見据えた。

「少し黙れ」

俺の声色からただならぬ気配を感じたのか、全員が口をつぐんだ。あまり気に入っていないのだが、こういう時に限って、自分の目つきの悪さは役に立つ。

それ以外には何も言わず、俺は席を立った。

そのまま足早にブースを出る。

背後からは何か言い争いをしているような物音が聞こえてくる。しかし、振り返りはしなかった。

「ん？」

「あ、佐藤君……」

背景班のブースから出てすぐ、俺は紅色の髪をした女性と鉢合わせしてしまった。

遠山だ。

旅行の件以来、またおかしくなって、最近ようやくいつもの調子に戻ったのだが、その表情は明らかに曇っていた。

きつと、きつきの話を聞いていたのだろう。

「……なんか、悪いな」

「ううん。ありがとう。コウちゃんのこと、庇ってくれて」

「別にいいよ。大したことじゃないし」

確かに、俺にとつて、八神は恋敵だ。

目の前にいる彼女は、きつと今でも八神に首つたけ。

ハッキリ言つて憎たらしい。

だが、リングにも上がらず、向き合いもせず、それでいて調子を落としたときだけ陰口を言うような卑怯者をもつと嫌いだ。

そんな奴らと一緒にされたくない。

だから、つい口を出してしまったのだ。

「……こういうの、前もあつたよね」

「……ああ、あつたな」

こういうのは前にもあつた。

それはフェアリーズストーリー2の開発期間中、八神のせいで新人が一人半年で辞めた時のことだ。

その時も、こうした話がやり玉にあがることは多かつた。

実際、八神もかなり堪えていた。

「でも、アイツはちゃんと変わってるよ」

「……佐藤君」

遠山は驚いたように目を丸くする。

どうやら驚かせてしまったらしい。

まあ、いつも喧嘩ばかりしているところを見せていたから、無理もないけど……。

だけど、俺だつて八神がどれだけ努力してからくらい知っている。それをずつと支えてきたお前のことだつてそうだ。

「……ありがとね」

「お礼なんていらなくて。当たり前のことをしてただけだから」
そう言うのと、遠山はクスツと笑みを浮かべた。

その笑顔を見て、俺は少しホツとした。

「そう言えば、八神は？」

「ああうん。それがね、ちよつと私も顔を合わせずらくて」

「そうか。何かあつたのか？」

遠山にしては珍しい反応だった。

八神の事でこんなふうに言い淀むことはあまりなかったのに。

「え？ ううん。なんでもないの。…じゃあ私、そろそろ行くね」

「おう」

「またね、しゃと……佐藤君っ」

遠山はそのまま逃げるように立ち去つていった。

なんだ、あいつ？

なんか顔も赤かつたし。

体調は、悪そうには見えなかったが。

…まあ今はいいか。これから背景班のリーダーとしての仕事もある。

早いところ、あのブースの連中とも話を付けておかないと。

覚悟を決めた俺はそのまま背景班のブースへと戻った。

●

敦視点

それで、来週に持ち越された新作キャラコンペの結果はどうなったかというところ。

「これどつちが描いたの？」

葉月は提出された紙を手に困惑の表情で涼風と俺の顔を見た。

紙に描かれているのは裁縫道具を持った金髪の少女。

クマのぬいぐるみを模したモンスターを利用して着ぐるみにする。という、可愛い絵柄の割に結構残酷に見える作風は、涼風にしかで

きない持ち味だ。

涼風の奴、Sツ気あるよな。

「俺の絵柄忘れたのか？ 涼風が描いたに決まってるだろ。俺は多少入れ知恵しただけ」

「いやでも敦さんも描いてくれましたし」

「ああもうそういうのいいから」

謙遜する涼風を横目に呆れてしまう。

ここは俺に合わせておけばいいものを。

まあ、これが涼風が見いだしたバランスならそれでいいか。

「まあでも、うん。いい。とてもいい」

葉月の目の色は良い。

俺もこの案は気に入っている。

インパクトもあるし、キャラも立っている。

この少女はなんなのか？

ぬいぐるみはどんな生き物なのか。

ここはどういう世界なのか。

この一枚だけで、様々な世界観や想像が思い浮かぶ。

「それに、飯島君のとも合わせたんだね。なるほど、主人公が拠点にする場所の家主か……ふーん」

これはこれで面白そうかもと呟く葉月に胸を撫で下ろす。

どうやら満足していただけたらしい。

「よし、これでプロトタイプ版と行こう」

…あれ？

不意に余計なことを考えてしまった。

俺はこれ以上仕事を増やしたくないからコンペには出なかったのだけれど、この案は涼風と俺のセットの合作ということになってないか？

「と、言うわけだ敦君。君はメインキャラの涼風君と例のサブキャラは飯島君、それぞれのキャラデザをサポートしてくれ。決定などの責任はADの八神に持ってもらおう。プロデューサーの二人もいいかな？」

「おい待て。お前言ったよな？ 俺は別のチームの仕事あるから困った時だけ手伝えばいいって。なんでそんな話になるんだ」

平然と俺を開発の主軸にぶち込もうとしてないかこいつ!?!?

確かにサポートって体になっているが、どう考えても前と同じ事やろうとしてるだろ。

これを皮切りにあれもこれもと厄介ごとを押しつけたい魂胆が見え見えだ。

「仕方ないだろ？ 君も描いたんだから少しくらい手伝ってくれたまえ」

「お前なあ」

クソツ。

これならコンペ前に涼風と口裏合わせておくべきだった。

そつちには八神もいるから人員的には問題無いだろうが。

こちらら年明け直後に他のマスターアップが迫っているというのに何をさせようというのか。

「…」

反論しようとするが、隣にいる涼風を見た。

見てしまった。

不安と期待と喜びが混じったようなその顔が、かつて見た光景と一致した。

…あの時の彼女、縁とそっくりだつ。

「……わかったよ。ただし、あくまでサポートだけだ。あまり口を出しすぎたら二人のためにならないしな」

「ありがとうございます！」

まるで自分の案が通ったときのように喜ぶ涼風を見てみると、なんだか毒気が抜かれた気分になった。

はあ、面倒なことになったもんだ。

…いや、悪くないかもな。

「それじゃあ、涼風君、飯島君、敦君。今作のキャラクターデザインをよろしく」

「はいっ」

と、今回の新作キャラコンペはまとまった。
だが、まだ懸念材料が残っている。

それは八神の事。

正直悪いことをしたと思っている。これじゃ八神の立つ瀬が無い。
実際、この一週間。

コンペにすら関わってこなかったわけだし。

「八神もそれでいいね?」

グラフィックの全てを統括する彼女の了解を得ようと、葉月は声を
かけるのだが、当人は俯いたまま動かない。

「……八神?」

「え? あ、はい! 大丈夫です!」

一瞬遅れて返事が返ってきた。

本当に大丈夫だろうか

心ここに在らずといった感じなのだが。

珍しいこともあったもんだ。あの仕事人間で有名な彼女がこんな
ことになるなんて。

やはり、涼風との一件以来、様子がおかしい。

ずっと上の空で集中してしていなかった。

何かあったのかもしれない。

しかし、それを詮索するような野暮なこととはしない。

誰だって言いたくないことの一つや二つはあるものだ。

● そんな八神の気の抜けた声で、新作コンペの幕は閉じた。

青葉視点

「ねえ青葉」

会議室から戻る途中、私は後ろからついてきた八神さんに声をかけ
られた。

「おめでとう、やるじゃん」

さっきまでのボンヤリとした雰囲気とは打って変わって、いつもの
八神に戻っていた。

明るい笑顔に少し意地悪そうな表情を浮かべている。

でもそれがどこか安心できて嬉しい気持ちになる。

「いえそんなつ、敦さんとゆんさんがいないと描けませんでしたし、それに…」

「それに?」

「あの時のこと、ちゃんと謝らせて欲しくて」

改めて八神さんに頭を下げる。

自分でも彼女のことをすごい人だと思いつぎていた。

だから、多少のリメイクぐらいなんてことないって思っていた。

でも違った。

彼女は彼女なりに頑張って、それでも上手くいかなくて悩んでいる。

そんなこと、私だって知っていたはずなのに。

「別にいいよ。ほら顔上げて。これから忙しくなるよ。ゆんと敦さんで頑張って」

「はい、頑張ります!」

手を振って先に行く八神さんを見て、改めて決心できた。

そうだよ。落ち込んでる場合じゃないや。

ずっと夢だったことができるんだもん。もっと喜んでもいいはずだよ。

うん。よしつ。気持ち切り替えていこうつと。

「おーい! 置いてくぞ〜!」

「今行きまーす」

八神さんの声に元氣よく返事をして、私は駆け出した。

抹茶。パフエと黄色い革ジャン

柚貴視点

「ムムム……」

アパートの一室、ベッドの上で寝転がっている桜は今日もゲーム製作とやらに勤しんでいた。

画面には俺が描いた絵と、黒く塗りつぶされた上に白の文字で書かれたアルファベットや数字の羅列の二つ。

「なんだ、まだ手詰まりなのか？」

一応、桜が持ってきた本のおかげでそれぞれが何を意味するのかは理解している。

とはいえ暇つぶし程度。

素人に毛が生えたレベルだ。

進展しない状況に飽きてきた俺は、いつもみたくベッドの脇に腰掛けて冷蔵庫の中にあつたシャーベットを口に運んでいた。

季節はもう師走。

冷たいモノは冷えるのだが、今は暖房が効いている。桜が際限なく温度を上げるせいでむしろ暑いくらいでちょうどいいだ。

「そうですけど？　なんか文句でもありますか？」

「いーえ、別に」

つんけんとした態度をとる桜だが、その実機嫌が悪いわけではないらしい。

ただ単に、こちらを構う余裕がないだけなのだろう。視線は完全に画面から離れず、口元から漏れ出る言葉からは苛立ちを感じることがない。

まあつまり、邪魔するなってことなんだろう。

「また止まった!?!?　どうやったらうまくいくんだろ……」

「さあな。ただ、独学じゃ流石に限度つてもんがあるんじゃないのか？」

ただ本を読んだだけでできるようになるのなら、誰だってその分野で飯を食べていけるだろう。

そもそも俺達だけで作ろうって言うのが無茶な話だ。せめて誰か詳しい人間がいれば。

と考えを巡らせていると桜が話していた事を思い出した。

「なあ桜」

「今度はなに？」

「お前、前にゲーム会社でバイトしてたんだろ？ それなら、得意なヤツと知り合いになったりしてないのか？」

確かそんな事を言っていたはずだ。

そこで働く幼なじみが心配で内部調査に行くとかなんとか。

桜は担当のヤツに随分と怯えていたらしいが……それでも一緒に働いていた以上、全く接触がなかったとも思えない。

となると、顔見知りの一人や二人いてもおかしくはないわけで。

実際、土日には上司にあたるヤツに怖い目に遭わされたとかなんとか言ってたが、それはこの際置いておくことにする。

俺の言葉を聞いた桜は何やら考え込むように押し黙った後、ゆっくりと口を開いた。

「二応、いる」

「へえ、そりやよかったじゃないか。なら連絡しろよ」

「……でも、まだ見せられるほどじゃないかなって」

歯切れの悪い返事に呆れてため息が出る。

何事も最初が一番難しいのだと言うことはわかるが、ここまで尻込みされると少しばかり不安になってくるぞ……。

「ならずつとこのまま手詰まりか？ もう辞めるか？」

「むう……わかりました、やりますよーだ！」

売り言葉に買い言葉。

逆ギレ気味に声を上げた桜はキーボードに手を置いたまま、どこかに連絡を取り始めた。

電話をかけてるようだが、相手は一体どこのどいつなのだろうか？

ま、俺には関係ないか。

どうやら繋がったらしい。

「もしもしうみこさん？ お久しぶりです。今ちよつと大丈夫です

か？」

電話口から聞こえてくるのは女の声。

口調や声の響きはそれらしいが随分と低い声だ。

「えっと、今度の土日とかあいてますか？……はい、はい。それでお願いします！」

電話の向こうにいる相手にどんな話をしているのかはわからないが、用件を話していないのが気になった。

「はい、ありがとうございます。あと、知り合いも連れてきて良いですか？……あ、はい。それじゃ土曜日の朝十時に忠鳥ペン公前で」

ピツという電子音と共に通話が終了する。

それと同時に桜の体から力が抜け、大きく伸びをした。

「ふい〜……これでよしっ」

「おい、その知り合いって俺じゃないよな？」

「えー別にいいじゃん。暇でしょ？」

「暇だけど……」

「だったらいいでしょ。ゆずっちも作ってるんだし、きつとタメになると思うよ。プロなんだし」

こっちは暇つぶし程度なんだが。

まあいい、暇なのは事実だしな。

たまにはいいだろう。付き合ってやるか。

「わかった。行くよ」

「ほんと!?! やったー!!」

……なんでコイツ、こんなに嬉しそうなんだよ。

まあ、いちいち口に出してもしかたないか。

「よし、またうみこさんに会う前にできるだけ進めよっつ」

「はいはい頑張ってくれよ」

そう言つて俺は桜のいるベッドの上に寝転ぶ。

結局この後、桜が手を止めるまで一時間近く待つことになるのだが、それはまた別の話。

●
土曜日になった。

桜と共に、件の知り合いと待ち合わせている場所に向かっていたのだが……。

「ねえゆずつち、ここで待ってほしいんだけど？」

桜が急に立ち止まってそんなことを言い出した。

場所は駅前にある噴水広場。

時刻は約束の時間より数分前。

確かに、ここで待っているだけで十分時間は潰せるかもしれないが……。

「なんだよ？」

「ちよつとね、ニシシ……」

「……」

俺もそれなりにコイツとの付き合いが長くなってきた。

出会って一年も経っていないが、部屋に入り浸ってくるせいと共にいる時間が多い。

だから何を企んでいるのか大体見当がつく。

……またしようもないこと思いついたな。

「じゃ、行ってくるねー」

それだけ言うと、桜は一目散に駆けていった。

俺は噴水の塀に腰かけて、桜の足取りを追う。

木や人並みに隠れて進んでいるようだ。

やがて、望遠鏡なんか取り出して何かを射程にとらえた。

「……ナニしてんだよ、アイツ」

桜の視線の先には一人の女性が、銅像の前に立っていた。

日焼けした肌に茶髪の長い髪、目尻が鋭いのが特徴の美人。

あれが桜がいていたうみことという人物なのだろうか？

随分と立ち姿が様になっている。俺と同じで何か使っているな？

「……」

あ、こつちみた。

どうやら視線を察知できるくらいには勘が鋭いらしい。

次は桜の方を向いた。そっちにも気がついたようだ。

桜も目があったことに驚いたのか、木の裏に姿を隠す。

なにやってんだよ。場所が割れたならすぐに動けばいいものを。

身を潜めている間に、褐色の女は動いていた。

速い、やはり何か武術を心得ているのだろう。

身のこなしや歩き方に無駄がない。

人混みを上手いこと桜の死角にして、桜が隠れている木の影までたどり着くのに数秒とかからなかった。

……あの身のこなし。

見たことあるな。誰かに似てる気がする。

「もおおおお!!」

俺が考えを巡らしている間に決着はついた。

どうやら桜は彼女に捕まったらしい。

…なにやってんだか。

どうせ、隙について驚かしてやろうとかそんなこと考えていたんだろ。

馬鹿だなあ。

さて、下らないお遊びも済んだことだし、合流するとするか。

俺は彼女達の方へ歩いていくことにした。

「おや?」

と、揉み合っている二人に声をかける前に、桜を捕まえた女に気づかれた。

特に驚きはない。さつきも察知されていたし。

「桜さん、知り合いと言うのはこの人ですか?」

「えーつと……そのお……」

桜は観念したのか、渋々うなずき、こちらを見た。

「この人が知り合いです」

「初めまして、阿波根うみこといいます。うみこと呼んでください」

「お…おう」

なんか、名前呼びに対する圧が異様に強く気圧されてしまう。

俺と同じで名字にコンプレックスでもあるのだろうか。

「なら俺も袖貴でいいよ。名字は嫌いなんだ」

「わかりました。では袖貴さんとお呼びしますね」

ま、それはいいとして。

「で、桜さんはなんで呼び出したんですか？」

手短かに挨拶をすませるとうみこは本題に入ろうとした。

そりやそうだ。用件も話さず呼び出されたのだから当然だろう。

俺もそういうのは手早く済ました方がいいと考える主義だから、

サツサと事情を話そうとすると、桜が割って入った。

「あつ、と、とりあえずどっかお店入りませんか？」

「……」

「……」

俺たち二人はジト目で桜を見る。

すると桜は焦ったように両手を振り回しながら弁解を始めた。

「だってほら、外寒いしこんなところで立ってたら風邪ひくじやな

い!？」

「……」

「……はあ」

桜の言い訳を聞いて、うみこはため息をつく。

「仕方ありませんね。確かにここだと冷えます。確か近くに喫茶店

がありましたよね？そこに行きましょう」

「そうか」

「やったー！」

好物の甘いものが食べられることにはしゃぐ桜を横目に、俺はため

息をついた。

● 昨日の時といい、今さら何を怖じ気づいているんだか。

「お待たせしましたー」

店員の声と共に注文したものが届く。

テーブルに置かれたのはオレンジジュースと抹茶パフエ、白玉あん

みつ。

みつ。

前者は桜、後者はうみこが頼んだものだ。

俺はあまり腹が減っていなかったからコーヒーだけにした。

「うまうま」

桜は好物の甘い物をスプーンで口に運ぶたびに幸せそうな顔になっっている。

「相変わらずですね」

「どういう意味ですか！」

桜のマイペースぶりに振り回されていたらしいのが、うみこの顔つきや言い方でわかる。

コイツがバイトでなにやったのか不安になってきたぞ。

「あ、でも白玉あんみつも美味しそう」

「食べますか？」

「いいの!?!じゃあ、あーん」

「……………」

隣で座る桜は自分の口を大きく開ける。

うみこは一瞬躊躇していたが、結局は自分のスプーンでそのまま食べさせていた。

「うまうま」

こうしてみると、動物にエサをあげているみたいだな。

「じゃあお返し!」

「!?!」

差し出されたスプーンに対して、からうみこは慣れていないのか、目に見えて動揺している。

「私は結構です」

「えー」

人付き合いに慣れていないのか、或いは人見知りなのか、少し遠慮気味だ。

「あれ?もしかしててれてるんですか?」それを見逃さなかったのか、桜が挑発する。

「てれてないですよ」

「ふーん…………」

「…………」

「ふ~~~~ん」

こういう時に調子に乗り出すのは桜の悪い癖だと思うのだが、本人

には自覚がないようだ。

「わかりました。食べますよー!」

そして、とうとう我慢できなくなったのか、うみこは折れた。意外にも素直だったな。もっと粘るかと思ったのに。

「じゃあ、あーん」

桜は再度スプーンをうみこに差し出す。

「……」

俺の目には、桜がスプーンでパフェを掬って、うみこの方向に向けてう始めようとしているところだ。

：なんとなく、そう。なんとなくだ。

俺はその光景が面白くないと感じた。

「つー……!」

「あつ!」

俺は桜が握るスプーンの上にあるアイスを頬張った。

「ちよつとゆずつち! 何するの!?!」

「……ふん」

抗議してくる桜を無視して、俺は黙々と咀嚼を続ける。

味わう余裕もなく、ただ淡々と飲み込んだ。

その様子を見て、うみこも呆気にと取られていたが……。

「……なるほど、そういうことですか」

「なんだよ?」

「いえ別に」

何かわかったような顔をしてこちらを見てきたが、それ以上は何も言わなかった。

それから、多少言い合ったりしながら時間が過ぎていく。

それぞれの皿が空になった頃合いでうみこは今日呼び出した用件を聞いてきた。

「で、今日は用事ってなんですか」

ああ、やっと本題に入れる。随分と回り道をしたもんだ。

「え? うーん……えつと……」

だが、相変わらず桜は歯切れが悪い。用件を知っている分余計にイ

ライラしてくる。

「笑わない？」

「場合によっては笑います」

「いじわるー！」

桜はむくれているが無視しよう。

さすがにこれ以上引き延ばされると俺もキレそうだ。

「はあ、言う気がないなら帰りますよ」

それはうみこも同じのようで、ため息をついて席を立とうとする。

「あー、ちよつとー！」

それを見て、慌てて桜は呼び止めた。

桜は観念したように口を開く。

「んーと…プログラムでわからないことがあつただけど、調べてたら解決したから特に用もなくなっちゃって」

ああ、昨日のアレ。うまくいったのか。

俺の部屋にいるときは反応から手詰まりだったのはわかっていたが、どうやら家に帰ってからもやっていたらしい。

だから妙にはぐらかしていたのか。

ただ、桜が言っていた通り、その道のプロらしいから同じ分野の話には反応した。

「桜さんがプログラム？ 何か作っているんですか？」

「見る!？」

桜は嬉々として自分のサメを模したりリュックを探る。

出てきたのはパソコン。

テーブルの上に広げると電源を入れてしばらく操作して、画面を広げる。

昨日と同じ光景が出てきた。

「この絵は？」

「これ、ゆずっちが描いてくれたんだよ。シキって言うの」

桜が指差したのは刀を持った和服の女性。

簡単に内容を説明すると、この主人公が魔物や異形の類いを不思議

な魔眼の力で切り倒していくというもの。

最初に作っていた馬に乗った騎士やら猪やらにぎりめしやらが一新され、背景もそれなりに見えるモノに仕上がっている。

「うまいですね」

「暇つぶし程度だよ」

うみこは感心していたが、俺はそれほどでもないと思う。

手先は器用な方だし、やり始めると色々手を抜くのが性に合わないのだ。

「もー！ 私もがんばったんだよ。ほら、ちゃんと動くしジャンプだって……」

自分だけのけ者にされたのが気に触ったのか、桜はキーボードを操作して、キャラクターを動かそうとするのだが――

「あ！ また止まっちゃったー」

「問題解決してないじゃないですか」

うみこが指摘するように、画面ではキャラクターが固まっていた。

一応、動きはするがどこかぎこちない。

桜はもう一度キーを叩くが……やはりダメだった。

そこで俺はふと思いつく。

そういえば、昨日の夜もこんな感じでフリーズしたな。

「前はそもそも起動しなかったりだし……でも動くときはずっと動くんだけ……」

「こつちに来て見せてください」

桜は彼女の隣に移動すると、俺達に見えるようにパソコンを置き直した。

そして、黒いウィンドウをしばらく見てから、ある場所を指さす。

「ほら、ここ、わかりますか？」

「あ、同じ処理を何度もくりかえしてたんだ……」

桜は納得した様子で、再びキーボードを操作する。

すると、今まで硬かったキャラが滑らかに動いた。

それがあまりに嬉しかったのか、目の色に輝きが増している。

「なるほど、さすがプロ……」

夢中になってまたパソコンをいじる桜。

そんな様子を伺ううみこの様子もどこか微笑ましい。しかし、本当にすごいものだ。

俺のような素人の目から見てもわかるくらいに改善されている。

確かにこれは頼んで正解かもしれない。

だが……それでもまだ問題は残っているようだが、それはおいおいということだろう。

「なあうみこ、ここはどんなんだ？」

そこに表記されているところに違和感を覚えた俺はそこを指さす。

「ああ、それはですね……」

説明を求めると、うみこは淀みなく答えていく。

彼女はプログラマーとしての実力もあるらしく、すぐに理解してくれた。

だが、それと同時に目を丸くしていた。

「柚貴さんもわかるんですか？」

「暇つぶしで桜の持つてる本読んでたりするからな」

「それはそれですごいですね」

素なのか皮肉かは知らないが、とりあえずスルーすることにする。

それから、しばらく桜の作るゲームに口を出しながら時間を潰していったのだが、不意にうみこがこんなコトを言ってきた。

「ずっと気になっていたのですが、二人はどういう関係なんですか？」

唐突すぎる質問だったが、俺は別に隠すわけでもないからすぐに答えた。

「ただの同じ大学のゼミ生だよ」

「そうですか。ですが、それだけにしては随分仲がいいようですが」
言い出せば暴漢に襲われているところに出くわして、成り行きで助けたら自宅に入り浸るようになったというだけだが、ここまで懐かれるとは思わなかった。

「別に普通だけど」

「そういうものでしょうか」

「他にどんな風に見えてたんだ？」

「距離感が近いので恋人同士とか、兄妹ぐらいに思っていましたか？違いましたか？」

予想以上の的確な回答だったので驚いたが、よく考えれば当然のことかもしれない。

確かにそう言う関係だと揶揄られることもあるだろう、

ただ、桜も俺も、全く意識してなかったわけだが。

「まあ、全然意識してなかったな」

ただ、今の関係を説明するならそれが正しい気がした。

少なくとも同じ空間に長いこといて、男女として見られていないのは事実だ。

「え？ そうなの!？」

桜は意外にもショックを受けていたのか、悲しそうな顔をしている。

それにしても、その反応は一体どこから出たのかわからない。

「やはり少し距離が近いように思います」

「そうかな……そうかも……」

納得はしていない様子ではあるが、一応は引き下がってくれた。

あと、いつの間にか、桜のプログラムの方も一段落ついたらしい。

「うみこさん、ありがとね！」

「また進んだら見せてくださいね」

「うん！ わかりました」

「んじゃ、帰るか」

桜をつれて席を立つ。随分と話し込んだようで、もう日が暮れそうになっていた。

日が落ちるのも随分と早くなってきた。冬至はもうすぐだ。

「あの、最後に一つ良いですか？」

コートを羽織るのに手間取っている桜を待っていると、思い出したかのようにうみこが声をかけてきた。

「なんだ？」

「これはただの好奇心なんですけど、寒くないんですか？」

俺の格好は単衣のみ。傍から見ている方としては寒いかもしれない。

しかし、これはこれで案外慣れると平気になる。

「いや、全然」

現に今も特に寒さは感じていない。

だから、俺はこう答えることにしよう。

だって、これは俺にとってはいつも通りのことだから。

「そう言えば、ゆずっち何も羽織ってないよね」

うみこと別れた帰り道、隣にいた桜がふと思いついたように言った。

今は最寄り駅まで向かう途中だ。かろうじて出ていた日も完全に落ち、俺達は街灯が点き始めた道を並んで歩いていた。

「なんか、服、買ってみたら?」

「あー……そうだな……」

言われてみると、確かに季節的には必要かもしれない。実際今まであまり気にしていなかったが、良い機会だ。

「つつても、何があるんだよ?」

が、いままで洋服など部屋着のワイシャツ以外着たことが無い。だから何を着れば良いかわからない。

桜に聞いてもまともな返事は帰ってこないだろうが、参考程度に聞いてみることにした。

「うーん、そうだね……革ジャンとか?」

「却下」

一瞬脳裏に浮かんできたのだが、さすがにそれは無いだろう。そもそも和服と合わないし。

「ええ〜? カッコイイよ?」

「お前に聞いた俺がバカだった」
やっぱり聞くだけ無駄だったようだ。

ため息をつくとき、桜は続けた。

「色はね、黄色がいいと思うの」

「……なんで?」

「えつとね、なんとなく」

桜の回答にため息が出た。

適当に言ってるようにしか見えない。これ以上話を聞いていても仕方がないような気がする。

「似合うよ。絶対」

そう言うのと数歩前を歩いて俺の前で笑って見せた。

その笑顔に俺は思わず目をそらしてしまう。

そして、先ほどまでの会話を思い出していった。

なんで革ジャンなんて言い出したのだろうか。

まあ、どうせ桜の気紛れだろう。

そんなことを考えながら歩いているうちに駅に着いた。

「じゃ、ここでお別れだな」

「うん。今日もありがと。バイバイ」

「おう、また明日な」

改札前で手を振ると、桜はホームへと消えていった。

：革ジャンね。俺はしばらく桜が消えた方を眺めていたが、すぐに踵を返して家路についた。

●
それから数日後。

「やつほー、遊びに来たよー」

桜はいつものようにチャイムも鳴らさず玄関を開ける。俺はベッドの脇に桜が置いて行った教本を読んでいた。

「なんだ、今日は早いな」

桜はというと、台所の方に行き冷蔵庫を開けている。

買ってきた物を入れているのか、少ししてからこちらにやってきた。

手に持っているのはコーラとスナック菓子だ。

いつも食べている好物を両手に持った彼女の視線は、部屋の奥にあるモノにだ。

「あつ、それっ！」

桜の目が見開かれた。

彼女が指差したのはハンガーに掛けられている革ジャンだ。数日前に買った。

色は明るい黄色、首元にファーがかかっている。

正直忘れかけていたくらいだが、やはり目に付くところに掛けたのはまずかつたらしい。

さて、これから起こるであろう出来事を考えると面倒なことになるのは間違いない。

しかし、隠すのも違う気がしたのでそのままにしておいたのだ。

案の定、桜の目はキラキラしているように見える。

「ゆずっち、これ、着たの!?!」

「ああ」

「……」

「おい、黙るなって」

「えへへー」

「気持ち悪い笑い方をするんじゃない」

桜は無言のままニコニコしながら近づいてくる。

その様子に嫌な予感を感じながらも、とりあえず座らせることにした。

「それで、どうしたんだ?」

俺の隣に腰掛けると、桜が口を開いた。

しかし、その顔はまだニヤけたままだ。

「ゆずっちー、これ着る時ってどんな感じだった?」

「あ? あー……」

そう聞かれても困ってしまう。

ただ買って着てみただけだからだ。

「特に何も感じなかったけど……」

「そうなの?」

「ああ、そうだ」

「そっかー」

桜はそう呟くと、何か考え込むように俯いた。

やがて、俺の顔を見上げる。

「ねえ、ゆずっち」

「ん？」

「私も着たいんだけど、ダメかな？」

「は？」

思わず間抜けな声が出てしまった。

いやだって、いきなり何を言い出すかと思えば……。

「…まあ、別にいいぞ」

「えっ？ 本当に？」

「ああ」

そう答えると桜は立ち上がって部屋の奥にある革ジャンの所まで小走りで向かっていった。

「やった！ ありがと、ゆずっち」

「はいはい」

「ちよつと待ってね」

桜は上機嫌でハンガーから外した革ジャンを持って戻って、いそいそと着替え始める。

そして…。

「じゃじゃーん。どう、似合ってる？」

桜がその場でクルリと回った。

その姿を俺は呆然と見ていた。

「……」

「あれ、どったの？」

「…全然似合っていない」

「ええ!？」

再起の音

純視点

「さて、午後も頑張るか」

サウンドルームで一人、簡単に昼食を済ました僕は早めに作業に取りかかることにした。

まだ昼休みは終わっていないけれど、今の流れを切らしたくない。社員旅行をひふみと過ごしてから、心にも身体にも生気が溢れている。

なんというか、仕事が楽しいのだ。

今までの僕はただ必死に死なないことを目的として生きていた。けれど今は違う。

僕にはやるべきことがある。

それが楽しくて仕方がない。

だから、こんなところで立ち止まっているわけにはいかないんだ。改めて仕様書を確認する。

作品の方向性が決まってから僕らにもようやく詳しい仕様書が回ってくるようになった。

内容はぬいぐるみが住まう世界に迷い込んだ女の子のお話。

絵本やおとぎ話をモチーフにした世界観だ。

どうやら今回のキャラデザには先輩も一枚噛んでしまっているらしい。

あの人、なんやかんや面倒見良いからな。

「となると、やっぱりピアノとか繊細な音がいいな」

僕はパソコンのファイルの中から楽器の候補をピックアップしていく。

ピアノとか弦楽器、あとはフルートなんかかもしれない。

と、そのときだった。

ガチャリ。

と、サウンドルームの扉が開く音がした。

誰かだろうと、思いながら顔をあげると、赤いセーターの下にブラ

ウスを着た女性が立っていた。

暗紅色の髪を白いシュシュで結んだポニーテールの彼女を見て、僕の心臓は大きく跳ね上がる。

だって、それは僕の大切な人、ひふみだったんだから。

「えっと……ひふみ？」

どうしてここに？

という疑問より先に彼女の名前を呼んでいた。

彼女は答えることなく、そのまま真っすぐこちらに向かってくる。

そして――

「……純君」

俯いたまま、ガバツ！ と抱きついてきた。

「へっ!? ちよ、ひふみっ!?!」

突然の出来事に頭がついて行かない。

ひふみはそんな僕を無視して、胸元に顔をすり寄せてくる。

柔らかさと温かさを感じつつ、頭の中はさらに混乱を極めていた。

「ど、どういうことですかこれえ!?!」

「しゃべりすぎて…疲れた、から……充電……」

そう言っただけに強く抱きしめられる。

彼女の表情を見ることはできないけど、その声色だけで彼女が本当に疲労困ぱいしていることが分かった。

そっか、ひふみも頑張ってるんだ。

抱きついたまま話を聞くと、コンペに通った例の新人が3Dについて意見を言えなかったらしい。

それを気を遣ったひふみが一緒にお昼ご飯に行っただけで相談に乗ってあげたのだ。

人と話すことが苦手で、幽霊より怖いと話していた彼女がここまでしたと思うと、嬉しく思う。

「そうだったんですね。すごいです」

だから僕はいつものように彼女を褒め、背中に手を回して優しく撫でる。

すると、少しだけ腕の力を弱めてくれた。

「ん……ありがとう」

「いえ、良かったですね。ちゃんとその子も元気になって」

「うん……でも、やっぱり……まだ、うまく話せなくて……これからもつと練習しないとって思った……」

ああ、この人は本当に優しい人なんだなと思った。

相手のことを思って一生懸命になれる。

いつだってそうだった。そんなところがたまらなく好きなのだ。

だから、少しでも答えてあげたい。この人の勇気と優しさに、誇れるような存在でありたい。

僕はもう一度言う。

今度は真っ直ぐ目を見つめて。

彼女の優しさに応えるために。

大好きだよって伝えるために。

「大丈夫ですよ。きっとすぐに上手くなりますよ」

「……本当？」

「はい。僕も手伝います」

「……ふふ、そうだね……。ありがと……」

それからしばらく僕はそのまま抱き合っていた。

彼女の体温を全身で感じながら。

「ねえ、純君」

ひふみの肩を掴んで離れると、彼女は上目遣いのまま名前を呼んだ。

何を言うのかと思えば、彼女は頬を赤らめたままこう続けた。

「私、頑張れるかな……？」

「もちろん！」

即答する。

むしろ頑張りすぎだよ。

もう十分すぎるくらい。

「ひふみなら絶対できます。僕は知っていますから」

「……じゃあさ」

ひふみは両手を伸ばしてくる。

「キス、して…?」

「……はいい!」

予想外過ぎて変な声が出てしまった。

それを聞いた彼女は恥ずかしかったのか、慌てて手を引っ込める。顔は真っ赤だし、瞳は潤んでいるし、おまけにちよつと涙ぐんでさえいる。

そんな姿を見て、僕は改めて実感した。

やっぱり僕は彼女のことをどうしようもなく好きなのだ。

「…じゃあ、目を閉じてください」

僕は内心ドキドキしながら彼女に告げる。

すると、彼女はゆっくりと瞼を閉じた。

長いまつ毛と綺麗な肌に見惚れてしまいそうになる。

だけど、今はダメだ。

そんな場合じゃない。

僕は一度深呼吸をして気持ちを整える。

そして、意を決して、顔を近づける。

何度も触れあったかわからなくなるほどしたけれど、会社でするのは初めてだった。

「……」

「……」

お互いの吐息がかかりそうな距離。

心臓は今にも破裂してしまいそうだった。

彼女の唇に自分のものを重ねようと、あと数センチまで近づいたとき――

「っ!」

チャイムがなる音が部屋に響く。

ひふみはビクツと肩を揺らして、急いで僕の胸から離れた。

それは昼休みの終りを告げる音。

「ご、午後の仕事が始まるから……戻らないと……」

「そ、そうですね……」

ひふみはぎこちない動きでサウンドルームを出て行くこうとする。

その背中を見ると、名残惜しく感じてしまう。

…そして、胸の内に沸いた感情を、僕は抑えることができなかった。ドアノブにひふみの手が触れるその直前、彼女の手を引いた。

「!？」

驚いた声をあげてこちらを振り向いた瞬間、僕はそのまま唇を奪う。

何度も触れあった柔らかい感触が、唇に伝わる。

ほんの数秒のことなのに、まるで時間が止まったようだった。

唇を離すと、彼女は呆然としたまま立ち尽くしていた。

「…じゅ、純君?」

「あ、いえ…その、僕もしたかったので」

正直な気持ち伝える。

せつかく会えたのにこのままひふみと離れるのが、どうしても嫌だったから。

「す、すみません。驚かせて…」

「ううん。ありがと……」

謝る僕に、ひふみはほほえみで返してくれた。

頬を赤らめ、瞳も輝いている。

「それじゃあ、午後も頑張りましょう」

「うん、バイバイ……」

「はい、また後で」

軽く手を振って別れると、彼女は急ぎ足で部屋から出て行った。

「……あー……やっちゃったあ……」

一人になった途端、さつきまでの興奮状態は消え去り、冷静になる。いくらなんでも衝動的すぎた。

これでは嫌われても文句言えないだろう。

でも、後悔はない。

ひふみは僕の彼女なのだ。

誰よりも大切な人。

だから、これから先ずつと一緒に居たいと思ったら、遠慮なんてしない。

「よしっ」

気合いを入れ直して、仕事に戻ることにした。
もっと頑張ろう。

ひふみの努力にも応えられるようになりたい。
でも、そのためにはきつと今のままじゃだめだ。ただ良い曲を作る
だけじゃ、今までと変わらない。

「…」

一人残された僕はサウンドルームの隅に置かれている、あるモノに
視線が集まった。

それは、前にここで働いていた人の置き土産。

一度対峙し、諦めた電子ピアノだった。

僕の中で、何かが動く音がした。

それぞれのクリスマス　―青葉とゆんとはじめの場
合―

敦視点

「敦さんっ」

今日も俺は複数のディスプレイと向かい合い佳境となっている開発の追い込みに躍起になっていたわけだが、背後から聞き慣れた声に反応してその方角を向いた。

そこには、最近共にキャラデザを担うこととなった涼風が資料を抱えながら立っていた。

「お忙しいところ済みません。少し良いですか？」

「ああ、構わないぞ」

そう答えると同時に時計を確認すると時刻は夜七時を示していた。どうやら思った以上に没頭していたようだな。

「そのまま話してくれ」

俺は作業を進めながら耳を傾ける。

「さっきプロトタイプ版の案が採用されたので、お礼を言いたくて……本当にありがとうございますっ！　敦さんのおかげです」

涼風の弾むような明るい声を聞き届けると、俺もまた口許を緩めた。

「ほとんどお前が描いたようなもんだろ？それにこれから本番だ。気を引き締めてけ」

「はいー」

涼風は元気よく返事をすると共に頭を下げた。……まあ、こうやって感謝されるのは悪い気がしない。むしろ嬉しいくらいだ。

「それにしても相変わらず、すごい集中力ですね……」

涼風は感心したように言うと、手元にある資料に目を落とす。

実際、この2週間、作業の傍らで涼風のサポートをしていたわけだが、さつきも言った通り、俺はほとんどなにもしていない。涼風自身の手力であそこまで仕上げたのだ。

それは、彼女の努力によるものだろう。

「お前だつて充分すごいさ」

謙遜するわけでも誇るわけでもない。ただ事実を述べただけに過ぎない。

「いえいえ、私なんてまだまだですよ……」

しかし当人は納得いかない様子だった。きつと先日の3Dの一件があるのだろう。

選ばれた興奮による万能感と、現実とのギャップによって生じた焦りで少し様子が変だったのだが、滝本がうまいこと相談に乗ってやったらしい。

あのコミュ障で有名な彼女も随分と成長を見せたようだ。

増田のことも少なからず影響があるのだろう。もうアイツを童貞とからかうことができなのは寂しく感じるが、それでも彼女が立ち直れたなら良かったと思う。

「それで……その、敦さんはこの後空いてますか？」

「……空いてるけど、どうした？」

不意打ちのような質問に思わずキーボードを打つ手が止め、涼風の顔を見た。

彼女はどこか緊張しているのか頬を赤らめているように見える。

一体なんなんだ？

「いえ……今日つてほらクリスマスじゃないですか」

「そうだな」

俺は首をかしげた。

言われてみればそうだが、だったら尚更俺にその話題を振ってくる意味がわからない。

「そういうの、家族とか友達とか誘った方がいいんじゃないのか？

ほら、桜とか」

夏にバイトに来ていた彼女の幼なじみを引き合いに出すと、涼風の眉毛が八の字になった。

「それがですね、ねねっち、大学の友達と予定があるって断られたんです。それにー」

「それに？」

「葉月さんが、日頃お世話になってる人にお礼言った方がいいかもみたいなこと話してて……」

「葉月の奴……」

またしようもないこと言い出しやがって……。

しかもそれを真に受けるとは。

まあ、こう言うところもコイツの美点か。

と、どこか懐かしい気持ちになる。

「それで……敦さんには、コンペのアドバイスとか、その後も色々してくれたので、もしよかったら一緒に食事でもどうかになって……」

最後の方は恥ずかしかったのか尻すぼみになりながらも涼風はそう言ってくれた。……まあ、別に断る理由もないな。

「わかった。飯行こうぜ。少し待っててくれるか？ もうすぐ片付くから」

「はいっー」

涼風は嬉しそうな声を上げると、小走り気味に立ち去った。

……まさか、こんな展開になるとは。

正直、予想していなかった。

こういうのは初めてって訳ではないが、職場の後輩に面と向かって誘われたこと久しぶり……いや、最近あったな。

と、不意に2ヶ月前のことを思い出した。

仕事を大忙しで片付けて、お姫様のワガママに付き合ったことが。

「……あの」

また声をかけられる。涼風とは違う声だ。

そしてこの独特のイントネーション。

すぐにわかった。

振り返ると、飯島が立っていた。

資料を持っていた涼風とは対照的に、手を後ろに回して所在なきげにしていた。

表情も不安なのか自信がないのか俯きがちである。

俺は椅子を回転させて彼女と向き合う形をとった。

何か用事だろうか？

彼女とは依然、妙な縁を感じるがゆえ、俺は様子を伺う。

「……あの、その……これっ」

すると、飯島は意を決したように声を上げた。

差し出されたものは小さな包み。

「…今年は色々迷惑かけたので、そのお詫びです」

もじもじとしながら、しかししっかりと俺の目を見て彼女は続けた。

なるほど。

つまりこれはクリスマスプレゼントと言うことか。

「そうか。ありがとうな。だが、別に気にしなくていいのに」

「私が気にするんですっ」

そんなものかなと思いつつも俺は素直に感謝の言葉を述べ受け取ることにした。

包装紙を開くと中からは、懐中時計のようなモノが出てきた。

だが、開けてみても中は空っぽ。

数秒ほ眺めていと、これの用途がわかった。

「これ、携帯灰皿か」

「はい…そうです」

何を恥ずかしがっているのか知らんが、もみ上げの髪を指先でクルクルと弄りながら飯島は答えた。

よく見ると耳まで真っ赤になっている。

「しかもこれ、随分と高い奴じゃないか？」

「……」

沈黙は肯定だった。

このブランドは見たことがある。

福沢諭吉が5人必要なモノだ。俺もネットで調べたりはしたが手を出せなかった代物だ。

「いくらなんでも受け取れないよ。こんな高級品」

「受け取ってください」

「いや、さすがに悪いって」

「いいからっ」

頑として譲らない。

それどころか、彼女は俺の手の中に無理矢理押し込んでくる始末だ。

「わ、私の気持ちなので！ とにかく、受け取ってくださいっ」

「っ……」

勢いに押されてしまい、俺はそのまま懐に収めるしか無かった。

とはいえ、夫婦でもなければ、恋人でもない。

その上、同じ職場にいる年下で異性にここまでされて黙っているわけにはいかない。

「ちよつと待ってろ」

俺は自分の財布を取り出すと、入っていた諭吉を数枚、茶封筒に入れてつき出す。

「ほら」

「そ、それこそ受け取れませんよっ。そないなこと期待して渡したんやないんですし」

まさか金を返されるとはおもっていなかったのか、関西弁と敬語が混ざった変な喋り方になっているが、俺は構わず続けた。

「お前にじゃない。みうとれんに渡してやれ」

「えっ？」

それは4月に出くわした飯島の妹と弟のことだ。この季節になればお年玉やらなにやらで入り用になるだろう。

それなのに俺ばかりこんな高級なモノ受け取れるわけがない。

せつかくの年末年始なのだ。懐が寒い思いなんてされたら、目覚めが悪いし使えるわけがない。

だから、アイツらに使ってくれと言っているのだ。

「それと…、これも」

茶封筒と一緒に俺は引き出しの中から綺麗にラッピングされた袋を取り出す。中身はもちろんクリスマスプレゼントだ。

それも二つ。

飯島の兄妹達へのモノだ。

中にはゲームソフトが入っている。

4月の時、欲しいと話していたのを覚えていたから。

二人とも小学生くらいだったから、喜んでくれるはずだ。

俺はそれを飯島に手渡す。

彼女の手に移った瞬間、その瞳が大きく見開かれた。

「え…そんなっ」

「いいから。遠慮せず貰ってくれ。アイツらにもよろしく言っ
てくれ」

「……」

飯島は何も言わず、ただじつと俺を見つめてくる。

なんだ？ どうしたんだろう。

「……ずるいです。そういうの」

「？ 何がだ？」

「……いえ、なんでもありません」

はあーつとため息をつく飯島だったが、ようやく納得してくれたら
しい。

「わかりました。お言葉に甘えて頂戴しますね」

「ああ。そうしてくれ」

これで一件落着である。

飯島はまるで自分の顔を隠すかのように深くお辞儀をして去って
行った。

……なんというか、本当に不思議な縁だと思った。

休日にたまたま会って、飯をおごってやって、共に雨の中を歩いて、
看病してもらって、混浴で遭遇して……。

そして、こうしてプレゼントを貰ったりする。

考えてみれば、奇妙な関係だな。

まあ、悪くはないが。

そんなことを考えながら作業を片付けていると、涼風が戻ってき
た。

「あれっ？ 敦さん、それ何ですか？」

彼女は俺が一人で作業しているのを見ると、不思議そうな顔をす

る。

当然だ。基本的に俺の机は何も無い。整理されているというよりは、そもそも何も置いていない。

普段あるのは目の前に広げられている3台のディスプレイとパソコンのみ。

だから、そこに普段見かけないモノがあるというのは違和感を覚えるのだろう。

「ん？　これか？」

「はい」

「見れば分かるだろ？　クリスマスプレゼントだよ」

「えっ!?!」

彼女は目を丸くする。

「誰からのですか？」

「内緒だ」

飯島の立場もある。

職場の異性にこんなもの渡したのを後輩に知らればきつと居心地が悪くなるだろう。

なぜ渡しなのかはわからんが。

「ええ〜気になりますよ〜」

「ダメだ。企業秘密だ」

「むう〜」

不満げに頬を膨らませる彼女を尻目に俺は作業を片付けて席を立った。

「んじや行くか」

「もー、誤魔化さないてくださいよ」

「はいはい」

背後で騒ぐ涼風を連れて、イルミネーションが彩る街へと繰り出した。

「うわぁ綺麗ですね!」

駅前の交差点に着くと、そこには多くのカップルがいた。

皆、楽しげに寄り添っている。

中には手を繋ぐだけではなく、腕を組んでいる者たちもいた。

俺達とはいえば、どちらもそこまでベタベタとくっついていては
ではない。あくまで普通くらいの距離感を保っている。

「確かにそうだな」

「私達もあんな風に見えてるんですかね？」

「どっちかっていうと親子だな」

「もうっ、そこは恋人同士に見えるとか言うところですよ」

「はいはい」

「うわあ、適当に流しましたね」

「当たり前だ」

むくれる涼風を見て改めて思う。端から見たらそうにしか見えな
い。それだけ年の差が離れているのもさることながら、涼風の小柄な
体躯がよりそれを助長していた。

それに、もし仮に俺たちが付き合っていたとしても、周りの連中に
はそう見えないだろう。

よくて親子かあるいは……。

「でも……」

「ん？」

「敦さんと一緒に見られて良かったです。こういうの初めてなので
楽しいなと思わせて」

「……そうか」

涼風の笑顔を見て思う。

……俺はコイツの夢を形にしてやりたい。

彼女と同じ運命にさせない。そのためにできることなら何でもし
よう。

俺は密かに決意を固めた。

「あ、見てください敦さん！ ほら、雪ですよ、雪！」

「お、本当だ」

空を見上げると、ふわりと白い粉のようなものが落ちてきた。
どうやら本格的に降り始めたらしい。

「ホワイトクリスマスですね」

「だな」

街全体が白く染まる光景に、どこか幻想的な雰囲気を感じる。この寒さがなければもつと気分が良いのだが、まあいいか。それからしばらく、他愛もない会話をしながら歩く。すると、少し先に大きなツリーが見えてきた。

「どうやら、ここが目的地らしい。」

「そろそろだな」

「え？ 何がですか？」

涼風がキョトンとしていると、やがてそれはやってきた。

「お、始まったぞ」

「っー」

ライトアップされた巨大なクリスマスツリーが姿を現す。

その周りには沢山の人が集まっていた。

「すごい人ばかりですね」

「そりゃこの時期だからな。まあ、今日は平日だし、まだマシだろ」

「それでも多い気がしますけどね」

時刻は20時を回った頃。

仕事帰りのサラリーマンなどが多いのか、スーツ姿の人間もちらほらと見かける。

そんな中を俺達はゆつくりと歩いた。

「綺麗ですね」

涼風は目を輝かせながらクリスマスツリーに見入っている。

その横顔は本当に楽しそうで、見ているこちらも嬉しくなってきた。

そして数分後。

「……んじや、そろそろ飯食うか」

「ええ、もう少しだけ見てませんか？」

「また来ればいいだろ」

「それもそうですね」

「じゃ行くぞ」

「はい」

2人で連れ立って歩き出す。

向かう先は駅近くのレストラン。

そこで食事をしてから帰ることにした。

「いらつしやいませ」

店内に入ると、店員が出迎えてくれた。

「2名様でよろしいでしょうか？」

「はい」

「かしこまりました。こちらへどうぞ」

案内されたのは窓際の席。

そこからは先程見た巨大ツリーがよく見えた。

「わあ、良い眺めですね」

「そうだな。ここにして正解だったな」

「はい」

2人とも料理は既に決めていたので注文はすぐに終わった。

「今日は私が奢りますよ」

「いや…」

流石に断ろうとするが、俺の懐事情は芳しくない。

さつき飯島に兄妹達のお年玉代として渡したからほぼ空っぽだ。

ここは、涼風を立てることとしよう。

「んじゃ、ご厚意に甘えて」

「いえいえ、遠慮なく」

そんなわけで、今回は素直に奢ってもらうことにした。

それからしばらく、俺たちは出てきた料理に舌鼓をうちながら談笑を楽しんだ。

「美味しかったですね」

「ああ」

食事を終え、店を出た俺たちは帰路についていた。

俺は電車に乗る必要はないが、涼風を駅まで送ってやることにした。

辺りはすっかり暗くなっており、街灯の明かりだけが頼りとなっている。

ちなみに支払いだが、予定どおり涼風の奢りとなった。
というのも、涼風が頑なに譲ってくれなかったのだ。

「いつも助けてもらってるんですからこれくらいいさせてください」と言われれば強く断ることもできない。

というわけで、大人しく払っていただいた次第である。

「なんだか、レジのお姉さんの顔、凄く微笑ましかったですね」

「多分、親子と思われてたぞ？　俺たち」

「え!?　そうなんですか!？」

「まあ、それだけお前が子供っぽいってことだ」

「なっ!?!……うう……」

涼風が恥ずかしそうに俯いている。

確かに、客観的に見れば、鼻屑目に見ても高校生ぐらいにしか見え
ないもんな。

……しかし、こうやって並んで歩いていると、色々と思い出してしま
う。

あの時も、こうして仕事帰りに彼女と歩いたことがあったから。

「……ありがとうな」

自然と口から言葉が出た。

思わず、口をついて出てしまった言葉。

それを聞いた涼風は首を傾げている。

「ん?　何か言いましたか?」

どうやら聞こえていなかったようだ。

俺は苦笑いを浮かべながら誤魔化す。

「なんでもない」

「気になります。なんて言ったんですか?」

「気にするなって」

「もう教えてくださいよ」

「しつこい」

「むー敦さんの意地悪——!」

●
ゆん視点

「……」

「ゆん、さつきからボンヤリしてるけどどうしたの?」

「え? いや…なんでもないで」

敦さんにプレゼントを渡したあと、はじめを自分の家につれてみるとれんの遊び相手になってもらっていた私だけど、心此処在らずとあったかんじやったのを勘づかれてしまった。

「ほんとうに大丈夫?」

「うん、大丈夫」

心配してくれてるはじめには悪いけど、これは私の問題。

だから、これ以上迷惑はかけられへん。

「ふーん」

「な、なんやねんその目は」

「別に?」

「なんかムカつく」

「それはごめんね」

そう言つてクスクス笑うはじめを見るとこっちまでおかしくなつてきた。

「はあくもう、せつかく人が真剣に相談に乗ってあげようと思ったのに」

「相談?」

「そ、何を悩んでるか知らないけど、1人で抱え込まないほうがいいんじゃない?」

「……」

「話してよ、力になれるかもしれないよ」

「でも」

「一応、同期じゃん」

「そうやけど」

…確かに、はじめになら話してもええんかな?

私の気持ち。

敦さんの事。

からかわれるかもしれないけれど、ずっと誰にも言えなかった事を誰かに聞いてほしい。

そんな思いが、頭の中でぐるぐる回る。

そして、私は気づいたら口を開いていた。

本当に、無意識だった。

きっと、心のどこかではじめを信頼していたんだと思う。

一応、同期やし……

「な、なあ、はじめ……」

「なに？」

「わ、私な……す——」

「うわーん！ ゆんねえちやーん！」

と聞き慣れた泣き声が部屋に響き渡る。

それと同時に部屋の中に入ってきたのは、泣きながらはじめからもらったおもちゃを抱えているれんだった。

「ああもう、せっかくのクリスマスなのにどないしたん？」

「みうがぶつたのー!!」

「は？ みうちゃんが？」

はじめと一緒に泣いているれんの元へ行くと、そこには顔を真っ赤にして涙目になっているみうちゃんの姿があった。

「みうちゃん、どうして叩いたりしたの？」

「だって、れんがウチのおもちやとったんやー！ うわーん！」

「え？ えっ？」

「ち、違うもん!! れんが勝手に取っただけだもん!! 私がわるいんじゃないって、れんが悪いもん!!」

そう言っただけで、わんわんと泣き出した。

こういうところはまだ子供なんやな。

はじめもこういうのは慣れてないせいとお手あげって感じみたいだし……しやーない。相談はまた今度やな。

「ほら、2人とも泣かんって、ほら、まだプレゼントあるから」

と、はじめを自分の家に誘った後、敦さんにプレゼントを渡したときにもらったモノを出す。

本当は寝てる時に枕元に置くはずやったんやけど、こうなった以上仕方が無い。

2人に渡すと、さつきまでの事は忘れてくれたのか、目を輝かせながら「これ、もらってもいいの!？」と飛びついてきた。

「もちろんええよ」

「ありがとう、ゆんねえちゃん!!」

「うう、ゆんねえ、ありがとう」

「はい、どういたしまして」

それから、れんとみうは大事そうにそれを持って自分たちの家へ帰っていった。

「ふう、一件落着だね」

「せやな」

「つていうか、プレゼントちゃんと用意してたじゃん。なんで会社で私に相談したの?」

「えっ!？」

「マズい。」

確かにそうだ。だって、私が敦さんに二人のプレゼントをもらったのははじめに相談した直後なのだから。

はじめが不自然に思うのは当然の事だった。

なんて言い訳しよう。

いやここはもう話すべきか?

だってさつき相談しようとしたことと繋がってはいるし…いやで

も――

「「うわーん!!」」

「……」

「……」

また、みうとれんの泣き声が部屋に響き渡った。

「今度はなんだろう?」

「またプレゼント取り合ったんとちやう?」

「かもね」

なんかもう、お互いの顔を見合わせて笑ってしまう。

さすがにこれは予想外だった。

まあ、でも、これでよかったのかもしれない。

まだ気持ちの整理ができてない。話せるときが来たら、ちゃんと話そう。

「はあ、またあやさんと」

「私も手伝うよ」

「助かるわ」

「じゃあ、行こっか」

はじめの言葉に、私は困ったような笑顔で答えた。

それぞれのクリスマス ―ひふみの場合―

ひふみ視点

今日はクリスマスイブ。

街はイルミネーションで彩られ、会社の帰り道はどこも家族連れやカップルで賑わっていた。

昔の私なら、そんな幸せそうな人たちを見て、私はため息をついた。

男の人といるのは気が休まらないと避けていたから、そんなことに一生縁なんてないと、思い込んでいた。

でも、今年は違う。

「…その、上がって」

「お、お邪魔します」

私は会社からずっと一緒に歩いてきた純君を家に向かい入れた。生まれて初めてできた恋人。

それが純君だ。

彼とここで過ごすことは、12月に入ってから決めていたこと。

どこかに出かけるのも考えたけど、前の社員旅行と同じになるからと言うことで、私が自分の部屋にしようと提案した。

ああ、社員旅行のことを思い出すとまた顔が熱くなっちゃう。

彼としたはじめてした体験の光景がまた鮮明に脳裏に浮かんでくるからだ。

それから今日まで、ケーキの予約に、献立の相談、どんなお酒がいか、色々話し合うだけでも楽しかった。

純君の好きな食べ物とか聞ける良い機会だったし。

「…どうぞ、座って」

「は、はい」

純君も女の子の部屋の部屋に入るのは初めてで緊張しているみたいで、買ってきた物を整理する動作がちよつとぎこちない。

二人でラブホテルにまで入ったのに、借りてきた猫みたいにしていくのがちよつと可愛い。

きつと、今日もするんだろうな。

ネットだと性の六時間とか言われる時間。

それを、本当の意味で味わうと思うのだと、心臓の音がまた大きくなる。

でも、不思議といつもみたいいに挙動不審にはならないんだ。

これは社員旅行時に純君を部屋に呼んだと似ている。この鼓動は、彼を好きだという証拠だと思うと愛おしく思えるから。

「じゃあ…準備、しよっか」

「僕も手伝います」

そう言って、私達はキッチンに向かう。

まずはケーキ屋さんで購入したケーキを冷蔵庫に入れて冷やしておく。

そして、料理の準備に取り掛かる。

と言ってもそこまで難しいことはできないんだけどね。

今日も仕事だったから、ほとんど出来合いのモノ。

それでも、少しだけ手が込んで見えるように盛り付ける工夫をしてみたりした。

テーブルにはサラダとチキンソテー。それにグラタンを盛り付けてある器を置く。

後は帰りに二人で寄ったスーパーのお惣菜コーナーで購入してきたポテトフライに唐揚げ等々。

でもやっぱり、純君には私の手料理を食べてもらいたかったな。

まだ恋人になる前のこと、私のコスプレ趣味がバレたときの口止め料としてお弁当を出したことがある。

その時の純君の美味しいと言う表情を思い出すと、今でも胸が温かくなる。

あの時の私は、彼と恋人になれるなんて想像すらしていなかったのに。

「ごめんね、せっかくのクリスマスなのに、出来合いばかりで」

「そんなこと言わないでください。凄く嬉しいです」

彼は笑顔を浮かべて言う。

その言葉が嘘じゃないことはよくわかる。彼も、恋人と過ごすクリスマスは初めて。

その初めてが私であることがとても嬉しかった。

「じゃあ、これ開けますね」

純君は一本のワインボトルを取り出す。

それも、結構値が張る。

この日のために二人で相談して、お金を出しあって買ったモノ。グラスに注ぐと、綺麗な赤色に染まっていく。

「それじゃあ……」

「はい、乾杯」

チンツ！つと軽い音を立ててグラス同士がぶつかり合う。

私たちは一口飲む。

実はお酒の味はよくわからないのだけど、この感覚が好きだから何度でも飲む。

それを愛しい人と楽しめるならひとしお。

「……おいしいですね」

「うん」

純君も満足してくれたようで良かった。

それから、私たちは目の前の料理をつまみながら談笑する。

「……ねえ純君」

「なんですか？」

「ありがとう」

「えっ？急にどうしたんですか？」

「んーん、ただ言いたくなっただけ」

「……それは、こちらこそですよ」

「っ……」

「ありがとうございます。僕と一緒にいてくれて」

黄色い瞳が真っ直ぐ私を見据えて、笑顔を見せてくれた。

そう言われて、私は恥ずかしくなって顔を背ける。

ずるいなあもう……。そんなこと言われたらますます好きになっちゃおうじゃん。

その後は、二人とも無言で食べ続けた。

食事が終わると、私はケーキを切り分けるために包丁を手取る。本当は純君が切るつもりだったらしいけど、私がやりたいと言ったので譲ってくれた。

純君の分は普通のショートケーキにして、自分のはイチゴがたくさん乗っているやつにした。

切り分け終わると、純君の分の蝋燭に火をつけて、部屋の電気を消す。

「……ふう」

息を吹きかけると、蝋燭の炎は消える。

「……誕生日でもないのに、なんだか変な感じですね」

「そうだね」

そう言うと、暗闇の中でお互い面白くなって笑みがこぼれた。

電気をつけてからケーキを食べ始める。

「……おいしい」

「本当ですね」

「ねえ……」

私はまた純君に声をかけた。

そして、フォークでケーキを掬い、それを彼の方へ向けた。

こう言う時、恋人同士がやること。

漫画やアニメでも使い古されているほどベタなこと。私もやったことなかったのだけど、今ならできる気がする。

「はい、あーん」

「……っ!?!」

「……ほら、落ち、ちやう……よう?」

「……あ、あむー」

彼は戸惑いながらも口を開けた。

そしてそのまま、ケーキは彼の口に収まる。

「……どうかな?おいしい?」

「……はい」

真っ赤になりながら返事をする。

その姿に私まで顔が熱くなる。

今まで、こんなにドキドキしたことあったかな。

好きな人とすることって、ここまで違うんだ。

その後も、私たちはまるで付き合いたての恋人のように甘い時間を過ごした。

そしていよいよ、食事もケーキも終わった私たちは部屋で隣り合うように座っていた。

お互いに沈黙が続く。

気まずさはない。むしろ心地良いくらい。

純君は何を考えているのだろう。

もしかしたら、私と同じことを思っているのかもしれない。

この空気が、永遠に続けばいいのに。

ずっと、こうして二人でいたい。すると突然、純君は私の肩を抱き寄せてきた。

「あっ……」

私は小さく声を上げる。

鼓動が速くなっていくのを感じる。

心臓の音も純君に聞こえてるかもしれない。でもそれでいいかな。

そのまま純君は私を強く抱きしめてくる。

少し苦しい。

でも、それが気持ち良くもある。もっと強く抱いてほしい。

なんとなく、彼がしたいことがわかったから私は目を瞑る。

「……んっ……」

唇に触れる柔らかい感触。

何度も経験しているはずなのに未だに慣れない。

でも嫌じゃない。幸せなもの。

離れたくないと思いつつ、目を開けると、至近距離にある黄色い瞳と目が合った。

それだけでもドキツとする。

私は再び目を閉じた。

今度はもう少し長くキスをした。

数秒後、どちらともなく離れて見つめ合う。

「……好きです」

「うん、知ってる」

「愛してます」

「うん、私もだよ」

「絶対に離しません」

「うん、嬉しい」

「……っ」

「んっ……」

純君の顔が再び近づいてきて、私はそれを受け入れる。

もう何度目かもわからない口づけ。

きつと、これから先も数え切れないほどしていくのだろう。……

ああ、幸せ。

私は幸福に包まれていた。

このまま、時間が止まればいいのに。

そう思った。

その時だった。

ふと目を開いた私は、彼の後ろにあるケージに目が行ってしまった。

ケージの中では、ハリネズミの宗次郎がジト目で私を見つめていた。

……あ、宗次郎にエサあげるの忘れてた。幸せな時間は、いつだって唐突に終わりを告げる。

「あっ！」

「えっ……わああ!!」

私が慌てて離れたことでバランスを崩したのか、純君は後ろに倒れてしまった。

幸いにも頭を打つことはなかったけれど、背中を打ったようで痛そうにしている。「ごめん！ 大丈夫!」

「は、はい、なんとか……うぐう」

「本当にごめんなさい!!ちよつと待って、今すぐクッション持って

くるから！」

私は急いでソファにあつたクッションを床に置いて、その上に彼を寝かせた。

「ぐ…ぐめんね、すぐ…救急車、呼ぶから…」

「いやそこまではいらなからすから」

「ダメ、打ったところ、見せて。…あ、ちよつと腫れてる」

「あの、本当大丈夫なので、とりあえず落ち着いてください」

「いいからっ…」

「いや、僕の方こそすみませんでした。いきなり抱きついたりしたせいで…」

「とりあえず冷やすねっ…」

私は冷蔵庫に行つて氷を取り出し、タオルに包んで彼の元へ持つて行つた。

それを患部に当てると、「あゝっ」つと声が漏れる。

その様子を見ていて申し訳なくなると同時に、彼の可愛い声を聞いて胸がキュンとした。

「…ホントに、大丈夫？」

「…はい」

彼は起き上がつて笑顔を見せる。

それを見てようやく安心できた。

良かった…。

もし彼に何かあつたらと思うと、想像だつてしたくない。

「それで、なにかあつたんですか？」

「あ…その、宗次郎…に、エサ、あげるの…忘れてて…」

「ああ、そういうことだつたんですね」

純君も納得して、ケージの方を見る。

宗次郎はまだ私たちのことを見ていた。

…あれ？

なんか怒つてる気がする。

「とりあえず、今は宗次郎君を優先してください。僕は後でいいので」

「そ、そうだよね」

私はキッチンに行き、宗次郎用の餌を持って来た。そしてケージの前に置く。

すると、いつもなら喜んで食べるはずなのになぜか食べようとしな
い。

なんで……？

「……ねえ、どうして今日はご飯を食べないのかな……」

私はケージの前にしゃがみ込んで聞くと、宗次郎はチラツとこちらを見た後プイツと顔を背けた。

やっぱり怒ってる。なんでだろう。

すると純君が横に来て、私と同じようにケージの前でしゃがむ。

「もしかしたら、僕たち二人の関係が変わったことに気付いているんじゃないですか？」

「えっ……じゃあまさか……ヤキモチ焼いてる……とか……？」

「多分？」

そうなの……!? 宗次郎すごい……! でも……そうなんだ……

私と純君のことをちやんと見てるんだ。

「ね、仲良くしよう」

私は宗次郎に向けて言った。

でも相変わらず知らんぷりする。

「……じゃあ僕があげてみていいですか？」

「大丈夫……かな? 宗次郎も、人見知り……だし」

「まあ、一応やってみますよ」

純君は宗次郎の目の前にエサを入れた皿を置く。

すると宗次郎はそのエサを一口食べた。

やった、成功だ! 純君の言う通りだったみたい。

純君は嬉しそうに宗次郎の頭を撫でている。

宗次郎もそれを受け入れている。

「よしよし、偉いぞ〜」

そう言っただけは頬をすり寄せて可愛がっている。

ああ、良かった。

でも宗次郎、私が触れるようになるまで1年かかったんだよ。それをたった一日でこんな簡単に懐くなんて……。

「……」

なんだか複雑な気分。

今でも機嫌が悪いときは触らせてくれないのに……。

「ひふみ?」

「え、あ、うん。どうしたの?」

「いえ、どうかしましたか? 急に黙り込んだので」

「ううん、なんでも……ない」

私が首を横に振ると、純君は少し考える素振りを見せた。

そして――

「!?」

今度は私の頭をソツと撫でてきた。

突然のことで驚いてしまう。

「え、あ、あの……」

「えつと……その、もしかして撫でて欲しいのかなって思って……違いました……かね」

純君は恥ずかしいのか、だんだん声が小さくなっていく。

それがまた愛しく思えた。

「ううん、違わない……よ」

私はそのまま彼の手を受け入れる。

嬉しいけど、心臓がドキドキして止まらない。

きつと顔だつて真っ赤になつてるに違いない。

「あの……嫌じゃないですか?」

「全然……もつと……して、ほしい」

「そ、それなら良かったです……はい」

「ふふ」

その後私たちは、しばらく無言のまま一緒にいた。

その間、ずっと彼の手が頭に乗っていた。

それぞれのクリスマス ―ねねとうみこの場合―

柚貴視点

「あ、いないと思っただらこんなところにいたっ」

暖房と雑音が響き渡る店内に、腰を下ろしていた俺は桜に声をかけられた。

俺は何も言わず、目を細めて声をかけてきた方に顔を向ける。

「もう、せつかくのクリスマスだから大学のみんなでカラオケ行こうって誘ってあげたのに」

「俺は行きたいなんて言っていない」

思えば、春にコイツを暴漢から助けてから、桜はそのことを大学の連中にまで言いふらしていたのだ。

まるで武勇伝のように。

そこから、また妙に絡まれることが増えた上に、行かないと桜が家に押しかけてくるのだ。だから今日だって無視してやろうと思っていたのだが、こうしてやかましいカラオケに来させられる羽目になってしまった。

「ほらほらー！ 戻ろうよ。ゆずっちが主演なんだよー！」

そう言うなり、俺の腕を引っ張る桜。

仕方なく立ち上がり、マイクを持ったまま騒いでいるメンバーのところに連れて行かれてしまう。

そして――

「はい、じゃあ今年一年お疲れ様ってことで、かんぱあい!!」
全員分のグラスがカチンツと音を鳴らして合わさった。

桜の隣に座らされてしまい、逃げられない状況になってしまう。

……こうなったらさっさと終わらすしかないな。

「ねえ、ゆずっち歌わないの?」

「ああ、別にいいだろ? 歌いたくないんだから」

「ええ、歌って欲しいんだけどお」

「うるさい黙れ」

「もう、つれないなあ」

頬を膨らませながら不満げにする桜を無視していると、隣に座っていたメンバーの一人が話しかけてきた。

「でも塩川さんって、ホント美人ですよね」

「そっかなあくゆずつちはかわいい系だと思うけど……」

「いやいや、カツコイイ方じゃないですか!？」

「ううん……」

どう反応すれば良いのか分からずにいると、他のメンバーからも口々に褒め称える言葉が飛んでくる。

「和服似合ってますよね」

「何着てもサマになりそうだもんなあ」

「身体も細いし、羨ましいわ」

こういうことはガキの頃から何度も言われてきたが……やはり慣れることは無い。

普段ならすぐにその場を立ち去るのだが、今はそれができない。居心地の悪さを感じつつ、適当に相槌を打っておくことにした。それからしばらくして、メンバーが次々と曲を予約していき、その度に桜が立ち上がって歌うことになった。

歌うのは、普段よく話すアニメやゲームの曲ばかり。特にこれと言って嫌いというわけではないが、特別好きなわけでもない。

むしろ俺にとっては雑音以外の何ものでもない。……早く帰りたい。ただそれだけしか考えられなくなっていた。

しかし、そんなことを思っただけでも時間は過ぎていき……結局最後まで付き合わされてしまった。

メンバーは楽しかったと言いつつ残りして解散していく中、桜は俺のそばにトタトタと駆け寄ってきた。

「あれえ、もう帰っちゃうんですかのお？」

人を煽るような声を出す無視して立ち上がると、革ジャンを羽織ってそのまま出口へと向かって歩き出した。すると桜は慌てた様子で追いかけてきて、腕を掴んでくる。

「ちよっと待ってよー!」

俺は振り返り、面倒くさそうな表情を浮かべると、ため息混じりに言った。

「……まだ何か用があるのか？」

「一緒に帰ろうよ」

「断る。お前一人で帰れば良いだろ」

「ヤダ。寒いし寂しいじゃん」

「……はあ」

もう一度大きなため息をつくとき、再び歩き始めた。

桜は諦めずについてきて、今度は横に並ぶ。

「やっぱり、ああいうの苦手だった？」

申し訳なきように謝ってくるが……本当に鬱陶しいヤツだなコイツは……。

「なんの話だ？ ただ単に俺は行きたくなかっただけだ」

「もー嘘ばっかりい。本当は嬉しくて仕方ないくせにい」

「ふざけるな。誰が嬉しいなんて思うか。第一、そういう話は俺より他の連中にしろ。俺に絡んでる暇があったら他のやつに構ってやれ」
「むう……ゆずっち、なんか一にも増して機嫌悪くない？もしかして怒ってる？」

「…怒ってない」

そう、別に怒っているつもりはない。ただ少しだけイラついているだけだ。

理由はある。

それを言うのは癪だから言わないだけで……。

俺にも俺で考えがあったんだ。なのに勝手に他の連中まで呼びやがって。

これじゃあ予定が狂うだろうが。

「あつ！ ゆずっち！ 見てみて、雪降ってるよ！」

虫の居所が悪い俺を差し置いて、いつの間にか空を見上げていた桜は、興奮したように指差してくる。

俺も釣られて見上げると、確かに粉のような白いものがチラホラと降り始めていた。

この調子だと積もりそうだな。まあ、どうでもいいか。

「ねえ、今年の初雪だよ！　すごい綺麗っ!!」

「……………」

だが、こんな桜を見てるときさっきのイライラが消えていくような気がするから不思議だ。

「ねえ、すごいよ！　初雪だよ!?!」

「……………そうだな」

もう呆れてものも言えない。ため息が出る。

どうせこのまま帰ったところで気分は晴れないだろう。

……………だから、俺は当初の目的を実行することにした。

「おい、桜」

「ん、何？」

「……………これやる」

革ジャンのポケットからあるものをだして、桜の前に手を突き出す。

それは小さな紙袋。

桜はポカンとした表情を浮かべていたが、やがて意味を理解したのか、目を輝かせながら受け取った。

「え、これってもしかしてプレゼント!?!」

「それ以外何に見えるんだよ……………」

「開けていい?」

「好きにしろ」

許可を取るなり早速包装を解いていき、中身を確認する。

中に入っていたのは黒猫のキーホルダー。革ジャンを買いに行った時に見かけてついでに買ったモノ。

そう、ただのついでだ。

店員が要らない気を利かせて洒落たラッピングをしてきたが、特に他意はない。

「わあ〜可愛い〜」

桜はそのキーホルダーを大事そうに胸元で抱きしめる。
単純な奴。

こんな安物のキーホルダーでおおはしやぎしやがって。

……本当に、コイツはバカだ。

「あ、そうだ」

桜は自分のコートの中から鍵を取り出す。そして、それにキーホルダーを取り付けた。

「これでよしっ」

それは、俺に断りもなく名波からもらったという俺の部屋の合鍵だ。

俺と桜が初めて会った時のことだ。

「ほら、これなら失くさないね」

これ見よがしにそれを見せつけてくる。

「お前はそれ付けてても失くしそうだけどな」

「失礼な！ 私だつてちゃんと管理できるもん！」

「へいへい、そうですか」

「うん、そうですとも。ふふん」

桜は自慢げに鼻を鳴らすと、満足気に微笑みを浮かべた。

……正直、クリスマスなんてものは好きではなかった。

小さい頃は毎年のようにプレゼントを買ってもらい、ワクワクしていたものだが、成長するにつれて段々興味が薄れていった。

だが、今は桜がいる。

こうして毎日のように振り回されて、俺の日常はすっかり変わってしまったようだ。

「あ、ゆずっち、もしかして笑ってる？」

「……さあな」

桜はじつとこちらを見ながらニヤリと笑みを浮かべている。……この表情は絶対に気付いている顔だ。

まったく……変なところで勘が良いというか、察しの良いヤツめ。

「……桜」

「んー？」

「その……メリークリスマス」

恥ずかしさを堪えながらなんとか口にする、桜は満面の笑顔に

なった。

「うん！ メリークリスマス！」

今日はクリスマス。

街は賑やかに彩られ、イルミネーションに照らし出されている。そんな華やかな光景を見ているだけで、心までも暖かくなっている。

俺たちは今年初めて会ったばかりだけど、来年のクリスマスもまた一緒にいるような気がした。

「ん？」

「あれは……」

そうしてまた家路につこうとした時、俺達は見慣れた人物を見つけた。

それも二人組。

片方は特徴的な眼鏡に七三に分れた金髪の男。もう片方は日焼けした肌に鋭い目つきとをした濃い茶髪の女。

俺達は二人の名前を知っていた。

「名波と……」

「うみこさん？」

二人は仲睦まじく手を繋いで歩いていた。

名波は相変わらずの淡々とした口調で話しかけているが、うみこの方は頬を赤く染めていた。

……どうということなのだろう。

あの二人が付き合っているという話は聞いたことがない。

というか、俺自身が名波について何も聞かなかったということもあるのだが……。

しかし、思い当たる節はある。

それはうみこが桜を捕まえたときの身のこなし。

あれは名波と同じ動きだということを、今になって思い出した。

「……」

「……」

互いに何も言わずに無言のまま見つめ合う。

桜はジツと真剣な眼差しで何かを考え込んでいた。

「……よし」

やがて小さく呟いてから歩き始める。

「おい桜」

「大丈夫。任せてよ」

何を任せればいいのか分からない。

桜のことだ。また録でもないこと思い付いただけに違う。

だが、今の俺はそれを止めることが出来なかった。

何故なら、俺も知りたかったからだ。

あの名波に女がいることなんて初めて知ったし、それが知り合いなら尚更驚いた。

「……はあ」

桜に続いて足を踏み出す。

これから起こるであろうことを想像して、思わず溜息が漏れてしま
う。

…付き合つてやるか。

俺は半ば諦め、桜と共に二人を尾行することにした。

「……」

「……」

俺と桜は一定の距離を保ちつつ、二人の後をつけていく。

手を繋ぐことなく、微妙な距離を保つて歩く姿は何とも言えないも
のがあった。

だが、不思議なことには通行人は誰も気にしていない様子。

これが都会というものなのか。それともただ単に人が多いせいで
気付かないのか。

「……」

「ねえゆずつち」

「なんだ」

「私達って通ってる人から見たらカップルに見えるかな？」

「さあな」

「ふうん」

桜はどこか不満げだった。

自分で訊いてきた癖に、何を考えているのだろうか。

だが、今はその思考が理解できなかったわけではない。

むしろ、俺も同じことを考えていたくらいだ。

「……」

チラリと横を見る。

桜は楽しげに微笑んでいた。

それはまるで悪戯が成功した子供のような笑み。

その表情を見た瞬間、胸の奥がドキリと高鳴ったような気がした。

「ん？ どしたの？」

桜が小首を傾げる。

俺は慌てて視線を前に戻し、なんでもないと誤魔化した。

「そっか。じゃ、行こっ！」

「お、おう」

そのまま桜の後を追っていく。

どうやら気づかれてはいないようだ。

少しホツとすると同時に、妙に緊張してしまう。

「……あつ、二人がどこか入っていくよ」

「え？」

桜の声に釣られて前を見ると、二人は高そうなレストランの中に消えていった。

「ホテルとかには入らないんだね。意外かも」

「そりゃいきなりおっ始めることないだろ」

名波の性格は知っている。

あの堅物のことだ。このレストランもスマートに予約して、さり気なく誘っているに違いない。

そして、うみこの方もまんざらではない感じであった。

「うーん、なんかムカつくね」

「なんでだよ……」

「だってさ、あんな風にエスコートされるのって羨ましいじゃん。

あー、むかつく」

「……」

よく分からない理由で怒るヤツである。……しかしまあ、確かにちよつとイラつとするかもしれない。

「ヨシッ！ ちよつとなかで何してるか見に行こー！」

「は!?!? ちよ、待ててっ！」

言うが早いのか、桜は俺の手を引いて店内へと突入していった。訳だが……。

「えっ!?! 予約でいっぱい!?!」

「申し訳ございません」

扉を開けた途端、ウエイトレスのお姉さんによって丁重に追い返されてしまった。

「そんなあゝ」

桜はがつくりと肩を落としている。

まさかこんなことになるとは思わなかったらしい。

当たり前だ。何せ今日はクリスマス。

考えることは皆同じと言うことだ。

「はあく。仕方ないかあ」

「もういいだろ? 帰ろうぜ」

これ以上ここにいっても意味がない。

俺達はすぐごと引き返すことにした。

「「あ」」

が、店を出てすぐのこと、俺たちは見てしまった。

窓際のテーブル席に座る二人の姿を。

しかも、二人は今、俺でも見たことがあるほどのセオリー通りのことをしていた。

俗にいう、『はい、あーん』の真っ最中。口を開けているのはうみこ。先日、桜にしてもらおうとしたのを俺に横取りされたそれを、名波とやろうとしていた。

「…!?!」

そして不幸にも、不意に視線に気がついたうみこにバレてしまった。

当然それは、名波にもバレたということで、二人の視線が俺たちを串刺しにした。

「っ……」

「……」

名波の顔は普段の無表情のままだが、うみこの方は酷いことになっている。

顔から火が出るのではないかと思うほどに赤面しており、目尻には涙が浮かんですらいた。

「っー」

だが、すぐに我に帰ったのか、顔を逸らすと、フォークに刺さっていたものを無理やり口に入れて、飲み込むように食べ始めた。

「……」

名波は何も言わずにその様子を眺めているだけだが、その無表情が逆に今は怖い。

「桜、行くぞっ」

「えっ、ちよっ……ゆずっち!?!」

本能的な恐怖で居たたまれなくなった俺は、桜の手を掴んでその場から逃げ出した。

それぞれのクリスマス　ーりんとかウの場合ー

佐藤視点

「んじゃ、俺、もう上がるな」

「お疲れ様」

「お疲れ〜」

今日の仕事を終えた俺は、まだ残っている遠山と八神より先に帰り支度を済ませてる。

特にクリスマスの予定はない。

家に帰って少し豪勢な夕食でも食べて休もう。

いそいそと帰り支度を済ませてオフィスを出ると……。

「佐藤く〜ん♥」

最近鳴りをひそめていたヤツが出てきた。

「なんっすか花男さん」

「何って、佐藤君を煽りに来たの」

「……」

「りんちゃんへの想いが成就しなかったら会社辞めるとか言ってたのに、社員旅行からほとんどなにも行動を起こしてないじゃな——」

俺は無言でハリセンを突きつけた。

「反応したってことは、認めるってことね、佐藤く——って痛いわ!!」

ハリセンの一撃を食らい、花男は悲鳴を上げる。

が構わず追撃をかます。ついでに頭を掴んで髪をむしり取り、床にたたきつけた。

「ほんつとにアンタは、人の神経逆なでするようなこと言いやがって…人間性を疑いますよ」

「っ…ひ、ヒドいわっ！ これでも真剣に応援してるのに！」

「それならそれで人間性を疑いますよ」

「うぐっ……」

それだけ言うと、俺はその場を離れた。

まったく、仕事終わりくらいゆっくりさせてくれよ。

「佐藤くん、いい加減にしなさいよね！　せつかくのクリスマスなのよ！　りんちゃんを誘わなくて良いの!?!　このままだと会社の中でコウちゃんといチャイチャするわよ?」

後ろで何か叫んでいるようだけど無視だ無視。

ああいう手合いには関わらないことが一番なのだ。さあ家に帰ろう。

そう思いながら会社を出た。

車を置いてある駐車場に着いて車のドアに手をかけようとした時だった。

「ん?」

不意に手元に冷たい感触が走った。

視線を落として自分の手を見ると、そこは濡れていた。

雨にしては随分と冷たい。まるで氷水を浴びせられたような冷たさだ。

不思議に思って空を見上げると……そこには白い雪がちらほらと降っていた。ホワイトクリスマスという奴だろうか?

「へえ、綺麗じゃん」

真っ白に染まった都会の風景を見て思わず呟いてしまう。

社員旅行で雪は見飽きるほど見たが、やはり都会で見る雪と言うのもそれはまた趣がある。

「…そう言えば」

と、不意に今朝見たテレビの事を思い出した。

確か今夜はかなり降り積もるといふ。終電になる頃にはもしかしたら電車が止まることもあるかもしれん。そんな事を天気予報士が言っていた気がする。

そうすればきつと、あの二人はまた社内で寝泊まりすることになるのだろう。

八神の方は毎年恒例のことだが。

おそらく八神は泊まると言い出してスカートを脱ぐ。それを遠山が叱るのだ。

「やれやれ…」

とはいえ、今の俺は少しだけ違う。

踵を返した俺は会社へと戻る。

八神だけ泊まるなら勝手だが、遠山まで巻き込まれて泊まるようなことはいただけない。

ついでだ。

二人も乗せてやろう。

俺は社員証でドアを開けてオフィスの中に入る。

中はもう消灯されていて、真っ暗だが人の気配がする。

「お前ら、まだいるか?」

転ばないよう壁伝いでキャラ班のブースへに顔を出すと――

「なにしてるの!?!」

「え? だって泊まるなら……」

「ああもうそういうところは全然変わってないんだから――!!」

……案の定、八神がスカートを脱いでいるのを遠山が叱っていた。どうやら俺の考えは間違ってたようだった。

「……おい、お前ら、仲が良いのは構わんが、少し落ち着け」

「!?!」

俺は顔を手で覆い、後ろを向いた上で二人に声をかけた。

「ぎ、佐藤君!?!」

「ちよ! 佐藤なんで戻ってきてんの!?!」

慌てる遠山と、羞恥に震える八神のリアクションを聞きつつ振り返ること無く続ける。

「雪が降ってきたから乗せてやろうと戻ってきたんだよ」

つうか、八神。

毎回毎回言うが恥ずかしがるなら脱ぐな。

もう突っ込むのも億劫になってきた俺はため息をつくしか無かった。

「ああもう! 佐藤君つ、ちよっと待っててね! ほらコウちゃん早く着替えて!」

「わ、わかったよりん」

「…」

普段の遠山なら俺とともに叱るのが常なのだが、随分な慌てように違和感を覚える。

その根拠を紐解く暇もなく、遠山が俺の元に歩いてきた。

「ごめんね佐藤君。わざわざ戻ってきてもらって」

「…別に、ついでだし」

「そっか……」

今ちゃんと彼女のことを目視して、改めてわかったがやはり様子がいつもと変だ。

落ち着きが無いと言うか、もじもじしているというか…。

恥ずかしがりながら絞り出すように言葉を紡ぐ。

「…その、見ちゃった？」

「何を？」

「……その、コウちゃんの……」

彼女が何を聞きたいかは分かった。

それを本人の口に出させるほど、俺の性癖は歪んでいないし、させたくない。

「見えないよ。なんとなくこうなることはわかってたし」

「本当!? なら良かった」

俺の言葉を聞いて、心底安心したような表情を浮かべた遠山。

目の色が明らかに変わり、キラキラと輝いている。本当に心の底から安心しているようだった。

…なんだ？

今までこんな反応したこと無かったのに…。

「んじや、サツサと帰ろうぜ。あんまり遅くなつて明日の仕事に支障が出て困るし」

「うん、そうね。じゃあ、私はコートを取ってくるから先に駐車場に行つてて」

「おう、了解。八神も乗るだろ？」

「私も行くー」

遠山が小走りで自分の席に戻っていく。

「んじや、俺先に行くな」

その後ろ姿を見送った俺は、また駐車場へ向かうことにした。先にエンジンをかけて置けば二人が乗るときには暖房が効いてくるだろう。雪が降っているなら尚更だ。

再び会社を出た俺は、駐車場に置いてある車に乗り込むとエンジンをかける。

「さて」

せつかくだ。

少し寒いがこの雪景色を楽しみながら一服と行こう。

車を出た俺は、タバコに火を付けて煙を吸い込む。

吐き出した煙が夜空と雪に交じって溶けていく。その風景が、俺の目にはどこか儂く見えた。

「佐藤君」

「？」

声をかけられて振り返る。

立っていたのはコートに身を包んだ遠山のみ。

「ん？ 八神は？」

「ちよつとトイレに行くって」

「…そうか」

タバコの火を消そうとした時、遠山が隣にやってきた。

俺が急に戻ってきたときにみせた落ち着かない様子のままで。

「……」

「……」

寒さと沈黙が空間を支配する。

わずかに残ったタバコの煙だけがゆらゆら揺れていた。

そして、それを破るのもまた遠山であった。

彼女は意を決するように深呼吸すると、俺の方を向いた。

「佐藤君っ」

声色は浮ついていて、緊張がこちらにまで伝わってきた。

「なんだよ」

「えつと、あのね……」

そこで言葉が詰まる。

言いにくいのか、それとも別の理由があるのか、彼女は中々次の言葉を出さない。

「……」

「……」

「……」

「……」

俺はじつと待つ。

きつと何か大切なことだ。水を差すのは野暮に決まっている。

「あのね……これ」

恥ずかしがりながらも、彼女は両手で何か差し出してきた。

丁寧にラッピングされた箱。

この日にソレを渡すということはつまり……。

「その……クリスマス、プレゼント……誕生日の時、たくさんくれたから」

「……ああ、なるほど」

確かに、誕生日の時に7つもプレゼントを渡すという凶行を敢行して、引かれたのでは無いかと心配していた。

だが遠山なりに色々気を使っていたらしい。

正直予想外だった。

別にお返しを期待して渡したわけじゃない。もう一種の自棄みたいなモノだったのだから。

「開けていいか？」

「うん……」

包み紙を開ける。

現れたのは綺麗に包装された腕時計。

「……」

「ごめんなさい。男の人が喜ぶモノが分からなくて……時計なら使えるかなと思って……」

「いや、嬉しいよ。ありがとう」

「……良かった」

ほっとしたように胸を撫で下ろす彼女。

そんな様子を見て、俺の心の中に温かい感情が芽生えてくる。

「つけてみていいか？」

「もちろん！」

俺は左腕に付けようとする。

しかし、それはうまくいかなかった。

「あれ？　ちよつと待ってくれ」

「大丈夫？　私がやってあげようか？」

そう言つて手を差し伸べてくる遠山。

断る理由は無いため、素直に手渡す。

彼女の細く白い指先が腕に触れ、腕時計をつけてくれる。

ただそれだけなのに、心臓が高鳴った気がする。

「はい、これで良いよ」

「…ありがとな」

「どういたしまして」

遠山が微笑む。

俺は彼女に礼を言うと、再び煙草に火を付けた。

「それで、いつまでそこにいるつもりだ？」

「へ？」

遠山が間の抜けた返事をする。

それと同時に、物陰に隠れている八神も姿を現した。

「バレてたかー」

「最初から隠れてたことなんて知ってるわ」

「あらら、そりゃ残念」

八神が肩をすくめる。

すると、遠山が慌て出した。

「え!?　そうなの？　全然気付かなかったんだけど!!」

「いやあ…ちよつと顔を出しずらくてさ」

「つたく、いいからサツサと乗れ。寒いんだから風邪引くぞ」

「それもそうね。じゃあ遠慮なく」

「あつ、私も乗るー」

二人が車に乗ってくる。

暖房の効き始めた車内の温度が上がったせいか、二人の頬がやや紅潮するのが分かる。

「コウちゃん？ さつきから顔赤いけどどうしたの？」

「えっ!? いやあ…その、そう！ さつきまで隠れてたから！ほら寒かったし！」

「そっか…まあそういうことにしておくわ」

なにやら二人の間で会話が交わされているが、あまり興味は無い。俺はアクセルを踏んで雪の街を駆け抜けるのであった。



八神視点

「ごめんりん、先行っててくれる？」

それは、私が佐藤とりんがプレゼントを渡していた駐車場につく前の事。

ほんのちよつとだけ時計の針が遡る。

「コウちゃん？ どうかしたの？」

オフィスを出てすぐ、コートに着替えたりんは鞆を肩にかけながら首を傾げる。

「ちよつとトイレ」

正直、恥ずかしくてりんには言えないし見られたくない。

だから適当な理由を付けて少しの間だけ別行動をしたかったのだ。

「…もう、わかったわ。先に行って待ってるわね」

「うん。私も急ぐから」

というと、りんは納得したというか、安心したというか、変な様子でエレベーターのある方へ歩いて行った。

「…よし」

その背中が見えなく無つたのを確認した私は、気合いを入れるように両手をギュツと握りしめた。

私はこれから彼に会いに行く。

そう、吉田駿輔ことヨツシーに。

あれ以来、面と向かって話せていないけど今日はクリスマス。

本当は先日やらかした事に対するお詫びをしたいのだけど彼は受

験生。

センター試験までもう秒読みだ。

邪魔するわけにはいかない。

きつと今も警備室で追い込みをしているはずだ。

だから手短に済ませよう。

私は、早足で彼が働いている場所へ向かう。場所は意外と近い。本当に目と鼻の先。あつという間に警備室にたどり着いた。

「……」

ドアを開ける前にノックをしようとするが、躊躇ってしまう。

だって、またあの三白眼と目が合ってしまったら、彼にした事をまた思い出してしまうから。

うう……でもこのままじゃダメだよな。

よしと心の中で覚悟を決める。そして意を決してドアを叩いた。

「……どうぞ」

ドアの向こうから聞こえる低い声は彼のモノ。

特徴的なその声を聞き間違えることは無い。

ヨッシーだ。

「……は、入るね」

深呼吸を一つして、私はドアを開けた。

警備室にはヨッシーが座っていた。机には参考書とノートがたくさん広げられている。

私が入ってきたのに気がついて、目が合う。

私が酔った勢いでキスした時と同じ三白眼、それに見つめられただけで息がつまった。

「えつと……こんばんは」

「はい、こんばんは」

勉強中なのにわざわざ手を止めて礼儀正しく頭を下げる彼にっられて、こっちもお辞儀してしまう。

私と彼はそんなよそよそしい関係じゃ無いのに。

「今日はどうかしましたか？」

「えっ!? いや……その……」

ここまで来たのになに知りすぼんでるんだよ私！

さっきの覚悟はどこに行ったの!!

と叫びたくなるけど言葉が出ない。

でもいつまでも黙っているわけにはいかない。

りんと佐藤を待たせてるし、彼の時間を奪いたくない。だから、手短かに、簡潔に話そう。

「その…今日はクリスマスでしょ？　ちよつと…渡したいモノが、あつてさ」

鞆の中からそれを取り出そうとするのだけど…。

「えつと…あれ、確かに鞆の中に…」

あるはずなのに、見つからない。

「大丈夫ですよ。ゆつくりで」

「う、うん。ごめんね」

おかしいと思い、鞆の中を探ると奥の方にあつた。

「あ、あつた」

手に取つたそれを、改めて見る。…うん、間違いない。

よかつた。忘れたわけでも失くしたわけでもなかつた。

「えつと、これ…渡したくて」

「それは…？」

私を取り出したのは布で出来た小さな袋。

そこには合格祈願と書かれている。

「お守りですか？」

「…うん。私さ、勉強とかわかんないからさ、こう言うのしかできないから…」

ネットで調べて悪戦苦闘しながら手作りしたモノ。

こういうのは苦手だけど、りんにも頼らずに一人で頑張つて完成させた。

絵や3Dならもつと上手くできたのに、実物だとも難しいと思わなかつた。

私が差し出すと、彼はしばらくじつとそれを見つめていた。

それから、私の顔を見て。

今度は私の目をまっすぐに見てきた。
いつも安心するその瞳は、今は怖い。
まるで、怒られるんじゃないかってぐらい怖かった。
だから思わず後ずさりしてしまいそうになる。
「だけど、ここで逃げちゃダメだ。
私は、彼を信じてる。
だから、臆せず堂々としよう。
そう思った瞬間だった。」

「ありがとうございます」
彼は小さく微笑みながら受け取ってくれたのだ。
「……」

まさかの反応だったのでびっくりしてしまった。
「大切にしますね」

「う、うん！……あと、それ中開けてみて？」
「はい、わかりました。では、遠慮なく……」

お守りを開いて、中を見た。
そこには、私が描いた絵が入っている。
私が本気で描いた渾身の逸品。
それが彼にできる精一杯のことだから。

「スゴいですね」
「でしょ？　これ、ホントなら数万円するからね？」
「え!？」

当然だ。
何せ、イーグルジャンプを代表するキャラクターデザイナー、八神
コウが描いたのだ。

本当ならただの一般人が描いてもらえるかすらあやしい。
と言うより、お金じゃ買えないほど貴重な物なのだ。
「だから絶対ご利益あるよ」

そう言って笑って見せる。
すると彼は、また私に笑いかけてくれた。
「はい、頑張ります」

「うん。……えっと、じゃあそろそろ行くね。邪魔してごめんね」

「いえ、こちらこそ。わざわざ来てもらってすみません」

「いいよ。じゃ、おやすみなさい」

「おやすみなさい」

警備室を出て扉を閉める。

そして逃げるように駆け出した。走ったら危ないとか、そんな事は関係ない。

ただひたすら走りたかった。

胸がドキドキして苦しい。

息が荒い。……でも嫌じゃない。

むしろ心地よい。

なんだろうこの気持ちは。

わからない。

でも、悪い気分ではなかった。

よし…早く戻ろう。

りと佐藤が待つてるはず。

真っ赤になる顔を両手で隠しながら、私はビルの中を駆け抜けていった。

メイド服に囲まれて

敦視点

「お、あんなところにいやがる」

クリスマスが過ぎてまだそう日にちが経っていない今日この頃。

俺は葉月に仕様について聞きたいことがあり、オフィスを散策していた。

自分の席にはおらず、しばらく探しているとキャラ班のブースの中央で椅子に腰かけている後ろ姿を捉えた。

コイツの徘徊癖はいつものことだが、マジで勘弁してほしい。

好きなキャラが死ぬ展開を見たくないからって都内から逃げ出そうとしたときはぶち殺してやろうかと思っただけほどだ。

「おい、葉月、この仕様について聞きたいことがあるんだがー」

「も、萌え萌えキューン！」

「……何してんだお前ら？」

ブースに入った途端、目に入ったのはメイド服を見に纏っている涼風だった。

手でハートマークを作り、真っ赤な顔でテーブルの上に置いてある茶に呪文を唱えている。

「あっ……敦さん!？」

涼風だけじゃない。飯島も篠田も何故かメイド服を着ている。その中心で、まるでお嬢様のごとく葉月はくつろいでいた。

「やあ敦君。君もどうだい？ 可愛いメイド達に囲まれると労働の疲れも消し飛ぶだろう」

「いや仕事しろバカ」

話を聞くと、忘年会兼納会の幹事について話し合っていたそうなの。…それが一体全体どうしてこうなった。

「そこで私はメイド喫茶がいいと提案したんだ」

とドヤ顔で眼鏡を光らしながら語る葉月。

いやだからって何で涼風達がメイド服着てるんだよ。

そして何でお前がご奉仕されてるんだよ。

もうツツコミどころ満載すぎて逆に何も言えねえよ……。

「待ちたまえ敦君」

ため息をつきながらブースに入ろうとすると葉月に止められた。そして何も無い虚空を指差してこんなことを言い出した。

「今そこには扉があるんだ。開けるまで入っちゃいけないよ」

「……はあ？」

何を言ってるんだこいつは。

意味がわからずとりあえず言われた通り待っていると、涼風が俺の前でドアノブを回す真似をする。

…パントマイムかよ。

「お、お帰りなさいませ。ご主人様っ。寂しかったにゃん」

「……………お前、恥ずかしくないのか？」

「……………すごく、恥ずかしいです」

「だろうな……………」

顔を赤く染め上げ俯きながら言う涼風に苦笑いするしかなかった。きつとメイド服なのもそれを助長しているのだろう。

こういうことに慣れていないであろうことはわかっていたがまさかここまでとは……………。

これはこれで需要はあると思うけどな。

涼風のキャラ的に考えて。

「ふむ、よく似合っているじゃないか。さすが私というべきか」

「黙れクソメガネ」

「今のは結構傷ついたよ敦君……………」

勝手に傷ついてろ。

しかしまあなんだ、涼風の奴、随分とこの会社に馴染んだものだ。入社したての頃、社員証を忘れて締め出されたのが懐かしく感じる。

「てかお前らもちゃんと断れよ。完全にセクハラじゃねえか」

「大丈夫だよ敦君。彼女達は嫌々やってもらっているわけじゃないしね」

「どこを見て判断してんだよ」

全く信じられん。

これならまだ新人の女の子を無理矢理連れ込んでコスプレさせて
するようなもんじゃんねえか。

「なるほど、つまりあれか。周りにこれだけ可愛い娘がいるから、敦
君はあくまで紳士振るつもりなんだね？ それもいいだろう」

「最低限、人としての尊厳を保ちたいだけだよ」

いやまあ確かに、こういう仕事をしている手前、何が可愛くて何が
綺麗で、何が人を惹きつけるかというのは理解できる。

実際、涼風も飯島も篠田も普通に可愛い部類に入るだろう。

だがそれとこれとは別問題だ。

仕事中にこんなことしてたらダメだろ。

「そうかい！ ならば君の本性をここで曝け出してみようではない
か！」

「はっ！」

突然、葉月のテンションが上がり始めた。

俺はかつて共に同じベッドで寝たことすらあるからわかる。コイ
ツがこうなつたときは基本的に碌な事にならない。

なんでこんな奴と付き合ってたんだ俺は……。

眼鏡の奥から覗くギラギラとした目のまま、紙に何か書き殴ってい
る。

「さあ、君たち、私が用意したこのメモの通り演じてみてくれ！」

「は、はい」

「うう……わかりました」

「ええ……」

渡されたメモを見た涼風達の顔色が変わる。

その様子から見て、ろくでもない内容なのは明らかだ。

「よし、では始めてくれたまえ！」

「で、でもお」

「気にならないのかい？ 敦君がどんな女性が好みなのか？ どん
な性癖の持ち主なのか!？」

「言われてみれば……」

「それは……ちよつとだけ
おいコラ待て。」

涼風、飯島。お前らなんで興味ありげなんだよ!?
知りたくねえだろ普通!

俺を無視して盛り上がるんじゃない。

「では早速始めてみたまえ」

「…はい」

「わ、わかりましたっ」

「うう……恥ずかしいなあ」

まずは涼風が前に出て、両手を前で重ね、体を揺らしながら上目遣いでこちらを見てくる。

「お帰りなさいませ、ご主人様あ。今日は何をして遊んでくれるんですかにや?」

語尾ににゃんをつけているせいいかいつもよりあざとさが際立つ。

涼風は恥ずかしいのか顔が真っ赤に染まっていた。

「……やっぱ恥ずかしいか?」

「は、恥ずかしいですよっ」

「そ、そうだろうな」

「でも……」

「?」

涼風は少しモジモジしたあと、恥ずかしそうな表情を浮かべたまま口を開いた。

「ご主人様に喜んでもらえるなら、頑張ります……にゃん」

「っ……………」

不覚にもドキツとしてしまった。

少し抜けているが真面目な彼女が普段見せないようなしおらしい態度に思わず言葉を失ってしまう。

「うん、いいじゃないか」

ダメだ。

少しでも反応したら葉月が調子づく気がする。ここは無視して次の展開を待つしかない。

そして涼風に案内されるがまま椅子に座らされる。目の前のテーブルには一枚の紙。

メイド喫茶でよく見るメニュー表みたいなものだった。……これ、どうやって用意してるんだよ。

「んで、何か注文したらいいのかわ？」

俺は至って冷静を装いながら葉月に聞く。

すると彼女は眼鏡をクイツと上げてニヤリと笑った。

なんかムカつく。

頼めと言うことか。

とは言ってもここは会社の中。出せるのは飲み物くらいだ。メニューも全てドリンクだし。

「そうだな……じゃあ」

適当に注文しようとするので飯島が声を上げた。

「さ……サツサと注文しなさいよ！私だって暇じゃないんだからね！」

「……？」

何故か怒られた。というかこの状況で注文しろと言われても何をどうすればいいのかわからないのだが？

とりあえず無難にコーヒーで良いか？　しかし飯島はそれを見透かすように再び口を開く。

「早くしなさいよ！　グズね！……まったく、せっかく私が可愛がってあげようと思ったのに、そんな地味な格好で来るなんてほんつとありえないわ！　もつと格好いい服着てきなさいよね！」

「え、あの」

「何？　文句でもあるの」

「いや、特に……」

……これはあれか。

ツンデレメイド的な感じなのか。

確かに妙に板についているというか、似合っていると言えればそれまでなのだが、如何せん口調のせいで可愛さが微塵もない。むしろ怖いまであるぞコレ。

「ほら、早く言いなさいよ！ それとも言えない理由があるわけ!?!」
「い、いや……」

「ふん、仕方ないわね。特別に私の方からオーダー聞いてあげるわ。感謝しなさい」

「は、はあ」

いつも関西弁混じりの敬語を使う飯島だが、今は標準語でまくしたてられている。

しかもツンデレの形式に倣って偉そうな態度だ。

「それで、何か頼みたいものはないの？ あるならさっさと教えなさい」

「あー、じゃあ、コーヒーを一杯」

「はあ!?! ふざけてるの!?!」

「は?」

「貴方ねえ、こんな可愛い女の子がわざわざ注文を聞いてあげようとしているのにコーヒーですって!?! もう少しマシンなものが出せないの!?!」

「えーっと……」

なんだこの理不尽さは。

というかお前が勝手にやってることだろうが。

俺が悪いみたいに言うんじゃねえか。

何か鬼気迫るものがある。まるで今までの鬱憤を晴らすかのような勢いだ。

「仕方ないわね、私が選んであげるわ。ありがたく思いなさい」
そう言つて飯島は俺の前に置かれたメニューを手に取った。

「そうね……せっかくだから一番高いものでもいいかも。紅茶、一つに千円近くかけるって考えただけでゾツとするけど、今日は特別に許してあげる」

「……」

「あら、黙っちゃった。もしかして怒ったかしら。でも私は悪くないわよ。あんたが素直に従わないからいけないでしょ」

「……」

「まあいいわ。ちよつと待ってなさい。今最高のものを頼むから」
そう言つて飯島は奥の方へと引つ込んでいった。

「……」

「どうだい？ 敦君。うちの子は」

葉月が楽しげに話しかけてくる。

なんだその言い方。

まるでこうなることをわかつていたような……。

メモに書いてあることを演じてたにしては度が過ぎている気がする。
る。

まさか、全部演技だったつてののか？

俺は葉月の目を見た。

すると彼女はまたニヤリと笑う。

その表情を見て確信した。

こいつ……わざとだな。

最初からわかつていてあんな要求をしたのだ。

俺は呆れてため息をついた。ドツと疲れた。

「ん？ どうかしたかい？」

「いや、なんでもない」

「ふむ……そうか。それよりもほら、飯島君が戻ってきたぞ？ 早

く受け取つてあげたまえよ」

「はいはい、わかりましたよ」

飯島が戻つてくると、トレーの上には二つのカップがあった。

そしてそれをテーブルの上に置くと、飯島は自分の席に戻らず、そのまま俺の隣に座った。

「な、なんで隣にくるんだよ」

「別にいいでしょ。というか、注文した以上は責任持つて飲みなさいよね。もし残したりするようであれば……わかるわよね？」

ギロリとした目で睨まれる。

おい、誰だよこれ。

本当にあの飯島ゆんなのか？ 全然イメージが違うぞ。

これが本当の彼女だとしたら、普段どれだけ猫を被ってるんだ。

「さあ、早く飲めばいいじゃない。それとも何、私が作った紅茶を飲むのが嫌だつて言うの」

「いや、そういうわけでは……」

「ならさっさと飲む！」

「はい」

「よろしい」

命令口調で言われるのにも慣れてきた。

一体俺は何をしているんだろう。

「美味しいな……」

出された紅茶を一口飲んで、思わず呟いた。

正直驚いた。

ただの市販の紅茶だが、香りがよくたつている。

よく休憩時間に紅茶を淹れていることはある。

「当然よ。誰が入れてると思ってるの」

「飯島」

「あんたね！　そこはさんくらいつけなさいよ！　失礼な男ね！」

「はいはい……」

もう俺は突っ込まないことにした。

いちいち相手していたらキリがない。それにしても不思議な感覚だ。

いつもと違う一面を見てしまったせいか、妙に緊張してしまう。

チラリと横目で見ると、彼女はこちらをじっと見つめていた。

目が合うと慌てて顔を背けるが、ちらりと見える頬は赤く染まっている。

やはり飯島も演じるのは恥ずかしいようだ。

「ご……ご主人様、私も構ってくれないと寂しい……にゃん」

今度は涼風が隣に座ってきた。

しかもメイド服のままだ。

先ほどと同じように語尾に「にゃ」をつけてくる。

顔は相変わらず真っ赤だ。

「お、おう。悪いな」

「ううん。気にしないで…にゃん。それより……えつと……その……頭撫でてほしい……にゃん」

「え?」

「駄目かにやあ……? ちよつとだけ、ちよつとだけでいいから……」

潤んだ瞳で見上げてくる。

これも演技だとわかっていてもその破壊力は抜群だった。

俺は少し迷ったが、ゆつくりと手を伸ばして彼女の頭を優しく撫でた。

サラリとした髪感触が気持ち良い。

すると彼女は目を細めて嬉しそうな表情を浮かべた。

涼風のこんな表情を見るのは初めてかもしれない。

……確かに可愛い。

「えへへ……嬉しい……にゃん」

「ちよつとーいつまでやってんのよー!」

「!?」

いきなり後ろ襟首を引っ張られた。

相手は聞くまでもない。

飯島である。

「な、何すんだ?」

「それはこっちのセリフよ! デレデレ鼻の下伸ばして! この変態!」

「なんでだよ……」

理不尽すぎる……。

ていうかお前、自分の仕事忘れてるんじゃないだろうな? そんなことを思っていると、また背後から袖を引かれる。

振り返ればまた涼風が不安げに見上げていた。

「どうした?」と訊ねる前に、彼女が口を開いた。

「ご主人様あ、よそ見してたらだめにゃん。私のこともちゃんと見るにゃん」

上目遣いで甘えた声を出す。

「……」

その仕草を見て、思わず固まってしまふ。

これは反則だろう。

「ねえ、何か言つて欲しいにやん。私じゃ不満なのかにやん？」

「いや、そういうわけでは……」

「ちよつと！ 私を無視するとはいい度胸じゃない！」

「あ……いや、そういうわけじゃなくて……」

「ふん、いいわ。私だって負けないんだから」

そう言うのと飯島は俺の腕に抱きついてきた。

控えめだが柔らかいものが腕に押し当てられる。

「お……おい」

「あら、照れてるの？ 意外と初心なのね」

挑発的な笑み。

まずいぞこれ。

どンドンエスカレートしている気がする。

「ゆんさんずるいにやん。私も混ぜて欲しいにやん」

さらに反対側からもぎゅつと抱きしめられてしまった。

もう逃げ場はない。

正面では葉月が必死に笑いを堪えている。

「くっ……」

「ふふっ。敦君、君は最高だ」

「うるせえ」

俺は精一杯強がつて見せた。

が、内心穏やかではない。

「さあ、次は何をして欲しいのかしら？ 私は何でもしてあげるわ

よ」

「私も頑張るにやん。何してほしいか教えて欲しいにやん」

両側から醸し出す甘い囁き。頭がぐらりとする。

理性が飛びそうだ。

何か無いか。気を紛らわすことができるものモノ。

俺は周囲を見渡す。

したり顔の葉月と何故かお盆を持って突っ立っているだけの篠田。後は涼風達が普段仕事しているブースの中と変わらない。

……ん？

俺はあることに気がついた。それは篠田だけ蚊帳の外にされていると言うことだ。

ただお盆を持ってその場にいるだけ。

ある意味不自然だ。

「なあ篠田、なんでお前は突っ立てるだけなんだ？」

もはや話題を切り替えることができるならなんでもよかった俺は、篠田と葉月に声をかけた。

「いや、なんか、葉月さんがお盆もって立ってるだけで良いって」

「なんだそりゃ？」

葉月の方に視線を向けると、得意げな顔で言った。

「篠田君は黙っているだけで可愛いし、せっかくの胸もあるんだからそれを活用すべきと思っただけさ」

「へ……？」

平然と言われた意味不明な言葉に疑念の顔をする篠田。

まあ無理もない。

だがまあ、葉月の言い分は的外れでは無い

確かに篠田はスタイルが良い。

身長は女性にしては高い165センチ程度。

モデル体型というほどではないが、スレンダーな体つきをしている。

出るところが出て引つ込むところが引つ込んでいる。

そしてその胸元にはたわわなものを携えていた。

当然話の流れ的に、その場にいる人間の視線がそこに集中した訳で……。

「……………ふっ」

その意味が分かった篠田は得意げな顔で目配せをしてくる。

飯島に。

「っー」

そして頬を摘ままれた。

「痛っ！」

「ふん！ どこ見てるかなんてバレてるんだからね！」
誤解だと言いたいが言える雰囲気ではなかった。

確かに一瞬だけ目に止まってしまったが、凝視したわけじゃ無い。
本当に一瞬だけだ。

だがようやく話題が逸れた。

ほんのわずかな綻びだが、この茶番を終わらすには十分すぎる。

「お前ら、そろそろ目を覚ませ。ここは会社だからな」
俺の言葉に二人はハツとした表情になる。

「っ!？」

同時に手を離すと、俺から離れる。

すると飯島が真っ先に口を開いた。

「す……すみませんっ！」

どうやら自分が暴走していたことに今気づいたらしい。

一方涼風はまだ状況が理解できていないようだった。

だが徐々に冷静になると、自分の行動を理解して顔を真っ赤にした。

そして勢いよく頭を下げる。

「ごめんなさいっ」

「いや、分かってくれたなら良い」

ようやく収まってくれた。

にしてはかなりの大惨事だが。

「~~~~~っ!!」

飯島に至っては今までの言動を思い出しかメイド服のまましがみこんでしまった。

その姿を見た涼風が慌てて駆け寄る。

なんとか落ち着かせようとしているようだ。

「いやあ、なかなか良い物が見れたよ」

「葉月、テメエなあ」

「いや、これは本心だよ。私もちよつとやりすぎたかなとは思っけ

どね」

反省の色が全く覗えない葉月は、優雅にレモンティーを飲んで
いる。

こいつマジでいつかぶん殴ってやる。

そう心に決めた時、葉月は次のターゲットに目を付けた。

「ん？ そのお嬢さんもこっちに来ないかい？」

それはずっと席に座って作業を進めていた滝本だった。

というか、マジでいたのかお前。

しゃべらないから全然気がつかなかった。それ以前によくこの状
況で作業できたな。

感心するのもつかの間、滝本はどうしたかというと……。

「……」

まるでゴミをみるような眼差しで葉月のことを見ていた。

いや、実際そうなのだろう。

こんなことに巻き込まれるなんてご免である。あと何故かその視
線の標的に俺も混ざっているのは気のせいだろうか。

そして興味が無いようにパソコンの方を向く。

「ふふ　ゾクゾクするねその視線」

コイツは本当にどうしようも無いヤツだ。

よくやるよ、俺は軽く凹んだというのに。

「いやしかしだよひふみ君」

だが、このバカはまだ食い下がったのである。

「私は思うんだ」

何を言い出すつもりだこの女は。

もうこれ以上面倒ごとは勘弁してくれと思う俺。

だがそんな願いは届かない。

葉月は楽し気にこう言ったのだ。

「もし自分の可愛い彼女が、可愛いメイド服を着て『ご主人様、ご奉
仕しますにゃん』と言えば、彼氏はすっごく喜ぶんじゃないかな〜っ
て」

コイツ……っ！

何を言い出すかと思えば、言うに事欠いて増田のことをダシに使い始めやがった！

自分の恋人の名前を引き合いに出されたのか、滝本の肩がピクツと揺れる。

それを好機と見た葉月は演説のように続けた。

「いや、絶対に喜ぶはずさ！ なんせ自分の彼女なんだからね！

愛している彼女の可愛い姿を見て喜ばない男などいないと断言できる！」

「……………」

「だがあの奥手な増田君の事だ！ きつと遠慮してそんなお願い言える訳が無い！ そう、だからこそ君は勇気を出して人肌脱いであげるんだ！」

「……………」

滝本からの返事は無い。

だが、聞いていることだけは分かる。

そして、それがどういう感情なのかも。

おそらくこの場にいる全員、そして俺ですら分かっている。

だが葉月の口撃は止まらなかった。

それどころかさらにヒートアップしていく。

「これは君にとつても悪い話じゃないだろう？ 君は大好きな彼氏を喜ばせることができるんだ。そしてちよつとだけ、ほんのちよつとだけ、何枚か写真を撮らせてくれればいい。Win—Winの関係じゃないか！」

なーにがWin—Winだ。

お前が写真撮りたいだけじゃねえか。

何をどうすれば滝本の尊厳は守られるって言うんだ。

「そして君に似合う特別な衣装がここに有る。これを着れば彼はすつごく喜んでくれるはずだ。だから安心して任せたまえ」

そう言つて、どこから紙袋を取り出し、震える滝本の後ろ姿にじみ寄っていく。

紙袋中には大量の布が入っているように見える。

「さあ、ひふみ君っ！ 君の勇気を見せてみたまえっ!!」

「……」

ガサゴソと中身を取り出す。

「えっ……ええ!？」

「うそっ……」

「……っ!!」

涼風達も息を飲む。

中に入っていたのはメイド服だった。

それもかなり露出の多いタイプの。

だがそれだけではない。

一番目を惹いたのは猫耳カチューシャだった。

しかもスカート丈はかなり短く、胸元も大胆に開いているため、谷間がくつきりと見えるだろう。

まさしく男が好きなものを詰め込んだような衣装だった。なぜこんなものがこの会社にあるのかは分からない。

だが、これで滝本がどんな反応をするのかは容易に想像がついた。

「さあひふみ君！ 今こそその一步を踏み出す時——」

「そおい!!!」

パァン!! 小気味いい音がブース内に響き渡る。

現れたのは、滝本の彼氏。

増田純、その本人だ。

手に握られているのはハリセン。

葉月の脳天に振り下ろされていた。

「葉月さん！ 貴女は最低です!! 僕の名前を使ってこの人に何をさせようとしているんですか!？」

増田が叫ぶ声は、葉月の耳には届かない。

なぜなら葉月は床の上に伸びて死体になっているから。

「……ふう、大丈夫ですか？ ひ……滝本さん」

安堵の息をこぼす増田は、周囲を見渡して愛しの滝本を守れたことを誇りに思っているようだ。だが肝心の滝本がこの場にいない。

「あれ？」

いつの間にか姿を消してしまっていた。
音も無く消えたから、この場にいる人間も周囲を見渡す。

「……純、君」

だが、しばらくして滝本は現れた。

それは増田にとって見慣れた顔で、いつも通りの彼女であった。
だが、ひとつだけ違うところがあった。

それは滝本の格好。先ほど葉月が取り出したメイド服。

それを身に纏った滝本が立っていたのだ。

短いスカートと露出した胸元を手で隠しながら、恥ずかしそうにしている。

だが、滝本は何か覚悟を決めた様子でゆっくりと動き出した。

「ご……ご主人……様……ご奉仕……します……にやん」

今にも消えてしまいそうな声でそう言った。

で、当の本人の感想はというと……。

「……………グハツ」

死体が2人に増えた。

年の瀬の過ごし方

純視点

年の瀬。

慌ただしい仕事納めや忘年会が落ち着いて、無事に年末年始の休暇に入った僕が、今どこにいるかと言うと……。

「噂には聞いていましたけど、凄い人の数ですね。ゲーム展の比じゃない」

「…コミケ…だからね」

僕はひふみとあるイベント会場に来ていた。

それも、コスプレをして。

「ありがとうございます。衣装まで用意してくれて」

「…ううん。私も…楽しみに…してたから」

僕の衣装は件の文豪をイケメンにした漫画の主人公。

だけどゲーム展の時とは違う。

ファー付きの襟が高い黒コート。

首には刺々しいチョーカー。

これは主人公のI Fの姿。

主人公とそのライバルが所属する組織がもしアベコベだったらと言う物語の姿だ。

「ひふみも、とても似合ってますよ」

「っ…ありがとうございます」

対するひふみの衣装はというと。

桜色の着物に白い羽織。

これもゲーム展の時と同じキャラクターの衣装。

そして僕と同じ、I Fルートを辿ることになった姿となっている。

やっぱりひふみは和服がとてもよく似合う。

ゲーム展のときといい、社員旅行の時といい、着物とは妙に縁がある。

でもそれは、それだけひふみが綺麗な人だと言うことの裏返しでもあるんだけど。

「じゃあ……行こうか……」

「はい！」

こうして僕達は歩き出す。

「今日一日よろしくお願いします」

「ごちそう……」

—— 年末だけあって、会場内は大盛況。

この寒空を吹き飛ばすほどの熱気に包まれている。

しかし流星はコミケ。

コスプレイヤーも多く見受けられる。

そんな中、僕らはどうしているかと言うと……

「きゃああああああっ!!」

たくさんのカメラを持った人たちに囲まれていた。

「凄い！ 本物みたい！」

「あの髪ウィッグじゃないの!?!」

「ヤバイ！ 超カッコいいんですけどーっ！」

………まあ予想通りと言えば予想通りの反応である。

それにしても、随分と反応がいい。

美人で似合っているひふみはまだしも、僕がこの格好をすると凄い

反響が出る。

それも、よく似てるとか、まるで本人みたいとか言われるのだ。

……嬉しいような、恥ずかしいような複雑な気分になる。

そして、隣にいるひふみはと言うと……。

「可愛いー!!」

「ごっち向いてー！」

「ちよつと背が高いけど……成長した姿と思えばこれはこれでっ!!」

と僕以上の人気ぶりを見せていた。

ひふみもノリノリでリクエストに答えている。

……あまりの迫力に気圧されそうになるけれど、この場所で撮影を初

めてから一時間は経っている。

その間休憩もしてない。

そして年末年始の寒空だ。

そろそろ止めないと。

僕は鞆からブランケットとカイロを取り出して声を出した。

「すみません、少しお休みしますっ！」

「ええ、もう終わり？」

「もつと撮らせてよお」

「すみませんっ、またお願いします。ひふみ、少し休みましょう」

「……うん」

僕らは近くのベンチに座って身体を休めることにした。

「大丈夫ですか？ 結構長かったですし」

「……私は平気。純君こそ……疲れたんじや……ないの？」

「いえ、僕はコートなので」

幸いにも、僕の衣装は長袖で厚手の服。

防寒着としては十分すぎる。

ひふみの着物も羽織が付いているし、初デート時にしたポートルートに比べれば寒くないだろう。

けれど、ひふみの唇の血色が悪くなっているのを僕は見逃さなかった。

「はい、毛布です。内側にカイロも入れれば暖かいです」

僕は持ってきたブランケットを広げてひふみにかける。

内側にカイロも入れて。

これならかなり暖かくなるだろう。

前の反省を活かして予め準備して正解だった。

衣装とか全てひふみが用意してくれた。だから、こういう時から僕がしつかりしないと。

「……ありがと。凄く……暖かい」

そう言っって微笑むひふみ。

その笑顔を見て、僕まで嬉しくなってしまう。

「……でも、純君も……冷えてる……でしょ？ だから……」

するとひふみはブランケットを広げて僕に近づいてくる。

そしてそのまま僕の肩に頭を乗せた。

「ちよっ、ひふみ!？」

「こうすれば……二人とも……温かい……よう？」

「それは、まあ……確かに」

身を寄せあい、一枚のブランケットを二人で使う。

お互いの顔が近い。

そして、触れ合いそうなほどに。

お互いの体温がじんわりと伝わってくる。

心までもが温かくなっていくようだった。……だけど、そんな幸せ

は長く続かないもので。

パシヤツ！ カシヤツカシヤア!!

突然聞こえてきたシヤツター音。

そして周りがざわつき始める。

何かと思つて正面を見てみると、そこにはカメラを構えた多くの人たち

中にはスマホで動画撮影している人もいる始末。

「やばっー」

「……………」

「す、すぐ離れましょう！」

「……ダメ」

「へ？」

「もう少し、このままが……いい」

「えっと……」

ひふみはさらに頭を預けるようにして密着する。

恥ずかしい。

凄く恥ずかしい。

けれど、こんなところで騒ぐわけにはいかない。

それにひふみが嫌がつてないし、僕だって……。

結局、僕達はしばらく動けず、周りの視線に耐えながら時間を過ごすことになった。



——コスプレ広場を後にした僕らは、いつもの私服に着替え後、帰路に着くことにした。

ひふみはというと、ずっとご機嫌のまま。
どうやら楽しんでくれたようだ。

僕自身も今日は楽しかった。
最初は周囲の視線やカメラの音が気になったけど、ひふみの顔を見ると、ひふみしか見えないし聞こえない。
不思議な感覚だった。

「じゃあ、帰りましょうか」

「…今日は、ありがと」

「いえ、こちらこそ。それではよいお年を」

「ん、来年もよろしくお願いします」

お互いに挨拶をして別れようとするのだけど、ひふみの様子が変だ。

「……」

どこか落ち着きがない。

何かあるのだろうかと怪訝な顔をしてしまうが、ひふみはゆっくりと口を開き、僕の名前を呼ぶ。

「…純君」

「はい？」

「その……純君は、お正月、どうするの？……実家に……帰る？」

「え？ はい、特に……自宅にいるつもりですけど」

何故そんなことを？ とは思ったものの、特に気にせず答えることに。

すると、ひふみは何だかもしもじとしていて言うべきかどうか迷っている様子。

何だろう、この感じ。

「えっと……ね、もし……良かったら、来ない？」

「え？ どこにですか？」

「……うち」

「はい？」

今なんて言った？ うちに……来る？ え、どういうことですか、ひふみさん。

「……だから、クリスマス…の時…：…みたいに、一緒に…：…過ぎさないかなって」

「……クリスマスの時と同じような誘い方だった。

まるで同じセリフを言うように仕向けられたような気がした。ただど断る理由なんてない。

僕の家に来てほしい気持ちもあるけれど、宗次郎君を家に置きっぱなしにはできない。だから、僕は迷わず答えた。

「はい、喜んで」

「……良かった」

ホツとした表情を見せるひふみ。

本当に嬉しいんだなと思う。

「でも、どうして急に？」

「……クリスマスの時は、出来合いばかり…：…だったでしょ？　だから、おせちとか…：…作ってあげたい…：…なって」

「それって…」

思わず息を飲んでしまう。

ひふみの手料理。

それが食べられるかもしれないのだ。

そう思うと胸が高鳴る。

「それで、どうかな？」

不安げな顔で聞いてくるひふみ。

僕はすぐに返事をした。

「はい、是非とも食べたいです！」

「うん、分かった。頑張って作るから、楽しみにしてて」

「僕も手伝います」

そうして僕らはその足で買い物に出かけることになった。

材料はもちろん、ひふみが持ちきれない分を運ぶために。

こんなに心が踊る年の瀬はいつ以来だろう。

きつと小学生の時ぐらいじゃないかと思ったりしながら、僕達は並んで歩くのであった。



——そして大晦日。

時計の針はもうすぐ12時を迎えようとしていた。僕はひふみの家にいた。クリスマスの時と同じ部屋。テレビでは大晦日の特番がいよいよ大詰めのところ。炬燵に入ってひふみを待つてる。

当然、宗次郎君にも挨拶をすませた。

クリスマスの時以来、少しずつ仲良くなれて嬉しい。

「純君」

ひふみの声が聞こえると同時に玄関ドアの方を見る。

両手に持っているお盆にはどんぶりが2つ。1つは僕の分かな？
と思いつつ近づいてきた彼女の手にあるものを受け取る。

そしてテーブルの上に置く。

年越しそばだ。蕎麦の上には海老天やカマボコなんかが乗っていて、どれも彩り豊かで見ていただけで涎が口の中に溢れてくる。

「おそばは、お店の…だけど…出汁とか…天ぷらとかは、手作り…
だよ」

「凄い……ですね」

「おせちも…お雑煮も…楽しみに待っててね」

笑顔で言うのと、彼女は自分の席につく。

僕も対面するように座った。

二人で手を合わせていただきますと言うと早速箸を伸ばす。

まずは蕎麦を一口。ズズと音を立てて食べると、口いっぱい広がる香りと味。ああ、美味しい！

続いて海老天を口に運ぶ。衣のサクツとした食感と共にプリツプリの海老の身が出てくる。これもまた堪らないほどに美味しかった。

「すごく美味しいです」

「…ありがとう」

それだけ言って微笑むひふみ。

僕もそれに釣られて笑みを浮かべてしまう。

それからは他愛もない会話をしながら食事をしていた。

テレビの話題が中心。
今年は色々あった。

まさかひふみと恋人になって、こうして一緒に過ごすことになると思わなかった。

今にして考えると、去年までの生活と比べると信じられない出来事だ。

「……純君は、今年一年……どうだった？」

「そうですね……今年は色々ありましたけど、やっぱり……ひふみと出逢えたことが一番大きかったかもしれません」

「私も……同じ。……純君に出逢えて良かった」

「あはは、それは僕も同じですよ」

「じゃ、来年も……よろしくお願いします」

「こちらこそ」

そんなやり取りをして、僕達は笑い合った。

そして……時計の針は進む。やがて、12時になった。

僕たちはお互い、見合うようにして頭を下げる。

「明けましておめでとうございます」

「おめでとう……ございます」

二人揃って新年の挨拶を交わすと、お互いに顔を見合わせてクスッと笑うのであった。

柚貴の正月

柚貴視点

正月。

俺は機嫌が悪かった。

理由？

知るか。

そんなの別にいいだろ。

俺がイライラすることに理由なんて必要か？

「あのバカ」

三ヶ日が開けた朝、俺は単衣のままベッドに寝転がっている。

大学はまだ冬休み。あと数日は講義はやってない。

アパートの部屋は静寂に包まれていて、それがより苛立ちを加速させる。

3日ほどこの調子だ。

せつかく俺が渡したあれを使わず、何てんるんだか。

「ゆずっちー!」

……やっど。

……やっど……やっどうるさいやつが来た。

声は窓から聞こえた。窓を開けると、すぐ下で桜がいた。

そして、

「あーそびーましょー!!」

などとほざいている。

「……」

ピシヤリと窓を閉めた。

「ちよ!? ゆずっち!? なんで閉めるのよ! 開けてよおおお!!」

窓の外から騒がしい声が聞こえる。

が無視だ。

クリスマスの日以来、予定があるとか言いやがってしばらくうちに来なかったと思えばこれだ。つたく。あいつには本当に振り回されるな。

やがて声が止んだ。

しばらくすると今度はドタドタと、声とは違った騒がしい音が聞こえてきた。玄関の前で止まる音もして、ガチャリと鍵が開く音がした。

「……おじやましまあす」

らしくもなく遠慮がちにそう言って入ってきた。

そのまま部屋に入り、ベッドで横になっている俺の方を見て目を丸くする。

「えっ？」

「なんだその反応」

「いやだって、いつもなら怒るじゃない」

「……知るか」

俺は寝返りをうって背中を向けた。

確かに機嫌は悪い。だが、俺はいつもキレたりはしないんだ。

「……で、今日はなんで来た？」

「それがね、あおつちと遊ぼうって思ってたんだけど、今日から仕事だって」

「……それで俺んところに来たのか」

つまり俺は代わりってことか。

やっぱりなんかムカついてきた。

「……ゆずっち、やっぱり怒ってる？」

桜はベッドの横まで来て、申し訳なきそうな声で言う。

それも無視だ。

「だって、しょうがないでしょ？ 大晦日はずっと前からあおつち達と約束してたんだってさ」

「……」

「もう、そんなに拗ねなくてもいいじゃん」

「……拗ねてない」

嘘だけだ。

ああイラつく。

別に桜が悪いわけじゃないし、あいつらにも用事があるだろうし、

仕方ないことなのはわかっている。けど、どうしようもない感情が胸の中に渦巻いて、止まらない。

「……じゃあさー」

桜は言った。

「来年は2人で行くよ。高尾山」

「……」

「ほら、私もまた行きたいしよ。そこで一緒に初日の出見ようよ」

「……」

「ね？」

俺は無言で起き上がる。そしてベツトから降りた。

「……ゆずっち？」

ハンガーにかけられた革ジャンを手に取ると、そのまま羽織る。

そして玄関まで歩きます。

「……飯」

「え？」

「飯、食いに行くぞ」

「………うん！」

振り返らずに出て行く。後ろからは喜色の声が伝わって来た。

まったく、世話のかかるやつだ。

でも、不思議と嫌な気分ではなかった。

そのまま、後ろから聞こえる足音を感じながら適当にファミレスに入る。

個人経営の店はまだほとんど営業してないからだ。

注文を終えて、料理を待つ間、向かい合って座った桜が言う。

「そういえば、ゆずっち。名波さんどうだったの？」

桜はクリスマススの時に横槍を指してしまった名波の名前を出した。

「ああそれか」

今思い返してもゾツとする。

あの仏教面で部屋に長時間居座られたのだ。

説教も小言もないただ無言で。

正直、あの日は生きた心地がしなかった。

「大丈夫だよ。謝ったんだから」

「うみこはどうだった？」

「……」

桜の顔色が青くなった。

何されたんだコイツ。

「……何があつた？」

「……えつとね、……そのね……電話で呼び出されて……それから……ああつ……ああつ……！！」

「もういい何も言うな」

聞かない方が良さそうだ。

俺が察したことを悟ったのか、桜は青い顔のまま話を変えた。

「あ、そういうえねつ。初日の出見に行った時に友達の友達と会ったんだ」

「……それは、幼なじみじゃないのか？」

いつも話しているあおつちという奴ではないらしい。

コイツの交友関係は謎が多い。

幼なじみとやらもそのうちの1人なんだろうか？ 桜は首を横に振る。

「高校の時に美術部で知り合ったんだ」

「お前、美術部だったのか。あの絵で」

「もー！ それは言わないでよー！！」

前にコイツの絵はゲーム製作の時に見たが落書きみたいなものだった。

美術部に入って何してたんだコイツは。

「それでさ、その子、すつごく絵がうまくてね。フランスに留学してたんだ」

外国か。

想像もつかない世界だ。

そんなことを考えていると、店員が料理を持ってきた。

「その子ね、しばらくフランスにいたから日本語忘れてたんだ」

桜は話を続けながら、料理を頼張る。

俺は料理を口に運びつつ、会話を続ける。「フランス流の挨拶も凄かったよ」

「へえ」

どんなものか気になった。

「ハグしながらキスするの」

「……」

「すっごくびっくりしちゃってさー」「……」

「もう、恥ずかしくて」

「……」

「ゆずっち?」

「……」

「ゆずっち、聞いてる?」

「……帰る」

「ちよっと!?!」

俺は席を立てて出口に向かう。

後ろから桜が追いかけてくる。

「待ってよゆずっち! まだデザート来てないんだけど!?!」

「うるさい!」

大晦日も正月も普通に働いていた人だ。面構えが違
う

青葉視点

「もう朝からなんだか疲れちゃったよ〜」

年末年始のお休みが終わり、仕事はじめての朝のこと。

ねねっちは呑気に遊びに誘おうと騒いでたけど、こっちはもう仕事
なのに。

ああ、学生はいいなあ。

「なーにだらけてんだよ。休みボケか〜?」

「あー、あけましておめでとうございます」

オフィスに入った途端、書類を持った八神さんと鉢合う。もう仕事
モードになってるこの人を見ると、私も気持ちを切り替えない
とって思う。

気持ちを切り替えないと……っ!

「あけおめ。もう、そんな顔、敦さんに見せないですよ。今にピリピ
リしてるから」

「え?」

急に敦さんの名前が出てきてドキツとする。

ここで敦さんの名前が出るとは思ってなかったからだ。

この前の幹事のこともあるし、顔を合わせずらい。今思い返しても
顔が熱くなる。なんであんなことしちやんだんだろう。

……そして、敦さんは何をしているかというと。

「あ……あれは?」

「大晦日も正月も普通に働いていた人だ。面構えが違う」

そこには、死んだ魚のような目で作業をしている敦がいた。

敦さん……!!

確か、もうすぐマスターアップの作品があると言っていた。

敦さんのその瞳に生気がないように見えるのは私の気のせいです
よね!??

ねえ、そうだと行ってください!!?

だって、敦さんの顔色が悪いように見えなくもないんだもん！
ただでさえ、キャラデザのことで助けてもらっているのに……。

「……またメイド服来てご奉仕したら元気出してくれますかね？」

「むしろ逆効果じゃない？」

でも、今の私はそれくらいしかできない気がするんです……。

だから、やるだけやってみようかなと思ったり思わなかったり
……。

「それより、昼前にプロトタイプ版に向けての会議するから青葉も
資料用意しといて」

「は、はいー」

そうやって八神さんは自分の席に戻っていった。それでようやく
意識がはつきりとした。

そうだ。そんなことよりもやるべきことがある。

社員旅行の前に言ってた佐藤さんの言葉を思い出す。

それが正しいなら、私は少しでも頑張らないと行けないんだ。

敦さんとの約束を果たすためには、まず私が早く一人前になるこ
と。

そして、敦さんに認めてもらう。それがやっと見つけた私のやるべ
きことなんだ。

「……よし！ 私も気合いを入れなきゃ！」

●
そしてやってきたお昼休み。

自分の席に戻ってきた私はようやく一息つく。今日はお弁当を買
おうと思っていたんだけど、ひふみ先輩が用意してくれたおせちを
皆で食べることになり、他のメンバーの人達と過ごしていたのだ。

それにしても、コンペに受かってから会議に出るのは始めてじゃな
いけれど、やっぱりたくさんの人の前で話をするのはまだ慣れない。
りんさんはいつもそれやっているとと思うと改めて感心してしまう。
そして、その彼女は今どうしているかと言うと……

「もう聞いて佐藤君。コウちゃんったらひふみちゃん肉じゃが勝

手に食べてしかも私より美味しいって言うの。こっちがいつも好みの味付けにしているっていうのに酷いと思わない?」

「そうだな」

新年早々、いつもの調子で八神さんの愚痴を佐藤さんに話していた。それはさっきのひふみ先輩が作った料理の話。

ひふみ先輩の料理を八神さんがつまみ食いした。

こういう時、八神さんの無神経さには頭を痛める。

主に佐藤さんが。

なぜなら、こうしてりんさんが愚痴を話す口実なってしまうから。そして、巡り巡って私が八つ当たりされることに……。

「このお正月だって初詣に行きたかったのに、混むから嫌だの一点張りだし、本当で困っちゃうわ」

「…そうか」

……でも、そんな状況も少しずつ変化がある。

社員旅行以来、りんさんが話す表情と佐藤さんの聞く表情に微妙な差がある。

りんさんの声が少し浮ついているような。

どこか緊張しているような。

佐藤さんの表情が少しだけ柔らかいような。

どこか安心して見えるような。

ほんの小さな違いかもしれない。でも、確かに二人の間に何かが生まれている。

そんな予感がした。

「それでね、コウちゃんが——コウちゃん——コウちゃんを——
コウちゃんは——」

「……」

……なんだろう。

あんまり変わってない気がする。

私はまた別の方向を見る。

そこはブースの入り口。ひふみ先輩が席に戻ってくる最中だった。それも、彼氏さんをつれて。

「あ、滝本さん。お弁当、ありがとうございます。とても美味しかったです」

「…うん。よかった」

この2人もある意味ではいつも通り。でも、社内で付き合っていることを隠さないようになった。多分、これが一番大きな変化だと思う。

まあ、もうほとんどバレバレなんだけど。

2人が会社の中で話しているところを見かけるようになったし、一緒にいる時間が増えたように思える。

特にひふみ先輩は、メッセ以外で話す機会が多くなった。社員旅行の時に話してくれた時のこと以来、目に見えて積極的だ。

今日だって、私達におせち作って持ってきてくれたし……。

ひふみ先輩も佐藤さんも、上手くいってくれると良いな。私は密かに願っていた。

それからしばらくして、お昼休み終了のチャイムが鳴る。

「……そろそろ仕事に戻りましょうか」

「うん……またね」

「はい」

そう言って、2人はそれぞれの席に戻っていった。

それを見ていると、私は不意に敦さんのことを思い出してしまった。

……敦さん、どうしてるかなって。

今日までずっと休まず働いている。私も何度か助けてもらってばかりで足を引っ張ってばかり。

でも、約束したんだもん。

今度は私が頑張らないといけないんだ。

「よし、私もやることやらないとー」

気持ちを切り替えるように、私は声を出して自分に言い聞かせた。そして、午後の仕事が始まる。

——それからしばらく、少し外の空気を吸いたくなった私は屋上に出る。

屋上には、敦さんがいた。

「敦さん」

「お、涼風か」

彼の手にあるタバコが冬の風にさらされていた。

敦さんの顔色は、午前中と比べて良くなっていた。

私はそのことにほっとする。

良かった、元気になってくれたんだ。

「あけましておめでとうございます」

「おう、おめでと。今年もよろしくな」

「はいー」

私は笑顔で答える。

そして、隣に立つ。

私は敦さんと話したかった。

初日の出のこと。ねねっちとほたるんのこと。

これはキャラ班の皆さんよりもこの人に聞いて欲しかった。

「へえ、桜の他にもそんな子がいるのか」

「はい。すごく絵が上手いんです」

「俺も見てみたいな。その子の絵」

「きつとびつくりしますよ」

「そりゃ楽しみだな」

他愛も無い会話。

数日ぶりに会う敦さんとの会話はそれだけでも十分すぎるほど楽しかった。

「あの、敦さん」

でも、私は話を切り出す。

私には今、一番聞きたいことがあったから。

「ん？」

それはこの屋上で約束したこと。

まだ果たせたかなんて言えないけれど、どうしても知りたかった。

「敦さんは、今の仕事、楽しいですか？」

「……」

一瞬、敦さんの目が見開く。

その意味は、答えを聞かなくてもわかった。

「俺は……」

「いいですー!」

言い終わる前に声を出した。

「言わなくて大丈夫です。……わかってますから」

そう、最初から全部知っていた。

今の私じゃなにも足りない。なにも届いてない。

それだけ知れただけで十分だったから。

だから、私も言うことにした。

「……すみません。こんなこと言って」

「……」

「でも、ありがとうございます。……それを聞いて安心しました」

「えっ……」

「私、今年ももつと頑張ります!」

「あつ、おい!……行っちゃった」

それ以上、何も言えなかった。

これ以上ここにいたら、私の決心が揺らいでしまう。

それに、自分のことで精一杯なのに、彼にまで迷惑をかけたくなかった。

今はただ、前に進むことしかできない。

それが例え茨の道だったとしても。

課された試練

純視点

「あれ……葉月さんどこだろ？ さつきひふみと歩いてるところ見たんだけどな」

プロトタイプ版の提出期限が明日に迫る中、仕事に一段落がついた僕は彼女に話があったのだけど、どこに行つたのだろうか。

会議室が並ぶ通路を歩いていると、2人の人影を見つけた。

片方は印象が薄いけれど、もう片方には覚えがある。

僕は人影がある場所へ足を進めた。

そこには…。

「お、ひふみんの彼氏じゃん。どうしたの？」

「あ……」

通路にいたのはひふみと八神さん。

今作のADを勤めている人だ。話す機会はほとんど無いけれど、有名人だしひふみの上司、よく話にも上がる人だから顔と名前にも覚えがあった。

「ひふみ？ 大丈夫？ 顔悪いけど」

それよりも気になったところがある。

ひふみの顔色が目に見えて悪い。明らかに青くなっていて、手も震えている。

年末の冬コミなんか比にならないくらい動揺しているようだった。

「えっと……ね、キャラ班…の、ことで、相談……してて」

それは社員旅行の時に話していたことだ。

キャラ班のリーダーになるという話。

そうか、まだまとまっていなかったんだ。あの時は僕のことばかり気にしてくれたから気にはなっていたのだけど、形になってくれたのは嬉しい。

「それで……やっぱり不安になっちゃって」

「ああ……」

「ひふみんは心配性だなあもう。大丈夫だって」

八神さんはこう言っているけれど、確かに不安だろう。

僕も同じ立場ならきつと同じ気持ちになっただけははずだ。

でも、リーダーになることで自信を持てる部分もあると思う。

今まで通りでいいということではないかもしれないけど、何かしら変わることはあるはずなんだ。

だから、そんな顔しないでほしい。

「きつと大丈夫ですよ。僕も応援します。それに」

「…それに？」

「ひふみがリーダーになつてくれたら、一緒に働ける機会も増えるだろうし」

僕にとつて一番嬉しいことはそれだ。

僕も一応、サウンドには僕しかいないから事実上のリーダーを担うことになっている。

だから会議にも当然出るし、リーダー同士で話し合う場面もある。

それはつまり、ひふみと一緒に仕事ができるということだ。

僕は基本的にサウンドルームで引きこもっているから、あまり社員と関わることは少ない。

当然、会議には顔を出すけれど、仕様書や世界観の共有をするくらい。正直言つて寂しいのだ。

たまにはみんなと話したいという願望はある。

そして、その中にひふみがいるなら、それ以上望むものはない。

「……うんっ。頑張るー」

少し間があつて、いつも見せてくれる笑顔に戻った。

よかった。これでこそひふみだ。

「ひゅーひゅー！ お熱いねえ！」

八神さんが茶化してくる。

「ていうか、名前で呼んでるんだ」

「あっ」

しまった。つい癖が出てしまった。

他の人の前では名字呼びにしていたのに、つい出てしまった。

特に隠すような事でもないのだけれど、なんとなく恥ずかしい。

「っ……」

ひふみを見ると顔を赤く染めていた。まずい。こっちまで恥ずかしくなってきた。顔が熱くなる。僕のせいだ。

なにか話題を逸らさないと……そうだ！

僕は葉月さんを探してたんだ。

2人なら知っているかもしれない。

「そ、そういえば、葉月さん見ませんでした？ 探してるんですけど」

「あ……葉月さん……プログラムの……ブースに、いると……思う。さつき、連れてかれてた……から」

ひふみが答えてくれた。

葉月さんはうみこさんによく連れ回されている。先輩と同様、思いつきの仕様変更の被害者なのだろう。

でも行幸だ。

話題も逸れたし、当初の目的も果たせる。

「あ、それと八神さん。遠山さんも呼んで欲しいんですけどいいですか？」

「え？ りんに？ なんで？」

「葉月さんと一緒に相談したいことがあって」

プロデューサーの遠山さんの名前も出した。

これは去年の面談の話。本当は大和さんとも話しておきたいけれど、まずはこの2人に相談したいことがある。

八神さんはすぐに察してくれたようで、快く了承してくれる。

「いいよー。じゃあちよつと連絡しておくね。先に葉月さんのところ行ってて」

そしてどこかへ電話をしに行った。

多分、遠山さん呼び出しているのだろう。

「……じゃあ、僕はもう行きますね」

「……うん、バイバイ」

僕は別れの挨拶をしてそれぞれ向かうべきところへ向かった。

「……」

通路を1人歩く。

その中でふと、さっきの会話が反芻していた。

そうか、ひふみも頑張ってる。

彼女なら大丈夫だ。

そう断言できる。だって、ひふみの勇気と優しさに僕は救われた。

だから、僕もそれに答えたい。

そして、プログラム班のブースの近くで、特徴的なウエーブがかつ

た灰色の髪的女性を見つけた。

彼女の名は葉月しずく。僕が今日探していた人だ。

「葉月さん」

「ん？ なんだい？」

「つてその額どうしました？」

彼女の頭は包帯でぐるぐる巻きだった。

一体何があったのか。

いや、なんとなく予想がつく。

この人はまた、無茶をしたのだろう。

そして、それを諫めるためにうみこさんがやったに違いない。

きっとそうだ。

でなければこんなに念入りにするわけがない。

「ああ、これね。ちよっとうみこくんにね。でもだいじょーぶだよ。

可愛い女の子のデコピンならご褒美さ」

葉月さんは笑みを浮かべながら言う。

本当かな？

まあ本人がそういうなら大丈夫だろうけど……。

「それで、私に用があるんだろう？」

「はい。実は前の面談のことで相談があつて、詳しいことは遠山さ

んと話したいんですけど、先に話しておきます」

「へえ？」

僕は改めて葉月さんの眼鏡越しにある茶色い瞳を見つめる。

図らずも綺麗な目だと思ってしまう。

僕にはないものを持っている。
羨ましい限りだ。

そんな彼女が僕の目を真っ直ぐに見据えている。
自然と背筋に力が入った。

だけど逃げない。寧ろ決意が固まった。

「葉月さん。今回の新作、ラスボスやエンディングの曲のイメージは決まっていますか？」

「いや…まだだねえ。キャラも決まっていなしし
やっぱりそうか。」

「なら、提案があります」

でも尚更好都合だ。それならなんとでもなるはずだ。

新作の世界観はおとぎ話とぬいぐるみイメージしたファンタジー。

フェアリーズストーリー3の時とは違うジャンルではあるけれど、
世界観のズレはない。

それに、例えどんな世界観だろうと表現が可能な楽器を僕は知っている。

それは、かつて僕の半身だったモノ。

「ピアノの、生演奏を使いたいです」

●

「なるほど、それで改めて話したかったのね」

ここは待合室の一角。

僕は葉月さんと遠山さんと向かい合うように座っている。

去年と同じ面談だけど、前のような負抜けたモノじゃない。

僕の空気を察してか、2人も真剣な顔をしてきている。

「すみません。忙しいのに」

「いいの。気にしないで。それにしても、増田君がピアノ弾けるなんて驚いたわ。全然知らなかったもの」

遠山さんは意外そうな表情で言う。

無理もない。

僕自身がそれをひたむきに隠していたからだ。

それを知っている人はここにはほとんどいない。バレれてもし迷惑をかけるようなことがあれば、僕はこの会社を辞めなければならぬかもしれないと思っていたからだ。

つい最近までは、でもようやく覚悟が定まった。今はもう、辞める気などさらさらない。

だからこうして打ち明けることができた。

ずっと隠していたのは本当に申し訳なかった。

遠山さんとはもかく、ひふみにも黙っていたのは少し心苦しかった。

「確かに、いいかも。イメージにぴったりだし」

遠山さんも納得してくれたようだ。

だが、話はまだ終わっていない。これからが本題だ。なぜなら――

「増田君」

葉月さんの言葉が、この場の空気を凍てつかせる。

「君は、ピアノが弾けないのだろうか？」

彼女は、僕が一番恐れていた言葉をあっさりと言い放った。

「……はい」

「えっ!?!」

「どういうことですか？」

驚く遠山さんと、鋭い視線を向ける葉月さん。やはり気付かれていた。

「君のことは、敦君とはなちゃんから聞いている。7年前から、君はピアノが弾けなくなっている。そうだろうか？」

「……………」

沈黙は肯定の意だと受け取ってくれたらしい。

「で、でもならなんでピアノの生演奏だなんて」

だけど、遠山さんは動揺しているのかそんなことを口にする。

葉月さんは彼女を制止すると、続きを話すよう促す。

そして僕は口を開いた。

何故なら、これが一番重要なことだからだ。

「去年、一度だけ、弾けたことがあるんです。一度鍵盤を叩いただけですけど」

僕は僕の身体の事情と共に、話始めた。

ジストニアのこと。

ピアノを弾こうとすると身体が硬直すること。

そして、一度だけ鍵盤を叩けたこと。

今思い返せば奇跡のような出来事だったと思う。

理由はきつと……。

「増田君」

考えがまとまる前に、葉月さんはまた僕の名前を呼んだ。

「君の意見はわかった。でも、君のその状態では作品に組み込むわけにはいかない。生演奏ならばレコーディングにもスケジュールを見直す必要がある。君もそれをわかっていて、こんな開発初期の段階で話を持ちかけてきたのだろうか？」

彼女の言葉は至極真つ当な意見だった。

僕の状態が万全ではない以上、葉月さんの判断は正しい。

でも、それではダメなんだ。

僕はもう二度と間違えない。

僕はもう逃げない。

でないと、ひふみに何一つ報いてあげることができないから。

「だから、猶予を与えよう」

「えっ？」

「プロトタイプ版の評価が決まってから2週間後。それまでに開発チーム全員を納得させる演奏ができたなら、君の意見を採用しよう。それでいいかい？」

「ちよつと葉月さん！」

遠山さんは抗議の声を上げるが、葉月さんはそれを手で制した。

「わかりました。お願いします」

それだけ聞ければ十分だ。

あとは、力を示すだけだ。



りん視点

「葉月さん、さっきのは」

増田君が席を立ててから数十秒ほどが経過した後のこと、私は隣にいる葉月さんに声をかけた。

ソレはもちろん、増田君のこと。

いくらなんでも無茶苦茶だ。

2週間だなんて短すぎる。

私は彼の事情をさっきまで知らなかった。

ならば尚更、もっと時間をかけるべきだ。開発にはまだ時間はある。そこまで焦る必要なんか無い。

もしそれで上手くいかなければ、増田君は立ち直れないかも知れないのだ。

「遠山君、イップスというのを知っているかい？」

「え？ あ、はい。聞いたことはあります」

スポーツ選手などが経験する精神的な障害の一種。

精神に異常をきたしてしまうほどの極度の緊張やストレス。

それが原因となって起こる症状。

ボールを投げたり、トスを上げたボールを打てなくなったりと、普段なら当たり前に行える動作ができなくなるという病気。

「彼はそれと同じだ」

「ならっ」

「一流のスポーツ選手すら、一度イップスになると引退に追い込まれるという。もし治ったとしても、今度はまたそうなってしまうたらという恐怖が、次のイップスを引き起こす」

葉月さんは淡々と話す。

「言うなれば、心のガンだ」

でも、それはあまりにも残酷な事実。

増田君は、どれだけの苦しみを抱えているのだろうか。

私達よりも、ずっと。

「だからこそ、半端な猶予で治るものじゃない。そして、より強い確固たる意思が必要だ。増田君もそれは分かっている。できると、弾け

るという確信があつたからまず私に話しに来たんだ」

確かにそうだ。

彼ならきつと弾けるかもしれない。

弾けてみせると、そう思つて行動しているに違いない。

だけど――

それにしても2週間は短すぎる。

レコーディングのスケジュールだつて、まだ融通は充分に利くというのに。

……ここで、葉月さんと増田君との確執が脳裏によぎつた。

「……葉月さん、もしかして、増田君にひふみちゃんを取られたから腹いせにこんな無茶な要求したんじゃないですか？」

「……」

「……」

「……………ちよつとだけ」

「やっぱりー！」

かみ合わない音色

純視点

「大和です。皆さん、プロトタイプ版の製作、お疲れ様でした」
葉月さんとの話し合いから数日が経過した今日。

開発チームの面々が会議室に集まっている。その中心には葉月さんと遠山さん。そして、この出資会社からやってきたプロデューサーの大和さんがいる。

今日は新作のプロトタイプ版が、出資元である芳文堂の評価が報告される日。

これが通らなければ、出資元からの資金が断たれ、今回の開発は中止となる。

当然、僕の提案すら無かったことになるだろう。

その結果は……。

「弊社で製品を評価した結果ですが、とても高評価でした。この調子で気を引き締めて、まずはα版まで頑張りましょう！」

その言葉に、緊張で支配されていた会議室の空気が一気に緩む。

各々が和気藹々と喜びを分かち合う中、僕の心中は穏やかでは無かった。

当然だ。ここからが本番なのだ。

今から2週間後、この場にいる人間全てを納得させる演奏をするにと。

それが今の僕に与えられた試練なのだから。

僕は今一度気持ちを引き締めると、サウンドルームへと戻った。

自分一人しかない空間。そこで僕はまたあるモノと対峙する。

「……」

それは前にここで働いていた人の置き土産である電子ピアノ。

古い型だが、性能も良く、音にもこだわった一品だと聞いている。だが、今の僕にはその片鱗すら引き出すことはできていない。

面談の直後から今日まで、一度も弾けていない。

弾こうとしても、やはり身体が硬直してしまう。

覚悟はしていた。そんな簡単にいくはずもないことくらい。だが、期限は刻一刻と迫っている。

「……よしっ」

このままではいけない。

僕は意を決してピアノの前に座ると、鍵盤の上に指を乗せる。

……が、しかし、そこから先の一步を踏み出すことができない。まるで身体中に鎖が付いているかのように、全く動かないのだ。

「くそッ!!」

思わず声を上げてしまう。

苛立ちを覚えつつも、ゆっくりと立ち上がると、大きく息を吐いた。正直、焦りもある。

こんなことで本当にやれるのか? という不安もある。

でもそれ以上に、何よりも怖いのが。

——また裏切るつもりか?

——やめておけ、貴様には無理だ。

ああ、最近は何も聞こえなかったのにな。

耳に入るのは父の声。

頭の中で響く幻聴だった。

あの時の記憶がフラッシュバックしてきて、どうしても手が震えてしまう。

ダメなのか?

僕なんかじゃ、何もできないまま終わってしまうのか?

自問自答を繰り返しているうちに、時間だけが過ぎていく。

結局この日は、1曲も弾けないまま終わった。

翌日。

昨日の鬱憤を払うために、早速ピアノを弾いてみることにした。

僕は椅子の高さを調整して座り直すと、深呼吸をして鍵盤の上に置いた。

だが……

「ぐっ……!」

指を置いた瞬間、またしても全身が固まるような感覚に陥る。

一度も弾けることはなかった。

それでも諦めることなく、何度も挑戦し続ける。

ピアノに向かい合ってから数時間が過ぎようとしているけれど、状況は一向に好転しない。

それどころか、悪くなる一方だ。

何故だ。どうして弾けないんだ。

期限は刻一刻と迫っているというのに！

焦燥感ばかりが募っていく。

同時に僕の耳を支配していた鈍いのが、段々と大きくなっていく。

——もうやめろ。お前には何も出来ない。

うるさい、黙れ!!

僕はそう叫びたい衝動を抑えながら、更にピアノに向かって手を伸ばす。

だが、僕の指が音を奏でることはなかった。

「純君？」

不意に後ろから声を掛けられる。

振り返ってみると、そこには不思議そうな顔をしているひふみの姿があった。

思わぬ来訪に、心臓の鼓動が速くなるのを感じる。

彼女もきつと心配して来てくれたのだろう。

だが、今は顔を合わせたくない。

情けない自分の姿を見せたくはなかった。

「今日のお弁当…どうだったかな」

ひふみの言葉を聞いてハツとする。

しまった。今朝、ひふみからお弁当を貰ったことを忘れていた。

時計を見るともう昼休みの終わりがすぐそこまで差し掛かっているのではないか。

「ごめんなさい。ちょっと食欲なくて」

咄嗟に出た言葉がこれである。我ながら最低だと思う。

「え……大丈夫？ちゃんとご飯食べないとだめだよ」

彼女は僕の嘘を見抜いた上で、心配してくれているようだ。

「うん、ありがとうございます。午後からは頑張ります」

「頑張ってるね……応援してるから」

僕の言葉を聞いた後、微笑んでみせると、小走りでその場を去って行った。

その背中を見送った後に視線を落とすと、彼女の手握られていたであろうお弁当箱が見える。

そして、先程言われた言葉を反すうする。

『頑張ってる』か……。

果たして今の自分に出来るのだろうか。

一人になったサウンドルームに、昼休みの終わりを知らせる鐘の音が聞こえる。

「ん？」

そこでふと、さっき目にした時計に目が行く。

ちよつと時間がズレてる。

一目盛りだけ、時計の長針が早かったのだ。

この会社に来てからずっと買い換えていないから仕方がないか。

僕はまたピアノと向かい合う。

でもどういうわけか、今度はその時計が気になって集中できなかつた。

時計の針は進む。

たとえズレていたとしても。

僕らの気持ち置き去りにして。

…何か、あつたのかな？

サウンドルームからの帰り道を歩きながら、私はさつきの純君のことで頭がいっぱいだつた。

私は純君の様子がおかしいことに気が付いていた。

最近は見ることがなかった怖い顔。

それに似ている気がした。

純君に昔何があつたかを、私は知っている。

だから、私が彼の力になることが出来るかもしれないと思ったけど

… 私には無理なのかな？

違和感はそれだけじゃない。

さつきの純君を思い出す。

彼はピアノを向き合っていた。椅子も、いつと仕事で使つてる椅子じゃなかった。

それはつまり、純君がピアノを弾こうとしていた証拠だ。

でもなんで急に？

思い当たる節が、記憶の中に確かにあつた。

…純君、私が面談を終えた後、後葉月さんを探していた。

その時に何かあつたとしか思えない。

きつとあの時だ。

そこで何か言われたのかな？

もし純君が何かに向けて頑張ろうとしているのなら、私はそれを全力で応援したいと思う。

でも、胸のうちにあるわだかまりが邪魔をする。

——頑張つてね。

私は彼にそう言った。

でも、私が言うべき言葉は他にあつたんじやないかな？

私の心は晴れない。

そんなことを考えながら、私は自分の席まで戻ってきてしまった。

「あ、ひふみ先輩」

キャラ班のブースには、もう青葉ちゃん達が席についていて、私の帰りを待っていたみたいだつた。

みんなが一斉にこつちを向いてくる。
なんだか少し居心地が悪い。

私はすぐに自分のPCの前に座った。

本当は純君のお弁当箱を片付けてからにしようと思ってたんだけど……まあいいや。

私はキーボードに手を置く。

その時、青葉ちゃんの声が聞こえてきた。

「ひふみ先輩、何かありました？」

「えっ」

突然の言葉に思わず声が出る。

「それ、ひふみ先輩のお弁当箱やないですよね？」

私の反応にゆんちゃんまで話に乗ってきた。

どうやら二人は、私がいっつもより元気がないと感じているらしい。普段通りのつもりだったんだけど。

皆に話す言葉を選んでいるうちに、はじめちゃんも加わってきた。

「彼氏と喧嘩しちゃったとかですか？」

「ちよ、はじめ！ 変な事聞くなや！」

はじめちゃんの言葉に思わず言葉を失ってしまった。

これは喧嘩……なのかな？

今まで純君と恋人として付き合ってきて、避けられるようなことはあつた。

でもそれは純君が自分の過去を知られたくなくて、必死になっていたので今回の出来事は明らかに違う。

私を避けているように感じる。

それは私にとって初めての経験で、正直どうすれば良いのか分からない。

「いや、本当にそうなんですか!？」

「ち……違うよ……?？」

否定したけど、あまり説得力はないと思う。

それでも三人はそれ以上聞いて来ることはなかった。

そのまま黙々と作業に取り掛かる。

純君は今頃何をしてるんだろう。

また、あの苦しそうな顔しているのかな？

そんなことを考えながら、画面を操作してモデリングを進める。

青葉ちゃん達も会話をやめてそれぞれの作業を始めていた。

ブースの空気が重い。

このままじゃダメなのは分かっているけど、私は純君のことが気になって集中できない。

結局その日の作業は中々捗らなかった。

「あ……雨」

仕事を終えて、会社を出ようとした私は空を見上げて呟いた。

昼間はあるなりに綺麗な青空が広がっていたのに。

まるで今の私達みたいだと思った。

……大丈夫。

私は自分に言い聞かせるように、小さく呟いた。

純君が過去に何があっても、私は彼の隣にいるって決めたから。

だから私は信じよう。

彼が私を必要としてくれる日が来ることを。

……そうだ。明日はお休みだし、純君をどこかに誘おうかな？

気分転換にもなるだろうし、それに今日のことも相談してくれるかも知れない。

少しだけ勇気を出してみようかな？ きっと、この気持ちは純君に

も届くはずだから。

そう思い立って、スマホを取り出して純君へメッセージを送った。

『純君、今日もお仕事、お疲れ様（#・・#）明日はお休みだね。

もし良かったら一緒に遊びに行こ？』

送信ボタンを押すと、少しドキドキする。

すると返信はすぐに来た。

そこにはたった一言。

——ごめんなさい。忙しいのでまた今度。

その短い文章を見て、胸の奥がズキリと痛むのを感じた。

やっぱり迷惑だったのかな……。
でも、仕方ないよね。

純君だって頑張ってるんだもん。寂しく感じてしまう自分を宥めるようにして思う。

次に会った時にはもつとゆつくり話をしようっと。

「……雨、やまないなあ」

一人、傘をさしながら家に帰ってきた私は、ベッドに横になりながら独り言のように呟いていた。

不意に、寝室に飾ってあるスノードームが目に入る。

社員旅行の時、純君がくれたプレゼント。

中にいるサンタに扮した女の子が雪玉を投げ合っている様子が可愛らしい。

でも、今の私にはとても悲しげに見えた。

あの時、純君の力になると誓ったのに。何も出来なかった自分が情けなく思える。

どうしてこんなことになってしまったんだろう？ 私はまだ、彼に幸せになって欲しいだけなのに。

「……駄目だなあ。私……」

弱音を吐いている場合じゃない。

私はゆつくりと起き上がる。

そして、棚に置いてあった携帯を手を取った。

純君にメールを送る。

——おやすみ。

それだけ打ち込んで、すぐに送信ボタンを押した。
それから私は部屋の電気を消して布団の中に潜り込む。

また会うときには笑顔を見せられるように、今は休もうと決めて目を閉じた。

まどろみの中、ふとある考えが脳裏に浮かぶ。

……最近、聞けてないな、純君の曲。

新しい曲、作ってないのかな？

また、聞きたいな……。

● そうすれば、きっとこのモヤモヤも晴れる気がした。

「……」

休日が開けても、私の心は曇ったままだった。

寧ろ悪くなっているように感じる。

ずっと純君のことを考えていた。

昨夜送ったメッセージへの返事もない。

ただ、避けられているような態度だけが残っていた。

何か嫌われるようなことをしてしまっただろうか？

考えてみるけど分からない。

なんで相談したくれないの？

私は頼りにならない？

不安ばかりが募っていく。

そんなことを考えているうちに時間は過ぎていく。

「あ……」

私はいつも通りに出社すると、純君と鉢合わせになった。

「お…おはよ、純君」

「……おはようございます」

純君は相変わらず辛そうにしている。

明らかに疲弊しているように見えてしまった。

……どうしよう。聞くべきなのかな？

でも、聞いたところで私には解決出来ないかもしれないし、逆に余

計に悪化させてしまうかも…… 悩んでいる内に純君はそそくさと

自分の席へと向かってしまう。

私はそれを黙って見送るしかなかった。

その後、仕事中は何事もなく時間が過ぎる。

謂われもない不安と焦燥感だけが、胸の中で渦巻く。……純君に会

いたい。

会って話したいことがあるのに。

私はこの日も仕事に集中することが出来なかった。

お昼休憩の時間。

青葉ちゃん達はそれぞれお弁当を持ってどこかへ行ってしまった。きつと、私に気を使ってくれたのだろう。

キラ班のリーダーになったばかりなのに情けないと思う。それでも、今の私にとってはありがたかった。

…純君はどうしてるかな？

まだ、なにかしてるのかな？ ぼんやりと彼の姿を思い浮かべる。……会いたい。

私は無意識に席を立っていた。

そのまま足早に部屋を出て、階段を降りてフロアを出る。行き先は決まっていた。

——サウンドルームだ。

ドアの前に立つと、息を整えてからノックをする。

「はい」

返ってきた声は純君の声だった。

「あ、あのー！ 純君……？」

「っ!? ……ひふみ？ ど、どうかしましたか？」

「えっと……その、少し話がしたくて……いいかな……？」

私は恐る恐る問いかけると、扉の向こうから椅子を引く音が聞こえてきた。

「……分かりました。ちよつと待っていてください」

しばらくするとガチャリという音と共にドアが開かれる。

そこにはいつも通りの格好をした純君がいた。

でも、その表情は明らかに疲れが見える。

大丈夫……なのかな？ 私が心配そうな顔をしていることに気づ

いたのか、純君が困ったように笑っていた。

「……それで、何か用ですか？」

「あ……」

いざ本人を前にすると言葉が出てこなくなる。……何を言えば良いんだろう？ そもそも私が勝手に来ただけなんだもんね。迷惑だったんじゃないのかなって思う。

「その……ちよつと、話をしたいなと思って……」

結局、口から出てきたのは当たり障りのない内容だけだった。

「……すみません。今、少し手が離せなくて」

純君は申し訳なさそうな顔をする。やっぱり迷惑だったんだ……。私は慌てて手を振る。

「ごめんね。急にきて、こんなこと言って……」

「いえ。こちらこそすみませんでした」

純君はそれだけ言うのと逃げるようにして部屋に戻ってしまった。取り残された私は呆然と立ち尽くす。

「っ……」

また、何も出来なかった。

「はぁ……」

溜息しか出てこない。

純君の力になりたいのに。

それすらもさせてくれない自分が嫌になる。

いつそのまま消えてしまいたいときえ思ってしまう。

居たたまれなくなってきた私は逃げる様にその場を去った。

早く戻ろう。青葉ちゃん達が待ってる。

覚束ない足取りで来た道を引き返す。

足に力が入らない。

胸からドロリとした感情が溢れてくるようだった。

…ダメ、純君がすぐそこにいるのに。

もし今、この感情が溢れたらきつと迷惑をかける。

ただでさえ苦しそうなのに、これ以上追い打ちをかけたくない。

……我慢しないと。今は仕事を頑張らないと。

そうすればいつか認めてくれるはずなもの。そうしたらまた昔みたいに笑い合えるはずなのだから。

……信じていいんだよね？

心のガン

純視点

葉月さんから言い渡された期限まで、もう3日を切っていた。なのに一曲どころか弾くことすら叶っていない。もう時間が無い。

自身の無力さを怒る気持ちと、焦燥感で胸がいつぱいになる。普段の仕事も全然身が入らない。

どうすればいいのか、何が正しいのかすらわからない。ただひたすらに自分の不甲斐なさを呪う。

ひふみにすら心配をかけさせて、何も出来ない自分に対するどうしようもない苛立ちを覚える。

…この前の休みの日に誘われたのも断ってしまったことも、罪悪感を底上げした。

…：それに、最近ひふみとちゃんと話せていないな。

「純君、大丈夫？」

会議を終え、またピアノを弾くためにサウンドルームに戻ろうとした僕を、ひふみが引き留めた。

「あ…：ひふみ」

彼女は手に持っていたペットボトルの水を差し出してくる。

「どうやら僕は相当酷い顔をしているらしい。」

それを察してくれたのだろう。

僕は小さく礼を言うと、それを受け取った。

キャップを開け、水を口に含む。

ひんやりとした水が喉を通り抜けていき、上っている血流を落ち着かせてくれる。

「ありがとう、少し落ち着きました」

「よかった…：」

心底安心した表情を浮かべる彼女を見て、罪悪感に襲われる。

彼女がここまで心配してくれているというのに、僕は一体何をやっ

ているんだろう。

彼女の想いに応えることはおろか、彼女に迷惑をかけてばかりで情けない。自分に腹が立つ。

「ごめんなさい。もう、平気ですから……」

「嘘……」

「え……」

「旅行の時と…同じ顔、してるもん」

そう言っつて、僕の手を握ってくるひふみの手は温かくて。

そして、微かに震えていた。

まるで怯えているかのように……。

それが酷く痛々しくて、思わず目を逸らす。

きつと、彼女もまた無理をしているのだ。

そんなことにさえ気が付けない程余裕が無くなっていた自分が、本当に嫌になった。

「ねえ、何かあつたなら話してほしい。私でよければ、聞くから……」

「……」

ひふみは僕の過去をもう知っている。

ピアノのこと。

ジストニアのこと。

父の声のこと。

そして、音楽を失った理由も。

だからだろうか。僕のことをよく理解してくれているのは。

きつと彼女ならば、相談に乗ってくれるかもしれないと思った。

……いや、ダメだ。

今ひふみに頼るわけにはいかない。

それは自分で解決するべき問題だ。

もうずっと彼女に甘えてばかりだ。

僕は何も出来てない。

彼女と一緒にになってから、色んな事を頼ってばかりでいる。それに、ひふみも自分の仕事で忙しいはずだ。

これ以上負担をかけることはできない。

「なんでもありません。ちよつと疲れてるだけですよ」

僕は精一杯の笑顔を作り、その場を後にしようとする。

だが、ひふみはそれを許さないと言わんばかりに、強く手を握られる。

振り向いた先には、悲しそうな目を向ける彼女が居た。

どうしてあなたがそんな顔するんですか。

なんとも言えない気持ちになって、ついその視線から逃れるように目を伏せてしまう。

違う、こんなことが言いたいんじゃない。

ただ単に迷惑をかけたくなかっただけで。

「お願い……頼って欲しい」

「っ！」

「私は頼りないかもだけど……それでも……」

「そんなことは……無いです……」

「じゃあ、なんで……」

「それは……」

言えない。言えるはずがない。

ひふみのためだなんて言えない。

だって、それを口にして、もし上手くいかなかったら……。

もし期待させて裏切ってしまったら……。

あの時みたいに、また失望させてしまったら。

嫌だ。それだけは絶対に。

——そうだ。貴様はまだ裏切るのか？

——貴様は死ぬまで出来損ないだ。

——出て行け。ここは貴様が生きて良い場所では無い。

また、捨てられるのか？

そんなの、耐えられない。

僕は、裏切りたくない。

彼女の勇気と優しさを。

嫌われたく、ない。

だって、こんなにも好きなのだから。

「……すみません」

絞り出した言葉は謝罪の言葉だった。

僕が言うべきなのは、こんな言葉では無いはずなのに。

でも、今の僕が口にできるのはこれしかない。

「……やめてよ」

「え……？」

「そんな顔、するくらいなら……苦しいなら……言ってくれればいいのに……！何があつたかわからないけど……辛いことがあるなら……言つてよ……!!」

彼女の瞳からは大粒の涙が零れ落ちていく。

その雫が床に落ちると、染みを作るように広がっていった。

「なんで……泣いてるんですか……？」

僕は何もできなかった。

ただ呆然と立ち尽くすしかなかった。

しかし、彼女は止まらない。

「私……音楽のこと……全然分らない。でも……だから少しでも、純君の力になりたいって思ってた」

彼女は嗚咽交じりにそう言った。

「でも……あなたは優しい人だから。私のこと……いつも……気を遣ってくれてるのは分かった」

「……」

「私、そんなに頼りにならないかなあ……」

「そ、そんなこと……」

「あるもん……」

「……」

「あんな顔されたら……心配になるよ……」

何も言い返せない。

まさか彼女がそこまで思い詰めていたとは思わなかった。

彼女は、自分より他人を優先するような人間だ。

きつと、今回も僕のことを心配して、こうやって声をかけてくれた

のだ。

それなのに、僕は彼女を泣かせている。最低だ。本当に、最悪だ。

「なのにな……ヒドいよ」

僕はひふみを傷付けた。

彼女の想いを踏み躪った。

それがどんな意味を持つか、わかっているはずなのに。僕の心の中で渦巻く感情は次第に大きくなっていく。

それは、怒りなのか。憎しみなのか。それとも悲しみなのか。自分でもわからなかった。

ただわかることは一つだけ。

ひふみを悲しませたという事実だけだ。

「っ……」

彼女は踵を返し、走り出した。

そして通路の奥へ消えていく足音が聞こえる。

追いかけるべきだろうか。いや、きつと無駄だ。追いついたところで、何を言えればいいのかわからない。

それに、追えばきつとまた彼女を傷つけてしまうだろう。

どうすれば良かったんだろう。

どうしたら正解だったんだろうか。僕はただ、その場に佇むことしか出来なかった。

「……」

耳鳴りがする。頭が痛くなるほどガンガンと響く。

まるで警鐘のように。何かを忘れているかのように。

——お前は死ぬまで出来損ないだ。

うるさい。黙ってる。僕に話しかけるな。

——お前は何も生み出せない。何も生み出せない者に生きる価値など無い。

もう沢山だ。聞きたくない。思い出したくもない。忘れたままでいたかったのに。

どうして思い出させるんだ。

ああ、頭が割れるように痛い。

「…何をしているんだ僕は」

その場から逃げるようにサウンドルームに戻ってきた僕は、こぼすように呟いた。

扉を開けると、中は薄暗く誰もいないかのように静まりかえっていた。

その一角、僕は電子ピアノを見据えた。

こんなモノさえいなければ、僕は――

「……っ!!」

僕は拳を握りしめ、力任せに振り下ろした。

だが、腕は止まってしまう。

鍵盤に拳が触れるその寸前、僕の身体は硬直した。震えが止まらない。動けない。息が荒くなり視界が霞んでいく。

僕は怖くなったのだ。自分が何者なのか。どうしてここにいるのか。何もかもわからなくなった。

こんな時に思うのはあの時のことだ。

自分の無力さを噛み締めたあの瞬間のことを。

あれ以来、僕は変わってしまった。

周りの大人達は言った。僕には才能があると。僕が求めれば求めるだけ与えてくれる環境を用意してくれた。

今思い返せば、全て狂っていたのかもしれない。

周囲も自分も。たのは音楽の才能だけで、僕自身を見てはいなかったのだから。

僕が欲しかったのはそんなものじゃない。

誰かの笑顔を見たかったのに。

誰かの希望になりたかったのに。

僕が生み出したものは一体何だったのだろう。

「なんで……なんでだよ……」
情けない。

自分のことが嫌になる。

どうしてこうも僕は駄目なんだ。

「……なんで動いてくれないんだ」

僕はそのまま、崩れるように床に座り込んだ。

何がしたいんだ僕は？

何が欲しいんだ僕は？

大切な人を泣かせて、裏切ってまで。

これにすがって得たモノがどれだけ空虚だったか、僕は知っていたはずなのに。

好きだから

佐藤視点

「……ねえ、聞いた純君とひふみちゃん。喧嘩したかもって」

「ああ、言われてみれば確かにそうですね」

入社してすぐに、オフィスの中を隣で歩いていた花男さんはそんなことを言い出した。

確かに、昨日だって目元を赤くしながらオフィスに戻ってきていた。状況から考えれば、泣いていたと考えるのが妥当だろう。

涼風を筆頭としたキャラ班の面々に変わったところは見られなかった。

だとすると、それ以外の人間と何かあったのか。

滝本が涼風以外と親密になっている人間を俺は一人しか知らない。

「増田と何かあったんですかね？」

「確かに、ありそうね。まあ、付き合っていると喧嘩の1つや2つ当たり前と言えばそうだけど」

根拠は他にもある。

増田は最近の増田はかなりやつれていた。具体的には、プロトタイプ版の合否が出た辺りだったからか。

何か関係がある可能性が高い。

「佐藤君ー」

突然、慌てた声で飛び出してきたのは遠山だった。

それもかなりの動揺ぶり。

何度か彼女が思い詰めていたところは見たことあるが、今回は一線を画していた。

ただ事じゃ無い。

「りん、どうかしたのか？」

「ひふみちゃんと増田君、何かあったの？」

プロデューサーになってから、彼女は外回りが多くなっている。

昨日も一日中社内にはいなかった。だから、今朝の滝本を見て事態を初めて認知したのだろう。

しかし、それでこの慌てようは一体？

「確かに、なんか様子が変だったな。最近は二人で入社してたのに」
「……ごめんなさい。それ、私のせいなの」

どうやら、俺と花男さんの話を聞いていたらしい。

彼女は申し訳なさそうな表情を浮かべながら言った。

その言葉の意味がよく理解できない。

滝本と増田の間に何かがあったのは間違いない。

でもそれは遠山のせいでは無いはずだ。

少なくとも彼女は悪くないだろう。

とにかく、詳しく話を聞く必要がある。

「話してくれるか？」

遠山は事のあらましを話してくれた。

どうも、葉月さんが増田にかなり無茶な要求を吹っかけたらしい。

だからあんなに疲弊していたのか。

しかも期限まで1週間を切っている。あの様子じゃ、上手くいった
ないに決まっている。

「私がちゃんと葉月さんを止めていればこんなことにならなかった
のに」

「落ち着け。お前は悪くない」

「でも……もし間に合わなかったら、増田君が辞めちゃうかも……っ
！」

確かにそれはあり得る話ではあるが、彼女の顔色はまた悪くなる。

なにか悪い予感を感じ取ったかのようだ。

遠山は少し呼吸を整えた後、また口を開いた。

「佐藤君も……いつか辞めちゃうの？」

「なんで俺が辞めるんだよ……」

「だって、想いが実らなかつたら会社辞めるって言ってたから……も
しそっだったら……私……っ」

泣き出しそうになる彼女を見ると、こっちまで息が詰まる。

「……俺はまだ、決めてない」

畜生、俺が言わなきゃいけない言葉はこれじゃないのに、上手く口

に出来ない。

俺は確かに言った。その通りだ。だがそれを今引き合いに出されるとは思っていなかった。

それに今動揺している彼女を追い詰めたくない。

遠山を安心させる言葉くらい、俺だつて思いつく。

——お前がいる限り、辞めるわけ無いだろ。

ただ一言。だが、俺に、そんなこと言える勇氣なんて無かった。

「お前がいる限り、辞めるわけ無いだろ——っ痛い！ 佐藤君苦し
いわ!!」

「ぬう……っ!!」

脇で余計なことを言い出した花男さんの首を絞める。

くそ、なんで今そんなこと言うんだ。

こういう時だろうとお構いなく好き勝手言いやがって。

「えっ？ な…なに？」

遠山が驚いた様子でこちらを見ている。

俺は慌てて、彼女の方に向き直る。

どうやら聞きそびれてくれたようだ。

「なんでもねえよ。とにかく、今は辞める気ねえから。ほらいいか
ら仕事に戻れ」

「あ……うん。わかったわ。じゃあね」

遠山がブースの奥へ消えていくのを見届けてから、俺は腕の中にい
るクソ野郎に対する始末を始めることにした。

「ああ！ 痛い！ 本気でしょ!? 本気でしょそれ!!!」

「思い知れ…マジ死ね」

「マジ!? マジなの佐藤君!!」

●
りん視点

後ろで佐藤君と花男さんが取っ組み合っている声を聞きながら私
は自分の席に戻る。

花男さん、さつきなんて言ってたんだろう。

良く聞き取れなかったな。

そんな事を考えながら、慌てて荷物を揃えて、オフィスを出口と席を立った。

そこで私は見てしまった。

「あ……」

「っ……」

オフィスの通路で、ひふみちゃんと増田君が鉢合わせてしまっているところを。

気がついた瞬間、お互いの顔が青ざめてしまう。

ひふみちゃんも増田君もすごく辛そうだった。

ひふみちゃんに至っては、今にも倒れてしまいそうなほど真っ白になっている。

そして二人とも、目を合わせずにそのまますれ違ってしまった。

ひふみちゃんも増田君も、お互いに何も言わなかった。

どうしよう……私のせいだ。

私がつと葉月さんを強く止めていれば……。

咄嗟に身を隠してしまった私は後悔の念に苛まれていた。

増田君はひふみちゃんのことをずっと見ていたみたいだし、きつと何かあったと思う。

ひふみちゃんのあるような表情初めて見たし、増田君のあの疲れ様は尋常じゃないもの。

二人がギクシャクしてしまう理由があるとしたら、やっぱりピアノの事だ。

期限まで1週間を切っている。なのにまだ上手くいっていないとなると、増田君に相当な負担を掛けているのは間違い無いだろう。

彼は真面目な性格だから、背負い込み過ぎているのだろう。

だから、もしかしたらかなり無理をしているかもしれない。

私、とんでもないことに関わってしまった。

ひふみちゃんには佐藤君のことで何度も助けてくれたのに、私には何も出来ない。

佐藤君の好きな人のことで気まぎれなくなったときも、私達の間を取り

持ってくれた。

社員旅行で佐藤君と起きたことで悩んでいたときも、食事に誘って話を聞いてくれた。

元々話すのは苦手なはずなのに、一生懸命になっけてくれたのが伝わってきた。

彼女があそこまで変わったのは、間違いなく彼の存在が関係している。

なら、私も彼に助けてもらったようなものだ。だから今度は私に出来ることをしてあげたい。

今度は、私から動かないと――。

「ひふみちゃん、ちよつといいかしら？」

午前の仕事を終えた私は早速ひふみちゃんを捕まえることにした。今は昼休みの時間帯だし、多分彼女なら自分の席にいるはず。

最近の彼女は青葉ちゃん達と行動することが多かった。でもあの状態なら一人でいたいと考えるはずだ。

ブースの中に入ると案の定、ひふみちゃんはすぐに見つかった。いつもの席に座ってお弁当を広げている。

ひふみちゃんのお弁当箱はかなり小さい。

でも箸が進んでいないには一目瞭然だった。

やっぱり食欲も無いみたいね……。

「りん……ちゃん」

ひふみちゃんは私の方を見て呟いた後、再び俯いてしまった。

彼女の顔色は真っ青で今にも倒れそうに見える。

不安で寝れていないのだろうか。

心配になるけれど、まずは話を聞かないと始まらないわよね……。

私は覚悟を決めて、彼女に話しかける。

「ひふみちゃん、ちよつと外の空気吸いに行かない？」

「……なんで？」

「だって、社員旅行の時、相談に乗ってくれたでしょ？ だから今度

は私に話して欲しいなって思ってる……」

「……………」

私の言葉に返事は無い。
うう……気まずいわね。

こういうのには自信があるつもりだったんだけど、最近はずいぶん上手くないときが多い。

とりあえず、彼女を外に連れ出さないと。

「じゃあ行くっか？」

「……うん」

私は嫌がるひふみちゃんの手を引いて、ブースを出る。幸いにも、知り合いとすれ違うことも見られることもなかった。

私はエレベーターホールまで歩いて、丁度来たところに乗り込む。その間も会話は無かった。

二人だけの空間に、機械が動く音だけが響き渡る。

エレベーターはそのまま、上に上がっていく。

やがて、私達は屋上に出た。

外は寒い風が吹いているけど、今の私たちにとってはちようどいいぐらいだ。

日射しがあるから充分温かい。

「気持ちいいね」

「そうだね……」

空を見上げながら呟く。

ひふみちゃんも同意するように答えてくれた。

でもその声は少し元気が無い。

絶対、増田君のことと関係してる。言わないと、でないと取り返しのつかないことになっちゃう。

「あのね、ひふみちゃ——」

「私ね」

私が切り出そうとした時、先に彼女が口を開いた。

それは小さくて消え入りそうな声で、風にかき消されてしまいそうだった。

それでも耳を澄ましていれば聞き取ることができる。

私は黙って続きを待つことにした。

彼女は視線を下に向けたまま続ける。

「私ね…知ってたんだ。純君の、昔のこと」

ひふみちゃんは知ってたんだ。

増田君がピアノを弾けなくなってしまうたってこと。

「ピアノ…弾けなくなつて、色んな人に…たくさんヒドいこと言われて…：傷ついたの」

彼女の口から語られる言葉の一つひとつが、胸に突き刺さってくるようだった。

辛かっただろう。苦しかっただろう。悲しかっただろう。

それは想像を絶することだと思う。

昔のコウちゃんを思い出す。彼も同じだ。

身に余る期待に押しつぶされて、心を閉ざしてしまった過去があった。

その時のことを思い出して、胸が痛くなる。

そして同時に思うのだ。

なんて無力なんだろうと。

「…私にそれを話してくれたとき、少しでも純君のキズを癒やせたらなつて思ってた」

…でも、と彼女は続ける。

俯いていた顔から何か光るモノがこぼれ落ちた。

彼女は泣いていた。

嗚咽混じりの声で彼女は言う。

「結局…何も出来なかつたっ」

「ひふみちゃん…：そんなこと」

「違うのー」

私の言葉を遮るように彼女は叫ぶ。

そして彼女の瞳からは更に涙が溢れ出ていた。

こんなひふみちゃんを見るのは初めてだった。

いつも冷静で大人しい彼女が取り乱す姿を見たことがない。

それほどまでに、彼女にとって今回のことはショックが大きかったということか。

私はかける言葉を見つけないことが出来ず黙り込んでしまう。すると、彼女は泣きながらも必死に語りかけてきた。

「純君は、私も裏切っちゃうんだって思ってる！ 私もっ、昔純君を傷つけた人と同じだって思ってるっ!!」

彼女の心からの叫びに、私は耳を傾けることしか出来ない。

「ヤダよ…そんなの…っ」

ひふみちゃんはその場に崩れ落ちてしまう。

私は駆け寄って、彼女の身体を支えた。

小刻みに震えている彼女を見ると、抱きしめずにはいられなかった。

「ひふみちゃん……」

「私、そんなのヤダ！ 純君を傷つけた人達と同じになんてなりたくない!! だって……私はっ……」

ひふみちゃんは一度大きく息を吸った後、絞り出すように言った。

「私は、純君のことが好きだから……。だから傷つけた人たちとは違うもん!!」

弱々しく、涙を流しながら、彼女は今まで溜め込んでいたものを吐き出していく。

まるで子供のわがままみたいだけど、そこには確かにひふみちゃんの心が現れていた。

でも、増田君の気持ちもわからなくない。

理由は同じなんだ。

好きだから、嫌われたくない。

好きだから、裏切られたくない。

私もコウちゃんに嫌われたりしたらと、想像だっと思ったくないんだ。

でも、好きな人の為ならどんなことでも出来る。

たとえ嫌われても、蔑まれても構わない。

ただ、自分が想う相手と一緒に居たいだけなのだ。

その想いは、私にもわかる気がする。

ひふみちゃんの言葉を聞いて、改めて思った。

そうか、これが恋なんだなあ、と。
きつと私がコウちゃんに対して抱くこの気持ちも、同じものなのかな？

……あれ？

なんでだろ。

なんで今、私――

――佐藤君の顔が浮かんだの？

「つーことらしいぞ。サツサと謝りやがれ！」

「えっ……ちよっ！　せんぱっ……んがあっ!!」

「!?!」

突然聞こえてきた声の方を振り向くと、いつの間にか屋上の扉が開

いていた。

そこに立っていたのは、腕組みをして仁王立ちしている宮本さんの姿だった。

その足下には増田君がいる。そして何故か地面に突っ伏している。どうやら今の会話を聞かれてしまったようだ。

「あ、ひふみつ……これは違って……っ」

「いいからさつきと謝れって言っただろうが。テメエがウジウジしてると俺まで恥ずかしくなるんだよ」

「……ぐめんなさい」

「俺に謝ってどうするんだバカ！」

相変わらずの口の悪さだが、その言葉の端々に優しさを感じる。

宮本さんは増田君の背中をポンツと叩くと、こちらに向かって歩いてきた。

「さつきの話、全部聞かせてもらったぜ」

「……はい」

「……そっか」

私の返事を聞くと、彼は不敵に笑ってみせる。

そして増田君の元に歩み寄ると、彼の頭をぐしゃぐしゃと乱暴に撫でた。

「お前も男なら覚悟決めろよ」

「……でも」

「でもじゃねえ。つべこべ言わず行け！」

「……はいっ」

「よし、んじや邪魔者は退散するかね」

満足したのか、宮本さんは背を向けて歩き出した。

去り際に、彼は振り返らずに言う。

「ま、頑張れや」

そして、そのまま階段を降りていく音が聞こえてくる。

……なんというか、嵐のような人だった。

でも、おかげで少しスッキリしたような気がする。

「……ありがとうございます」

私は彼の後ろ姿に感謝の気持ちを伝えた。

「私も行くね？」

「うん：りんちゃん。ありがとう」

彼女は笑顔でそう言うと、私は小走りで屋上を出て行った。

屋上に残ったのはひふみちゃんが増田君だけ。

宮本さんが増田君に何をどう言ったのかは知らないし、随分と乱暴な方法だったのかも知れない。

でもきつと大丈夫だと思った。だって、あの二人はお似合いだと思うから。

だから後は二人に任せよう。

私はそう思い、屋上を後にすることにした。

一杯の茶漬け

純視点

……何をしているんだ僕は。

あれから数日が経った。

その間、僕はずっと後悔していた。

何故あんなことを言ってしまったのか。

何故ひふみを傷付けてしまったのか。

何度も考えた。でも答えなんて出るわけがない。

彼女に謝らないといけない。そう思っているにしても、合わせる顔が無い。

悲しませないと、泣かせないと誓ったのにこのザマだ。

彼女の涙を思い出す度に、心苦しくなる。

だけど僕は逃がっている。現実から目を背け続けている。

きつといつか後悔するとわかっているはずなのに。

「……ごめんなさい」

僕は誰に対して謝罪をしているんだろう。

ひふみか。それとも他の人達だろうか。それすらわからない。

僕は一人、ピアノの前でうずくまっていた。

まるで世界にたった一人で取り残されたような気分だ。

いつそののまま、消えてしまいたい。

でもそんな勇氣は無い。

僕に残されたのはこの身一つだけなのだ。

何も出来ない。何も残せない。

「……」

不意にピアノを見る。

もし、かつての僕だったらこの状況を変えられたのだろうか。

いや、無理だろうな。

結局、僕という人間はこういう人間だ。

今までも、これからも変わることはない。

だって僕は――

「なに辛気くさい面してんだよ、増田？」

突然の声に驚いて振り向く。特徴的な目のクマ。

この人相を見間違えることはない。

宮本敦。

彼がドアを背にして立っていた。

「……先輩」

いつの間に入ってきたんだろうか。全く気付かなかった。

「よっ」と言いながら、彼は僕の横に座った。

「大丈夫か？」

「え……あ、はい……」

「そうか」

彼は短く答える。

それ以降、何も言わない。でも、これが彼なりの気遣いであると言
うことは、長年のつきあいでも分かった。

この人と会ってから、僕はまだ何も変わっていないのかな？

僕はどうすればいいかわからず、俯いたまま動けないでいた。

「……先輩」

「あ？」

「聞いてもいいですか」

「ああ」

「あの時、僕に声をかけたんですか？」

僕はふと、昔の事を訪ねた。

気を紛らわせたかったと言えばそれまでだけど、何でも良いから話
がしたかったのだ。

それは、僕と先輩が初めて会った日のこと。

僕がこの会社に入るきっかけになった出来事である。

——時間は5年前まで遡る。

その時、僕は故あって餓死寸前で路上に倒れていた。

『……死ぬ』

意識はあるが身体が動かない。指一本動かせなかった。

このまま死んでしまうのかな。僕はぼんやりと考えていた。こういう時、自分が過去に食べた一番美味しいものが脳裏に過ぎるという。

僕の場合、茶漬けだった。

夜遅くまでレッスンして、疲れで言うことも聞かない身体で、暗い家の中で人知れずひっそりと食べていた。

なんでそんな地味なものを？

多分、腹が減って思考力が鈍っていたせいだろう。だが、そんなことはどうでも良い。

このままでは本当に死んでしまうのだから。

「何してんだお前？」

死にかけて僕に差し出された救いの手は、その声と共に現れた。

「……っ!？」

ゆっくりと顔を向けると、まず目に入ったのは濃い目のクマだ。

今の僕に言えた義理では無いけれど、あまりに不健康に見えて幽霊じゃないかと思った。

思わず飛び退いてしまう。

実はもう僕は死んでいて、ここは黄泉国なのか。そう思ってしまうくらい、目の前にいる人は現実離れしていた。

僕は息を飲む。

しかし次の瞬間、自分のお腹が大きな音を立てて鳴ったことで正気に返った。

「なんだお前、動けるのか。今にも餓死しそうに見えたが」

「いえ…その……」

その時、ぐうぐうとお腹が鳴って再び顔が赤くなる。

恥ずかしくて顔を上げられない。

こんな姿を見られたら馬鹿にされるか笑われると思つて、僕はうつむいていた。

「ははっ、やっぱり腹減つてんのか」

すると頭上から笑いが聞こえてくる。

やっぱりからかわれたんだ。そう思つたが、次に発せられた言葉に

僕は耳を疑った。

「お前、増田純か？」

「!？」

どうしてこの人が僕の名前を……。驚きつつも恐る恐る見上げる。すると彼は僕の方に手を差し出していた。

そしてニヤリと笑う。

まるで獲物を見つけた獣のように、口角を上げて。

「な…なんで僕の名前を？」

「ああ、いきなり悪いな。お前のことを書いてある記事を読んだことがある。ある意味有名人だからな」

「っ……」

その人の言葉に、僕は身構えてしまう。

知っているんだ、僕のことを。

確かに、普通の人でも知っている人は知っているだろう。

でも確かにその界限では僕は有名人どころの話じゃ無い。そして、今僕が餓死しそうになっている原因 そのものだった。

「シヨパンコンクール優勝最年少記録を達成した天才ピアニスト。

それが今やこんな路上で餓死寸前とは世の中何があるかわからんな」

彼は僕の事を読み上げるように言う。

その表情には嫌悪感とかは無く、むしろ楽しんでいるように見えた。

まるで僕に興味があるように。いや、実際に興味があったのかも知れない。

彼は差し出した手を下ろした。

「興に乗った。面白い話が聞けそうだ。おい、行くぞ」

「えっ？」

彼は唐突に立ち上がって歩き出す。

ついて来いと言わんばかりにこちらを見て。

僕は困惑しながらも、その背中を追った。

連れて行かれたのは近くの居酒屋だった。木目調の落ち着く内装は見たところ、随分と新しい。

オープンしてそう時間が経っていないのが伺えた。

「よう、きたぜ」

「お、見ない顔だね、知り合いかい？」

「ああ、ちよつとそこで拾った」

彼は慣れた様子で中に入り、茶髪の爽やかな男性とフランクに話してから奥にあるテーブル席に案内された。

「さて、俺のおごりだ。好きな頼めよ。まあ食えれば何でもいいけど」

「……あの、ありがとうございます。……お金持ってなくて……」
僕は申し訳なく思いながらそう言った。

今僕はひもじいを通り越して飢えている状態だ。

空腹が過ぎて逆に何も食べる気がしない。

だけど、お店に入って注文せずに居座るのは迷惑になる。

それに、お腹が鳴る度に恥ずかしくて顔が熱くなって仕方がなかった。

僕は早くこの状況から抜け出したかったのだ。

「あの、お金はあとでかならず」

「んなこといいからサツサと何か頼め」

「……はい」

僕はズラリと並ぶ豊富なメニューの中からあるモノに目が引かれた。

それは茶漬け。

さつき自分が走馬燈のように思い出したものと同じ食べ物である。

「じゃあ、これを」

僕はそれを指さした。それを見た彼は吹き出して笑った。

「ははっ！ なんだお前、こんな時に茶漬けかよ。嫌いじゃないぜ、そういう奴」

彼は楽しそうに笑いながらも店員さんと呼ぶ。

「すまん、これ二つ頼むわ」

数分後、運ばれてきた二つの茶碗には山盛りのご飯が入っていた。僕はじっとその様子を見ていた。その視線に気付いた彼はまた

笑った。

「なんだ？ 食わないのか？」

「い、いえ……そんな……」

「遠慮するなよ。ほれ」

そう言つて彼が手渡してきた箸を僕は受け取る。

そして目の前に置かれた茶漬けを見つめていた。

温かい湯気が立ち上り、鼻腔に良い香りが広がる。

ゴクリ、と僕は生唾を飲み込んだ。

食べても、大丈夫だろうか。もし毒なんて入っていたら……。

いや、そんなことを考えていても仕方がない。

もう死ぬんだ。どうせなら、最後の食事くらい美味しいものを食べ

てから死にたい。僕は意を決してそつと一口だけ掬つて口に運んだ。

「！」

おいしい。

すぐく、とても、今まで食べたどんな料理よりも。

僕は夢中で口に入れた。次から次に口に入れて頬張る。

すると僕の様子を見て、彼もまた自分のお茶漬けを口に運ぶ。

そして同じように僕と同じように驚いたような顔をしていた。

「うめえな、この茶漬け」

「はい、おいしいですつ……」

それから僕らは何も言わずにひたすらにその茶漬けを食るように

食べ続けた。

「ごちそうさまでした」

僕は手を合わせて感謝の意を伝える。

そして彼は僕の方をみて口を開いた。

「さて、腹も膨れたことだし聞かせてもらおうか。なんでお前がこ

んなところにいるのか」

「僕は……」

僕は黙り込む。そして、ゆっくりと口を開き、事情を話した。

……そして全てのことのあらましを話し終えたとき、また彼は腹を

抱えて笑い転げていた。

「はっははは!! はー、面白すぎだろお前!!」

「な、なぜ笑うんですか!？」

彼はひとしきり笑って満足したように息を整えた。

「いや、だつてよお。シヨパンコンクールで最年少優勝して、天才ピアニストとか言われてる癖に餓死しかけた理由が就職活動のせいとか。最高に笑えるだろ」

「うう……」

僕は恥ずかしくなって俯いた。

確かに彼の言う通りだ。それが理由で餓死寸前まで追い詰められている。

改めて考えると、僕は本当に何をしているんだろうと思った。

「なるほどね。確かに、ピアノが弾けなくなつちまえばピアノリストとしては致命的だ。その上、顔が割れ過ぎちまつてどこも雇ってくれないときたもんだ」

「はい……」

僕は項垂れながら返事をした。

実際、先の金融危機による就職氷河期も相まっている上、僕には実家からの仕送りもない。

勘当同然に家を追い出された上、なけなしの奨学金とバイト代で今まで食いつないでいたのだ。

ソレも就職活動に奔走している間はろくに使えず、結局僕は明日の生活にも困るほどにまで困窮していた。

「はあ……笑った笑った。よし、決めたぞ」

そう言つて彼は立ち上がると店のカウンターへ歩いていく。

そして、一枚の名刺を手に戻ってきた。

「俺はこういう者だ」

渡された紙切れには、こう書かれていた。

株式会社イーグルジャンプ。

宮本敦。

そして、上に書かれてある会社の所在地が。

「これは?……ゲーム、制作会社?」

「ああ、そうだ。一応、最近ヒットした作品があるから結構熱いぞ？」

僕はその名刺を見ながら呟いた。

「でも、どうして僕なんかにこれを？」

そう聞くと、彼はニヤリとして言った。

「個人的にお前が欲しいからだ」

「え？」

思わず聞き返す。宮本敦というその男性は立ち上がりつてもう一度繰り返した。

「ウチで働かないかって言っているんだよ」

僕は突然の話に頭がついていけなかった。

「どういうことですか？」

「言葉の通りだよ。お前が欲しくなった」

「そんな……いきなり言われても……。それに、僕はピアノが弾けないんですよ？」

僕の言葉に彼は肩をすくめる。

「別に、生演奏にこだわる必要は無いねえさ。それに、作曲のこと勉強してたんだろ？」

コクリと首を縦に振った。

「DTMとかのソフトの使い方は？」

その質問にまた首を振る。

「一応、専門学校で一通り」

「なら問題ないな」

彼は再び僕の隣に座って語りかける。

「うちには作曲出来るヤツがいなくてな。基本外注なんだが経費削減のために俺に押しつけてくるんだ。それをお前に任せたい」

僕は困惑しながら彼に聞いた。

「そんなこと急に言われても……」

「まあ、無理にとは言わないさ。気になったら履歴書出しに來い。

ウチは年中募集してるから。じゃ、そろそろ行くわ」

そう言っただけは立ち上がり勘定を済ませて出て行ってしまった。

残された僕は呆然としていた。

あの後、どうやって帰ったのかよく覚えていない。

今になって思い返しても、なぜ彼が自分に声をかけてきたのか分からなかった。

ただ分かることは、僕を必要としてくれたということだけだ。

でも、彼が何故僕を必要としてくれたのか今になっても分からなかった。

そして、時計の針は今に戻る。

サウンドルームの一室、隣で座る先輩に……僕に手を差し出してくれた人、宮本敦に改めて訪ねた。

もう五年くらい前のことの話を引き合いに出しながら

「だから、それが知りたいんです」

「……別に？　俺はお前が使えると思ったただだよ」

「ちよつと……まかさないで下さいよ！」

こっちは真剣に話しているのに、この人は……すると、少し間を置いて、観念したようにため息をつく。彼は口を開いた。

「お前が俺と似ているからだよ」

「えっ!?　どこがです!？」

「うるせえな、耳元で叫ぶんじゃねえよ」

僕が驚いて立ち上がると、彼は迷惑そうな顔をする。

「いいか、お前の問題点の一つはその才能だ。確かに天才的な才能を持つやつは往々にしてどこかおかしい。人の話を聞かずに自分の世界に没頭しちまうような連中だ。だが、そういうヤツは例外なく、何かしら欠陥を抱えている」

「……」

「俺は昔色々あってな。そんなやつのが持ちは痛いほどわかるんだよ。俺はそんなやつを放っておけなくなった。ただそれだけだよ」
そう言うと、この話は終わりだと言わんばかりに深呼吸して天井を見る。

「でもな、そういうヤツでも好きになってくれる人間てのは意外といるもんだ」

「それって…」

その言葉を聞いたとき、ひふみの顔が浮かんできた。

僕の大好きな人。

僕の大切な人。

そして、僕が傷つけてしまった人。

「お前がまたピアノと向かい合ったのは、滝本のためなんじゃないのか？」

そうだ。僕は、僕や他の皆と関わって成長していくひふみを見ていて思ったんだ。……こんな僕にもまだできることはあるんじゃないかって。

僕は彼女のために何ができるだろうと考えて、考えた結果がピアノだった。

「なら、尚更それを本人伝えないと意味ないだろう？」

「でも……怖いんです。もし言って、期待させて、その期待を裏切ったらと思うと……」

「なら言えばいいじゃないか。応えたいって気持ちも、怖いって気持ちも、全部」

「なっ、そんな簡単に」

「簡単だろう？」

と、先輩は立ち上がって言った。

「お前は滝本のことが好きなんだろう？　それで、滝本もお前を好きでいてくれる」

そして、まっすぐ僕の目を見た。

「なら信じてやれ。お前が好きな人間を、お前を好きでいてくれる人間を」

「っ……」

その瞬間、涙が出そうになった。

「それにな、言い分が食い違うことはそんな悪いことじゃねえよ。期待に応えたい気持ちも、怖いって気持ちも、伝えて擦り合わせていけばいい」

僕は下唇を噛んで堪えた。

そして大きく息を吸ったあと、吐き出す。

きつとこれは、勇気を振り絞るための儀式のようなものなのだ。言わなくても分かってもらえるなんて傲慢だ。

言わなければ伝わらないことだってある。

それでも言わずにいることですれ違ってしまうこともある。

僕は、彼女に伝えなければならぬのだ。

彼女に会わなければならないんだ。

そのために、まずは目の前にいる彼に伝えることから始めよう。

「ありがとうございます」

そうだ、僕には彼女がいる。彼女が好きだと言ってくれたんだ。なら、僕はそれに答えないといけない。

いつまでも、怖がっていてどうするんだ！ その時、僕は気付いた。

……ああ、そうか。僕は怖かったんだ。

今までずっと一人でやってきた。誰の助けもなく、全て自分で背負ってきたつもりだった。……でも、本当は違った。

僕の周りには、僕を支えてくれていた人がいるのに。

そんな大切なことを、忘れていたなんて。

「ありがとうございます、先輩」

「おう、んじゃ早速行こうか」

「え？」

先輩の言葉の意味がよく分からず聞き返す。

「今から行くんだよ。滝本と話しに」

「今からですか!？」

「当たり前だ。善は急げって言うだろ？」

「ちよつと……まだ心の準備がーあ、あー!!」

Small Smile

純視点

「……」

「……」

先輩に首根っこを捕まれて屋上に放り投げられた僕は、隣で黙り込んでいるひふみに何も言えないでいた。

冷たい風が僕らの間を通り抜ける。日射しが差し込んでいるから、意外にも寒さは感じなかった。

……沈黙が僕らの間を支配する。

無理もない。泣かせてしまっただけからしばらくの間、満足に会話すらできていなかったのだ。

だけど、いつまでもこうしてはいられない。

「ひふみ」

話すことは決まっている。

何をすべきかも。

後は言葉にするだけ。

そうでないと何も伝わらないから。

「ごめん」

だから僕は、ただ一言謝ることにした。

「僕が勝手に自分を追い詰めたせいで、ひふみにまで余計な心配かけた。相談して欲しいって、頼って欲しいって言われていたのに、一人で抱え込んで」

まっすぐ、青い瞳と向き合うように言う。

不思議と、恐怖はなかった。

彼女が叫んだ言葉が、頭に浮かんでくる。

それは、ひふみが僕のために泣いてくれたからだ。僕を心配してくれただからだ。

そんな彼女に伝えたいと思った。

だからこそ、伝えることができる。

「本当に、ごめん」

僕は深々と頭をさげた。

これが、まず僕がしなくてはいけないことだと信じているから。

「……ねえ、教えて？ 何があったの？」

顔を上げると、そこには真剣な表情をしたひふみがいた。

そして、その問いに対する僕の答えは決まっていた。

……もう、迷わない。

それならば言うしかないだろう。僕の想いを、全てを。

「わかった」

僕は口を開く。

そして、全部話した。

またピアノを弾こうとしたこと。

葉月さんに課せられた課題のこと。

そのことで自分を追い込んでいたこと。

それらすべてを、包み隠さず打ち明けた。

彼女は、時折相槌を打ちながら静かに聞いてくれていた。

話し終わる頃には、僕の手を握ってくれるまでになっていた。

「そっか……。それで、あんな風になっちゃったんだね」

ひふみが呟く。

「うん。情けないよね、ホント」

僕は苦笑して言った。

それもすぐに引っ込んだ。

「純君」

ひふみの顔が、それだけ真剣だったからだ。

「私、そんなこと、一度も頼んでない。言ってもいないよ」

僕はハツとする。

そうだ。

ひふみは言ったじゃ無いか。

僕がピアノだけしか価値のない人だとは思ってないと。

僕の素敵なところはたくさん知っている。

…なら尚更僕はバカだ。大馬鹿者だ。

どうしてそんな簡単なことに気付かなかったんだろう。

「純君がどれだけすごいことをしたとしても、それで純君が辛い思いをするなら意味ないよ」

握られていた手に力が入る。

痛いくらいに込められた力で、彼女の思いが伝わってくる。

でもそれは、決して不快じゃ無かった。むしろ心地良い痛みだと感じてしまう。

それほどまでに、彼女の存在は大きいということなんだろうか。

僕にとつての、かけがえの無いものなんだという証なのか。

「だから、無理なんてしないでいいから」

優しい声音に胸の奥が熱くなる。

いつの間にか視界は滲んでいたけど、それを拭うことはしなかった。

今のこの瞬間を、記憶に焼き付けていたかったから。

そしてひふみは続ける。

涙を浮かべながらも、精一杯の笑顔で。

僕を安心させるように。

僕を勇気づけるように。

「ピアノなんて弾けなくても、私は純君のそばにずっといる。だから、純君も私を信じて」

そう言い切った。

ああ、なんてずるいんだろう。

そんなこと言われたら、頑張らないわけにはいかないじゃないか。

だって、彼女が信じてくれるんだから。

僕がどんな失敗をしてもいいと、そばにいてと言ってくれたんだから。

——だから、ここからは僕の気持ちを伝えないと。

「ありがとう。ひふみ」

握られている手を、握り返す。

そして、再びしつかりとその目を見つめた。

「僕、初めてなんだ。こんな気持ち」

自然と言葉が出てくる。

「昔はただ、僕がピアノを弾くことを望まれるがまま弾いていた。そうすれば、僕は生きて良いって思っていた。でも、今は違うんだ」
あの時、僕が一度だけ、ほんの一瞬だけピアノを弾けることができたのは偶然でも何でも無い。

弾きたかった。

聞いて欲しかった。

僕の曲を、僕ができる最高の形で。

それは紛れもなく、僕の本心から生まれた感情だったから。

「そう思ったのは、生まれて初めてだったんだ。自分のためじゃない、誰かのために演奏したいと思えたのは」

今ならはつきりわかる。

僕がピアノを弾けなくなったのは、ジストニアとか、心に巣くう呪いの声なんかじゃない。

ただ単に、弾きたくなかっただけなんだ。

顔も、名前も、何も知らない誰かのためじゃない。

ただ一人、僕のことを好きでいてくれた女の子のために。

「だから、聞いてほしい。僕の演奏を」

僕の音楽を好きだと言ってくれた人の為に。

僕はピアノを弾きたいと思ったんだ。

だから、もう一度やってみようと思う。

それがたとえ困難な道であったとしても。

ピアノを諦めるのは、その後でいい。

何より、諦める理由がない。

何せ、僕の手の中には小さな光があるんだから。



約束の時はやってきた。

場所はこの会社で一番大きな会議室。

僕は葉月さんに指示された時間にその扉を開いた。

「やあ、増田君。約束の時間だね」

そこには、開発チームのメンバーが全員いた。

もちろん、ひふみもいた。

彼女と目が合う

と軽く微笑みかけてきた。

大丈夫だよ。

彼女は口を動かさずにそう言っている気がした。

もう、全て伝えた。

後は奏でるだけだ。

葉月さんと再び相對する。

「皆忙しい中来てもらってすまない。今日は君たちの意見をもらいたい。彼の演奏を作品に取り入れるに足るかどうかを」

ざわつく一同に構わず、葉月さんは話を続ける。

彼女の表情はいつもと同じだった。

余裕があつて、ミステリアスな感じ。

けれどもどこか楽しそうな気配がする。

きつと、これは気のせいでは無いだろう。

僕は会議室の中央にあらかじめ備えてあつた電子ピアノと對峙する。

この2週間、一度も弾けることができなかった。

練習もろくにしていない。

7年分のブランクは、当時の僕からしたら不安で自殺していたかもしれない。

しかし、今は不思議と緊張は無かった。

——辞めておけ。貴様には無理だ。

……少し黙つてろ。

今、お前の話を聞いている暇なんてないんだ。

僕はこれから、大切な人のためだけに弾くんだ。

お前は、そこで黙って聞いている。

一步、前に踏み出す。

そして、ゆつくりと椅子に腰掛ける。

楽譜はいらない。曲は全て頭に入っている。

そして、何を弾くかも決めている。それは、あの時、屋上で決めた。

『え？ リクエスト？』

『はい。情けない話。決めてなかったんです』

屋上でひふみにああ言っただけで見たあと、僕はまた情けない顔でそんな話をしてしまったのだ。

みつともないかもしれないが、弾くことで頭がいっぱいで考えてすらいなかった。

でも、聞いてくれるなら、ひふみが一番聞いて欲しい曲が良い。

だから、ひふみに尋ねた。

何か聴きたい曲はないかと。

『じゃあ……』

僕とひふみの思い出の曲。

ひふみがサウンドルームに訪ねてきた時に流した曲。

それがいいと、言ってくれた。

僕は一度大きく深呼吸をする。

それから鍵盤の上に指を置く。

指に白いプラスチックが吸い付くようだ。身体が軽い。

そのまま、最初の音を鳴らす。

——瞬間。

会場が水を打ったように静まり返った。

まるで全ての音がその空間から消えてしまったかのように。

空気が変わる。

静かな、それでいてどこまでも澄んだ旋律が流れ始める。

この場にいる誰もが息を呑む。

僕の音しか聞こえていないのではないかと思うほど、静かにその曲が奏でられていく。

弾きながらふと考える。

この曲はこんなにも美しかっただろうか。

もっと汚くて、醜いものだと思っていた。

だってそれは、僕が生きたために必死で足掻いて作り上げたものだから。

けど、今は違う。

この曲を、僕を好きだと言ってくれた人を想って奏でるこの曲には不思議な温かさがあった。

——ああ。

——僕はずっと、こうしたかったんだ。

心の底から湧き上がる衝動のまま、指を動かす。

僕が作った曲。

僕の音楽。

それを大切な人のために弾くことができる。

これがどれだけ幸せなことか、今の僕にはつきりとわかる。

そして、曲は終わりへと近づいていく。

僕に残された時間はもう僅かしかない。

最後の和音を響かせて、演奏を終える。

……。

……。

「ふう」

ピアノの前で僕は軽く息をつく。

今まで生きてきて一番の演奏ができた気がする。

さて、どんな反応かなと、周囲を見渡そうとした僕の視界は遮られた。

「っ……っ……」

いきなり誰かに抱きしめられる。

この感触。匂い。

間違えようがない。

ひふみだ。

「どう…でした？」

「……」

ひふみは何も言わずただギュッと腕の力を強めるだけだった。彼女の吐息が耳にかかる。

「すごく良かったよ」

しばらくして、そう言った。

それはとても小さい声だったが、確かに届いた。

僕は思わず泣きそうになる。

そんな僕の顔をみて、ひふみはクスリと笑った。

優しく小さな笑顔。

つられて、僕も笑う。

彼女の背中に手を伸ばし、同じように強く抱き返した。

「……コホン、君たち、一応、他の皆いるから少し抑えてくれるとありがたいんだけど？」

「!?!」

葉月さんの声でハッと我に帰る。

慌てて離れると、ひふみの顔は真っ赤になっていた。

僕もきつと同じようになっているのだろう。

うわあ、恥ずかしい……。

今更ながら、ものすごいことをしてしまったことに気がつく。

ひふみと揃って周囲を見渡すと、顔を真っ赤にしている葉月さんを

筆頭に全員がこちらを見ていた。

あれ：確か、今ここって開発チームの全員がいるんじゃない？

まずい！

見られた!!

これはまずい。本当にまずい。

今、僕とひふみは多分人生で一番幸せだけれど、同時に一番死にたくなっていた。

「とりあえずほら、離れなさいな。今更だけど、今就業時間だからねー」

葉月さんが僕らの肩を持って引き離す。

そして全員に聞こえるように咳払いをして、口を開いた。

「それじゃあ、彼の演奏を今回の開発に取り入れるかどうか検討したいと思うのだが……反対意見のある人はいる？」

沈黙が室内を支配する。

誰も何も言うことはない。

つまり、そういうことだ。僕は、その空気を肌で感じ取る。でも、そんなことはもうどうでもよかった。

「…いないようだね。なら増田君。君の提案を受け入れよう。レコーディングのスケジュールは追って伝える。君は今の作曲と平行で、曲の収録に向けて準備してくれ。質問はあるかい？」

葉月さんの言葉に、僕は首を横に振った。

正直、聞きたいことだらけで、頭はパンクしそうだが、今はもうこの事実だけで満足だ。

ひふみも微笑んで僕を見ていてくれる。

それだけで、胸の奥底から力が溢れてくるような気がするのだ。

その後、僕たちはスタッツフから盛大な拍手を受けながら退室していった。

帰り道。

僕とひふみは手を繋ぎながら歩いていった。

「なんか、あつという間でした」

「うん、私も」

僕たちのプロジェクトはまだ始まったばかりだ。

でも、不思議と不安はない。

この先にどんなことが待ち受けているのか、楽しみで仕方ないくらいだった。

僕とひふみは目を合わせて、笑い合う。

そしてどちらからともなく、唇を重ねた。

顔を離して、ゆつくりと目を開くとそこには、満面の笑みを浮かべるひふみがいた。

「ひふみ、僕、もっと上手くなります。今日以上の演奏をあなたのためになります」

「うん……でも、無理しちゃだめ……だよ？」

「わかっています」

「約束」

「はい」

もう一度だけキスを交わして、歩き出す。この先何があっても大丈夫だと思える。

だって、僕の音楽には彼女がついていてくれるのだから。

ミラクル☆マジカル☆ムーンレンジャー

ひふみ視点

「ホント、すごかったですね。ひふみ先輩の彼氏さん」

「あんな演奏初めて聞きました」

あれから三日ほど経った今日でも、ブースの中の話は純君のことで持ちきりだった。

青葉ちゃんもゆんちゃんも興奮冷めやらぬって感じで盛り上がっている。

「それもそうですけど、ひふみ先輩も大胆でしたね。まさか皆の前であんなことしちゃうなんて」

「うう…はじめちゃん、いじわる……」

あの時のことを思い出してか、顔を真っ赤にして俯く青葉ちゃんとゆんちゃん。

私だって純君が演奏したときは感動したし、思わず抱き着いちゃったくらいだもん。

それに――

……うう

あのときのことを思い返すだけで顔に熱を帯びてくるのを感じる。嬉しいような恥ずかしいような不思議な感情が私の胸の中を支配していく。

冷静になってみると物凄く恥ずかしいことをしてしまった気がする。

でも……私は後悔なんてしていない。むしろ嬉しいと思っている自分がいるのだ。

だって、あの演奏は私の為だけにしてくれたものだから。他の誰でもない私だけの為に奏でてくれた曲なのだから。

そしてその曲と一緒に弾いた時、まるで純君と一緒に演奏しているかのような錯覚に陥ってしまった。

そんなことあるはずがないのに。

それはきつと私がそれだけ彼を愛しているからだ。

きつと今、私は誰よりも幸せなんだと思う。

「お前ら、少しはしやぎすぎだ。頭に響くから勘弁してくれ」

「あ、敦さんっ、大丈夫ですか!？」

そんな風に思っている私とは裏腹に頭を押さえて辛そうな表情を浮かべる敦さんが顔を出してきた。

いつもより増してヒドい人相に、青葉ちゃんも声を上げていた。

どうやら彼はさっきまでずっと何かと戦っていたらしい。

想像はつく。おそらく、ようやく一つの作品のマスターアップを迎えたのだ

その証拠に今も青白い顔をしている。

「ったく、たかだが一曲弾けたくらいだろ？ あんなお遊戯会で満

足してたんなら、先が思いやられるな」

「もう敦さん！ そんな言い方無いじゃないですか!？」

純君の演奏に対して文句を言う彼に、青葉ちゃんが立ち上がって抗議をしていた。

私も良い気分はしない。だって、純君がどんな覚悟でピアノを弾いていたか、彼も知っているはずなのに。

と青葉ちゃんに変わって敦さんに詰め寄ろうとしたとき、敦さんの脇からピンク色の髪をしたガタイのいい男の人がひよっこりと顔を出した。

彼の花男さん。純君や佐藤君と話しているところをよく見る。

彼は嬉しそうにささやいた。

「こんな事言っつて、敦君。昨日の夜、高いお酒飲んで嬉しそーに」

「黙れクソオカマ！」

「痛い!!」

余計なことを言い出した彼を蹴飛ばす敦さん。

そんな二人のやり取りを見てるとなんだか安心してしまおう自分がいる。

そっか、敦さんも純君のこと応援してたんだ。

これが私の好きな人たちなんだなって思える。

本当に私は幸せ者だと思う。

「ああそれと、昼休み、なんか増田が食堂に集まってくれて話してたぞ?」

それだけ言い残してまたブースに戻っていく敦さん。

そういえばさつき廊下を歩いていたときにそんな話を聞いていたかも。

「一体、なんででしょうか?」

「さあ? でも多分、新曲の発表とかじゃない?」

「ああ、そうかもしれないね」

それしか考えられないよね。

あの演奏を聞いた後だから特に期待が高まってしまう。

それに、あとちよつとでお昼休みだ。

「ほな、とりあえず早う行ってみよつか?」

「はいっ」

そして私たち四人は急ぎ足で食堂に向かった。

●

「皆さん、お食事中すみません」

開発チームの皆が食堂に一番集まる時間帯、その一角のスペースに純君はいた。

この前、会議室で奏でていた電子ピアノの隣に。

食堂にいる全員の視線が一齐にこちらに向けられているのを感じる。

中には驚きの声を上げる人もいた。

けれど純君は落ち着いた口調で続けた。

「先日は、忙しい中僕のピアノを聞いてくれてありがとうございます。それで、皆さんにもう少しだけ協力してほしいことがあったので、こうして集まってもらいました」

集まった人達を見渡しながら言う純君。

彼が何をしようとしているのか、ここにいる誰もが興味を持っているようだった。

当然だ。だって、この場にいる全員が純君の演奏に心を奪われてしまったのだから。

「実は僕、7年間ピアノが弾けなかったんです。それも、あの時まで
は」

突然のカミングアウトに食堂が色めき出す。

えっ、どういうこと!? みたいな声がちらほらと聞こえてきた。

だけど、純君は構わず続ける。

今度はあの時のように目を逸らしたりしていない。しっかりと周
りを見ながら。

そのせいなのか、みんな純君の言葉を真剣に耳を傾けている。

「なので、今まで全くとっていいほど練習してなかったんです。
もし僕のピアノを作品に取り込むとしてもまだ不十分なんです」

そこまで言って一旦間を置いた純君は、大きく深呼吸をして口を開
いた。

「だから、少しの時間だけでも僕の練習に付き合ってくれと嬉し
いです。お願いします」

最後は勢いよく頭を下げて締め括る純君。

すると、今までざわついていた食堂がしん、となる。

そして次の瞬間には歓声が上がった。

その歓声の中に拍手が混じっていたことに気が付いて、思わず笑み
がこぼれる。

良かった。やっぱり、純君なら大丈夫だ。

私は胸を撫で下ろして、純君を見た。

顔を上げた純君も笑顔を浮かべていた。

「ありがとうございます。それじゃあ、何かリクエストはあります
か? すごいマイナーな曲以外ならなんでも弾きますけど……」

「はいはいー!」

純君がそう言うと、真つ先に手を挙げたのははじめちゃん。

「じゃあ、『ミラクル☆マジカル☆ムーンレンジャー』を!」

キラキラした瞳でリクエストする彼女。

あまりの迫力に周囲の人達は若干引き気味だったけれど、純君は快
く了承した。

「わかりました。それでは準備するので待っててください」

そう言つて電子ピアノの前に座る純君。
椅子の高さを調整して、よしつと小さく呟いた後、鍵盤の上に指を乗せた。

「それじゃあいきます」

そう宣言した後、純君は曲を奏でる。

私もよく知っている曲。

女兒向けとして始まったアニメだけど、その完成度の高さから大人からの支持も書くとして、劇中かも評価も高い。

私もよくライブに遊びに行ったりしていた。そんな人気シリーズの主題歌。

まさかこんなところで聞けるとは思わなかった。イントロが流れ出し、私の心が躍動し始める。

ああ、本当に良い曲だ。

曲も大好きだけど、それを奏でているのが純君だと思うとさらに胸に込み上げてくるものがある。

私は自然と身体を動かしながら聞いた。

それはきつと他の人も一緒に、皆が楽しそうな表情をしていた。

純君の演奏が終わると大きな拍手が送られた。

中には立ち上がって聞いてくれた人もいたみたいで、食堂は大盛り上がり。

「ありがとうございました。どうでしたか？」

電子ピアノの横に立って、感想を求める純君。

そんな彼に、いち早く反応したのはやはりはじめちゃん。

「最高！ 本当に凄かったよ!!」

興奮冷めやらぬ様子で絶賛する彼女に釣られて、周りの人達もうんうんと同意していく。

さすがにここまで褒めちぎられると思っていなかったのか、純君は顔を赤く染めて照れ臭そうにしている。

でも、すぐに気を取り直して再び口を開く。

「では次の曲は……」

その後、純君の演奏に聞き惚れた開発チームのメンバー達は次々と

リクエストしていった。

色んなジャンルの曲、中には私の知らない曲もあったけれど、彼は嫌な顔一つせずに答えていった。

そんな様子を見てみると、少しだけ辛くなってしまった。

だって、純君がピアノを弾けなくなつたのはこうしてこの人達の期待に応えていたからなんだ。

彼に向かつているのは、どんな曲でも最高の形で奏でてくれるという無責任な願望。

それが、純君を追い詰めて、あんな風にさせてしまっていたんだ。だから、こうして彼の演奏を聞くことが出来ていることが嬉しい反面、複雑な気持ちになってしまふんだ。

「じゃあ、今日はこれでおしまいです」

純君の一言で食堂にいた人達から不満の声が上がる。

もつと聞いていたい。まだ全然物足りない。

そんな言葉がそこかしこから聞こえてきた。

「ごめんなさい」

でも、純君は譲らなかつた。

申し訳なさそうに謝つた後、話を続ける。

「絶対に無理はしないって、約束してるんです。だから、今日はこれでおしまいです」

はつきりとした口調で言う。

そんな純君を見て、食堂にいる人たちは渋々といった感じで引き下がった。

そして、純君と目が合う。

大丈夫だよと笑顔で告げられたような気がした。

そっか、ちゃんと私との約束を守ってくれるつもりなんだね。

そのことに安心すると、少しだけ涙腺が緩んでしまう。

駄目だ。ここで泣いたら変に思われちゃう。我慢しないと。

私は目尻に浮かんできたものを必死に抑える。純君はそんな私の様子に気が付いていないようで、ほっとしたように息を吐いて話を締め括る。

「ありがとうございました。それじゃあ僕はこれで失礼します」
そして、軽く頭を下げると出口の方へ歩いていった。
よかった。

ホントに…よかった。

安心した私は、胸を撫で下ろす。

でも、純君は部屋を出る直前、こちらを振り返って微笑みながら言った。

まるで、私が泣いていることを見抜いているかのように。

純君がいなくなった食堂は、さっきの演奏のことで持ちきりだった。

凄いだとか、感動的だとか、そんな言葉を耳が耳に入ってくる。

「あの人、すごかったね」

「あとき、結構顔可愛いかったよね」

「でも演奏してるときの顔、キリツとしてて格好良かったよ。」

ギャップ萌えてやつ？」

……ん？

段々、会話の内容がピアノの演奏から純君個人へとシフトしている
気がするんだけど……。

いや…気のせいじゃ無い。

現に会話の内容がエスカレートしていく一方だ。

「今まであの子と話したこと無かったけど、どっか誘ってみよっかなあ」

「えーズルくない？」

なんて声まで上がってくる始末。

これはマズイ。

このままでは純君が危ない。

純君が…他の女の人の人に取られちゃう……っ!!

「あ、青葉ちゃん…私、ちよつと行くねっ!」

私はそう思い、急いで食堂を飛び出した。

「え…ひふみ先輩!? 行っちゃった……」

後ろから青葉ちゃんの言葉が聞こえる。

でも今はそれどころじゃない。

向かう先は純君の仕事場であるサウンドルーム。

息を切らしながら、ビルの通路を全力疾走で向かっていく。

途中、何人かの社員さんにぶつかりそうになったけれど、謝ることもせずに走り続ける。

早く、速く、疾く、翔ける。

心臓が張り裂けそうなくらい鼓動を打っている。

それでも構わず走り続けた。

そして、遂にサウンドルームに辿り着くとノックもせずドアを開けた。

中では、純君が一人、お昼ご飯を食べている真っ最中だった。

「あ、ひふみ。どうしました、そんな慌てて……」

突然入ってきた私を見て驚いた様子の純君。

でも今は気にしていられない。

息切れしながら純君の元へ駆け寄る。

「……ダメ」

「え？」

「皆の前で演奏しちゃダメー!!」

「ごめんなさいは？」

敦視点

「ああ寒……屋上も冷えるからあんまタバコ吸えないんだよなあ」
深夜、愚痴をこぼしながら俺はオフィスに戻ってきた。
今日も徹夜だ。

確かに、今月にマスターアップするはずの作品は完成した。
だが現実是非情である。

なにせ次は4月にマスターアップしなければならない作品がある。
俺のとち狂った日々は一切変わらないのだ。

唯一の救いは、飯島のキャラデザがプロトタイプ版の時期に完成して、涼風も多少の遅れはあるが問題無く進んでくれているということだ。

「ん？」

オフィスに入つてすぐに違和感を覚える。

それは人の気配があると言うこと。

電気がまだついていていた。

最近では八神もADの仕事に専念することもあつて、去年みたく会社で寝泊まりすることも少なくなったのに。

だれかまだ残業をしているのだろうか。そんなことを考えながら、オフィスの中を進む。

光の出所はキャラ班のブース。

近道がてら様子を見てみよう和中を覗いてみると……

「え？… みうとれんの朝食？ 明日はお母さんが作る番やろ？」
飯島がいた。

コイツが残っているなんて珍しい。

しかも電話中のようにだし邪魔しない方がいいだろう。
そう思つてその場を離れようとした時だった。

「……あーわかつたわかつた。帰ります。もう……」

会話の内容を聞いてしまった。

聞き耳を立てるつもりは無かつたのだが、偶然聞こえてしまった。

「しかたあらへん……」

そして通話を終えた彼女はこちらを振り向く。

「っ……あ、敦さん!?!」

「お……おう、お疲れさん」

気まずそうな表情を浮かべる彼女に吊られて、動揺してしまう。

正直言つて、飯島と話すのはあまり得意じゃ無い。

彼女とは色々あったし、先日のクリスマスにかなり高価な携帯灰皿を渡された手前、接し方が分からなくなっている。

「珍しいな。お前が残業だなんて」

だから話題を逸らすために、あえて疑問をぶつけてみる。

すると彼女の顔はさらに暗くなる。

「いえ……その……ちよつと遅れてて」

どうにも歯切れが悪い。

何か言いづらいことでもあるのだろうか。

なんにせよ、彼女が遅くまで残っていることは事実なので労っておくべきだろう。

それに状況は察した。

さっきの電話の内容や、妙に罰が悪そうなところを見るにまだ仕事
が片付いていないのだろう。

「……なんなら、俺が片付けてやろうか?」

コイツの手癖は知っている。

ある程度なら真似ることは簡単だ。

おそらく八神や滝本も違和感こそ感じるが、出来ているなら文句は
言わないだろう。

「そっそんな! 悪いですよ!」

「みうとれんの飯作らないといけないんだろ?」

「でもっ……」

なにやら葛藤している様子だ。

というよりか、後ろめたいことがあると言った方が正しかったかも
しれない。

それを言おうか言わないかで迷っているように思えた。

結局、根負けしたのは飯島の方であった。

観念したかのように口を開く。

「あの……ひふみ先輩のことでちよつと」

「滝本が？」

意外な名前が出てきたことに驚いた。

あいつがどうかしたというのだろうか。

「はい……あの、今まで八神さんがリーダーだったじゃないですか…

それで……その……」

「勝手にわからなくなったと？」

「っ……」

コクリとうなずく。

なるほど。

滝本の性格は飯島もよく知っている。

共に働いているのだから当然だろう。だが、だからこそ言いにくい

ことがある。

現に、滝本の恋人である増田も似たようなことで自身を追い詰めていたんだ。

「これが八神さんやったら、軽く叱ってくれるだけで済むと思うんです。でも、この前のこともあるし、ひふみ先輩にこれ以上負担かけたくないっていうか……」

まあ気持ちはわかる。

あの時の滝本は相当参っていたみたいだし。

だが、俺は知っている。

滝本と増田はちゃんと乗り越えることができたということ。

「大丈夫だと思うぞ」

「え？」

「お前が思っている以上に、滝本は弱くないって事さ。だが、今はそつちより進捗の方だろ？ どうする？」

飯島を安心させるべく言葉をかける。

それと同時に現実的な話へと話題を変えた。

「えつと……」

「とりあえず、今日は帰りな。あの子らが待ってるんだろ？　これは、俺が片付けてやるから」

「はい……………すいません……………ありがとうございます」

「いいよ別に」

「それでは……………失礼します」

ペコリと頭を下げ、飯島はオフィスを出て行った。俺は自分のデスクに戻る。

そして目の前にあるPCの電源を入れて作業を開始した。

それから数時間後、ようやく片付けることができた。

時計を見るとすでに朝の5時。あと1時間もすれば太陽も昇ってくる頃合いである。

さすがに眠い。

就業時間までそれなりの猶予はあるし、仮眠を取ることにした。

その場で横になり目を閉じる。

こういう時すぐに眠れるようになるのは、この会社で働き始めた時から身に付いた技能と言ってもいいだろう。

心底嫌な技能であるが、寝られるのならもはやなんでもよかった。

そのまま意識を闇の中に沈ませていく。

……………ふと目が覚めた。

これでも、決めた時間には必ず起きることが出来る体質なのだが今回は少し違った。

足音が聞こえたからだ。

まどろみの中わずかに、視界に人影を捉えることが出来た。

「……………」

誰だろうか。

社内はまだ薄暗く、目を凝らさないとシルエットくらいしかわからない。

その人物が何をしているのかまではわからなかった。

足音は近づいてくる。そして、俺のすぐそばまで来たところで止まった。

「……………」

息遣いが聞こえる。

どうやらしやがみこんでいるようだ。というか、こんな至近距離にいるのだから顔を上げれば分かるはずなのに、なぜか顔を上げる気にはなれなかった。

頭に手を置かれる感覚がした。

誰かの手だ。それはゆっくりと髪を撫で始める。

あ……。

そこでやつとわかった。

俺は頭を撫でられているのだ。それもかなり優しく、まるで大切なものを扱うかのような手つきだ。

「……」

しばらく無言の時間が続く。

この歳になって頭を撫でられるなんてこと、考えたことすらなかったから落ち着かない。

だが、今動くわけにも……。

やがて手が離れていった。

少しだけ名残惜しいと思いつつも、相手に悟られないよう、薄く目を開く。

「っ」

息が詰まった。

そこには俺の顔を覗き込むようにして、心配そうな表情を浮かべた飯島がいた。

「……」

彼女は何も言わず、ただジツと俺の顔を見つめているだけだ。

浅緋色の瞳に吸い込まれそうになる錯覚を覚えた。

そんな時間がどれ程続いたのか。おそらく数秒程度のものだったのかもしれない。

不意に彼女が立ち上がる。

「……」

無言で、鞆から取り出した何かを俺の机にポンと置くとそのまま背を向けた。

ブースの出入口のところで振り返り一言だけ発する。

「……お疲れ様です」

遠ざかっていく足音を聞きながら、俺は先程置かれた物を見る。

それは巾着袋に入った弁当箱であった。おそらく飯島が作ったものだ。

「……なんでこんなの」

彼女の意図がわからなかった。

だが、不思議と悪い気分ではなかった。

きつと、これがあいつなりの励まし方なんだろう。

俺は立ち上がり、その中身を確認するために包みを開ける。

中には3つのタッパーが入っていた。

「まったく」

小さく笑う。

本当に不器用な奴だ。

「いただきます」

俺は誰もいないオフィスで一人、感謝の言葉を口にして弁当に手をつけた。

弁当はうまかった。

作りたてだからかまだ少し温もりがあり、食感や風味から出来合のものではないことがわかる。間違いなく飯島の手で作られたものだ。

しかし不思議なことに、どんな食材を使っているのかわからないがとても優しい味だった。

そして何よりも、その料理に込められた想いを感じた。

「うまい……」

自然と口から言葉が出る。

飯島は俺のためにこれを用意したんだろうか。

まったく、気にしなくていいのに。

「ごちそうさま」

あつという間に無くなってしまった。

3つあった内の2つが俺の胃の中へと消えた。

俺はゴミを捨てようと席を立つ。

その時、PCの下にメモ用紙が一枚あることに気づいた。

「なんだこれ？」

拾い上げてみると、

そこにはメッセージが書かれている。

『無理しないでください』

たった一文、それだけ書かれていた。

俺は苦笑しながらそれをポケットにしまう。

「ありがとよ」

誰にも聞こえない声で呟いた。

とはいえ、タッパーだけでも返しに行くか。

まだ早朝だ。

涼風らも来ていないだろうし、サツサと渡してしまおう。そう思い、俺は洗ったタッパーを飯島に返すべくキャラ班のブースへ足を運んだ。

「飯島、いるか？ デスクに置いてあった弁当なんだが——」

「…ズルするなんて悪い子ね。ダメでしょ？」

「……へ？」

キャラ班のブースは、飯島の他に滝本がいた。

滝本は何か、妖艶というか気品のある表情で飯島の頬に触れている。

飯島はなぜか顔を赤く染めていた。

「ごめんなさいは？」

「ご、ごめんなひゃい…」

うん、ここは何も言わずに退散した方がいい。

二人だけの世界というか、この空間に立ち入ってはいけない気がしてならんかった。

俺は音を立てずに踵を返して歩き出そうとしたときだった。

「あ、敦さん」

涼風が入社してきた。

そして、いつも通りの元気な声で俺の名前を呼ぶ。

「おはようございます……」

当然な話だが、涼風が声を出すと言うことは、当然、俺の背後にいるであろう飯島と滝本も涼風に気がつくだろう。

そして、その手前にいる俺の存在にもだ。

俺は静かに振り返る。すると案の定二人は俺達に集中していた。

「っ!?」

飯島も滝本も驚きの表情を浮かべている。

そりやそうだろな、俺だつて驚いたんだからよ。

「っ…!…っ…!!」

飯島は口をパクパクさせて、まるで金魚みたいになっている。

「調子に乗りすぎた―!…ううう〜!」

滝本に至っては意味不明なことを口走っていた。

そんな二人の様子に、涼風は首を傾げて俺を見上げる。俺は無言で肩をすくめた。

鼎立会議

敦視点

「さて……敦君。はなちゃん、今日は良く集まってくれたね」
電気が消えた会議室の中、スタンドライトがかるうじて俺達の顔を照らしている。

その中心で、葉月の眼鏡が光と反射してキラリと輝いた気がした。
部屋の中には葉月の他に、花男と俺。

それぞれ対峙するように椅子に座っている。

それはまるで、アニメや漫画でよく見かける敵対組織が一堂に会しているかの様な光景だった。

異様な緊張感が支配するこの空間で、一体何が繰り広げられるかという……。

「八神と遠山君、そして佐藤君。この三角関係についてだが……」
そう。この会社が抱えている最大の問題を議論する為に集まったのだ。

光臨原理主義。

シユガー党。

7年前から始まったこの対立には未だ決着がついていないらしい。
だが、この泥沼というか、八神一強だったこの状況に進展があった。
あのヘタレの佐藤が、遠山を落とすために動き出した。
それもかなり強気だ。

なにせフラれたらこの会社を辞めるとまで言い出すほど。

現に、佐藤は去年の社員旅行からかなり積極的に動く様になったし、遠山も満更でもない様子である。

そんなこんなで、ここ最近、各派閥は色めきだっている

光臨原理主義筆頭の葉月の意見はという……。

「だが、やはり遠山君は八神のことが好きなんだよ？ ならば、結果は見えているのではないかい？」

……まあ、そうなるよな。

「しずくちゃん。それは違うわ」

しかし、それに反論するのは花男。

「ここ最近、りんちゃんの心境の変化はかなり変わりつつあるわ。現に社員旅行から接し方も変わっている。これはもう、脈アリだと私は思うんだけど？」

確かに。

あれ以降、佐藤に対する態度が今までと違う。

傍から見れば、いつも通り八神の愚痴を話しているようにしか見えないが、声の抑揚や仕草に落ち着きが無い。

八神しか見えていなかった遠山の視界に、明確に佐藤という人物の度合いが広くなっているのは明白だ。

花男はそれを見逃さなかったようだ。

「罅があかないね。敦君。君はどう思うんだい？」

今度は俺に議題が振られた。

こうなることは予期していたため、俺もあらかじめ用意して置いた持論を展開することにした。

「そうだな。客観的な心象から行くと佐藤を応援したくなる気持ちはある。だが、遠山本人の気持ちを優先するなら八神ってところだろうな」

「ふむ……続けてくれ」

葉月に促され、俺は続ける。

「まず、この三角関係で一番問題なのは遠山本人が二人のことをどう思っているのかという点にあると思う」

重要なのは、遠山が八神と佐藤、それぞれに対する想いが明確にしないといけないということだ。

ここにいる三人だけでは必然的に情報が少なすぎる。

こういう時、双方が暴走して対立の溝が深まりすぎないようにするのが俺の立場。

楽にしてやれ派の公約だ。

よって、俺は提案をした。

「というわけで。とりあえず、遠山と八神と佐藤をよく知る人物からそれぞれ意見を聞くことにした。社内の人間関係を悪化させな

いたため、全て匿名で声も加工してある。それを踏まえて聞いて欲しい」

俺はプロジェクトを操作し、スクリーンに映像を映し出す。現れた人物達が、それぞれ自分たちの意見を述べた動画だ。

映っている人物は、モザイクがかけられており、声も変わらないように編集を加えた。

『そうですね。確かに遠山さんの気持ちには明確に変化があると思います。私個人としては佐藤さんを応援したいですね。八神さんは私のことを名字で呼ぶので』

『わ…私は、まだどちらとも言われまへんね。その…佐藤さんには色々迷惑かけてしまうたんで』

『…私、は…多分、りんちゃんは…もつと、自分の気持ちに正直にな…なって、ほしいなって…思い、ます』

『もうなんでもいいので決着ついてくださーい!!』

「とこんな感じだ」

「匿名である意味を感じられなかったのは私の気のせいなのかな？」

葉月の質問に対し、俺は肩をすくめることで答えとする。

実際、俺もそう思ったが、こうでもしないと話にならないと思ったからだ。

「まあ、これも所詮外野のやつかみにすぎない。重要なことはもつと他にある」

俺の言葉に、皆が真剣な表情となる。

葉月は眼鏡をかけなおし、花男は髪を手櫛で整え始める。

「7年間。実に長かったが、この鼎立抗争もいよいよオーラスを迎えようとしているということだ」
そう。

この対立の決着がつく時が来たのだ。

「敦君。君はどうするつもりだい？」

「さあな。俺は元々中立派だ。どっちかの味方をするなんてことは

ない。ただ……」

「ただ？」

俺が言葉を止めたので、葉月が続きを促す。

俺は一度咳払いをし、会議室にいる二人に聞こえるような声で宣言した。

今から言う一言は、ここ最近の俺の考えでもある。

俺は胸を張って言った。

堂々と言い放った。

「願わくば、3人全員が笑って終わられる結末になつて欲しいと思つているだけだ」

光臨原理主義者筆頭の葉月とシュガー党筆頭の花男が、ニヤリと笑った。

「ふっ……。君らしいね」

「それが一番難しいことなのよ？」

こうして、最後の戦いが始まるうとしていた。

「ところで葉月、さつきから気になつてたんだが、お前なんですつと縛られてんだ？」

「ああ、これはね。この前の増田君の件で遠山君にシメられたんだ」

ひふみ視点

「はあ……リーダーって大変だな」

先日のゆんちゃんの一仕事を思い出して、私は一人ため息をついた。ゆんちゃんが遅れている事や、その原因も含めてちゃんと解決できてよかった。

敦さんが後から完成させてくれたからスケジュール的な遅れもなかったし。

でもそれで、ゆんちゃんが、『ズルしたことを叱ってください』と言われるなんて思つてもいなかった。

彼女を叱るイメージがわかかなかったからコスプレしたキャラのマネをするのは失敗だった。

敦さんだけじゃ無く、青葉ちゃんにまであの様子を見られてしまうなんて…恥ずかしいよ。

もし純君にまで見られたら生きていけないよお……。

と顔を真っ赤にしながら入社してきた私は給湯室の近くを通りかかった。

「あれは…」

給湯室の中には、りんちゃんがいた。

電気もついていない給湯室で、一人立っている後ろ姿が見えた。

「ふう……んん……」

大きく深呼吸をしているようだ。

大丈夫かな？

この前、純君のことで話を聞いてもらったしなにか相談に乗れることがあるなら話を――

「……………」

「……………!!」

「!?」

びくつとする私。

今のつて、りんちゃんの声だね。

なんかすごく大きな声を出し始めた。

「り…りんちゃん?」

今までにない奇行を見せるりんちゃんに、思わず声をかけてしまった。

「ひゃあ!? ひ、ひふみちゃん!?」

私が声をかけた瞬間にビクツとした様子で振り返ってきた。

……びくつきしてるのはこっちだよ。

「ど、どうしたの? 何か…あった…の?」

「えっと…これは…これは……」

恥ずかしそうに両手で顔を隠すりんちゃんの言葉を待つ。

その言葉に、私は耳を疑った。

「コウちゃん発声練習なの!!」

「コウちゃん発声練習!?!」

何言ってるの!?

「あ…あのね、佐藤君にコウちゃんの話をするとき、噛まないように練習しようと思って」

「なるほど…」

「どしちやっただのかしら？　前は平気だったのに、緊張しちやっただ…」

真つ赤な顔のりんちゃんが、俯きながら言った。

…りんちゃん、やっぱり。

この様子を見て改めて確信した。

それに、私も人と話すのは苦手だ。

今でも純君や青葉ちゃんと話すときだって、どもつちやうこともあるくらいだし。

それでいつも話のテンポを合わせて貰ってばかり。

だから、りんちゃんが困ってる気持ちは私には痛いほどわかるんだ。

「りんちゃん…元気、出して。練習するのは…いいこと…だから。

私も…付き合う…よ」

「ひふみちゃん…っ」

私はそつと彼女の手を握る。

彼女は少し驚いたようだけど、すぐに笑顔を見せてくれる。

「ありがとうひふみちゃん！」

「うん……！」

私たちは二人で微笑みあう。

そして……。

「セーの……」
「！！！！」

変化した日常

ゆん視点

「そ、それでね。コウちゃんったらね。この土日にご飯作りに行つてただけど、洗濯物ずつと溜めつぱなしだったの。いつもちゃんとしなさいって言うてるのに、結局全部私がやってあげたの。もう、私がないと本当にコウちゃんはだめなんだから」

「……」

あー、いつもの光景やな。

私は自分の席に座って隣のブースの様子を伺う。

八神さんの愚痴を話す遠山さんとそれを聞いている佐藤さん、をニヤニヤ見ている花男さん、を見てる……ひふみ先輩!?

先日、彼氏との件で物議を醸したその人が、この状況に賢明な視線を送っていた。

イーグルジャンプでは見慣れたこの異様な連鎖に、またもや驚きの声を上げてしまった。

でもどないしたんや?!

今日はそこにひふみ先輩まで加わっているのだ。

いや、ひふみ先輩と遠山さんはソコソコ長いつきあいやからわからなくはないけれど……。

「えっと、あの……」

私は恐る恐る声をかけることにした。

すると、こちらに気付いたのかひふみ先輩が振り向く。

「あ……ゆんちゃん」

「ひふみ先輩、何してとるんですか?」

「……ゆんちゃんは、気付いてる?」

「え?何をですか?」

「りんちゃんのこと……」

「はい、まあだいたい察しはついていますけど……」

遠山さんが八神さんのことが好きで、それを佐藤さんに話しているという状況は知つとる。

ひふみ先輩も知つとるんやろう。

私も嫌なタイミングで盗み聞きしてしもうたんやけれど、しかも私が敦さんのこと好きなことバレとつたし。

でも、ひふみ先輩が言いたいのはそういうことやないみたいやつた。

「りんちゃん…佐藤君の事、好きになってる」

「へっ!？」

そっち!？」

いや、佐藤さんが遠山さんの事好きって話じゃないん!？」

ていうか、それ以上に……。

「い、いや…ひふみ先輩も知ってますよね? 遠山さんって、八神さんのことが好きなんじゃ……」

「…うん。だから、ね。りんちゃん…佐藤君も好きに、なってる」
………はいいい!？」

遠山さんが八神さんのことを好きになつとるというのわかる。

それと同時に佐藤さんのことも好きになつとる? どういうことやねんそれ!! わけわからん!

動揺する私を諭すように、ひふみ先輩は話し出した。

「りんちゃん、よく佐藤君のこと考えてて、それで仕事中ミスしたりすることがあったの。それに、この前は…うまく話せないって、言つてたし」

それは前に聞いたことがある。

でもそれとこれと一体なんの関係が……。

「それで…りんちゃん、そのことに気がついてないの」

………はい?？」

「えーつと…つまり、こういうことですか? 遠山さんは八神さんが好きなのに、同時に佐藤さんにも惹かれてしもうて、それが本人の中で処理しきれていない?」

「う、うん………そんな感じかな………」
整理しよう。

まず、遠山さんが八神さんの事を好きだということは確定事項やと

して、そして佐藤さんの方だが……これはまだわからへんということらしい。

何故なら遠山さん自身が佐藤さんの事を意識し始めてしもうてるからだという。

要するに両思いになっっている状態に近いということだろう。

遠山さん自身も自分の気持ちがよくわかっていない状態で、この事態を招いてしまったということだ。

整理しても、理解しきれない。

でも改めて、ひふみ先輩と一緒に佐藤さんと遠山さんが話しているところを覗いてみる。

滅茶苦茶やけど、2人との付き合いが長いひふみ先輩が言うならホンマに……。

「それとね、コウちゃん。昨日なんてお風呂上がりパンツ一枚でウロチョロしてたんだよ。いくら私しかないからって、女の子がなんだから少しは気にしてほしいよ。ほんと困っちゃうよね」

ホンマに……。

「あとね、最近コウちゃんってば、ひふみちゃんの肉じゃがが恋しいとか、それを食べられる増田くんが羨ましいとかごはん食べてるときに言ってくるの。なんでそういうこと私のご飯食べてるときに言うかなって思うんだよね」

……ホンマにい？



佐藤視点

「それと、今度久しぶりにどこか遊びに行かないって言ったのに、コウちゃんだったら眠いからいいって言って全然聞いてくれないの。せつかくいい天気だったのに……」

「そうか」

今日もいつも通り、八神の愚痴を話すりに、それをニヤついた顔で眺める花男さん。

「……」

……なんかコミュ障が加わってる。

叱らないで

八神視点

仕事をしていた私は、ふと手を止めた。

最近、青葉やひふみに仕事が集まっているおかげで今までみたいな無茶な働き方は出来ていない分、周囲をより意識することができたからだ。

「……」

その中でも一際目立ったのは……りんだった。

作業をしてる佐藤をずっと見つめて、小刻みに震えているのだ。

そして、その様子に気がついたひふみんがりんの元に近づいてくるのだ。

「りん……ちゃん？」

「私……佐藤君にコウちゃんの話をしてくるわっ……」

「うん……頑張ってる……!」

何か、並々ならぬ決意をしたりんの背中を押すようにひふみんは声をかけると、そのままりんは佐藤の元へと向かっていく。

佐藤の元へ向かう途中、ひふみんは少し心配そうな表情で私のことを見た後、りんの方へと視線を向けた。

その意味も分からないまま、りんは佐藤の所へとたどり着く。

だが、依然として落ち着きが無い。

まるで油を射していないロボットのよう。

その上、手元だけがブルブルと携帯みたいに不自然に震えている。

「ん?」

当然、そんな様子じゃ声をかける前に佐藤に気付かれるみたいで、彼は不思議そうに首を傾げながらりんのことを見る。

「どうした?」

そして、りんもまた顔を真っ赤にして俯きながら、それでも意を決したかのように口を開いた。

「さ……しゃとー君っ!」

「……」

と、思いつきり噛んだ。

普段から皆と自然に話をしている彼女からは想像できないような姿だ。

それを見てか、佐藤も少し拍子抜けしたというか力が抜けていくような表情をしている。

「お……おう……」

しかし、すぐに持ち直すと佐藤は何事も無かったかのように返事をする。

それは、きつと相手が自分よりも年下だからだろう。

「あのね……えつと……そ……その……あうく!!」

だけど、りんはその様子を見て余計テンパってしまった。

ただでさえ赤い顔をさらに朱色に染めて、恥ずかしさのあまりに目も合わせられないのか手で顔を覆ってしまう。

その様子を見かねてか、今度はひふみんが割って入ってきた。

「り……りんちゃんを叱らないで……っ!」

「…叱ってねえよ」

「そんなっ…顔っ、しちや…ダメー!」

そして、ひふみんまでもが何故か変なテンションになり始めた。

いつもならこんなことはしないのだが、今の二人はまるでりんを守るナイトのように彼女に覆いかぶさるようにしながら佐藤の前に立ちふさがったのだ。

りんもひふみんも、何やってんだろう。

「ほ…ほら、りんちゃん。もう一回」

「う……うん……」

ひふみんに励まされて、再び佐藤と向き合うりん。

でもまだ顔が赤く、落ち着きが無い。

「しや…しやと……待って」

そして、また噛みそうになる始末である。

りんもそれは分かっているのか、大きく深呼吸を一つ。

そして――

「佐藤きゅん！」

「おいしいな」

佐藤も思わずツッコんでいた。

いや、あんな噛み方したら誰だって突っ込むと思う。

りんはまた口を両手で押さえながら、体をプルプル震わせていた。

それを見たひふみんは慌ててフオーしようとしていた。

明らかに今までと違う光景について行けない私は、呆然とその様子

を見ていることしかできなかった。

……でも、少しずつ分かってきたこともあるのだ。

それは、りんが何か大きな壁にぶつかっていると言うことだ。

彼女は今、おそらく勇気を振り絞っているのだろう。

だからこそ、あんな風におかしくなっているのだ。

佐藤と離れたあとも、自分の席ですっと項垂れている。

それも最近に至っては特に顕著なのだ。

絶対何かおかしい。

「りんはずつとあんな調子か……」

こんなりんは初めて見た。

いつも私のことを支えてくれてばかりだった。

なのに、りんがこんな風になった時、私はずつと助けられていない。

それが、なんだか無性に悔しかった。

それと同時に、なんとかかしたいという気持ちに駆られた。

「私がりんのためにできること……なにかあるかな？」

考えを巡らせる。

なんだろう。

私がりんにして喜んでもらえること……。

これは試練なのかも知れない。私が、今までどうりんと接してきた

かを測るための。

「……っ!？」

その時だった。

私の脳裏に電流が走る感覚を覚える。

そうだ、これしかない！

私にしかできないことはこれだ!!

「よし！ 私、もう会社でスカート脱ぐの辞める!!」

「バカー!!」

宣言した瞬間、後ろからひふみんにハリセンで殴られた。

「痛いよひふみん！」

「もつと！ りんちゃんの！ ために！ なること！ 考え！ て

!!」

怒られた。

珍しくひふみんが大声出している。

というか、出し過ぎて過呼吸になってない？ 大丈夫？

「はあ……はあ……はあ……」

息切れて倒れそうになるひふみんの肩を掴むと、ゆっくりと座らせてあげる。

すると、彼女は少し落ち着いたようで、乱れていた服装を直すように服を整えてから再び口を開く。

「コウ……ちゃん……」

「ごめんひふみん。いつもりんがそれで怒ってるから」

真剣に考えて出した結論がこれとか、我ながらどうかと思うけど、今はこうするしか思いつかなかったのだ。

でも確かに、それだけじゃ足りないのは分かっている。

今のりに必要なのは、まず安心感なのだ。

どんな形でもいいから、私が側に居ることを知らせることで心の負担を減らしたいと思ったのだ。

「……でもわかった。りんのためだもんね」

りんと同じで、私もひふみんに背中を押されたようだ。

それだけ、ひふみんも成長してるんだ。

人と話すのがあんなに苦手だったのに、今では自分なりの言葉を言えるようになった。

それに比べて、私はどうだろうか。

まだ成長できていないのではないか。

そんな不安が頭を過ぎる。

だけど、ここで諦めたら本当にダメになる気がした。
だから、頑張ろう。

私だつてりんを助けられるはずだから。

●
青葉視点

「おい、涼風。ちよつといいか？」

出社してきてすぐのこと、相変わらず目にひどいクマをしている敦さんが声をかけてきた。

「どうかしました？」

「いや…なんかさつきごみの分別が全然出来てないって苦情が来たんだが、何か心当たりはないか？」

「えつと…すみません。よくわからないです」

「そうか……」

敦さんはいぶかしむような表情をしている。

確か…ゴミの分別とか掃除とか、りんさんがよく気がついて積極的
にやってくれているから忘れガチになっていたかも。

本当なら私達手伝わないといけないのに……。

「涼風さん、宮本さん、少しいいですか？」

「あ、うみこさん、おはようございます」

敦さんと顔を見合わせて困っているところに、今度はうみこさんが
やってきた。

うみこさんの表情も少しだけ怪訝な顔をしている。

「実は、給湯室がとてつもなく散らかっていて、コーヒーマシンもすごく苦
かったのですが、何か知りません
か？」

「……」

「……」

またもや身に覚えのない話だ。

でも、それもさつきのゴミの分別の件と同様、いつもりんさんがよ
くしてくれている。

一体どういうことだろう。

「ぎゃーなにこれー!!」

悲鳴がブースの奥から聞こえてくる。
はじめさんの声だ。

私たちは一斉にその方向を見る。
ブースの中を見た私達は啞然とした。

床には小さな豆粒が散乱していて、足の踏み場もないほどに荒れている。

「あ…青葉ちゃん」

「は…はじめさん、これは…?」

「わかんないよお…朝来たらこんなことになってたんだよ」
状況が意味不明すぎてついていけない。

だけど、敦さんは何かに気づき、散らばっている豆粒の1つを拾い上げた。

「…これ、キャットフードか?」

「え!?!」

言われてみれば、確かに見たことがある。葉月さんのペつとであるもずくちゃんが元気そうに食べていたのが記憶に新しいからだ。

私も可愛くてつい色々あげちゃうけれど、基本的にこの会社だとりんさんがよく世話をしていたように…。

「どれも、遠山がやっていたことだな」

「でも、りんさんがこんなことします?」

りんさんはいつも真面目で、きちんとした人だ。

掃除だつてこまめにやってくれるし、だから私達もちやんと整理するよう心がけている。

確かに最近、りんさんの様子は落ち着いていない。

何もないところでひふみ先輩と一緒に叫んでいたり、佐藤さんと話すとき、いつも噛んだりしていた。

だけど、それでここまでひどい有り様になるのかな?

「一体誰がこんなこと…」

「私だよ!」

「!?!」

突然背後から声をかけられ、私と敦さんは驚いて振り返る。

そこには、腰に手を当てて仁王立ちする八神さんの姿があった。

「や…八神さん？」

だが、いつもの八神さんとは決定的に違うところがある。

まず違うのは服装。

普段のすこしラフな格好では無く、真つ白で可愛らしいフリルがついたワンピース。

これは、私が去年のマスターアップ休み明けに目の当たりにした光景と同じものだ。

髪型も、その時と同じようにしようとしているつもりなんだけど、色々うまくいかないのか毛先があちこちに跳ねてしまっている。

まるで、今にも泣き出しそうな子供のようだった。

「あの…それは？」

「ちよつと気が向いただけ……」

と、気まずそうに視線を逸らす八神さん。

何かなにやら全然分からない私達は顔を見合わせるしかなかった。

「ま…まつて…！」

もはやどう収集をつけていいかもわからなくなり始めたとき、突

然、八神さんの前にある人物が割って入った。

それは…

「ひふみ先輩？」

視線が一点に集まる状況を一番苦手とする彼女が、この状況で前に出たのだ。

しかも、今まで見たことがないくらい真剣な表情をしていた。

そして、彼女は大きく息を吸って言った。

「こ…こウちゃんはっ、落ち込んでるりんちゃんの代わりに、頑

張った、だけなの…！」

「え？」

「はあ？」

何を言っているのかわからず、思わず素の声が出る。

敦さんも全く同じようで、私と同じ反応をしている。

「だから…こウちゃんを叱らないで……っ」

それだけ言うと、ついに限界が来たのだろう。

ふらりとよろめいたかと思うと、そのまま倒れそうになる。

「だ、大丈夫ですか？」

すぐに駆けつけてひふみ先輩を支える。

「だ、だいじょうぶ……」

「いや、全然そうは見えないぞ」

「あ、あう……ごめんなさい」

弱々しい声で謝ると、その場にへたり込む。

本当に辛そうだ。

昨日もりんさんとなにか叫んでいたし、佐藤さんや八神さんに対しても珍しく大声出していた。

きつと相当な体力を使ったのだろう。

私とお昼ご飯食べにいった時だって、話しすぎて疲れたと言って彼氏さんのところに行ったくらいだもん。

それなのに、この現状に耐えられるはずがないよね……。

私はひふみ先輩をまだ席に座らせる。

「大丈夫ですか？」

「うん……ありがと、青葉……ちゃん」

これでとりあえず一安心していると、敦さんは八神さんの前に立っていた。

そして、諭すように話しかける。

「とりあえず、お前の気持ちはわかった。だがまずはとりあえずこれをなんとかするぞ。もしこの状況を遠山に見られたらそれこそ――」

「おはようございま——ちよつと何これ!? 何があつたの!？」

最悪のタイミングで、りんさんが入ってきてしまった。周りを見て理解できないらしく、目を丸くしてキョロキョロ見回している。

本当最悪だ。

ようやく收拾に傾いてきたこの状況は、またもや大混乱に陥るのであつた。



八神視点

「はあ…やっぱり慣れないことするもんじやないなあ」

佐藤のことで落ち込んでいるりんを元気づけようとした私は、記憶の限り彼女が喜ぶと思えることを全てやろうとした。

その結果がこれである。

昼休み、食堂のテーブルで一人ため息をつく私。

結局、あの後片付けも皆が手伝ってくれたおかげで午後の仕事には間に合ったものの、青葉達にまで迷惑を掛ける始末となってしまうた。

情けない。

「どうしたの、ため息ついて」

そんな私に声をかけてきたのは、りんだった。手には自分の昼食である巾着袋が提げられている。

「りん……」

「今朝はびっくりしちやった。でもひふみちゃんから聞いたよ。私のために頑張ってくれたんだって。その服装も、私が喜んでくれたの覚えてくれてたんだ」

その言葉を聞いて、私の中で罪悪感が生まれる。

違うんだよ、りん。本当は私がもっと上手くやるべきだったのに。

「ありがとう、コウちゃん」

「…まあ、別にたいしたことないよ」

しかし、彼女は満面の笑みで私に感謝してくれた。

あらためてお礼を言われると照れくさくなっていけない。

私が思い描いていたのと全然違う。

「それに、やってくれるならこれからは全部コウちゃんにおまかせしようかな?」

「うえっ!?!」

彼女の発言に思わず変な声を出してしまう。

そんな私の様子を、りんはクスリと笑って見ていた。

「フフ…冗談だよ。でも、少しずつ手伝ってくれるとうれしい」

「……善処します」

苦笑いしながらそう答えると、りんは満足そうに微笑んで私の正面に座る。

「…ねえりん」

改まって私はりに声をかける。

これは私がりんのためと思つてやったことだけど、今朝のドタバタのせいでできなかったこと。

私はテーブルの上にタッパーを置いた。

「これ、作ってきたからよかつたら食べて」

それは、昨日ががんばつて作つた肉じゃがだ。ネットや本で見様見真似でやってみたものの、我ながらうまくできたと思う。

りんは驚いた表情をしていたが、すぐに嬉しそうな顔に変わる。

「いいの？ コウちゃんが作つたの？」

「うん、お正月の時、怒らせちゃつたから…」

私がお正月の時、ひふみんの作つた肉じゃがをつまみ食いしたら、りんが妙にムキになっていたのを思い出して作つてみた。

というより、これくらいしか料理なんて思いつかなかつたからだ。

「あの時はごめんね。もう気にしてないし大丈夫だから」

「そっか……」

ほつと胸を撫で下ろす。

すると、りんも巾着袋の紐を緩めて弁当箱を取り出した。

「……実は、私も作つてきてるんだ」

「え？」

「ほら」

そう言つて彼女も自分の弁当箱を取り出す。

そこには、私が何度も舌鼓をうつたりんの肉じゃがが入れられていた。

「わあ……」

いつ見ても美味しそうだな。

さすが毎日自分で作るだけある。

「せっかくだし、お互いの交換しない？」

「あ、いいね」

断る理由なんかどこにもない。私達はお互いの肉じゃがを手渡し合う。

「じゃあまずはコウちゃんの肉じゃがから……」

と、りんが箸を伸ばす。

「いただきますー」

そして口に運んだ。

「……」

まず、りんの口から聞こえたのは、ゴリっという音。

その後が続くのは咀嚼しやくの音ではなく、まるで何か固いものを噛んでいるかのような音がりんの口元から漏れてくる。

「……んぐ」

「り…りん？」

「……固い」

「……はい？」

一瞬何を言われたのか分からなかった。

固かった？ 何がだろう。

もしかして味のことだろうか。いや、まさか……。

「りん、もしかして不味かったとか？」

「ううん、おいしいよ。でもちよつと、ジャガイモに全然火が通っていない」

「(ぎ)めん」

どうやらそういうことらしい。

私は頭を下げた謝った。これも自分なりに頑張ったんだが、りんのようにうまくいかなかった。

やっぱり、経験の差なのかなあ。

しゅんとする私を他所に、りんは笑顔で私を見つめていた。そして、ゆっくりと私に話しかける。

「でも、すごく嬉しいよ。ありがとうコウちゃん」

「りん……」

「次はもつとおいしくできるように、私も教えてあげるね」

「……お願いします」

なんだか情けないような気がしたが、彼女に喜んでもらえるならそれでよしとしよう。

私は改めて彼女の優しさに感謝した。

「じゃあ、次はりんの肉じゃがだね」

「うん」

今度は私がりんの作った肉じゃがを口に運ぶ。

果たして、お味は……。

「うん、すごく美味しい」

「ふふ、そうでしょ？」

その言葉を聞いて、りんも得意げだ。

「やっぱりりんの肉じゃがが一番だよ」

「もーそんな調子の良いこと言つて、ひふみちゃんの時に言ったこと覚えてるんだからね」

「うっ…だつて、ホントに美味しかったんだもん」

りんの肉じゃがはいつも食べているから、逆にひふみの味が新鮮だつたんだ。

ホントにひふみんの彼氏は幸せ者だと思う。こんなにおいしい料理を食べられて。

でも、それと同じくらいりんの料理も美味しいんだ。

いつも変わらない安心する味。

それが私の好物なんだから。

「……」

「…「ウちゃん？」」

でも、少しだけいつもの味と違った。

絵には作り手の心が映し出されると言われている。

料理もきつと同じだ。この肉じゃがを作ったのは間違いなくりんののに、なぜか違う人のことを考えながら作ったように思えた。

…前よりふわふわした味がする。

なんかこう…

そう言う二人の顔は真つ赤だ。

あれだけ叫んでいるのを聞かれたら普通は恥ずかしいよね……。でも、それだけじゃない気がするんだよね……。……。

だって――

前の食べたりんの肉じゃがのことを思い出す。

……あの味。

いつも食べている味とは違った……新しい可能性を秘めた味だった。あれと、なにか関係しているのかな？

「まあいいや。とりあえず二人とも仕事に戻ってよ」

「そ、そうね」

「うん……わかった」

とりあえず今はまだ就業時間だし仕事しないと……。

私は2人を連れてキャラ班のブースに戻ることにした。

「わー美味しそうですね」

「私、お金ないからこういうの食べられないんだよねー」

「はじめはまたオモチャ買うからやろ」

と、青葉達がお茶会をしていた。

ゆんがいつも用意しているテーブルには、紅茶とお菓子の他に雑誌が広げられている。

「あ、みんななに読んでんの？」

「あ、八神さん、これ見てください」

青葉に言われて、私も覗き込むようにして見ると、そこには『ステーク特集』と書かれた記事が載っていた。

お値段も結構張るらしく、なかなか手が出せないみたいだ。

「シャトーブリアンか……確かに高いよね」

「へえ、シャトーブリアン……」

そうりんが口に瞬間、周囲の視線が彼女に集中した。

「あ……うう……」

遅れて気がついたのか、りんも口を押える。

「れ、練習の後遺症が……」

そんなりにひんみんは苦笑いしていた。

……やっぱりなにか変だ。
今に始まった話じゃない。

りんは私と二人のとき、よく佐藤の話をしていた。
それもフェアリーズストーリー3が完成した辺り……いや、青葉が入社してきてからかな？

何かひどく落ち込んだり、上の空になったりしていた。それも全てに佐藤が絡んでいる。

佐藤の方もそうだ。

誕生日に7つもプレゼントを渡してきたりと、りんのことを意識している節がある。

まさか、二人は――

私の脳裏にある可能性が浮かぶ。いや、それはまだない。

あるなら絶対に何か私の耳に入るはずだ。

それをしないということはそういう関係になっていないということ。

でも、りんが佐藤のためにナニカしようとしていることは、最近の変な行動から想像がついた。

……りんは、もしかして佐藤の事が好きなんじゃないだろうか？

と、脳裏に過った考えが離れない。

確かめないといけない。

りんも気持ちも、佐藤の真意も。

それから仕事に戻った私は、二人の様子を観察することにした。

しばらくは何事もなく、お互いの仕事をしていた。

そこら辺は真面目な二人だ。特に問題は起きなかった。

だけど――

仕事を始めて2時間ほど経った頃だろうか？

動きがあった。

そろそろ休憩時間の頃合い。

佐藤がタバコを吸いに席を立つ。そのタイミングを見計らっていたかのように、りんが立ち上がった。

そして佐藤の後を追う。

私もそれを追いかけるようにして、二人に気付かれないように後を追った。

佐藤は屋上に出ると、すぐにりんが入る。

私は入り口に隠れて二人を見守る。

佐藤はスマホを操作しながら一服している。

私に背を向ける形なので表情までは見えないけど、りんの顔はよく見えた。

「……………」

最近よく見る落ち着かない様子。

佐藤に話しかけるタイミングを伺っているのだろうか？ 私は息

を殺して、その様子を見守る。

すると、りんが一步前に出た。

「さ……しゃとう君っ」

「ん？」

りんがまた佐藤の名前を言えなくなっていた。

何回も練習しているのだろうけど、その成果は出ていないようだ。

「やだ…私ったらまだ間違えて…」

「大丈夫だ」

でも佐藤はそんなことを気にせず、りんの顔を見た。

怒っても呆れてもいない、慣れたような態度だった。

「噛んでもいいから続けろよ」

むしろりんが名前を言えないことに対して、嬉しそうな顔をする。

——ドキツとした。

いつも無愛想だった彼が、あんな顔するなんて……。

私が見たことのない優しい目だった。

まるでりんの事を好きみたいなの……そんな感じ。

「……………うん」

りんもそれに答えるよう笑顔で応える。

それはとても可愛い笑顔。

私が今まで一番近くで見ていた彼女の笑顔。

それを佐藤に向けていた。

「それでね、コウちゃん。私に気を遣って会社のゴミ捨てとかやってくれたの。でも、上手いかなかったみたいで入社してきたときすぐびっくりしちゃったの。普段からちよつと気にしてくれたりあんなことにならなかつたのに、ホント、困っちゃうんだから」

「そうか」

「やっぱり、佐藤君がコウちゃんの話聞いてくれるとうれしいわ。コウちゃんの話は、佐藤君が一番話しやすいから」

「まあ、俺でよければいつでも」

この時確信した。

りんは佐藤のことが好きなんだと。

でも、まだ確かめていないことがある。

それは佐藤の真意だ。

佐藤はりんをどうしたいのか？

それが分からない限り安心できない。

りんの事は好きだ。

一緒に居たいし、ずっと側にいてほしいと思っている。

だからこそ、聞かないといけない。

彼女が本当に幸せになるために。

「じゃあ、私、仕事に戻るわね」

りんはそう言つて屋上から出る。

咄嗟に身を隠した私は、扉越しから聞こえる足音から、彼女は階段を下つていったと判断した。

そして、入れ違うように屋上に繰り出す。

そこには佐藤も仕事に戻ろうとしてタバコの始末をしているところだった。

「佐藤」

私は構わず佐藤の名前を呼んだ。

「？」

「アンタ、りんをどうしたいの？」

単刀直入に聞いた。

りんのことをどう思っているのか。

りんの事が好きなのか、それともただの職場の同期として見ているだけなのか？

それをハッキリさせる必要がある。

そうしないと、いけない気がした。

「自分のモノにして、休日自宅に来てもらって……ご飯でも作ってもらおうつもり!？」

「お前と一緒にすんな」

私の質問に、彼は即答した。

……確かに、これは私がいつもりんにしてもらってることだな。

なんか、墓穴を掘った気がしないでもないけれど、今は関係ない。

佐藤が何を考えているのか、それを突き止めることのほうが大事なのだから。

「……りんはいつも私を支えてくれた。初めてキャラダザに抜擢されたときも、ADで落ち込んでた時も、ずっとそばにいてくれた」

「……」

「りんがいなかったら、私は今、こうしてこの会社で青葉達と働けていない」

「……」

「私にとって、りんはそういう存在だよ。アンタはりんにそれが……それ以上のことができるの？」

「……」

「それを示せないなら、私はりんを渡せない」

「……」

佐藤は何も言わない。

……もう、口にする必要すらないと悟った。

まっすぐ、私から目を離さず、見つめている。

それは覚悟を決めた男の眼差し。

りんに対する気持ちの本物であると証明しているようなもの。
私はそう受け取った。

「……しゃべりすぎた。今はその目を信じるよ」

私はそれだけ言うと、屋上を後にする。

これ以上話すことはない。

佐藤、見せてもらうよ。アンタに何が出来るのか。

●
佐藤視点

「……」

八神の背中を黙って見送ってしばらく経った後、仕事に戻ろうとした俺は、通路を歩いていた。

「さ・と・う・く・ん。見てたわよ〜♥」

突然、通路の影から顔を出したのは花男さん。

「どうやら、さっきの八神の会話、いや、きつとりんのところから見ていたのだろう。」

「いつにもまして上機嫌に身をくねらせながら近づいてくる。」

「格好良かったわね〜。コウちゃんとのにらみ合い。もう私ドキドキしちゃったわ♥」

相変わらずのハイテンションぶり。

だが、客人はかれだけではなかった。

「いやあ、あんなピリピリした八神を見たのは久しぶりだよ。あれもまた可愛…じゃなかった。格好良かったねえ」

葉月さんも眼鏡を光らせてこちらにやってきたのだ。

ただでさえ狭い通路が情報過多で窒息しそうになる。

「私、純君やひふみちゃんみたいな甘々も好きだけど、やっぱり恋はバチバチしないと燃えないわよね!」

「ありきたりではあるけれど、三角関係もまたラブコメの王道だからねえ!」

俺はただ、先走る二人を無言で見ているだけだった。

「……」

「……」

「……あの、佐藤君? まさか、コウちゃんの眼力に気圧されて、うまいこと言葉が出なかったとかじゃないわよね?」

「……マサカ」

「あ」

「オレノメヲ、シンジテクレ……」

正直、普通にビビった。

あそこで八神が出てくるなんて思いもしなかったからだ。

俺の事を睨んでくるとは思っていたけど、あんな本気の目つきをするなんて……。

八神もりんとそれだけ長い付き合いだ。そのあたりは譲れないものがあるんだろうな。

「もう! 佐藤君、しっかりしたまえ! 正念場なんだよ! どうするつもりなんだい!? 八神にもバレてしまっているんだよ!」

本来、八神とりんの関係を推し、俺にちよっかいをかけていた葉月さんですら慌てて俺の肩を揺らしている。

どうやら、もう後戻りできない状況らしい。

「……まあ、八神がきっかけなのは癪ですけど……」

俺も、覚悟を決めないといけないときがきたようだ。

「気合いは入りました。俺はもう腹をくくりませう」

「じゃあ佐藤君、いよいよなのね!」

「はい。言います。それでダメだったら……おとなしく辞めます」

そうだ。今更なんだ。

覚悟なんてもうすでに決まっていただろう。

りんへの想いも、りんの幸せを願っていることも、全て事実だ。ならば、後はそれを彼女に告げるだけ。

大丈夫だ。俺は、出来る。

俺はりんが好きだ。

ずつと一緒にいたいと想っている。

それを八神に納得させられなくてどうして叶えられようか。

「……辞めることになったら、葉月さんには申し訳ないです。せつかくリーダーに抜擢してくれたのに……今回の新作は、最後までやりきりますので」

「今から情けないことを言うんじゃ無い。私達のことには気にしないでぶつかってくるんだ。7年間、好きだったのだろう？」

「……そうっすね。アンタらはもつと苦労したほうがいいっすよね？」

(本人の前でもこれくらい雄弁だったらしいのに……)

●
りん視点

「……佐藤君が、辞める？」

自分の席に戻ってきた私は、そう呟いてしまった。

佐藤君にコウちゃんの話をした後、会議の準備に奔走していた私は、ついさつき通路で佐藤君が話していたことを耳にしまった。

——おとなしく辞めます。

葉月さんと花男さんの前で確かにそう言い切った。

……佐藤君が、会社を辞める？

前、失恋したら辞めるとは話していたけど……佐藤君、失恋したの？

開発が終わるまでと言っていたからまだ先だと思っていた。だつて、さつき話した時だつて変なところなんて無かつた。

いつも通りだったのに……。

だから余計に状況を受け入れられない。全然理解できない。なんでそんな急に!?

？いや、でも、もしかしたら私が知らないだけで前から何かあつたのかも……。

尚更相談してくれば、力になれたかもしれないのに。

ああでも、佐藤君は自分が勝手に頑張るから気にしなくていいって言つてたし……でも……。

「りんちゃん？　どうか、したの？」

隣のブースにいるはずのひふみちゃんが心配そうな表情をして話しかけてきた。

「どうやら私は相当深刻な顔をしていたらしい。」

きつと、私が佐藤君に話をしに行こうとしたのを気付いてくれて、気にかけてくれていたんだ。

「ひ、ひふみちゃん。さつき……佐藤君が会社辞めるって聞いちゃつて……」

「え!？」

「私どうしたら……」

「お……落ち着いて!」

動揺する私の肩に手を置いて、優しく声をかけてくれる。

そのおかげか少しだけ落ち着くことができた。

「ごめんなさい取り乱して」

「ううん大丈夫。とりあえず……佐藤君と話そ?」

「でも……なんて話せばいいか……」

そもそも何を聞けば良いのかわからない。

それに聞いてしまったら今までの関係が崩れてしまいそうで怖い。

佐藤君は大切な人だ。

彼とずつと一緒にいられると信じて疑っていなかったほど。だから、こんな形で関係が壊れてしまうなんて想像すらしていなかった。

「りんちゃんは…自分の気持ちを……正直に佐藤君に伝えてあげて」
「そ…それって？」

ひふみちゃんが話している意味がわからなかった。自分の気持ちを伝えると言われてもピンと来ない。

でも、真剣な顔つきをしている彼女を見ると冗談ではなさそうだ。

「あ…あの、ひふみちゃん？ さっきから何してるの？」

「背中！ 押し！ てる！ のー！」

いつの間にか私の後ろに回り込んだ彼女は私の両肩を掴むとそのままぐつと押しされ、そのままズルズルと

オフィスの中を進んでいる。

そしてそのまま会議室までたどりついた。

一体どうということなのか全くわからなかった。

わかることはただ一つ。

今からひふみちゃんにとんでもない勢いで背中を押されているということだけだった。

「ここで待ってて……」

席に座らされた後、ひふみちゃんにそう言われてしまった。

ひふみちゃんはきつと、佐藤君を呼びに言っているんだと思う。

駆け足で出て行ってから10分ほど経った頃だろうか。

佐藤君がやってきた。

「…よう、なんか知らんが滝本が背中を押してきたんだが」

会議室に入るなり、彼はキョロキョロしながら中に入ってきた。

普段ならまず声をかけてこない彼女に話しかけられたせいかな、少し落ち着きが無い。

私も同じだ。

来るとは思っていたけれど、こんな形で佐藤君と話すなんて思っていなかった。

だから、心の準備が出来ていないまま彼の方を向いてしまう。

…なんか、こんなこと、前にもあったような。

「…確か、前もあったよな。俺とお前が気まづくなったりするとき、こうやって滝本に招集されるの」

…：…やっぱり同じことを考えていたみたいだ。

「佐藤君が私の後ろにいる幽霊が好きって行った時よね」

「それは忘れてくれ」

懐かしむように言う彼に、思わず笑ってしまった。

緊張していた空気が緩んでいくのを感じる。

良かった。

もう大丈夫。

私は、この人とならどんな壁だって乗り越えていける気がする。

そう思えることが嬉しかった。

佐藤君の方は、まだ不安そうな顔をしていたけど、ゆっくりと呼吸を整えて声を出す。

「…あの時お前に、『男の子の中では佐藤君が一番好き』と言われたな」

「あ…うん」

確かに、あの時は気が動転していたこともあったけど思い返すと少し恥ずかしい。

改めて言われると尚更…。

でも、あれは本当のことだから否定はできないしするつもりもない。

すると佐藤君は俯きながら話を続ける。

「…：…今も昔も、お前の中での一番は、八神なのかも知れないが」

「佐藤君？」

「りん、聞いてくれ」

…：違和感に気付く。

なんか、私が佐藤君に自分の気持ちを正直に伝えるつもりだったのに、伝えられている？

そんな風を感じた。

それに、佐藤君の雰囲気がいいつもと違う。

まるで、何か覚悟を決めたかのような……。

その雰囲気にも飲まれて何も言えず、黙って耳を傾けるしかなかった。

佐藤君は一度大きく深呼吸をした後で口を開いた。

「あの幽霊話以来、色々……お前を意味不明な言動で困らせたが……」

「意味不明な言動？」

「ああ……その、社員旅行の件とか、誕生日に……7つもプレゼントを渡したりだとか……」

佐藤君は、私と過ごしてきた思い出を振り返るように一つ一つ話していく。

その度に、心臓が跳ね上がるくらい鼓動が激しくなっていく。

どうしようもなく、胸の奥がくすぐつたい。

まさか、これって……。

「むしろなんで気付かないんだお前って感じだが……」

「えっ!？」

急に佐藤君の顔色が暗くなる。

私もしかして怒られてる!？」

「どうしよう! 全然身に覚えがない!!」

私が困惑している中、彼は更に続ける。

「これは、ひふみちちゃんが言っていたことと同じ……? じゃ……本

当に……私の気持ちを正直に……伝えるってこと……? 佐藤君は、

意を決した表情で顔を上げた。

「要するに……その……俺は……りんのことが……」

たどたどしい口調でゆっくりと、でも確かな声色で言葉を紡いでいる。

私は固唾を呑んで次の言葉を待った。

「す

愛と追憶の十二カ 後編

佐藤視点

き、だ」

言った。

すさまじいほどの間があったような気がしたが言った。

まるで俺の7年間で集約されたかのような告白だったが、もうこの際格好なんてどうでもいい。後は、りんの答えを聞くだけなのだから。

「あ……あの……」

言葉を紡ぐのに必死なのか、困った顔でりんは言葉を探しているようだった。

俺はただりんの答えを待つ。

どんな形であつても俺は受け入れるつもりだ。

そして、そしてようやく、りんは口を開いた。

「ごめんなさい……」

っ……。

胸に何か刺さる感触があつた。

そうか、やっぱりな。

わかつてたよ。お前にとって俺はそういう対象じゃないことくらい。いい。

お前が好きなのは八神だつてことくらい。

だからそんな悲しそうな顔をするな。

わかつていた……ことだから。

「なんて言ったのかしら……？ 間がありすぎて最初の単語忘れ

ちやつた……」

「俺こそ本当にすまん」

俺とりんの間には微妙な空気が流れて、なんとも言えない雰囲気になつてた。

本当に申し訳ない。
完全に俺のせいだ。確かに長かった。
忘れるもの無理もない。

この状況がよほど辛いのか、りんの目にも涙が浮かんできているように見える。

「…本当にごめんね。私、佐藤君の話聞きそびれちゃうなんて……」
いや、もう今にも泣き出しそうだ。

「ううっ、私…佐藤君と話すとき言葉噛むし……聞き逃しまで……っ」

マズい…これじゃもう一度言い直すどころの話じゃ無い。
なんとかして彼女をなだめて落ち着かせないと。

でもどうやって？ こんな時に限って思いつかない。

「り——」

「私もう駄目だわああああああっ！」

ついにりんは大声で叫び出し、会議室を飛び出してしまった。

くそ、俺のヘタレせいぞろい！

早く追いかけてあげなければ。だが、何て言ってフォローすればいいんだ！?
わからない。わからないけどこのまま放っておくわけにはいかない。

「りんー！」

俺は急いで会議室を出て行った。

りんを追いかけてようと廊下に出た瞬間、目の前に見知った顔が現れる。

「あ、佐藤さん」

ちっこいのがちやうど会議室の前を通りかかろうとしているところだった。

「え!?! りんさんがいなくなった!?!」

「涼風、お前は知らないか?」

俺は涼風にこのあらましを話した。

りんに告白したことは伏せたが、おそらく涼風は察するだろう。だけど、今はそれどころではないのだ。

「でも、確かにオフィスから出たのは見たかも……です」
「わかった。ありがとう」

少なくともこのフロアにいないことは分かった。
とにかく今は別の場所を探そう。

俺は急いでオフィスから出ようとしたときだった。

「佐藤さん！ これ見てください！」

後ろを振り向いた途端、涼風が指さしたのはフロアの壁に立て掛けられているホワイトボードを指さしていた。

本来ならそこには、グラフィックチーム全体に周知するはずの情報が大まかに書かれているのだが、今は――

『すみません。すこしさぼらせていただきます。遠山りん』

「りんさん。伝言してからさぼってる!!」

りんらしいといえづらい行動だが、まさかここまでするとは……。

『勤怠はちゃんと処理してあります。お給料はいただきます』

「しかもさぼり方が丁寧！ さすがりんさん!!」

涼風、そこは褒めるところじゃない。

とにかく、今は彼女の足取りを追うしかない。

「私、他の皆にも声をかけてきます！」

そう言うと、涼風も慌ててキャラ班のブースに駆け出しに行く。

よし、俺も行くか。

俺はりんの後を追ってオフィスを出た。

のだが……。

「いたか？」

「こつちにはいませんでした」

「屋上にもおりません」

「サーバールームも怪しかったのですが見つかりませんでしたね」

「私も……見てない」

涼風の呼びかけに答えて、集まってくれたのは飯島にうみこ、そして滝本だった。

彼女達は全員、俺の気持ちをすでに知っている奴らばかりだ。だか

らこうして手を貸してくれるのだろう。

だがしかし……肝心のりんの姿がないとはどういうことだ？ 俺達が必死になって探しても見つからないということ、彼女は社内ではなく外に逃げたということだろうか？ だが、一体どこに？

「何してんの？ みんな」

「八神……」

騒ぎを聞き付けてか、八神までやって来てくれた。

俺はさっきのことがある手前、顔を合わせずらかったのをわかっていたのか、滝本が代わりに前に出る。

「あの……りんちゃんが……いなくなっちゃったの。……私が佐藤くと話せるようにしてから急に……」

「ふーん……そっか」

意外にも八神の反応は淡白だった。

りとあれだけ共にいたのだから、もっと驚くと思っていたが……。

「……」

八神はなにも言わずフロアを後にしようとした。

「……コウちゃん？」

「プリン食べてくる」

「もー!!」

らしくもなく声を出して怒る滝本に背を向けたまま、手を振って去っていく。

なんとというマイペースさだ。

だが、仕方がない。

八神の協力は得られなくてもりんを捜すしかない。

「……りんちゃんのカバンはあったよ」

「そっか」

滝本の言う通りならそう遠くへは行っていないはずだ。

電車やバスが使えないから家には帰っていないのは確実。

だがそれだけでも範囲が広すぎる。どうしたらいいんだ？ 手がかり一つないままでは見つけることなどできない。

…それに、これ以上涼風や滝本の時間を取らせるわけには行かない。
い。

「…お前ら」

俺は彼女たちの顔を見回した。きつと今の俺はすごく情けない顔をしてるに違いない。

だけどそんなことを気にしてる場合ではない。

「あとは俺一人がいい。りんを見つけ次第連絡する」

「え!?!」

「佐藤さん!」

「佐藤さん!?!」

三人の声を無視して俺はエレベーターに乗り込んだ。りんが行きそうな場所、りんが寄りそうなところ。

考えろ。

考えるんだ。

りんはどんな性格で、何を考えてるかわからないところがあるけど、根は素直だ。

いつも一緒にいる俺にはわかる。

なら、りんが居そうな場所はどこだ?

…:ダメだ思い付かない。

だが、こうして手をこ招いていることだけはできない。

ビルを出た俺は駅の方角に向かって走り出した。

とにかく彼女が行きそうなところを片っ端から当たるしかない。

もしそれで見つからなかったら、もう警察に頼むしかないだろうが、それは最後の手段だ。

りんは今、おそらく不安になっているはずなんだ。自分の身に起こったことに動揺してる。

だから早く迎えに行つてあげないと。

こんなことで彼女を傷付けたままにはしておきたくない。

俺はひたすら走った。

りんが行きそうな場所に頭の中で地図を描いてみるが、それは全て会社の中の光景。

俺はずっと…彼女がイーグルジャンプの中にいる姿しか見ていない。それが当たり前だったのだ。

それは、俺がその姿しか知らなかったからか？

あるいは、彼女にとってこの場所がそれほど大切なものだったのか？

この際どちらでもいい。

俺が知ってるりんのこと、何かあるか？

それは……

「……」

思い付いた。

たった1つだけ。

確証はない。

はつきり言っただけ。俺が知ってる唯一の、りんが苦手としたこと。

それに賭けるしかない……っ！

俺は再び走り出した。

りんがそこにいると信じて…。

●
りん視点

会社を飛び出してからも、一心不乱で私は走っていた。

行く当てなんてない。

自分がどこを走っているのかもわかっていない。

どうしてなのか自分でもよくわからなかった。

ただ無性に息が苦しくて、胸が痛くなつて…。

その痛みから逃れるために、気が付けば足を動かしていた。

佐藤君が辞めてしまうかもしれないということ。

自分が彼に迷惑をかけてしまったということ。

全てが重なって私を苦しめていた。

今まで我慢してきた感情が一気に爆発してしまったみたいに、涙が止まらない。

どうしようもないくらい、辛かった。

このまま消えてなくなりたいと思うほど、私の心を締め付ける。こんな気持ちになったのは初めてだった。だから私はただ、足を動かし続けるしかなかった。どうしてこうなったの？

その答えを知りたくて、私は走り続けた。走っても、走っても、答えなんか見つかるはずもないのに……。気が付けば、私は知らない裏路地に迷い込んでいた。

そこは薄暗く、昼間だというのに夜のような雰囲気醸し出している。

ここがどこなのかもわからない。

だけど……少しだけ気分が落ち着くような感じがした。

「……う？」

あれ？

ここどこだろ……？

さつきまでオフィス街にいたのに、今は住宅街の方に来てしまっている。

どうやら無意識のうちに道を変えてしまっていたらしい。

そしてとんでもないことに気がついてしまった。

……私、どうやってここまで来たのかな？

確か……会社を出て……それから……。

「っ……」

ダメだ、思い出せない。

気が付いたらここにいた。それだけだ。

とにかく、ここはどこかわからない。

引き返そうにも道なんて覚えていない。

それどころか、今自分のいる場所の方角すらわからない。

だから、会社がどの方向にあるかすらも……。

「そ、そうだわ。携帯でタクシーを呼べば……っ!!」

と、ポケットに手を入れてみて、はっとした。

携帯がない!?

嘘!?

財布も!?

確かいつも鞆の中に入れてたから……私今鞆持つてない!?
ど、どうしよう!? これじゃ連絡も取れない!!

この状態では帰ることもできない。

私はその場にへたり込んでしまった。これからどうすればいいの
か全くわからない。もう何が何だかわからなかった。

私は顔を手で覆って泣き出しそうになってしまう。

こんなところで泣くわけにはいかない。でも、もうこれ以上感情を
抑えることなんてできなかった。

自分の気持ちバラバラで、何をしたいかもわからない。
わからないよお……。

自分の胸にあるナニカがいよいよ溢れてしまいそうになったその
瞬間、背後の方から声をかけられた。

「りん」

「!？」

私はビクツとして振り返った。

路地裏から大通りに出られる入り口に、彼はいた。

金髪で、

背が高くて、

少し目つきが悪くて、

口下手で、

だけど優しくて、

いつも私の話を聞いてくれた人。

「佐藤君……」

彼の顔を見たとき、安堵と同時に羞恥の気持ちも出てきた。

ずっと彼には失礼なことばかりしている。その上、仕事を放りだし
てまで駆けつけてくれたのだから。

と、とにかく事情を説明しないと……。

「ち、違うの佐藤君。これはその……少し頭を冷やそうと思って
走ってたら道が分からなくなつて、財布も携帯も忘れたから帰れなく
なつちやつて、でも助けを呼ぶのも恥ずかしくて……っ」

自分で言っていて意味が分からない。

それでも、私は必死になつて説明しようとした。だけど全然言葉も気持ちもまとまらない。

話せば話すほど、わけがわからなくなる。

なんでこんなことに……っ！

佐藤君はそんな私を見て、ふうとため息をつく。

呆れられた？

……当然だよ。こんな面倒くさい女、嫌になるに決まってるよ。

「うう……私ってホント駄目ね……」

「駄目じゃ無い」

えっ？ 私は驚いて彼を見上げた。

佐藤君の表情には、怒りの色はなかった。むしろ優しい笑みを浮かべているようにも見える。

どうして……？ 私は何も言えずにいると、彼は言った。

「りんは、駄目じゃない」

それはまるで、私が言いたかったことを全て代弁してくれたかのよう
に優しい声で続ける。

「こんな薄暗い路地裏で道に迷つて、財布も携帯も忘れて、自分のし
たいことも見失つて、うずくまっている場合では無い」

「恥ずかしいわ佐藤君!」

私は思わず叫んでしまう。だってそうでしょう!

私みたいな人間をフォローするより、もっと言うべきことがあるはず
なのに……。

だけど、彼から出た言葉は意外なものだった。

「こんなところにいちや駄目だ。ほら、帰ろう」

差しのばされた手を私はまじまじと見つめる。

その手を取つてもいいのだろうか？ また迷惑をかけてしまうん
じやないだろうか？ そんな考えが頭に浮かんでくる。

しかし、その前に私の足は勝手に動いていた。

気が付けば、私は彼の手に自分の両手を重ねていた。

温かくて大きな手が、ぎゅつと握りしめる。

そのまま引つ張られ、私は立ち上がる。

「さあ、行こう。りん」

「……うん！」

私は満面の笑顔で返事をしたのだった。

「……とところで、どうしてここがわかったの？」

「……お前、前にもこうして道に迷ってたときあったら？」

「え？　ええ……」

忘れるわけが無い。

休暇の時に行こうとしていた市場の会場が分からずパンフレットを片手に困っていたところを佐藤君が見つけてくれて、車に乗せてくれたこと。あの時は本当に嬉しかった。

いつもそばにいてくれた彼の横顔が、とても頼もしくみえた。

そして、あの時と同じように……彼が隣にいてくれることが何よりも嬉しいと感じていた。

手を握ってくれて、私と並んで歩いてくれることが。

それだけで、さつきまでの不安が嘘のように消えていく。

「……」

そっか、やっと気付いた。

私って、佐藤君のことが好きなんだ。

今まで気が付かなかったけど……もう誤魔化すことなんてできない。

私は……この人の事が大好き。

いつも私を支えてくれて、辛いときや逃げ出したくなったとき、手をさしのべてくれた彼のことを。

それが分かった瞬間、私は握っている手に力を入れた。

だから、ずっとそばにいたい。

会社なんて辞めないで欲しい。

でも、それも叶わないんだ。だって佐藤君には好きな人がいる。

そして、振られたばかりの彼にこの気持ちを伝えることはきつと酷なことだ。

それでも……伝えないと……。

「ほらりん、ついたぞ」

「え？ あっ……」

いつの間にか会社の前に来ていた。
通い慣れたビル。

イーグルジャンプとアルファベットで書かれた看板。

間違いない、コウちゃんや、佐藤君、私が大好きな人達がいる大切な場所。

そこに、帰って来れた。

「……ありがとう、佐藤君」

私はそう言つて、彼の手を離れた。

名残惜しかったけれど、いつまでもこうしている訳にもいかないから。

「あの、ごめんね。今日は私混乱してて……あの、佐藤君がやめ……辞めるって聞いちゃって」

「!？」

佐藤君は驚いた顔をしていた。

当然だろう。私がこんなこと言うなんて思ってもいなかったはずだから。

「佐藤君が失恋したのも悲しいのだけど、佐藤君がいなくなっちゃるのが……さびしくて……」

声が震えてくる。目頭が熱くなってきた。

泣いたら駄目だ。今ここで泣いてしまったら、また彼に迷惑かけしてしまう。……そう思えば思うほど涙が出そうになる。

「……はあ」

必死に堪えている私の言葉に、佐藤君はため息で返した。

「また何を絶妙なタイミングで立ち聞きしたのか知らんが……俺は辞めない」

「ホント!？」

思わず顔を上げてしまった。

でも、私が見た佐藤君の顔は、たまに見せる力が抜けているような顔になっていた。

「いや…結果次第では辞めることになるかもしれないが…」

「どっち?!」

私の目から逃げるように視線を外す佐藤君。

なんだかさつきまでと立場が逆になっているみたい。

でも、この言い方はまだ佐藤君は失恋していないってことよね？

じゃあ…佐藤君の好きな人って一体。

私の頭に浮かんだ疑問に答えるべく、佐藤君は、ゆっくりと話し出した。

「結構前に、俺の好きなヤツの話になったとき、りんを指さしたよね？」

「ええ。私の後ろにいる幽霊の女の子が好きという話よね」

「実は俺、靈感ないんだ」

「!?!」

答えを知るところか、余計に訳がわからなくなる。

佐藤君は何を言っているの？

私は思わず固まってしまう。

「……」

佐藤君との間に再び沈黙が訪れる。

どうしよう……。何か言わないと……。でも言ったら言ったでまた変なこと言ってしまうそうだわ。

そんな私の思考を読んだかのように、彼は口を開いた。

それは、とても真剣な表情だった。

まるで、覚悟を決めたかのような……。

「まあそこから色々こんがらがってしまったわけで……要するに俺の好きなヤツは……もつとこう……ちよつとこい」

「?」

佐藤君は手で私を呼ぶ。

言われるがまま彼の近くまで歩く。

目と鼻の先、さつき手を繋いで歩いた時とは違う距離。

すこし身体を傾ければ、彼に寄りかかれるほど近く。

「えっ!?!」

すると、急に体が引つ張られる感覚があった。

いつの間にか私は彼の腕の中にいた。

かつて抱きしめられた時のように。

彼の胸の中、さつきよりもずっと近くに彼を感じる。

顔が熱い。きつと真つ赤になつてゐるんだらうなつて自分でもわかる。

それくらい、私はドキドキしていた。

そして、その鼓動が伝わってしまひそうなほどの近さで……。

「耳元で言うから、ちゃんと聞いとけよ」

そう言う佐藤君の吐息が耳にかかった。

ビクツとしたけど、私は何も言えない。

ただ彼の言葉を待つだけ。

私を抱き寄せる手に力が入るのを感じた。

「俺はお前が好きだ。お前と同じ未来を歩いていきたい……から、

俺と一緒に……いて欲しい」

聞こえた。確かに聞こえた。佐藤君の声が、私だけに聞こえる声

が、はつきりと。

ずっと堪えていた涙がこぼれ落ちる。

さつきとは違った意味で泣き出してしまふ。

嬉しかった。

彼の口から聞いたことが。

彼の気持ちを知れたことが。

この気持ちを伝えることができる。

それが本当に嬉しい。……だから私は、自分の想いを口に出す。

もう、誤魔化さない。嘘つかない。

「はいー」

そうして私は彼の背中に手を回した。

彼の温もりを感じながら、彼の胸に顔を埋めた。

そして、私は思いつきり叫んだ。

今までで一番大きな声で……。

私の大好きな人に、私の想いが届くように。

●
青葉視点

佐藤さんに仕事に戻るよう言われた私達は、全員、会社の入り口の前で抱き合っている二人を見ていた。

身を隠していたのは消えたりんさん探しに協力してくれた、ゆんさん、ひふみ先輩、うみこさん。

この場にいる全員が歓喜に震えていた。

(佐藤さん!!)

(りんちゃん!!)

そして――

「やったわ——むぐっ!」

いつの間にか花男さんもいた。

感極まって叫ぼうとしたのをうみこさんに口を塞がれている。

相変わらずすごい身のこなしだ。

だけど、すぐに意識は二人の方へ戻される。

佐藤さんとりんさんは、まだ抱き合ってたままだったのだ。

二人が恋人同士になったことは間違いない。

これは本当に喜ばしいことなのだけれど…。

共に歩く未来も素敵ですけど、今は就業時間ですよ!

二人とも!!

「ど…どうしたらいいんでしょうか? 私達……」

最初はうれしさのあまりひふみ先輩と手を握り合ってしまうほど浮き足だっていたけれど、二人の光景を見て逆に冷静になっていく。

花男さん以外の皆さんもオロオロし始めてしまっている。

でも、そんな中、一番先に口を開いたのは、意外にもひふみ先輩だっ

た。

「お…お祝い…しないと…だね」

「そうですね…でもあの場に水を差すんは気が引けますね…」
ゆん先輩の言うとおり、佐藤さんとりんさんはまだ抱き合っていた。

まるで、離れたら消えてしまうと思っっているかのように、お互いをしっかりと抱きしめている。

そんな姿を見ると、とてもじゃないけど声を掛けられない。

本当にどうすれば…。

「じゃあ私におめでどうって言えばいいわ!!」

「なんで花男さんに!?!」

うみこさんの拘束から抜け出した後、キラキラした顔でそんなことを言い出した花男さん。

水を得た魚のように生き生きしている。

「私が一番やきもきしたのよ!? だから私が一番頑張ったようなモノじゃない!!」

「ええー」

確かにいつも佐藤さんを煽って殴られているところはよく見かけましたけど…。

それだったら私だっていつも佐藤さんに八つ当たりされてましたから頑張ったとおもうんですけど…。

「とにかく祝ってー!」

…でもこのままだと話が進まない。

仕方ありません。

ここは花男さんの提案に乗りましょう。でないところの場の收拾がつかない気がしてきた。

「おめでどう(ぎ)ぎいます」

「おめでどう(ぎ)ぎいます」

「声が小さいわー!!」

私に続いて、他の皆さんもお祝いの言葉を口にする。

それでも二人は気づかず、未だに抱きしめあつたまま。

本当に幸せそうな顔をしています。

そんな姿を見てみると、私も幸せな気分になってくる。きつと皆も同じだろう。

誰も彼も笑顔で、祝福していた。

「ちよつと青葉もひふみんもゆんも何してんの？」

——ただ一人を除いて。

「……あ、八神さん」

「もう、仕事はどうしたの——」

騒ぎを聞きつけたのか、私達が席にいなかったのを注意しに玄関まで降りてきたのかはわからない。

でも八神さんも、遅れて目の当たりにした。

佐藤さんとりんさんが抱き合っているところを……。

「……へえ、佐藤やるじゃん」

特に慌てる様子もなく、平然と呟いていた。

一瞬だけ、八神さんの顔が微笑んだ気がした。

安心したような、でも少し寂しそうな、そんな表情。

それからすぐいつもの顔に戻った。

「ほら皆、仕事に戻って！ 佐藤もりんも後でちゃんと呼んでね」

「あ、八神さん！」

いつもの仕事モードになり、踵を返して去っていく。

その後ろ姿を見送った。

入り口に入って行く風になびいた金髪から、どこか名残惜しさを感じさせた。

……これで良かったのかな？

私は心の中で問いかける。

答えはない。

ただその風だけが、私達の頬に触れていった……。

いらない

青葉視点

佐藤さんがりんさんに告白して、なんと付き合うことになりました！

7年間という片思いが、ついに実ったのです！

一時はどうなるかと思いましたが、佐藤さん、すごいです！

それから、翌日。

いつも通り出社すると、キャラ班のブースは色めきだっていました。

何故そうなっているかというのと、理由はもちろん……。

「りんさん、おはようございます」

「おはよう青葉ちゃん」

ブースでは幸せそうな顔をしているりんさんに挨拶する。

りんさんは顔を真っ赤にして照れている。

とても上機嫌だ。

なんか、りんさんの周りに花が見えるのは私が昨日残業して寝不足だからなのかはわからないけれど、とにかく喜ばしいことに変わりは無い。

「よかったですね。佐藤さんのこと」

「ええ」

りんさんの笑顔は今まで見たことがないくらい輝いていた。

というか、また花が増えている気がするんですけど気のせいですよ
ね？

「佐藤君の好きな人の事ですつと悩んでいたんだけど、その好きな
人が……わ、わたし……私だったなんて……」

いや気のせいじゃ無い。

なんか増えてるし。

それもすさまじい勢いで。

最初は小さな花だったのに、今は大きな花がたくさん溢れている。

「私……私……うれしくてもう……」

「りんさん！ 埋まります！ 花で埋まります!!」

この人、喜びすぎて身体から花を咲かせる能力でも手に入れたんだろうか。

それともやつぱり幻覚かなあ……。

そんな事を考えているうちにも、りんさんの花畑化は進行していく。

このままだとキャラ班どころかフロア中が埋め尽くされるんじゃないかと思うほど。

もちろんその後仕事にならないので他の方に止めていただきなるとか事なきを得たわけだけど、それにしてもあそこまで喜ぶりんさんを見たのは初めてかもしれない。

よっほど嬉しかったんだろうなあ。

だけど、一番嬉しいのは佐藤さんのはずだ。

何せ7年もの長い間、ずっと想い続けてきた相手なんだから。

それで、その佐藤さんとはいうと……まだ来てない。

どこにも見当たらない。

まだ空間に残っている花を掻い潜りながら、佐藤さんを探していると先に見つけたのは花男さんでした。

「あら涼風さん。おはよう」

「おはようございませう。佐藤さん、まだ来てないですね」

「そうなの。連絡したら意地でも来るって言ってたけれど……来れないんじゃないかしら？ 胃痛で」

「やりきりましたからね」

思わず苦笑いになる。

無理やり体を引きずって出社する姿が目には浮かぶようだ。

それだけ覚悟と勇気を持って告白してくれたということだろう。

本当によかった。

これで佐藤さんも会社を辞めなくて済むだろうし、これからも一緒に仕事をすることができる。

それに、きっと私への八つ当たりも無くなるだろう。

良いことづくめだ。

……ただ1つを除いて。

「……それにしても、八神さんは無反応ですね」

花男さんと別れた後、隣のブースの様子を見て一人呟いた。

そう、八神さんのことだ。

彼女もりんさんとの付き合いは長い。それこそ、入社してからずっと一緒だったと言っていい程に。

昨日見せたあの顔の他に、目立った反応をしていない。

今も、自分の席で私達が作ったモデリングのチェックをしているみたいだし……。

さすがに昨日の今日だから、多少なりとも何か思うところがあるはずなのに。

それが全く見えないのだ。

まるで、最初から何も無かったかのように。

「りんさんに恋人が出来たのに、喜ぶとか、むしろ反対するとかあってもいいと思うんですけど……」

普通なら嫉妬したり落ち込んだりしておかしくはない。

「あ、青葉ちゃん。おはよ」

「ひふみ先輩、おはようございます」

八神さんを観察していると、ひふみ先輩も入社してきた。相変わらず眠そうだ。

いつもの事なので気にしないけれど。

それよりも、八神さんのことを聞いてみよう。

八神さんとりんさんとは、両方とも付き合いが長い。

だから、こういう微妙な変化に気がつきやすいかも。

「あの、ひふみ先輩。八神さん、どうですかね？ 昨日のこともありますし……」

「そうだね……でも、私は、りんちゃんの方が……心配」

「え？」

ひふみ先輩の視線を追うようにりんさんを見る。

そこには相変わらず幸せオーラ全開のりんさんがいた。

「あんな感じで……仕事、できるのかな？」

確かにあの調子では仕事になりませんよね。

最近も佐藤さんのことで変になって、色んなところがあつち向いてほいしていたような気がするから、ひふみ先輩の言い分には賛同できた。

それも心配だ。

恋にかまけてさぼるなんてこと、あのりんさんが思いたくないけれど、今までの変な行動の数々がそれを信じさせてくれない。

果たしてりんさんかというと――

「午前中の会議の資料はこれで完璧ね。午後からは取引先の人と会う予定だから、その資料も作らないと。それと、α版の仕様について大和さんと話を合わせておかないと」

……完全に杞憂だった。

仕事に支障が出るどころか、いつも以上にテキパキと今日の仕事の段取りを立てていることだ。

ひふみ先輩は呆れた顔で肩をすくめる。

私も同じ気持ちだ。

昨日あれだけ取り乱していたのに、どうしてこんなに切り替えが早いのだろうか。

佐藤さんと恋人になれたことがそれほど嬉しかったのかな。

それはそれで喜ばしいことだけど、ちよつと釈然としない。

私が女々しいだけなのかなあ。

考えがまとまらないうちに、りんさんは仕事モードのまま八神さんに声をかけていた。

「コウちゃん。来週の会議用のファイル出来上がったから見てもらえるかしら?」

「あ……うん」

やっぱり八神さんも様子がおかしい。

なんというか、いつもの覇気が無い。

完全に生返事で、上の空といった感じだ。

まあ、昨日まであんなことがあったんだから無理もないかな。

と、考えていると、八神さんが不意に声を出す。

「…りん」

「何？ 何か不備があつた？」

「ううん……大丈夫だよ。ありがとう」

「そう？ なら良かったわ」

「……」

「……」

会話がすぐに終わってしまうと、八神さんはそのまま黙ってしまった。

りんさんも、そんな八神さんの様子を見て不思議に思う表情になる。

「コウちゃん？」

「……あのさ……りん」

「どうしたの？」

八神さんは意を決した様子で、ゆっくりと口を開いた。

そして、次の瞬間とんでもないことを言った。

「……もう、私の世話焼かなくていいから」

「……え？」

一瞬、何を言われたのか分からなかった。

いや、意味自体は分かるんだけど、理解できない。

でもそれは、ある意味で一番恐れていたことだった。

八神さんとりんさんの関係は、ずっと変わらないと思っていた。

けれど、りんさんは佐藤さんの想いを受け入れた。

それはつまり、この三角関係の終結を意味する。

それ以上に、八神さんの口から、まさかそんな言葉が出てくるとは思わなかった。

りんさんも予想外だったようで、目を丸くしている。

「どういうこと？」

「そのままの意味だよ」

「だから、それが分からないって言ってるの！」

「いいからー！」

「……」

あまりに突然過ぎる出来事に戸惑っている間に、八神さんの声が大きくなる。

同時に空気が変わる。

不穏な雰囲気の流れ出す。

りんさんの周りにある花も徐々に減っていくのが見えた。

まだ納得がいかないと、目で訴えているのがわかる。

いきなりこんなこと言われて、納得しろというのが無理な話だ。

八神さんも、きつとそれを理解している。いや、八神さんだから、分かっているはずだ。

……胸騒ぎがした。

ふと、八神さんがこれから何を言おうとしているのか……。

なんとなく、わかってしまったから。

「………鬱陶しいのよ。いつもいつも、母親みたいに文句言っ

「っ!?!」

りんさんの顔色がみるみると変わっていく。

唇が震えだす。

瞳孔が大きく開く。

息遣いが荒くなる。

「正直、迷惑」

りんさんの目尻には涙が溜まっていた。

今にも泣きそうな顔をした。

でも、それでも必死に耐えているように見えた。

私は見てられないくらいいたたまれない気持ちになった。

でも、八神さんは止まらない。

突き放すように、

トドメを刺すように、

最後の言葉を放つ。

「りんはもう……くらくらなく」

彼の本質を見た

青葉視点

さつき、何が起こったのかを簡単に説明します。

りんさんが、

浮かれて、

落ちた。

む……むごい。

私は、ひふみ先輩と、その一部始終を目の当たりにしてしまった。まさに急転直下。

入社直後の明るい花畑は消え去り、ブースには重苦しい沈黙が流れていた。

りんさんは下を向いて、肩を震わせている。時折鼻を鳴らす音が聞こえてくる。

「コウちゃんにいらないうって言われたみたいね」

話を聞きつけた花男さんも、私達のブースにやってきてこの状況を見ている。

「八神さん……りんさんと佐藤さんが幸せなときになんであんなこと……無神経にもほどがありますよ……」

りんさんの気持ちを考えれば、八神さんの言葉は残酷すぎた。あの言い方ではまるで、りんさんが邪魔者扱いじゃないか。

「青葉ちゃん…言い過ぎ、だよ」
「だけど、それを聞いたひふみ先輩は、私の言葉を諫める。」

「コウちゃんは確かに、少し…無神経なところあるけど…会社でスカート脱ぐし…すごいにぶちんだけど…!」

「ひふみ先輩もなかなか言い過ぎてませんか？」

私だつて、八神さんの態度はどうかと思うことは多々あったが、ここまで酷いことを言う人ではない。

それにいくらなんでも、あんな言い方はないんじゃないだろうか。あんなことを言われれば誰だつて傷つくだろうに。

しかも、よりによってあの八神さんから言われたのだ。

立ち直れるわけがない。

今も暗い顔をしている。

この場を唯一なんとかできそうな佐藤さんも、まだ入社してきてない。
い。

つまり、誰もこの状況を打開する術を持っていないということだ。

重い。とにかく空気が重い。

なんというか、息をするだけで辛い感じ。

ホントにどうすれば…。

「ここは佐藤君に連絡を…いいえ、私が介入することじゃないし、ちゃんと来るつて言つてたしね」

と花男さん。

携帯を見つめながら呟いている。

確かにそうだよね。

こういう時こそ、頼りになるはずの彼氏さんだもん。

早く来て欲しいです。

花男さんの独り言は止まらない。

むしろヒシヒシと殺気が滲み出ているような気さえしてくるんです。
すが…。

「来るわよね？　ここでヘタレて来なかつたら…流石の私もぶん殴

るからね!!」

「花男さんなんか怖いです!」

と：とにかく、今は八神さんとりんさんをどうにかしないと。

りんさんはソツとして置いた方がいいとして：まずは八神さんだ。

せめてあの言い方についての弁明だけでもして貰わないと!

「私、八神さんと話してきます」

「青葉ちゃん、待って」

八神さんが席を立ったところを追いかけようとしたとき、ひふみ先輩が袖を引つ張ってきた。

「私も：行く」

確かに八神さんとりんさんの次に仲が良いのはひふみ先輩だし、二人きりだと八神さんも話しづらいかもしれない。

だったら一緒に行ってもらった方が良さそうかも。私達は八神さんを追いかけてフロアを飛び出した。

どこに向かったかはある程度検討がつく。

きつと一人になりたいはずだ。

だとすると屋上しか無い。

私とひふみ先輩は迷わず階段を駆け上がっていった。

そして、その予想通り、八神さんの姿を見つけることができた。

「八神さん!」

「あ、青葉、ひふみんも」

八神さんは柵に背中をつけて風に当たっていた。

少し傷んでいる長い金髪が風に揺れる姿が、とても寂しげに見える。

「……どうしたの?」

表情には影が差していた。

：なんで、そんな顔するなら、りんさんにあんな酷いこと言ったんですか。

私は怒りを抑えることができなかった。

でも、今はそれをぶつける時ではない。

八神さんがこんな状態になっている理由を聞かないと。

「なんであんなこと——」

「青葉ちゃん」

私を押さえてひふみ先輩が一步前が出る。

いつもは控えめな性格なのに、珍しい。ひふみ先輩は真っ直ぐに八神さんの顔を見て言った。

「コウちゃんは……これでいいの？」

「……」

その問いに対して、八神さんは答えない。

ただ黙って目を瞑っている。

まるで何か考え込んでいるかのように。

ひふみ先輩は続ける。

「りんちゃんは、こんなの望んでないよ」

それは八神さんが一番分かっているはずでしょ？ と、言っているように思えた。

八神さんは何も言わず、ただ黙っていた。ひふみ先輩もそれ以上何も言うことなく、八神さんの隣に立つ。

「……コウちゃん、りんちゃんのこと、本当にいらなと思うてる？」

「……」

八神さんは無言のままだ。

ひふみ先輩は諦めずに、もう一度聞く。

「ねえ教えて？」

「……」

まっすぐ見つめるひふみ先輩の視線に、八神さんはついに根負けしてしまったのか、ゆっくりと口を開こうとした。

その瞬間だった。

「コウちゃん！」

後ろから、りんさんの声が聞こえてきた。

私達が振り返ると、そこには肩を大きく上下させているりんさんがいた。

走って来たらしい。

「りんさん!？」

「りんちゃん……?？」

私達三人は驚いてしまう。

まさか、彼女がここにくるとは思ってもいなかったから。

「……りん」

八神さんも彼女の登場は想定外らしく、目を見開いている。

りんさんはそのままこちらに向かってくる。

彼女は八神さんの目の前までやってきて、息を整えながら口を開いた。

その声はとても震えていた。

泣きそうな顔をしている。

だけど、泣かなかった。

涙を浮かべながら、必死に堪えている。

それが痛々しくて、胸が締め付けられた。

八神さんは彼女を見るなり、辛そうに顔を歪めた。

そして、彼女に背を向ける。

もう話すことはない、という意思表示なのだろう。

駄目だ。

このままじゃ…。

声を出そうとしたとき、手を掴まれた。

「……」

ひふみ先輩だ。

ひふみ先輩は首を横に振った。

ダメだよ、と目が訴えかけている。

そして、何も言わずに手を引つ張ってきた。

その意味が分かってしまった私は、大人しく従うことにした。

私達はりんさんと八神さんの前から立ち去る。

すれ違いざまに見たりんさんは、悲しそうな、悔しそうな、色々な感情が入り混じった表情をしていた。

「大丈夫でしょうか? あの人二人…」

屋上のドアに身を潜めて、私達は八神さんとりんさんの様子を伺

う。

二人はしばらく無言だったけど、りんさんがゆつくりと話し出す。「……コウちゃんは、私と佐藤君に気を使ってくれてるんだよね？」今にも消えそうな声。

だけど真剣な声色で、りんさんは問いかける。

それに対して八神さんは答えなかった。

りんさんは続ける。

「私に、コウちゃんに世話を焼いてる時間を、佐藤君に使えって言ってるんだよね？」

八神さんはやはり何も言わない。

でも、私には分かる。

八神さんは肯定してる。

そして、否定しないということは、そういうことなのだ。

「コウちゃんは、強いし、格好いいし自分にも、皆にも厳しいけど……誰よりも誰かが傷ついたり、悲しんだりするのが嫌いだもん。だから、私を傷つけることをなんて絶対しないし、言わないもん……」

りんさんは一度言葉を区切る。

八神さんは何も言わず、じつと立っているだけだ。

それでもりんさんは話し続けた。

それはまるで自分に言い聞かせるように。

自分の想いを確かめているかのように。

「だから、あんなことを言ったのは——」

「佐藤の事はどうでもいいけどさ」

りんさんが全てを言おうとしたとき、八神さんが遮る。

その言葉に、りんさんの動きが止まった。

八神さんは振り返る。

そして、りんさんの目を真っ直ぐ見た。

「入社したばかりの時、りんが先輩の人にお使い頼まれたときのこと、覚えてる？」

いきなり話が変わって戸惑いつつも、りんさんはコクンとうなずく。

それを見て、八神さんは懐かしむように微笑みながら言う。それはまるで、思い出話をするかのような口調で。

「あの時、私、りんに聞いたじゃん？ 夢とかないのって」
りんさんと出会ってからの日々を思い出しながら語るかのように。とても優しい声で。

「私は結構、自分のやりたいようにやってきたよ。でもさ……私の世話を焼いてるせいで、りんが自分のしたいことできないのは、不公平だからね……」

八神さんはそれだけを言うと、再び背を向けた。

その背中を見たりんさんの瞳からは、涙が溢れ出していた。

りんさんは八神さんの後ろ姿を見ながら、静かに呟く。

その声は少しだけ震えていた。

「コウちゃん……私は——」

「おい」

りんさんが何かを言いかけたとき、声が聞こえた。

低い声。

それも私達の後ろから。

「二応、当事者の俺をほっといて……話を進めないでもらおうか？」

「佐藤君!？」

「佐藤……」

この場にいる全員が振り返ると、そこには彼がいた。そう、佐藤さんが。

今にも死にそうな顔で、壁に手をつきながら立っていた。

「大丈夫?」

「……おう」

りんさんも八神さんも、お互いのことを忘れて心配している。それだけ瀕死だった。

その体はふらついており、呼吸も荒い。

胃がよほど痛いのか、今も必死に押さえている。

一体いつの間に入ってきたのか、全く気付かなかった。

「……お前らしくもなく妙な気を使っているようだが、わかってないな」

佐藤さんはよろめきながらも、一歩ずつ前に進んでくる。

一歩前に踏み出すどころか、身体を傾けることすら、彼の命を削っているのでは無いかというほど危なげだ。

そんな状態なのに、彼は続ける。

「俺が……俺が……」

だけど、すぐに止まってしまう。

声も出すことすら、彼の体には負担らしい。

りんさんも佐藤さんの元に歩み寄ろうとしたときだった。

「!!」

「佐藤君!？」

なんと、自分で自分のお腹を殴ったのだ。

しかも思いつきり。

鈍い音が響き渡り、りんさんの悲鳴が屋上にこだました。あまりの出来事に、私達は唾然としてしまう。

「……俺が惚れたのは、幸せそうに八神の話をするりん」

佐藤さんは痛みに耐えて、咳き込みながらも言葉を紡いでいる。そ

の目はまだ死んでいない。

「八神のために一生懸命働くりんで……八神のために頑張るりんで……」

そして、八神さんを、しっかりと見据えながら……。

「大体がお前がらみだ畜生!!」

佐藤さんは血を吐くように叫んだ。

「……お前がいなかったら、俺が好きなりんはいなかったはずだ」

そして、再び二人に向かって歩き始めた。

八神さんは動かない。

りんさんは顔を赤くしながら、呆然としている。

ただじつと立っているだけだ。

佐藤さんは少しずつ距離を詰めていく。

「だから、俺は八神が好きなりんごと受け入れる所存だ」

ボロボロの身体を引きずって、今にも倒れそうな身体で、ようやく

りんさんのすぐ隣までたどり着く。

そして、彼女の肩を力強く掴み、引き寄せた。

「お前の大切なりんを……俺にくれ」

佐藤さんは真っ直ぐ八神さんの目を見つめて言った。

それに対して八神さんは何も言わない。

無表情のまま、じつと佐藤さんのことを見ている。

その目には怒りや憎しみといった感情はない。

むしろ、何かを悟ったような、穏やかな目をしていた。

まるで全てを受け入れるかのように。

そして、しばらくすると口を開いた。

「わかった」

その声はとても優しかった。

そして、今この瞬間、7年間という長きにわたる三角関係が、本当の意味で終わった瞬間だった。

「……あと」

「？」

「しばらく休みもくれ……っ」

「…わかった」

——幕切れは、佐藤さんの一言で締め括られた。

本当に締まらない人だったけど、私…私達にとつては最高の結末だった。

そして——

「それでね、佐藤君、すごく格好良かったの！」

今日もまた、彼女は楽しそうに、ひふみ先輩にことの顛末を話している。

それはもう、嬉しそうに。

もう何度目だろうか。

というか、ひふみ先輩もあの場にいたのに……。

でも、いつも通りの明るいらりんさんに戻ってくれた。それだけは素直に喜ぼう。

「全く、八神さん、そういう気持ちならもつとちゃんと言い方があるじゃないですか……」

「だって…半端な言い方だと引き下がらないと思って…」
りんさんを横目に、当の本人は困り顔で頬を掻いている。

元々会話下手なのもあるのだと思うけどあまりにも不器用すぎると思う。

まあ、それもこの人の魅力なのかも知れないけれど……。

「それにしても、佐藤さん、男を見せましたね」

「確かにね」

「……ところで、佐藤さんはいつ職場復帰されるんですか？」

「さあね……」

佐藤さんが会社を休んでから、もう1週間が経過しようとしている

た。

彼女が望んだ形

佐藤視点

あれから1週間か……。

一人暮らしの自室の中央。

床に腰掛け、タバコの紫煙を肺に吸い込んだ俺は、つい先日のことを思い出す。

——お前の大切なりんを、俺にくれ。

八神の前で、りんの肩を抱いて言った言葉。

あんなこと、我ながらよく言えたもんだと呆れる。

しかしあの時の俺は必死だった。

りんの笑顔を失いたくない一心で……。

そしてその想いは、見事通じた。

その結果、今こうして休みをもらい、1週間経っている訳なのだが

——しかし、この夢、長いな……。

そう思い始めた頃、ようやく意識が浮上する感覚があった。

いや、夢じゃ無いな。

これは現実だ。

現に今も休んでいるわけだし。

「職場にこれ以上迷惑をかけるわけにはいかない。

そろそろ復帰しないと……。」

タバコの火を灰皿に押し付け消した時、玄関からチャイム音が聞こえてきた。

……誰だろう？

もうかなり夜が更けている。

新聞勧誘とかならこんな時間には来ないだろう。

なら誰だ？

宅配便が届く予定も無いし……。」

首を傾げつつ立ち上がり玄関に足を運ぶ。

不用心な話だが、インターホンで相手を見る事も、魚眼でドアの向こう側を覗くことも、今の俺にはできなかつた。

何故なら――

――ガチャリ。

「あ、佐藤君」

鍵を外して扉を開けるとそこには…… りんがいたからだ。

……この夢、すごいな。

目の前に立つ彼女の姿を見た途端、そんな感想を抱く。

「よかった。やっと佐藤君の顔が見られたわ！」

呆然としている俺にはお構いなしで、嬉しそうな声を上げる彼女。

ああ、うん、可愛い。

本当に本物みたいだ。

なんていうかこう……いつも以上に輝いて見えるっていうか……。」

「この1週間、佐藤君のお見舞いに行こうとして、宮本さんに住所を聞いて、アプリで道を探したけど、何回も道に迷って、仕方なく帰っ

て……」

「……」

「今日やつとたどり着いたの！ 夢みたい！」

「……」

「…佐藤君がしゃべらない。まさかこれは夢!？」

一人で騒ぐ彼女にハツとしている。

「…い、いひやいわ」

俺はりんの頬をつまんで引っ張って見せた。

柔らかい感触がある。

「…ほら、夢じゃ無いだろ？ こっちこそ急に来るから夢かと思っ
た」

苦笑しながら言うと彼女は微笑む。

そして、今度は俺の顔に手を伸ばして触れて、くにとつまんでき
た。

「ふふ、夢じゃないのよ」

柔らかい手だ。

そして、寒空の下を歩いてきたからか、少しひんやりとした指先が
気持ちいい。

「……」

「……」

思わず黙り込んでしまう。

そして、急に冷静になってきた。

今は現実で、ここは玄関だ。

つまりは、外から丸見えである。

まあ、別に見られたところで問題は無いのだが、やはり恥ずかしい
ものはあるのだ。

気まづくなつて、お互い目を反らしてしまう。

そうか、これは現実か。

今日の前にいる遠山りんは本物か。

なんかものすごく死にたくなってきた。

それに、こんなに指先が冷えた彼女をいつまでも玄関に立たせてい

る訳にはいかない。

「…まあ、入れよ」

「う…うん」

向こうも恥ずかしいのか、ぎこちない動きで家に入るりに続いて、俺もまた家の中に戻る。

…：…なんか変な感じだな。

妙に緊張するというか、ドキドキする。

これが『恋人』という存在なのか？…：…だとしたら悪くはないかも
しれない。

部屋に入った後、りんはキョロキョロと室内を見渡していた。

まるで初めて来た場所のように…：…。

いや、実際初めて来るんだろうけどさ。

「へえー、綺麗にしてるんだね」

物珍しげに見渡しながら言うりん。

「まあ、一人暮らしだから散らかすほどのものが無いだけけどな」

本当は片付ける時間が無かっただけだ。

1週間、何もせずボーツとしていたから。

しかし、その事は口に出さず、誤魔化すように言葉を返す。

「あ、そうだよね。ごめんなさい。つい見ちゃった」

申し訳なさそうに謝るりに、気にしてないと手を振って応えた。

「佐藤君は大丈夫？ 胃痛だって聞いたんだけど」

「ああ」

先日のせいでもかなり悪化しているが、それは言わなくて良いだろう。

考えすぎてしまう彼女の性格だ。

いらん心配かけさせたくない。

一頻り部屋を観察し終えたりんは、持ってきていたレジ袋を上げて俺に見せた。

「佐藤君は休んでて。私、何か作るから」

…：…本来なら手伝ってやりたいのだが、今回は彼女の厚意に甘えよう。

台所に向かう背中を見送った俺は、とりあえずソファアに腰掛ける。それから暫くの間、料理をする音だけが部屋に響いていた。

トントン、コトコト……。

リズミカルな包丁の音。

俺以外の誰かがこの場所にいるだけで不思議と心が落ち着く気がした。

きっとこれは彼女が持つ温かさのようなものなんだろうと勝手に思っている。

俺はタバコを口に加えて、火を付けようとした時、彼女の顔が脳裏に過ぎる。

そうか、これからはりんの前で吸えないな。

職場だけなら気にならなかつたが、彼女のことを考えると、もう吸わないようにしないと……。

その事に若干の寂しさを感じつつ、紫煙を燻らせる。

——あ、この匂い……。

やがて漂ってくる美味しそうな匂いが鼻孔をくすぐり始めた頃だった。

——ガチャリと部屋の扉が開く音がしたのは。

振り返ると、そこにはエプロン姿のりんがいた。

手にはお盆を持っている。

どうやら出来上がったらしい。

彼女はテーブルの上にお皿を置いていく。

そして、最後に箸とお椀を置いた。

今日のメニューは、白米、味噌汁、卵焼きにほうれん草のお浸しといった和食の定番である。

ちなみにお茶碗に盛られたご飯の量が少ないのは胃が弱ってる俺への配慮だろうか。

普段より少なくしてくれたのかもしれない。

俺はいただきますと言って早速食べ始める。

どれもとても美味しかった。

久しぶりに食べる手作りの味。

それを噛み締めるようにゆつくりと咀嚼する。
そんな俺を見てりんも安心したようだ。

「よかった。ちゃんと食べられて」

嬉しそうに微笑む彼女に、またドキツとする。

「ああ、うまい」

「本当？ 嬉しいー！」

本当に嬉しそうだ。

彼女が喜んでくれるのはとても気分が良い。

もつと喜ばせたいと思う。

しかし、残念なことに今の俺にはこれくらいしか出来ないのだ。

もつとたらふく食べてやりたいが、今はゆつくり味わうことにしよう。

「……お前、よかったのか？」

お互いの箸がある程度進んできたところで、気になっていたことを聞いてみた。

「え」

彼女は首を傾げている。

意味がわからなかったみたいだ。……いや、わかるはずがないよな。

何せ主語を抜いてしまったんだから。

「その……今回の事、色々……」

ゆつくりと彼女に尋ねる。

俺の告白を受け入れてくれたこと。

「勢いとかノリで流されてないか？ 本当に……」

りんは八神のことも好きだったはずなのに、俺を選んでくれた。

だから、それがどうしても不安なのだ。自分のことを好きだと思っ
てくれているのは凄く伝わってくる。

でも、それでも聞かずにはいられなかった。

「……佐藤君」

俺の問いに、りんは少しだけ眉間にシワを寄せて言った。
怒ってるというか、呆れてる感じで。

それからジト目で睨みつけてきて言った。

「私のことちよつとバカだと思ってるじゃない?」

…ちよつとどころではなく思っている。

だが、敢えて口に出すようなことはしない。

怒られたくないから。

黙って続きの言葉を待つ。

「確かに私、少し思い込みが激しい性格だつて自覚はあるし、コウちゃんのことも、本当に真剣に思っていたの」

やっぱり、そうだよな……。

りんは本当は八神のことが好きだったんだ。

だから、俺なんかのことを本気で好いてるなんてありえない。

今更だけど、改めて言われるとキツイものがある。

胃が痛くなるほどに……。

ズキリと痛む胃を押さえながらりんの顔を見る。

りんは続けた。

「でも、佐藤君も私達と一緒に働いてて、私やコウちゃんのことを支えてくれたこと、ずっと私の話を聞いてくれたこと、さりげなく色々フォローしてくれたこと、なにより佐藤君がすごく優しい人で、私にとってすごく大事な人って事」

一つ一つ思い出すように言葉にする。

そうして、それから真っ直ぐに俺の目を見た。

強い意志を感じる瞳だ。

思わず見惚れてしまうほどの。

「それはずっと実感していたのよ」

「……」

微笑む彼女に目を反らしてしまう。

自分の惚気話を聞くのも、それはそれで胃が痛いな。

嬉しいはずなのに、どこか居た堪れない気持ちになる。

ただ、こうして面と向かって言われれば、やはり悪い気はしなかった。

それどころか誇らしいというか……。

「でも佐藤君が、『幽霊が好き』って言ったり、『想いが実らなかったら会社辞める』って言ったり、姿の見えない佐藤君の好きな人に、色々混乱しちゃって……」

混乱してたの大体俺のせいじゃねえか。というツツコミは置いておくとして。

りんの話は続く。俺はただ黙っていた。

最後まで聞くことにした。

ここからが、りんが一番言いたいことだと言うこと。

ここからが、りんが今抱いている気持ちだということなのだから。「ずっと迷ってて、この気持ちに分からなかった。コウちゃんと一緒にいたい私と、佐藤君と離れたくない私、どれも本当の気持ち」

俺は静かに聞いていた。

相槌すら打たずに、彼女の言葉を一言一句聞き逃さないよう耳を傾けていた。

「けどね、あの時ぎゅっとされて、『好き』って言われたとき色んな事が全部溶けて、一つになって、ちゃんと実感したの」
りんは一度深呼吸をして、それから再び口を開いた。

俺をしっかりと見て。

——そして。

「私、佐藤君が好きです」

彼女は答えを出した。

俺への、告白の返事を。

俺の事をどう想っているのか。

俺の事を本当に好きかどうか。

その答えを。

「…ならよかった」

俺は心の底から安堵した。

ホッとした。

安心したら力が抜けて、肩の荷が下りたというか、緊張の糸が切れた。

それと同時に全身の筋肉が弛緩していくのを感じた。

ああ、マジでよかった……。

「ふふ…それにね」

俺が脱力しているのを見てクスリと笑うりん。

彼女は続けて言う。

考えていること？ 一体なんだろう。

「佐藤君やコウちゃんの気持ち、ちゃんと受け取らないとって思っ
て、ずっと考えてたの」

「…何？」

「私ね、やっぱりあの場所が好き。佐藤君やコウちゃんがいて、ひふ
みちゃんや青葉ちゃんが頑張ってるこの会社が好き」

りんは箸を置いて、両手で胸元を押さえる。

まるで何かを確かめるかのように。

それから俺の方を向いた。

その顔はとても穏やかだった。

晴れやかな表情をしていた。

きつとこれが今の彼女にとって一番自然な状態なんだと思う。

そんなりんは、ゆっくりと言った。

「だから、この場所を守っていききたい。皆がずっと一緒にいられる
ようにしたいの」

それはきつと、いつかの屋上の話だ。

俺達がずっと一緒にいられる保証は無い。

この会社も、いつか潰れるかも知れないという夢の無い話を、夜空
の下でしてしまった。

これは、彼女なりの答えなのだ。

「だから、私、この会社をもっと大きくしたい。そのために、もっと
頑張ろうって思うの」

そうか……

彼女にとって、

この会社が、

イーグルジャンプが、

俺や八神が働く会社が、全てなんだ。

それが分かった瞬間、ストンと納得できた気がする。

彼女が何故俺を選んだのか。

どうして俺のことを好きだと言ってくれたのか。

俺には勿体無いくらい、素敵な女の子だと。

そう思えたのだ。

りんは続ける。

「でも、私一人じゃ不安だし、コウちゃんも…頼りにはなるけれど、危なっかしいところがあるから」

「あー……」

うん。否定できない。

むしろ肯定しか出来ない自分がいる。

だって、あいつ仕事以外ポンコツだもん。

だから心配になるんだよな……。

「だから、佐藤君みたいにしっかりしてて、頼れる人が近くにいてく

れたら心強いなって」

「……そうか」

これが、彼女の望んだ形ならばもう何も言うことは無い。

俺も力を尽くそう。りんが、これからも笑って仕事を出来るように。

俺とりんは、笑顔のまま向かい合った。

自然と笑いがこみ上げてくる。

こんなにも幸せな気持ちになったのはいつ以来だろうか。

少なくとも、今までの人生では感じたことのない気持ちだ。

どうしようもなく照れくさい気持ちすら、愛おしく思えて仕方ない。

「とにかく、これからは、佐藤君を困らせない、いい彼女になるので……よ、よろしくお願いします！」

最後にペコリとお辞儀をするりん。

「……こちらこそ」

俺も頭を下げた。

それからお互い顔を見合わせて笑った。

幸せだと思った。

俺達の関係は変わった。

でも、その形はきつと変わらない。

りんがこの会社を大切に想う気持ちと同じように、俺はりんと八神の事を大事にしようと思った。

「俺も、明日から会社に出るよ」

「ほんと？　じゃあコウちゃんに連絡して……あら」

携帯の画面を見て、りんが固まった。

俺は首を傾げてりんの方を見る。

すると彼女は、どこか申し訳なさそうな顔をしていた。……嫌な予感しかしねえなあ。

それから彼女は口を開く。

「もう終電過ぎちゃってるわ」

そんなことだろうと思った。

俺もすっかり時間を忘れていた。
明日も会社があるのに申し訳ない。
せつかく夕飯を作ってくれたのだ、今度は俺が何かしてやらない
と。

いつものことだしな。

「車で家まで送るよ」

「……」

「？」

いつもなら、快く承諾してくれるのだが、何故かりんの反応が鈍
かった。

珍しく迷っている様子を見せるから、思わず彼女の方を向く。

「……佐藤君」

顔を赤らめているりんがいた。

…なんか、嫌な予感がしてきたのだが。

「……私、帰りたく……ない……な」

「……あの、それは……どういう……」

彼女に消えそうな声に震えた声で聞き返すことしか、俺にはできな
かった。

青葉視点

「佐藤さん、今日から復帰なんですね」

「うん、りんから連絡きたから多分大丈夫」

出社してすぐのこと、八神さんと佐藤さんの話をしていた。

1週間、佐藤さんがいない間、敦さんが白目を剥きながら仕事をし
てて大変だったけど、なんとか無事に終わってよかった。

でももう安心だ。

佐藤さんの胃痛の種は無くなって、可愛い彼女が出来て、しっかり
休んだのだ。

もう無敵である。

すごい勢いで仕事をこなしてくれるに違いない。

「おはよう、コウちゃん、青葉ちゃん」

背後から、声が聞こえる。

この柔らかくて、優しい声は間違いない。

りんさんだ。

振り向くと、昨日と同じ私服の彼女がいた。

佐藤さんと腕を組んで。

それで、肝心の佐藤さんとはというと…。

「…よう、お前ら…：迷惑、かけて…悪かったな…：…」

そして、その隣には死にかけて顔の佐藤さんもいた。

全く良くなってるない！

それに！

反比例するかのようには、りんさんの肌がプルンプルンしているんで
すが!?

い…一体、何したんですか!?

二人とも!?

バレンタインデー狂想曲 前編

八神視点

「コウちゃん、はい、チョコレート」

「ん？ ああ、今日ってバレンタインか」

出社してすぐのこと、先に席に座っていたりんから、綺麗にラッピングされた箱を渡された。仕事柄季節感を忘れがちになることも多々あるから、こうして渡されるまで実感がわかないものだ。

「ありがとー！」

チョコを受け取るけれど、りんは少し呆れたため息をついていた。

「はあ…一応女の子なんだからそういうイベントくらい覚えてたら？」

どうやら今この瞬間バレンタインデーを思い出したかのような言い回しに見えてしまったらしい。

確かに、普段の私はこんなことあまり気にしないって自覚はあるから間違いではないんだけどさ。

「やっぱり、彼氏持ちは言うことが違うね」

「なっ！」

一瞬で顔色を変える彼女を見て、ちよつとしたイタズラ心が芽生えてしまう。

先月の末、りと佐藤は付き合い始めた。

告白したのは佐藤の方。

まさか、私の前であんなこと言って見せるとは思わなかった。

いつも何考えてるかわからない顔してるけれど、あの時だけは違った。

迷いの無いまっすぐな目で想いを伝えてきたんだもの。

私が問いたでした、私以上のことができるのかという答え。

佐藤が導き出した形。

それをりんも、佐藤も納得しているのならそれでいいと思うし、お似合いだと思う。

でも…

それはそれ。
これはこれ。

ひふみんだけじゃなく、りんまで私を差し置いて恋人作るなんて……。

おめでたいし、羨ましいし、悔しいのだ。

だから、ちよつと意地悪を試してみたくなった。

「もう…コウちゃんの意地悪……」

ほつぺを膨らませながら拗ねるりんは可愛い。

こういう表情を見せてくれるようになったのも最近だ。

「ごめんごめん、冗談」

そう言つて笑いかけると、ぷいっと顔を背けられた。

どうやら先日のこととも相まって機嫌を損ねてしまったようだ。

まあ、あれはやり過ぎたかなと思つてるけど。

「もーそんなに怒らないでよ」

「ふんっ」

完全にへそを曲げてしまっている。

こうなるとしばらく口をきいてくれない。

りんのことだ。

きつとこの後、佐藤に愚痴を話に行くに決まっている。

そしてお熱い雰囲気をつつけてくるのだ。

「いいのかな」

でも今の私にはそんなりんを振り向かせるリーサルウェポンが手元にあるわけで。

デスクの脇。

ちようどりんから見えて死角になるところに忍ばせて置いた紙袋を手繰り寄せ、中から小箱を取り出した。

「実は私も持ってきたんだけどな」

「!？」

私の一言に、ぴくりと反応するりん。

恐る恐るこちらを向いてくる。

その目は期待と不安が入り混じっているように見えた。
よし！狙い通り食いついた！

「どうしよっかな〜」

チラツチラツと、横目で対角の席を伺うと……。

「……………」

うわあ、すごい葛藤してる顔。

かわいい。

しかし、それも長く続かなかったようで、ついに彼女は折れた。

「ください」

頭を下げて行儀よく両手を差し出してくる。

ほんつとわかりやすいだねえ。

思わず笑みがこぼれてしまう。

怒ってても、なんやかんや最後は許してくれるんだもん。

それがまた可愛くてつい甘えちゃうんだろうなあ……。

さすがにこれ以上は可哀想だし、素直に差し出すことにした。

「ふふ、よろしい」

差し出された小さな手にそつと小箱を乗せてあげる。

するとりんは目を輝かせて、大事そうにそれを胸元へと引き寄せ

た。

まるで宝物のように扱うものだから、ちよつと照れくさい気持ちになつてしまう。

りんには私以上に大切なヤツができたのかもしれないけれど、この形はきつと変わらないのだから。

「…相変わらずだなお前ら」

声をかけられ振り向いてみると、そこには苦笑いを浮かべる敦さんがいた。

今日も怖いくらいに濃い目のクマと共にブースに入ってきたところを見ると、昨日も徹夜していたらしい。

おそらく入社してきたのではなくさつきまで仮眠を取っていたのだろう。

この人、本当に人間なのか疑わしくなるくらいタフだね……。

でも会社に泊まっていたはずなのに、こんな就業時間ギリギリにやってきたのはちよつと変だと思った。

けれど、その理由は彼の手元を見ればすぐにわかった。

「その言葉、そっくりそのまま返しますよ」

私は皮肉をこめた苦笑いで敦さんに答えた。

手に提げられていた紙袋から覗くそれは、明らかにチョコレートだったから。

それも大量。

一体何個あるんだろう？ って思うほど。

しかも、どれもこれも高そうな包装が施されている。

「そんなに誰からもらったんですか？」

「これは企画班のみなみ、これはつかさ。あとかりんからの。それでこれはプログラム班全員。それとこれはエフェクト班の——」

言いながら、彼は持っていた戦利品を次々と机の上に並べていく。

ざつと見ただけでも20個以上はある。

「モテモテですね〜」

「つたく……こんなときだけ機嫌取りに来るくらいなら、仕事減らしてもらいたいね」

ため息混じりにぼやくが満更でもないのが見て取れる。

このチームに女の子が多いとはいえ、すさまじい数だ。

だけど敦さんの活躍を考えれば可笑しいことじゃない。

中には本命で渡している人もいるんじゃないだろうか？

実際、甲斐性という点において彼の右に並ぶ人はいないんじゃないだろうか？

顔だつてちゃんとしてれば悪くないし……。

なんていうか……モテない要素がないのだ。

「あ、宮本さん。これ、バレンタインです」

人当たりのいいりんも、また彼をねぎらうためにチョコを渡そうとしていた。

こうして皆に渡して回るんだから、りんは偉いと思う。

けど、敦さんの返事は少し違った。

「いや、今回は遠慮しとくよ」

そう言つてやんわりと断つたのだ。

もうすでに大量にもらっているのなら、今更一つ増えても大して変わらぬのに。

「どうしてですか？」

りんも不思議に思つたらしく、首を傾げた。

「受け取れないよ。佐藤に悪いからな」

ああ、なるほどね……。

敦さんも、りと佐藤のことそれなりに気を遣っているんだ。

やっぱり男女わけだし、変な日くがついちやいけないもんね。それにしても、あんなにいっぱいチョコを持ってきているのに律儀といひかなんと言ふか……義理堅いなあ。

「……ごめんなさい！ そんなつもりじゃなくて……」

「いいさ、気にするな」

申し訳なきさそうにするりんに対して、軽く手を振つて応える敦さん。

その姿からは余裕すら感じられる。

こういうところ、逆に色んな娘を勘違いさせてるんじゃないかと思つちやうんだけど……。

現にゆんとか敦さんに気がありそうだし。

まあ、私には関係ないことだし、どうでもいいや。

「おや……敦くんもいるんだね。ちようどよかった」

と、そこへやつてきたのは葉月さんだった。

いつものように唐突にヒョツと現れた。

「君は本当に罪な男だねえ」

彼女は敦さんの机の上に置いてあつた大量のチョコレートを見て、感心したように目を丸くしていた。

「日頃の行いの違いさ」

「よく言うよ」

得意げに答える彼だが、葉月さんは小さく肩をすくめただけだった。

「それより、用件はなんだ？ わざわざそれだけを言いに来たってことはないだろう？」

「そうそう、これを渡したかったんだよ」

そう言っておもむろに羽織っている上着の中をゴソゴソ探り始めた。

「ほら、バレンタインチョコだよ」

中から出てきた小さな箱を、敦さんに目掛けて放る。

「っ！」

それを彼は難なくキャッチすると、怪しげに眉根を寄せた。

「なんだ…ココアシガレットかよ。湿気てんなあ」

「失礼だね、こんな可愛い女の子が用意したのにお礼の1つもないのかい？」

呆れたような物言いとは裏腹に、葉月さんは楽しそうに笑っていた。

本当に仲良いよねこの二人。

かつて恋仲だったのは間違いないだろうけど、今でもその空気が残っている気がする。

だが、今の私の心中は穏やかではなかった。

葉月さんが敦さんにチョコを投げ渡す瞬間、私は人知れず息を飲んでた。

…もし、敦さんがチョコを私の目の前で落とすようなことがあれば私は――

敦さんを殺していたかもしれない。

いや、落ち着くんだ私。

ようやく考えないようになってきたのにこれじゃ意味がない。そうだ。

私に出きるのはただ信じて待つことだけなのだ。そう自分に何度も言い聞かせる。

よし…大丈夫。

落ち着いてきた。

「はい、君たちにも」

私が自己暗示でなんとか平静を取り戻したとき、いつの間にか近くに来ていた葉月さんが私達にもチョコを渡そうとしていた。

「あ……ありがとうございます……」

りんが恐縮しながらそれを受け取る。いったいどこから取り出したんだ。

次は私の番らしい。

小さいけれど綺麗にラッピングされた箱。

葉月さんの手から私の手へと置かれようとしたときだった。

「あっ」

それは一瞬の出来事。

ほんの僅かなタイミングのズレで、チョコの箱がスルリと私の手をすり抜けた。

チョコは重力に従って落下しようとした瞬間――

「キエエエエエエー」

猿のような奇声を発しながら、私はそれに飛びついた。

そのまま床に叩きつけられる光景が脳裏に浮かぶよりも先に体が動いてしまったのだ。

我に返って手元を見ると、すでにチョコの箱は私の手の中だった。

ああ……よかった。あぶなかった。

安堵のため息をつくと同時に、ふと顔を上げると怪訝な目つきで見下ろされていた。

葉月さんだけじゃなく、りんも敦さんも同様に。

「ははは……私のチョコがそんなに欲しかったのか」

葉月さんは乾いた笑いを浮かべると、私の頭をポンと叩いた。

「え……つと……」

私は冷や汗をかきつつ視線を泳がせる。

そんな私の様子を三人は黙ったままジツと見つめてくる。

「そ……そうなんです！ わ、私、チョコ大好きなんですよねー！ あはははは……」

苦しい言い訳なのは自分でもよくわかっている。

だけど、それ以外になんと言えばいいというのか……。

「そうかい。ならよかったよ」

葉月さんは特に追及することなく苦笑してみせたあと、そのまま逃げないようにブースを後にした。

それだけ私の挙動が異様に見えたのだろう。

…だけど、刺客はまだ残っていた。

「つたく、八神、お前もなんか変じゃないか？ 遠山のこと云々よりもコンペ辺りから」

「っ！」

まだ残っていた敦さんが私の横に立って話しかけてくる。

その話題を振られて思わずギクリとする。

敦さんの見立ては間違っていない。

「え……えつとですね……」

私がこんな風にドギマギしているのは遠からず、いやほぼ確実にそれが原因なのだから。

あのととき、酔った私がかしてしまったこと。

それと完全に一致しているのだから。

敦さん本人は、そんなことも知らずため息をこぼし続けている。

「結局コンペのときも上の空だったし……何があつたんだか知らねえけど、コンペに落ちたからってそんな引きずるこ——」

「でえええええええええええい！！」

「ぐはあっ！」

敦さんの口からあるフレーズが出た途端、私は普段佐藤が愛用しているハリセンで彼の顔を引っぱらいた。

パンといい音が響き渡る。相当痛かったらしく、彼は顔をしかめて鼻を押さえていた。

「何すんだいきなり!？」

「しゃべらないでください」

「はあ？」

私は彼を睨むと、その先を言わせないために口を開く。

「それ、今から一ヶ月くらい言わないでください」

「それってなんだよ」

「ですから、それです。不吉なこと言ってもし取り返しをつかないことになったら一生恨みますからね」

「……お、おう……わかったよ」

敦さんは気圧されながらもコクコクと首肯してくれた。

話の分かる人だから、これ以上深追いも下手な勘ぐりもしてこないだろう。

ああ……さつきようやく意識しなくなってきたところだったのに……。

でも私にとつては、それだけ真剣にならざるを得ないことだったのだから仕方が無い。

今日は確かにバレンタインデー。

それは2月の中旬に来る行事でもメジャーなものに類するだろう。だけどそれ以外にもう一つある。

それこそ人生の分岐点になる日と言ってもいいくらい重大なイベントが、この季節にはある。

その名は……2次試験。

それがもうすぐやってくる。

もう半月もない。まさに秒読みと言っても過言では無い。

社会人の私、それも高卒ですぐに就職した私からすれば無縁どころか無関係に近いものだと思っていた。

だけど今はそうじゃない。

このビルの警備室で最後の追い込みをかけているであろう彼、吉田駿輔ことヨッシーとの出会いによって私の運命は大きく変わってしまった。

それはきつと、彼がいなかったら今のような奇行はしかかかったと思う。そう考えると、やはり人生は何が起こるか分からない。

それにコンペの時に彼が言ったあの言葉。

受験が終わるまで待つて欲しい。

その時に答えを出します。

あのまつすぐな三白眼にそう言われてしまった。
彼が今まで積み重ねてきたこと。

酔った勢いで私がやらかしたこと。

その全ての答えがもうすぐ返ってくると思うと気が狂いそうになる。

でも、もし残念な結果で終わったのなら……。

もしそれが私の存在がプレッシャーになってしまっていたら……。

と考えると、私は不安で胸が押しつぶされそうになる。

彼がどれだけの不安や重圧に耐えながら、それこそ自分の身を削りながら必死になっているのかを知っているだけに余計だ。

だからこそ報われて欲しいと願う。

「……」

……だけど、逆に考えてしまうのだ。

もし……

もし万が一、喜ばしい結果になったら……。

それは彼の答えが返ってくるということ。

その意味がわからないほど私だつて鈍感じゃ無い。

もしそうなったら……私は……私は……っ!!

「あああ———!!」

● 青葉視点

「なんか、今度は八神さんがすごいことになってますね……」

キラ班のいつもの面々でバレンタインのチョコを渡しあおうとしていたのだけれど、隣のブースの騒動でそれどころじゃなくなっている。

「あ……あんま刺激せんほうがええなあれは」

ゆんさんの言葉に皆が無言で頷く。

渦中の中心である八神さんは今も頭をかかえて悶えている。

ひふみ先輩と彼氏さんのこと。
りんさんと佐藤さんのこと。

新年早々色んな事件が立て続けに起こったと思っていたら八神さんまで…。

落ちるとかなんとか言ってたけどなんだろう…。

私は思い当たる節が一つだけあった。

受験？

美大を受けたときのことを思い出す。あの時も、美術部の皆はともかく教室の人達はピリピリしていた。

それがどうしても印象に残っていたからだ。

でも八神さんがなんで？

試験を控えた子供…は流石に年齢的にないだろうけれど親戚とか？

だけどそれだけであそこまで思い詰めるだろうか。

それこそ前のりんさんやその前のひふみ先輩に匹敵する勢いだ。

理由や原因はわからない。でも、あんな風に頭を抱えて悶える姿を見ると、とてもじゃないけど声なんてかけられない。

ただただ見守るしかない。

それが今の私たちに出来る精一杯のなのかな？

「と…とりあえず、チョコ交換しない？」

「そ…そうですね」

ひふみ先輩の一言で私たちはハッと我に返り、慌てて用意してきたチョコレートを机の上に広げ始める。

「じゃーん。チョコレート工房の人気チョコレート詰め合わせ！ 買

うの大変やったんだから！」

「チョコばかりだと思ったから私はクッキー…」

先にならばはじめたのはひふみ先輩とゆんさん。

二人らしいチョイスだと思う。

次にチョコを見せたのははじめさんだった。

「みんな普通ですなく。私は動物チョコレート!!」

と言って出てきたのは大きなゴリラの形をしたもの。

私が選びに行った時に見つけたのと似たものだ。
よかった。やっぱり別のにして正解だったみたい。

「1個しか無いやん」

「碎けばみんな食べれるじゃん」

「でもちよつとかわいそうですね…」

「え…青葉ちゃんってこういうの真っ先に碎きにくるタイプじゃ」

「どういう意味ですか」

失礼極まりない。そんなことはしませんよ私。

どんなイメージ持ってたんですか。まったくもう……。

そして最後に残ったのは私だ。

「動物さんチョココっているんなのがあって可愛いですよね。私も迷ったんですけど…」

実際、私が買いに行ったときにはじめさんと同じモノを見つけたのだ。

可愛いからこれにしようと思ったんだけど、子供っぽいと笑われるかなと思つてやめたのだ。

「どんなのにしたの？」

「えへへ、ちよつと背伸びして大人のチョコレートを」

照れながら綺麗に包装された箱を皆の前に出す。

開けた箱の中に入っていたのは――

「じゃん！ ウィスキーボンボン！ お酒ですよ！ お酒!!」

そう、私が選んだのは大人向けのチョコレート。ウィスキーを使つたものだった。

甘いものが苦手な人に渡すにはいいんじゃないかって思つて。

でもこのラインナップの中では少し浮いちゃったかも……。

どう反応されるか不安でドキドキしながら皆の顔を見る。

すると意外なことに全員が微妙な顔をしていた。

え……あれ？

「青葉ちゃん、背伸びすると逆に子供っぽくなるで…」

「そんな！」

苦笑いするゆんさんの指摘にショックを受ける。

いや、確かにそうなんでしょうけど……自分でもわかっていたこと
ですけれども……。

でも実際に指摘されるとショックが倍増します。

「あれ？ 青葉ちゃん、他にチョコ持ってきて無かった？」

「えっ？」

ふいにはじめさんが言った。

彼女の言うとおり、私はもう一つチョコレートを用意していた。

でもそれを皆さんの前で口に出すのは憚られるというか……恥ず
かしくて言えない。

だから私はその事を黙っていることにした。

「えっと……それは……その」

「あーわかった！ 敦さんの分でしょ！」

凶星。

顔が真っ赤になるのがわかる。

ああ、やっぱりバレてる……。

「あ……えと、はい……」

観念した私は素直に白状することにした。

ここで変に誤魔化して後々もつと大変なことになることが容易に
想像できたからだ。

でも、正直に言ってしまったえばこれはこれで恥ずかしいものがある。

皆さんの視線が一斉に集まる。

それも明らかに色めきだった様子で。

「なあ、それホンマに!？」

「ぎ……義理ですよ！ ほら！ いつもお世話になってるので！」

必死に弁解しようとする。

「ふくん、義理なんだあ」

「そ……そりやそうですって」

はじめさんが何とも言えないニヤついた表情で言ってくる。

はじめさんが何とも言えないニヤついた表情で言ってくる。

本当のことを言ったつもりなのに、自分がウソをついているような
気分になってしまう。

確かに、敦さんにはいつも助けてもらってばかりだけど……。

そんなにおかしいかな？ 別におかしくないよね？ そうだよね？ ひふみ先輩の方を見ると彼女も何やら含みのある笑顔を浮かべている。

「そ…そう言えば！ ひふみ先輩はどうなんですか？」

このままだと妙な雰囲気になりそうだったので話題を変えることにする。

ひふみ先輩に矢面を向けるのは心苦しくて仕方ないのだけれど。

「わ…わたし？」

急に話を振られたひふみ先輩は驚いている。

私は無言で首を縦に振る。

「確かに、渡すんですよね？ 彼氏さんに！」

はじめさんはあえて主語を省いて聞いてみる。

ひふみ先輩は目を丸くして固まったあと、頬を赤く染めて小さくうなずいた。

「うん…渡す…よ」

そう答えるひふみ先輩は今まで見たことがないくらい乙女の顔をしていた。普段のクールビューティーさなんて微塵もないほど可愛い顔をしている。

その様子に、ゆんさんやはじめさんも興味津々な様子だ。

「どんなチョコあげるんですか？」

「やっぱり手作りですか？」

二人の質問攻めにあうひふみ先輩は戸惑いながらも一つ一つ丁寧に答えていく。

「えっと…最初は買おうと思ったんだけど…作ってみようかなって…」

「おお…」

二人共すぐく感心した声を出す。

私も同じ気持ちだ。

ひふみ先輩が手作りチョコ。

料理上手の彼女が丹精込めて作ったチョコレートを渡せばきつと

喜んでくれるに違いない。

彼氏さんは幸せ者に違いない。

私もいつか誰か好きな人に……と考えてみたけど、すぐに頭から追いやった。

だって、私が今日渡そうとしているチョコレートだって、男の人、敦さんに渡すんだと思うと、ちよつとだけ気恥しい気がしたからだ。

「でも、敦さん、なんか渡しづらいよね。いっぱいもらってたし」

「そうなんです……だから声をかけずらくて……」

はじめさんの言葉にうなずく。

そうなのだ。

今朝渡そうとしたのだけれど、等の敦さんは他の班に所属している女の子に囲まれて身動きが取れなくなっていた。

だから渡しそびれ私の席に泣く泣く持ち込んでしまった。

彼がそれだけこの会社を支えているかを考えれば当然のことかもしれない。

でも、あの時の満更でもない彼の表情を思い出すと胸の奥がきゅつと締め付けられるように痛くなる。

なんだろうこれ？

こんなの初めてでわからない。

なぜか他の人と同じようになりたくなかった。

……でも、どうすればいいのかわからない。私は一体何をしたいのだろうか。

そんなモヤモヤとした気持ちを抱えながらチョコレートを口に運ぶ。

あまり味はよく分らなかった。

「……ん？」

「青葉ちゃん？」

でも何故か手は止まらず、黙々と食べ続けて、いつの間にか箱の中のチョコレートは無くなっていた。

それは、私が持ってきたウイスキーボンボンだった。

箱の外にはクシヤクシヤに丸められた銀紙が置いてあった。

改めてソレが目に入った途端、身体が熱くなった。
ふわふわして、くらくらする。
すぐく気持ちよくなってきた。

「え ちよ いくつ食べたの!?!」

「ん? 数個ですよ? なにビビってるんですか?」

慌てるはじめさんの様子がおかしくて思わず詰め寄ってしまう。
なんで慌ててるのかなあ……。

それに、まだチョコを食べ足りない。もっと、欲しいなあ。

「それより、はじめさん」

「は、はい」

「このゴリラまだ砕かないんですか? なんなら私が砕いてやってやるですよ。いいですか?」

と、テールに唯一残された大きなゴリラの頭を指先でコンコンと叩きながら言う。

「青葉ちゃん!?!」

はじめさんが驚いた表情をしている。

なぜ驚く必要があるのだろう。

私、何か変なこと言ったかな? まあいいや……。

それよりも、早くこのゴリラを砕きたい。

誰もやらないなら私が代わりに……!

「ふん……!」

ゴリラの肩を両手で掴んで力を入れる。だけど意外と硬くてうまくいかない。

あーもうっ! なんでこんなに硬いのよ!!

「ゴリラめ……こしやくな……食べてやる!」

私は思いつき齧り付いた。

「あああ! みんなのなのに!!」

はじめさんの声を聞き流しながらゴリゴリと噛み砕く。

そして口の中に残ったチョコレートを飲み込むと、また頭がふらつくような感覚に襲われた。

なんだろう？ 眠いな……。

瞼が落ちてくる。

でも、もう少しだけ起きていたくて、私は必死に目を開けようとする。

でも、ダメだ。

抗えない。

そのまま意識意識を手放してしまった。

最後に見たのは、はじめさんやひふみ先輩の心配そうな顔だった。

「……ろ。おい、起きろって！」

体を揺すられて目が覚める。

見慣れた天井が何度か暗転する。

少しして自分がどこにいるのか思い出した。ここは……会社の会議室だ。

私が初めてここで夜を過ごしたとき、落ち着かないからという理由で寝たことがあるから覚えている。

あれ……私……なんでここに……？

「起きたか……」

声のした方へ目を向けてみるとそこには敦さんがいた。

彼は私を見てホツと息を吐いている。

「えつと……私……どうして……？」

「……お前、酔って倒れたんだよ。それで俺がここまで運んできたんだ」

敦さんは呆れたようにそう答えてくれた。

そういえばさつきまでひふみ先輩たちとチョコパーティーをしていたはず……と思い出し、そこでようやく気が付いた。

「あっ……確か私……」

「そうだ。全部食ったんだ。ウイスキーボンボンをな」

敦さんはため息交じりにそう言い放つ。

その様子に、血の気が引いていくのを感じた。

「わ、私！ どれくらい寝てました？」

「もう皆帰っちゃったぞ？」

「ええ!？」

「冗談だ」

敦さんは悪戯っぽく笑っている。

もう、敦さん、意地悪です。

「今は昼休みだから、寝てたのは一時間くらいだな」

「そ、そうですか……」

よかったあ……。

そんなに長く寝ていなかったことに安堵していると、急に身体が震えてきた。

少し頭も痛い。お酒を飲むと二日酔いになるっていうけど、本当みたい……。

それにしても、チョコ一つでこんな風になると思わなかった。

しかもあんなにたくさん……。

あの時、私がどれだけ食べたのか分からないけれど、きつと箱の中にあつたモノを全て食べてしまったのだろう。

「ほら、水」

「ありがとうございます」

敦さんからペットボトルを受け取り、蓋を開ける。

ゴクツと喉に流し込むと、ひんやりとした水が胃に落ちていき、火照っていた身体が冷まされていく。

「ぷはー」

「大丈夫か？」

「はい。なんとか」

「昼休みは残ってるから、まだ少し休んどけ」

「いえ、もう平気なので戻ります。午後の仕事に遅れちゃいますし」

「そうか。無理するなよ」

「はいっ」

私は敦さんに謝ると、立ち上がって共に会議室を出る。

すぐにブースに戻るけれど、そこには誰もいなかった

「皆さん、お昼に行ったみたいですね」

「みたいだな」

最近になって珍しいことではなくなった。

ゆんさんやはじめさんはともかく、ひふみ先輩も。

私が入社したばかりのときはずっと音楽聴いていたけれど、今は食事誘われることも増えた。

それに、今日はバレンタインだからきつと彼氏さんにチョコを渡してるんだろう。

……チョコ。

「……」

そこで私はチラツと横にいる敦さんを見る。

皆お昼に行つてこの場所にいない。

ここにいるのは、私と、敦さんだけ。それなら……。

私は大きく深呼吸をする。

心臓が激しく鼓動を打つ。

顔が熱い。

緊張で手が震えてくる。

おかしい。

これは義理チョコなのに。

ただの感謝の気持ちなのに。

でも……でも……。

「あ、敦さんっ！」

「ん？ どうした？」

「えっと……その……待っててください」

それだけ言うと、急いで自分のデスクに戻つて鞆の中からラツピン
グされた小袋を取り出す。

それを両手で持ちながら敦さんの所へ戻ると、彼は不思議そうな顔
をしていた。

その顔を見ただけで心拍数がさらに上がる。

ああ、もう！　なんでこんなにドキドキするの!!

だって、男の人にチョコレートを渡すなんてお父さんくらいだったんだもん！

でも…渡さないよ。

勇気を出して、渡すんだ。

「こ、これ！ 受け取ってください!!」

「……」

敦さんは何も言わずに受け取る。

そしてゆつくりと包み紙を開いていく。

「……チョコか」

「はい…その、たくさんもらってるのに迷惑かもしれないけど…」

「いや、ありがたくもらうよ」

「そ、そうですか……」

良かった……。

喜んでくれたみたい……。

「開けてみても？」

「もちろんっ」

私が皆さんに渡すために買ったウイスキーボンボンとは別に見つけたチョコレート。

色々迷ったけど、敦さんのイメージにぴったりのモノ。

だから渡したかったんだ。

敦さんは丁寧に箱の包みを開けて、中にあるチョコを取り出した。

それは太い棒状の形をして、布にくるまれている。

「これは……葉巻？」

「はい、中はチョコレートなんです」

お店の中を歩いていて、ショウケースに並べられているのを眺めていたらこれが目に入った。

その時に、敦さんがいつもタバコを吸っているのを思い出した。

それでこれを選んだんだけど反応は……？

「へえ、面白いな」

敦さんは感嘆の声を上げつつ、布を取り除いて中の一本を手に取り取る。

そしておもむろにその細長い棒状のチョコを口にくわえると、器用に歯を使って布ごと折っていった。

その姿が妙に様になっていて、カツコいいと思った。

「うん、うまい」

「本当ですか!？」

「ああ」

「やったあー!」

私は小さくガッツポーズを取る。

少しでもよろこんでくれたらうれしい。

願うなら、他に渡してきた人よりも覚えてもらえると……。

そんなことを、無意識ながらにかんがえてしまった。

「そういえば、お前は食わないのか?」

「私はさつき食べたばかりなので」

「そうか」

敦さんは短く返事すると、再び口にチョコを含んで味わうように目を閉じた。まるで映画のワンシーンのように思えた。

敦さんはチョコを食べ終わると、私を見て言った。

「うまかったぞ、ありがとうな」

「いえ、こちらこそっ」

お礼を言うのは私の方なのに、なぜか敦さんはお礼の言葉を口にす
る。

なんだか変な感じがしたけれど、それがおかしくて笑ってしまっ
た。敦さんも笑ってるし……。

でも本当によかった。

喜んでくれて。

「じゃあ、飯に行くか」

「はい」

私は笑顔で答えて、敦さんと一緒にブースを出た。

お昼ご飯は何だろう? 楽しみだな。

私はウキウキしながら彼の後ろについていった。

バレンタインデー狂想曲 後編

ひふみ視点

……純君、喜んでくれるかな。

午前の就業時眼が終わってすぐのこと。

私は彼がいるであろうサウンドルームに足を進めていた。

今日はバレンタインデー。

男の人、それも大好きな人に渡すなんて初めてのことなのでドキドキする。

だけど……渡したい気持ちの方が勝っていた。

口下手な私にとって、こんな女の子らしいイベントを本当の意味で経験した機会なんて全くない。

渡した人なんて家族や兄くらいしかいなかったし……。

でも今は違う。

彼への想いで胸がいっぱいだ。

そしてその感情には嘘偽りはないと断言できる。

そんな彼にチョコレートを渡したい。

ただそれだけだった。

「あ……」

彼の部屋の前に着くと扉越しから微かに音楽が流れてくる。

これは……ピアノの音。

きつと彼はまた練習しているんだろう。

そう思うだけで自然と笑みを浮かべてしまう。本当に真面目なんだから。

音色が止んでからドアノブに手をかけ、ゆっくりと開ける。

中に入ると案の定彼が椅子に座っていた。

こちらに背を向けたまま動かないことから恐らく集中して弾いていたんだろうか。

邪魔しないようにそっと近付いてみるけど反応なし。

どうしようかと思ったその時。

不意に彼が振り返った。

「えっ」

思わず声が出てしまった。

だつていきなり振り向くとは思わなかったから。

しかも私の顔を見て驚いた表情をしてたし。

何か変なことあつたかな？

「ひふみ？」

「うん、お疲れ様。その……これ」

とりあえず持っていた紙袋を差し出す。

すると今度は不思議そうな顔をしながら受け取った。

「これって……もしかして」

「う、うん……バレンタイン……チョコ」

勇気を出して言ってみただけどやっぱり恥ずかしい……。

今絶対顔赤いよね……。

「ありがとう！　すごく嬉しいよ！」

満面の笑顔を見せてくれる彼。

良かった、喜んでくれた。

ほっとして少しだけ肩の力を抜きながら安堵のため息をつく。

「……でも」

でも、純君の眉間が少しだけ歪んだ。

もしかして私、何か気に障るようなことをしてしまったんじゃない

……。

不安になつて慌てて弁解しようとする。

「あつあのね、純君甘いもの苦手だからビターチョコにしたんだよ。

ほらコーヒーにも合うように苦めにしてるし。それに形もちよつと

凝つてて——」

「違うんだ」

「え？」

私の言葉を遮るように発せられた言葉の意味がわからず首を傾げる。

純君は不機嫌な顔というよりかは、不思議なモノを見つけたような怪訝な顔色だった。

「その…ひふみのチョコがこれなら…あそこに置いてあるチョコは誰からなのかなって……」

指さす方を見ると確かにラッピングされた箱があった。確認するまでも無い。

中に入っているのはチョコレートだ。

この時期にこんな綺麗な包装の贈り物など他に無い。

そしてこれは私が用意したモノじゃ無い。

ということはつまり――

「でも…せっかくあるんだし、一緒に食べましょうか」

純君はのんきに笑って言った。

「……」

「ひふみ？」

彼の笑顔とは裏腹に、私の心中は穏やかではなくなった。

この箱を見て思い出したのは、かつて彼が食堂で演奏した後の会話。

純君の事を話していた他の女の人達。

彼女は純君を狙っている。

そう確信した。

胸の中にわき出てくるのは焦りよりも怒りに近い感情。

私は無意識のうちにその箱の元に向かっていた。

「あの……ひふみ？」

戸惑う声も耳に入らず、私はそれを両手で掴む。

彼女達は、かつて純君を傷つけた人達と同じだ。

純君はずっとこの会社にいたのに、ピアノが弾けるようになった途端に寄ってきただけの人。

今まで純君を無視してきたのに、急に掌を返したみたいすり寄るなんて許せない。

彼の優しさをいいことにつけ込んで、まるで自分が特別であるかのように振舞うなんて卑怯者以外の何物でもない。

こんな人たち、みんな消えちやえば良いのに。

そんな考えが頭を埋め尽くしていく。……あれ？　なんだろう、こ

の感覚。

こんな気持ちになつたのは初めてかもしれない。
自分でもよくわからない衝動的な行動。
だけど一つ言えることは――

――絶対に渡さない。

「あの――」

「っー」

彼の言葉を遮るように、私はその箱をゴミ箱に投げ込んだ。
勢いよく入ったせいとか、バコンと鈍い音が部屋に響く。

さきほどまで整った形をしていた箱が、ゴミ箱の中で歪にゆがんで、中から崩れた茶色い何かがこぼれ落ちている。

目に映るそれを見下ろしていると、胸の内にある黒い塊が晴れていく気がする。

……でも、まだ安心するわけにはいかない。

このチョコを用意した人はまだ純君を狙っているはずだ。

いつちよつかいをかけてくるかわからない。

それがどこの誰かもわからない。

だけど、ネタは上がった。

自分が人と関わるのが苦手で、人の顔色ばかりうかがっていた性格だからこの手合いの考えることや苦手なことは理解している。

直接渡さず、姿を隠して渡してくるといふことは、それが逆に短所。そういう人間の考えることは私が一番理解している。

かつての私がそうだったんだから。

だったら、私がやるべきことはもつと単純だ。

「あ……あの、ひふみ?」

困惑気味の声が聞こえる。

驚かせてしまったみたいだ。

申し訳ないけど、今は我慢して欲しい。
私達にとつて、とても大切な事だから。

「ねえ、純君」

私は振り返って純君を見る。

自分が用意したチョコを手を取って。

「チョコ…食堂で一緒に食べよっか」

「え…いいですけど…どうして？」

「行こっか」

「あ、はい」



佐藤視点

「佐藤君っ！」

午前中の仕事を終えオフィスを後にしようとしていた俺は声をかけられた。

声の主は言うまでも無い。

柔らかくて温もりのある声色。

「ん？ りん、どうした？」

振り返れば、紅色の花が一輪咲いていた。

その花はいつも通り可憐な笑顔を浮かべていた。

だが彼女の頬はまるで林檎のように紅潮していた。目線もどこか泳いでいるように見える。

「あ、あのね…今日はバレンタインデーでしょう？」

「ああ、そうだな」

「それで…その…えっと…」

言葉は途切れ、代わりに彼女は手に持っていた小さな紙袋を差し出してきた。

「これ、受け取って…」

震える手で差し出されたそれは、まさしくバレンタインチョコだ。
「おう、ありがとな」

淡泊に答えてみせるけれど、内心はそうではない。好きな人からの贈り物に喜びがないはずが無い。

それも、今まで受け取ってきた同じ会社の仲間としての義理チョコでは無い。

これは間違いなく本命チョコだ。

言っちゃあ何だが、愛しい恋人からの初めてのチョコレートだ。

嬉しく無いわけが無い。

俺だって男だ。嬉しいものはやっぱり嬉しいのだ。

だけどいい年した大人の男が、バレンタインにチョコレートをもらったくらいではしゃいでいたら格好がつかないだろう。

「おう、ありがとな」

「うふふ、喜んでくれてよかった」

平静を装っていたのだが、彼女からは冷たくあしらわれたように思われなかつたらしい。

それこそよほど顔に出ていたのか、不思議と彼女の周りに花が現れているように見えた。

「そんなに顔に出てたか？」

「ううん、全然出て無かったわよ」

「そっか……じゃあなんでそんな風に笑えるんだよ」

「わかるもの」

「……どうして？」

「うくん、内緒」

悪戯っぽく笑う彼女。

その仕草に思わずドキツとする。

普段から可愛いとは思っていたが、今日の彼女は一段と可愛く見える。

化粧を変えたとか、服が新調されたとかそういうことじゃない。

きつとこれが恋する乙女という奴なんだろう。

「それより、せっかくだから食堂に行かない？　ちようどお昼だし」

「そうだな」

断る理由なんてあるわけも無く、俺は二つ返事で了承する。そして二人連れ立って、食堂への道中を歩き出す。隣を歩くりんの歩幅に合わせて。

「ああそれとね。午後の会議なんだけど」

「スケジュールに遅れはないよ。俺が休んでた間も、敦さんがまとめてくれたし」

「そう、なら安心ね」

お互いの仕事の話をすることにも慣れてきた。

かつては同じ班に属して、彼女の指示に従っていたただけだが、今では違う。

こうして背景班やチーム全体のスケジュールを摺り合わせて、円滑に仕事を進めるためにこうして話し合うこともある。

こうなる前の自分では考えられなかったことだ。

今更ながら、この変化には感慨深いものがある。

「あ…佐藤君」

「なんだ？」

「今度のお休みなんだけど、もし良かったら…その…デートしない？」

「え？」

唐突なお誘いだった。

いや、確かに彼女とは付き合っているんだからデートくらいはしてもいいはずだ。

でもまさか彼女が誘ってくるとは思わなかった。

「ダメかな？」

「いや…大丈夫だよ。いつにする？」

「えっと…来週の水曜日はどうかしら？」

「了解。空けとくよ」

「ありがとう。楽しみにしてるね」

りんは微笑む。

その笑顔はまるで春先の陽光のように温かかった。

思わずこつちまで口元が緩みそうになる。

いかん、いかん。ここは職場なのだから気を引き締めないと。だがしかし、それでもついい頬が綻ぶ。

「そうだ。車出すよ」

「え？ いいの？」

「ああ、もちろんさ」

りんと出かけるのであれば、少し遠出しても問題ないだろう。

最近はずっと社内業務ばかりだったから、たまには気分転換も必要だ。

それにりんと二人で出かけられるのならば、どこへ行っても楽しいに違いない。

「ふふっ、嬉しい！」

「あ……」

喜びの声と共に彼女の腕が俺の腕に当たる。柔らかな感触が伝わってくる。

「ごめんなさい。私ったらつい……」

「いいって、気にすんな」

照れくさくて目を逸らす。

りんの顔もさつきチヨコレートを渡してきた時の比にならないくらい真っ赤に染まっている。

きっと俺も同じだろう。お互いに恥ずかしくなって黙ってしまっただけどそれが嫌だとは感じない。むしろ心地よくさえ思える。

「ねえ、佐藤君……」

「どうした？」

「大好き」

不意打ちの言葉に心臓が跳ね上がる。

彼女はこちらを見ていない。真っ直ぐ前を見て歩いているだけなのに、どうしてこんなにドキドキしてしまうのか。

俺は自分の鼓動を落ち着かせるように深呼吸を試みる。すると幾分か冷静さを取り戻せた気がした。

「知ってるよ」

「もう！そこは『俺の方が好きだ』くらい言っただけでいいわ」

「無理言うなよ」

「じゃあ私が言います。私はあなたのことが好きで好きで仕方ありません」

「……勘弁してくれよ」

「うふふっ」

彼女は楽しそうに笑う。

まったく、本当に調子が狂う。だけど不思議と悪い気はしなかった。

そしてそんな風にじゃれ合いながら歩いていけば、あつという間に食堂へと辿り着く。

ちやうど昼休みもピークになってきたところで、かなり人が集まっていた。

本来ならば席の取り合いでもかなり熾烈な争いになるはずなのだが、今日はというと……。

「あ…」

「あれは？」

俺達は食堂に入っただけで、異様な光景を目の当たりにした。

その中央にそれはいた。

「はい、純君。あくん」

「えっと……あの、滝本さん？」

「食べて」

「いやその…」

「食べて」

「あ、はい」

行われていたのは、恋人達がやる定番の定番。つまりはあーんである。

二人の目の前にあるテーブルには、おそらく滝本お手製のチョコレートケーキだった。

恋人にバレンタインチョコを渡す。

滝本も例外なくそれを実行していたわけだが……。

それをこの会社の人間が一番集まるこの場所の、この時間帯にやるなんて。

驚くべき事はそれを増田とあの滝本が行っていたのだ。

そこそこ長い付き合いだからわかる。

あの人見知りで、コミュ障で有名な滝本なら絶対にしない。

普段の彼女ならば恥ずかしかがってできないと言う姿が目には浮かぶのだが今回は違う。

その上、滝本の雰囲気は恋人との甘い蜜月を楽しんでいるというよりももつと真剣な、まるで何かに対する宣戦布告のようにすら感じた。

「ひふみちゃん…なんだか臨戦態勢って感じね」

「誰にだよ」

りんがボソツと言った言葉に突っ込みを入れる。

だがまったく心辺りが無いわけでもないのだ。

年が明けてすぐのこと。

増田がこの場所で社員一同にピアノのリサイタルを行っていた時のことだ。

好評だったのに、滝本の一存で辞めることになったという。

それも他の人に聞かせたくないという理由で。

おそらくは増田を意識する女に対する示威行為の一種。あるいは牽制のようなもの。

確かに効果的だろう。

ここまで大っぴらに見せつけければ、変な横恋慕や略奪なんて考えもなくなるはずだ。

特に重要なのは増田を意識する女ではなくその他ギャラリィ。

周囲の人間がこの二人は付き合い合っているという共通認識を持たせる事で、誰も近寄らないようにする。

それこそが目的だと思われる。

「まあ何にせよ、邪魔しちや悪そうだな」

「そうね。私達も行きますよう」

俺達は空いている席を探して歩き出す。

幸いにもすぐに空席を見つけることができた。さすがは昼食時だ。混み合う時間帯は避けるべきだと思っただが、その心配はいらなかったらしい。

「佐藤君、やっぱり今日はお昼少なめなのね」

「？」

隣に座ったりりんが俺の手元を見ながら言ってくる。

彼女の言葉通りだ。

今日は弁当は作ってきてない。

コンビニで手軽で少なめのモノを買っておいた。

だがやっぱりというのはどういう意味なのだろうか？

「まあな」

「ふふ……」

何故か嬉しそうに微笑んでくる。

さつきもチョコを受け取った時もそうだった。今日のりんはよく

笑う。

相も変わらず理由はわからんのだが……。

その根拠の紐付けを行う暇もなく、りんは続けた。

「……もしかして、私のチョコのためかなって」

「っ……」

凶星だった。

と言うよりか、虚を突かれたと言った方がいい。

何せ彼女に直接口にされるまで意識していなかった。

逆に言えば無意識に期待していた。俺のために用意してくれるだ

ろう、と。

だからこんな上機嫌だったのか。

「……まあ、うん」

俺は素直に認めた。

りんは満足げに笑っている。

「ありがとう。嬉しい」

「どういたしまして」

照れくさくて視線を外す。

恋人同士になつて間もないものもあるが、まだこうしてストレートに好意をぶつけられると慣れないものがある。

特に胃が。

この幸福にまだついていけない。

それでも、彼女が喜んでくれるならそれでいい。

「せっかくだし、今食べてみてよ」

「えっ？」

俺の脇に置いてある紙袋に視線を向けながら言う。

魅力的な提案ではあつた。

あまり甘い物は好まないが、食後のデザートとしてこれ以上の物はない。

「ほら、早く」

促されるまま、包装を解く。

中には綺麗にラッピングされた箱が入っていた。

蓋を開けると中から現れたのは、輝きを放つ宝石の数々の並んでいた。

一つ一つが美しさを醸し出す高級なチョコレート達。

おそらく手作りでは無いのだろうが、市販品にしても値段が高いのは一目瞭然である。

最近は特に忙しい彼女が、俺のために用意したもの。

それだけでも十分価値のあるものだ。一つ摘まんで口に入れる。

舌の上で溶ける感触。甘すぎず苦過ぎない絶妙なバランス。チョコ

コ本来の味を引き立てるような工夫が施されているようであつた。

「おいしい？」

「ああ、うまいぞ」

「良かったわ」

満面の笑顔で返してくる。

本当に幸せそうな表情で、見ているこつちまで幸せな気分になるくらいだ。……そんな彼女を眺めているだけで、自然と顔が緩む。きつと、これが愛おしさというものなのだろう。

俺は、彼女を愛してる。

改めて、強く実感した。

「……ねえ、佐藤君」

不意に名前を呼ばれ、りんの方へ向き直す。彼女は、何かを落ち着かない様子でモジモジとしていた。

「ん？どうかしたか」

「あのね……そのね……」

言いづらそうに口を濁す。

だが何かを決心したようにこちらを見据えた。

彼女の真意を測る前に、動きを見せる。

俺の目の前に広げられているチョコレートの一つを摘まむ。そしてそれを俺に向けて差し出してきた。

「えつと……その……はい」

りんがしていること。

それは今も尚、滝本が増田にしてやっているのと全く同じ行為。要するに『あーん』だ。

それも、フォークやスプーンではなく指で直接。

さすがにこれには面を食らった。

まさか、りんがこんなことをしてくるとは思わなかったからだ。

「えつと……」

「……」

戸惑う俺とは対照的に、りんは頬を赤らめながらもじっと見つめてきている。

「だめ、かな……」

潤んだ瞳で見上げてきた。

その表情には、恥じらいの色が見え隠れしている。

「い、いや……」

駄目じゃない。

驚きこそそれど、嫌ではない。むしろ嬉しい。

しかし、ここで動揺しては情けない。

男ならここは堂々と行くべきだ。

「そう思い、覚悟を決める。」

「じゃ、いただきます……」

「うん……」

りんは緊張気味に差し出した手を震わせていた。

俺はその震えごと掴み取るようにして、りんの手から直接チョコを食べる。

「……っ」

「……」

直に感じる指先の感触。体温が伝わる。

心臓が高鳴っていく。

少し力を入れるだけで折れてしまいそうなほど華奢な手だった。

そんなことを考えているうちに、あつという間にチョコを食べ終えてしまう。

りんも俺が食べたのを確認してから、ゆっくりと手を離していった。

名残惜しかったが、いつまでもこのままでは居られない。

「ごちそうさま」

「どういたしまして」

お互いに顔を逸らす。

なんだこれ。なんでこうなった。

今更ながら恥ずかしさが込み上げてくる。

「ふう……」

とりあえず、深呼吸をして気持ちを落ち着ける。

そこでようやく冷静になれた。

正直どうかしている。

俺もりん今もすぐそこにいる滝本の空気にあてられているのかもしれない。

……だが決して悪い気はしなかった。

むしろ、良い。

願うならばずっとこうしていたいほどだ。

「あ、そうだ。佐藤君、もう一つあるんだけど食べる？」

「ん？」

言われてみれば確かに、まだ一つ残っている。

「いいのか？」

「もちろんよ。はい、どうぞ」

再び先程と同じように手で持つて差し出してくる。

「おう」

今度は躊躇わずに口に運ぼうとしたときだった。

「……」

前のめりになっているりんの影に人影が見えた。

それは安っぽいピンクの髪、それとアンマッチすぎるほどのガタイとピアスの持ち主がいた。

目をキラキラとさせているヤツの名は……桜庭花男だった。

「…あら、私にはお構いなく続けてちようだい。え？　なんで急に立ち上がるの佐藤君？　それとその手に持つてるのはなに!?　ねえちよつと待つて！　それ直撃したら私普通に死んじゃうから!!　お願いだから止めてえええ!!」

その後、食堂にいた他の社員らに今までのやりとりを全て目撃された事実耐えられず自室で悶絶していたのは、また別の話。



敦視点

「……はあ、どいつもコイツも色めき立ってやがって、羨ましいかぎりだな」

俺は一人、ディスプレイのブルーライトのみが照らしている真っ暗なフロアの中でぼやくように呟いた。

今日も今日とて仕事漬けである。

「……まあ、悪い事ばかりでもないか」

と、デスクの下に忍ばせてある膨らんだ紙袋を撫でる。

これは全てバレンタインチョコ。

こういう時ばかりは、女所帯のこの会社で何でも屋冥利につきるものだ。

体よく使われていると捻くれた考えも過ぎるが、もらって悪い気などしない。

それに、昼間のこと。

ディスプレイの隣に置いてある空の箱。

涼風から渡されたそれは、昼休憩時に貰った葉巻を模したチョコレートが入っていた。

なんか、変に気に入られちゃったな。

元はと言えば葉月の差し金で俺と引き合わせちゃったわけだが、まさかあそこまで懐かれるとは思わなかった。

慣れてないわけじゃないが、あれだけ真っ直ぐ好意をぶつけられると、こつちとしても反応に困ってしまふ。

素直に喜びを表に出せるような歳でもない。

それ以前に涼風の真意が読めない。

だから距離感がいまいち測れず、落ち着かないのだ。

……いや、落ち着かない理由はそれだけじゃない。

背後からやってきた足音がそれを確信させた。

「……あの」

この独特のイントネーション。

短いフレーズだけでもわかる。

東京近辺に住んでいた人間の口からはまず出てこない関西弁なまりの声色。

今日一日、ずっと鳴りをひそめていた彼女が現れた。

「……よう」

キーボードの上を走り続けていた手を止めて振り返ると飯島がいた。

なんとなく、彼女が俺を訪ねてくる予感があった。

状況はクリスマススの時と被るのもあるが、彼女が俺に声をかけるのは俺以外の人間がこの場にはいない状況しかないからだ。

彼女の人目を気にする性格を鑑みれば、わざわざ人前で話しかけるなんて真似はしないだろう。

「……」

「どうした？」

俺の言葉を受けて彼女は黙ったままだ。

少しうつむき加減のまま、何かを言いたげにしている。

俺は催促せずにただ待つことにした。

「その……これ」

やがて、ゆつくりと顔を上げたかと思うと、俺に向かって小さな包みを差し出してきた。

予想通りといえばそうなのだが、少し意外でもあった。

「ああ、ありがとよ」

俺は特に迷うことなくそれを受け取った。

断る理由なんて無い。

だが、彼女からバレンタインにチョコをもらうのは多少の後ろめたさが伴う。

なにせ、昼間の涼風の時と同様、彼女との距離感が掴めないせいだ。特に最近のこと。

寝ている俺の頭を撫でてきたことも、拍車をかけた。

この歳になって、年下の……それも10は離れている相手にそんなことをされるとするのは妙な気分だ。

それに今日もこうしてバレンタインチョコを渡してきた。

中身は……見たところシンプルな出来映えだが、おそらく手作りだろう。

しかし、なぜ？ どうして俺なんだ。

いや、別に嫌というわけではない。

ただ純粹に不思議に思うだけだ。

どうして俺にと。

飯島本人からしたら、俺なんて自分の父親と大差ない年齢の男。

しかも、仕事では頼りがいがあるかもしれないがプライベートでは
そうでもない。

それなのに、なんで俺みたいなおっさんに……。
疑問は尽きない。

とはいえ、今はとりあえず受け取った礼を言うべきだろう。

ここで無言を貫く方がよっぽど失礼にあたる。

「ありがとうな」

「っ…いえ、それほどでも……」

改めて感謝の意を伝えると、飯島は小さく体を震わせた後、顔を伏
せてしまった。

フロアを照らしているのはディスプレイの光だけというのもあつ
て表情は見えないが、照れているのだろうか？

「っ」

と様子を伺っていると、彼女の震えがぴたつと止まった。まるで電
池切れを起こしたロボットのようになくなった。

視線の行方は俺に向かつていない。少しずれている。

振り返ってデスクの方を見ると、昼間に涼風からもらったチョコ
レートの空き箱が置いてあった。

「あの…それは……？」

そこでようやく気づいたのか、飯島が声をかけてきた。

相変わらず小さい声で聞き取りにくいのが、なんとか聞き取れるくら
いの音量だった。

「ん？……ああ、昼間に涼風から貰ったチョコだよ」

俺は隠す必要も無いので正直に答えることにした。

「……い」

すると、飯島の肩がピクツと動いた。

何に対しての反応なのか。

俺にはわからない。

「…そう、ですか」

ややあつて、彼女は短く呟いた。

再び沈黙が訪れる。

また何か言いたいことがあるんだろうが、それが上手く言葉に出来ないでいるようだ。

さつきよりも重苦しい空気。

俺は居心地の悪さを感じずにはいられなかった。

「あの……じゃあ私はこれで」

耐えかねて先に口を開いたのは飯島の方だった。

「おう、お疲れ」

「はい、失礼します」

軽く頭を下げた後、飯島はそそくさとその場を後にした。

足早に出ていくその後ろ姿を見送る。

「……はあ」

その姿が見えなくなると同時にため息が出た。

どうにも調子が狂う。

俺自身、どういう対応をすればいいのかわからず、戸惑っていた。

なんとも言えない気持ち悪さが胸の中に渦巻いている。

このモヤモヤを払拭すべく、キーボードを叩いてみるものの、一向に集中できない。

結局、作業が終わったのは日付が変わる直前のことだった。

……ああそうだ。

ブルーライトに焼かれた瞼を揉みながら、暗闇の中である考えが過ぎった。

ホワイトデーのお返しはどうしようかと。

変わりゆくモノ、変わらないモノ

青葉視点

「佐藤君、昨日のドライブすごく楽しかったわ。ありがとう」

「そうか」

「また誘ってね」

ああ…よかったな、二人とも。

色んな事があつたけど無事恋人同士になれて。

入社してきた私はブースの影に隠れて佐藤さんとりんさんが仲睦まじく話しているところを観察していた。

会話の内容から、デートもうまくいつてるみたいだし、喜ばしい限り。

今もりんさんの周囲には花がたくさん咲いているように見える。

佐藤さんとりんさんが晴れて恋人同士として付き合うことなり、八神さんもそれをちゃんとした意味で祝福してくれた。だからイーグルジャンプを巡っていた因縁の三角関係は完全な終結を意味している。

何が一番嬉しいって、開放されたのは佐藤さんだけじゃなくて私も同じなんだ。

これでもう佐藤さんにいじわるされずに済むんだから！

「じゃあ、俺、そろそろ作業にもどるよ」

「うん、頑張ってね！」

どうやら二人はこれから仕事に戻るらしい。

りんさんはニコニコ笑顔で手を振っているし、佐藤さんは無表情だけど少し嬉しそう。

あ…佐藤さんがこっちきた。

のぞき見されてたって思われるかもしれないけど、二人の関係は恥ずかしながらもよなものじゃないし、きっと大丈夫。

「佐藤さん、おはようございます」

「おう、涼風か」

いつも通りの挨拶した私の頭を佐藤さんは掴んだ。

「……………えっ？」

一瞬だった。

瞬きほどの時間しかなかったのに、私が今朝30分もかけて整えた髪型が変えられていた。

ツインテールにしていたはずなのに、今はへんてこな雲みたいな髪形になっている。

「佐藤さん!? どうして!？」

「何がだ?」

悪びれも無く言う佐藤さんに声を上げてしまう。

「佐藤さんはもうりんさんと付き合えたんですから、私にもういじわるする理由なんてないでしょ!？」

「…確かに、お前をからかう理由なんてないな」

だが、と佐藤さんは続けた。

「それはそれ。これはこれだ」

「もー!!」

佐藤さんは余計に髪を乱してくる。

抵抗したくても速すぎて見えないし、腕力では勝てないし……。

結局10分ほど弄ばれてしまった私は、肩を落としながら自分の席に戻った。

「…佐藤さんめ! りんさんと付き合えたのになんであんなことするかなー!」

せっかくセットした髪の毛はボサボサにされてしまった。

恋人ができたのだから少しは大人になってほしいというか、せめて彼女以外の女の子にも優しくしてほしい!

「あ…青葉ちゃん」

そんな風に荒れている私の耳に入ってきた声。

りんさんの声だ。

振り向くとそこにはやはり、りんさんが立っていた。

そうだ。

りんさんをお願いしよう。

大切な恋人からお願いされれば佐藤さんも態度を改めてくれるに

違くない。

私は期待を込めて言った。

「あの、りんさ——」

「……………」

改めてりんさんを見たとき、私は言葉を詰まらせた。

だって、さつきまで花で溢れていたりんさんのオーラが消え失せてるんだもん。

代わりにそこにあっただのはどんより曇った暗い雰囲気。

しゅーんと落ち込んでいる

ような、何かを気に病んでいるような、そんな感じ。

「り、りんさん？ どうかしました？」

「え？ ああ、なんでも無いよ」

そう言っただけで笑うりんさんの顔はやっぱり元気が無い。

でも原因はわからない。

一体どうしたんだろう。

「青葉ちゃんもお仕事頑張ってるね」

「はい……………」

りんさんはそれだけ言い残して行ってしまった。

……気になる。でも聞けなかった。

だけど仕事には集中しないと。

だって私のキャラデザが遅れるということは、キャラ班の皆に迷惑をかけるということなのだから。

「よし……」

気を引きしめた私はデスクに向かい合っってペンを握った。

そしてー

「出来た」

かなり納得いく出来になったと思う。

これならきつと八神さんも満足してくれるはずだ。

すぐに見てもらおう。

席を立った私は隣のブースへと急ぐ。八神さんも忙しい身だから早く捕まえないと。

…でも、私の急ぐ足がある声が止めた。

「佐藤君」

りんさんだった。

今朝と同じように佐藤さんに話しかけているみたい。

でもブースの壁越しでもわかるくらい、その声色からは覇気がなかった。

「青葉ちゃんに……………ないで……………」

「…わかった」

よく聞こえなかったけど、私の名前だけは聞き取れた。

私のこと？

なんだろう…？

さっきのりんさん様子や言い回しから、考えを巡らせる。りんさんは佐藤さんに何を伝えようとしたのか。

そして一つの答えに行き着いた。

りんさんはきつと、こう言ったんだ。

『佐藤君、青葉ちゃんに話しかけないで』…と。

それってつまり…私、りんさんに焼きもち焼かれてる!?

そんなつもりなんてなかったのに!!

ど…どうしよう!

今が就業時間なのも忘れた私はその場でオロオロとして、それからしばらくその場に立ち尽くしてしまった。

でも、なんとなく腑に落ちてしまうところもある。

だってそうだ。

恋人が他の異性に構っているところなんて見たくないよね。

佐藤さんの髪の毛いじりもその最たる例だ。

髪を触るなんて、それこそ恋人同士くらいでないと触られなくないもん。

佐藤さんの気持ちも、りんさんの気持ちも知ってたのに、私が気を付けないといけないことなのに…。

もつとちゃんとしないと…。

せつかく二人が両思いになれたのに、私のせいで二人の仲が悪くなるなんて嫌だもん。

「…ちよつと席に戻ろう」

もう八神さんに今日の仕事を見てもらうどころじゃなくなつてしまった。

こんな状態で提出しても絶対にダメ出しされるだけだと思う。踵を返してキヤラ班のブースに戻ることにした。

「あ……」

その時、狭いブースの通路にばつたりと出くわしてしまった。

「お、涼風か。八神なら席にいるぞ？」

そう、佐藤さんに。

今は一人みたいだ。りんさんはきつと会議の準備とかで忙しくしているはずだ。

「だけど……」

「あ……いえ……いいです」

「そうか」

「……」

「……どうした？」

「い……いえ」

今までだったら軽く世間話をしたり、いじめられたりする。でももうそんなことしちやいけない。

二人の幸せは、なにより優先しなければいけないのだから。

「よ…用もないのに、話すことなんてないじゃないですか……」

「……」

「……失礼します」

と、短い拒絶の言葉をあとに私は彼の横を通り過ぎる。

親しかったはずの佐藤さんに冷たい態度を取るのは心が痛む。

最後までうつ向いていたせいで佐藤さんの顔も満足に見えなかった。

「……」

でもこれで良いんだ。

私なんか関わってたら、また二人は喧嘩しちゃうかもしれないだから。

● 「…そんなことがあったんだ」

「はい」

席に戻った私は、さっきのことをひふみ先輩に話すことにした。

別に言いふらすとかそういう訳じゃない。

ただ自分の中でちゃんと整理したかった。同じ恋人がいるひふみ先輩の意見も聞きたいのも理由の内に入っているけど、一番欲しかったのは納得だった。

「ひふみ先輩も、もし私が彼氏さんと仲良くしてたら嫌ですもんね」

「え？　…それは…まあ……」

目を泳がせるひふみ先輩を見て確信する。

やっぱりそうだ。

考えてみれば当たり前のこと。

今まで通りの関係が続くなんてあり得ない。

身近な人に恋人ができればなおのこと。

ひふみ先輩の彼氏さんとはあまり接点がなかったし、ひふみ先輩と付き合ってる人がどんな人か気になるくらいの興味くらいでそのままで積極的関わろうという気にはならなかった。

それだってひふみ先輩と彼氏さんの邪魔をしたくないって無意識に避けていた。

きつと、それだけデリケートなことだから。

「すみません。こんなこと聞かせてしまって……」

我ながら失礼な例えかたをしてしまったと思う。

でも言わずにはいられなかったのだ。

するとひふみ先輩はいつものように微笑んで言った。

「ううん。大丈夫だよ」

「……ありがとうございます」

……本当に優しい人だ。

「でも……こうやって皆さん、少しずつ変わって行って……前みたい
にいられなくなるのかなって思うと寂しくなってしまうって……」

「青葉ちゃん……」

「ひふみ先輩までそんな悲しい顔しないでください。ちよつと寂し
いだけなんです……」

そう。

これでいい。私はちゃんと理解できたんだから。

別に今生の別れになるわけじゃない。少しずつ正しい距離感を掴
んでいけばいいだけなのだから。

「いや、その……青葉ちゃん……これ」

「？」

ひふみ先輩はしんみりとした空気を破るのが申し訳ないのか、遠慮
気味にあるものを見せてきた。

それは手鏡。

女の子の必需品であるそれを、ひふみ先輩は自分の方に向ける。
そしてそこに映っていた私の姿は……

「ほあああああ!!!?」

脳天に大きなハートが出来ていた。

何で作られているかは決まっている。

私の髪の毛だ。

しかも丁寧にリボンまであつられてあつた。

こんなことが出来る人を私は一人しか知らない!!

「ようやく気がついたか」

「!？」

背後から声をかけられた。

振り向くとそこには腕を組んだ佐藤さんがいる。
しかもどや顔で!!

「佐藤さん! いつの間に!?!」

「…涼風、俺とすれ違ったら最後だと思え」

「すれ違ったって…あの時!?!」

佐藤さんの横を通りすぎた時を思い出す。

あの時しかない。

うつ向いていたから気がつかなかった。

いやそれよりも、私歩いてたし、すれ違ったのも一瞬だった。

それでこの髪型にしてくるなんて、一体どういうスピードと精密動作性なんですか!!

「んもー!!」

ていうか私にこんなことしていいんですか!?

りんさんをお願いされてたはずなのに!

もしまたこんなところりんさんに見つかったらまた落ち込んだり
いますよ!

「あ…青葉ちゃん」

「!?!」

噂をすれば影。

振り返れると当然、りんさんがいた。

しまった…!

このままじゃまた誤解されちゃう!

「り…りんさん、これは違うんです…」

「かわいい!」

「!?!」

え? あれ、おかしいな。何か思ってた反応と違う。

前に私が髪を弄られたときは凄く落ち込んでいたのにどうして…
?

「えっと…どういいうことですか?」

「どづいいうこと?」

なんか話が噛み合っていないような…。

ひふみ先輩も不思議そうな顔をしている。
どうも様子が変だ。

「あ、あの……私、さつきりんさんと佐藤さんが話してるところ聞いちゃって……」

盗み聞きするつもりはなかったと遅れて付け加えた私は先程の会話の内容を二人に伝えることにした。

『青葉ちゃんに………ないで』って………」

「あぁっ、そういうことね」

と、りんさんは納得したように言う。

え？ 今のでわかったの？ 私にはさっぱりわからないんだけど。
ひふみ先輩も似たような感じで、首を傾げている。

「私、佐藤君にお願いしたの。『青葉ちゃんにあんまり変な髪型させないで』って」

ってことはつまり……焼きもちじゃなかった!?

と言うことはもしかして、今までのってたただ私が早とちりしてただけ!?

「その髪型は可愛いから……って、青葉ちゃん？ どうかしたの？」

「い……いえ」

は……恥ずかしい。勝手に勘違いしていた自分が情けない。

穴があつたら入りたい。

でも、そっか。

りんさんも佐藤さんもいつも通りだった。

なんにも変わってない……。

それが何より嬉しかった。

本当によかつ……。

「よし……」

気がつくともまた佐藤さんが私の頭を弄っていた。

ハートの上に小さなハート。

それと花飾りまで追加されている。

しかもリボン付き。

私は思わず叫んだ。

「だからなんでこういうことをするんですかあああっ!!」

「うるせえな。お前が喜ぶと思ってるやっただろ」

もうやだこの人!

「私は喜ばないです!!」

「なんでだよ」

「もー!!」

私達のやり取りを見てりんさんはクスリと笑っていた。ひふみ先輩はいつものように苦笑いしてる。きつとこれからもこの関係は変わらないだろう。

だって、私達は仲間なんだから。

それがちよつとだけ嬉しかった。

「佐藤さんはもう少し大人になってくださいーい!!」

私の答え 前編

八神視点

「じゃあ改めて……本試験、お疲れ様！」

深夜、イーグルジャンプのビルにある警備室。

そこで私は共に労いの言葉をクラツカーで鳴らす。

クラツカーの照準が向けられていた人物はもちろん、彼……ヨツ

シーこと、吉田駿輔だ。

今日、ようやく大学の2次試験を終えたばかり。

その慰労会として、前から提案していたのだ。

「お……大げさですよ。まだ結果も出てないんですし」

「何言ってるの！ 自信持ちなつて！」

照れくさそうに頬を掻く彼に、笑いながらジュースの缶を手渡す。

彼は苦笑しながらそれを受け取るとプルタブを開ける。

私もそれに倣って自分の分を開ける。

そして乾杯をして一口飲んだ後、お互いの顔を見合わせて吹き出した。

「でも本当によく頑張ったね。バイトしながら予備校通って……」

本当にすごい。

私にはそんなことできないよ。

仕事一本でやってるから余計に思う。

「いえ、そんな……。僕なんかまだまだです」

「もうそう言う謙遜は禁止って言ってるでしょ？ もっと胸張っていいんだよ？」

彼の言葉を否定するように首を振った後、腕を伸ばして背中を叩く。

するとまた照れたのか、ジュースを持っていない方の手を首筋に当てて小さく頷いてくれた。

いつもの癖を出してしまうところがまた可愛く思えて、胸の内に温かいものが広がる。

……ああもう、可愛いなあもう!!

「でもほんと、なんというか……八神さんがいてくれたらか、ここま
で頑張れたんだと思います」

「ええ!? わ、私が!？」

不意打ちのような発言に思わず驚いてしまう。

まさか自分が褒められるとは思ってなかったからだ。

しかもこんな形で。

「横試の結果が振るわなかった時も、親身になって相談に乗ってく
れましたし……励ましてくれましたよね。すごく嬉しかったです」

「え……ちよっ」

「いつも元気をもらっていました。ありがとうございます」

「やめてよそういうこと言うの! 恥ずかしくなるじゃん!!」

行儀よくお辞儀をする彼を見ていると顔が熱くなっているのを感じ
る。

きつと今頃私の顔は真っ赤になっているだろう。

それを誤魔化すために、つい持っていたジュースを一気飲みしてし
まった。

「ですけどっ、本当のことですし」

「そ、そういうのも禁止! ほら、せつかくなんだからもっと食べよ
うよー!」

そう言いながらお菓子の入った袋を差し出す。

すると彼は笑って受け取ってくれた。

そして中に入っているポテトチップスを手に取ると口に放り込む。

その様子を見てホッとすると同時に、落ち着かない気持ちもあるの
だ。

矛盾しているかも知れないけれど、それが正直なところだったりす
る。

だってそうだろ? 彼が私に対して好意的な発言をする度に、胸の

奥がざわつくのだ。

この感覚は、今まで経験したことがないものだった。

嬉しいようなむず痒いような、それでいて心地よい感じ。

だけどそれと同時に不安にもなる。

それに、元気をもらったのは私の方なのだから。

去年のキャラコンペに落ちて、青葉に八つ当たりして、落ち込んでいたところを彼に励まされてから。

……ああ、それを思い出すと芋づる式に思い出してしまう。

酔った勢いで彼にキスしてしまったことを。

そしてその後と言われたことを。

——今は受験もあるので、受験が終わったちやんと答えを言います。だから、その時まで待つてください。

あれ以来、彼と会う度にドキドキするのだ。

まるで初恋をした中学生みたいに。

……参ったな。

そう思いながら、再び缶を口に付ける。

喉を通る冷たいジュースでもこの熱は冷める気がしない。

でも、嫌じゃない。むしろ楽しい気分になる。

ふうつと息を吐いた後、彼を見る。

視線を感じたのか、こちらを見た彼と目が合った。

慌てて目を逸らすと、彼は不思議そうな顔をした後、微笑んでくれる。

その笑顔に、また胸が高鳴った。

どうしようもなく幸せで、そして苦しい。

私は一体、どうしてしまたんだろうか。

「……ねえヨッシー」

「はい？」

「……その、合格発表っていつ頃出るのかな？」

「来週ですけど……」

「そっか……」

もうすぐだ。

でも私はまだ覚悟が決まってない。

結果がどうあれ、彼とこれからどうするべきなのか、何もかも定まっていない。

「ごめんね、急に変な事聞いて」

「いえ、大丈夫ですよ」

そう言つて彼は笑つてくれている。

「ほらもつと食べよ？ まだあるんだからさ」

「はい、いただきます」

彼の言葉を聞いて安心しながら、私もまたお菓子に手を伸ばすのであった。

「じゃあ僕はこれで失礼しますね」

「うん、今日はありがとね！」

そこそこ夜が更けてきたところで、彼は帰る準備を始める。

2次試験は1日で終わるとはいえ、疲れはあるだろう。

そんな時に付き合わせてしまったことに申し訳なく思う。

「いえ、僕も楽しかったですから」

「ほんとー？ なんか無理してない？」

「本当です。また誘つてください」

「うん、またね」

そう言つて手を振る。

すると彼は少し照れくさそうにしながらも手を振り返してくれた。

そんな姿に思わず頬が緩む。

彼の背中が、非常灯だけが照らす暗闇の中へ消えていくのを眺めていた。

よし、私も明日は朝から会議だから、すぐに寝ないといけない。今日は久しぶりに会社で寝よう。

ちゃんと寝られるかわからないけど、皆が見てる前でぼんやりしてたなんて恥ずかしいところ見せられないし、それでりに叱られなんてしたらそれこそ――

「コウちゃん」

「おわあ!？」

突然声をかけられて驚く。

振り向くとそこには、私を見つめるりんの姿があった。

「なんだりんか……びつくりしたあ」

心臓の鼓動を抑えつつ胸を撫で下ろす。
普通に驚いた。

というより、今の今まで気付かなかった。

それほどまでに、彼のことばかり考えていたということなんだろう
か。

「……」

「りん？」

改めてりんの顔をまじまじと見る。

明らかに不機嫌な表情を浮かべている。

何やら怒っている。

それも尋常じゃ無い。これはもしかしなくても……。

もしかするかもしれない。

嫌な予感がする。

「……………あの男の人、前も話してたよね。すごく仲良さげだった
けど？」

ああ、やっぱりヨツシーのことだ。

どう説明したものか。

下手なことと言うと余計に拗れることになりそうだし。

ここは素直に話すしかないのかなあ。

「ねえコウちゃん、私前に言ったよね？　そういう人がいるなら正

直に言ってるって」

「えつとお……」

確かに言われた覚えがある。

面談の時だ。

当時は意味がわからなかったけど、あれってつまり、こういうこと
だったのか。

今にして思えば、当時の私は鈍感にも程がある。

「ねえ答えてよ。どういう関係なの？　恋人？　それともただのお
友達？」

「うっ……」

ゆらりゆらりとした足取りで近付いてくるりんに対して、後ずさり

する。

だけど狭い廊下では逃げ場がない。

そのまま壁際まで追い詰められてしまう。

目の前には、りんの顔が迫ってくる。

彼女の顔は笑っていたけれど、目は笑ってはいなかった。

怖い。本能的にそう思った。

「ねえコウちゃん」

耳元で囁かれる。

その言葉を聞いた瞬間、私の身体は硬直してしまっていた。

「教えてくれるよね？」

有無を言わせないその口調に、私は何度も首を縦に振るしかなかった。

そして……

「はい、これ。あげる」

そう言いながら差し出されたものを、私は困惑しながら受け取った。

「んえ？」

見るとそれは缶ジュースだ。

しかも見慣れたもの。

つい最近飲んだものだ。

「ど、どうしてこれを？」

「喉乾いたから買ってきただけ。それ以外何かある？」

「そ、そうですか」

どう見ても怒ってますよオーラを纏った彼女に、これ以上追及することは憚られた。

「それと、これも」

そう言って彼女は、もう1つ別のものを差し出してくる。先程のものとは色違いのそれを受け取る。

こちらはオレンジ味らしい。

「あ、ありがとう」

「別にいいよ。それより早く飲んで」

「はい」

言われるがままプルタブを開ける。

そして一口飲むと、渴いていた喉が急速に潤っていくのを感じた。そこでようやく落ち着きを取り戻す。

ふう……なんとか誤解は解けたみたいだ。

一時は本気で殺されそうになったけど。

「ごめんね、りん。ちょっといろいろあつてさ……」

「わかってるよ。だからもう気にしないから」

そう言って、りんは少し寂しげに微笑む。

「で、ちゃんと聞かせてね。さっきの人のこと」

あーうん、やっぱりそうなるよね。

りんが納得するまで説明するしかないか。

「なんで今まで黙ってたの？」

「いや別に黙ってたわけじゃなくてさ……」

「……でも言わなかったでしょ」

「いやまあ、そう言われればそうなんだけど……」

拗ねてるような表情で詰め寄ってくるりんは、思わずたじろぐ。

りんが怒られるのも珍しいけど、こんな風に問い質されるのは初めてかもしれない。

言わなかったのは事実だし。

いつかは話さないといけないことなのかもしれないからちゃんと伝えておかないと。

「あのさ……あの子、浪人生だね。ここの警備のバイトしながら勉強してたの。それでたまに差し入れとか持って行ってるうちに仲良くなつて……」

「ふうん」

含みのある相槌をされる。

まだ納得がいつてない様子。

まあ仕方ないか。

「それに……こういうのつて、あんまり他の人に言いふらすものじゃないじゃん？ 変にプレッシャーかけちゃうかもと思ってさ」

彼が頑張ってるのは恥ずかしいことじゃないし、立派なことだと思うけれど、それを他人に知られるのはあまり良くない気がしたのだ。

努力とかつて、人に自慢したりするためにやるんじゃないし。

下手に彼の耳に入ったりして、邪魔になんてなりたくなかったから。

「……そっか。コウちゃんらしいかも」

そう呟くと、りんは納得してくれたのか小さく息を吐いた。

どうやら許してもらえたようだ。

ほっとすると同時に安堵する。

よかった……。

「でも私には黙ってたのね」

「うっ……」

まだ根に持っていたらしい。

ジト目で睨まれる。

「そ、そんなの言ったらりんだって、佐藤のこと私に相談しなかったじゃん！」

「さ、佐藤君のことは……その、私も気持ちの整理がついてなかったっていうか……なんていうか……」

珍しくしどろもどろになるりん。

自分の彼氏のことをやり玉にあげられると弱いらしい。

「ていうか！ 佐藤君のことは今関係無いでしょ!?!」

「関係なくはないでしょ!?! 勝手に佐藤と付き合ったのに、私の時だけ口出すなんて虫がよくない?」

「っ……あの時だって、コウちゃんがあんなひどいこと言ったくせに!」

「それは違うでしょ!?!」

「違うないもん!!」

「いや絶対ちがう!!?」

「なによそれえ〜」

その後しばらく言い合いが続いた。

そして……………

「はあ……………なんか疲れた」

「……………そうだね」

ヒートアップした言い争いに、お互いに肩で呼吸をするくらい疲弊していた。

まさかこんなことになるとは。

「とりあえず今日はこの辺にしておこう。朝から会議あるんだしさ」

「そ、それもそうね。……………というか、私は会議の後にまた外回りあるんだけど」

「え、そうなんだ」

「うん。だからもう少しだけ休ませて」

そう言うと、りんは壁に背中を預けながら座り込んだ。

そのまま目を閉じている。

「寝不足?」

「まあ……………ね」

「大丈夫なの?」

「平気だよ。ちよつと最近忙しくてね。昨日は帰ってすぐベッド入ったから」

「そっか……」

りんは普段から頑張り屋さんだけど。

最近は特に仕事に力を入れてるみたいだ。私が言えた義理ではないけど、あまり無理はしないで欲しいと思う。

佐藤と付き合い初めてから、やることも気にすることも増えただろうから、私も少しは気を遣ってあげないと。

「ふふ……」

「？」

後ろから零れるような笑い声が聞こえてきた。

りんの方を見ると、彼女は膝を抱えてこちらを見上げていた。なんだか楽しげだ。

「りん？」

「なんか、お互いの浮気を罵り合う夫婦みたいだね」

「やめてよ縁起でもない」

本当に勘弁して欲しい。

もしそんなことになったら、私は多分立ち直れないと思う。

りんとの喧嘩別れだけは絶対に嫌だ。

それこそ死んでしまいたいくらいに。

りんを泣かせるような男なら、例えば相手が誰であろうとぶっ飛ばしてしまおうだろう。

それはもうボコボコにして、再起不能になるまで徹底的に。

だから、私の前であれだけの大見得切った佐藤がもしそうなれば一生許さないだろう。

「……とっころでさ」

「んっ」

何か言いたげな顔を向けてくるりに首を傾げる。

「コウちゃん。さっき、私の時って言ったけど……やっぱりあの子のこと好きなの？」

「へっ!？」

予想外の質問に驚いて変に裏返った声がでてしまう。

「あ、あれは言葉の綾といひかなんといひか……」

必死に取り繕おうとするが、りんの顔を見て諦める。

これは誤魔化せる雰囲気ではない。

まあ別に隠す必要もないんだけどさ。

りんには知っておいて欲しいし。

だから正直に伝えよう。

「……それが、まだわからないんだよね」

そう言うと、りんは不思議そうな表情をする。

「好きかどうかかわかんないってこと？」

「いや……その、色々段取りっていうか……約束があるんだ。受験が終わったら答えを出すって言われてて……」

「……」

「でも私、まだ全然その気持ちがわからなくて……。だから、りんにも相談できなかつたんだ」

「ごめんね？」と謝ると、りんは複雑そうな顔をしながら黙り込んでしまった。

怒っているのだろうか……。

それとも呆れているのかもしれない。

私自身、自分のことがよくわかっていないのだ。

こんな状態で返事をして、りんが納得できるはずがない。

「コウちゃんは、どうしたい？」

「えっ？」

不意に投げかけられた問いに、間拔けな声で反応してしまう。

りんは真つ直ぐに私を見つめている。

「その子が出す答えを、どう受け止めてあげたいの？」

「私は……」

りんの真剣な眼差しに息を飲む。

今まさに恋と向き合っている彼女だからこそその言葉に、思わず考えさせられる。

私は……ヨッシー……駿輔に対してどんな感情を抱いているのか。

「私……私は……」

自分の胸に手を当てながら考える。

彼のことを思い浮かべただけで、心臓が高鳴ってくる。

鼓動が速くなって、身体中から汗が出てくるほど熱くなる。

この感覚は何なのだろう。

今まで感じたことのない未知の感覚だった。

「……」

……わからない。

色んな気持ちが先行して、想いがまとまらない。

いや、確かに凄くいい子だったし、嫌いじゃないどころかむしろ好感を持ってた相手ではあるけれど。

いやいやそういう問題じゃない。

違う。

そもそも、彼は未成年。

あんな貫禄ある見た目をしていても中身は青葉と同じ年。

……でも、私なんかよりずっとしつかりしてて、でもちよつと可愛いところもあって……ダメだ、また頭がこんがらがってきた。

結局何を言いたいかというと、

「わかんない……」

ただそれだけだ。

自分が彼に抱いている感情が何なのか、はつきりとした輪郭を持っていない。

「……そっか」

りんは短く呟いた後、ゆっくりと立ち上がった。

「コウちゃんなら、きっと大丈夫だよ」

「りん……」

「だからちゃんと、受け止めてあげてね」

りんは微笑みながらそう言ってくれた。

彼女の言葉に胸を打たれる。

私は小さくありがとうと言って、彼女に手を振った。

りんは休むためにブースを出ていった。

私はその後ろ姿を見送ってから、再び机に突っ伏す。

そして、りんに言われた言葉を頭の中で反すうする。

私の答え。

私の出した結論。

彼——駿輔の答えと気持ち、そして待ち構える結末を、どう受け止めてあげられるか。

例えどんな結果になろうとも、私はそれを真摯に受け入れること。

それが、私が彼と交わした約束なのだから。

「……よしー」

頬を張って気合を入れる。

約束の日まであと1週間。

それまでに覚悟を決めよう。

りに話せてよかった。

少しだけ心が軽くなった気がする。

りんには感謝しないと。私はそんなことを考えつつ目を閉じて眠りについた。

だけど………

………だけど、その約束の日に彼が私の目の前に現れることは、
なかった。

私の答え 後編

八神視点

……ああ、辛い。

こんなに辛いのはそれこそ初めてADになって失敗したときや、キララコンペに匹敵するほど辛い。

何があったかって、それは言うまでも無い。

彼、吉田駿輔が約束の日に来なかった。

受験が終わったら答えを出す、と彼は言った。

でも、私は彼が約束を反故にするような人間だとは思わなかったし、そう信じたかった。

だが、現実是非情だ。

就業時間が始まるまでそう時間が無いのに、私はまだこうして泣きそうな顔を隠すようにデスクに顔を埋めている。

やっぱり、私じゃダメだったのかなあ？

こんな胸も無いし、だらしが無いし、仕事以外で話した事だっけとんど無い女なんて……。

自分で言ってる悲しくなってきたな……ううっ。

「コウちゃん、大丈夫？」

「あ……ああ、りん……」

そんな私の様子を見かねたのか、りんが心配そうに声をかけてきた。

もうすぐ仕事始めないといけないし、彼女にまで気を遣わせるわけにはいかない。だから少しでも気丈に振る舞わないと。

青葉達も見てるんだし……。

だけど……無理だよお……。

「ほら、これ飲んで落ち着いて」

「ありがと……」

りんから手渡されたのは温かいお茶が入ったマグカップ。

彼女の優しさに感謝しつつそれを受け取り口をつける。

喉を通る温かい感覚が少しずつ全身に広がっていき、胸の奥にある

黒く重たいモノが軽くなる感覚を覚えた。

でも、無くなったわけじゃない。確かにまだこの胸に残っている。

「…私、やっぱり嫌われてたのかな？」

ポツリと漏れ出た弱音。

それが今の私が抱いている気持ちそのものだった。

「……んー、多分ちがうと思うよ」

しかし、りんはそれを否定してきた。

「え？なんで分かるの？」

「だって、その子は受験が終わったらって言ってたんでしょ？ だとすると、今回の結果が駄目だったんじゃないかな？ それで合わせる顔がないとか、申し訳ないと思ったんじゃない？」

「……」

確かにりんの言葉は的を射ている。

口に出して出来なかったときの辛さがどれほどのモノか知らない私ではない。

でもだつたら尚更、来て欲しかった。

彼が頑張っていたのは私が一番よく知っているんだから。

それに……彼の口から直接聞きたかった……。

そうすれば、その現実ごと彼の気持ちを受け入れることができたかもしれないのに……。

「それにね」

「？」

また泣きたくなって机にぶつかっている私の顔を、りんの声が起こした。

「彼、……この警備員なんでしょ？ 出勤するにしても辞めるにしても、かならず一度はここに戻ってくんじゃないかな？ その時にもう一度会えるかもよ？」

「！」

言われてみればそうだ！

今朝、彼はここには戻ってきて居なかったけど、今日中に戻ってくる可能性はある。

むしろ今まで連絡の一つもなかった方がおかしいくらいだ。

なのに私は勝手に勘違いして落ち込んで……馬鹿みたいじゃん！

「そっか……そうだよね！ よし、元気出てきた!!」

そうと決まればいつまでも泣いている場合じゃない!! 私は自分の頬を思いつきり叩いて気合いを入れ直すと、そのまま勢い良く立ち上がった。

パンツという小気味良い音が室内に響き渡り、皆が何事かこちらを見てくるが気にしない。

私は一度深呼吸をして気持ちを切り替えると、隣に立っているりんは笑顔を向けた。

「ありがとう、りんのおかげで目が覚めた」

「そう、よかった」

そして私たちはお互いの顔を見て笑い合う。

やっぱり、りんと同期で良かった。

改めて心の底からそう思った。

「じゃあ、今日の会議なんだけど、準備出来てる?」

「うげえ……そうだった……すっかり忘れてた……」

「しっかりしてよー、一応ADなんだからさあ」

「分かってるよ……」

会議までまだ時間があるとはいえ、こんな状態でまともに出来るとは思えない。

だからと言って、サボりたいわけではないのだけれど。

少し外の空気を吸えば気分転換になるかもしれない。

「じゃあ私、ちよつと出てくるね」

「うん、いってらっしゃい」

りんに見送れながらオフィスを出る。

廊下を歩きエレベーターホールに着く頃には、大分落ち着いてきた気がした。

普段なら屋上とか、自販機のある食堂あたりに行きたかったけれど、あまり他の社員に今の私を見られたくない。

そう思った私は、無意識に特に用の無い下の階へと降りていった。

選んだ階は奇しくも、彼と私が深夜共に過ごした警備室があるフロア。

もしかしたら彼に会えるんじゃないかと思つて、ついそんな場所を選んできました。

……我ながら未練がましい女だ。

苦笑いが零れるのを実感しながらエレベーターの扉が開くのを待つ。チンと軽い音を鳴らし開いた先にあつたのは、あの日と同じように薄暗い空間が広がっていた。

だが今はもう、その暗さが心地いい。

まるで、私の心の中を表しているかのように思えたからだ。

「……よしっ」

小さく気合を入れて一步を踏み出す。

スリッパの布地が床を叩く音だけが静かな通路に響いた。

誰もいない。

当たり前の事だけど、それが何と無く寂しく感じてしまう。

「ははは……重症かな、私」

いつまでもこんなところにいられない。すぐにおふいすに戻ろう。

と、踵を返してエレベーターに乗ろうとしたときだった。

「八神さん？」

「!？」

不意に声をかけられ、思わず肩が跳ね上がる。

声の方に振り返つてその先にあるの人影を視界に捉える。

私よりずっと背が高く、広い肩幅。

なにより今まで以上に疲れ切つたその三白眼を見れば、それが誰なのかすぐに分かつた。

「ヨッシー……？」

そこに立っていたのは紛れもなく彼だった。

制服ではなく私服姿なのは、恐らく出勤してきたばかりなのだろう。

しかし私には彼がどうしてここに居るのか分からなかった。

だって彼は……

「……っ!!」

「あー、ちよつと!!」

彼が私を見るなり慌てて走り出した。逃げるようにその場から離れていく。

私は咄嗟に彼の背中を追い掛けたが、運動不足の身体は直ぐに悲鳴を上げてしまい、あつという間に距離が開いてしまう。

「待って!!ねえ、駿す——アダア!!」

そして、スリッパで走り出したのが仇と成った。

踏み込んだ勢いで足が滑り、そのまま前のめりに転んでしまった。幸い、そこまでスピードが出ていなかったおかげか、派手に倒れ込むことはなかったけど……。

「いったあ……うう……膝擦りむいちゃった……」

「大丈夫ですか?!」

起き上がろうと腕に力を入れた瞬間、頭上から彼の焦る様な声が聞こえてきた。

顔を上げると、そこには心配そうな表情で手を差し伸べている彼の姿が。

その姿を見た途端、私の胸の奥がギュツと締め付けられるような感覚に襲われる。

もしかして、私が転んだから心配して戻ってきてくれたのかな?

そう思うと、胸の締め付けが強まるのを実感した。

「ほら、立てますか?」

差し出された手を掴もうと、私は震えそうになる手でそれを掴んだ。

「ありがとう」とお礼を言いながら立ち上がってみると、彼は「どういたしました」とだけ返してくる。

そして、また沈黙の時間が始まった。

「えつと……」

何か話さなければと思い、言葉を探す。

でも、何を言えがいいのか分からない。

結局何も思いつかないまま、ただ時間だけが過ぎていった。

すると、それを察してくれたのか、彼が先に口を開いてくれた。

「さつきはすみませんでした」

「あ……」

先に謝られたせいで、更に申し訳ない気持ちになってしまう。

私が勝手にドジって転んだだけだから、別に彼に非は無いはずなのに。

「それに……受験のことも……」

「……」

短い言葉だったけど、彼の浪人生活の結果がどうだったのかは容易に想像出来た。

きつと、そういうことだ。

今こうして自信なさげにしている姿が全てを物語っていた。

「そっか……」

私はあえて結果を聞くことはしなかった。

ただ、労わる様に、優しく微笑みかけることしか出来なかった。

「……はい、だから合わせる顔がなくて……」

彼は俯いて短く返事を返してくる。

私はそれ以上は何も言わず、静かに彼を見つめていた。

「本当に、申し訳ないです。せつかく応援してくださいなのに、僕のせいで台無しにしてしまつて……」

そう言つて深々と頭を下げられる。

そんな彼に、私はゆっくりと首を横に振つた。

「いいよ、気にしないで」

これは本心だ。

確かに彼の大学受験が失敗した事は残念だし、落ち込んでいる姿を見ていると辛いけれど、それでも私の事を考えてくれたの行動だと思うと嬉しかった。

合格発表の日に来なかったのも、私の顔を見る度逃げ出したのも、全部私を落ち込ませまいと考えての事だったのだろう。

不器用だけど優しい人なんだなと思った。

「それより、今は自分を責める事よりもこれからの事を考えようよ」

「これからの……？」

「うん。まだ諦めちゃダメだよ」

「そうだ。例えば志望校に落ちて浪人生になってしまったとしても、まだまだ先は長いのだ。」

「この一年は無駄にはならないはずだ。」

「だってそれは、私と彼が過ごした時間そのものに価値が無くなってしまうことなのだから。」

「私、あんまり勉強とか出来ないからそっち方面のサポートはできないけどさ、前みたいに差し入れとか、なんならお金だつて出すから！ だからもう一度頑張ってみようよ！」

「いつ、いや！ 流石にそこまでは……！ 僕の方こそ、八神さんに負担かけられないですよ……！ これ以上ご迷惑をお掛けするわけにはいきません！」

「迷惑なんて思わない！ むしろ頼ってほしいくらいなんだよ？」

「で、でも……」

「いいの!! 私がしたいの!!」

「半ば強引に彼の手を取り、両手で包み込むように握る。」

「駿輔が頑張ってる姿を見ると、こっちまで頑張ろうって思えるの。いつも元氣貰ってるのは私の方なの。だからね、今度は私が駿輔に恩返しをしたい！」

「っ……」

彼は驚いたように目を見開く。

瞳孔が揺れているのがわかるほど、大きく、近い。

それだけの距離で見つめ合っていた。

「……どう、して」

震える声が彼の口から漏れ出る。

「どうして、そんなに僕なんかの為にしてくれるんですか？ 僕は

貴方の期待に応えられなかったのに……」

「それは……」

「ずっと考えてたんですよ。どうしてこんな情けない男を気にかけてくれるんだろうと。でも、やっぱり分からないままでした」

彼の手が震えている。

それを見て、胸が痛くなる程締め付けられた。

ああ……。

彼の為ではないと否定したかったのに、その言葉を言えなかった。

「ねえ、教えてください。どうしてですか？」

答えを促すような視線を向けられる。

もう誤魔化すことはできない。そう悟った。

そして私は、自分の気持ちに嘘をつくことを止めた。

これが、私の答えなんだ。

「私ね、よ……っ、しゅ……君のことが……」

あとたった二文字の言葉を言うだけなのに、声が出なくなる。

胸の奥底から込み上げてくる感情を抑えようと必死になった。

でも言わないと、ちゃんと伝えないといけない。

でないと、もう二度と彼と共にいられないのだから。

「す——」

ピリリリリリリリっ！

「!?!」

突然鳴り響いた電子音に二人同時に肩を大きく震わせる。

音の発信源は、彼のポケットだった。どうやら電話らしい。

彼は慌ただしく携帯を取り出し画面を確認する。

「あ…その、先にどうぞ」

「すみません」

よほど驚いたのか、思わずその場で電話に出る。

彼は軽く頭を下げると、そのまま通話ボタンを押して耳元に当て

た。

誰からの連絡だろうか。

「もしもし。………はい。私です」

どうやら家族からではないらしい。

話し方がよそよそしい。予備校とかかな？

それとも、ここの警備の人からとか？

答えが定まらないまま、駿輔は電話を続けている。

「はい……えっ?……はい」

急に彼の表情が変わった。

先程の弱々しい顔つきとは打って変わって、驚きと困惑が混ざったような顔をしている。

「本当ですか?」

何かを尋ね返していた。

一体何の話をしているのだろう。私にはわからない。

「いえ、それは大丈夫です。はい、わかりました」

駿輔は会話を終わらせて、静かに携帯を締まった。

「誰からだったの?随分驚いてたみたいだけど」

「えっと……それがですね……」

歯切れの悪い返事をされる。

「だけど、様子がおかしい。」

悪い事とか不幸なことが起こったというよりは、気持ちや状況の整理が追いついていなくて困惑しているといったほうが正しい顔をしている。

「大学……から、繰り上げ合格の連絡でした」

「え?」

今なんて言った? 聞き間違いじゃなければ、確かにそう聞こえた。

「合格………しました」

「へっ………?」

「僕、志望校に受かりました」

「う………そ………」

「本当に本当なんです。あの、信じられないかもしれないのですが………」

「おめでとう!!」

「っ!」

感極まって、思いつきり彼に抱きついた。

嬉しくて仕方なかった。

駿輔が、夢に向かって歩き出した。

今までの努力が報われたのだ。喜ばずにはいられない。

「良かった！ 本当に良かった！ よく頑張ったね！」

「八神さん……」

「凄い、凄いよ!! ほんとに……!」

喜びが溢れ出して止まらない。

彼の努力が実を結んだ瞬間に立ち会えた事が、ただひたすらに嬉しい。駿輔の背中に回した腕の力を強めながら、彼の温もりを感じる。

「僕もまだ実感湧かないですよ。だってついさっきまで諦めかけてたんだから」

「でも結果は出たじゃない! 頑張ってきた結果がちゃんと現れたんだよ!」

彼の体を離して、今度は両頬に手を添えて目線を合わせる。

「やったね、駿輔!!」

満面の笑みで祝福する。

すると彼は、私の手の上に自分の手を重ね合わせると、急に目を反らしてしまう。

「あの……その、いつまでも手を添えられてるの恥ずかしいとか……。それに距離近くありません?」

言われてから気付いた。

いつの間になんかに接近していたのだろう。

まるでキスでもしてしまいそうなぐらいの距離だ。

「あつ、ごめんさいつ! 私ったら興奮しちゃって……」

慌てて彼から離れる。

いけない。ちよつと浮かれ過ぎてしまった。反省しないと。

でも彼が喜んでくれたことが素直に嬉しかったのは事実だし、少しくらいならいいよね。

「……それに……さつきから、名前呼びになってますよ」

「えっ!」

指摘されて初めて気づいた。

無意識に口にしてしまったらしい。

「いやっ! これはその、勢い余っちゃっただけで……深い意味は

ないってどうか……。と、とにかく

忘れて！お願いだからっ！」両手を合わせて必死に頼み込む。もう遅いけど、せめてもの抵抗として。

「……嫌です」

「ええ!？」

しかし、あっさりと拒否されてしまう。

しかも、なんだか彼の顔が赤い気がする。風邪ひいて熱でもあるんじゃないだろうか。心配になる。

そんなことを考えていると、不意に彼から声をかけられた。

「あの……あの時の、約束、覚えていますか？」

「っー」

忘れるわけがない。

だって今まで私が彼について思い悩んでいた全てなのだから。

酔った勢いでキスマまでしておいて、忘れられるほど私は器用ではない。

あの時、確かに言われた。

受験が終わるまで待つて欲しい。そのときに答えを言うと。

「……うん」

小さく返事をして俯く。

顔が熱い。きつと真つ赤になっているに違いない。

恥ずかしくてまともに駿輔の顔を見れない。

「あなたのことをずっと前から好きです」

「……」

言葉が出なかった。

まただ黙っていることしかできない。

心臓が痛い。ドキドキしすぎて苦しい。

駿輔も同じなのかな？ それとも、私だけ？

「……あ、あの……八神さん？」

催促されて我に帰る。

そうだ。返事をしなくてはいけない。

「わ……私……」

口を開いてみるものの上手く話せない。

どうしよう、頭が混乱してきた。

ただ一つ言えることは、今の自分がどんな顔をしているのか想像すらつかないということだけだ。

「は……はい」

駿輔が返事を待っている。

早く言わないと。

気持ちを伝えないといけない。

なのに、心の準備が整わない。

「えっと……その……」

駄目だ。

全然喋れそうにない。さっきはいけそうだったのに。

「ゆっくりで大丈夫ですよ。僕は逃げませんから。落ち着いてくだ

さい」

「うう……」

駿輔は優しく微笑んでくれる。

それが逆に申し訳ない気持ちでいっぱいになってしまう。

ああ、どうして肝心なときにいつもこうなんだろう。

自分の情けなさに泣きそうになる。

「ごめん……」

「謝らないで下さい。僕が急かし過ぎたんですから」

「違うの……そうじゃなくて……」

今度こそちゃんと言うんだ。

深呼吸をする。

よし、いける。頑張れ、自分。

「私も……あなたが好きです」

言った。

言えた。

やっと想いを伝えることができた。

私の出したかった答え。伝えたかった言葉を。駿輔の目を見て言うことはできなかつたけれど、ちゃんと言えたことに安堵する。

「……ありがとうございます」

駿輔の表情を見る限り、満足してくれたみたいだった。良かった。ちゃんと伝えられた。

「……」

「……」

沈黙が流れる。告白した直後の空気というのはこんなにも気まずいものだっただろうか。

というか、何をすればいいのかわからない。

この雰囲気には耐えられない。何か話題を振らないと。

でも、何があるだろうか？ 彼の好きなものとか、趣味とか、そういうの知らないし。共通の話題といえば仕事のことしかないような……。いや、それは不味いかも。

「え……えっと、その……」

いや、焦りすぎるのはよくない。

まずは色々確認しないと。

私は恐る恐る彼を指差した。

そして……

「彼氏……」

次は自分を指差す。

「……彼女」

「はい。その通りです」

駿輔は笑顔を浮かべながら、はっきりと答える。

嬉しい。

すごく、幸せだと思う。

そっか、そうなんだ。

私たち恋人同士になったんだ。

自然と笑みがこぼれてしまう。

「じゃあ、その……これからよろしくね。えっと……駿輔」

照れくさくなりながらも名前を呼ぶ。

すると彼は驚いたように目を見開いて、それから少し頬を赤く染めた。

「はい、よろしくお願いします…」

そして、首を手当てて、目を逸らしてしまう。

彼がいつも見せていた癖。それを見ると改めて実感できる。本当に付き合うことになったんだって。

そう思うと余計に笑顔が止まらなかった。

「ふふっ」

「あははっ」

2人して笑いあう。

なんて幸せな時間なんだろう。いつまでも続けば良いと思うほどに。

「…コウちゃん」

「へあ!？」

でも、その時間は唐突に終わりを告げる。

突然聞こえてきた声に驚いて振り返ると、そこには……。

「り……りん」

「もう、皆仕事してるのに何してるの」

呆れた様子で腕を組んでいるりんの姿があった。

「(っ…っ)めん」

そうだった。

駿輔の顔を見た途端、完全に忘れてしまっていた。

それはりんも感じているようで、いつも私を叱る時と同じため息をつく。

「…はあ、まあいいけど…」

それよりも、とりんは急に歩き出して私と駿輔の間に入る。

なぜかその足取りが随分と迫力があつたのは私の気のせいなのだろうか。

そして、彼の方を向いた。

「君がコウちゃんの話してた子であつてる?」

「はい」

「初めまして、私は遠山りんと言います。一応、この会社の社員やっています。それで君は?」

りんの言葉の端々に感じる威圧感に駿輔は戸惑った様子を見せるがすぐに自己紹介をする。

「吉田……駿輔といます」

「吉田くんね。よろしく」

「は、はい……こちらこそ」

駿輔は緊張しているのか表情が硬い。……というか、どうしてりんはそんな態度を取っているのだろうか？

「それで本題なんだけど、コウちゃんとはどういう関係なのかしら」
そう言つて、駿輔のことを睨む。

やっぱりりんの様子はおかしい。まるで威嚇をしている猫のようだ。

「え……えつと……」

駿輔の目が泳ぐ。……これはまずいんじゃないだろうか。

「あの、りん。駿輔も困っているからや」

「コウちゃんは黙つてて！」

「はい……」

思わず敬語になつてしまう。……どうしてこんなことに。

駿輔もそう思ったのか、苦笑いを浮かべている。

でも、仕方がないよね。だつて怖いもん。

「安心して、別に何かしようつてわけじゃから。ただちよつと確認
したいだけよ」

「そ、そうなんですか……」

「ええ、だから正直に答えてくれると助かるわ。で、どうなの？」
「コウちゃんとどんな関係？」

「僕は……」

「ちよ、待つて！ 私から言うからー！」

このままではいけないと思つた私は2人の会話を遮るように割つて入る。これ以上変なことになるように、ちゃんと伝えないと。

「八神さんのことが好きです」

「っ……」

はつきりと告げられた言葉に私は顔を真っ赤にする。

直接言われたときもそうだけど、一番親しいりんと言われるのが一番恥ずかしかった。

でも、これではつきりした。私は彼のことが好きなんだ。

「そっか」

私の反応を見てりんは納得してくれたらしい。

良かった。これなら大丈夫だ。

「じゃあ、コウちゃんのことお願いします」

深々と頭を下げるりん。

それに応えるように駿輔もまた頭を深く下げた。

「はい」

なんだか、両親に挨拶に来た彼氏みたいだ。……あながち間違っていないかも。

「つていうか、なんでりんが駿輔をお願いするの!？」

「だって、私と佐藤君が一緒になる時、コウちゃんにお願いしたじゃない」

「いや、あれと今じゃ状況が違うつていうか……」

確かにそうかもしれないけど……。

あのときは、私のせいでりんの時間ややりたいことを奪いたくないって思ってたし。

……でも、確かに同じかもしれない。

だって、私も佐藤に言ったもん。

りんを任せていいのかと。

きつとそれと同じ気持ちなんだ。

私が駿輔を好きになったように、りんもまた佐藤が好きなんだろう。

それは素直に嬉しいことだ。応援してあげたくなる。

「うん、分かった」

「ありがとうございます」

2人は嬉しそうに笑う。

その笑顔はとても幸せそうで、見ているこっちまで温かい気分になる。

「ありがと、りん」

だからこそ、私もお礼を言わないといけない。
今まですつと見守ってくれていた彼女に。

りんがいてくれたおかげで今の私がある。

だから、本当に感謝してるんだよ。

「ふふっ、良いのよ」

「りん、これからもよろしくね」

「(こちらこそ)」

私たち3人はそのまましばらく笑いあった。

「でも、そうならもつと早く相談して欲しかった」

「まだ根に持ってる…」

「当たり前でしょう」

ジト目で見られる。

いやまあ、りんには悪いと思ってますよ。

でも、言いにくかったんだから仕方ないですよ。

「すみません、僕に気を遣ってもらって」

駿輔が申し訳なさそうにしている。

うう、ますます居た堪れない。

「駿輔が謝ることなんて無いよ。全部私のせいだから」

「いえそんな…だって12月の時だって迷惑かけてしまったし」

「迷惑って、あの時は私が酔っ払っっちゃったせいで駿輔にーっ」

と、そこまで口にしたときに思い出してしまった。

なんでりんが駿輔のことを話せずにいて、ここまで状況がこじれた

最大の理由を…。

「……」

「……」

思わず顔が熱くなり、両手で頬を押さえてしまう。

それは駿輔も同じで、首に手を当てて目を泳がせている。

そして、その間には私たちの不自然な様子を伺っているりんがいた。

「……」

りんの目の色が変わっていくのが分かる。

さつきまで所々見え隠れしていた異様なオーラが完全に表に出てきているのだ。

「ねえ、コウちゃん、何があったの?」

「えっと……」

「言えないようなことをしたの?」

りんの目がどんどん黒く染まっていく。

これはまずい。これは本格的にまずい。今までと比較にならないほどまずい!!

「その……なんていうか……」

「……」

私じや話しにならないのか、ゆっくりと首を回して標準を変える。

「っ!」

矛先は言うまでもない。

「吉田君。12月の時コウちゃんと何があったの? 教えてくれる?」

「え、ええっと……」

さすがの駿輔もりんの圧に押されている。

「ねえ、何があったの? 言えないようなことしたの? 怒らないから正直に答えて? いつそんなことになったの? なんでコウちゃんは照れてるの? 何か知ってるのよね? どうして答えられないの? 私の知らないところで何をしていたの? なんで黙ってるの? ねえ、なんで何も言ってくれないの? 怒るわよ?」

「いやああああああ!!」

こうして、無事私と駿輔は恋人として交際することになったのでした。
めでたしめでたし。